

---

# 竜殺しの英雄

しんや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜殺しの英雄

### 【Nコード】

N8611U

### 【作者名】

しんや

### 【あらすじ】

VRMMORPG『ヴェルガディア・オンライン』とよく似た異世界に飛ばされた青年の物語<異世界トリップ>、主人公最強、ご都合主義が含まれます。苦手な方はご注意ください。>

設定集その1 『種族』 \*ネタバレは無いと思いますが、まだ本編に登場して

いつもお読みいただいている読者の皆様、どうも有り難う御座います。

PVが35万、ユニークが5万、総合評価2200pt、お気に入り登録が750件を超え、非常に嬉しく思います。

そこで、ささやかではありますが、応援して下さいの皆様には感謝を込めて、設定を少し公開したいと思えます。

最新話をお待ちの皆様は、誠に申し訳ありません。

現在、鋭意執筆中ですので、もう暫しお待ち下さい。

設定集その1 『種族』 \*ネタバレは無いと思いますが、まだ本編に登場して

種族は『VLO』と同じく、確認されているものだけで23種存在する。

『人族』

そのまま人間。

特に特徴が無いのが特徴だが、最終的にはどの種族にも優るステータスとなる可能性を秘めている。

魔導兵装を含め、殆どどの武具を装備できる。

魔術も邪属性を除く全属性を扱う事ができるが、精霊魔術は下級までしか使えない。

一番器用な種族だが器用貧乏にもなり易い。

Lvがかなり上がり難く、人気の無い種族。

『亜人族』

『獣人族』、『鬼人族』、『ハーフエルフ』の総称。

『獣人族』

豹、狼、獅子、鳥の獣人がいる。

魔術は自己強化系以外使えないが、【獣化】、【完全獣化】という種族固有スキルが使える。

ただし、鳥の獣人『有翼族』は魔術を使える。

『有翼族』以外は共通して、INT、WISが伸び難い。

・『豹族』

ステータスは平均的だが、AGIが伸び易い。

武具は中量級まで装備できる。

耳と尻尾が生えてます。

・『狼族』

ステータスは平均的で若干STRが伸び易く、【気配察知】にボーナスが付く。

武具は中量級まで装備できる。

耳と尻尾が生えてます。

・『獅子族』

ステータスはSTRが伸び易く、AGIが伸び難い。

武具は重量級まで装備できる。

髪が鬘の様で、耳、尻尾も生えてます。

・『有翼族』

ステータスはINT、WIS以外は貧弱だが、風属性魔術が得意で、種族固有スキル【飛行】で空を飛べる。

しかし、【飛行】はSPの消費が激しく、長時間は飛べない。

武具は軽量級までしか装備できない。

『鬼人族』

『鬼族』と『人族』との『半血種』。

見た目は『人族』とほぼ同じで『鬼族』と同様に角が生えているが、長さは短い。

魔術は自己強化系以外は使えない。

ステータスはSTR、VITが伸び易い。

武具は重量級まで装備できる。

『鬼族』とは違い【狂化】、【完全狂化】は使えない。

『ハーフエルフ』

『エルフ』または『ダークエルフ』と『人族』との『半血種』。

容姿は『エルフ』や『ダークエルフ』とほぼ同じだが、耳はそれ程尖っていない。

ステータスはINT、WISが若干伸び易い。  
邪属性を除く全属性魔術を扱えるが、ステータスの関係で『エルフ』や『ダークエルフ』には劣る。

武器は中量級まで装備できる。

#### 『妖精族』

全種族の中で、最も多くの種類の種族がいる。

#### 『エルフ』

ファンタジーにお馴染の種族。

すらつとした容姿で金髪的美男美女が多い。

耳も尖っている。

ステータスはINT、WISが伸び易く、他のステータスは伸び難い。

魔術は全基本属性と光属性を扱える。

【採取】にボーナスが付き、熟練度が上がり易く、レアな薬草を入手し易い。

上位種族は『ハイエルフ』と呼ばれ、邪属性と闇属性を除く、全属性魔術を扱える様になる。

武器は軽量級しか装備できない。

#### 『ダークエルフ』

こちらもファンタジーにお馴染の種族。

ステータスや容姿は『エルフ』と基本的には変わらないが、肌は浅黒く、髪が銀髪。

魔術は全基本属性と闇属性を扱える。

こちらも【採取】にボーナスが付く。

上位種族は『ハイダークエルフ』と呼ばれ、邪属性と光属性を除く、全属性魔術を扱える様になる。

武具は軽量級しか装備できない。  
ちなみに、特に『エルフ』と仲が悪いという事は無い。

### 『ドワーフ』

ステータスはSTR、VITがかなり伸び易く、全種族の中でもトップクラス。

その反面、AGIはかなり伸び難い。

しかも、身長が1.4m程（『VLO』ではそれ以上に設定できない）なので、リーチが短い。

鍛冶が得意で【鍛冶】の熟練度が上昇し易い。

髭がモジャモジャしている。

### 『サラマンダ』

二足歩行の赤くでかい蜥蜴の様な見た目。

モンスター（魔獣）の『リザードマン』と似ているので良く間違えられている。

火属性魔術が得意で熟練度が上がり易いが、水属性魔術は使えない。

だが、あまり魔術は得意では無い。

ステータスはSTR、VITが伸び易い。

気温の高い場所（砂漠等）では、ステータスにプラス補正がかかる。

武具は重量級まで装備できる。

### 『ウンディーネ』

見た目は『人族』と変わらないが、種族的に蒼髪、碧眼。（『VLO』では変更できない。）

水属性魔術が得意で熟練度が上がり易いが、火属性魔術は使えない。

ステータスはSTR、VITが若干伸び難く、AGI、INT、

WISが若干伸び易い。

唯一魔術の補助無しで、水中で行動ができる種族。

その為のスキル、【人魚化】<sup>マイメイト</sup>使用時には、その名の通り人魚の様な見た目になる。

余程のレベル差が無い限り、水中での戦闘では他種族には負けな  
い。

その代わりに、気温の高い場所ではステータスにマイナス補正がかかる。

武具は中量級まで装備できる。

### 『シルフ』

一番妖精っぽい見た目。

身長は1m程。

男性は蜻蛉、女性は蝶の様な透き通る翅があり、全種族の中で唯一【永続飛行】が使える。

ただし、飛ぶ事のできる限界の高さは10m程なので、山等を飛んで越えるのは無理。

風属性魔術が得意で熟練度が上がり易いが、土属性魔術は使えない。

ステータスは見た目通り、STR、VITがかなり伸び難く打たれ弱い、AGIはかなり伸び易い。

武具は軽量級しか装備できない。

『VLO』では女性に人気のあつた種族の一つ。

### 『ノーム』

身長は『ドワーフ』と同じくらいで1.4m程だが、『ドワーフ』が比較的筋肉質なのに対し、『ノーム』は少しぽっちゃりとした体形。(『VLO』では身長と同様に変更できない。)

ステータスはSTR、VITが伸び易く、AGIが伸び難い。

『ドワーフ』と同じくリーチも短い。



ただし、全種族の中で唯一土中を移動できる。（攻撃等の行動はできない。）

この【土中移動】のスキルは、同じ効果を持つ魔術やスキルは存在しない為、完全に『ノーム』固有。

しかし、それ程深くは潜れないし、山や川といった地形を、土中に潜ったまま越える事はできない。

ただし、土中は【ハイディング気配隠蔽】にかなりのボーナスが付く為、奇襲には向いている。

土属性魔術が得意で熟練度が上がり易いが、風属性魔術は使えない。

武具は重量級まで装備できる。

余談だが、『VLO』では若いプレイヤーにはあまり人気は無かったが、何故かおっさんプレイヤーには人気があったらしい。

### 『ケットシー』

見た目は完全に二足歩行の猫。

何故か強制的に語尾が「ニャ」になる。

ステータスはAGIはかなり伸び易いが、他は平均的。

【遠視】にボーナスが付き、高所落下時のダメージが軽減される特徴がある。

武具は中量級まで装備できる。

### 『レプラコーン』

見た目はほぼ『人族』と変わらないが、髪に少し金属光沢がある。ステータスはSTRが伸び易いが、他は平均的。

【採掘】にボーナスが付き、熟練度が上がり易く、レアな鉱石を入手し易い。

武具は中量級まで装備できる。

### 『スプリガン』

見た目はほぼ『人族』と変わらないが、黒髪、黒目で肌も浅黒い。  
(『VLO』では変更は不可。)

ステータスはどれも平均的。  
【暗視】、【畏確認】、【畏解除】にボーナスが付くので、迷宮探索時には何かと役に立つ種族。  
武具は中量級まで装備できる。

#### 『魔族』

『魔族』、『鬼族』、『巨人族』の総称。

基本的にスペックは高いが、一長一短な種族。

#### 『魔族』

見た目はほぼ『人族』と変わらないが、肌が浅黒く、瞳は紅く瞳孔が縦に裂けている。

魔術が得意な種族なので、『魔族』と呼ばれる。

ステータスはINT、WISはかなり伸び易いが、他は伸び難い。  
魔術は邪属性を除く、全属性を扱う事ができ、転生前でも上級魔術まで使う事ができる。

転生すれば、最上級魔術まで扱う事ができ、どの属性の熟練度も上がり易い。

武具は軽量級しか装備できない。

#### 『鬼族』

見た目は『人族』とほぼ同じだが、身長は2m程とかなり高い。

(『VLO』ではこれ以下に設定できない。)

ただし、頭に角が生えていて、最初の内は1本だが、レベルが一定値を超える毎に最大3本まで増える。(これは『鬼人族』も同じ。)

ステータスはSTR、DEX、VITが伸び易く、AGI、IN

T、WISは伸び難い。

前衛としては一番バランスが良い種族。

魔術は自己強化系以外は使えない。

【狂化】、【完全狂化】の種族固有スキルが使える。

武具は重量級まで装備できる。

### 『巨人族』

見た目は『人族』とほぼ変わらないが、身長が5m程とかなりでかい。(『VLO』ではそれ以下に設定できない。)

ステータスは見た目通りSTR、VITがずば抜けていて全種族トップ。

ただし、AGIはワーストで、しかも魔術は一切使えない。

更に装備できる武具が他種族と比べ、かなり少なく、その辺りはかなり不便。

しかし、そこら辺に生えている木を引っこ抜いて殴っても、かなりの攻撃力になる。

最大のデメリットは魔力が無いので、魔導兵装が使えない事。

武具は重量級まで装備できる。

### 『不死族』

ぶつちやけ魔物。ある特殊なクエストをクリアすると、プレイヤ―も転生できるらしい…

『VLO』で確認されているのは、『吸血鬼』のみ。

『スケルトン』や『デュラハン』等にも転生できる、という噂もあるが、真偽は不明。

### 『ヴァンパイア 吸血鬼』

見た目は肌は白く、髪は金髪か銀髪で瞳が紅い。  
美形が多い。

当然、犬歯は牙の様に長く鋭い。  
スペックは高いが、上位種族になるまでは兎に角、弱点が多い。  
弱点は銀製の武器、ミスリル製の武器や光属性と聖属性魔術等々。  
昼間はステータスにマイナス補正が、夜間はプラス補正がかかる。  
魔術は光属性と聖属性以外は全属性を使い、邪属性ですら扱える。  
上位種族は『真祖』と呼ばれ、弱点がある程度は緩和される。  
武具は中量級までは装備できるが、光属性、聖属性の武具、銀製、  
ミスリル製等の武具は装備できない。

#### 『神族』

『VLO』ではGM専用の種族。  
故にスペック等は一切不明。  
『ヴェルガディア』では神界にいる。

#### 『精霊族』

各属性を司る精霊たち。  
各精霊王を頂点とし、上級精霊、下級精霊等が存在する。  
神獣の中にも眷属がいて、精霊王に仕えている。

設定集その1 『種族』 \*ネタバレは無いと思いますが、まだ本編に登場して

お読みいただいて、誠に有り難う御座います。

これに書いてある種族、全ては登場させられないかもしれませんが、なるべく沢山の種族を登場させたいと思っております。

次の更新では、最新話を更新できるかと思っております。

もしかすれば、また設定集かもしれません…

誤字、脱字等ありましたらご報告お願いします。

ご感想、ご批判等もお待ちしております。

もし本編との矛盾点がありましたら、遠慮なく教えていただきたいです。

それでは、今度こそ次話でお会いしましょう。

第1話 『ヴェルガディア・オンライン』（前書き）

初投稿です。

つたない文章ではありますが、少しでも読者様方の暇つぶしになればと思います。

## 第1話 『ヴェルガディア・オンライン』

「ハア……ハア……冗談だろ……っと！」

視認すら危うい攻撃を何とか避け、大きく距離を取る。

改めて状況を確認すると、一層あり得ないという気持ちが湧きあがってくる。

なにせ目の前には、全長500mはありそうな闇より黒いドラゴンがいるのだから……

「何で、俺の目の前に邪神龍『ティアマト』がいるんだ……まだ邪神龍の迷宮に入れたなんて話は聞いたことねえし、やっぱ『アレ』が原因なんだろうな……」

時は少し遡る

俺は仙道明<sup>せんだいめい</sup>、両親は俺が小学生の頃に事故で他界した。

それからは、祖父の仙道宗元<sup>せんだうそうげん</sup>に引き取られ、育てられた。

まあ、育ててくれたのには凄く感謝してる。

しかし宗元は『仙道流古武術』の師範だった。

しかも、息子（俺の父さん）は武術が嫌いでも全く興味を持たなかつたらしく、じーさん（宗元）はかなりヘコンだらしい。

そんなところに俺を引き取ったもんだから、これ幸いと鍛え始めたんだそうだ。

最初の頃はまだ小学生だったし体力トレーニングくらいだったが、中学に上がった頃から組み手が始まって、それからが地獄だった……

俺は自分で言うのも何だが、才能があったんだと思う。

じーさんも次々と教えた型を覚え、腕を上げていく俺を見て嬉しそうだった。

それを見て俺は（今思えば）調子に乗ってたんだと思う。  
じーさんの企みに気づかず……

話は少し変わるが、『仙道流古武術』はあらゆる武器を使う武術だ。

格闘術に始まり、刀術、槍術、杖術、色々ある。

だから、門弟には他流派の人も結構いたりする。

様子がおかしくなり始めたのは、中1の夏休み前からだ。

明日から夏休みで何をしようかと楽しみにしていた俺は、道場の前に高弟や門弟の人達が食糧や調理器具を運んでるのを見た。

合宿でもするのか？　　と思ったが、その時は大して気にしてなかった。

綺麗なお姉さん達もいたのは、少し気になったが……

そして夏休みの初日、日課になっている朝稽古に出た俺はすぐに後悔した。

何故かじーさんと高弟の人達が勢揃いしているのだ。

嫌な予感がしてすぐに道場から出ようとしたが、その時には出口を固められてた……

その日、俺は気がつくまで道場でぶっ倒れてた。

夕飯は綺麗なお姉さん達が用意してくれた……

滅茶苦茶美味かった……

じーさん、何で俺の（女の）好み知ってたんだよ……

それから毎年、夏休みと冬休みは毎日鍛えられた。（シゴかれたとも言うが……）

俺の逃げ道を門弟達で塞ぎ、綺麗なお姉さん達の作る美味しいご飯と稽古という飴と鞭で、徹底的に鍛えられた。

そんな日々も、高1の冬に終わりを告げた。

俺がもう限界だったからだ。



「俺が勝つたら、この無茶苦茶なシゴキは止めるからな！」

「稽古じゃと言うとろつ。ふむ、おまえがワシに勝てるほどの腕前になつとるんなら、それも良かろう」

「その言葉、忘れんなよ！」

結果から言えば勝てなかった……

一撃を当てるのがやっとで、後は良いように遊ばれた……

このじーさん本当に人間か？

「ふむ、その歳でワシに一撃を当てるか。良かろう、夏と冬の集中稽古は終わりにしてやるつ。ただし、朝稽古には毎日出るつ。良いな？」

「ハア……ハア……マジか？」

「マジじゃ。それと一撃入れた褒美に……何じゃったかのう……」

「コクーン』じゃったか？ あれも買ってやるつ」

「マジか？ 後で』やっぱり嘘じゃ』とか言うなよ」

「言わんわい」

「マジか！！ ありがとう、じーさん」

「うむ、体には気をつけて遊ぶんじゃぞ。朝稽古も忘れるなよ」

「わかつてるつて。ウォー！！ 滅茶苦茶嬉しい！！」

それから2週間後、俺の暮らしてる離れに『コクーン』が運ばれてきた。

『コクーン』は5年前に発表された次世代型ゲームの筐体だ。

今までのゲームと違い、モニターもコントローラも必要ない。

何故なら『コクーン』では、自分の思った通りに自分の分身である『アバター』を動かすことができるからだ。

ヴァーチャルリアリティー  
所謂、VRと言うヤツだ。

このシステムは瞬く間に世界中に広まった。

それから5年、初期の筐体はかなりでかかったらしいが、最新の

筐体はシングルベットくらいの大きさだ。(これも十分でかいと思うが……)

値段もかなり下がったが、まだ国産の軽自動車を買ったのと同じくらいの値段はする。(ちなみに今現在、車は全て電気自動車だ)

買えない値段ではないが、子どものお小遣いで買える値段ではない。

なので個人で所有しているのは、それなりに裕福な家庭かコアなゲーマーくらいだ。

専用の施設はかなり格安で借りられるので、ほとんどの人はそこで『コクーン』を使用してる。

俺はじーさん 高弟の人達によると結構な孫馬鹿らしい、聞かされた時はかなり恥ずかしかった かなりの金持ちらしいので手に入れることができた。

「さあ、早速試してみるか」

もちろん遊ぶのは、『ヴェルガディア・オンライン』(以下『VLO』)だ。

これは『コクーン』の発売から1年後に発売されたVRMMORPGというジャンルのゲームで、今や世界中で人気になっている。

俺も以前からずっとやってみたいと思っていたのだ。

『コクーン』の蓋が開くと中には青いジェルが満たされていて、横たわるとちょうど首から上だけがジェルの外に出る感じになる。

当然、入る時は全裸だ。(なので、専用の施設は全て個室で施設できるようにになっていてセキュリティのレベルはかなり高い、当たり前だが)

ジェルの少しひんやりとした感触が、何とも言えない。

「その内、慣れるだろ」

今はあまり気にしないことにした。

ちょうど頭のところにフルフェイスのヘルメットのような物がある、これが『コクーン』のインターフェイスだ。

インターフェイスをかぶると『コクーン』の蓋が自動的に閉まり、眩しくないくらいに抑えられた青いライトが点灯する。

ここまで来れば、後はこう眩くだけで良い

「コネクト」

『VLO』の舞台となる世界 『ヴェルガディア』には、多種多様な種族が存在している。

人族、亜人、妖精、魔族、不死族、そして神族。

かつてはどの種族も共存していたが、ある時些細な切っ掛けで争いが起こってしまう。

その争いは、瞬間に全種族を巻き込む大戦争へと発展した。

そして、その戦争の結果、それぞれの種族は自分たちだけの種族で国を作った。

即ち、人族の国『桜花』、亜人の国『ウエルテス』、妖精の国『ティルナノーク』、魔族の国『アーリグリフ』、不死族の国『サーフェリオ』の5つの国だ。

神族は神界に帰り、この『ヴェルガディア』を創造した二柱の創造神にこのことを報告した。

すると、片方の創造神は深く悲しみ、もう一方の創造神は激しく怒った。

その怒りの激しさ故に創造神は邪神龍へと墮ち、『ヴェルガディア』に生きる全ての種族を滅ぼそうとした。

残された創造神は己の身を神龍へと変え、精霊王たちや他の神族の力を借りて、邪神龍を『ヴェルガディア』の西にある島に封印し

た。

その後、神龍と大精霊たちは邪神龍を滅ぼせる『英雄』を見つけ出すために各地に迷宮を作り、試練を突破した者に神龍の力を引き継がせることにした。

精霊王たちの試練と己が課した試練を突破する者が現れるまで、神龍は五つの国の中心に迷宮都市『グランドティア』を創り、その時が来るまで、神界で眠りに就いた。

これが、『VLO』の公式サイトに載っている公式設定だ。

サービス開始から4年経っているが神龍の試練どころか、精霊王の試練も突破した者がいないほどの難しさだ。

しかし、それでもプレイヤーが離れないのは膨大な数のクエストや定期的なイベント 武道大会など があるためだろう。

これは『VLO』の大きな特徴の1つだ。

もう1つの大きな特徴として良く挙げられるのが、多種にわたる武器の数と、それに付随するスキルの数の多さだろう。

片手剣、両手剣、刀、短剣、ナイフ槍、斧に始まり、ランス馬上槍、鞭、デスサイス大鎌、魔導銃、鎖鎌、トンファーなど、まだまだあるらしい。

しかも、ある迷宮では素材を持って行けばオリジナルの武器が作れるらしい。（知り合いはフライパンとおたまで戦ってる女の子を見たとか……）

スキルにしても、それぞれの武器（『VLO』ではカテゴリーと言う）の熟練度が増すごとに習得できる『アーツスキル』、【素敵】ハイディングや【気配隠蔽】などの戦闘で役立つ『パッシブスキル』、【鍛冶】や【錬金】などの『サブスキル』と様々なスキルが用意されている。さらに、『アーツスキル』もオリジナルで作れるらしく（完全にオリジナルのものはかなり難しいらしいが、既存の『アーツスキル』を使いやすく弄るのは結構簡単らしい）、その数はまさに無限だ。

種族も多く、プレイヤーが選ぶことのできる種族は確認されているだけで23種もあるそうだ。

「俺は『人族』だな。ほとんどの武具（武器と防具）を装備できるのが、気に入った」

俺が選んだ『人族』は、どのステータスも平均的（各種族の優れているステータスより一歩劣る程度）でほとんどの武具を装備でき、『魔導兵装』（所謂、レアな武具）も装備できる。

そして転生を繰り返せば、どの種族にも勝てる可能性がある。

ここまで聞くと『人族』はかなり人気がありそうだが、使っているプレイヤーは初心者を除くとほとんどいない。

何故なら、Lvを上げるのに必要なExp（経験値）が他の種族と比べて膨大だからだ。

Lvが上がることに次のLvUPに必要なExpが指数関数的に増えていく『VLO』では『人族』を1Lv上げるのに必要なExpがあれば他の種族は2〜4Lvは上げる事ができるのだから、どれ程膨大か、わかってもらえるだろう。

「やっとアバターの作成が終わったな」

俺のアバターは黒髪、黒目で身長は180cmくらいで顔もほぼ変えてない（少しは格好良くしたが…）、アバターネームは『デイン』にした。

特に理由は無いが、何となくしっくりきた名前だ。

「さあ、チュートリアルも終わったし、装備を整えて迷宮を探索してみるか！」

あれから5年経った。

この5年で色んなことが変わった。

一番大きな変化はじーさんが亡くなったことだろう。

俺が高校を卒業してからしばらくして、眠るように逝った。

じーさんはかなりの遺産を残していたらしく、見たこともない親戚がかなり来たが、高弟の人達に追いつかれていた。

実は高弟の中にはかなりのお偉いさんもいたらしく、じーさんの遺言で家や道場、財産などは俺の好きにさせるように、と言っていたそう。

なので道場は高弟の人達に任せた。

悪いようにはしないでろう。

家も俺は離れを使っているんで、高弟の人達や門弟たちの寝泊まりなどに使ってもらうことにし、財産は取り敢えず、俺の大学の学費と家の管理費などに使ってもらうことにした。

しばらくは俺もシヨックだったのか、『VLO』はやらずに朝稽古をして大学に行き、バイトをしながら過ごした。

それからさらに月日が流れて、気づいてみると『VLO』をやり始めた時からちょうど5年が経っていた。

「キリも良いし、久しぶりにやるか」

早速準備して始める。

「コネクト」

「ここに来るのも久しぶりだなあ」

俺が今いる場所は、プレイヤーホーム（以下ホーム）と呼ばれるプレイヤー専用の家だ。

ホームを持つにはそれなりの金（『VLO』では『ティル』という単位だ）が必要になるが、かなり便利なので上位プレイヤーはほ

ば全員持っている。

俺も今や、かなりの上位プレイヤーなので、それなりの大きさのホームを持っている。

なにせ俺は基本ソロでしか活動しない（できない？）のでホームには、かなりの金を注ぎ込んで色々な機能を持たせた。

基本的な神殿の機能（迷宮などで死んだ場合にホームに帰還できる機能。普通は最後に立ち寄った街の神殿に帰還する）を始め、【鍛冶】スキルで武具を製作できる鍛冶場や【錬金】スキル、【加工】スキル、【裁縫】スキルなどでアイテムなどを製作できる工房も作った。

どの機能も大抵の街に行けば金を払って借りることができるのだが、俺はあまり街などに行って目立ちたくないのも、ホームに可能な限りの機能を持たせた。

「しかし、当たり前だが変わってないな、ここは……」

懐かしいなと思い、少しの間感傷に浸った……

「いかん、いかん。こうしても意味はない。装備を整えて、迷宮に潜るか」

装備を整えるついでに、ステータスの確認もしておくことにしよう。

俺の今のステータスはこんな感じだ。

Name：デイン

種族：人族（転生2回）

称号：人族最強の戦士

Lv：230/500

HP : 30000 / 40000  
MP : 30000 / 40000  
SP : 15000 / 20000  
STR : 15000 / 20000  
DEX : 15000 / 20000  
VIT : 15000 / 20000  
AGI : 15000 / 20000  
INT : 15000 / 20000  
WIS : 15000 / 20000  
スキルスロット : 50 / 100

まず目に付くのは異常なステータスの値だろう。

「我ながら無茶苦茶なステータスだな」

だがこれこそが、俺が『人族』を選んだ理由だ。（ちなみに、左側の数字が現在値で右側が上限値だ）

成長が途轍もなく遅い『人族』だが、各ステータスの上限値ほどの種族すらも遥かに凌ぐ。（理由は、『人族』が『神族』に似せて創られた種族だからだそうだ）

『人族』以外はその種族と相性の良いステータス（『獣人』ならAGI、『エルフ』ならINTやWISといった感じ、無論、実際はもっと細かく分かれているが長くなるので別の機会に……）の上限値が1500なのを考えると、『人族』の異常さが良くわかるだろう。

さらに『人族』は他の種族と違い、同じ種族に2回まで『転生』できる。（他の種族は1回だけ）

『転生』とは上限レベル（500）に到達した時に、種族を変更できるシステムだ。



同じ種族に『転生』した場合はその種族の上位種（『エルフ』なら『ハイエルフ』といった感じ）にステータスをそのまま、他種族の場合はステータスの半分を引き継ぐことができる。（俺は当然、2回とも『人族』に『転生』している）

ステータスはレベルアップ時に貰えるポイントを割り振る事で増えていく。（ポイントは1LvUpすることに10ポイント貰える）HP、MPは1ポイントで100、スタミナポイントSPは1ポイントで50増やすことができる。（これはどの種族も共通だ）

他のステータスは、種族によって1ポイントでの増え方は様々だが、例えば伸びの良いステータスで1ポイントで1.5、伸びの悪いステータスで0.5増やすことができる。（『人族』はどのステータスでも1ポイントで1増える）

このポイントはステータスを増やす以外にもスキルスロットを増やしたり、カテゴリやスキルの熟練度の代わりに使えるので、使い方は人それぞれだ。

ただし、俺みたいにステータスにほとんどのポイントを注ぎ込んでる奴は、まずいない……

それもそうだろう、『人族』以外ならそこまでステータスにポイントを割り振らなくても、上限値に達することができるのだから、スキルスロットを増やして戦術の幅を広げたり、熟練度の代わりに使うのが普通だ。（スキルスロットは60ポイントで1つ増え、熟練値は1ポイントで1増える）

熟練度はモンスターなどの戦闘で徐々に増えていき、Maxで1000まで増える。

熟練度がMaxに達したカテゴリやスキルは更に上位のカテゴリやスキル（ハイカテゴリ、Exスキル）に変化することができる。

ちなみに、熟練度も100ごとに上昇率が減っていき900からMaxにするには途方もない努力（苦行？）が必要だ。（しかし、ポイントを利用する場合は必ず1ポイントで1増えるのでかなり便

利だ)

熟練度は戦闘以外にも、街にある訓練所や道場などでも増やすことができるが、その上昇率は戦闘での上昇率の1/10以下なので、余程のことが無い限り初心者しか(熟練度を上げるためには)利用しない。

訓練所などの機能はホームにも付けることができるので、俺のホームには道場がある。

普通のプレイヤーにはほとんど意味のない機能だが、俺の場合はステータスにポイントを割り振るために熟練度はコツコツと地道に上げていくしかなかったから、それなりに便利な機能でもあった。

称号を確認すると『人族最強の戦士』とあった。

この称号は、まあそのままの意味だが、『人族』で最もレベルの高いプレイヤーに与えられる称号だ。(当然、他の種族にも同様の称号がある)

この称号に効果は特にないので、記念や名譽的な称号なのだろう。(そもそも、俺の場合は『人族』自体がほとんどいないので、名譽も何もあったもんじゃないが……)

次はレベルか。

俺のレベルは230だ。

ただし、2回『転生』をしているので総合的に見れば俺のレベルは1230ということになる。

『人族』でこのレベルは異常だろう。

俺が目立ちたくない理由の1つだ。

スキルも特に変わっていない(当たり前だ)ことを確認し、次に装備の確認をする。

「やっぱり、『こいつ』は目立つなあ」

俺の武具は全てレアな素材から作られた高性能な物だが、これくらいの装備は上位プレイヤーなら多少の程度の差はあるが全員持つ

ているだろう。

しかし、左腕に装備している『こいつ』は別格だろう。

装備欄にはこうある　魔導兵装クラス？『アイギス』と。

『魔導兵装』とは、魔導紋章が刻まれた魔力を込めることで様々な効果を発揮することのできる武器のことで、クラス？～クラス？までであり数字が大きくなるほど、レアな物になっていく。

代表的な『魔導兵装』は『魔導盾』マジックシールドや『魔導銃』マジックシールドだろう。

『魔導盾』は腕輪型の『魔導兵装』で、魔力を込めると魔力障壁を展開できる。

『魔導盾』には3つのタイプがあり、展開できる魔力障壁の大きさや展開するまでの時間に差がある。

『バックラータイプ』は、腕輪を中心に半径20cmほどの円形の障壁を0.1秒程で展開でき、防御力は低めだが障壁の展開に必要な魔力も障壁を維持するのに必要な魔力も少なくて済むので、近接戦闘を得意としているプレイヤーが良く使っているタイプだ。

『ナイトシールドタイプ』は、腕輪を中心に半身を隠せる大きさの盾状の障壁を0.3秒ほどで展開でき、展開や維持に必要な魔力は『バックラータイプ』よりは多いものの、防御力もそこそこあるので多くのプレイヤーが使っているタイプでもある。

最後は『タワーシールドタイプ』で、これは腕輪を中心に全身を隠せるほどの盾状の障壁を展開できるが、展開までに0.5秒ほどかかり、防御力はかなり高いが展開時や維持に必要な魔力がかなり多いので、魔術による遠距離攻撃が得意でMPを多く持っている『妖精族』の『エルフ』や『シルフ』のプレイヤーなどが良く使っている。（重さ自体は軽いので、STRの低めな種族でも扱える）

『魔導銃』は名前そのままな武器で、金属製の弾丸の代わりに魔力の弾丸を射出することのできる銃だ。

威力は込めた魔力の量で決まり、込めることができる魔力量はクラスによって変わり、クラスが高い物ほど込められる魔力量も増える。

しかも、クラスが高い物は、込めた魔力を小出しにして連射ができた、魔力の性質を変化させ

『バーストシェル 炸裂弾』や『ショットシェル 散弾』として撃ち出すこともできる。

他にも『魔導狙撃銃』や『対物魔導狙撃銃』なんて物もある。

クラス？〜？までの『魔導兵装』なら、多少の値は張るが街の魔導具のショップに行けば買うことができる。

しかし、クラス？〜？はクエストの報酬だったり、迷宮のトレジャーボックス、ボス級モンスターのドロップでしか手に入らない。

しかも、クラス？に至ってはプレイヤーの間で存在が確認されているのは、公式サイトで公開されているロングソード型の魔導兵装クラス？『ラグナレク』だけだ。（入手したプレイヤーは未だいない）

なので、クラス？の『魔導兵装』は全プレイヤーが血眼になって探している物なのだ。

「何の因果で、俺がこんな物を持ってんだろうな……」

『アイギス』を手に入れた時のことを思い返してみる……

その頃の俺は、もう少しで1回目の『転生』ができるレベル495だった。

しかし、『人族』のプレイヤーは基本的に他のプレイヤーから嫌われている（酷い時にはPKされたりもする）のでパーティーを組めるはずもなくソロで迷宮に潜っていた。

あの時は、確か『火の精霊王の迷宮』に潜っていたはずだ。

そして最深部まで辿り着き、ボスモンスターを倒して帰ろうとしていた時、部屋の隅に『歪み』があるのを見つけた。

『歪み』とは二柱の創造神に並ぶ大神である『時空神ディオス』

が気まぐれで創るモノで、『歪み』に入ると大抵は迷宮の外に放り出されるが、偶に宝物庫に繋がっていて『魔導兵装』やレアな武器を手に入れたプレイヤーもいるようだ。

「どうせ帰るところだし、試しに入ってみるか」

ちなみに、俺は今まで外に放り出されたことしかなく、この時も帰る時間が短くなってラッキーくらいにしか思ってたな。

『歪み』の向こう側は小さな部屋になっていた。

てつきり外に放り出されるものだと思っていた俺は、しばらく茫然としてしまった。

「これが噂に聞く宝物庫か？ それにしては、何にも無いぞ」

上がり始めたテンションが、瞬く間に下がっていく。

「ハア、期待して損したな。帰るか……」

諦めて帰ろうとした時、部屋の真ん中辺りで何かが光った。

「あれ？ さっきまで、あんなトレジャーボックスあったか？」

あんな部屋のど真ん中にあつたら、気づかないはずはないんだが

……

「まあ良いや。取り敢えず、開けてみよう」

【畏確認】のスキルで畏が無いことを確認し、開けてみた。

「これは『マジックシールド魔導盾』か？」

中には腕輪が入っていた。  
まず間違いないく、『魔導盾』<sup>マジックシールド</sup>だろう。

取り敢えず、腕輪をインベントリに収納し名前を確認してみる。

「なっ!？」

そこには魔導兵装クラス? 『アイギス』とあった。

「クラス?だと!! あり得んだろ!!」

もう一度確かめてみる、やっぱりクラス?とある。

しばし愕然となったが、驚きが過ぎ去ると半端ではない喜びが湧いてきた。

なにせ、全プレイヤーが探し回っているクラス?の『魔導兵装』  
を手に入れたのだ。

「と、取り敢えず装備してみるか……」

装備ウィンドウから『アイギス』を装備してみる。

『現在のステータスでは装備できません』

「……………」

当たり前か……

最高位の性能を誇る『魔導兵装』を、『転生』すらしていないの  
に装備できるはずがなかった。

喜びが大きかった分、落胆との落差がキツイ……

ちよっと泣きそうだ……

「いや、これからレベルを上げていけば、いつか装備できるはずだ  
！！ 気持ちを切り替えよう」

しかし冷静に考えてみると、これは厄介な物を手に入れてしまったのかもしれないな。（嬉しいことには違いないが……）

それには1つ理由がある。

ここしばらく、『VLO』の攻略は停滞している。（それでも、することは色々あるので飽きはしないが）

それは神龍の迷宮の攻略が、200階から進まないのだ。

200階に異常に強力なボスがいて、様々なパーティーが挑んでいるが全く歯が立たないのだ。

過去に何人ものプレイヤーがゲーム会社にバランス改善のメールを出したそうだが、返信されてきたメールには、毎回『条件が満たされていないだけです』という主旨の内容が書かれていたらしい。

それから、プレイヤーたちはその条件を探し始めた。

最有力の仮説は公式サイトにもあるように、各精霊王の試練をクリアするというものだ。

精霊王の試練というのは各地にある『精霊王の迷宮』をクリアする事と思われていたが、いざクリアしてみても何らかの証が貰える訳でもなく、精霊王に会える訳でもなく、何も起こらなかったのだ。それでも根気強いプレイヤーたちは、普通にクリアするだけではダメなのでは？ と様々な方法でクリアを目指した。

ある者はソロで、またあるパーティーは最速で、また別のパーティーはボス以外のモンスターを殺さずに……

実に多様な方法が試みられたが、一度として精霊王に会えた者はいなかった。

そこで次に候補に挙がって来た仮説が、クラス？の『魔導兵装』を集めるというものだ。（これには精霊王の試練のクリア報酬なのでは？ という意見もある）

今現在、最有力なのはこの仮説で、全プレイヤーがクラス？の『魔導兵装』を探し回っているのである。

「これは迂闊に持っていることを知られると、下手をすればPKされて奪われるな。例えそこまできなくても、根掘り葉掘り質問攻めにあうことは目に見えてる。隠しておいた方が良さそうだな」

幸い俺はソロプレイヤーなので、基本的に他のプレイヤーとは繋がりがほとんどない。

何とかなるだろう……

そうして、俺はこの『魔導兵装』のことは秘匿することに決め、迷宮を後にした……

その後レベルアップのついでに他の『精霊王の迷宮』にも潜ってみたが、クラス？の『魔導兵装』を見つけることはできなかった……

それから、俺は人気の少ない迷宮に籠り、ひたすらレベル上げに勤しんだ。

そして1回目の『転生』を行い、試しに『アイギス』を装備してみた。

今度はちゃんと装備できた。

それにしても、凄まじい性能だ。

魔導兵装クラス？ 『アイギス』

常時：精神異常、毒、麻痺、即死攻撃無効化

魔力障壁展開時：物理ダメージ90%カット、全属性ダメージ100%カット、龍種のブレスによるダメージ100%カット

特殊固有スキル：【SP減少半減】、【取得経験値倍加】、【障



## 壁展開制限解除】

『アイギス』そのものの性能もあり得ないが、固有スキルがさらに凄い。

【SP減少半減】と【取得経験値倍加】は、スキル名そのままの効果だ。

【障壁展開制限解除】は、展開できる障壁の大きさを自在に変えることができるスキルのようだ。

さらに展開速度も、他の『魔導盾』マジックシールドに比べて半分ほどになっている。

どの固有スキルも魅力的だが、『人族』の俺にとって最も魅力的なのは、【取得経験値倍加】だろう。

成長が遅いのが唯一にして最大の欠点の『人族』には、これほど嬉しいスキルは他には無いだろう。

『アイギス』を入手した時のこと、『アイギス』の出鱈目な性能を改めて確認した俺は、他の装備もざっと確認し、ウィンドウを閉じた。

ちなみに、俺が必要以上に目立ちたくないのも、『人族』にしてこんな高レベルに到達しているのも全て『アイギス』が最大の要因だ。

次は道場に向かうとするか。

俺がホームに作った道場は、俺が扱える全ての武器（魔術を含む）の熟練度を上げられるようにしたために、かなりの広さになっている。

(流石に俺の対物魔導狙撃銃は、最大射程が2kmもあるので無理だ)

一通りの武器の『アーツスキル』を確認していく。

俺はただでさえ珍しい『人族』なのに、さらに珍しい【多重武装】のスキルをマスター(熟練度Max)している。

【多重武装】とは普通1つしか装備できないメインウエポンを、熟練度に応じて最大5つまで装備できるようになるスキルだ。

珍しい(というか人気の無い)理由は、1つのメインウエポンでも熟練度を上げるのに非常に苦労するのに、さらに2つも3つもメインウエポンを増やしても、どの武器も中途半端になることが火を見るより明らかだからだ。(実際、そんなプレイヤーはかなりいる)しかし、俺はソロなのであらゆる状況に対応できるように、このスキルを選んだ。

幸い、俺には『アイギス』があつたので、熟練度上げもそれほど苦にはならなかった。(【取得経験値倍加】の効果が熟練度にもあつたため)

そんな訳で、俺は5つまでメインウエポンを装備できる。

俺のメインウエポンは【片手剣】のハイカテゴリー【魔法剣】、

【両手剣】のハイカテゴリー【グレートソード斬馬剣】、【刀】のハイカテゴリー

【二刀流】、【魔導銃】のハイカテゴリー【双銃】と【デスサイス大鎌】だ。

(【デスサイス大鎌】にはハイカテゴリーが無い)

これに、常に使える【格闘術】を組み合わせたものが、俺の基本的な戦術だ。

この6つのカテゴリーの熟練度は当然Maxまで上げている。

他にも状況次第で変えられるように使える武器はあるが、最も使い慣れているのはこれらだ。

常に実体化させているのは【双銃】で、腰の後ろの留め具に留め  
てある。

後1つは、使い慣れている【二刀流】の刀を実体化させてあることが多い。

武器を変更したい場合は『チェンジウエポン換装』と心の中で思うか、口に出せば良い。(後者はかなり恥ずかしい、というか痛いので俺はやらない) そうすれば、0.2秒ほどで武器を変更できる。近接戦闘中にはちょっと使いづらいが、一々ウィンドウを開いて変更するよりは格段に早い。

そうこう考えている内に一通りの『アーツスキル』の確認が終わったので、いよいよ迷宮に行きますか。

「とは言っても、俺が行ける迷宮はあそこくらいか……ハア……」

理由は当然、目立つことができないからだ……

「相変わらずだな、ここは……」

ここは『闇の精霊王の迷宮』だ。

この迷宮は『VLO』に存在する全ての迷宮の中で、最も人気の無い迷宮だ。

理由は幾つかあるが、まず暗い。

【暗視】スキルか暗視装置を持っていなければ、まともに進めないくらいだ。(俺は【暗視】スキルをマスターしている)

2つ目の理由としては、臭い。下層はそうでもないが、上層は生ごみの腐ったような匂いが充満している。

慣れてしまえば気にならないが、好き好んで潜りたくはないだろう。

そして、匂いの原因にして、不人気の最大の理由がここに出現するモンスターの種類だ。

もつわかってもらえると思うが、このモンスターは『ゾンビ』

などのアンデッド系だ。

しかも、矢鱈とリアルなのでその恐怖感はかなりなのだ。

この3つの理由から、この迷宮は女性プレイヤーを始め、ほとんどのプレイヤーから嫌われている。

しかし俺には色々都合が良いので、レベル上げなどにお世話になった迷宮だ。

「相変わらず、ここのモンスターはキモい!!」

近寄ってきた『ゾンビ』5匹を大鎌デスサイスで切り払う。

『ゾンビ』はキモいが動きは遅く、それなりに経験値を持っているおいしいモンスターだ。

この『闇の精霊王の迷宮』はかなり高難易度の迷宮でモンスターのレベルも高いが、俺の異常なステータスの前では苦勞する相手でもない。

『カサツ、カサカサツ』

俺の耳にこんな音が聞こえてきた。

「これはアイツか……」

この迷宮でこんな音を出すモンスターは、アイツしかない。

「近付かれる前に、倒してしまいたいな」

俺は腰の後ろから双銃の片方を抜き左手に構え、右手には愛刀を構えた。

アイツは何処からでも襲ってくるので、油断なく周りを警戒する。その時、フツと頭上に気配を感じた!!

慌てて見上げるとかなり近くに、全長1mほどのGで始まる『あいつ』がいた。

こいつの名前は『ギガローチ』、要するにでかいGだが、全モンスター中最も嫌われているモンスターだ。(俺も初めて見た時は逃げた……)

「チツ」

後ろに飛び退きつつ、左手の魔導銃に魔力を込め、すかさず撃つ！

「よし」

魔力の弾丸は、狙いを違わず『ギガローチ』を撃ち貫く。

しかし、こいつは1匹見れば5匹はいるので覚悟を決める。

「やってやろうじゃねえか」

俺は武器を構え、『ギガローチ』、『ゾンビ』、『ゲール』の群れに突っ込んだ

「ふう〜、終わったな」

最下層のボス『ゾンビドラゴン』を倒し、一息吐いた。

取り敢えず、HP、MP、SPの回復速度を速める『キユアポーション』を飲んでおく。(ちなみに、この『キユアポーション』はサイダーみたいで中々美味い)

「さあ、帰るか」

ボス部屋の奥にあった、トレジャーボックスも取ったことだしな。  
(中にはそれなりの額の『ティル』が入っていた)  
そのとき、ある物が目に入ってきた。  
『歪み』だ。

「何!？」

脳裏に『アイギス』を入手した時のことがフラッシュバックして、  
動悸がしてきた。

あの時と状況が似ている。

「入ってみるか……?」

何となく嫌な感じだったが、俺は『歪み』に入ってしまった

「何処だ、ここ……?」

『闇の精霊王の迷宮』に匹敵するくらい暗く、かなり広い空間だ。  
【暗視】スキルを起動し、奥に進んでいく。

「何だあれは……?」

奥に小山のような影が見える。  
急速に悪寒が全身に広がっていく。

『GYAAAAAAAAAAAAAAAAOOOOOOOOOOOOOOOOOOO

OO!!!...!..!』

「ぐわっ!？」

凄まじい叫び声だ。

やばい、やばい、やばい……

何て存在感だ。

膝がガクガクする……

その時、フツと影が横切った。

『バキイイイ!!!』

「ッ!！」

な、何だ!？

全身がバラバラになりそうな衝撃が襲ってきた。

「グハッ!！」

壁まで飛ばされていた。

一体何m飛ばされたんだ……

HPゲージを確認すると一撃で1/4も減っていた。

「あり得ねえ……」

しかも、体を見てみると鎧がボロボロになっている。

いくら軽装鎧とはいえ、レアな素材を使った現時点では最高級の装備なのだ。

それがたった一撃で破壊されるとは、とてもじゃないが信じられない。

「これが邪神龍『ティアマト』か……これは死ぬ……」

圧倒的な力の差を感じる。

しかも、『ティアマト』の方を見ると、身体を包んでいる邪気が瘴気のようなものから、次々と魔物を産み出している。(魔物とはモンスターと違い、『邪神龍の眷属』といわれるものでモンスターよりも凶悪で凶暴だ)

もうすでにかかりの数を産み出していて、魔物たちがこちらに迫ってきている。

「逃げるのは……無理か……」

『歪み』はすでに消えているし、見渡せる範囲に出入り口のような物は無い。

「死ぬのは確実としても、せめて一撃は喰らわせてやる!!」

覚悟は決まった。

しかし、鎧を破壊された以上『ティアマト』の一撃を喰らえば即死だろう。

その前に、こちらの最強の一撃を喰らわせなければならぬ。

俺の使える『アーツスキル』の中で最も威力があるのは斬馬剣グレートソードの『アーツスキル』『ファイナリティ・エッジ』だ。

グレートソード チェンジウエポン  
武器を斬馬剣に換装し、俺は魔物の群れに突っ込んだ。

当たるを幸いに、魔物を次々と屠っていく。

『リザードマン・ロード』の首とその隣にいた見たこともない魔物グレートソードの上半身を斬馬剣で斬り飛ばしつつ、反対側から飛びかかってきた『コボルト・キング』の頭を【格闘術】のハイカテゴリー【闘気術】で闘気を纏わせた左手の拳で打ち貫く。

そのまま体を回転させ、『コボルト・キング』の後ろから飛び出してきた『アビスジーガ』を闘気を纏わせた蹴りで吹き飛ばす。



囲みが崩れた隙に、上空から魔術を放とうとしていた『ワイバーン』を左手で抜いた魔導銃で撃ち貫く。

『ワイバーン』がポリゴンを撒き散らしながら爆散するのを横目で見つつ、近づいてきた魔物を魔導銃の銃身に下向きで付いている刃で斬り裂く。

フツと悪寒を感じ、『ティアマト』の方を確認すると、頭を引いて溜めのモーションに入っていた。

「マズい、あれはブレスのモーションか!？」

急いで『アイギス』にありったけの魔力を込める!!

次の瞬間

『GOAAAAAAAAAAAAAAAAA!!』

『ティアマト』の口から闇の奔流の如きブレスが放たれる!!

「くううううう!!」

『アイギス』はブレスを100%カットするはずだが、凄まじい衝撃だ。

衝撃が収まった後周りを見ると、あれほどいた魔物がほとんど消し飛んでいた。

「何て威力だ……」

だが邪魔がいなくなった、これはチャンスだ。

俺は斬馬剣グレートソードを構え、【加速】のE×スキル【縮地】でまさに瞬間移動のようなスピードで『ティアマト』の懐に飛び込む。

そして、『ティアマト』の首に『ファイナリティ・エッジ』を叩

き込む！！

アーツスキルによる紅い閃光を纏った刃は『ティアマト』の丸太のような前足で防がれる。

「構うかああああ！！」

かなりの抵抗を感じたが、俺はそのまま斬馬剣グレートソードを振り抜いた！！

『GYAAAAA OOOOOOOOOO！！』

風を感じ咄嗟に顔を引いた。

『ザクッ！！』

左目から胸の辺りまでを掻き毟られたような痛みが走る。  
その瞬間から左側の視界が真っ暗になった。

「クソッ！！左目を潰されたか……」

現実でこんなことが起こればこの程度の痛みでは済まないが、これはあくまでゲームだ。

痛みはある程度抑えられている。

しかし、今回の左目のように部位欠損が発生すると、しばらく不快感が続く。（戦闘が終了すれば修復できる魔術が使えるし、神殿に行つて金を払えば修復してもらえる）

『ティアマト』の方を確認してみると、斬り飛ばした腕が瞬く間に再生していた。

「なッッ！？」

再生を行う魔物やモンスターには出遭ったことはあるが、この再生速度は異常だ……

「これは駄目だ……どうにもならん……」

諦めの気持ち湧きあがってきた……

『ティアマト』の尾が迫ってくるが避ける気力も湧かない……

「ここまでか……」

次の瞬間、激しい衝撃が襲い視界に幕が下りてきた……

第1話 『ヴェルガディア・オンライン』（後書き）

何て言うか……、長いですね。

途中で切ろうかとも思いましたが、結局最後までいってしまいました。

ご感想、ご批判等々お待ちしております。

誤字、脱字、言い回しのおかしい所などありましたら報告をお願い致します。

それではまた次話で。

## 第2話 異世界『ヴェルガディア』（前書き）

第1話をお読みいただいた皆様、どうも有り難う御座います。

気づかぬ内にPVが11000オーバー、ユニークも30000オーバーと嬉しい限りです。

それではつたない文章ではありますが、読者様方の少しでも良い暇つぶしになればと思います。

## 第2話 異世界『ヴェルガディア』

気がつくとホームのベッドに横たわっていた。

「あれ……？ 俺、何でこんなところに……？」

その時、不意に左目にむず痒いような、何とも言えない不快感が湧きあがってきた。

「ッー！ そうか……俺、『ティアマト』とやりあって……死んだのか……」

不快感とともに、あの時の記憶が蘇ってきた。

「ふう……これからどうするかな……」

考えを纏めようとするが、左目の不快感が邪魔で考えが纏まらない。

「……取り敢えず、左目の部位欠損を治すか」

部位欠損を修復する魔術は幾つかあるが、俺が使えるのは特殊属性『聖属性魔術』の上級魔術『パーフェクト・シャインヒーリング』だけだ。

魔術には大きく分けて『基本属性魔術』、『上位属性魔術』、『特殊属性魔術』の3種類がある。

『基本属性魔術』には火・水・風・土の4属性（基本4属性と呼ばれる）があり、火は水に、水は土に、土は風に、風は火に強い性質を持っている。

『上位属性魔術』には光・闇・無の3属性があり、光と闇は相克の関係で、『上位属性魔術』は基本4属性に対し、優越する特徴を持っている。

しかし、『無属性魔術』はどの属性にも強くない代わりに、弱くもない特徴を持っている。

そして、最後の『特殊属性魔術』には月・太陽・聖・邪・時空の5つの属性があり、他の属性魔術とは異なる一風変わった効果を持つ魔術が多いのが特徴だ。

基本・上位属性魔術は纏めて、『精霊魔術』と呼ばれることもある。(理由はそれぞれの属性を司る精霊や精霊王が存在しているからだ)

俺は『人族』なので全属性を使うことができるが(邪属性は魔物専用の属性なので除外)、特殊属性魔術以外は下級魔術しか使うことはできない。

なので、部位欠損を修復する魔術は水属性にも存在するが、上級魔術なので俺には使うことができない。

「『パーフェクト・シャインヒーリング』」

本当は長つたらしい呪文があるが、【詠唱破棄】のExスキル【無詠唱】を習得しているので魔術名称を言うだけで発動できる。(ただし効果は0.9倍、消費MPは1.1倍になる)

全身を陽光のような輝きが包む。

しかし、何で回復魔術は気持ちが良いんだろっな？

まあ、気持ち悪いよりは遥かにマシなので気にしない。

「そろそろ、良いか」

ベッドの脇に設置していた鏡を覗きつつ、左目の<sup>まぶた</sup>瞼を開く

「えっ!?!」

開いた瞼の奥には、冥い虚無があるだけだった。

「そんな馬鹿な!?!」

もう一度唱える。

「『パーフェクト・シャインヒーリング』!?!」

効果エフェクトが消えるのももどかしく、もう一度瞼を開く。  
しかし、俺の左目が戻ることはなかった……

「どうなってるんだ……」

不快感に耐えながら、必死で考える。

そして、1つの仮説を立てた。

それは

『邪神龍の攻撃によって部位欠損になった場合、それは永続的なものになる。』

というものだ。

なにせ、今まで邪神龍と闘ったプレイヤーはいないのだ。

邪神龍がどんな能力を持っていても、おかしくはない。

「神殿に行ってみるか……? ……いや、止めておこう。おそろく無駄だ」

『パーフェクト・シャインヒーリング』は元々部位欠損を修復す



るためだけの魔術ではなく、単体にしか効果はないが、HP、状態異常、部位欠損を全て回復できる最上位の完全回復魔術なのだ。

それに、部位欠損をそのままにしておく馬鹿は皆無なので、いくら人の少ない時間帯を狙っても目立つことは避けられないだろう。

「それに、デスペナの所為で金がほとんど無いしな」

諦めるしかないか……

もしかすればこの先、修復できるアイテムや魔術が見つかるかもしれないしな。(『VLO』では上位の魔術は、その魔術を習得できるだけの熟練度と、その魔術の魔術書が必要だ。そして、上級・最上級魔術は未だ6割程度しか見つかっていないと言われている)

「この距離感の掴み難さと、視界の狭さは追々慣れていくしかないか……」

いつまでもウジウジしていても仕方がない。

気持ちを切り替えよう!!

「とすると、まずは装備か……」

鎧はあの時に破壊されたし、武器の耐久度も、もはや修復できないほどに落ちている。

予備で持っていた装備もデスペナでほとんど失っている。作り直すしかないだろう。

ということ、まずは素材を置き溜めている倉庫に行こう。

「えーと、コレとコレ……後、コレもか」

インベントリはほぼ空になっていたので、持てるだけの素材を持って行く。(一々取りに来るのも面倒だしな)  
ついでに少し倉庫の整理をしている時に、視界の端にメールの着信を示すアイコンが点滅しているのに気がついた。

「誰だ？ 珍しいな……」

俺とメールをやり取りするような相手は皆無ではないが、多くもない。

「取り敢えず、見てみるか」

整理をしていた手を休め、メールを開いてみる。

『クエスト『英雄への試練』が発行されました。受諾しますか？

Yes/No』

システムからのメールだったようだ。

ウィンドウが開き、YesボタンとNoボタンが点滅している。

「『英雄への試練』？ 聞いたことがないクエストだな」

取り敢えず、Yesボタンを押してみる。

『ポーン』という音と共に、新たな文面が浮かび上がってくる。

『この試練は大変過酷なものとなります。本当に宜しいですか？

Yes/No』

「……？？？ 矢鱈と確認してくるな……今までこんなのがあったか？」

若干おかしく思いつつ、再びYesボタンを押す。  
また新たな文面が浮かび上がる。

『クエスト『英雄への試練』を受諾しました。ご武運を……』

その文面を読んだ瞬間、いきなり意識が遠退き始めた……

「ッ!？」

咄嗟に倉庫の棚に掴まるつもりとしたが、腕からも力が抜けていく……

「な……んだ……」

そして、倒れ込むと同時に俺の意識は暗闇に落ちていった……

『つ……の……ほを……く……す』

『今度の奴は大丈夫なんだろうな？

おつ、こいつか。俺もこ

いつには目をつけてたぜ。それにしても、その左目では何かと不便  
だろう。こいつなら今までの奴らより見込みもありそうだし、餞別  
をくれてやる……』

『わ……も……』

ん……、眩しいな……、もう朝か……

瞼越しに太陽の光を感じ、徐々に目が覚めてくる。

何か不思議な夢を見ていた気がするが……

それにしても、俺のベッド、こんなに硬かったか……？  
それにさつきから頬に何かに触れて、くすぐりたい。  
その何かを手で払うと

『お目覚めですか、マスター？』

と、14〜15歳くらいの落ち着いた感じの少年（？）の声  
が聞こえてくる。

寝惚けた頭で、やけにしつかりした感じの声だなあと、何故か執  
事服を着た少年のイメージが浮かんできた。（念のために言ってお  
くが、俺にそっち方面の特殊な性癖はない！！）  
そんなことを思いながら、二度寝に突入しようとしていたら再び

『そろそろ起きて下さい、マスター』

と、声が聞こえてきた。

今……、何か凄く違和感を感じた……

『本当にそろそろ起きて下さい、マスター』

また聞こえた。

……いや、待てよ。

この声、頭に直接響いてくるぞ……！

一気に目が覚めた。

ガバツ……！ と音がしそうなほどの勢いで、上半身を起こし、  
目を開ける。

俺は飛び込んできた光景に茫然とした……

「何処だ……ここ……」

目の前の（というか周りの）光景は俺が思っていた光景ではなく（自分の部屋だと思っていた）、一面に広がる草原だった。

下を見てみると、背丈が10cmほどの草が青々と茂っている。

「さっきからくすぐったかったのは、これか……」

割とどうでも良いことを呟きつつ、周りをボーっと見渡した。  
いかん！！

現実逃避しかかっている、気をしっかり持って状況を確認しないと。

「そ、そういえば、さっきから聞こえていた（？）声は一体何だったんだ？」

もう一度しっかりと周りを見ても、別に執事服を着た少年はいない。（いや、執事服はどうでも良いが）

……落ちつけ、俺。

ダメだ、パニックになりそうだ。

それどころか、もっと酷い錯乱状態になりそうだ。

その時

『やっとお目覚めになりましたね、マスター』

またあの声が頭に響いてきた。

普通（？）の声なら聞こえてきた方を見ることもできるが、直接頭に響いてくる声なんてどうしようもない。

なので、取り敢えずキョロキョロしていると

『こちらです、マスター』

と聞こえてきた。

……こちらってどっちだよ……

段々イラついてきた……

声の感じからして少年っぽいので、少し大人気ない気がしたが、ただでさえ訳のわからない状況なのだ。

少しは大目に見てもらいたい。

すると

『マスターから見て、4時の方向、10mほど先です』

と、若干焦ったような声が聞こえてきた。

……『マスター』というのは俺のことだろうな。

さっきから繰り返してるし。

「4時の方向（右斜め後ろ）ってことは、こっちか」

立ち上がり、謎の言われた方に歩いていくと、一本の剣が落ちていた。

「ん？ この剣、何処かで見た気が……」

記憶を探りつつ、剣を良く見てみる……

改めて見ると、凄まじく美しい剣だ。

長さは切っ先から柄頭まで含めるとおよそ1.5mで、剣身から柄まで全て良くわからない白銀の金属でできている。（しかし、銀ではないだろう）

普通の片手剣に比べると少し長く剣身も幅広だが、柄の長さからして片手剣の一種だろう。

そして、剣身には一見、電子回路のようにも何かの紋様のようにも見えるラインが彫ってあって、時折ぼんやりと蒼く輝いている。

鐔と柄頭には蒼い宝玉が填まっ（鐔のほづの宝玉が少し大きい）、ラインと同調するように輝いている。

「何処だ……何処で見たんだ？」

これほどの剣、一度見れば忘れることはないと思うんだが……  
そして、思い出そうと唸っていると

『ようやくお会いできましたね、マスター』

またあの声が聞こえてきたので、周りを見渡していると

『下です、下。下を見て下さい、マスター』

下って、まさか……

『その“まさか”です、マスター。初めまして』

何とこの剣は意思がある剣のようだ……

『落ち着きましたか、マスター？』

「あ、ああ……何とかな」

本当はそれほど落ち着いてはいないが、取り敢えずそう答えておく。

『嘘はいけません、マスター。御自分でもわかっていらっしやるのに、強がってはいけません』

「おまえ、さつきから俺の考えてることがわかってないか？」

『全てがわかる訳ではございません。あくまで、ある程度の表層部分を読み取れるだけです』

「そ、そうか……何か釈然としないが……」

『それよりもマスターは、私にお聞きになりたいことがあるのではありませんか？』

「ッ！！ おまえはここが何処か知ってるのか!？」

『まずは落ち着いて下さい、マスター。ここで気がつく前のことは、覚えておいでですか？』

ここに来る前のこと……

確か、俺は倉庫に素材を取りに行ったついでに、倉庫の整理をしていたはずだ。

その時メールの着信に気づいて、それで……

「そつだ!! あのメールにあつたクエストを受諾した途端、意識を失つて……」

『思い出されましたか？』

「ああ……ということとは、ここはまだ『VLO』の中なのか……?」

『……そうとも言えますし、そうではないとも言えます』

「どういうことだ!! はっきりと言え!!」

『どうか落ち着いて聞いて下さい、マスター』

『この世界は『ヴェルガディア』。貴方がたの世界からは、異世界と呼ばれる場所です』



「なっ!? そんな馬鹿なことがあつてたまるか!!! ここが異世界だと!? そんなことが信じられる訳ないだろう!!!」

『紛れもない事実です、マスター』

「黙れええええ!!!」

俺はやり場のない激しい感情を叩きつけるように、傍らにあった岩を殴りつけた!!!

『ドカアアア!!!』

かなりの大きさのあつた岩は粉々に砕け散つた。

「ハア……ハア……ハア……」

『……少し落ち着いて考えてみて下さい、マスター。マスターは、ここがあなたの普段生活をしている世界に思われますか?』

「……いや、それは絶対にあり得ない」

現実世界でこんなことを（素手で岩を殴ったり）すれば、砕けるのは間違いなく俺の手の骨の方だろう。

しかも意思のある剣なんて、それこそ性質たちの悪い冗談だ。

「しかし、『VLO』の中なら……」

『もう一度良く考えてみて下さい、マスター。マスターは『VLO』の中でなら素手で岩を砕くことができますか?』

「当たり前だろう!!! 俺のステータスだったら……」

いや、おそらくステータス的にはできるだろう。（何故なら、俺のステータスは全プレイヤー中トップクラスなのだから）

しかし、『VLO』のこういった『ただの岩』のようなオブジェクトは、余程の理由（破壊すればアイテムが入手できるなど）が無

い場合は『破壊不可』だったはずだ。

今さっきの岩を破壊したことで、何かのアイテムを入手した形跡はないし、何かが起こりそうな気配もない。

ということは、残る可能性からいってここは……

「そ、そんな……」

『ご理解いただけましたようですね……』

「……本当にここは……異世界……なのか？」

『はい、紛れもなくここは異世界です、マスター』

「そ、そうか……異世界なのか……」

『納得していただきましたか、マスター』

「……納得はしていないが、取り敢えず理解はした」

『今回のマスターは、意外と頑固ですね』

こんなこと、そう簡単に納得できるか！！

ちよつと待て……、今……

「今回のつて言ったか？」

『はい、あなたで5人目の『来訪者』で3人目の『マスター』です』

「『来訪者』つていうのは何だ？ 後、数が合っていないのはどういうことだ？」

『1つ1つ答えていきましょう。まず『来訪者』というのは、貴方やこれまでのマスターたちのように貴方がたの世界 こちらでは『アース』と呼ばれていますが そこから来た者達のことをそう呼んでいます。実際は連れて来られたのですが……後、『来訪者』と『マスター』の数が合っていない理由については後ほどお話しします。他にお聞きになりたいことがあれば、この機会に全てお話しします』

「……実際には連れて来られたと言ったな？ 俺をこの世界に連れて来たのは、誰だ？」

『……そのことをお話しする前に、お聞きしておかなければならないことと、お話しておかなければならないことがいくつかあります』  
何か話を逸らされたような気がするが……  
まあ良い。

「何だ……?」  
『マスターはこの世界　『ヴェルガディア』についてどう思われますか?』

どう、と言われても、質問の内容がアバウトすぎて答えづらい。

「『VLO』と何か関係があるのか?」

『ご明察の通りです、マスター』

『ご明察って言われても、ここまで名前が一緒なら、馬鹿でもわかるだろ……』

こいつ、ちよいちよい丁寧なのか、馬鹿にしてんのか、わかりづらい時があるな……

もしかして、本当は馬鹿にしてんのか?

『お気に触ったのならば、謝罪します。何分、こつという口調なもので……』

しかも、こつやって微妙に心を読んでくるのが余計に……

ハア……

もう良いや。

一応、本人(?)も反省してるみたいだし……

「話を戻そう、『ヴェルガディア』と『VLO』の関係についてだ

つたな？ この世界が『VLO』に似ているとか？」

ありきたりな考えだが、取り敢えず言ってみてみた。

『確かにこの世界は、『VLO』と良く似ています。しかし、順番が逆なのです。『ヴェルガディア』に似せて造られたのが、『VLO』なのです』

どっちでも大して変わりはなさそうだが……

『本当にそう思われますか、マスター？ 良く考えてみて下さい』  
「……取り敢えず、心を読むのをやめろ」

言われた通りに考えてみる……

もし『VLO』が先にあつたのだとしたら、この世界はただ似ているだけの世界ということになる。（理屈などは全くわからないが……）

しかしこいつが言うように、『ヴェルガディア』に似せて造られたのが『VLO』だとしたら……

「そうか、『VLO』を造った奴らの、少なくとも1人はこの世界のことを知っているはずだ」

『満点ではありませんが、一応正解です。実際はこの世界の神が、『アース』の人間たちを操って造らせました。その際、記憶操作が完璧ではなく、操られていた時の記憶が多少残ってしまった人がいるらしいのですが、お聞きになったことはありませんでしたか？』

ああ、そういえば『VLO』のデザイナーの1人が、「俺は神の声を聞いたんだ！！」とか言っていたらしいな。

掲示板とかでも偶に「神の声を聞いた男（笑）が造ったゲームだ

しw」って荒らされていたしな。

『そういうことです。ちなみに、『コクーン』の開発者の中にも神に操られた人達はいます』

「何っ!? どういうことだ?」

『マスターはどうやってこの世界に来たと思っっているのですか?』

「それは神の力とか、そういうのじゃ……」

『確かに、神の力も使われてはいます。しかし、世界を渡る 要するに次元を超えるのは、いかに神といえど容易なことではないのです』

「じゃあ、どうやって……?」

『マスターは、『コクーン』の内壁を見たことはありませんか?』

「ああ、当然ある。中に入れば嫌でも見えるからな」

『では、その時のことを思い出して下さい。……青いライトで照らされてしまったね? 何かに似ていませんか?』

青いライト……、奇妙な形に曲がりくねって内壁に埋まっていた

……

「ッそうか!! あのライトの形、【調伏】<sup>テイミンク</sup>スキルで従えたモンスターを【召喚】する時に浮かぶ魔導紋章にそっくりだ!! しかもあのライトの色、おまえの光の色と良く似ている……」

『その通りです。あれは【召喚】の魔導紋章で、『来訪者』をこちらに呼び寄せる際に神が力を通すことよって発動し、次元を渡る時の補助装置になるように造られているのです』

「そういうことか……それでさっきから度々話に出てきている『神』が、俺をこの世界に連れて来た奴だな?」

『はい、そうです。マスターも薄々気づいておられるとは思いますが、今この世界で次元を越えて他者を呼び寄せることができるほどの力を持つておられるのは、『時空神ディオス』様だけです』

やっぱりか。

神龍の可能性も考えたが、神龍は眠りに就かなければならないほど消耗しているはずなので、可能性としては微妙だったのだ。

あいつには色々と借りがあからな、邪神龍のことや、邪神龍のことや、邪神龍のことかな!!

まあ、『アイギス』を入手できたことであいつに恩も感じているが、今は知らん!!

『VLO』の『ディオス』と、『ヴェルガディア』の『ディオス』が同じ存在かどうかはわからないが、全くの無関係ではないだろう。

『……ちなみにあのお方に受けた恩は、それだけじゃないんですけどね……』

「ん？ 何か言ったか？」

『いいえ、何も。先に言っておきますが、マスターを元の世界に還すことができるのも、あのお方だけですからね？ その上でお聞きしますが、マスターはディオス様をどうされるおつもりですか？』

「殺す と言いたいところだが、元の世界に還る手段が無くなるのは困るから、一発思いつ切りぶん殴る!!」

『ま、まあそのくらいなら良しとしましょう』

自分で言っておいて何だが、良いのか？

一応、神様だろう……

まあ、気にしないでおこつ、俺が損をする訳でもないし。

それにしても、『元の世界に還る手段』か……

もうここが異世界だと受け入れてるのか、俺は？

まあ、これも気にしないでおこつ、悪影響はないだろう……

多分……

『これでこの世界が『異世界』であること、『ヴェルガディア』と

『VLO』との関係性、マスターをこの世界に呼び寄せた人物（神）についてお話ししました。そして、これから『ヴェルガディア』のことももう少し詳しくお話ししたいと思います』

「……ああ、わかった」

「それでは……マスターは『ヴェルガディア』のことをどのくらい御存じですか？」

「『VLO』がこの世界に似せて造られたのなら、ある程度は『VLO』の設定と似通ったところがあるはずだ。

なので、『VLO』の公式設定や主なクエスト、出会ったことのあるモンスターや魔物のこと、そして『アイギス』のことを話していく。

後、邪神龍と闘ったことも話しておく。

「……なるほど。まず公式設定については、大まかにはその通りです。異なる部分もありますが、それは先の『来訪者』と『マスター』の数の不一致とも繋がってきますので、後回しにしましょう。まずはモンスターのことについてです。この世界では『邪神龍の眷属』のことは同じように『魔物』と呼びますが、モンスターという呼び方はありません。ほとんどが『魔獣』と呼ばれています。マスターの話の中には『神獣』と呼ばれる存在もいましたが……モンスターという呼称を使っても意味は通じると思いますが、こちらの人間はまず使わないので目立ちたくないなら使わない方が良いでしょう」

「『意味が通じる』でふと思ったんだが、何で俺たち言葉が通じてるんだ？ おまえ、日本語を話しているのか？」

「……別に日本語では話していません。ディオス様のお力です。話の腰を折らないで下さい」

怒られた……

聞きたいことがあれば聞けって言ったじゃん……

やめておこう、また怒られそうだ……

『……それでクエストについてですが、クエストはこの世界でもあります。ただし、冒険者ギルドで受けることのできるものを『依頼』、『神族』からの試練を『クエスト』と呼び分けてます。一般人や普通の冒険者たちには、『クエスト』はほとんど関係ありませんね。まあ、マスターなら『クエスト』を受けることもあるでしょう。と言うか、十中八九受けなければならぬと思います』

「……？ 何でだ？ って言うかそうゆう風に言われると、何か嫌な予感しかしないんだが……」

『まあすぐに、どうこうというものではないので、追々説明します』  
「……それと冒険者ギルドか。こっちにもあるんだな」

『ええ、あります。ですが、ついでに言っておきますが『VLO』のギルドカードは使えませんよ。というか、持っていないでしょう？』

そう言われて慌ててインベントリを見してみる。

確かに無かった……

「ん？ インベントリ？ 何で使えるんだ？」

というか、この身体、『ディーン』の身体じゃねえか！！

『……今頃気づいたのですか……？ というか、岩を殴った時に気がつかなかったのですか？』

それはそうだが、あの時はまだ『VLO』の中だと思ってたんだよ……！

『いえ、その後です。異世界にいると確認した時です』



……あの時は気が動転してたんだよ！！  
ほら、俺、身長とかほとんど変えてねえし！！

『もう良いです……あまりに普通にされていたので、御自分で何か理由をつけて納得されたのだと思っていました。説明しなかった、こちらの落ち度もありますし、次はそこを詳しくお話ししましょう。』  
『アイギス』のことも関係ありますしね』

な、何か凄い呆れられた……

「お、お願いします」  
『わかりました。先程、『コクーン』が召喚の補助装置になっているのはお話ししましたね？ 実は『VLO』のゲームそのものにも、ちゃんと役割があるのです。1つは、『コクーン』の使用者を増やすことです』

「確かに『VLO』がリリースされてから、『コクーン』は爆発的に使用者が増えたしな」

『もう1つは、この世界『ヴェルガディア』を疑似体験してもらうことです。これにはさらに2つの役割があつて、1つ目は『来訪者』たりえる者を探し出すこと。2つ目が『来訪者』になる時の『器』を創り、成長させることです』

「『器』って何だ？ いや、『何の』だ？」

『マスターは偶にもの凄く鋭いですね。おそらく想像の通りですよ』  
うるせえーよ、“偶に”は余計だ。

「いや、一応説明してくれ」

『わかりました、『器』とはこの世界での『来訪者』の身体のことです』

「ということとは、この世界に召喚されたのはいわば俺の『魂』だけ  
ってことか？」

『わかっていて、そんなことを仰るのですか？』

いーんだよ、こつやつて確認しつつ自分を納得させてるんだから。

『……違います。マスターの身体は今、向こうの世界『アース』には  
ありません。『器』というのは、『アース』の言葉を借りると、  
『幽霊』のようなもので実体はありません。ですので、『魂』だけ  
『器』に入れてもちちらの世界でそれこそ『幽霊』になるだけです。  
そんなことをしても無意味なので実際は身体、『肉体』も、これも  
『アース』の言葉を借りるなら、次元を越える際に原子、素粒子レ  
ベルにまで分解され『器』に合うように再構成されているのです。  
その再構成される際に『神龍』様、ディオス様のお二人のお力で『  
器』の能力を『VLO』で成長させた通りに強化し、潜在能力を引  
き出しているのです。ですので、その身体は『ディーン』であり、  
同時に『仙道明』でもあるのです』

「想像と少し違うところもあったが、大体はあつてたな……」

しかし、これで当たって欲しくはなかった仮説が1つ証明されて  
しまったな。

それは　この世界で死ねば、向こうの世界でも死ぬということ  
だ……

『大丈夫ですか？』

「ん？　ああ、大丈夫だ」

俯いて、考え込んでしまったので心配されてしまったようだ。

『話を続けさせていただいても、宜しいですか？』

「ああ、構わない。話を続けてくれ」

予想していたとはいえ、意外と落ち着いてるな、俺。

てつきり、異世界だと聞かされた時のように取り乱すと思ったが

……

まあ、良い。

今は話を聞こう。

『ギルドの事は、御理解していただけたか？ いずれマスターには、ギルドに登録していただくこととなりますので、疑問があれば、またその時にお答えすることにしましょう。では、次はインベントリについてお話ししましょう。マスター、お手数ですがインベントリを開いていただけますか？』

「わかった」

言われた通りにインベントリを開く。

『今更ですが、この世界でも『VLO』と同じようにインベントリを使うことができます。ですので、普通に使っていたら大丈夫です』

「ということは、この世界の人達もインベントリが使えるのか？」

『いいえ、使えません。しかし、『時空属性魔術』の一種として認識されているようです』

「何でこの世界の人達が使えないのに、インベントリの存在が認識されているんだ？」

『以前のマスターたちが使ったからです。それを目撃された際に咄嗟の言い訳として、「時空属性魔術だ」と言ったのが広まったようです。実際に『時空属性魔術』には、似たような効果を持つものが

あります』

さつきから微妙な違和感を感じつつも、インベントリを閉じながら先を促す。

「インベントリのことはわかった。使えると言っなら便利で良いさ。次は何だ？」

「そうですね……次は、ステータスウィンドウのことにしましょう……ステータスウィンドウが存在するのか？」

「……？　しますよ？」

本当に異世界なのか？

インベントリが使えたり、ステータスウィンドウがあったり、どう考えても『VLO』の中だと思えないんだが……

「そう言われましても、『そういうもの』だと納得していただくしありません。この世界では『石を落とせば下に落ちる』のと同じくらい当たり前のことなのです。ちなみに、ステータスウィンドウはこの世界の人間たちにも見ることはできます。当然、許可がない限り見ることができないのは、自分自身の物だけです」

まあ許可がなくとも、他人のステータスがある程度確認できるスキルはあるけどな……

「ステータスウィンドウのことは、そういうものと納得しよう。そういうえば『アイギス』のことを聞いていないな。話してくれないか？」

「わかりました。まず、この世界にも『VLO』と同じようにクラス？の魔導兵装が6つ存在します。そして、マスターがお持ちの『アイギス』は紛れもなく、魔導兵装クラス？『アイギス』です」

「でもこれは、『VLO』の中で手に入れた物だぞ？ この世界の『アイギス』と同じ物なのか？」

「はい、同じ物です。『器』の話は覚えておいでですね？ それと同じ原理です。この世界の『肉体』としての『アイギス』が分解され、マスターのお持ちだった『器』としての『アイギス』の元で再構成されたのでしょうか。恐らくはディオス様の仕業でしょう」

「仕業って……まあ、良い。あつて困る物じゃないし、むしろ助かるし嬉しい」

こいつは長い間、俺を助けてくれた相棒のような物だ。

『……それでは本題に入りましょう』

何でちよつと拗ねたような声なんだ……？

『ちゃんと話を聞いて下さい』

「わ、わかつたつて。本題というと、最初の『来訪者』と『マスター』の数の違いに関してのことか？」

「はい、そうです。そのことに絡んで色々とお話することがあります。まず、前回『来訪者』がこの世界に招かれたのは200年前です……』

「は？ 何て？」

『もう一度言います、前回『来訪者』がこの世界に招かれたのは200年前なのです』

「……………、ちよつと待て…200年前だって！？ おかしいだろう！？ 『VLO』がリリースされてから、どんなに長く見積もっても10年くらいしか経ってないぞ！！」

『この世界『ヴェルガディア』とマスターの世界『アース』では、時間の流れる速度が全く違うのです。『ヴェルガディア』の時間の流れる速度は、『アース』の約1万倍なのです』

1万倍だと!?

単純に計算しても、『アース』での1日が『ヴェルガディア』の27年だ。

「それじゃあ、元の世界に還る時にはどうなるんだ!？」

身体の方は多分大丈夫だろう、こちらに来る時に分解、再構成されているのだ。

還る時も同様ならば、元の身体と同じに再構成されるだろう。(

それでも不安だが……)

だが、性格や精神年齢はどうなる？

こちらの世界で5年も過ごせば、向こうの世界では5時間足らずの内に全くの別人だろう。

「その辺りのことは、私にはわからないのです……今までの『来訪者』たちの中で、『アース』に還ることのできた者はいないので

……」

「ッ! それじゃあ、『来訪者』たちはどうなった……」

「全員死亡しました……」

「……前の『来訪者』は、200年前に来たと言ったな? 200年前なら『アース』では大体1週間ちよつと前のはずだ……今の時代、人1人が1週間も行方不明で事件にならないはずがない」

「それは『来訪者』としてこの世界に招かれる際に、その人物に関する記憶、記録は全て『アース』の人間たちに認識できなくなるように操作されるのです」

「ということは、俺のことも皆、忘れていく訳か……その操作をやったのも『ディオス』か?」

「いえ、いくらディオス様でも『アース』にそれ程の影響力はありません。恐らくは『アース』の神の力でしょ」

あの世界の神もグルなのか……  
というか、いたのか神様……

「ふう、まあ良い。おまえを問い詰めても仕方がなさそうだし、いずれディオスにも会うんだろ？ その時に問い詰めてやるさ。それで、この話がどう『数の違い』の話に絡むんだ？」

「……先程、マスターは5人目の『来訪者』で、3人目の『マスター』だと言ったことは覚えておいでですね？ マスターの前には、4人の『来訪者』がいたのです。まず、最初の『来訪者』はマスターと同じくらいの年齢の男性でした。しかし、彼と3人目の『来訪者』の話は最後にしましょう。それで、2人目の『来訪者』はマスターより少し年下の女性でした。そして、私の初めての『マスター』でもありません。心優しく素晴らしい女性でした。ここが異世界であることを受け入れ、邪神龍を滅ぼすために力を貸してくれました。当然、元の世界に還るといふ目的もあったでしょうが……しかし、彼女の優しさと圧倒的な力に目を付けた人間たちの所為で、彼女はある迷宮の中で命を落としました……そして、4人目の『来訪者』にして2人目の『マスター』は男性でマスターよりも少し年上で、何より勇敢な人でした。柔軟な思考も持ち合わせ、いくつもの迷宮を攻略しましたが、ついには力尽きてしまいました」

「……、最初と3人目の『来訪者』のことを話してくれないか？」

2人の『マスター』について訊きたいことはあったが、先に残りの2人のことを訊くことにする。

「……最初の『来訪者』の彼はここが異世界であるという精神的な過負荷に耐え切れず、精神を病んでしまわれました。その時、『神族』の間で彼を『アース』に還すという意見も聞かれましたが、『

「アース」では一瞬の内に廃人になってしまったので、還すのも酷だということでは彼は神界に引き取られ、そのまま亡くなりました……3人目の『来訪者』は、思い出すのも嫌ですが、彼は異世界であるということは受け入れましたが、己の圧倒的な力を使い大勢の人間を手にかけ、さらには『神族』にも牙を剥き、悪逆の限りを尽くしました。『アース』に送り還す訳にもいかず、見かねたディオス様に殺されました……」

「……勝手に連れて来ておいて、随分と酷い仕打ちだな……」

1人目はまだ良い、手厚く看病されたはずだ……（そのくらいは神の良心を信じたい……）

しかし3人目は、全く同情はできないが、いくら何でもあんまりだろう。

「……、何を言っても言い訳にしかないでしょう……しかし、私たちもそれほどまでに追い詰められているのです」

「追い詰められている？ どういうことだ？」

「……マスターは邪神龍が誕生する切っ掛けとなった全世界、全種族を巻き込んだ大戦争　こちらでは『大戦』と呼ばれています　がそれがいつ起こったか御存じですか？」

「……いきなり話が変わったな。」

「まあ、良い。」

「……そういえば、知らないな。公式サイトにも載っていた記憶が無いな」

「約30万年前です……そして、邪神龍が封印されたのが、約20万年前になります」

「そんなに昔のことなのか……」



300万年前と言えば、『アース』では30年前か……

『そして、この世界の邪神龍の封印はもう解けかかっています』  
「なっ!?!」 公式の設定ではそんなものは無かったはずだ!」  
『邪神龍の封印は、ここ300年ほどの間に急速に解け始めてきました……これが時間の流れる速度に差がある弊害にして、私たちが焦っている理由です』

300年なら2週間ほどか……

それなら対応することは難しいだろう……

こちらの世界の神が『アース』に干渉するためには、一々『アース』の人間を操らなければならないのだ。

迅速に対応するのは無理だろう。

それなら、『アース』の神に頼めば良い気もするが……

『どうも『アース』の神は自分の世界に干渉することに、あまり良い気はしていないようです。『来訪者』に関しても、ディオス様はかなり無理を言っただけ頼み込んでいるようですね』

少しだけ見直したよ、神様……

「……そうか、この邪神龍の封印のことが公式設定との相違点なんだな? それにしても、時間の流れる速度の差か……これで、さっきの違和感の正体がわかったな」

『公式設定との相違点についてはその通りです。それで、違和感とは何ですか?』

「さっきおまえ、インベントリは『時空属性魔術』の一種と認識されてるので、何処で使っても問題ないって言ったよな? その時、その認識が広まるほどの時間なんてあったのか? と思ったけど、さっきの話で納得した。少なくとも200年あったんだ。それだけ

あれば認識も広まるよな。色々と納得がいったよ」

『そういうことでしたか。他にお聞きになりたいことはありますか？』

「1つだけ。おまえの、2人の『マスター』の名前を聞いて良いか？」

『ッ！？ はい。アバターネームで宜しければ……』

「それで構わない、教えてくれ」

『わかりました、『リシエル』様と『ギルム』様です……』

やっぱりか……

『リシエル』は、『妖精族』の『ケットシー』をアバターにしていた女性プレイヤーだ。

正義感が強く、多少頑固なところもあつたが優しい女性むすめだつた。

俺がまだ弱かつた頃、PKされそうになつていたところを助けてもらったことがある。

『ケットシー』特有の素早さで、舞うように【魔法剣】を操り、次々と敵を屠っていく光景は、今も鮮やかに思い出せる。（俺が【魔法剣】を使っているのは、彼女に憧れたからという理由もある）その姿と、戦闘後に話しかけられた時のギャップは、今思い出しでも可笑しい。（『ケットシー』は強制的に語尾が『ニヤ』になつてしまうのだ）

そして、『ギルム』は『魔族』に分類される種族『鬼族』をアバターにしていたプレイヤーだ。

面倒見が良く、しょっちゅう低レベルプレイヤーを迷宮で鍛えていた。

あいつとは、迷宮で助けたり、助けられたりした仲だ。

隊列や作戦を迅速にかつ的確に決めていく頭脳派なところがあるくせに、いざ戦闘になると真つ先に最も手強そうな相手に【両手斧グレートアックス】を構え、突っ込んでいくような奴だつた。

2人とも友人と呼べるほどの付き合いは無かつたが、何度かパー

ティを組もうと誘われたし、俺がメールのやり取りをする数少ないプレイヤーだった。

「……………、そうか2人は死んだのか……………」

『お知り合い……………だったのですね。』

「……………知っていたんだらう?」

何となくそんな気がした……………

『はい、お二人の記憶にマスターのことがありました』

「そうか……………あいつらのこと、もっと話してくれないか?」

『私が話しても構いませんが、私の『記憶』を見ていただいた方が宜しいかと思います』

「……………? 『記憶』を見る? どうやるんだ、それは?」

『私と『契約』していただければ、契約後にお見せできるはずです』

「『契約』? そういえば、おまえは何なんだ? 意志があることといい、その知識量といい、ただの剣ではないんだらう? 何処かで見ることがある気はするんだが……………」

『そういえば、まだ言っていないませんでしたね。私は……………』

『ロングソード型魔導兵装クラス? 『ラグナレク』です。以後お見知りおきを、マスター』

「ッ! そうか。何処かで見た覚えがあると思ったら、公式サイトだったのか。それが何でこんな所にあるんだ?」

『私は『神龍アリュージ』様より、『来訪者』の手助けをするように申しつかっているのです。それに私は、『邪神龍ティアマト』を滅ぼすための6つの魔導兵装の力を解放する、『鍵』の役割も持つ

ています。ちなみに、マスターの『アイギス』も未だ眠った状態です」

「力を解放する『鍵』!? 『アイギス』のこれほどの性能でも眠った状態だって言うのか!？」

『はい。本来の性能の、良くて半分ほどでしょう。私と『契約』すれば、本来の性能が解放されるはずですよ』

「……わかった。『契約』しよう。どうすれば良いんだ?」

『やり方は簡単です。私を持って立っているだけで構いません』

「それだけで良いのか? 簡単だな。早速『契約』しよう」

『ただ覚悟はしていて下さいね?』

「覚悟? 何のだ? 『契約』にももの凄い激痛でも伴うのか?」

『……『契約』自体には痛みは伴いません。ただ いえ、やっぱり良いです。気づいておられないようなので……ただ覚悟はしてお願いして下さい』

そんな言われ方をすると余計不安になる……

取り敢えず、何が起ころうとも良いように覚悟はしておく。

『準備は宜しいですか?』

「ああ、いつでも始めてくれ」

言われたように、立ち上がり、『ラグナレク』の柄を右手で握り、剣身を左手で下から支えるようにして持つ。

『始めます』

すると、俺を中心とした地面に見たこともない紋章が浮かび上がり、蒼く輝き出す。

とても目が開けていられる光量ではないので、思わず目を閉じる。そうして、しばらくじっとしていると輝きが収まってきたので、

目を開ける。

『お疲れ様でした、『契約』は無事完了しました。お身体に変わりはありませんか』

……終わったようだ。

あれだけ脅されたが、特に何も無かったな……

「ああ、特に変わりはない」

『ズキッ！！』

「グウツ！！」

な、何だ……

左目が……

いや、今俺の左目は……

『ズキッ！！！』

「ガアアアア！？」

左の眼窩にまるで真つ赤に焼けた鉄の棒を突っ込まれ、グリグリと掻き回されているかのような凄まじい異物感と痛み、焼けるような灼熱感が……

ダメだ、考えることも儘ままならない……

「ガアアアアアアア……！！！」

ただ叫び、痛みにのたうち回る。

すると、唐突に痛みや異物感等が引いていった……

「ハア……ハア……ハア……ゲホッ！ 今のは一体、何だったんだ……？」

叫びすぎて、喉が痛い……

『大丈夫ですか、マスター？』

「あ、ああ、今は大丈夫だ。それにしても、さっきの痛みは何だったんだ？ 後10秒続いていれば、気が狂っていた自信があるぞ……」

『変なことに自信を持たないで下さい。それよりもマスター、インベントリから鏡を出して、顔を見てみて下さい』

インベントリから鏡を取り出して、覗き込む。(ちなみに、この鏡は迷宮の曲がり角などで先を確認するために使う物なので、勘違いしないで欲しい)すると

「ッ！？ 左目がある！！ しかし……何だこれは！？ 瞳が金色になってるぞ！！」

邪神龍につけられた傷は、今も左の眉の上辺りから顎の辺りまであるが、左目がちゃんとある！！

しかし、何で瞳が金色になってんだ？

『やはり気づいてなかったのですね。マスターの左目は、この世界で気がついた時からありましたよ？ そしてマスター、落ち着いて、左目に魔力を集中させるのを止めてみて下さい』

気づかない内に、左目に魔力を通していたようだ……  
リラックスするように体の力を抜いてみる……

「ッ！？ 瞳の色が黒になった!？」

どうなってんだ？

さっぱりわからん……

『それは『ディオス』様の左目なのです。何か、思い当たる節はございませんか？』

あいつの左目だって!？

それに、思い当たる節と言われても……

俺はあいつと会ったこともなければ、顔すら知らない……

いや、何かを忘れている気が……

あっ！

この世界に来る時に見た夢か!!

『そう、それです』

ということは、あれは夢じゃなかったのか……

「そついえば、『餞別をやる』みたいなことを言われたな……そつすれば、あいつが『ディオス』か……もう1人、誰かいたような気がするが思い出せん」

もう1人は霞がかかったように、ぼんやりとしていた……

『恐らくその時に渡されたのでしょう。そして、私との『契約』でその目の力が解放されたのでしょう。先程の痛みは『神の目』が身

体に馴染もうとして、発生したと思われれます』

『神の目』か……

段々人間離れしていくな……

まあ、厳密に言えば元々人間ではないのかもしれないが……

「ハア……何か気が抜けたら、腹が減ってきたな」

『そういえば、もう昼時ですね。それでは、食事を摂りながら『神の目』のことを説明しましょう』

「いや、食事と言っても、俺は何も持っていないんだが……」

『……？ そんなはずはありませんよ？ インベントリを良く見てみて下さい』

インベントリを開き、確かめていく……

すると、『ポテト』と『コーラ』、そして『甘辛いタレとマヨネーズが美味しいハンバーガー』があった。

「……………、何だこれ……………」

『恐らく『アース』の神の饞別でしょう』

てことは、あの夢のもう1人は神様か!?

『そういつことになりますね』

おい……、おい……

饞別っていったら、もっと他に何かあるだろう、神様!!

折角見直したのに、また株がダダ下がりだ!!

『取り敢えず、食事にしましょう』



『それでは食事をしながらで良いので、聞いていただけますか？』  
「ああ、話してくれ」

俺はポテトをつまみながらコーラを飲み、そう答えた。(ちなみに、俺はポテトを食べ終わるまで『バーガー』は食べない主義だ)

『ではマスター、左目に魔力を込めていただきますか？』

「……魔力を込めるって言っても、どうやるんだ？ さっきは、訳もわからないまま込めてたし……」

『魔導兵装に魔力を込めると、同じ要領でできるはずです。その左目は、魔導兵装と同じようなものですから。後、右目は閉じておいて下さい』

「わかった。 なっ!？」

魔力を込めた途端、視界に変化が起きる。

景色全体が白黒のモノトーンになり、様々な色をしたぼんやりと光る拳大の球体が辺りを漂っている。

「何だ……これ……？」

『それは『下級精霊』たちです。色に偏りはありませんか？』

言われてみると、赤いのが少し多く、青いのは他の色より少ない気がする。

『赤い色をしたモノは『火』の下級精霊で、青いモノは『水』です。同様に緑は『風』、茶は『土』になります。同じ色でもより色が濃く、輝きの強いモノが上位の精霊になります』

見えている範囲ではどの色も、濃さ、輝き共に、目に見えて違うモノはいなかった。

『本来は『光』と『闇』の下級精霊もいるのですが、マスターにはまだ見えていないようですね』

「……まだつてことは、これから見えるようになるってことか？」

『はい。その左目や私たちクラス？の魔導兵装は、各属性の『精霊王』たちと『契約』することにより力を増していきます』

「……まだ、力が増すっていつのか……」

『アイギス』は、今でもあり得ないほどの性能を誇っているのだが……

『……マスターは『VLO』の中で、『邪神龍ティアマト』と闘ったと言っていましたね？』

「ああ、俺の左目を奪ったのもあいつだしな……」

あの圧倒的な力の差は、今思い出しても震えがする……

『ではこの世界の『邪神龍』の戦闘力を、……そうですね、『アース』の『ゾウ』、たとえばアフリカゾウ辺りだとしましょう』  
「……………」

何だ、その例え……

しかも、確か『アフリカゾウ』ってキレたらかなりおっかない動物だったような気がするんだが……

『そうすると、『VLO』の『邪神龍』の戦闘力は……『蟻』とま  
では言いませんが、『小型の室内犬』ほどです』

「おい！！ ちょっと待て！！ 『室内犬』って何だ！？ 例えと

しておかしいだろ!？」

そんなに可愛らしいものじゃなかったぞ!!

『……まあ、例えばアレでしたが、戦闘力の差はそれほどあるので』

マジか……

あの時でも全く勝てる気がしなかったのに……

「………………。そんなの、勝てる訳ないだろ!!」

『いいえ、マスターならば勝てる可能性は充分にあります。貴方の力は、過去2人の『マスター』に比べても圧倒的です。それに、デイトス様も貴方にはかなりの期待をしています。それは数々の『饞別』からも明らかです』

「数々? 『饞別』は、左目と『アイギス』だけじゃないのか?」

『……それは後ほど、確認しましょう。先に私の持っている『リシエル』様と『ギルム』様の『記憶』をお見せしましょう』  
「わかった。少し待ってくれ」

俺は残っていたポテトとコーラ、そして『てきハンバーガー』を一気に平らげた。

「それで、どうすれば良いんだ?」

『座ったままで結構ですので、目を閉じて私を握っていて下さい』

「……ところで、さっきみたいな痛みは無いだろうか?」

アレは二度とゴメンだ……

『大丈夫です。終わった後には、少し頭痛がするかもしれませんが』

……』

……そのくらいなら良いだろう。

「始めてくれ」

そう言って目を閉じた……

頭の中に映像と、その時々彼女の感情、想いが一気に流れ込んでくる……！

気づくと俺は、涙を流していた……

『……………』

彼女たちの故郷へ還りたいという想い、死に逝く時の恐怖、無念

……  
様々な想いが溢れ出した……

そして、それらの想いよりも遥かに強かったのは

『滅びの危機に瀕している、この世界の人達を救いたい』

という想いだった。

「…………ぐっ…………ぐっ……………っっ……………」

涙が止まらなかった……

彼女たちの優しさ、心の強さ、そして勇氣に心を打たれた……

俺と彼女たちとの数少ない思い出が、走馬灯のように思い出されるとともに

『彼女たちはもういない、死んでしまったんだ』

という実感が湧いてきて、俺はその日、久しぶりに声を上げて泣いた……………

「すまない……………情けないところを見せてしまったな……………」

『いえ、お気になさらないで下さい。私も大切な2人の『マスター』のことを悼んでいただき、とても嬉しいのです』

「そうか……………俺にとっても大切な人達だったと、改めて思ったよ」

俺はある覚悟を決めた……………

最初はただ元の世界に還ることだけを考えていたが、覚悟は決まった。

「彼女たちの『遺志』は俺が継ぐ。俺が邪神龍を滅ぼしてやる。俺の力でできるかどうかはわからないが、彼女たちが救おうとしたこの世界、必ず救ってやる！！だから俺に力を貸してくれ、『ラグナレク』……！」

『ッ……！』 ありがとうございます、マスター。それでは改めまして

『こちらこそ宜しくお願い致します、  
我が主<sup>マイ・マスター</sup>』

### 第3話 少女との出会い

「それで、これからどうするんだ？ 『精霊王の迷宮』に行くのか？」

邪神龍を滅ぼす覚悟はできたので、今後のことを決めておきたい。

『少し落ち着いて下さい、マスター。そんなに慌てなくても、大丈夫です』

「……………？ さつきは『追い詰められている』と言っていただろう？」  
『確かに追い詰められてはいますが、邪神龍の封印が解けるのはどんなに少なく見積もっても、まだ50年はかかるはずですよ』

50年！？

ずいぶんと余裕があると思うが……

いや、違うな……

この世界の基準じゃなくて、『アース』の基準で考えるんだ。  
とすると、50年はおよそ2日ほどか……

確かに追い詰められているな……

仮に成長の早い種族だとして、2日間かなりの無理をしても3レベル上げるのが精々だろう。

ましてそれが高レベルプレイヤーなら、尚更だろう。

「……………確かに『追い詰められて』はいるが、『慌てなくても大丈夫』だな」

『本当にマスターは時々鋭いですね。そういう訳で、次の『来訪者』はもう期待できないのです。マスターが失敗すれば、後はもう全滅を覚悟で全面戦争をするしかないでしょうね……………』

プレッシャーをかけるのはやめてくれよ……

『……それにもう『マスター』を失うのは嫌なのです……』

……絶対に死ねなくなつたな。

「心配するな。そう簡単に死ぬ気はないさ」

そうだ、死ぬ訳にはいかない。

たとえ力及ばず死ぬことになるうとも、あの2人に顔向けできないような死に方は御免だ。

「とすると、これからどうするんだ？ 取り敢えず、何処かの街に行くのか？」

少し湿っぽくなった雰囲気を払うように、大きめの声で言った。

『はい。そういうことになりましたが、今日のところはここに泊りましょう』

「……いや、泊りましょうっておまえ、ここがホテルか宿屋にでも見えるのか？」

どう見ても辺り一面草原なんだが……

しかも、俺が砕いた岩の欠片がそこら中に散らばってるし……

『野宿くらいは、されたことがあるでしょう？』

「確かにあるが……（当然、『VLO』の中での話だ）まだ昼過ぎだろうか？ 今から街に行くのじゃ駄目なのか？」

こんな所で寝れば、間違いなくモンスター いや、この世界で



は『魔獣』か　に襲われるだろう。

俺は【索敵】のE×スキル【気配察知】をマスターしているので不意打ちをされる心配はないが、流石に自分の命が懸かったこの状況で熟睡できるほど、俺の神経は凶太くない。

それに就寝中の【気配察知】のアラームは、耳元で大音量の目覚ましを鳴らされるのと同じくらいうるさいので、できれば使いたくはない。

俺が野宿したことがあるのは、迷宮のセーフルーム　絶対にモンスターが襲ってこない部屋　だけだ。

こんな野原ではしたくない。

『……マスターは、今の御自分の格好を忘れていませんか？』

「格好？　　ッ！！　部屋着のままだ……」

自分の格好を見て思い出した……

「そういえば、装備を作ろうとしていた時に召喚されたんだ……」

……

あいつ（ディオス）はもう少し召喚するタイミングを考えるよ……

「……確かにこの部屋着は防御力はあつてないような物だが、俺のステータスなら大抵の魔獣は大丈夫なはずだぞ」

『マスターにはまだ言っていないかもしれませんが、この世界の魔獣は『VLO』のモンスターに比べ強大な力を持っています。それでも、油断さえしなければ大抵の魔獣はマスターの敵ではありませんが』

「それなら……」

『それでも、万が一、いえ億が一の可能性もあつてはならないのです。それに、先程私は言いました。もう二度と『マスター』を失いたくないと……それとご心配なさらずとも今日一日、恐らくは明日

の昼頃までは、『神龍アリュージェ』様のお力でこの一帯に結界が張られているので魔獣や敵意、悪意のある者は近づけないのです』

……そこまで言われれば、俺の『ベッドでゆっくり休みたい』なんて我が儘を通す訳にはいかないな。

確かインベントリの中に野宿用のシュラフがあったはずだ。

こっちに持って来られていればだが……

この世界に来てから4回インベントリを開いているが、中身を詳細に見た訳ではないので、いまいち何が入っているかわからない。

後で確かめておこう。

「あっ、そういえばあいつ（ディオス）からの『餞別』の話はどうなった？」

『そういえば、色々あつてすっかり忘れていましたね。陽が沈むまでまだかなり時間もありますし、確認しておくことにしましょう。マスターの装備とも関係ありますしね』

何か、俺とこいつの中であいつ（ディオス）の扱いが、段々ぞんざいになってきている気がするな……

それにしても『こいつ』か……

相棒になったんだし、いつまでも『おまえ』とか『こいつ』とか呼ぶのも何だな……

「おい、『ラグナレク』……」

『……？ 何ですか、マスター？』

呼びづらい……

ラグナレク……、ラグナ……、うん……

「『ラグ』……」

『ッ!?!』

「なあ、おまえの呼び方『ラグ』で良いか？」

『はい!! 構いません!!』

「ど、どうしたんだ？ 急に？」

『いえ、マスターに名前を呼んでもらえて嬉しかったのです。それに、その呼び方は『リシエル』様と同じなのです……』

あゝ、リシエルは名前を省略して呼ぶのが好きだったからな。

俺の名前『デイン』は略せないから、ずいぶんと文句を言われたものだ。

最初は無理に略して『デン』と呼ばうとしていたしな……（当然、全力で却下した……もはや別の何かだ）

「そうか、じゃあ『ラグ』って呼んでも良いな。ちなみにギルムは、何て呼んでたんだ？」

『あのお方は、普通に『ラグナレク』と呼んでいました』

ま、あいつは変なところで真面目だったからな、名前を略したりはしないか。

「あいつらしいよ。話を戻すがインベントリを開けば良いのか？」

『あ、はい。残りの『餞別』はアイテムのはずです』

インベントリを開き、今度は中身を1つ1つ見ていく。

「……………俺がこっちに来る前に入れていた物は、ほとんど入ってるな」

まあ、そのほとんどが素材な訳だが。

取り敢えず、素材の類たぐいは取り出していく。

「…………？ 見たことがない素材がいくつかあるな。それに、何だこれは…………？」

見たことのない素材は、まあ良いとしよう。（それもどうなんだ？）

それにしても、これは何だ…………

インベントリの底（下）の方にあつたのは…………

『調理道具一式』、『釣り道具一式』、『採掘セット』、『採取セット』、『加工道具一式』、『裁縫セット』、『鍛冶道具一式』、『極めつけはこれだ…………』、『錬金釜』。

最初の方はまだ良い、インベントリに入れた覚えはないが、迷宮に潜る時や暇つぶしの時に使っていた道具で、インベントリに入れることができる。

だが、『加工道具一式』、『裁縫セット』、『鍛冶道具一式』、『錬金釜』はいつもホームの工房や鍛冶場に置いていた物だ。

『裁縫セット』と『鍛冶道具一式』は良いだろう、インベントリに入れたことはないが、所詮縫い針と縫い糸にハンマーと金床だ、入れることはできるだろう。

入れたことがないのは、わざわざ迷宮で【裁縫】をするほど、俺は物好きじゃないからだ。（もしかすれば、そんなプレイヤーもいたかも知れないが…………）

それに、ハンマーと金床だけでは【鍛冶】スキルは使えない。（しかも、ホームに鍛冶場があるのにわざわざ何処かに持って行く必要がない）

だが、『加工道具一式』と『錬金釜』はありえない。

両方とも工房には置いていたが、インベントリに入れる物でもないし、入るとも思わない。

どうせ、またあいつ（ディオス）が何かしたんだろうな…………  
というか、ちゃんと使えるんだろうな…………？

不安だ……

後で確かめておこう。

まあ、あつて困る物でもないし、助かるが……

これらの道具はそれぞれ【料理】、【釣り】、【採掘】、【採取】、【加工】、【裁縫】、【鍛冶】、【錬金】の『サブスキル』を使うのに必要な道具や効率、成功率を上げてくれる便利な道具だ。

『サブスキル』とは、主に生産系のスキルのことで直接戦闘には役に立たないスキルだが、戦闘に役立つ装備やアイテムを作ることができるスキルだ。

『VLO』には、この各サブスキルを極めた生産者プレイヤーもいた。

俺が使う道具は全てレア素材できていたり、かなり値段の張る最高級品だ。

なので、使うことができればかなり助かる。

これで今すぐ金属製の鎧を作るのは無理だが、素材さえあれば防具については問題なくなった。

素材か……

この、見たことがない素材は何だ？

取り敢えず、ラグに聞いてみよう。

「なあラグ、この素材は何だ？　かなりレアな素材なのはわかるが、見たことがないんだが……」

俺は『VLO』に存在する素材なら、ほぼ全て目にしたことがあるのだ。

その俺が見たことがない素材なんて、一体何なんだ？

『マスターが見たことがないのも、無理はありません。それらの素材は『ヴェルガディア』にしか存在しない魔獣　いえ『神獣』です。　から取れる素材なのです。具体的には『VLO』のモンス

ターの上位種になります』

「そうか、だから入れていたはずの素材がないんだな」

てつきり、こつちには持って来れなかったのだと思っていたが、素材の名称を見ていくと何となくわかった。

たとえば、『ゲイルドラゴンの角』は『VLO』だと『ウインドドラゴンの角』になるはずだ。

『ウインド』は風で、『ゲイル』は確か、疾風だったはずだ。何となく上位種っぽい感じがする。

同じように考えれば、『ファイア』が『フレイム』に、『ウォーター』が『トールアント』に、『ソイル』が『グラウンド』に、『ライト』が『シャイニング』に、『ダークネス』が『シュバルツ』になっている訳だ。

しかし、同じドラゴンの素材なのに無属性の『アビストドラゴン』だけはそのままだった……

「後は……これもか」

『炎皇狼の毛皮』は、元は『炎狼の毛皮』だったはずだ。

こちらは『狼』が『皇狼』に変わっている。

たぶん、狼の王といった意味だろう。

こちらにも6属性に対応する狼の素材は変わっているのに、無属性だけは変わっていないかった。

「大体の素材はわかった。でも鉱石の類は変わっていないな。『VLO』にあった全ての金属が、こちらにもあるのか？」

『はい、あります。しかし、こちらにしか存在しない金属が1つだけあります。ちなみに、マスターはすでにお持ちです』

さつき見た時、見覚えのない金属や鉱石は無かったけど……

「わかりませんか？ マスターの目の前にありますよ？」

目の前にはラグしかないんだが……

「もしかして、ラグのことか？」

「正確には『アイギス』もですけどね。私たち クラス？の魔導兵装は全て、その金属 『レヴァンティウム』で創られています。『レヴァンティウム』は全ての上位希少金属を、神龍様のお力で融合させた最上位の金属なのです。『レヴァンティウム』は、それらの金属の特徴を全て兼ね備えた性質を持っているのですよ？ 神龍様のお力がなければ創ることはできない金属なので、人間には作る事が不可能なのです。」

自分のことだからなのか、かなり誇らしげだ。

「ラグが凄いのは、良くわかったよ。何て言うか、無茶苦茶だな……」

上位希少金属といえば、何種類があるがどれも凄い特徴を持つ金属だ。

たとえば、希少金属『オリハルコン』の上位金属『オリハルコン結晶』は見た目は紅く透き通るクリスタルのような金属だが、その硬度は『オリハルコン』以上で、自己修復する特徴も持っている。俺の使うスロージングダガーも、この『オリハルコン結晶』で作っている。

ちなみに、『オリハルコン』は他の金属と合金することによって、様々な特徴を持つ金属だ。

それら全ての上位希少金属の特徴を併せ持つ金属で武器を作れば、計り知れないほどの性能を持つだろう。

流石は数ある魔導兵装の最上位、『ラグナレク』といったところか……  
言い換えれば、それほどの武器でなければ邪神龍を滅ぼせないということだ。  
ネガティブに考えるのはやめよう、『ラグナレク』なら邪神龍を滅ぼせると考えよう。

「後で、ラグの性能と特殊固有スキルを確認させてくれ」

自分の武器　いや相棒か　のことは良く知っておかないとな。

『わかりました。ですが、取り敢えずは陽が沈む前に防具を作りましょう』

「そうだな。それじゃあ、早速作るとしよう」

取り敢えず、使わない鉱石類や金属類、その他の素材をインベントリに放り込み、代わりに『錬金釜』を取り出した。

「相変わらず、でかいな……」

ぼやきつつ、釜の下に『火属性魔術』を使い火を熾す。

ちなみに、『錬金釜』は直径が1.2mくらいのでかい釜だ。

中に特殊な液体が入っていて、【錬金】スキルを使えば素材を別の形にしたりと色々できる。

「取り敢えずは『炎皇狼の毛皮』からだ」

まずは毛皮を『糸』に変えていく。

そうしないと『布』にできず、衣服系の防具は作れない。

『炎皇狼の毛皮』を釜の中に放り込む。



しばらく時間がかかるな。

「ラグ、今の内におまえの性能を確認させてくれ」  
「釜は見ていなくても良いのですか、マスター？」  
「後は放っておくだけで良いし、俺は【錬金】もマスターしてるからな。失敗する確率なんて0.01%もないよ」  
「わかりました、マスターがそう言うのなら」

装備ウィンドウを開き『ラグナレク』を装備してみる。

一瞬、装備できなかったらどうしようかと思っただが、問題なく装備できた。

そして、ウィンドウを見てみると

魔導兵装クラス？ 『ラグナレク』

常時：永久不滅、形態変化、質量変化

特殊固有スキル：【覚醒】

『私の最大の特徴は形態変化です。マスターが事前に登録した武器の形状に変化できるようになります。簡単に言えば、どんな武器にもなれるということですね』

「…………質量変化は？」

『どのような形態でも、マスターの好みの重さに質量を変化できます。極端に言えば長さが10mもありながら羽のように軽い剣や、途轍もなく重い短剣ナイフにできます。先に言っておきますが、『永久不滅』は決して折れず、曲がらず、傷つかないということです』

「…………【覚醒】というのは？」

『他のクラス？の魔導兵装の力を解放するスキルです』

最初にウィンドウを見た時は、スキルの数などから『アイギス』の方が優れているように思えたが、話を聞いてみると『ラグナレク』の武器としての規格外な性能に驚いた。

「相変わらず、クラス？の魔導兵装というのは凄まじいな……もうこれは武器じゃなく、兵器の類だろう」

「……？　そうですよ、マスター。私たちは、邪神龍を滅ぼすために創りだされた兵器なのです」

「そ、そうか。なら、この性能にも納得だな」

だが何故だろう、それは少し悲しいことに思えてしまった……

『マスター、ついなのです、』『アイギス』の性能も確認しておいて下さい。以前とは違っているはずです』

「ああ、わかった」

『ラグナレク』のウィンドウを閉じ、『アイギス』のウィンドウを開く。

魔導兵装クラス？『アイギス』

常時：精神異常、猛毒、沈黙毒、麻痺、即死攻撃無効化

魔力障壁展開時：物理ダメージ90%カット、全属性ダメージ100%カット、龍種のブレスによるダメージ100%カット

特殊固有スキル：【SP減少半減？】、【SP自然回復量UP】、

【取得経験値倍加？】、【障壁展開制限解除】

……無効化できる状態異常の『毒』だったところが『猛毒』になり、『沈黙毒』が増えていた。

『猛毒』は20秒毎に最大HPの5%のダメージが入る状態異常だ。

ちなみに、『毒』は1分毎に最大HPの3%のダメージだ。

そして『沈黙毒』は、沈黙の状態異常になる毒だ。

沈黙状態になると『魔術』、『アーツスキル』を使用できなくなる。

どちらもソロの俺には、非常に厄介な状態異常だ。

「特殊固有スキルが幾つか変わったり、増えているが説明してくれないか？」

「はい、まず『？』と付いているものは、効果が上がったスキルです。【SP減少半減？】は減少量を1/4に、【取得経験値倍加？】は取得経験値、熟練度を4倍にするスキルです。そして【SP自然回復量UP】は、待機時のSP自然回復量を上げるスキルです。」

SPとは『スタミナポイント』の事で、『アーツスキル』を使用すると各アーツスキルに設定されている値だけ減少する。

それに行動時にも少しずつ減っていき、残りの割合に応じてステータスに制限を受けてしまうので、結構重要なスキルだ。要するに、体力ということだ。

「ふう〜、『アイギス』の方も、さらに凄まじくなったな……」

若干呆れつつ、装備ウィンドウを閉じた。

そうこうしている内に、『糸』が出来上がってきた。

「取り敢えず、こっちの作業を終わらせるか」

出来上がった『糸』を脇に置いて、『水皇狼の毛皮』を始め、素材をどんどん『糸』に変えていき、【錬金】スキルを使った他の作

業も終わらせていく。

「ふう〜、結構時間がかかったな……」

俺の隣には、様々な素材が元になった『糸』と、ズボン用の『レザー』が山積みになっている。

「……かなり早かったと思いますが……しかもかなり難易度の高い素材もありましたが、一度も失敗されていませんし……」  
「ん？ ああ、俺のスキル熟練度とこの『鍊金釜』なら、どんな素材だろうとそうそう失敗はしないさ」  
「わかつてはいましたが、マスターも充分規格外ですよね……」

……まあ、この『鍊金釜』の性能によるところが大きいのだが……  
これを使ってなければ、いくら俺でも何回かは失敗していたはずだ。

「それじゃあ、次は『布』にしていくか」

今度は【布作製】スキルを使い、『糸』を『布』に変えていく。

【布作製】スキルは風属性が無属性の魔術が使えるれば、道具は特に必要ない。

なので、使い終わった『鍊金釜』をインベントリに入れる。（かなり不安だったが『鍊金釜』に触れ、インベントリを開けば入れることができた……）

「始めるか……取り敢えず、無属性魔術を使おう」

『糸』の中には土属性の物もあるので、悪影響のなさそうな無属性を選ぶ。

……もしかしたら、『VLO』では作ることのできなかつた『布』を作れるかもしれない。

『VLO』では『布』を作る際、同種のモンスター素材由来の『糸』しか組み合わせて『布』にすることしかできなかった。

しかし、ここはゲームの中のような制限はないはずだ。(多分……)

「……まだ素材は残ってるんだ。失敗したら、やり直せば良いさ……」

と、ぶつぶつ呟きながらスキルを起動しようとする

『待つて下さい、マスター』

「ッー！ 何だ……？」

いきなり失敗しそうだった……

『マスターは、オリジナルカテゴリの【鋼糸】を使えますよね？』  
「確かに使えるが……」

【鋼糸】は俺が創ったオリジナルカテゴリで、目に見えないほどの細い金属製の糸を操り、遠距離から中距離の敵を切り刻んだり、罠を張ったりと色々な使い方ができるが、扱いが難しく何人かに教えたことはあるが、誰も満足には扱えなかつた。(その後がどうかは知らないが……)

俺にはもう一つ特殊な【鋼糸】の使用法があるが、今はどうでも良い。

「何でラグが知ってるんだ？ 言った覚えはないが……」

『契約の時に確認させてもらいました。それで、布製作時に私を鋼糸状にして布に織り込んでもらいたいのです。そうすれば、布の性能は飛躍的に上がるはずですよ』

「……わかった。どうすれば良い？」

『私を握って、【鋼糸】を使う際に使用していた武器を思い描いて下さい。そうすれば、自然と形態が登録されます』

言われたように『ラグナレク』を握り、鋼糸使用時の武器 指

先に鋭い爪のついた金属製の手甲のようなもの を思い描く。

すると、『ラグナレク』が白銀の光の粒子に変化し、両手に集まってくる。

そして、一瞬の内に白銀の手甲になっていた。

「ラグ……？」

『はい。何ですか、マスター？』

会話は普通に（？）できるようだ。

鏢に填まっていた宝玉は右手の甲の、柄頭に填まっていた宝玉は左手の甲のところに埋まっていた。（刻まれていたラインもそのままだ）

それにしても速かった。

変化速度は『換装』チェンジウエポンと同じか、若干速いくらいだ。

これなら充分戦闘でも『形態変化』が使えるし、もしかすれば近接戦闘でも使えるかもしれない。

「……正直、想像以上の凄さだよ」

『ありがとうございます。それでは『布作製』を始めましょう』

取り敢えず、外套にする予定の『布』を作る。

「じゃあ始めるぞ、ラグ」  
「はい」

俺は、【布製作】スキルと鋼系の『アーツスキル』を同時に起動する。

『サブスキル』と『アーツスキル』を同時に使用したことなど今までにないので、細心の注意が必要だろう。

『鋼系の制御は私に任せて、マスターは【布製作】に集中して下さい』  
「わかった」

様々な色の『糸』と白銀に煌めく鋼糸が、布状に織り上がっていき、色とりどりの『糸』の乱舞が終わり、完成した布が目の前にあった。

ぱつと見た感じは少し金属光沢がある真っ黒な布だが、光の当たり具合によつて様々な色に薄つすらと輝く、美しくも不思議な『布』だ。

「出来た……」

『出来ましたね……この世界にも今まで存在しなかった『布』です。この布で作られた防具の性能は、他の物とは比べものにならないでしょう。この『布』に名前をつけますか、マスター？』

「……やめておこう。俺にその類のセンスはない」

『……わかりました。もう一度、この『布』を製作しますか？』

「いや、もう良いよ。後はシャツ用の布だけだ。どの道、金属鎧を装備する予定だ。それほどの性能は求めていないさ。しばらくは、この『布』を使った外套で大丈夫だろう」

『それもそうですね』

「じゃあ、残りの布を作ってしまうか」

『ラグナレク』を元のロングソードに戻しつつ、そう言った……

「これで布は揃った、後は外套やシャツ、ズボンにしていくだけだ」

『布』を衣服にしていくのは【裁縫】スキルだ。

俺はあまりこのスキルが好きではない。(無論、マスターしてはいるが……)

何故なら、矢鱈とローテクなのだ。

魔術などの様々な不思議能力がある世界で、何が悲しくて針と糸でチクチク服を縫わなければならないんだ？

そこら辺は魔術でパパッと済ませてくれよ……

まあ、マスターしているので手や指は自動的に動いて勝手に縫ってくれるのだが、その姿は悲しいものがある。

「文句を言っても始まらないか……さっさと済ませよう」

『裁縫セット』をインベントリから取り出しつつ、そう呟いた。  
まずは外套だ。

取り敢えず、フード付きのコートで良いか。

外套の形を考えながら、針に糸を通す。

ちなみに、この針と糸は『オリハルコン結晶』製だ。(作るのに  
はかなり苦労をした……)

じゃあ、やるか……

そして、俺は黙々と縫っていった……



「出来たあゝ、疲れた……」

俺は外套とVネックの長袖のシャツ（着替えの分も含め4枚作った、ちなみにシャツの布は鋼糸を使っていないだけで、ほぼ同じ物だ）、そしてズボンも作った。

ズボンに使った布は『レザー』で、『ドラゴンの竜皮』を合成した物だ。

名称は『レザー』になっているが、質感はジーンズの生地似ている。

色はシャツもズボンも黒だ。

辛うじて外套は光の当たり具合では他の色にも（薄っすらと）なるが、これらを全て装備すれば全身真っ黒だ。

「……………調子に乗りすぎたか……………」

色はまだ良い。

全身真っ赤とかよりもマシだろう。（どっちもどっちな気もするが……………）

どうせその内、鎧を着けるのだ。

鎧さえ黒くなければ、どうにでもなる。

しかし、この外套は……………

上の方は良い、普通のフード付きのコートだ。

だが、裾が……………

作ったばかりにも関わらず、ボロボロに擦り切れてるのだ。

ありがちな感じ（厨二的ともいう）の装備だ。

「……………やりすぎだな。まあ、今更言っても仕方ない。気にしないでおいっ」

いい歳して着る物ではない気がするが、気にしない……  
気にしないっしたら、気にしない!!

『……終わりましたか、マスター?』

「あ、ああ。それにしても、ずいぶんと静かだったな?」

裁縫をし始めた頃から、ラグの声を聞いていないような気がする。

『何か、触れて欲しくなさそうでしたので……』

「……そうか」

『はい。後、そろそろ陽が沈みそうです。野宿の準備をしましょう』

空はもう暗くなり始めていた。

「ずいぶんと時間が経ってたんだな」

そして俺は道具を片付け、野宿の準備を始めた。

「ふう〜、美味かった」

パチッパチッ　と薪の爆ぜる音を聞きつつ、俺は夕食を食べ終わり一息吐いていた。

すっかり陽は沈み、空には星が瞬いていた。

ちなみに夕食はインベントリに入っていた『饞別』の『牛丼』だ

……

ほんと、何考えてるんだ、あの神様?

『饞別』、食い物ばかりじゃねえか。

まあ助かってはいるんだが……

『もうお休みになりますか、マスター？』

確かに今日1日、色んなことがあって疲れてはいるが、寝るには少し早い。

「いや、もう少しだけやっておきたいことがある。武器の形態を登録しておきたい」

『わかりました』

俺は『ラグナレク』を掴み、立ち上がった。

ちなみに、今俺は自分で作った外套などに着替えている。

「じゃあ最初にもう一度確認しておきたいんだが、ラグはどんな形態にもなれるのか？」

『基本的にはなれません。しかし、『魔導銃』のような機構の複雑な武器に変化する際は、他の武器の場合より若干時間がかかります。なので、戦闘中にそのような物に変化するのには、得策ではないですよ』

「わかった。それなら魔導銃は別に用意するか……」

俺としても、魔導銃は常に実体化させておきたい。

「じゃあ、まずは【グレートソード斬馬剣】からだ」

そして俺は次々と形態を登録していき、何度か素振りをして重さや重心を俺の好みに変えていった……

俺は外套を脱ぎ、シュラフに入りぼんやりと星空を見上げていた。  
やっぱり星座とかは違うのだろうか？

まあ、違うだろうな。

そんなことを考えている内にウトウトとしてきたので、そのまま寝ることにする。

「おやすみ、ラグ」

『おやすみなさい、マスター』

そして俺は眠りに落ちていった……

『……………て下さい』

「うん……………」

『起きて下さい、マスター』

……………何かこの世界に来た時と、同じシチュエーションだな……………

『早く起きて下さい、そろそろ神龍様の結界が解ける頃です』

「……………わかった……………」

モゾモゾとシュラフから抜け出す。

『おはようございます、マスター』

「おはよう、ラグ」

おはようとは言ったが、太陽はすでに朝とは言えない高さで輝いている。

『体調はどうですか？ 疲れなどは残っていませんか？』

この身体のステータスのおかげか、体調は驚くほど良かった。

「ああ、問題ない。……この近くに、川とかの水辺はないか？」

歯磨きは無理でも（歯ブラシが無い）、せめて顔は洗いたい。

『精霊を見てみれば、わかると思います。』水』の下級精霊が多くいる方に進めば、近くに水辺があるはずです』

右目を閉じ、【神眼】を起動する。

【神眼】のスキルは、初めてディオスの左目を使った時に習得していたスキルだ。

「……あっちの方が少し水の精霊が多いな。取り敢えず、行ってみるか」

相変わらず赤いのが多いが、青いのが集まっている方向があった。俺はシュラフをインベントリに放り込み、ざっと装備を整えてから外套を羽織り、さっき見た方に歩いていった。

ちなみに、『ラグナレク』はまだ鞆を作っていないので、手に持ったままである。

しばらく森の中を歩いて行くと、川があった。

覗き込んで見ると綺麗に澄んでいたの、顔を洗っても問題なさそう。

なので顔を洗うついでに、せめてもとという思いで、うがいもする。インベントリから『布』を作るついでに作っておいた『タオル』を1つ出し、顔を拭く。

ちなみにこの『タオル』、『布』を作った余りの『糸』で作ったので無駄にレアな物だ。

すつきりしたところで、一休みしていると

『キヤアアアアアア……………』

「ッ!? 何だ!?!」

遠くから悲鳴が聞こえてきた。

咄嗟に【気配察知】を最大範囲に広げ、周りを確認する。

すると、北西に400mほどの所に『中立のプレイヤー』を表すグリーンのアイコンが1つと、『モンスター』や『敵対プレイヤー』を表すレッドのアイコンが5つ表示されていた。

確実に厄介な状況だろう。

「ラグ!! 行くぞ!!」

『ラグナレク』を引つ掴み、木々を避け全力で走る。

【加速】スキルの補助を受け、凄まじい速度で駆けていく。発生した衝撃波で木々が倒れていくが、気にはいられない。

「ラグ!! 【鋼糸形態】!!」

どんな状況かわからないので、応用のしやすい鋼糸を選ぶ。

「見えた!! あれだ!!」

1人の少女が5匹の狼型の魔獣に襲われている!!  
クソッ!!

もうすでに1匹が少女に襲いかかろうとしている。

少女と狼が近すぎて鋼糸が使えない！！

「間に合ってくれ！！」

【縮地】を起動しつつ、【闘気術】も起動する。

右手に闘気を纏わせながら一気に距離を詰め、狼に右手の拳を全力で叩き込む。

『ッ！！ いけません、マスター！！』

「え！？」

もう止めることはできず、闘気を纏った拳が狼に叩き込まれる。

『ドパアッ！！』

「なっ！？」

殴った狼が水風船のように弾け飛んだ！！

『ビチャッ』

狼の一部だった『何か』が頬にへばりつく。

「うっ……！！」

喉の奥から込み上げてきたものを、気合で飲み込む。

他の狼たちは突然の状況に驚いているのか、こちらを遠巻きにして唸っている。

『……大丈夫ですか、マスター？』

「何とかな……」

狼たちの方を見ながら答える。

「彼女は無事か？」

『気絶はしていますが、身体的には問題ありません。まあ、あの光景を見てしまえば、仕方がないでしょう』

「……………他の狼はどうする？」

『放つて置いても良いと思いますが、彼女が目覚める前にまた襲われても面倒です。始末しましょう』

あっさり『殺す』と言い切ったな……

俺は、まだ生き物をそれほど簡単に『殺す』と言い切るのは難しい。

『マスターにも、慣れてもらわなければ困ります。何も、人間を殺すことに慣れるとは言っていません。ですが魔獣を殺すことを躊躇えば、遠からずマスターは死にます』

いつになく厳しいな……

その理由もわかつてはいるが……

「……………わかったよ。今すぐには無理だが、必ず慣れるさ」

俺はあの2人に誓ったのだ、死ぬ訳にはいかない。

『それでは、あの狼たちを始末しましょう』

「わかった。鋼糸を展開してくれ」

狼たちに向け両手を構え、手甲の全ての指先の爪から鋼糸を展開



する。

そして、狼たちが気づかぬ内に鋼糸を狼の身体に巻きつけ

「……すまない」

一気に鋼糸を引き絞り、狼たちをバラバラに切り刻んだ……

狼たちの死体は『土属性魔術』を利用し、周りの土ごと地中深くに埋めた。

血の匂いで、他の魔獣が寄ってくるからだ。

作業を終え、彼女の元へ行きラグに尋ねた。

「彼女の様子はどうだ？」

『起きる様子はないですね。しかも、今日覚めてもまた気絶すると思われます』

「どういうことだ？」

『……彼女を良く見て下さい』

「ああ！！」

彼女の顔に狼の血がこびりついている。

これはマズイ！！

「水、水！！」

彼女を置いて川まで戻る訳にはいかない。

『マスター、魔術を使われてはどうですか？』

「そうだな……『ウォーターボール』」

『水属性下級魔術』の『ウォーターボール』で発生した直径10cmほどの水球を、【魔力操作】を使って手元に留める。そして、インベントリから取り出した未使用の『タオル』を濡らし、彼女の顔を拭いていく。

服の方にも少し飛んでいるが、流石にそちらはどうしようもない。改めてみると、彼女は12、3歳くらいの可愛らしい少女だ。

「何でこんな子どもが、こんな所にいるんだ？」

『この近くに村があるので、その子どもだと思えます』

「村？ そういえば、ここは何処なんだ？」

『昨日と先程、精霊を見た時に『火』の下級精霊が多かったですよね？ 下級精霊は、自分と同じ属性の『精霊王』のいる場所に多くいますので、そのことからここが何処かわかるはずですよ』

……ということは、ここは『火』の精霊王がいるということだ。  
と、するこ

「ここは『桜花』か？」

『VLO』と同じ名前かどうかはわからないが……

『はい。ここは人族の国『桜花』の北西部です』

国の名前も同じだったようだ。

「それで、近くにある村の名前は何て言うんだ？」  
『確か『ウィプル村』ですね』

村の名前は聞いたことがなかった。

「それじゃあ、彼女はその『ウイプル村』から来たのか……」  
『恐らくは』

「ん……うん……」

俺とラグがそんな話をしていると、彼女が起きた。

「気がついたみたいだな。きみ、大丈夫か？」

「え……？ キャアツ！！」

何で悲鳴を上げられなければいけないんだ……

『……マスター、御自分の顔の傷と格好のことを忘れていませんか？』

ああ、そういうことか……

黒づくめの服を着た顔に傷のある男に、起きた直後に声をかけられれば悲鳴くらい上げるか……

俺でも上げると思う。

ちよっと傷ついたが……

「心配しなくて良い、怪しい者じゃない」

自分で言っていて、この言い方はどうなんだ、と思ったが、俺は彼女から少し距離を取りつつそう言った。（当然、これ以上怖がらせないように、だ……）

「あ、貴方は……あの時の……」

俺が助けに入った時のことを思い出したのか、少し顔を青ざめさ

せてそう言った。

「そつだ。思い出したのか？」

「はい。助けていただいて、ありがとうございます」

「気にしなくて良いよ。それに、その、ちょっと言いづらいんだが

……服が……」

「あつ。このくらい構いませんよ。命を助けていただいたのですから。」

服を見た時はちょっと困った顔をしたが、彼女は笑顔で言ってくれた。

「そう言ってもらえると、俺も助かるよ。それできみは『ウィプル村』の子なのか？」

「はい、そうです。ここには、薬草探しに夢中になっていたら……」

見た感じの歳の割には、しっかりとした言葉遣いだが、そういうところは歳相応っぽいな。

「そうか。後、きみの名前を覚えてくれないか？ いつまでも『き

み』じゃ、何だし」

「　　つすみません。まだ言っていないませんでしたね。私は『リリア』と言います」

「俺は『せ　　』」

ちょっと待て、この場合、俺はどっちの名前を名乗れば良いんだ？

『来訪者の存在はこの世界で認知されているので、どちらでも構いませんが、ステータスの方は『デイン』になっていますので、そちらの方が面倒にないと思います』

彼女、『リリア』と話し始めてから静かにしていたラグが、助け舟を出してくれた。

「……………」

急に黙り込んだ俺を、『リリア』が不思議そうに見ている。

「俺の名前は『デイン』だ」

「『デイン』さんですね。わかりました」

「それで『リリア』、これからどうするんだ？ 村に帰るのか？」

「はい。あまり遅くなると両親に心配されますし。ですが……………」

あんなことがあったのだ。

一人で帰るのは怖いのだろう……………」

『マスター、この子を村まで送って行きましょう。どの道、『ウィプル村』には立ち寄る予定でしたし』

そうだな。このまま一人で帰す訳にもいかないし

「良ければ、送って行こうか？ 一人で帰るのも危険だし、『俺たち』も『ウィプル村』には立ち寄る予定だったんだ」

「俺たち？ デインさんには、お連れの方がいるのですか？」

しまった！！

つい、ラグの事も含めて言ってしまった。

「いや、俺1人だよ。ちょっと言い間違えただけだから、気にしないでくれ」

「……………」 わかりました」

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

『それは良いのですが、村の場所を知っているのですか、マスター？』

……知らなかった……

ラグに案内されつつ、森の中の小道を『リリア』と2人で歩いて行く。

彼女のペースに合わせているので、結構ゆっくりだ。

一応確認しておくか……

俺は【鑑定】のE×スキル【リーブラの魔眼】を起動した。

【リーブラの魔眼】はアイテムの詳細なデータを確認したり、モンスター（魔獣）やプレイヤーのステータスがある程度見ることのできるスキルだ。

当然、自分より高レベルのモンスターやプレイヤー、そして【<sup>イテイング</sup>気配隠蔽】の熟練度が高いプレイヤーのステータスは見ることができない。

この子に騙されているとは思わないが、念には念を入れて名前だけでも確認しておこう。

『疑心暗鬼になるのは良くありませんが、そのくらい慎重な方が良いですよ』

ラグもこう言っている。

取り敢えず、ステータスを確認してみると

Name:リリア

種族：人族（転生0回）

称号：なし

Lv：5 / 500

HP：12000 / 200000

MP：20000 / 200000

SP：10000 / 100000

……何となくわかつてはいたが、ステータスはかなり低い。

このステータスで1人で外を出歩くのは自殺行為だ。

親は止めなかったのか？

それにしても、『人族』か……

ここは『桜花』なので別におかしくはないが、何か新鮮だ……

『VLO』にはNPC以外、『人族』はほとんどいなかったしな。

でもこれで、リリアが俺を騙している可能性はなくなった。（ま

あ、元々0に近かったが……）

自分の行為に苦笑していると

「どうかしたんですか、デーンさん？」

「いや、何でもないよ。村まで後どれくらい？」

一応ラグに案内されているが、建前上はリリアに案内されていることになっている。

リリアにした言い訳は、道順に少し自信がないからということにしておいた。

「もうすぐですよ。疲れましたか？」

「俺はこのくらい何ともないよ。リリアは大丈夫？」

ゆっくりとだが2時間ほど休憩なしで歩いているのだ、リリアに

はキツイはずだ。

「私も大丈夫ですよ。本当に、村まで後少しですし」

少し疲れているようだが、本人がそう言っているので無理には休ませられない。

実際はどうなんだ、ラグ？

『彼女の言う通り、もうすぐですよ。このペースなら、後15分ほどでしょうか』

そのくらいなら大丈夫そうだな。（ちなみに、ラグの声は俺にか聞こえていない）

「わかった。それじゃあ、行こうか」

「はい」

それからラグの言う通り15分ほど歩くと、村が見えてきた。

「あれが『ウイプル村』か？」

「そうです。特に何も無い村ですが、良いところですよ。そうだが、父に紹介しますので家に寄って行って下さい。助けてもらったお礼もしたいですし」

「……そんなに気を遣わなくても言いぞ。別に大したことはしていませんしな」

娘がこんな顔に傷のある黒ずくめの男と一緒に帰ってきたら、俺なら警察を呼ぶ。（この世界にそんなものはないと思うが……）



「そういう訳には……」

「リリア……」

もう少しで村の入り口に着こうとしていた時に、村の方から1人の男性がこちらに走ってきた。

「リリア…… 無事だったのか…… 心配したぞ……」

「お父さん……」

どうやらリリアの父親のようだ。

「ごめんなさい、お父さん。心配をかけて……」

「本当だぞ。村中探し回ってみたが見つからなくて、外に搜索隊を出そうとしていたところだ……」

「ッ……！ 本当にごめんなさい……」

思っていたより大変なことになっていて驚いたのか、リリアは頭垂れていた。

「というか、親や村の人達に黙って村から出ていたんだな……  
『そうみたいです……』」

しっかりしてそうだが、意外とお転婆なのか？

「魔獣に襲われただっ……？ それで怪我は無いか……？」

俺が話に入れずそんなことを考えていると、どうやらリリアが外で何をしていたのか話していたようだ。

「心配しないで、お父さん。私は大丈夫。ディーンさんが助けてくれたの」  
「心配するに決まっているだろう!! それで『ディーンさん』というの……」  
「この人がディーンさんよ。この人が私を魔獣から助けてくれて、ここまで送ってくれたの」

リリアの父親が俺の方を見て、訝しげに少し目を細める。

「貴方が娘を助けてくれたのですね。本当にありがとうございます」  
「いえ、そんな大したことはしていません……」

俺のことを怪しんでいるはずなのに、流石は大人だ。  
そう簡単には信用しない。

「お父さん、ディーンさんにお礼がしたいの。家に招待しても良いでしょう?」

そんな俺たち2人に気づかず、リリアが父親に頼む。

「ああ、構わないよ。ここで立ち話も何だし、私もディーンさんにお礼がしたいしね」

父親は先程俺を見ていた時とは、うって変わり笑顔でリリアに答える。

「ディーンさんも、ぜひ家に寄って行って下さい。せめてものお礼に、夕食でもご馳走しましょう」

父親の目は、話を聞かせてもらいます　そう語っていた。

「……わかりました。ご馳走になります」

特に悪意は感じなかったので、俺は大人しくついていった。

「お口に合いましたか、デーンさん？」

「はい。とても美味しかったです。ご馳走様でした、ソファラさん」

俺はリリアの母親、『ソファラ』さんが腕に縊りを掛けて作ってくれた料理を食べ終え、満足していた。

出された料理の量はかなり多かったが、何とか食べ切れた。

おかげでちよつと腹が苦しい……

「ふふ、やっぱり若い人は良く食べるわね。頑張って作った甲斐があったわ」

「お母さんの料理はいつも美味しいけど、ちよつと量が多いのよ。ほんとに大丈夫、デーンさん？」

「このくらい大丈夫さ。それに、本当に美味しかったしね」

正直キツかったが、ここは強がっておく。

美味かったのは本当だしな。

それにしても、家族といえるからなのか、リリアの口調がかなり碎けてきているな。

こちらが地か。

「満足していただいたようで、何よりです。酒はイケる口ですか、デーンさん？」

ワインのような酒のボトルを持ってきた、リリアの父親『ジェラルド』さんが尋ねてきた。

ジェラルドさんは何と、この『ウィプル村』の村長だ。

あの後俺を家まで案内してから、あちこち奔り回り説明や謝罪をしていた。

ちなみに、リリアも一緒に謝っていた。(当然だ)

その間、ソファラさんが俺の話し相手してくれた。(いや、むしろ逆だったな……)

「少しだけなら」

俺がそう答えると、ジェラルドさんはソファラさんに目配せし、ボトルをテーブルに置いて俺の向かいの椅子に座った。

向こうの世界の俺は下戸だが、少しくらいなら大丈夫だろう。

「リリア、今日のことです少し話があります。今から私の部屋に来なさい」

「……もう、お父さんに叱られたのに……」

「リリア」

「はい……」

そして、リリアはソファラさんに連れられて部屋を出ていった。

ソファラさん、おっとりしていて優しくそうなのに、怒ると結構怖そうだな……

まあ、それだけ心配していたんだろう。(リリアの服に着いた狼の血を見て、倒れそうになっていたしな……)

「改めてお礼を言います。娘を助けていただいて、本当にありがとうございます」

「そんなに気にしないで下さい。先程も言いましたが、本当に大し

たことはしていないので」

「それでも父親としては、いくら感謝してもしきれないのです。ありがとうございます」

「お気持ちはわかりました。顔を上げて下さい」

「……わかりました。私が貴方に感謝をしているということだけは、忘れないで下さい。貴方はリアの 娘の命の恩人です。しかし、それでも私はこの村を預かる『村長』として、貴方に聞いておかなければならないことがあります」

父親としての話は、ここまでということだろう。

ここからが本題だ。

ジェラルドさんは唇を湿らす様にワイン（？）を少し飲み

「貴方は一体何者なのですか？」

と俺に尋ねた……

「……………」

やっぱりこう来たか。

予想はできていた。

ラグ、『来訪者』の存在は認知されていると言っていたな？ 俺のこと、どこまで喋ってしまったても良いんだ？

『この世界の人間ではない、ということは言ってしまったても構いません。驚かれるとは思いますが……ただし、『VLO』のことは話さない方が良いでしょう。混乱させてしまうだけです』

俺もそのことは、上手く説明できる自信はない。

ラグのことはどうする？

『言ってしまうって構いませんよ。どうせ『来訪者』だとわかれば、バレるでしょうし』

わかった

『VLO』のことには触れず、説明しよう。

「信じられないかもしれませんが、俺が今から話すことは全て本当のことです。そこに嘘はありません。まず、俺はこの世界の人間ではありません。そして」

俺は『自分はこの世界の人間ではないこと』、『昨日この世界へ来たこと』、『ラグのこと』、『ある程度はこの世界の知識があること』、『そして』川へ行った時に悲鳴を聞き、リリアを助けたことを『VLO』のことには触れずに話していった。

「……俄かには信じられませんが、貴方が嘘を吐くような人にも見えませんし、また嘘を言っただけを騙そうというような目にも見えません」

「はい。今話したことは、全て本当のことです」

言っていないことはあるが、嘘は言っていない。

『詐欺師の理論ですね』

うるさいな、ラグが話すなど言っただらう。茶々を入れるな

「……………」『ラグナレク』はロングソード型の魔導兵装だと、言い

伝えられているのですが、今は何処に？ お持ちのようには見えませんが……」

「今はその手甲になっています」

夕食を食べるために外していた手甲を指差して言う。

「今、元に戻しましょう」

ラグ、【通常形態】に戻ってくれ

「了解しました、マスター。……やっぱりこれが一番落ち着きますね」

鞘を作るまで我慢してくれ

白銀の光の粒子の乱舞が収まると、そこには剣の状態に戻った「ラグナレク」があった。

「ッ！？ 白銀の剣身に蒼い宝玉、それにこの美しさ……言い伝えの通りだ……やはりあなたは『来訪者』だったのですね……」

どうやら信じてもらえたようだ。

「疑ってしまつて、すみませんでした。貴方様は、この世界を救つて下さる『英雄』になるお方でしたの……本当に申し訳ありませんでした」

「ちよつ！？ やめて下さい！！ 俺はそんな大層な者じゃありません！！ どうか顔を上げて下さい、お願いします」

そのまま放つて置くと土下座（この世界にあるのか？）でもしそつな勢いだったので、俺は慌てて言った。

「ですが……」

「確かに俺は、邪神龍を滅ぼしてこの世界を救いたい　という気持ちはあります。ですが、俺自身はそんな大層な者じゃないです。どうか、今までと同じように接して下さい。俺にはその方が助かります」

「……わかりました。貴方がそこまで仰るなら……」

まだ口調が丁寧すぎるが、わかってはもらえたようだ。

「それでは改めて酒はいかがですか、デーンさん？」

「いただきますよ」

それから俺たちは酒を酌み交わした。

ジェラルドさんが持ってきたワインのような酒は、見た目のままワインのような味わいで中々に美味かった。

まあ、俺にワインの良し悪しはわからないが……

「それでデーンさん、何故『ラグナレク』を手甲の形にしていたのですか？ 剣はお使いにならないのですか？」

「いえ、剣も扱えるのですが、まだ鞘を用意していなくて……流石に抜き身の剣を手に持ち歩くのは、その……」

「ああ、そういうことでしたか。確かにそれは拙いですね。余計な誤解を生みかねませんし。デーンさんなら尚更に……ね。」

「言ってくれますね。これでも少しは気にしているんです……」

「ハハ、すみません。冗談です。しかし、鞘は早めに用意した方が良いでしょうね。何かと不便でしょう？」

俺は別にこのままでも良いんだがな……

『駄目です、マスター。鞘は必要です』

何でだよ……



『やはり、私はこの姿が基本なのです。落ち着くのです』  
わかったよ、俺もいらなと思うてる訳じゃないしな。それに、  
相棒の望みは最大限叶えるさ

『マスター……』

「そうですね。この村に鍛冶屋か、鍛冶場を借りられるところはありますか？」

「はい、クラッドさんがやっている鍛冶屋がありますが……どうするのです？」

「鞆を作ろうと思ひまして」

「鍛冶もお出来になるのですか！？ 流石ですね」

「褒めても何も出ませんよ。それで何処にあるんです？」

「明日、リリアに案内させましょう。話は私の方から通しておきます」

今夜はジェラルドさんの好意で、空いている部屋に泊めてもらえることになっている。

「助かります。それで話は変わりますが、リリアは何故あんなことを？」

リリアの名前が出てきたので、俺は疑問に思っていたことを訊いてみた。

「リリアは、ソファアラに憧れているのです。ソファアラはこの国でも有名な『薬師』で、幼い頃から傍で見ていたリリアが、興味を持つのも無理はありません」

『先に言っておきますが、『薬師』は【錬金】で薬を専門に作る者  
のことです』

そんなのもあるんだな……

「しかし、だからと言って……」  
「何度か注意はしたのです。今回が初めてではありませんし……でも、今回のことでリリアも懲りたでしょう。それに、ソファラにもかなり叱られているはずです」

初犯ではなかったらしい……  
ジェラルドさんもこう言っているのだ、これ以上他人の俺が口を挿むことでもないだろう。

「……大変ですね」  
「わかつてくれるかね？」

その夜、俺たちは遅くまで酒を酌み交わした……  
二日酔いにならないよな、俺？

余談だが、その日ジェラルド邸の一室には一晩中灯りが点いていたそうだ。

「こ愁傷様……」

「おはよございませす、ソファラさん」  
「あら、デーンさん。ずいぶんと早いよね？ 良く眠れた？」

今はまだ早朝と言って良い時間だ。  
昨日、夜遅くまでジェラルドさんと飲んでいたので、こんな時間に起きてくるとは思わなかったのだろう。

実際、ジェラルドさんとリリアはまだ寝ているようだ。

「はい、おかげさまで、ぐっすり眠れましたよ。ソファラさんも早いですね」

「朝食の準備をしないといけないから。それより、昨日はずいぶん遅くまで主人と飲んでいたようだけど、体の方は大丈夫？」

「大丈夫です。二日酔いにはなつていません。それより顔を洗いたいので、水を使わせてもらっても良いですか？」

「お酒、強いよね。裏庭の井戸を使うと良いわ」  
「ありがとうございます。それじゃあ、顔を洗って来ます」

ソファラさんに挨拶をして、裏庭に行ってみる。

この身体のおかげなのか、二日酔いにもなっていないし、4時間程しか眠ってないが体調もばっちりだ。

飲んでいる時もほとんど酔わなかったので（ジェラルドさんの方が先に酔い潰れてしまった）、この身体は酒に強いのかもな。

後でラグに聞いてみよう。

ちなみに、ラグは部屋に置いてきた。

井戸水で顔を洗い、出しておいた『タオル』で拭く。

昨日使った『タオル』や着ていたシャツは、ソファラさんが洗ってくれるらしい。

血の付いた『タオル』はどうしようかと思ったが、ソファラさんは特に気にせず『洗うわよ？』と言ってくれたので、一緒に渡しておいた。

さっぱりしたところで裏庭を観察していると、稽古をするにはちょうど良いかもしれないと思った。

ソファラさんに訊いてみると

「良いわよ。2人もまだ寝てるし、朝食にもまだ時間がかかるから。それにしても、朝から元気なのね？」

ふふつと笑われた。

俺としては元の世界にいた時は毎朝、朝稽古をしていたのでこのくらいは何でもないが……

昨日は色々あってサボってしまったし。

「からかわないで下さいよ。それじゃあ、裏庭にいますので朝食ができたら呼んで下さい」

「わかったわ。頑張ってるね」

部屋から『ラグナレク』を持ってきて、ゆっくりとだが素振りを始め、それから一通りの型を確認していく。

汗が出始めたところで朝稽古を切り上げ、汗をタオルで拭いていると

「朝食が出来たわよ、ディーンさん。食べましょう?」

とソファアラさんが呼びに来た。

意外と時間が経っていたようだ。

そろそろ9時頃か?

『そのくらいの時間のようですね』

朝食には少し遅い気がするが……この世界ではこんなものなのかな?

『そんなことはありませんが、恐らくリリアさんとジェラルドさんが、今まで寝ていたのでしょう』

「わかりました。今行きます」

俺が食卓に行くと、すでにジェラルドさんとリリアが席に着いていた。

「おはよう、ディーン君。きみは朝から元気だね……」

「おはようございます、ディーンさん……」

ジェラルドさんは俺の呼び方が、『ディーンさん』から『ディーン君』に変わっている。

昨日のことでかなり打ち解けられたようだ。

「おはようございます、ジェラルドさん。おはよう、リリア。2人とも大丈夫ですか……?」

ジェラルドさんは顔色が悪いし、頭痛がするの額を押さえている。一方、リリアは目の下に薄っすらと隈ができている。

「ちよつと二日酔いでね……きみは大丈夫そうだね……」

「私は昨日、お母さんに……」

「あなたは飲みすぎです。それとリリア、何か言いましたか?」

2人とも黙り込んでしまった。

うーん、やっぱりこの家で一番怖いのはソファラさんだな……

『そのようですね』

「2人がこんな時間まで寝ていたから、朝食が遅くなってしまったんですよ? ディーンさんにも迷惑をかけて」

「まあまあ、ソファラさん。そのくらいで良いじゃないですか。俺は気にしてませんし。それよりも早く朝食にしましょう」

2人が可哀相になってきたし、長くなりそうだったので助け舟を出した。

「……ディーンさんがそうおっしゃるなら……2人ともしっかり反

省して下さいね?」

「はい……」

「それじゃあ、食べましょう」

ソファラさんは最後にしっかりと釘を刺し、そしてようやく朝食となった。

朝食を食べ終わり、一息吐いていると

「それでディーンさんは今日、どうされるのですか?」

とソファラさんに尋ねられた。

「鍛冶屋に行つてこようかと思えます。少しやっておきたいことがあるので」

「リリア、ディーン君を昼頃にクラッドさんの鍛冶屋まで案内してあげてくれ。クラッドさんには話しておくから」

「わかつたわ、お父さん」

「それじゃあ、私は仕事に行ってくるよ。ディーン君はまた後で」

「いつてらっしゃい、あなた。お仕事頑張ってください」

「いつてらっしゃい、お父さん」

「ええ、また後で」

仕事に行くジェラルドさんに三者三様に応え、送り出す。

さて、これから何をしようか。

まだ昼までには、しばらく時間がある。

「それじゃあ、私も仕事に行くわね。と言つても、離れの工房だけ

ど」

食器を洗い終わったソファアラさんがそう言いながら、準備を始めた。

「ねえ、お母さん……」

「あなたは駄目よ。昨日言ったこと、もう忘れたの？ この先ひと月は、工房に出入り禁止です」

「私、まだ何も言っていないんだけど……」

「聞かなくてもわかります。駄目です」

やばい、リリアが泣きそうだ……

「ソファアラさん、そう言わずに……俺も『薬師』<sup>くすり</sup>の仕事を見てみたいです。それで、リリアも一緒に……」

「ハア、ディーンさん。あまり、リリアを甘やかしてはいけませんよ？ これは罰なのです。がディーンさんに免じて、今日だけ

は許可しましょう。わかりましたね、リリア？ 今日だけです」

「ありがとう、お母さん！！ ありがとう、ディーンさん！！」

余程嬉しいのか、さっきまでとは打って変わり飛び跳ねんばかりに喜んでいる。

「ハハ、どういたしまして。それじゃあ、行こうか」

そして俺はラグを持って、リリアと一緒にソファアラさんについて行った。

『本当にマスターは甘いですね』

うるさい、ほっとけ。置いて行くぞ

そして、ソファラさんの工房で【錬金】の作業をボーッと眺める。特に目新しいこともなかったが（元々リリアのためなので別に構わないが）、リリアは目を輝かせてソファラさんの作業を凝視している。

そうしていると

「困ったわねえ〜」

とソファラさんが呟いた。

「どうかしたんですか？」

俺は何か力になれるかもしれないと思い、尋ねた。

「ああ、デーンさん。薬草がちょっと足りないのよ」

「在庫も無いんですか？」

「ええ。今から仕入れても間に合わないし……本当に困ったわ」

うーん、なら俺が採取してくるか？

俺ならすぐに済むはずだ。

「なら、俺が行って採取してきましようか？」

「嬉しいけど、そこまで迷惑はかけられないわ」

「昼までまだ時間がありますから。すぐ行って、すぐ帰ってきますよ」

「本当に良いの？ それじゃあ、お願いしようかしら……」

「それじゃあ、行ってきますよ。足りない薬草は何て名前ですか？」



「『リブシユール』という薬草です。知っていますか？」

『リブシユール』は一般的な薬草ではないが、それほど珍しくはないので、この辺りにも生えているはずだ。

「はい、知ってます。少し待っていて下さい」

すると、リリアが何か言いたそうな目でこちらを見ていた……  
まあ何が言いたいかはわかるが、流石にこれは駄目だ。

「連れてはいかないぞ、リリア。魔獣に襲われるかもしれないし、流石に駄目だ」

「わかりました……」

俺の真剣な様子がわかったのか、リリアは素直に頷いた。

じゃあ行くか、ラグ

『わかりました、マスター』

「あつた、これだ」

俺は【気配察知】に『リブシユール』を設定し、範囲を最大に広げ『リブシユール』を探していた。

ちなみに、【気配察知】に素材アイテムを設定すると紫のアイコンで表示される。

ただし、素材アイテムは1種類しか設定できない。

「これだけあれば足りるだろう」

『そうですね。充分でしょう』

ラグは今、【格闘形態】になっている。

【通常形態】 要するに剣の状態で村の中を出歩く訳にもいかないからだ。

【格闘形態】は【鋼糸形態】と同じような手甲だが指貫きの手甲だ。

「ここまででは魔獣と出会わなかったな。帰りもこの調子なら良いが……」

この辺りの魔獣なら俺の敵ではないが、魔獣を殺すことにはまだ少し抵抗がある。

襲われれば殺<sup>や</sup>るしかないが、できれば殺したくない。

『リブシユール』を設定から外し、この辺りの魔獣の反応を調べてみる。

取り敢えずは大丈夫そうだ。

「帰るか。そろそろ昼だしな」

『そうですね。くれぐれも油断はしないで下さい』

「わかってるよ」

俺は【気配察知】を起動したまま、帰路についた。

「探ってきましたよ、ソファラさん」

工房のドアを開けながら、ソファラさんに声をかけた。

「おかえりなさい、ディーンさん。ずいぶん早かったですね。驚きました」

「言ったでしょう、すぐだって。これで良いですか？」

俺は『リブシユール』をソファアラさんに渡しながら言った。

「こんなに……本当にありがとうございます」

「気にしないで下さい。魔獣にも襲われませんでしたし、楽なものでしたよ」

「そうですね。でもお礼は言わせて下さい。これで作業の続きがきます。ありがとう、ディーンさん」

そう言いながら、ソファアラさんは『錬金釜』の方に歩いていった。それと入れ違いにリリアが寄ってきて

「本当に早かったですね。やっぱり、ディーンさんは凄いです」

「それほどでもないさ。それより、そろそろ時間だ。鍛冶場に案内してくれるかな、リリア？」

「あつ、そうですね。それじゃあ、行きましょつか」

そして、ソファアラさんに挨拶をして工房を出る。

「お邪魔しました、ソファアラさん」

「行ってきます、お母さん」

「気をつけて行ってらっしゃい」

「ディーンさん、ここがクラッドさんの鍛冶屋です」

中々立派な店構えだ……

「来ましたね、ディーン君」

「ジェラルドさん」

「お父さん」

鍛冶屋の店構えを見ていると、中からジェラルドさんが出てきた。

「さあ、中に入って下さい。クラッドさんには話してありますので、大丈夫ですよ」

「それじゃあ、お邪魔します」

俺たちはジェラルドさんの後について、店に入っていく。

中には『ドワーフ』のおじさんがいた。

この人がクラッドさんか？

「こいつがおまえの言っていた、『来訪者』の小僧か？」

小僧……

決めた、こいつのことは『おっさん』と呼ぼう。

「ええ、そうです。ディーン君は鍛冶場を使いたいらしいので、貸してあげてくれませんか？」

「貸してやるのは構わねえが、こちらも商売道具を貸すんだ。様子は見させてもらうぞ。」

「だ、そうですか構いませんか、ディーン君？ できれば、私も見学したいのですが……」

「別に構いませんよ。見てても、別に面白くもないと思いますけど……」

「私が興味があるのです。リリアはどうする？」

「私も……」

「おいおい、鍛冶場は広くねえんだ。そんなに入れるか」

「リリア、すまないね。店で待ってるかい？ それとも、先に家に帰ってるかい？」

「うーん、家に帰ってる」

「そうか。お母さんには、もうしばらくしたら帰る　　と言っておいてくれないか？」

「わかった。それじゃあ、先に帰るね」

リリアは先に帰るようだ。

にしても、ジェラルドさんは仕事は良いのか？

この後、家に戻るみたいだし。

まあ村長の仕事なんて、俺には何をするかわからないが……

「それじゃあ、鍛冶場に案内してもらえますか？」

取り敢えず、やることを済ませてしまおう。

「こつちだ、小僧」

いい加減、小僧はやめろ……

『直接クラッドさんに言えばどうですか、マスター？』

まあそうだけどな……一応鍛冶場を借りるんだ、ある程度は我慢するぞ

鍛冶場は店の奥にあった。

「立派な炉ですね」

「そうだろう。俺の自慢の炉だ。使うのは良いが、壊したらぶっ殺

すぞ小僧」

おっかないおっさんだ。

「でも、この炉では俺の扱いたい金属は無理ですね」

「何だと!! この炉なら大体の金属は扱えるぞ!!」

「確かにそうですね。でも俺の扱いたい金属は、これですので……」

そう言っつて、俺はインベントリから『オリハルコン』と『ルナライトミスリル』を取り出した。

「これは……『オリハルコン』と『ルナライトミスリル』か……初めて見たぞ……」

「私もです……」

ジエラルドさんとクラッドのおっさんは、かなり驚いている。

それもそうだろう。

『オリハルコン』と『ルナライトミスリル』はかなり希少な金属だ。

「確かに、これは俺の炉では無理だな。火力が圧倒的に足りん。それにしても、こんな金属を持っているとは、やっぱり小僧は『来訪者』なのか……さつき村長に聞かされた時は、半信半疑だったが……」

まあ、あっさり信じられる話ではないだろう。

「確かに俺は『来訪者』です。そこで相談があるのですが、俺にこの炉を強化させてもらえませんか？」

「強化? どうするんだ?」

「炉に【刻印】をさせて欲しいんです。」

「【刻印】だと！？ 小僧、【刻印】が使えるのか！？」

「しかし、確か【刻印】の成功率はかなり低い、と聞いたことがあるのですが……」

【刻印】とは【紋章付与】のE×スキルだ。

武具や道具に魔導紋章を刻み、様々な効果を半永久的に与えるスキルだ。

当然、刻んだ紋章が傷ついたりすれば効果はなくなるが、再び刻み直せば効果は復活する。

しかしジェラルドさんが言ったように、【刻印】の成功率は低い

……

何故なら紋章は複雑で、間違えて刻んでしまえば即失敗だ。

しかも【刻印】に失敗すれば、その武具や道具は使い物にならないくなる。

でも俺にはそんなこと、関係がない。

「大丈夫です。俺はさらに上位の、【自動刻印】をマスターしています。」

「何だっ！？」

「何ですって！？」

【刻印】には、さらに上位のE×スキル【自動刻印】が存在する。

(E×スキルが2段階あるスキルは、数は少ないが他にもある)

【自動刻印】は自動的に紋章を刻んでくれるスキルで、【刻印】の成功率を著しく上げてくれる。

俺はそれをマスターしているのだ。

使う道具も特別な物なので、失敗する可能性はまずないだろう。

しかし、マスターするまでには気が狂いそうなほどの努力が必要だ。

約20万回、紋章を刻むことに成功すればマスターできるが、俺は自分以外マスターしているプレイヤーを見たことはなかった。

「なので、俺を信じて任せてくれませんか？」

「……とても信じられんが、小僧が『来訪者』だというなら、あり得んことでもないかもな。わかった！！ 任せる！！ 失敗したら、村長に弁償してもらおうことにしよう。」

「えっ!?!」

ジェラルドさんはかなり驚いて、クラッドのおっさんの方を見ている。

『これは失敗できませんね、マスター』

まあ弁償云々は冗談だろうが……

そうだな。一宿一飯の恩とも言っし、恩を仇で返す訳にはいかな  
いからな

「それじゃあ、始めます」

インベントリから『刻印道具』（彫刻刀に良く似ている、ちなみに『オリハルコン結晶』製）を取り出し、【自動刻印】を起動し炉の側面に『強化』の紋章を刻んでいく。

余所見をしても失敗などしないが、ジェラルドさんがかなり心配そうにこちらを見ているので、一応真剣そつな顔をしておく。

「終わりました。成功です」

「「おおー!!」「」

驚きすぎだろう、2人とも。



ジェラルドさんは安心したのか、胸を撫で下ろしている。（そんなに心配だったのか……）

「これで炉が強化されたので、今以上に火力を上げても大丈夫です」  
「これで鞘が作れるはずだ。」

「それではこれから、鞘を作りたいので炉をお借りします」  
「あ、ああ。好きなだけ使ってくれ」

取り敢えず、炉に『オリハルコン』と『ルナライトミスリル』を  
放り込む。

今から作るのは『オリハルコン』と『ルナライトミスリル』の合  
金だ。

この合金は『精神感応』の性能がある。

この合金を元に鞘を作り、『形態変化』の魔導紋章を刻めば、ラ  
グの形態変化に応じて鞘の形態も変化するはずだ。

これが俺とラグが相談して出した結論だ。

俺は『形態変化』の紋章を知らなかったが、ラグによれば俺なら  
何とかなるそうだ。

ちなみに、『形態変化』の紋章はラグに刻まれているラインのい  
くつかが紋章になっているそうだ。

そんなことを考えている内に合金が出来上がった。

「次は……」

インベントリから『鍛冶道具一式』のハンマーと金床（両方とも  
『オリハルコン結晶』製）を取り出す。

出来上がった合金を金床の上に置き、ハンマーで叩いていく。

【鍛冶】スキルでは作りたい物を選び、一定回数ハンマーで金属

を叩くと出来上がりだ。

当然、熟練度が低ければ失敗するが、マスターしている俺には関係ない。

何回か（恐らく30回くらい）ハンマーで叩くと鞘が出来上がった。

【刻印】は後からだ。

ついでに鎧と外套の補強パーツ、そして魔導銃の銃身を作ろう。好きなだけ炉を使っても良いと言われたしな。

鎧と補強パーツは、『オリハルコン』と『アダマントタイト』の合金で作っていく。

この合金はただひたすら硬く、頑丈だ。

鎧は軽装鎧のタイプで胸と腹、背中を守るだけの簡単な形状だ。

俺は動きを阻害されるのが嫌なので、これにしている。

補強パーツは、肩と肘の部分を補強するために作った。

そして、魔導銃の銃身は『オリハルコン結晶』と『セイクリッドミスリル』の合金で作る。

この合金は魔力との相性が凄まじく良いので、魔導銃にするにはピッタリだ。

銃身は2丁分作る。

当然このままでは使えず、さらに作業が必要だがここではできない。

帰ってからソファアラさんの工房を借りよう。

「終わった……取り敢えず、ここでできる作業はこれで全部だな」

【刻印】はここでもできるが、帰ってからで良いだろう。

「小僧は『マスタースミス』だったのか……？」

恐らくは、【鍛冶】をマスターしている者のことだろう。

「まあそうなりますね」

「何てこった……」

そういえば

「ジェラルドさんは、何処に行ったんです？」

作業に集中していて、出ていったのに気がつかなかった。

「あ、ああ。途中で、仕事があるからと言って帰ったよ。残りたそうにしていたがな……」

結構時間が経っていた。

もう夕暮れだ……

『集中すると周りが見えなくなるのは、マスターの悪い癖ですね』  
わかつてはいるんだが、中々直らないんだよ……  
「それじゃあ、俺も失礼します。鍛冶場を貸していただいて、ありがとうございました」

俺は作った物や余った素材をインベントリに放り込んで、帰る準備をした。

「いや、こっちこそ炉のこと、ありがとう」

「いえ、俺も必要でしたし、気にしないで下さい。それじゃあ、失礼します」

俺が店から出ようとしたら、見送ってくれていたクラッドのおっさんが

「ま、待ってくれ。俺を弟子にしてくれないか？」

な、何だと!?

「……………すみませんが、お断りします」

「な、何故だ？」

「クラッドさんは、俺が『来訪者』だと知っているはずですよ。いつまでもこの村にはいられないのです」

「…そうか、すまない」

「いえ、これからも精進して行って下さい」

そう言っつて、俺はジェラルド邸へと帰路についた。

そして俺はジェラルド邸へと帰り、夕食をご馳走になった。

その後、ソファアラさんに工房を借りて【加工】スキルを使い、『精霊結晶』を詰め込み魔導銃を仕上げる。

そして鞘と鎧、補助パーツにそれぞれ紋章を刻み、これらも仕上げていった。

それと細々とした装備品も作り、明日に備え眠ることにした。

「良い人達だったな」

『そうですね……………もう少しここに居たくなりましたか？』

「いや、俺たちには目的がある。そうゆっくりとは、していられないさ」

『またいつかこの村に来ましょう、マスター』

「ああ、邪神龍さえ滅ぼせば、時間はいくらでもあるぞ」

夕食の時にジェラルドさん達には、明日村を出ることを伝えてある。

リリアがまた泣きそうになっていたが、ソファアラさんが慰めてくれていた。

「明日は早い、もう寝よう」

これ以上起きていると、ここに残る理由を考えてしまいそうだ。

『……おやすみなさい、マスター』

おやすみ、ラグ

#### 第4話 『桜花』、そして『炎竜の迷宮』へ

『おはようございます、マスター』

「おはよう、ラグ」

『準備はお済みですか?』

「ああ、できてるよ」

俺はもう一度ざっと装備を確認した。

前に作ったシャツとズボンを着て、シャツの上から昨日作った鎧を着け、その上に外套を羽織っている。

さらにラグを納めた鞘は、腰に吊るすと地面に擦るので背中に背負っている。

ラグの鞘は、ラグと同じような少し青みがあった白銀の金属製だ。剣を抜く時は流石の上に抜くのはキツイので、少し力を入れて横にスライドさせれば抜くことのできる構造になっている。

ちなみ、納める時は上からでも横からでも納めることができる。

腰の後ろには2丁の魔導銃を留め具で留めている。

この魔導銃は以前『VLO』で使っていた物より、遥かに強力な物になっている。

そして、ズボンのベルトの右側にはスロージングダガーのホルダーを、左側には多目的ナイフ（カテゴリーの【短剣<sup>ナイフ</sup>】とは違うもの）のホルダーを着けている。

「特に問題ないな」

そう言いながら、俺は剣の滑り止めの目的で着けている指貫きのレザーグローブを、ギュっとした。

「じゃあ、行くか」

あまりジェラルドさん達を待たせる訳にもいかない。

村の出口までジェラルドさん達が見送ってくれていた。  
クラッドのおっさんまで来ている。

「はい、これ。お昼に食べてね」

ソファラさんがサンドイッチをくれた。

「ありがとうございます」

「デイン君、くれぐれも無理はしないで下さい」

「いつでも帰ってきて下さいね、デインさん」

「死ぬんじゃないぞ、小僧」

リリアの目が潤んでいたので、頭をポンポンと撫でてやりながら

「必ず、また来ます」

と俺は言った。

『マスター、そろそろ………』  
そうだな

「それじゃあ、俺はそろそろ行きます。お世話になりました」

そう言って、俺は踵を返して村の外に歩き出した。

「それでラグ、次は『桜花』だったな？」

俺は歩きながらラグに尋ねた。

『はい。マスターのギルド登録のために、『桜花』に行きましょう。『迷宮』にも近いですしね』

『桜花』はこの国『桜花』の首都だ。(ややこしいな……)  
冒険者ギルドはそれなりの規模の街にはあるが(ウィプル村には無かった)、ギルド登録はその国の首都にあるギルド本部でしかできない。

「『桜花』にはどのくらいで着きそうだ？」

『マスターなら全力を出して走れば、30分くらいで到着しますよ？』

「できるか！！ そんなことをしたら、衝撃波で周りが滅茶苦茶になるだろう」

【加速】の限界倍速の10倍速で走れば早く到着はできるだろうが、発生する衝撃波で周りは滅茶苦茶になる。

それに人がいたら洒落にならない。

戦闘ではそれを利用することもあるが……

「そうじゃなくて、普通に歩けばってことだ」

『そうですね…… 昼過ぎには着くでしょう』

「そうか」

それにしても、お約束だところというのは、隣に可愛い女の子がい



るはずなんだがな……

『……リリアを連れて来れば良かったのでは？』

「そんなことしたら、ジェラルドさんと、何よりソファラさんに殺されるよ……っていつか冗談だよ。流石にまだ他人の命を預かる気はしないよ」

『そうですか………』

そんなことを話しながら、俺たちは『桜花』への道を歩いていった……

「で、あれは何だ？」

まだ距離はかなりあるが、2mはあるでかい蛾がこちらに向かって飛んでくる。

【遠見】のE×スキル【鷹の目】ホークアイを起動しつつ、ラグに尋ねた。

『キングモスですね。マスターも知っているはずですが』

やっぱりな。

そうだとは思ったが、一応確認しておいた。

『キングモス』は見た目はでかい蛾で、撒き散らす鱗紛には色々な毒を含んでいる厄介な魔獣だ。

「でも、こんなところにいる奴じゃなかったと思うが……」

『確かに珍しいですね……』『アーリグリフ』から飛んできたのでしようか？』

『アーリグリフ』は『魔族』の国で、この国の南東にある国だ。

「そうかもな。だが、どうする？ 放っておいて良いもんじゃないだろ？」

『そうですね。『キングモス』は比較的強力な部類の魔獣ですので、余計な被害をもたらす前に、ここで始末してしましましょう』

「そうだな。あの見た目じゃ、罪悪感も感じないしな」

動物型の魔獣よりは抵抗も少ない。（何といても所詮虫だ）

それにあいつの進行方向の先には『ウィプル村』がある。

放っておく訳にはいかない。

「ラグ、【狙撃形態】になってくれ」

『了解しました、マスター』

【狙撃形態】は、ラグを『対物魔導狙撃銃』の形状に変化させるためのものだ。

ラグが光の粒子に変化し、目の前に集まってくる。

そして、2秒ほどして1丁の長大な魔導狙撃銃が俺の両手の中にあつた。

全長は1.5mほどで、白銀に輝いている。

「流石に他の形態に比べると、時間がかかるな」

『はい。どうしても『魔導銃』のような、複雑な機構の物は時間がかかってしまうのです……申し訳ありません……』

「別に責めてはいないさ。それにこんな物、通常の戦闘では滅多に使わないしな。気にするな」

俺はそう言いながら、【鷹の目<sup>ホークアイ</sup>】を停止し魔導狙撃銃のスコープを覗き込む。

発射時の反動はほとんどないので、立ったままだ。

「サポートは任せたぞ、ラグ」

『わかりました。お任せ下さい、マスター』

本来は風向きなどを計算しなければならないが、その辺りのことはラグに任せる。

『弾種はどうされますか、マスター？』

「『貫通弾』だ」

魔導狙撃銃では『通常弾』、『炸裂弾』、そして『貫通弾』の3種類の弾丸を撃ち分けることができる。

『貫通弾』は『通常弾』よりさらに貫通力を増した、ニードル状の弾丸を放つことができる。

その貫通力はほとんどの防具や、『魔導盾』の障壁を無力化する。しかしその反面、1発撃つごとに20秒の『待ち時間』があり、連射はできない。

しかも、『対物魔導狙撃銃』では最低でも魔力(MP)を3000も込めなくてはいけない。(『魔導狙撃銃』は2000)

俺でも10発撃てば魔力(MP)は空っぽになる。(まあ、『待ち時間』の間にくらかは回復するが……)

そして、魔導狙撃銃に魔力を込める。

普通は銃身に埋め込まれた『精霊結晶』に込めるのだが、この魔導狙撃銃はラグの宝玉がその役割をしている。

魔力は念のため、4000ほど込める。

スコープの中の視界はラグが解析した情報が反映されている。

俺は息を止め、手の震えが収まった瞬間に引き金を引いた。

『トッ……』

次の瞬間、発射音とともに弾丸が射出され、『キングモス』が下にある森の中へ墜落していく。

「よし！！ 命中したみたいだな」

俺は【魔導狙撃銃】もマスターしているが、それでも外れる時は外れる。

『落下地点に行ってみましょう、マスター』

「そうだな」

事前に周りに人がいないことは確認しているので（色々見られると面倒だからだ）、誰かの上に落ちたということはないが、『キングモス』の生死は確認しておかなければならない。

俺はラグを【通常形態】に戻しつつ、落下地点に向かって歩き出した。

森の中をしばらく歩いた所で、『キングモス』を発見した。

『キングモス』はまだ死んでいなかったが、ピクピクしているだけなので時間の問題だろう。

「相変わらず、昆虫系はしぶといな……」

頭の中から胴体の半ばまで貫かれているのに生きているのが、その証拠だ。

『マスター、とどめを刺しますか？』

「うーん、その内死ぬだろう。放っておこう」

たかが虫といえど、流石にそれは可哀相な気がした。（それに面倒臭いし）

『そうですか。それと気づいているとは思いますが、この世界では魔獣を倒してもドロップアイテムなどはありません』

「そうだろうな。あの狼を殺した後、インベントリを見たがそれらしい物は何も無かったからな」

『この世界では魔獣を殺した後、素材などを得るためには、魔獣から直接剥ぎ取らなければなりません』

爪や角などはまだ良いが、毛皮を剥ぎ取るところを想像すると流石にエグイな……

しかし、そうしなければ素材が手に入らないのならば仕方がない。確か『キングモス』の素材になる箇所は、『羽』だったはずだ。

『キングモスの羽』から採れる『鱗紛』は、各種解毒剤の調合

【錬金】を用いて薬を作ること に必要な素材の1つだ。

「じゃあ、『羽』を貰っていくか」

『マスター、ついでに『触角』もお願いします。『キングモス』の討伐証明部位』になっていますので。もしかすれば、『桜花』のギルドに討伐依頼が出ているかもしれません』

「そういうことなら触角も取るか。依頼が出てれば、報酬を貰えるかもしれないし」

そうやって俺はラグを鞘から抜きつつ、『キングモス』に近づいていった。

すると

『……マスター、何をしていますか……？』

とラグが意味のわからないことを言った。

「いや、何って……羽と触角を切り取るうとしているんだが」

『なら、何故私を鞘から抜くのですか？ マスターの腰にナイフがあるじゃないですか。そちらを使って下さい』

「嫌だよ！！ このナイフは果物の皮を剥いたりするための物だ。剥ぎ取りになんか使えるか」

『私だって、こんな雑用をするための物ではないのです』

「……わかったよ。ナイフでやるよ。意外と我が儘だな……」

『我が儘ではないのです。プライドの問題です』

「わかった、わかったから……」

『桜花』に着いたら、もう1本ナイフを買おう……

そう心に決めてラグを鞘に納め、代わりに多目的ナイフを引き抜き、ため息を吐きながら剥ぎ取りを始めた……

「おっ、見えてきたな」

『キングモス』の剥ぎ取りを終えた後、昼食を食べ、しばらく歩くと『桜花』が見えてきた。

ちなみに、『キングモス』の素材はインベントリに入れてある。

『予定よりは少し遅れましたが、夕方までには到着できそうですね』

『キングモス』との戦闘などがあったので、その分遅れたが問題はなさそうだ。

俺は気になっていたことをラグに尋ねてみた。

「なあラグ、やっぱり『桜花』には『アレ』があるのか？」

「あれ…？ ああ、『アレ』ですか。当然ありますよ。『桜花』の由来ですし」

「あるのか…！ それは楽しみだ」

俺は少し歩くスピードを速めながら、『桜花』に向かって進んでいった……

「やっぱり、いつ見ても壮観だなあ」

俺は、『桜花』の街並みを眺めながら感嘆した。

その理由は『桜花』の名にあるように、街中の至る所に桜の木が植えてあるのだ。

しかもこの桜、どういう原理かわからないが常に満開だ。

これだけでも充分美しい光景だが、俺が感嘆した最大の理由は桜の花弁の色だ。

ここの桜の花弁は普通のピンク色だけではなく、実に様々な色がある。

しかしその色が原色なら、とても見れたものではないが、その花弁の色は淡いパステルカラーなので長時間見ても目は疲れのない。様々な色の花弁が宙を舞う光景は、一見の価値がある美しいものだ。

『VLO』でも、多くのプレイヤーがこの光景を一目見ようと訪れていたものだ。

「何度見ても美しい光景だ……」

俺が桜に見惚れていると……

『マスター、そろそろギルドに行きましょう』

ラグに注意された……

風情のわからない奴だな……

ここにはもう周りに人がいるので怪しまれないように、心の中で  
呟いた。

『私でも風情くらいわかります。ここはいつ来ても満開でしょう。  
それよりもギルドに行くのが先です』

それはそうなんだがな……

まあ、仕方がない。

ラグの言う通りなので、ギルドに行くでしょう。

じゃあ、行くか

『はい、行きましょう。ギルドは街の中心部にあります』

それから、俺たちは街の中心部に向かって歩いていった。

街並みを眺めながら、しばらく歩いていると冒険者ギルドが見え  
てきた。

冒険者ギルドの建物は本部だからかなのか、2階建ての結構大き  
な建物だ。

表には冒険者ギルドを表す、2本の剣が交差したデザインの看板  
がある。

デザインは『VLO』と同じだなあと思いながらドアを開け、建



物の中に入っていく。

中には冒険者らしき多くの人が出て、一瞬注目されたが視線はすぐに外れていく。

『登録を済ませてしまいましたよ、マスター』

そうだな。登録受付は……あそこか

いくつか並んでいる受付の中から、登録受付を探し出す。

受付の上に大きく『登録』と書かれているし、他の受付に比べ人が少ないので、すぐにわかった。

ちなみに、文字は見たことのない物だったが、何故か理解できた。まあ、あいつ（ディオス）のおかげ（？）だ。

登録をするために列に並ぶ。

ラグ、登録をする際に何か注意することはあるか？

『文字も読めますし、書けますので特にないでしょう。あつ、名前は『デーン』でお願いします。出身地は書かなくても良いので、空欄で大丈夫です』

出身地を書かなくても良いのは助かる。

何て書けば良いか、わからない。

いざとなれば、『ウィプル村』と書くことか思っていたのだ。

「次の方どうぞ。お待たせしました」

ラグと話している内に俺の番が来たようだ。

「ギルド登録をお願いします」

受付は『人族』の女性で可愛い感じのお姉さんだ。

「それでは、こちらの用紙に記入をお願いします。出身地は空欄でも結構ですが、他の項目は後々虚偽だと判明した場合は罰せられる可能性ありますので、気をつけて下さい。文字は書けますか？もし書けないようでしたら代筆致します」

「わかりました。文字は書けますので、用紙をお願いします」

用紙をもらった俺は名前を始め、種族などの項目を埋めていく。書き終わったので、受付のお姉さんに用紙を返す。

「もう一度確認しておきますが、虚偽はありませんね？」

「ありません」

実際に嘘は書いていないので、そう答える。

「わかりました。それではこの『精霊結晶』に血液を1滴で良いので垂らして下さい。それであなた専用のギルドカードが出来上がります」

「わかりました」

俺は腰のスローイングダガーを引き抜き、左手の人差し指を少し切り、血を1滴『精霊結晶』に垂らした。(ナイフを使うのは少し気が引けた……)

「ありがとうございます。こちらの布をお使い下さい」

「構いませんよ。このくらい、すぐ治ります」

「わかりました。それではギルドカードを作りますので、あちらで少々お待ち下さい」

そう言ってお姉さんは椅子の並んでいる方を示し、俺の記入した

用紙と『精霊結晶』を別のギルド職員に渡した。

「わかりました」

俺はお姉さんに言われた方に行き、椅子に座ろうとしたが

『マスター、その前に『キングモス』の討伐依頼が出ているか、確認しておきませんか？』

それもそうだな、ただ待つのも退屈だし

依頼が貼り出されているボードの前にやって来た。

色々な依頼があるな

『VLO』にも色々なクエストがあったが、これは同じくらいに多い。

討伐依頼を始め、採取依頼、護衛依頼と色々ある。

そんな多数ある依頼の中から、『キングモス』の討伐依頼を探していく。

うーん、無いなあ

討伐依頼が貼り出されている箇所を見ていくが、『キングモス』の討伐依頼は出ていない。

『出ていないものは、仕方ありませんね。素材はギルドでも買い取ってもらえるので、後で買い取ってもらいましょう』

そうだな。俺に解毒剤は必要ないし、このままじゃ宿屋に泊る金も無いしな

こちらに来る前に金は、デスペナでほとんど失っている。

『私は野宿でも構いませんけどね』  
俺が嫌だ

どうしようもない場合は野宿もするが、なるべくならベッドで寝たい。

『まあ素材を買い取ってもらえれば、宿屋に泊るお金くらいにはなるでしょう』

そう願うよ

「デーン様。カードが出来上がりましたので、受付までお越し下さい」

依頼を見たり、ラグと話している間にカードが出来たようだ。

カードを受け取るために、再び登録受付に行く。

「お待たせしました。こちらが、あなた専用のギルドカードになります。依頼を受ける時や報告時、ランクアップ時に必要になりますので、失くさないようにして下さい。紛失された場合はどのような理由でも、再発行時には20000ティルを頂きます。これについては、異議申し立ては受け付けませんのでご了承ください」  
「わかりました」

まあインベントリに入れておけば、失くすことも盗まれることもないだろう。

「ランクアップについての説明は必要ですか？」  
ラグ、ランクアップは『VLO』と同じか？

『はい、同じです。他のことも大体は同じです』

「大丈夫です。知ってますから」

「そうですか。他に質問はございますか？」

全部知っているが、それも少し変に思われるかもしれないので、少し質問しておく。

「依頼は、自分のランクより2つ上のランクまで受けられるはずでしたよね？」

「はい、その通りです。ただし、失敗した場合は違約金が発生します。さらに、依頼のランクに関わらず3回失敗されますと冒険者資格を剥奪され、その後2年間はギルド登録はできませんので、お気をつけください」

「わかりました。気をつけます」

「デイン様は登録したばかりですのでランクは『C・（Cマイナス）』となり、受けることができる依頼はランク『C+（Cプラス）』までとなりますので、宜しくお願いします。他には何かありますか？」

「もう大丈夫です。あっ、後、素材を買い取ってもらいたいのですが、何処に行けば良いですか？」

『キングモス』の素材を買い取ってもらいたいので、買い取りをしている場所を聞いておく。

「素材をお持ちなのですか？ わかりました。あちらの買い取り受付に行き、職員の指示に従って下さい」

「わかりました。ありがとうございます」

俺はお姉さんに言われたように、買い取り受付に行った。

俺がギルドに来た時はかなりの人が並んでいたが、今はほとんど

いない。

「買い取り受付にいたのは、眼鏡をかけたかなり美人の『ダークエルフ』のお姉さんだった……」

「少し性格はキツそうだが、かなりの美人だ……」

「……何故、2回言ったのですか？」

ラグの声で正気に戻った。

「見惚れてしまっていたようだ……」

「それにしても綺麗な女性だ……」

「しっかりとして下さい、マスター……！」

「い、いかん、また見惚れてしまっていた。」

「本当にしっかりとして下さい……！」

「そ、素材を買い取ってもらいたいのですが……」

「少しもってしまった。」

「わかりました。では、こちらにどうぞ」

『ダークエルフ』のお姉さんは特に気にした様子もなく、俺を近くにある部屋に案内した。

「部屋に入るとお姉さんがマスクを着けて」

「それでは、素材を出していただけますか？」

と言った。

マスクを着けたのは、素材の中にはこの『キングモスの羽』のよ

うに毒を持つ物もあるからだろう。

まあ、俺には関係ないが。

「はい。これです」

俺はインベントリから『キングモスの羽』を取り出し、台の上に置いた。

「ッ!? 『キングモスの羽』ですか……これを何処で?」

「……? 『桜花』に来る途中に見かけたので始末したんですが……何かまずかったですか……?」

「いえ、そういう訳ではないのですが……ディーン様は、先程登録をされたばかりですよ。『キングモス』は、成り立ての冒険者が勝てる魔獣ではないので……ディーン様は、何処かで戦闘訓練を受けたことがあるのですか?」

どうする、ラグ? 『来訪者』だと言ってしまったても良いのか? 『微妙なところですね……適当にはぐらかしても構わないですが、ギルドに不信感を持たれると後々各国を旅するのに不都合があります。かと言って『来訪者』だと明かしてしまうと、色々面倒なことになるかもしれません』

「そういえば、さっき『キングモスの羽』を出した時も……」

俺がラグと話している間に、お姉さんは一人で呟きながら何やら考えている……

本当にどうする? このお姉さん、自力で俺が『来訪者』ということに辿り着きそうなんだけど……

『マスターにお任せします……』

おいっ、そんなこと言うなよ。一緒に考えてくれよ

『……………』

無視するな!!

「デーン様、少しこちらでお待ちいただけますか？」

「はい……」

そう言って、お姉さんは部屋から出て行った。

何かもう色々バレてるみたいだ……

それからしばらく部屋で待っていると、お姉さんが戻ってきた。

「ギルドマスターがお呼びですので、一緒に来ていただけますか。

『キングモスの羽』はそのまま置いてもらって構いません。

それと討伐証明部位の『触角』もお持ちでしたら、置いていって下さい。一緒に鑑定しますので

「わかりました」

俺はインベントリから触角を取り出し、『キングモスの羽』の隣に置いた。

「……やはりそれは『インベントリ』なのですね？」

「はい、そうです」

もう俺が『来訪者』とバレている様子なので、言ってしまったても良いだろう。

「そうですか……それでは行きましょう。」

お姉さんは部屋から出ると、別の職員に鑑定を頼み2階へと続く階段の方へ歩いていった。



俺はお姉さんについて行きつつ

ラグ、さっきバレると面倒なことになるって言ったよな？ あれはどういうことだ？

とラグに尋ねた。

『以前にも言いましたが『来訪者』たちは皆、この世界の人間に比べ強大な力を持っていました。なので、色々と厄介な依頼をされる可能性があります。全員が悪意を持っている訳ではないですが、注意はしておいた方が良いでしょう』  
そういうことか。精々気をつけるとしよう

ここまで来たら、誤魔化すのはもう無理だ。

「ここがギルドマスターのお部屋です。ギルドマスターは中でお待ちなので、入って下さい」

ラグと話している間に着いたらしい。

「わかりました」

お姉さんの後に続いて部屋に入る。

部屋の中には、『亜人族』の内の『獣人族』の1種族『獅子族』の老人がいた。

『獅子族』の外見的特徴である、鬚たてがみのような髪が真っ白なので間違いないだろう。

しかし、衰えた感じはまるでなく、気押されそうな威圧感だ。

じーさんや高弟の人達と同じ気配がする。

正直、勝てる気がしない。

「お主がディーンか？」

「はい、そうです」

「僕は『アドル』。このギルドのギルドマスターじゃ。お主のことは『ロゼ』から聞いておるが、『来訪者』というのは真まじか？」

『ロゼ』というのは『ダークエルフ』のお姉さんのことか。

「はい。本当のことです。俺は確かに『来訪者』です」

「……そうか。話を聞かせてもらっても良いかの？」

「わかりました」

そして俺はジェラルドさんに話したように、これまでのことを『VLO』のことに触れずに話していった。

「うむ。そういうことか。そうすると、お主が背負っておるその剣が『ラグナレク』か？ 見せてもらっても良いかの？」

「はい、構いませんよ」

そう言って、俺はラグを抜いて目の前のテーブルに置いた。

「うむ。言い伝えの通りじゃの。もう仕舞っても構わんぞ」

俺はラグを鞘に納めつつ

「それで俺はどうなるんですか？」

とアドルさんに尋ねた。

「そう身構えんでも良いぞ？ 心配せずとも、別に取って喰おうという訳ではない」

「それはそうでしょうけど……」

あんたが言うのと洒落になってない……

なにせ獅子、ライオンの獣人だ……

「ただお主には、いくつか頼みことをしたいんじゃない。報酬もちゃんと用意しよう。どうじゃ？ 決して悪いようにはせんぞ？」

「頼みを、依頼を受けるのは別に構いません。俺にできることならやりましょう。しかし、俺にはやらなければならぬことがあります。ご存知だとは思いますが……」

「わかっておる。お主のやることを邪魔しようとは思わん。当然じやろ？ お主はこの世界を救おうとしておるのじゃから。しかし、邪神龍の封印が解けてきておるからなのか、このところ各国で色々厄介なことが起こっておるようじゃ。この『桜花』でも色々起こっておる。お主が討伐した『キングモス』のことも、その一つじや」

本当なのか、ラゲ？

『はい。確かにこのところ、おかしなことが各地で起こっているようです。恐らく、結界から漏れ出す邪神龍の邪気や瘴気が原因でしょう』

「そういつことでしたか。でも、今すぐには無理です」

明日か明後日にも、迷宮に行く予定なのだ。

「それもわかっておるよ。こちらも調査に、まだしばらく時間がかかる。早くとも1ヶ月ほどはかかるじやろ？」

俺も『火の精霊王』に会うには、それくらいはかかるはずだ。

「俺の方も、それくらいかかります。その頃に、またここに来るよ  
うにしましょう」

「うむ。それで構わんよ。後はお主のランクじゃが、流石にC・  
C(マイナス)では何かと不便じゃろう。言い伝えでは過去2人の『  
ラグナレク』の『マスター』は、最高ランクのSSダブルエスだったそうじゃ。  
お主もそれで良いかの？」

「おいおい……」

確かに俺は『VLO』ではSSダブルエスだったが、そんな簡単に……

「いや、それは嬉しいのですが……俺はあまり目立ちたくないの  
です」

「大丈夫じゃ。その辺りのことは、こちらに任せておくんじゃ。お  
主がカードを見せびらかせたりしない限り、目立つことはないじゃ  
ろ。お主との窓口も、そのロゼに専任しよう」

「ですが……」

「この世界の住人である儂らには、これくらいのことしかしてやれ  
んのじゃ。どうか受け取ってくれんかの？」

「……わかりました」

俺はアドルさんの提案を受けることにした。

確かにSSダブルエスになれば様々な優遇を受けることができるし、助かる  
ことには違いない。

「それではお手数ですが、ギルドカードをお渡しいただけますか？」  
「わかりました」

俺はインベントリからカードを出し、ロゼさんに渡す。

「それでは少々お待ち下さい」

そう言ってロゼさんは部屋から出ていった。

「それで、お主はこれからどうするんじゃない？ 何処かの迷宮に行くんかの？」

「はい。取り敢えず『火の精霊王』に会おうと」

そうして俺とアドルさんは、俺の今後の予定やそれに関するアドルさんのアドバイス、そしてアドルさんの冒険者時代の話を、ロゼさんが戻ってくるまでしていた。

戻ってきたロゼさんから、ランク表記がSSダブルエスに変わったギルドカードと『キングモス』の討伐報酬などを受け取り、俺はギルドを後にした。

「ここが……」

『そのようですね』

俺たちはアドルさんに紹介された宿屋、『ソルンの導き亭』の前に来ていた。

でかくて高そうな宿屋だったら、どうしようかと思っただが意外と普通だな

『キングモス』の討伐報酬などで60000ティルを貰ったが、ある程度は残しておきたい。

宿屋に来る途中で、ナイフとラグや他の武器を手入れするための布を買ったので、もうそれほど残ってはいないが……

『そうですね。それほど大きくはありませんが、良く手入れがされていますね』

そんなことをラグと話しながら宿屋の中に入った。

宿屋の入口近くにあるカウンターに『人族』のおばちゃんがいた。

「いらつしゃい。1人かい？」

「はい。泊まりたいのですが……」

「食事はどうするんだい？」

「食事付きなら、いくらになりますか？」

「1泊2食付きで6000ティルだよ。食事無しなら5000ティルだけど、後で食堂で食べるなら1食700ティルになるよ」

妥当な値段だな。

「夕食と明日の朝食をお願いしたいのですが、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。それじゃあ、食事付きにするかい？」

「はい。それをお願いします」

「前払いで6000ティルになるけど、良いかい？」

俺は6000ティルを取り出し、カウンターに置いた。

「これで良いですか？」

「ちょうどあるね。それじゃあ、205号室でこれが鍵だよ。夕食が出来たら部屋まで呼びに行くけど、これから出掛ける予定はあるかい？」

「いえ、部屋にいますよ。じゃあ、お世話になります」

そう言って俺は鍵をもらい、部屋へ歩いていった。

しばらく部屋でゆっくりと寛いでいると、カウンターにいたおばちゃんが呼びに来た。

「夕食が出来たから、食堂まで来ておくれ」

「わかりました」

そうおばちゃんに応え、俺は食堂に行き夕食を食べた。

値段の割には量もあり、とても美味かった。

アドルさんには感謝しないとな。

そんなことを考えつつ、明日は迷宮に行くので早めに休むことにした。

俺は食堂でパンとスープ、サラダにハムエッグといった朝食を食べ、一度部屋に戻り装備を整えてから宿屋を出ることにした。

「お世話になりました。食事、美味しかったです」

「その格好からして冒険者だろうけど、無理をして死ぬんじゃないよ」

「わかりました。またこの街に来ることがあったら、お世話になります」

「ああ、気をつけて行ってくるんだよ」

そして俺は宿屋を出て、食糧を買ったために朝市をやっている市場へと行った。

「取り敢えず、買えるだけの食料を買っておくか」

インベントリに入れておけば、賞味期限などを気にする必要もな

い。

俺は取り敢えず肉類、野菜、果物、パンを買えるだけ買った。

パンも嫌いじゃないが、米が食べたくなくなるな

和食も食べたいし。

『和食はありませんが、米に似た物なら大陸の南に位置する『妖精族』の国『ティルナノグ』にありますよ』

本当か！？ それは楽しみだ

『その内、行かなければならないのです。今は、目の前のことに集中して下さい』

わかってるさ

ラグとそんなことを話しつつ買い物を済ませ、迷宮に行くために街を出る。

それでまずどっちの迷宮に行くんだ、ラグ？

『どちらでも構わないと思いますよ。マスターにお任せます』

『火の精霊王』に会うためには、まず守護者である『フレイムドラゴン』と『炎皇狼』の試練を受け、認められて『証』を貰わなければならぬ。

そのどちらから先に会いに行くかを、話しているのである。

うーん、『フレイムドラゴン』だな

『アイギス』ならブレスは100%カットできるので、『炎皇狼』よりは闘いやすいはずだ。



『それでは、まずは『炎竜の迷宮』ですね。『炎竜の迷宮』はここから南にあります』

どのくらいの距離だ？

『恐らく、今日中に到着するのは無理でしょう』

それじゃあ、途中に街か村はあるか？

『残念ながらありませんので、野宿ですね』

そうか……

野宿をしなければならぬことに少し肩を落として、『炎竜の迷宮』に向かって歩き出した。

今は森の中で野宿の準備をしていた。

道中、何度か狼型や鳥型の魔獣に襲われたが難なく撃退した。(狼型の魔獣の剥ぎ取りをした時は、吐きそうになったが……)

「ハア」

『……そんなに野宿が嫌なのですか？』

「嫌という訳じゃないが、気は乗らないな……」

『あまりお薦めはできませんが、野宿をしなくても済む方法がありますよ』

「本当か！？ 教えてくれ!!」

『以前に、インベントリと似た効果のある『時空属性魔術』の話をしたことがありますね。その魔術は異空間を創りだし、その中にアイテムなどを保管する魔術なのですが、それを使えばマスターならかなり大きな空間を創ることができるはずです』  
「そんな魔術があるんだな」

『VLO』にはそんな魔術は無かったはずだ。

「それで、その魔術を使えば野宿しないで済むんだな？」

『はい。ですが、今は使えませんよ』

「何でだ!？」

『それほどの規模の異空間を創造するのは、今のマスターではまだ無理です。少なくとも、『火の精霊王』と契約するまでは我慢して下さい』

「そ、そうか……」

それなら仕方がない。

少なくとも『火の精霊王』と契約すればできるようになるのだ、今は我慢しよう。

「それで、何でお薦めできないんだ？ かなり便利だと思うが……」

『異空間の中は時間の流れの速さは同じなのですが、光がありませんので時間感覚が狂うのです。たとえ魔術で光を作っても、それはあまり変わりません』

「それは中々厄介だな」

時間感覚や体内時計が狂えば、体調を崩したりすることもあるらしいしな。

『まあ長時間異空間に居続けなければ、そういうことにはならないでしょう』

「そうか。わかった。気をつけよう」

でも、今日は野宿ということだ……

あまり愚痴を言っても仕方ない。

準備を続けよう。

俺は鋼系を周りに張り巡らせ、魔獣対策の罫 魔獣が鋼系の領

域に入れば、問答無用で切り裂く にした。

「それじゃあ、寝るか」

明日はいよいよ迷宮だ。

「ここだな」

『はい。ここが『炎竜の迷宮』です』

俺の目の前には迷宮の入り口がある。

迷宮には4つの種類がある。

『迷宮型』<sup>ダンジョン</sup>、『迷路型』<sup>メイスイ</sup>、『塔型』<sup>タワー</sup>、『特殊型』<sup>アンノウン</sup>の4つだ。

この『炎竜の迷宮』は、『迷宮型』<sup>ダンジョン</sup>で地下に潜っていくタイプだ。

「それじゃあ、潜るか」

そう言っただ俺は迷宮へと入った。

『炎竜の迷宮』地下5階

「しつこいんだよ!!」

飛びかかってきた獅子型の魔獣『バウフアング』を、【通常形態】のラグで斬りながら叫んだ。

俺は今、『バウフアング』の群れを相手にしていた。

「どれだけいるんだよ、こいつら……」

すでに10匹は斬ってる。

横から突っ込んできた別の個体を鬨気を纏わせた蹴りで碎き、駆ける。

「ラグ、【大鎌形態】！！」

ラグを大鎌デスサイスに変化させ、群れの先頭の5匹を纏めて切り裂く。

そして右手で魔導銃を引き抜きながら魔力を込め、ショットシェル「散弾」を放ち後続の4匹を撃ち抜く。

「残り3匹！！」

その3匹が同時に飛びかかってきた。

「甘いんだよ！！」

俺は大鎌デスサイスのアーツスキル『アラウンドスライサー』で、体ごと回転させ周りを360°全てを切り裂く。

アーツスキルの黄色い閃光を纏った刃で飛びかかってきた3匹を両断し、戦闘が終了した。

「ふう〜、疲れた……」

『お疲れ様です、マスター。ツイてなかったですね』

そうなのだ。

この階までも魔獣には襲われたが、ここまでの群れはいなかった。

「それじゃあ、『精霊石』を拾うか」

「迷宫の中では、魔獣を倒しても死体は残らず、『精霊石』が残される。」

「実体のある幻影のようなものだ。」

ラグ曰く、神龍の力でそうなっているそうだ。（もはや、何でもありだな……）

辺りには20個近い『精霊石』が散らばっている。

『精霊石』はギルドで換金できるほか、【錬金】の素材になったり【加工】でアクセサリにしたりできる。

ちなみに、『精霊結晶』は純度の高い『精霊石』のことだ。

そうしている内に拾い終わったので、そろそろ先に進むことにしよう。

#### 『炎竜の迷宫』地下15階

「結構進んだな」

あれから『バウファング』や尾が火のような孔雀『ファイアテイル』、大蜥蜴のような『ガライゴン』などに襲われたが、特に負傷もせずここまで来た。

『そうですね。予定より早いペースです。ですが、そろそろ休める場所を探した方が良いでしょう』

「そうだな。そろそろ夕方だ。ところで、セーフルームってあるのか？」

『ありますよ。確かこの階にもあったはずですよ。探しましょう』

「わかった。行こう」

何故夕方かわかるかと言うと、ほとんどの迷宮は外と同じように、時間に合わせて明るさが変わるからだ。

これも神龍のおかげらしい……

それからしばらくウロウロしていると、セーフルームを見つけた。

「取り敢えず、飯だ。腹が減った……」

装備を解除するのもそこそこ 鎧と魔導銃を外しただけに、俺は夕食の準備を始めた。

インベントリから、『調理道具一式』を取り出す。

『調理道具一式』は携帯コンロのような物に（燃料は『精霊石』）、鍋やフライパンなどだ。

俺は一緒に取り出した肉や野菜などの食材をナイフ（食材用）で適当に切り、鍋に放り込む。

そして『水属性魔術』で鍋に水を満たし、買っておいした調味料も入れ、コンロの火を着ける。

俺は【料理】スキルの熟練度はそんなに高くないので、簡単な物しか作れない。

出来上がったスープとパンを食べ、ラグに尋ねた。

「ラグ、ここは本当に魔獣は入って来れないのか？」

『はい。それは確実です。ただし他の冒険者が入ってくることはあるので、注意は怠らないで下さい』

「わかった」

俺は使い終わった『調理道具一式』をインベントリに放り込み、替わりにシュラフを取り出した。

明日も迷宮の攻略だ。

早めに休もう。

取り敢えず、【気配察知】のアラームは自分の周囲半径10mに設定しておく。

外套なども脱ぎ、ラグは鞘ごと手の届く範囲に置いておく。

そしてシュラフに潜り込む。

「おやすみ、ラグ」

『おやすみなさい、マスター。ゆっくり休んで下さい』

こうして、俺の迷宮での1日目は終わった。

『炎竜の迷宮』地下20階

俺は朝から迷宮の攻略を進めていた。

確か『VLO』では、この階から出現する敵が変わったはずだ。

「どうなんだ、ラグ？」

『ええ、この階から魔獣はさらに強力になります。お気をつけ下さい』

「わかった」

そう言っただけで俺は、下の階に下りる為の階段を探し始めた。そうしていると

「おっ、トレジャーボックスだ。ラッキー」

迷宮の一室でトレジャーボックスを見つけた。

「久しぶりだな」

『そうですね。トレジャーボックスは、最初にいくつも見つけただけでしたしね』

しかも、その中身は多少のテイルと大したことのない装備品だ。

まあこの迷宮の難易度はそんなに高くはないので、仕方がないのかもしれないが……

『この世界でそんなことが言えるのは、マスターくらいですよ。この世界の冒険者たちにとっては、充分高難易度な迷宮です』

そんなラグの言葉を聞きながら、俺は【畏確認】を起動しトレジャーボックスを調べた。

「ん？ 畏があるな。解除するか」

【畏確認】を停止し、【畏解除】を起動し畏を解除する。

当然ながら【畏確認】も【畏解除】もマスターしているので失敗することはない。

畏が解除されたので、トレジャーボックスを開ける。

この瞬間はいつまで経ってもワクワクする。

「……………」

中身は10000テイルが入っていた。

ま、まあカラよりは良いでしょう。

俺は気を取り直して迷宮の攻略を再開した。

そして迷宮を進んでいると、少し先の曲がり角から『ギミックト



「チ」が現れた。

『ギミックトーチ』は迷宮で死んだ冒険者の魂が、ランタンに宿ったといわれる魔獣だ。(獣ではないが……)

見た目は宙に浮くでかいランタンだが、真ん中辺りが口のように裂けていて、舌のように炎がチラチラ漏れている。

咄嗟に左の魔導銃を引き抜き、魔弾を撃つたが避けられてしまった。

「チッ！！」

こいつは『火属性魔術』を使ってくる厄介な奴だ。

『ギミックトーチ』の周りに魔導紋章が浮かび、火属性上級魔術『フレイムランス』を放ってくる。

「当たるかつ」

こちらに向かって飛んできた炎の槍を、前に駆け出しつつ掻い潜る。

『ギミックトーチ』はさらに魔術を放とうとしているが、そんな暇は与えない。

紋章を浮かべながら距離を取ろうと、後ろに下がる『ギミックトーチ』に俺は【縮地】を起動し、瞬時に距離を詰め【通常形態】のラグを逆袈裟に振り抜いた。

その一撃で斜めに分断された『ギミックトーチ』が、溶けるようにして消えていく……

「やっぱり、魔術が使われると面倒だな」

先程のように単発ならどうとでもなるが、同じ『フレイムランス』でも10本、20本となれば一気に厳しくなる。

『そうですね。魔術を使う魔獣を優先して倒したり、『アイギス』で防ぎながら攻撃するしかないでしょうね』  
「そうだな。さっきみたいに不意討ちじゃなければ、どうとでもできるんだがなあ」

迷宮の中では、【気配察知】で敵の位置を知ることができない。

『この階からは魔術を使用する魔獣も増えますので、お気をつけ下さい』

「了解」

そんなことをラグと話しながら、迷宮を攻略していった。

『炎竜の迷宮』地下28階

「そろそろ夕方か？」

辺りが暗くなり始めている。

『そうですね。もう少しで陽も沈むでしょう。セーフルームを探しますか？』

できればキリの良い地下30階まで行っておきたかったが……

「そうだな。無理をしても仕方がない。セーフルームを探そう。それにしても、今日はあまり進めなかったな……」

『仕方ありませんよ。かなり大きな群れに遭遇してしまいましたからね』

途中までは順調に進んでいたのだが、この上の地下27階で巨大な群れに引っかけたのでしたのだ。

『バウフアング』の上位種『バウジーガ』や『ギミックトーチ』、『ゴブリン・マジシャン』、『ドウルガ』などの群れだった。

最初の内は20匹ぐらいだったが、何より厄介だったのが猿型の魔獣『ドウルガ』だ。

こいつはそれほど強くはない魔獣だが、ひたすら逃げ回り、さらに他の魔獣を呼び寄せるのだ。

一番に始末しようとしたが、部屋のあちこちに逃げ回り、追いかけていると『ギミックトーチ』や『ゴブリン・マジシャン』が魔術を使ってくるし、『バウジーガ』が飛びかかってくるので散々だった。

最終的には多少のダメージを覚悟して、グレートソード斬馬剣で邪魔な奴らを叩き斬り、逃げ回る『ドウルガ』に双銃の連射を浴びせ殲滅した。

結局50匹ほどの魔獣を相手にしたので、攻略が全然進まなかったのだ。

「今日は運が悪かったと諦めるか」

そうしてセーフルームを見つけ、昨日よりさらに適当な夕食を食べ、眠りに就いた。

「ふっ!!」

襲いかかってきた『バウジーガ』の最後の1匹を切り払い、『精霊石』を拾うために俺はラグを鞘に納めた。

「ふう〜。結構進んだな」

俺は昨日の遅れを取り戻すべく、早朝からトレジャーボックスを探索のもそこそこに、猛スピードで迷宮を進んでいた。

『まだ昼過ぎですからね。かなりのハイペースです。疲れはありませんか、マスター?』

「ああ、大丈夫だ。それに、今のところ大きな群れにも遭ってないしな」

幸いなことに今日は多くても5匹ほどの群れにしか遭っていない。ここまで早く来れたのも、そのおかげだろう。

「このペースで行けば、今日中に地下45階くらいには行けそうだな」

『……それは難しいかもしれません。地下40階からはさらに強力な魔獣が増えます』

「『VLO』ではそんなことはなかったが……。具体的にはどんな魔獣が出るんだ?」

『増えるのは1種類の魔獣だけで、『ファイアドラゴン』です』

「何!? 『ファイアドラゴン』!? そいつはこの最下層のボスだったぞ!! そんな奴がウロついているのか!!」

『あまり数は多くありませんので、運が良ければ遭わないでしょう。それに最下層にいるのはその上位種の『フレイムドラゴン』です』

「そ、そうか。『ファイアドラゴン』でも後れは取らないが、注意

しておかないとな。それに、明日中に最下層に到達したいから、できるだけ進んでおきたいしな」

そう言っただけ俺は少しでも先に進むべく、攻略を再開した。

### 『炎竜の迷宮』地下40階

「ここから『ファイアドラゴン』がいるんだな？」

『はい。くれぐれも注意して下さい』

早く先に進みたいが、なるべく慎重に行こう。

そうして曲がり角を鏡で確認しつつ進み、しばらくすると

「いたよ……『ファイアドラゴン』だ……」

曲がり角の先に『ファイアドラゴン』がいた。

しかも、他の魔獣も何匹かいる。

「こつちに向かって来ているから、殺<sup>や</sup>るしかないな……『ドウルガ』  
がないのが、せめてもの救いか」

体長1.5mくらいのドラゴンのような魔獣『メギドリザード』  
と『ゴブリン・マジシャン』が一緒にいるので、先に始末してしま  
いたい。

特に『ゴブリン・マジシャン』は魔術を使うので最優先だ。

先手を取るべく左の魔導銃に魔力を込め、曲がり角から飛び出した。

そして、向こうが反応する前に『ゴブリン・マジシャン』を全て撃ち貫く。

「よし……」

魔弾は狙い変わらず、全弾命中する。

先制は上手くいった。

【加速】を10倍速で起動し、魔導銃を腰に戻しつつ群れへと飛ぶように駆ける。

「ラグ、【二刀形態】……」

両手に刀があるのを感触で確かめつつ、近くの『メギドリザード』の首を右の刀で刎ねる。

すぐにその場を飛び離れつつ、次の『メギドリザード』の頭に左の刀を逆手に持ち突き刺す。

『ファイアドラゴン』のブレスと魔術の狙いを定めさせないように高速で動き回りながら、二刀で次々と『メギドリザード』を屠る。最後の『メギドリザード』を縦に両断した時

「マズッ……」

『ファイアドラゴン』の周りに20個程の『フレイムランス』の紋章が浮かんでいるのが見えた。

咄嗟に『アイギス』に魔力を込めつつ、横へ跳ぶ。

『ドドドドドドッ……』

炎の槍が掠めていく。

いくつかは当たったようだが、『アイギス』が全て防いでいた。

「こいつが無かったら死んでるな……ラグ、【グレートソード斬馬剣形態】」

二刀をグレートソード斬馬剣に変え、【縮地】で『ファイアドラゴン』の足元まで跳ぶ。

そして

「おらああ!!」

『ファイアドラゴン』の右の後ろ足を斬り飛ばす。

『GYA O O O!!』

「ぐわっ!!」

斬り飛ばした瞬間、尻尾で薙ぎ払われた。

吹き飛ばされたが、何とか空中で回転し着地する。

右足を斬り飛ばされた『ファイアドラゴン』が倒れているが、しぶとくブレスを吐こうとしている。

「これで!! 終わりだ!!」

その前に【縮地】で距離を詰め、真上から振り下ろすように首を叩き斬った。

「あゝ、疲れた。こんなのがまだ何匹もいるのか……洒落にならんぞ」

俺は乱れた息を整えつつ座り込み、自分にHP回復効果のある聖属性下級魔術『キュアライト』をかけた。

『お疲れ様です、マスター。『ファイアドラゴン』はそう何匹もは  
いませんよ。1階層に2匹いれば多い方でしょう』

「まだこの階に1匹いる可能性があるのか……」

まあ、文句を言っても仕方ない。

遭わないことを祈るだけだ。

『精霊石』を拾って、先に進もう。

「おつ、角が落ちてるぞ」

『精霊石』に混じって『ファイアドラゴンの角』が落ちていた。

しかも、『ファイアドラゴン』が落とした『精霊石』は『精霊結  
晶』だ。

『ああ、『神獣』クラスを倒すと『精霊結晶』とその神獣の素材を  
1つ、手に入れられるのです。素材の方は何を落とすかはわかりま  
せんが』

ランダムドロップかよ……

「それは少し『ファイアドラゴン』と闘うのが楽しみになったな」  
『現金な人ですね、マスターは……』

そんなことを言い合いながら『精霊石』を回収し、攻略に戻った。



「これで最後だな」

俺は『精霊石』を拾い終わり、そう呟いた。

『マスター、そろそろ夕方ですが、セーフルームを探しますか？』

確かに辺りが暗くなってきている。

「いや、今日はもう少し進んでおきたい。地下45階までは行っておこう」

明日最下層に辿り着くためには、できればそのくらいには行っておきたい。

それに『フレイムドラゴン』との闘いもあるのだ、なるべく道中の戦闘は少なくしておきたい。

そんなことを思いながら攻略を再開した。

### 『炎竜の迷宮』地下45階

「ふう、何とか辿り着けたな……」

俺は地下45階のセーフルームで一息吐いていた。

あたりはもう真っ暗なので【暗視】を起動している。

意外と暗くなつてからの方が攻略が進んだ。

何故ならこの迷宮にいるのは名前の通り、火属性の魔獣がほとんどなので暗くなると、火を纏っていたり出しているタイプの魔獣は、いれはすぐにわかるからだ。

考えてみれば当たり前のことである。

「こんなことに気がつかなかったなんて、俺は馬鹿か……」

もつと早く気づいていれば、攻略の効率はずいぶん違っていたはずだ。

『途中で気づいたので良しとしましょうよ、マスター』  
「そうだな。へこんでいても仕方がない」

途中でそのことに気づけたおかげで、無駄な戦闘を避けることができたしな。

それでも何度かは戦闘をせざるを得なかった。

『ファイアドラゴン』とも2度、闘って戦利品はどちらも鱗だった。

そんなことを思い出しつつ、夕食（夜食？）の準備をした。

出来上がった夕食を食べながら

「明日はいよいよ最下層だな」

『はい。試練となつてはいますが、実際は戦闘になるでしょう』

「『フレイムドラゴン』はどんな戦術を使ってくるんだ？」

『基本的には『ファイアドラゴン』と変わりません。プレスと魔法で遠距離攻撃を仕掛けつつ、不用意に近づけば尾や翼などで迎撃してくるでしょう。ただし、その力は『ファイアドラゴン』の比ではありません。決して油断をしないで下さい』  
「そうか。わかった」

ラグと明日のことについて話している内に食べ終わったので、明日に備えてもう寝ることにする。

「おやすみ、ラグ」

シユラフに潜り込みながら言った。

『おやすみなさい、マスター。明日は頑張りましょう』

ラグの声を聞きつつ、眠りに落ちた……

『炎竜の迷宮』地下50階

「痛いんだよ!!」

背後から肩に噛みついてきた『バウジーガ』を背負い投げの要領で床に叩きつけ、縫い付けるように頭を剣で突き刺した。

今、俺の目の前には荘厳な装飾がされた巨大な扉がある。

「ここだな」

『そうでしょうね。中で『フレイムドラゴン』が待っているはずですよ』

今日も早朝から迷宮を攻略し、今は昼すぎだ。

ここに来るまでに『ファイアドラゴン』と一度戦闘になったのを含め、何度か戦闘はあったが大した負傷も無く切り抜けた。

「さて、それじゃあ入るか」

俺は覚悟を決め、扉を開いた

『来たな、』来訪者』よ』

俺の頭の中にラグのものとは違う、重みのある声が響いてきた。前方を確認すると全長200mはありそうな巨竜がいた。

その大きさは『ファイアドラゴン』の倍は優にある。

そして、その鱗はまるで炎が揺らめくような輝きを放っていて、まさに炎の竜と呼ぶに相応しい姿だ。

「貴方が『フレイムドラゴン』ですか？」

『如何にも。我が炎竜の王』フレイムドラゴン』だ』

『約200年ぶりですね、炎竜の王』

『ラグナレク殿も久しいな。此度の者はどうだ？ デイオス様はかなりの期待をしているようだ……』

『どうでしょうね？ 御自分で確かめてみられては？ どちらにする、私たちに後はないのです。まあ私もマスターには期待をしますが』

『そんな挑発するようなことを言うなよ……』

『それもそうだな。ならばその力、確かめさせてもらおう！』

『！』  
『うわっ！！』

その瞬間、まさに炎が噴き上がるように『フレイムドラゴン』の輝きが増した。

「あ、熱っ！！」

凄まじい熱気だ。

かなり広い部屋だが、室温が一気に5度は上がったように感じる。

「我に風を加護を与えよ、『ウインドメール』」

体に風の鎧を纏う、風属性下級魔術『ウインドメール』を呪文詠唱をして使う。

さらに上位の『ストームメール』もあるが、俺には使えない。無いよりはマシだろう。

風の鎧で熱気が遮断されたのを確認し、ラグを抜く。

『準備は済んだようだ。では、いくぞ！！』

どうやら、こちらの準備が終わるまで待っていたようだ。

問答無用で殺しにはこないらしい。

「ッ！！」

いきなりブレスを放ってきた。

普通のブレスとは違い炎弾の形状で、しかもほぼノーモーションだ。

『アイギス』に魔力を込めつつ、横っ跳びに躲す。

地面に着弾した瞬間、凄まじい火柱が噴きあがる。

直撃は避けたが、噴き上がった火柱に飲み込まれる。が、何とか『アイギス』と『ウインドメール』で防ぐことができた。

どうやら炎弾の状態だとノーモーションで放つことができるようだ。

しかも、次々と炎弾を放ってくる。

「連射もできるのかよ！！」

【加速】を起動して、高速で炎弾とそれに伴う火柱を躲していく。

「クソッ！！近づけない！！」

苦し紛れに左の魔導銃で『バーストシエル炸裂弾』を撃つが、『フレイムドラゴン』は気にも留めない。

『そんなものか、『来訪者』よ！！　まだまだこれからだぞ！！』

『フレイムドラゴン』は炎弾を放ちつつ、周囲に多数の紋章さえ浮かべながら言ってきた。

「なっ！？　【思考分割】だと！！」

【思考分割】とは、同時に2つ以上の行動をすることを可能にするスキルだ。

俺は『アイギス』に魔力を込めながら、【縮地】で『フレイムドラゴン』の首元まで跳躍する。

迫ってくる数十にも及ぶ炎の槍と炎弾に突っ込むことになるが、目眩ましにはなるはずだ。

「うおおおお！！」

障壁に次々と炎弾などがぶつかり、爆ぜる。

恐怖心が湧きあがるが、『アイギス』の防御力を信じるしかない。

「抜けた！！」

目の前には『フレイムドラゴン』の首がある。

俺は右手に持った【通常形態】のラグを渾身の力で叩きつける！！

『ガキイイ！！』

「何っ!?!」

金属のような鱗を断ち斬り、その下の肉体を斬り裂いたが深手には至らない。

『バキッ!!!』

「グッ!!!」

翼で弾き飛ばされた。

空中で体勢を立て直し、靴底のスパイクで石畳を削りながら着地する。

「何て硬さだ……」

『その程度では我を倒すことはできんぞ』

俺を挑発しているのか、嘲笑を含ませつつ言い放った。

「……………舐めやがって……………」

『その程度では邪神龍を滅ぼせるはずもない。ディオス様には申し訳ないが　ここで果てよ!!!』

『フレイムドラゴン』は多数の紋章を浮かべながらブレスの体勢に入った。

「やってやるよ……………ラグ、【マント魔導杖形態】!!!」  
『了解しました』

俺は『奥の手』を出すための準備を始めた。

ラグの変化が終わると同時に、『フレイドラゴン』がプレスと『フレイルランス』を放ってくる。

「『ショックウェイブ』!!」

俺は魔導杖<sup>ワンド</sup>を掲げ、無属性最上級魔術『ショックウェイブ』を放つ。

『ッ!』

魔導杖<sup>ワンド</sup>によってブーストされた『ショックウェイブ』で発生した衝撃波が、プレスと『フレイルランス』を掻き消しつつ『フレイドラゴン』に迫る。

『GURUUU!!』

『ショックウェイブ』の効果で『フレイドラゴン』が麻痺する。

「次だ、ラグ!! 【鋼糸形態】!!」

麻痺は長くは続かない、急がなければ。

魔導杖<sup>ワンド</sup>が分解され、鋼糸用の手甲に再構成される。

すかさず鋼糸を展開しつつ【思考分割】を使い、無属性魔術で力場を『フレイドラゴン』の周囲に設置する。

設置した力場を利用し、『フレイドラゴン』を包むように鋼糸で魔導紋章を編み上げていく。

麻痺が解けつつあるのか、『フレイドラゴン』が動き出している。

「くっ、間に合うか!? ラグ、頼む!!」



『了解しました』

ラグのサポートを受け、編み上げる速度をさらに速める。

『フレイムドラゴン』はもうブレスを放とうとしている。

「発動しろ」

紋章が完成した瞬間、【魔力装填】で鋼糸に魔力を通し紋章を発動させる！！

「『爆水陣』！！」

『フレイムドラゴン』を包む巨大な水球が発生し、圧縮され、凄まじい勢いで爆発する！！

一連の現象がまさに一瞬で起きた。

爆発によって飛び散った水飛沫を浴びながら、肩で息をした。

「……………これで……………やった……………だろ……………」

先程の技は鋼糸で魔導紋章を編み上げ、魔力を通し、魔術と同じような効果を発動する【鋼糸】のオリジナルアーツスキル『陣術』だ。

その威力は最上級魔術にも匹敵するがMP、SPを大量に消費するので連発はできないし、準備に時間がかかるので使いどころが難しい。

精霊魔術の上級・最上級魔術が使えない俺が戦闘を有利にするために開発したアーツスキルで、俺の『奥の手』の1つだ。

そんなことを考えている内に、水煙が晴れてきた。

「……………」

『フレイムドラゴン』は体の至る所の鱗が砕け散っていて、その下の肉体もズタズタに裂けている。

『見事だ……』

『フレイムドラゴン』は瀕死の様子で話しかけてくる。

『先程の無礼な物言い、失礼した……その力、認めよう。』証』を受け取ってくれ、『来訪者』よ。この世界をどうか頼む』

『フレイムドラゴン』は紅い光の粒子になり、消えていく。

「……わかった」

俺は天に昇っていく光の粒子に応えた……

「なあ、ラグ。あいつは死んだのか……？」

『いえ、心配なさらなくとも神界に戻っただけですよ。神界で遭うことになるでしょうし、その内ここにも戻ってきますよ』

「それは良かった」

俺は安堵しつつ、『フレイムドラゴン』が残した巨大な『精霊結晶』と『角』と『証』だろっ紅い『宝玉』を拾い、時空属性下級魔術『脱出』<sup>エスケープ</sup>で『炎竜の迷宮』を後にした。

## 第5話 『炎皇狼の迷宮』

「さて、次は『炎皇狼の迷宮』だな」

俺は『炎竜の迷宮』から時空属性下級魔術『エスケープ脱出』で抜け出し、今は入り口まで戻ってきていた。

『そうですね。一度、『桜花』の街に戻りますか？』

「いや、良い。まだ食糧も充分残っているし、攻略にどのくらい時間がかかるかもわからない。早めに『炎皇狼の迷宮』に行こう」

『炎皇狼の迷宮』も『炎竜の迷宮』のように、俺が知っているものとは違う可能性が高い。

『わかりました。『炎皇狼の迷宮』はここから北東にあります』

「わかった。それじゃあ、行こう」

俺は『炎皇狼の迷宮』に向けて歩き出した……

焚き火がパチッパチッ　と音を立てて燃えている。

「それで『炎皇狼の迷宮』まで、後どれくらいだ」

今は、迷宮に向かう途中の平原で野宿をしていた。

『明日中には到着できると思います。それとステータスを確認していただけますか、マスター？』

「……？ わかった」

俺はラグに言われた通り、ステータスウィンドウを開く。

「おっ、レベルアップしてるな。しかも、5レベルも」

どうやら『炎竜の迷宫』の攻略でレベルアップしたようだ。

「それにしても、あそこだけでこんなに上がるなんて……確かに『ファイアドラゴン』も何匹か倒したが……」

『忘れていたかもしれません、』『アイギス』のスキルのおかげですよ。』

「いや、忘れてはいないが……4倍ともなると凄いな」

改めて【取得経験値倍加？】の凄さを感じつつ、ポイントを割り振っていく。

今回、5レベル上がったので使えるポイントは50だ。

「さて、何に割り振ろう……」

うーん、取り敢えずHP、MP、SPで良いか。

今のところ、ラグがあればほとんどの魔獣は一撃だ。

そうしてHP、MPに20ずつ、SPに10を割り振った。

これでHP、MPは32000に、SPは15500になった。

『終わったようですね。明日も早いのもう休みましょう、マスタ

』  
「そうだな。寝るとするか……」

「ここは平原なので鋼糸で罫を張れない……」

あまり気は進まないが、【気配察知】を起動する。

範囲は、取り敢えず半径50mくらいで良いだろう。

俺は外套などの装備を解除し、シユラフに潜り込み休むことにした。

『おやすみなさい、マスター』

「ああ。おやすみ、ラグ」

「へへ、兄ちゃん。有り金を全部置いて行ってもらおうか」

ラグ、何だこいつら……？

『見ての通り、野盗でしょう』

まあそつだよな……

俺は『炎皇狼の迷宮』に行く途中で、10人程の野盗に絡まれていた……

「ビビっちゃって、声も出せないみたいだぜ!!」

奴らは俺を囲みながら『ギャハハ』と下品に笑っていた。

どつするよ、こいつら……

『まあ、殺してしまっても良いですが……流石に『コレ』を殺すのは、私でも気が引けますね……』

俺は【リーブラの魔眼】を起動し、野盗たちのステータスを確認した。

あゝ、これは……

確認してみると、1番レベルが高い奴でも100ちょいだ……  
この世界では、それなりのレベルなのだろうが……

流石に、こいつらを殺すのは気が咎めるな……

相手が人を何人も殺しているような屑どもなら、殺す覚悟もできるかもしれないが……

アイコンを見る限り、こいつらは人を殺したことはないようだ。  
人（プレイヤー）を傷つければアイコンはオレンジに、殺せば赤になる。

この機能は、『VLO』と変わっていないみたいだ。

「黙ってないで、さっさと金出せや!!」

俺が考えごとをしていると、痺れを切らせたのか怒鳴り始めた。

ハア……放っておく訳にもいかないし、適当にぶちのめすか……  
『そうですね。気絶させるくらいで良いでしょう』

そう決めると、俺は野盗たちに向け

「おまえらに渡す金は無いよ」

と言い放った。

「何だと、テメエ!!」

野盗たちは歯を剥き出しにして叫ぶ。

ラグ、【杖術形態】  
『わかりました』

殺す訳にはいかないので、殺傷力の低い【杖術形態】を選ぶ。  
ラグが長さ2mほどの棒状になる。

「おまえ、何なんだそれは!？」

野盗たちは一様にラグの変化に驚いている。

「うるさい。ほら、さっさとかかってこい」

左手でチヨイチヨイと手招きしてやる。

「舐めやがって!! 野郎ども、やっちまえ!!」

『マスター、くれぐれも手加減して下さいよ』  
わかってるよ

いくら殺傷力の低い『杖』でも金属製だし、ステータス差もある。  
気をつけなければ殺してしまうだろう。

野盗たちが一斉に襲いかかってくる。

まずは正面から来た『狼族』の男の剣を杖で弾き飛ばし、逆の先端で下から顎を搗かち上げる。

「げっ」

かなり手加減したが、男の顎が砕けた感触が杖を通して伝わってきた。

「これはもう、骨の1、2本は覚悟してもらおうか……」

そんなことを呟きながら、右から来た『鬼人族』の足を払う。足の骨が折れたのか泣き叫んでいるが、気にせず鳩尾みぞおちに杖を突き込み意識を奪う。

その隙を突こうとしたのが、後ろから来た『鬼人族』に蹴りを叩き込む。

「おまえら!! 何やってんだ!! 相手は1人だぞ!？」

リーダーらしき『鬼族』の男 1番レベルの高かった奴 が叫んでいる。

「さっさと済みますか……」

そうやって俺は、自分から野盗に駆けていった……  
そして、10分ほど経った後

「意外と時間がかかったな」

殺さないように手加減しつつ闘ったので、時間がかかってしまった。

「……お前……何者だ……?」

息も絶え絶えのリーダーらしい男が訊いてくる。

「さあね」

そう言い、俺は男の首に軽く手刀を叩き込んだ。



『じゃあ先に進みましょう、マスター』  
「こいつらは、放っておいて良いのか？」

俺の周りには野盗たちが倒れ伏していたり、呻き声を上げている。

『構いませんよ。街まで連れていくのも、誰かを呼びに行くのも面倒です。この様子ではしばらくは動けないので、誰かが見つければどうにかするでしょう。まあ、先に魔獣に襲われるかもしれないけどね……』

「……確かに面倒だが……まあ良いか。魔獣に襲われたら、運が無かったと諦めてもらおう」

流石に俺も命を狙ってきた相手までは、気にしていられない。

そうして俺はラグを【通常形態】に戻し、先に進むことにした。

『着きましたね。ここが『炎皇狼の迷宮』です、マスター』

俺の目の前には、広大な森が広がっている。

「相変わらず、でかい森だな……」

『炎皇狼の迷宮』は『桜花』の北東部に広がる広大な森だ。

『炎狼の迷宮』も同じだったが、ここは『炎竜の迷宮』と違い、『迷路型』の迷宮だ。

『迷路型』は『迷宮型』や『塔型』と違い、階層構造ではなく区画で分かれている。

「まだ昼過ぎだし、行けるところまで行くか」

『そうですね。行きましょう』

俺はそう言って、森の入り口に向かって歩いていった……

### 『炎皇狼の迷宮』 第1区画

俺は森の中の道を周囲を警戒しつつ、歩いていた。

森の中は、10mほどのかなり背の高い木々の枝が頭上を覆うように茂っているので、外に比べれば少し薄暗い。

しかし道は広く、歩き難いということはない。

「なあ、ラグ。やっぱりここも、木の上を越えていくことはできないのか?」

『迷路型』<sup>メイズ</sup>はその名の通り、迷路状の迷宮なので木の上を越えることができれば、かなり攻略が楽になるはずだ。

『当然できません』

「そつだよな……」

予想はできていたが、やっぱりか。

まあ気を取り直して行こう。

しばらく、魔獣にも襲われることなく歩いていくと、

「おつ、『ファアーシエ』だ」

道の脇の茂みに、『ファアーシエ』が生えているのを見つけた。

『ファアーシエ』は見た目はヨモギに似ているそれなりに珍しい薬草で、SPの回復速度を速める『スタミナポーション』の素材だ。

「採取していくか」

買い取ってもらっても良いし、『スタミナポーション』にしても良い。

採っておいで損はない。

『迷宮の中には素材を採取、採掘できる迷宮もあります。これからも見つけたら採取していきましょう』

「その辺は『VLO』と変わらないな」

それなら魔獣以外に、素材も探しつつ進むか。

『魔獣に対する警戒は怠らないで下さいよ』

「わかってるよ」

ラグに心えつつ、素材も探しながら歩いていった。

『キュルルルウッ』

「来たな!!!」

上空から2mほどの赤い鷹のような、鳥型の魔獣『レッドホーク』が急襲してきた。

鋭い爪を躲し左の魔導銃を2連射したが、『レッドホーク』は急上昇し弾丸を躲す。

「チツ！！ 鳥型は相変わらず面倒だ」

鳥型は近接武器の射程外である、空中を高速で移動するので厄介だ。

ジャンプして斬りつければ届くが、空中戦ではこちらが不利だ。  
(なにせ、こちらは空を飛べない)

「銃主体でやるしかないか……」

『レッドホーク』が旋回し再び突っ込んで来るのを確認しつつ、右手に持っていたラグを鞘に納め、魔導銃を引き抜く。

「ラグの番はしばらく無しだ」

「……わかりました、マスター」

やや不服そうだが、仕方ない。

俺は突っ込んで来る『レッドホーク』に向け、右の魔導銃で『散<sup>シヨット</sup>弾<sup>トシエル</sup>』を放ちながら右に身を躲す。

『レッドホーク』は『散弾<sup>シヨットシエル</sup>』を喰らいややスピードを落とすが、やはり距離が少しあったので致命傷には至らない。

『レッドホーク』が俺の目の前を横切っていくのを見つつ、左の魔導銃を構える。

「そつはさせるか！！」

『レッドホーク』が再び急上昇し距離を取ろうとするのを防ぐように、俺は翼に向けて3連射する。

弾丸は翼を貫き、『レッドホーク』はフラフラと失速する。すかさず俺は、魔導銃の銃身にある近接戦闘用の刃に【纏気術】で気を纏わせつつ、『レッドホーク』へと跳躍し斬り裂いた。

『レッドホーク』が縦に分断されつつ消えていき、後には『精霊石』が残る。

「ふう、終わったな。1匹なら良いが、群れで来られると厄介だな」

ちなみに【纏気術】は武器に気を纏わせる技法で、スキル名ではなく【闘気術】の応用で熟練度が上がればできるようになるが、プレイヤーの間では何故かこう呼ばれていた。

「しばらくは【双銃】と【格闘術】でいくか」

こうすれば、ラグも拗ねないだろう。

「……別に拗ねてなどいません」

「わかったよ。じゃあ、【格闘形態】になってくれ。足甲も頼む」

「わかりました」

光の粒子が両手両足に集まり、指貫きの手甲と脛から膝くらいまでの足甲になる。

【格闘形態】では鞘も邪魔になるので、右腕に巻きつく金属製のベルト状になっている。

一応身体の動かしやすさを確認し、特に問題も無かったので先に進むことにする。

「よっとー!!」

毒針を突き刺そうとしていた、でかい蜂のような虫型の魔獣『ヒュージワスプ』を左の魔導銃の刃で斬り裂き、足に噛み付こうとした狼型の魔獣『レッドウルフ』の腹を蹴り上げ、右の魔導銃で撃ち貫く。

その隙に上空から襲ってきた『レッドホーク』をしゃがんで躲し、蜘蛛の巣を放とうとしている『ポイズンスパイダー』を左の魔導銃で『炸裂弾<sup>バーストシェル</sup>』を放ち爆散させる。

「本当にどれだけツイてないんだよ、俺は……」

俺はまた、大きな群れに引っ掛かっていた……

「っと、危ない。そんなことを考えている場合じゃないな」

でかい螳螂の魔獣『サイスマンティス』の振り下ろして来た巨大な鎌を右の刃で受けつつ、【纏気術】で右脚に気を纏わせ【格闘術】のアーツスキル『裂蹴爆砕』で蹴り砕く。

そうしている内に戻ってきた『レッドホーク』に、【双銃】のアーツスキル『インフイニット・ショット』でまさに無数に分裂した弾丸を浴びせる。

「頭の上をチヨロチヨロと邪魔なんだよ」

厄介な奴は倒した。

後は『レッドウルフ』数匹に『ポイズンスパイダー』が1匹だけだ。

「さっさと始末して、少し休もう……」

そう呟き、俺は双銃を構えた

「っ、疲れた……」

俺は座り込みながら、呟いた。

あれから5分ほど闘い、魔獣を殲滅した。

何度かアーツスキルを使ったので疲労度も高い。

『お疲れ様です、マスター』

本当に疲れたよ……

それにしても、ツイてなかった。

進んでいた道が行き止まりで、軽くへこみながら引き返していた時に、ぱったりあの群れに見つかってしまったのだ。

しかもその中に、常に数匹の群れで行動する『レッドウルフ』、『ヒュージワプス』とこの迷宮でも比較的強力な『サイスマンティス』がいたので手間取っている内に、何処からともなく『レッドホーク』が飛んできたのだ。

これを不運と言わず、何と言おう。

最後の方は面倒になってつい、アーツスキルに頼ってしまった。

「うーん、鈍ってるのか？ 最近、朝稽古もやっていないし……」

この世界に来てから、どうもステータスに頼った闘い方になって  
いるような気がする。

この辺りで鍛え直しておかないと、この先困ったことになるかもしれない。

「よし。ラグ、【二刀形態】だ。ただし刀は一振りが良いから、いつもより少し長めにしてくれ」

ラグに言いつつ、立ち上がる。

『宜しいのですか？ 折角、【二刀流】がお使いになれるのに……』  
「良いよ。二刀だと咄嗟に魔導銃を抜き辛いし、二刀の片方だけ使うには少し短いからな」

『わかりました。取り敢えず変化しますので、後で微調整をお願いします』

「わかった」

そう言うと、ラグが一振りの日本刀に変化した。

俺は長さや重さ、重心などの微調整をし、数回素振りして出来を確認める。

「いつもながら完璧だな。まだ【形態変化】の登録はできたよな？ この形態も登録しておいてくれ」

『はい、できますよ。形態の名称は何になさいますか？』

「そうだな……【刀術形態】で頼む」

この形態は仙道流で闘うために登録した形態だ。  
名前もこれで良いだろう。

『わかりました。そろそろ先に進みませんか、マスター？』

「そうだな。SPも回復したことだしな」



そう言っただけ俺は【通常形態】とは違い左の腰にある鞘を、魔導銃を抜くのに邪魔にならない角度に調整し歩き出した。

「やっぱり鈍ってるな……」

あれから2度ほど戦闘をして、改めて実感した。

『そうなのですか？ 私には、充分凄じように思いましたが』

「いや、それはこのステータスのおかげだ。体のキレや間合いの感覚は鈍ってる」

仙道流だけで闘ってみると良くわかった。(『レッドホーク』には魔導銃を使ったが)

『私には良くわかりませんね』

それはそうだろう、ラグは剣だし。

「でも、今気づけて良かったよ。幸いここはまだ、俺にとってはそれほど危険な迷宮じゃない。今の内に鍛え直す」

『それは構いませんが……』

「言いたい事はわかってるよ。心配しなくても、危険を冒してまでやるうとは思わないさ。危なくなったら何だってる」

『わかりました。そこまで仰るのなら。ですが、決して無理はしないで下さいよ』

「わかった。じゃあそろそろ陽も沈みそうだし、進めるところまで進もう」

『了解しました』

辺りはもう暗くなっている。

【暗視】を起動し休める場所を探しながら迷宮を進んできたが、今のところセーフルームは見つかっていない。

「『迷路型』<sup>メイズ</sup>は矢鱈と広いから、セーフルームを見つけづらいんだよな……」

俺は愚痴をこぼしつつ、セーフルームを探す。

『唯一の救いは、『レッドホーク』が出てこなくなったことですね』  
「ああ、そのおかげで戦闘はすいぶん楽になった。やっぱり、鳥型なだけに鳥目なのか？」

『私は知りません。が、おそらくそうなのではないですか。全く出てこなくなりましたし』

まあその代わりに、でかい蝙蝠の魔獣『ナイトバット』がそこら中飛び回っているが、『レッドホーク』よりは動きは遅いので楽だ。

「それよりもセーフルームは何処だ……流石にそろそろ休みたい」

時間はもう8時くらいだ。

流石に疲れたし、腹が減った。

『もう見つかっても良いと思うのですが……』

セーフルームは、1区画に1箇所はあるはずだ。

ラグにも確認したので、間違いない。

それにしても、もうこの第2区画はほとんど見て回ったはずだ。

「何で無いんだ……ん？」

今、何か動いたような……

もしかすると……

「なあラグ、ここって『ミラージユトレント』が出るのか？ 俺は記憶に無いんだが……」

『あつ！！ 出ます！！ 失念していました…… 申し訳ありません！！』

「いや、そこまで謝らなくて良いぞ？ 俺も今まで気がつかなかったしな」

『本当にすみません……』

「気にするなつて。それよりも、こいつの所為で無駄に歩き回ったんだ。その恨みは晴らさせてもらおう」

樹木型の魔獣『ミラージユトレント』は歩くでかい樹だが、名前の通り普通の樹木に擬態して、道を迷わせる魔獣だ。

風も無いのに、枝が動いたので気づけた。

俺が正体を見破ったのに気づいたのか、『ミラージユトレント』が擬態を解き、目と口のような裂け目を現し、根で歩行しながら近づいてくる。

「さっさと始末して、休むぞ」

『ミラージユトレント』が、枝に巻きついていてる蔓を振り回してくるのを躲し、刀で枝を斬り飛ばす。

痛覚があるのか、狂ったように振り回す蔓を掻い潜り、時には斬り飛ばしながら徐々に距離を詰める。

「本当は刀でこんなことはしないが……」

俺は【纏気術】で刀に気を纏わせ、『ミラージユトレント』の頭上まで跳躍し、幹竹からたけ割りのように縦一文字に斬り裂く。

縦に真つ二つになった『ミラージユトレント』が消えていくのを見ながら刀を払い、鞘に納めた。

案の定、『ミラージユトレント』の背後にあった道を進むとセーフルームがあった。

「やっと休める。取り敢えずは飯だ」

『……申し訳ありません……私が……』

「もう良いって。誰にだって、失敗くらいあるだろう。それ以上謝ると、怒るぞ?」

『わかりました』

「そつだ、気にするな。俺も気にしてない」

そして俺は食事を簡単に済ませ、疲れたので寝ることにする。

「明日も頼むぞ、ラグ」

『お任せ下さい、マスター。それでは、おやすみなさい』

「ああ、おやすみ」

俺はシュラフに潜り込み、すぐに眠りに落ちた……

今日も朝から迷宮を攻略している。  
午前中に第2区画を突破し、今は第3区画を進んでいる。

「ラグ、改めて聞いておくが、この迷宮で注意する魔獣はいるか？」  
昨日の『ミラージユトレント』のように、俺の知識に無い魔獣がいるかもしれない。

『そうですね……やはり厄介なのは『ミラージユトレント』ですね。後、今はまだ良いですが、第5区画からは『炎狼』がいますので、気をつけて下さい』

「『炎狼』か……できれば、あまり遭いたくはないな」

『今は気にしていても、仕方ありません。先に進みましょう』  
「わかった」

第3区画の森の中を歩いていく。

『カサッ』

頭上で葉の擦れる音がしたので、上を見ると

「うおっ」

大蛇型の魔獣『ブラッドバイパー』が落下してきた。  
咄嗟に後ろに飛び退き、刀を構える。

落ちてきた『ブラッドバイパー』は体をくねらせ、凄まじい勢いで迫ってくる。

牙を剥き出し飛びかかってきた『ブラッドバイパー』を、擦れ違  
いざまに斬り裂く。

『ブラッドバイパー』が飛びかかってきた勢いそのまま分断され、

消えていく。

「ふう〜。いきなり来られるとビビるな……」

俺は『精霊石』を拾い、先に進んで行った。

しばらく順調に攻略を進めていると

『カサカサッ』

また音が聞こえてきた。

ただし今度は頭上ではなく、少し先の道の脇にある茂みからだ。

「今度は何だ……?」

油断なく刀を構えていると、出て来たのは

「う、兎……?」

何と金色の兎が出てきた。

「な、何なんだ、あれは……魔獣か?」

『マスター!!』『ムーン・ラビット』です!!』

聞いたこともない。

「『ムーン・ラビット』って何だ? ただの動物なのか? それとも魔獣か?」

『神獣です!!』

「何っ!?!」

『神獣』ということは、『ファイアドラゴン』や『フレームドラゴン』と同じくらいのパワーを持っているということだ。

俺は慌てて刀を構え直した。

『マスター!! 静かにして下さい!! 逃げてしまいます!! 心配しなくとも『ムーン・ラビット』は強さではなく、その珍しさで『神獣』なのです』

「おまえも充分うるさいよ。それで、何でそんなに興奮してるんだ?」

『ムーンラビット』は鼻をヒクヒクさせながら、キョロキョロしている。

何か癒される……

『発見が困難で、見つけることができたのは、凄い幸運なことなのです』

「へえ、そんなものいるんだな」

『VLO』にはいなかったはずだ。

『ではマスター、倒して下さい』

「……………あれを倒すのは、流石に……………」

『かなり特殊な素材を落としますよ? それにあれば、幻影のようなものです』

グッ……………

特殊な素材……………

かなり魅力的な言葉だ……

「……そうだよな……あれは幻影だ……幻影だ……」

言い訳のように幻影、幻影と呟いていると

『逃げられると確実に追いつけませんので、近づかないで倒して下さい。あっ、魔導銃は駄目ですよ。魔力に反応します』  
「わかった」

右の腰のスローイングダガーをゆっくりと引き抜き、念のため【纏気術】も使う。

音がしないように慎重に構え、アンダースロー気味に投げる。  
見事ダガーは命中し、『ムーン・ラビット』が消えていく。

『マスター、やりましたね!!』

「……うん、もの凄い罪悪感が……」

『気にしていても、仕方がありませんよ。見に行きましょう』  
「そうだな……」

俺は、『ムーン・ラビット』がいた場所へ歩いていった。

そこには『精霊結晶』と、涙の雫のような形の結晶『玉兔の魂』があった。

『玉兔』って……、もしかして『金烏』もいるのか……？

「それで、この『玉兔の魂』ってどんな素材なんだ？」

『【加工】で、【MP自動回復】のスキルが付いたアクセサリが作れます』

【MP自動回復】か……



効果は何となくわかるが……

「【MP自動回復】って具体的にはどんな効果だ？」

『戦闘時の行動中にも、MPが回復するようになるスキルです』

それは助かるな。

MPは戦闘中にも回復はするが、それは行動をしていない待機中にしか回復しない。

「是非欲しいアクセサリだな。帰ったら作ってみよう」

『そうですね。ちなみに『金鳥の魂』を持つ『サン・レイヴン』もいますよ？』

いるのかよ……

そんなことを話しながら素材を拾い、攻略を再開した。

### 『炎皇狼の迷宮』第5区画

あれから『ムーン・ラビット』を見つけた時の幸運でも続いていたのか、かなり順調に攻略が進んだ。

第4区画を駆け抜け、今は第5区画に来ていた。

「ここから『炎狼』が出るんだっただな？」

『はい。ここにいる他の魔獣とは、一線を画す力を持つ魔獣です。お気をつけ下さい』

まあそうだろうな。

『炎狼』は、『VLO』では『炎狼の迷宮』のボスだった魔獣だ。

「あまり出遭わないことを願うよ……」

今日はこの区画までだな　と考え、先に進んでいった。

『ウオオオオン……』

「『炎狼』の遠吠えか？　近くにいますのか？」

『かなり近いかもしれませぬ。』『炎狼』も狼型の特徴で、こちらの気配を察知しやすいので、不意討ちされないようにして下さい』  
「わかった」

陽も沈みかけているので、暗くなり始めている。  
気をつけないとな。

そんなことを思いながら進んでいると、先にある曲がり角から『レッドウルフ』が現れた。

「……何だ、驚かせるなよ。『レッドウルフ』か」

群れていると囲まれて厄介なので、早めに倒そう。

そう思い、刀を構え駆ける。

『レッドウルフ』も唸りつつ、こちらに駆けてくる。

しかも、後ろから他の『レッドウルフ』も現れる。

「クソッ、やっぱり群れか」

先頭の1匹を右から逆袈裟に斬り上げる。

返す刀で飛びかかってきた奴を斬り裂き、囲まれないようにそのまま駆け抜ける。

靴底で地面を削りながらブレーキをかけ、『レッドウルフ』たちがこちらに向く前に【縮地】を起動し、その内の1匹の背後に跳び、刀を振り下ろし縦に分断する。

その間にこちらに向き直り、飛びかかってきた別の1匹を下から挟むように突き、そのまま刀を右に払い斬り裂く。

背後から襲いかかってきた最後の1匹を蹴り碎き、戦闘が終了した。

「ふう〜。『炎狼』かと思って焦ったが、『レッドウルフ』だったな」

そう言って『精霊石』を集めようとすると

『マスター!! 前を!!』

「ッ!?!」

『レッドウルフ』の群れが現れた道の先から体長5mほどの巨大な赤い狼が、『レッドウルフ』を10匹ほど引き連れ歩いてきた。

「『炎狼』か……」

『炎狼』が俺を見て唸っている。

刹那、『炎狼』を見失った!!

俺は悪寒を感じ、『アイギス』を展開する。

『ガキイ!!』

「くっ!!」

『アイギス』で『炎狼』の右前足を受け止める。

『炎狼』の爪と『アイギス』の障壁が、ギリギリと音を立てて鬨ぎ合う。

俺は咄嗟に刀を振るうが、『炎狼』がまた消える。

「相変わらず、もの凄い速さだな……」

『そうですね。』『炎狼』は魔術は使えませんが、【加速】と【縮地】が使えますからね……』

ラグの言う通り、『炎狼』は高速の戦闘を得意とする魔獣で、俺の戦闘スタイルと似通っているため、あまり相性は良くない。そうしている内に、今度は『レッドウルフ』が迫ってきた。

「『炎狼』に集中するためにも、まずは雑魚からだ」

ける。【加速】と【闘気術】を起動し、『レッドウルフ』に向かって駆ける。

発生した衝撃波で何匹かが吹き飛んでいくが、一番近くにいた1匹を蹴飛ばし、別の奴にぶつけ、体勢が崩れたところを2匹纏めて突き貫く。

刀を抜きつつ、横から来た1匹を左の裏拳で碎き、そのまま右の回し蹴りでその隣の1匹も碎く。

さらにそのままの勢いで体を回転させ、刀で2匹を斬り裂く。

「ッ！！」

次の瞬間、『炎狼』が飛びかかってきたので、右に跳躍して躲し、ついでとばかりに途中にいた1匹に刀を振るい斬った。

「残りは3匹と『炎狼』か」

残りの『レッドウルフ』は、取り敢えず後回しだ。  
ここまで減らせば、邪魔にもならない。

そう考え、【縮地】で『炎狼』に向かって跳ぶ。

『ギャリイイツ!!』

間合いに入った瞬間、俺は刀を振るったが、流石に『炎狼』は反応してきた。

刀と爪で鏝迫り合いが起き、火花が散る。

俺は一瞬力を抜き、爪を受け流す。

「ハアツ!!」

『炎狼』の体勢が崩れた隙を逃さず、脇を抜けるように流し斬る。

「チツ、浅いか」

俺は振り向きながら舌打ちした。

『炎狼』は胴を斬り裂かれているが、まだ致命傷ではない。

『レッドウルフ』たちはこの速度について来られないのか、右往左往している。

そんな様子を確認しつつ、再度【縮地】で跳ぶ。

今度は『炎狼』の腹の下に潜り込むように跳び、左足で地面を削りつつ

「ぶっ飛べっ!!」

気を纏った右脚で、思いっきり真上へ蹴り上げる。

『ギャンー!!』

流石に効いたのか、『炎狼』が悲鳴を上げる。  
それを聞きながら俺も真上へと跳躍し

「これで終わりだ」

空中で前転をするように1回転し空を断つかの如く刀を叩きつける、【刀】のアーツスキル『断空』で斬り裂いた。

「後は、おまえらだけだな」

『炎狼』が敗れたことで臆しているのか、かかってこない。

「まあ、放っておく理由も無いしな」

俺は左の魔導銃を抜き放ち、3匹の『レッドウルフ』を撃ち貫いた……

『お疲れ様です、マスター。体のキレは戻りましたか?』

「……途中までは良かったが……最後はアーツスキルを使っ  
てしまった……」

大分戻ってきてはいるが、こんなもんじゃ駄目だ……

『……まだ先は長いです。あまり気落ちしないで下さい。それよりも、そろそろセーフルームを探しましょう。もう陽は沈んでいます』  
「そうだな。先を急ぐか」

俺は【暗視】を起動し、『精霊石』を集め始めた。

「これは『炎狼の肉』か。ラッキーだな」

『炎狼の肉』は料理して食べると、AGIが5上がるレア食材だ。

『さっそく夕食で食べましょう』

「ああ、楽しみだ。そうと決まれば、さっさとセーフルムを探すぞ」

そう言って俺は急いで『精霊石』を拾い集め、セーフルムを探し始めた……

「美味かったあ〜」

あれからほどなくしてセーフルムを見つけた俺は、さっそく『炎狼の肉』を使って夕食を作った。

レア食材を扱うにはそれなりの【料理】の熟練度が必要だが、このところの野宿や迷宮攻略、【取得経験値倍加？】のおかげで熟練度が上がっていたので、扱うことができた。

出来上がったのは、ビーフシチューのような料理だ。

そのシチューとパンを食べ終わり、一息吐いていた。

『ステータスを確認してみてくださいはとうですか、マスター？』  
「そうだな」

ステータスを確認してみると、きちんとAGIが5上がっている。  
(レベルアップはしていなかった)

「ちゃんと上がってるな。まあ、これくらい上がったところで大した差はないが、ポイントの節約にはなるな」

「ステータス値は生死に直結しますから、少しでも高い方が良いでしょう」

「ラグの言う通りだな。それじゃあ寝るか。明日中にできれば第8、最低でも第7区画までは行っておきたいからな」

「そうですね。そのくらいまで進むことができれば、明後日には奥の第10区画に到達できるでしょう」

ラグの言葉を聞きながら「調理道具一式」をインベントリに片付け、シユラフを出す。

装備を解除し、シユラフに潜り込みつつ

「明日も頑張るとするか」

「はい。頑張らしましょう」

そうラグと言葉を交わし、眠りに就いた……

## 『炎皇狼の迷宮』第8区画

飛びかかってきた『レッドウルフ』の上位種『ヘルウルフ』を刃で斬り裂き、上空から急襲してきた『レッドホーク』の上位種『クリムゾンホーク』を躲す。

『クリムゾンホーク』がこちらに向かって旋回するのを確認しつつ、残りの『ヘルウルフ』を【縮地】を使い次々と屠っていく。

『ヘルウルフ』を全て倒し終わると



「遅い」

ようやく旋回し終わった『クリムゾンホーク』が突撃してきたので、擦れ違いざまに斬った。

『……凄いですね……上位種ばかりの群れでしたが、まるで苦戦されませんでしたね。』

ラグが驚くのも、無理はないだろう。

この迷宮に来た最初の頃は、下位種に手間取っていたのだから。

「ああ、完全に勘を取り戻したよ」

俺はここに来るまでの戦闘で、体のキレや間合いの感覚などを完全に取り戻していた。

「これで『炎皇狼』が相手でも遅れはとらない」

『油断はしないで下さいよ。』『炎皇狼』は、『フレイムドラゴン』と同じく強大な力を持った神獣です』

「わかってる。ところで、やっぱりこの区画からは上位種が出るんだな」

『その通りです。』『炎狼』もいるので、気をつけて下さい』

「わかった。それじゃあ、先に進もう」

そう言って、攻略を再開した。

「疾ッ」

横から突っ込んできた『ヘルウルフ』を斬り裂き、すぐさま【縮地】で前方へ跳ぶ。

次の瞬間、俺のいた空間を爪で引き裂きながら『炎狼』が通り過ぎる。

それを横目で見つつ、左の魔導銃を抜き『ナイトバット』の上位種『ナイトメアバット』を撃ち貫く。

『ミラージユトレント』の蔓が迫ってくるのを刀で斬り飛ばし、返す刀で横一文字に分断する。

その隙に再び飛びかかろうとしていた『炎狼』を魔導銃の2連射で牽制し、ついでに『ヘルウルフ』を1匹撃ち貫いておく。

「キリが無いな……」

『ヒュージワスプ』の上位種『キラーワスプ』が飛ばしてきた毒針を叩き落としつつ、呟いた。

そろそろ陽も沈もうかという頃に、『炎狼』を含む群れに引っ掛かっていた。

魔導銃を腰に戻しながら【縮地】で距離を詰め、『キラーワスプ』を気を纏った左拳で打ち貫く。

刀を両手で持ち直し、『炎狼』の爪をいなし、左後足を斬り飛ばす。

体勢を崩した『炎狼』が、突進の勢いのまま『ヘルウルフ』を何匹か撥ね飛ばしながら地面を滑っていく。

すぐに後を追うように俺も跳び、上体を起こそうとしていた『炎狼』の首を刎ねる。

撥ね飛ばされ、まだ倒れている『ヘルウルフ』に弾丸を叩き込み、戦闘が終了した。

「よし……」

俺は戦闘の結果に満足し、小さくガッツポーズをした。まるで上空から俯瞰しているかのように、周囲の様子がわかるのだ。

おかげでこの戦闘中、攻撃が掠ることすらなかった。戦闘をすることに、感覚が研ぎ澄まされていくようだ。

『どんどん強くなっていきますね。頼もしい限りです』  
「煽っても何も出ないぞ」

ラグに応えながら、『精霊石』を拾っていく。

『いえ、本当のことですよ。今の時点でマスターは、2人の『マスター』よりも強いです。確かに『マスター』たちが優っている分野はありますが、総合的にはマスターの方が上でしょう』  
「リシエルやギルムの『リアル』のことは知らないが、俺は一応武術を習っていたから、そのおかげかもしれないな」

恐らくはそうだろう、ジーさんには感謝しないとな。

だが、ステータスのおかげかもしれないが、あの頃よりも高みにいる感じがする。

もしかすれば、ジーさんや高弟の人達はこんな感覚の中で闘っていたのか？

あの化け物のような人達ならあり得そうで、怖い……

少し震えが……

や、やめておこつ。

あまり考えていると、古傷が開きそうだ……

そんなことを考えている内に拾い終わったので

「じゃあ、セーフルームを探すか」

『そうですね。もう陽も沈みましたし、早めにセーフルームへ行きますしょう』

そう言い、俺は【暗視】を起動しつつ先に進んで行った。

あれから『サイスマンティス』の上位種『デッドリイマンティス』や『ナイトメアバット』、『炎狼』と何度か戦闘になったが、無傷で切り抜けた。

そうしてしばらくすると、セーフルームを見つけたので休むことにした。

「『炎狼の肉』を落としてくれたのは、ラッキーだったな」

今日も1匹だけ『炎狼の肉』を落としてくれた。（他の『炎狼』は毛皮だった。）

なので、今日もシチューにして食べた。

『炎狼の肉』自体は美味なので、全然飽きない。

「明日は『炎皇狼』と対面するのか。『炎皇狼』の戦術は『炎狼』と同じか？」

『はい。基本は同じですが『炎狼』と違い、『フレイムドラゴン』ほどではありませんが、魔術を使います。そして、『炎狼』よりも強大な力を持っています』

「そうか……やはり一筋縄ではいきそうにないな……」

ただでさえ『炎狼』とは相性が悪いのに、魔術まで使うとなると、激戦は避けられないだろう。

『はい。『フレイムドラゴン』の時のように、生死を懸けた闘いに

なるでしょう……』

『フレイムドラゴン』も奥の手を出して、ようやく勝つことができた相手だ。

「いや、前向きに考えよう。今の俺の力がどれほどのものか試すには、不足のない相手だ」

『そうですね。ネガティブになっても、良いことはありません』

「その通りだ。明日に備えて、もう寝るか」

『わかりました。おやすみなさい、マスター』

「ああ、おやすみ」

俺は漠然とした不安を感じつつ、眠りに落ちた……

## 『炎皇狼の迷宮』第10区画

「おらぁぁっ！ー！」

俺は『ミラージュトレント』の上位種『ミラージュエント』を、  
グレートソード斬馬剣で縦に真つ二つにする。

「これで片付いたな」

俺はラグを【通常形態】に戻し、一息吐いた。

途中で、同時に『炎狼』2匹と戦闘になったが、無傷で終わることができた。

「そろそろ最奥だな？」

『精霊石』を拾いながらラグに尋ねた。

『はい。この区画もほぼ攻略しましたし、もうすぐでしょう』

ラグの言葉を聞きつつ、しばらく進むと、森の中に広大な草原が見えてきた。

「あそこか……」

『そうでしょうね……』

ここで立ち止まっても、仕方がない。

「行くか」

『ええ、行きましょう』

俺は覚悟を決め、草原に一步踏み込んだ……

草原には、『炎狼』の倍はある炎を纏った1匹の巨狼がいた。

「貴方が『炎皇狼』ですか？」

『そうだ。俺が炎狼の長、『炎皇狼』だ。良く来たな、『来訪者』。待っていたぞ』

やはり『フレイムドラゴン』と同じように、頭に声が響いてくる。

声は『フレイムドラゴン』よりは少し若い感じだ。

『ラグナレクも久しぶりだな。200年ほどか？』

『ええ。あなたも変わっていませんね』

『フレイムドラゴン』は『ラグナレク殿』と呼んでいたが、『炎皇狼』は呼び捨てだ。

『それで『来訪者』、おまえは『証』を求めてここまで来たのだから？ さっそくその力、試させてもらおう！』  
「いきなりかつー！」

慌てて【通常形態】のラグを構える。

『何をゴチャゴチャと言っている！！　いくぞー！！』

『炎皇狼』の纏う炎が勢いを増し、足元の草が燃え上がる。  
刹那、炎の残像を残し、『炎皇狼』が飛びかかってくる。

「くっ！！」

咄嗟に【縮地】で左に跳ぶ。

『今の一撃、良く躲したな。不意を突いたと思ったが……』

完全には躲しきれなかった。

外套の右腕の部分が裂けて血が滲んでいる。

「『炎狼』より遙かに速い……ってか、『不意を突いた』って……」  
『まあ、許せ。『フレイムドラゴン』から兵だつわものと聞いていたからな。しかし、あの程度躲してもらわなければ困る。わざわざ手加減したのだからな』

確かに、手加減されたのだろうな……

速かったとはいえ、視認できないほどではなかった。

『それでは、今度こそ本気でいくぞ。死んでくれるなよ』

『炎皇狼』が残像すら残さず消える。

「チツ!!」

俺も【加速】を10倍で起動し、衝撃波を伴い駆ける。  
迫る爪を紙一重で躲し、剣を袈裟切りに振るが、躲される。  
爪の軌道上の地面が抉れる。

「何て威力だ……」

地面を抉ったのは、『炎皇狼』の一撃で発生した衝撃波だ。  
その威力に慄きつつ、【加速】を停止、【縮地】で『炎皇狼』の  
元へと跳ぶ。

『炎皇狼』も【縮地】で俺の方へと跳んでくる。  
剣と爪が振られ、衝突する。

『ギイイーン!!』

刹那、凄まじい衝撃波が発生し地面が大きく抉れる。  
俺たちはそのまま擦れ違い、着地した瞬間に再び跳ぶ。  
さらに発生する衝撃波。  
飛び散る火花。  
抉れる大地。

『炎皇狼』は魔術で炎の槍を飛ばしつつ、爪を振るい衝撃波を撒  
き散らす。

俺はそれを『アイギス』で防ぎながら、剣を振るう。  
縦横無尽に駆け、跳びながら衝突が繰り返される。



「……………くっ……………」

そんなことが何度か繰り返された後、俺は乱れた息を整えながら片膝を突いた。

俺の外套は所々裂け、血が滲んでいる。

『炎皇狼』も無傷ではないが、まだまだ余裕が見られる。

「やっぱり……………速度では……………敵わないか……………」

何とか致命傷を避けていられるのは、研ぎ澄まされた感覚のおかげだ。

だが、いつまでもは体力が持たない。

賭けにはなるが、やるしかないか……………

分の悪い賭けではない。

「ラゲ、【刀術形態】だ」

『了解しました』

『ほう、まだ戦意を失わないか。そうでなくては』

変化が終わったのを確認し、俺は【加速】と【縮地】を『同時』に起動する。

そして俺は『炎皇狼』に向かって跳ぶ。

刹那、俺は刀を振り切り、『炎皇狼』の後方にいた。

『ッ！！？』

『炎皇狼』の胴に横一文字の刀傷が走る。

俺はゆっくりと振り向く。

『驚いたぞ。まだこんな力を隠し持っていたとはな。面白い』

時間はあまり残されていない。

「いくぞ」

再び、俺は跳ぶ。

その速度はまさに雷速だ。

音すらも置き去りにし、『炎皇狼』に迫る。

『炎皇狼』も【縮地】で残像すら残さず跳ぶ。

刀を振るう速度すら音速を超え、衝撃波が飛ぶが、『炎皇狼』も衝撃波を飛ばし、相殺する。

次の瞬間、俺は『炎皇狼』の直上に移動し、地面に叩きつけるように蹴る。

『グッ!!』

『炎皇狼』が地面に叩きつけられ、粉塵が舞う。

無属性魔術の力場を空中に作り、それを足場にし、地面に向かってまさに雷の如く跳び

「せいっ!!」

『炎皇狼』の落下地点に刀を振り下ろすが、刀は大地を割るのみだった。

『速いな。速度で俺を上回るか』

すでに『炎皇狼』はその場にはいなかった。

もう時間が無い。

良くて10秒だ。

「次で最後だ」

そう言い、俺は刀を鞘に納める。

『良いだろう。おまえの全力、見せてみる!!』

『炎皇狼』の纏う炎が、爆発するかのよう燃え上がる。

「いくぞ!!」

俺と『炎皇狼』が消え、その後を追うように衝撃波と炎が吹き荒れる。

刹那の内に、俺たちは立ち位置を入れ替え、再び現れる。

「グッ……」

片膝を突いた俺の左肩から血が噴き出す。

『ク、クハハハ……面白い、面白いぞ!!』 『来訪者』よ、お前の名は?』

「……デインだ」

答えつつ振り向くと、『炎皇狼』は左前足が無くなり胴が斬り裂かれ、倒れ伏していた。

『そうか、デインか!! お前の名、覚えておこう。』 『証』は持つて行くといい。楽しかったぞ!! また会おう!!』

そう言うと、『炎皇狼』は光の粒子となり、天へと昇っていった……  
俺は『パーフェクト・シャインヒーリング』をかけつつ、仰向けに倒れ込んだ。  
傷が塞がっていく。

「……あいつは戦闘狂か……勘弁してくれ……」  
『……まあ、あまり気にしないで下さい……』

そうしよう……  
考えていると気が滅入る……

「それにしても……しばらくは動けないな……」

俺が使った【加速】と【縮地】の同時使用は、30秒だけ【縮地】を遥かに上回る速度を手に入れることができる。  
しかもその効果は移動だけでなく、全ての行動に及ぶ。  
だがその反動で、効果終了後5分間は動けなくなる。

「それよりも、最後にマスターが使った技は何なのです？ アーツスキルではありませんよね？」

「ああ、あれは仙道流 俺の習っていた武術の技だ」

あれは仙道流抜刀術『天閃』だ。  
要するに居合いだが、アーツスキルを含め俺の使える技の中では最速だ。

しかも、アーツスキルではないのでSPは減らない。

「そうなのですか。それは便利ですね」

「まあ便利ではあるが、それほどでもないぞ？ アーツスキルの方

が役に立つことも多いしな」

戦術の幅が広がるので、助かってはいるが。

『本当にマスターは規格外ですよ……』

「どういう意味だ……」

『何でもありません。それよりも外套などがボロボロですね。あちこち裂けてますよ？』

「ああそうだな。でも、外套とズボンはその内直るよ。このシャツはもう駄目だけどな」

外套とズボンは作る時に特殊な縫い方で、『自動修復』の紋章を縫い込んであるので、時間が経てば元に戻る。

他にも『強化』や、暑さや寒さを軽減する『適温維持』などの紋章を縫い込んである。

今も、外套とズボンの裂け目が塞がっていつている。

そうしている内に5分が経った。

「じゃあ、『証』や素材を取って帰るか」

『そうしましょう』

『炎皇狼』が残した巨大な『精霊結晶』、『炎皇狼の肉』、紅い宝玉の『証』を拾い、『脱出』<sup>エスケープ</sup>で『炎皇狼の迷宮』を後にした。

森の入り口まで戻り

『それでマスター、これからどうされますか？ このまま『火の精霊王の迷宮』に行きますか？』

「いや、一旦『桜花』の街へ戻ろう。食糧も無くなりかけてるし、

『玉兔の魂』でアクセサリも作りたい」

『わかりました。それでは『桜花』に向かいます。ここから北西の方向です』

「わかった。それじゃあ、行こう」

そう言い、俺は『桜花』に向け歩き出した……

## 第6話 新たな仲間

「あの野盗たち、いなかったな……」

今は『桜花』に向かう途中の森の中で、夕食の準備中だ。

ここに来る途中、野盗たちに襲われた場所に立ち寄ってみたが、野盗たちの姿は無かった。

『そうですね。でも、魔獣に襲われた形跡もありませんでしたので、誰かが冒険者ギルドに知らせて連行されたか、自力で逃げたのでしょ』

「一応、『桜花』に着いたらギルドで聞いてみるか。どの道、素材の換金をしに行くことだしな」

そんな話を話している内に、料理が出来上がったようだ。

「美味そうだ。早速食べよう」

今日の夕食は『炎皇狼の肉』を使ったステーキだ。

初めて食べる食材なので、どんな味がするのか楽しみだ。

「う、美味しい!!」

一口食べた瞬間、俺はその美味さに叫んでしまった。

牛肉とも豚肉とも鶏肉とも違う、何とも表現しようのない味だが、滅茶苦茶美味い。

俺は一心不乱に、ガツガツとステーキを平らげていく。

「美味かったあ〜」

『満足しましたか、マスター？ステータスを確認してみると、さらに驚かれると思いますよ』

ラグにそう言われたので、ステータスを確認してみると

「AGIだけじゃなく、STRも上がってる!？」

何と、AGIが15、STRが10も上がっていた。

「これは驚いたな。AGIが上がるのは予想していたが、STRまで上がるとは……しかも、この上昇値は何だ……」

AGIだけでも『炎狼の肉』の3倍だ。

『かなりレアな食材ですからね。このくらいは当然です』

「これほどの物が手に入るなら、あいつとまた闘うのもありだな」

『……本当にマスターは素材が絡むと、人格が変わりますね』

「そこまで酷くはないだろ……」

……これくらいは普通のはずだ。

ついでにレベルアップしていたので、ポイントを割り振っておく。今回は3レベル上がっていた。

「さて、どのステータスを上げようか……」

少し悩んだが、結局HP、MP、SPに10ポイントずつ割り振ることにした。

これでHP、MPは33000に、SPは16000になった。

ポイントの割り振りが終わったので、デザートの実物の皮をナイフで剥いていく。



ちなみにこの果物、見た目と食感は林檎だが、味はバナナという変わった物だ。

まあ、美味いから別に構わないが。

果物を食べ終わり、皮剥きに使ったナイフや剥ぎ取りに使った多目的ナイフを布で拭いていると

「……………ああ、風呂に入りたい」

思わず、呟いてしまった。

「……………以前にも言いましたが、この世界に風呂に入る習慣はありませんので、無理です」

「……………わかってるよ。いつそのこと作るか」

これまでは濡らしたタオルで体を拭くだけだったが、もう限界だ。それに『炎皇狼』との闘いで、血塗れになってしまったので、拭いただけでは何か落ち着かない。

「作るって何処にですか……………」

「それが問題だよ……………」

これから色々な国を旅するのだ、一々風呂に入るために戻る訳にもいかない。

「……………やっぱり無理か」

「……………マスターは体を清潔に保つことができれば良いのですか？ それなら、そのような効果の魔術がありますよ」

「何！？ そんな魔術が在るのか？ 教えてくれ……………一応聞いておくが、上級精霊魔術とか言わないよな？」

上級精霊魔術なら、俺には使えない。

『大丈夫ですよ。聖属性下級魔術ですから』

良かった、それなら俺にも使うことができる。

「じゃあ、教えてくれ」

『はい。』ヒュアリフイケイション『浄化』です。マスターなら【無詠唱】があるので、呪文は要らないでしょう。』

さっそく使ってみるか。

「『ヒュアリフイケイション』  
浄化』」

すると、足元から真っ白な炎が噴き上がり全身を包む。

熱さを感じず、むしろ心地良いくらいに暖かい。

炎が収まったので、服を脱いで体を見ると、取り敢えず見える範囲は綺麗になっている。

しかも、外套に付いていた血の染みまで無くなっている。

「驚いたな。これは便利だ」

どうして今まで教えてくれなかったんだ　　と思っただが気にしないことにしよう。

『どうですか？』

「気に入ったよ。これなら迷宮でも使えるし、洗濯をする手間も省ける」

でも、やっぱり風呂に入りたい気持ちは変わらないがな……

『それは良かったです。それと、そのボロボロのシャツは替えないのでですか?』

……すっかり忘れていた。

装備ウィンドウを開き、シャツを新しい物に替える。手に持っていたボロボロのシャツはインベントリには入らず、光の粒子になって消える。

どうやら、耐久値が無くなってしまっていたようだ。

「シャツが1枚減ってしまったな」

まあ、また作れば良いか。

まだ素材は残っているし。

『それでは、そろそろ休みますか?』

「そうだな」

明日には『桜花』に戻れるだろう。

そんなことを考えながら、眠りに就いた……

「何か久しぶりだな。出発してから、そんなに日は経っていないのに」

『そうですね。ここを出発してから、10日程です』

もうそろそろ陽が沈もうかという頃に、『桜花』に戻ってきた。

『それで、どうされますか? ギルドに行きますか? それとも今

日は休んで、明日にしますか?」

うーん、そうだな……先に宿屋で予約してから、ギルドに行くか  
ギルドに行っている間に、宿屋の部屋が埋まってしまったら目も  
当てられない。

『それではマスター、何処の宿屋にしますか?』

この前泊まった『ソルンの導き亭』で良いだろう。飯も美味かつ  
たしな

『わかりました。それでは行きましょう』

そして、俺は『ソルンの導き亭』に向かって歩いていった。

しばらく歩くと宿屋が見えて来たので中に入ると

「いらっしやい。 ああ、あんたかい。しばらく見てなかったけ  
ど、無事だったんだね」

この前と同じおばちゃんが出迎えてくれた。

「迷宮に行っていたので……それで部屋は空いてますか?」

「ああ、空いてるよ。何泊するんだい?」

すぐに迷宮の攻略に戻るので、1泊で良いか。

「この前と同じ、1泊2食付きでお願いします」

「わかったよ。食事は夕食と明日の朝食で良いのかい?」

「はい。それでお願ひします。それとこの後ギルドに行くので、夕

食は帰ってきてからでお願いします」

「それじゃあ、戻ってきたら食堂に来ておくれ」

「わかりました。料金はこの前と同じですか？」

「ああ、6000テイルで前払いだよ」

「それじゃあ、これで」

迷宮で幾らかは手に入れているので、このくらいなら払える。

6000テイルを取り出し、カウンターに置く。

「ちょうどあるね。部屋は201号室だよ。鍵は帰ってきてから渡すよ」

「わかりました。それではギルドに行つて来ます」

「ああ、行つといで」

おばちゃんにそう言い、俺はギルドに行くために宿を出た。

ギルドには相変わらず多くの冒険者たちがいた。

「ロゼさんはいますか？」

俺は買い取り受付にいた、ギルド職員のお姉さんに尋ねた。

「デイン様ですね？ マスターより話は聞いております。一応確認のため、カードをお願いします」

「わかりました」

俺はインベントリからカードを取り出し、お姉さんに手渡す。

「確認いたしました。それでは呼んで来ますので、あちらの部屋で少々お待ち下さい」

「わかりました。ありがとうございます」

俺はお姉さんに礼を言い、指示された部屋に入っただけでしばらく待っている

「お久しぶりですね、ディーン様」

挨拶をしながら、ロゼさんが部屋に入ってきた。

「ロゼさんも久しぶりですね。それで、素材の買い取りをお願いしたいのですが」

「わかりました。その台の上に出して下さい」

ロゼさんはそう言いながら、マスクを着けた。  
相変わらず綺麗な女性ひつこだな。

そんなことを思いながら、インベントリから『精霊石』を含めた素材を取り出し、台の上へと置いていく。

どんだん台の上のスペースが埋まっていく。

「……ディーン様、後どのくらいあるのですか？」

「まだ半分くらいなんですけど……」

「………そうですか。では、置き切れない物は、床にでも置いて下さい」

ロゼさんの機嫌が若干悪くなった気がする……

『それはそうでしょう。これほどの量を鑑定するのは大変でしょうね』

うつ……それは気がつかなかった

でも、仕方ない。

今更、やめる訳にもいかない。

『お金も必要ですしね』

ロゼさんには気の毒だとは思うが、素材を取り出し床にも置いていく。

「え、これで全部です……」

『精霊結晶』を除く、迷宮で入手した素材を全て出した。

「わかりました。少し時間がかかりますので、お待ち下さい」

「何か、すみません……」

「お気になさらないで下さい」

俺はロゼさんに謝り、部屋を出た。

時間を潰すために、依頼を見ようと思ったからだ。

相変わらず、多くの依頼があるな

迷宮に行くついでに達成できそうな依頼を探していると

おっ、ソファアラさんからの依頼がある

ソファアラさんが出している依頼を見つけた。

『受けてみてはいかがですか、マスター？』

あの人には恩もあるしな

そう思い、改めて依頼内容を確認してみる。

「おいおい……」

あの人はなんて物を依頼するんだ……

依頼は『マンドラゴラ』の採取だ。

『マンドラゴラ』は非常に貴重で珍しい薬草だが、採取に失敗すると凄まじい叫び声を上げる特徴がある。

しかも、その叫び声には即死の効果がある。

さらに、叫び声には魔獣を引き寄せる効果もあるので、運良く即死を免れても魔獣に襲われるという厄介な薬草だ。

その所為か、依頼の発行日はずいぶん前だ。

『これでは誰も受けないでしょうね。しかし、マスターなら採取も可能なのでは？』

確かに可能だが、俺でも成功率は75%くらいだぞ

失敗しても『アイギス』があるので即死効果は無効化されるが、魔獣を呼び寄せる効果はどうにもならない。

『大抵の魔獣なら大丈夫でしょう？ それに『マンドラゴラ』は採取に失敗しても、それ自体が駄目になる物ではなかったはずですが』

ラグの言う通り、たとえ失敗しても『マンドラゴラ』自体は採取できる。

それに、魔獣も何とかなるだろう。

わかったよ。この依頼を受けよう



『わかりました。』『マンドラゴラ』は『火の精霊王の迷宮』の火山の上層に生えていたはずです。その点でもちょうど良いですね』

俺はソファアラさんの依頼が書かれた紙をボードから取り、受付に持っていく。

「この依頼を受けたいのですが」

「こちらの依頼で本当に宜しいのですか？　かなり危険なものとなりますが……」

やっぱり、この依頼を受ける人はいないんだな。

「ええ、構いませんよ。ソファアラさんは、個人的な知り合いでもありますし」

「デーン様なら大丈夫だとは思いますが……わかりました。ただし、達成できない場合は違約金などのペナルティがありますので、お気をつけ下さい。それでは、カードをお願いします」

インベントリからカードを取り出し、お姉さんに渡す。

「確認しました。ギルドとしても、その依頼を受けて下さって助かります」

「任せて下さい。必ず成功させますよ」

そんなことをしていると

「デーン様、鑑定が終わりました。先程の部屋までお越し下さい」

鑑定を済ませたロゼさんが呼びに来た。

「わかりました。すぐ行きます」

「それではデイン様、その依頼を宜しくお願い致します」

お姉さんに軽く手を振り、ロゼさんと一緒に部屋に戻る。

「依頼を受けられたのですか？」

部屋に戻る途中で、ロゼさんに尋ねられた。

「はい。知り合いの出していた依頼があったので」

「お知り合いですか……？」

ロゼさんは少し訝しげだ。

『当然でしょう。マスターはこちらの世界に来て、まだ日も浅いですしね』

「ええ、こちらに来たばかりの頃にお世話になったので、少しでもその恩を返せればと」

「そうだったのですか。ちなみにどのような依頼なのです？」

「『マンドラゴラ』の採取です」

「……あなたには、驚かされることばかりですね。ということ  
は、ソファラ様の依頼ですね」

「やっぱり、有名な人なのですか？」

「ソファラ様は優秀な薬師くすりですし、何よりその依頼は発行されてから、今まで達成されてませんからね。ギルド職員なら誰でも知っていますよ」

「そうだったんですか」

やっぱり、ソファラさんは有名だったんだな。

「それでは、鑑定結果をお伝えしますね」

「お願いします」

「全部で60万ティルになります。これは中級の冒険者が1年で稼ぐ額ですよ。一体、何処の迷宮に行っていたのですか？」

かなりの額になったな。

まあ、小さいのも含めると『精霊石』だけで数百個はあったからな。

「『炎竜の迷宮』と『炎皇狼の迷宮』ですよ」

「……たった10日ほどでその2つの迷宮をクリアしたのですか？ その迷宮はかなりの難易度で、上級の冒険者でも必ずパーティを組んで攻略するのですが……」

まあ、普通はそうだろうな。

ソロで行くのは、メリットよりデメリットの方が多いからな。

『マスターだからこそ、できることですね』

リシエルたちはどうだったんだ？

『彼女たちもパーティを組んでましたよ』  
そうだったのか

パーティか……

俺も少し考えてみるかな……

そんなことをラグと話していると

「デイン様、この後お時間はありますか？」

「……？ 宿屋に帰って休むだけなので、時間はありますよ」

「それでは一緒に食事でもどうですか？ 迷宮の話や、デイン様のことを聞いてみたいのですが……」

……マジで？

こんな美人から誘われてるのか？

『食事に、ですけどね……』

……わかってるよ。それくらい

「駄目ですか……？」

俺がラグと話していたのを、ロゼさんは断る口実を考えてると思っ  
たらしい。

「全然構いませんよ！！俺で良ければ、是非」

「それは良かったです。もう少しで私も仕事が終わりますので、し  
ばらく待っていてくれませんか？」

「良いですよ。ギルドで待ってます」

俺の返事を聞くと、ロゼさんは部屋から出ていった。

彼女を待つなら、いつまでも待てる。

『……………』

ラグから呆れたような気配がするが、気にしない。

この部屋にずっといるのもアレなので、俺も部屋から出ることに  
する。

受付の近くにある椅子にでも座ってるか。

そこならロゼさんも見つけやすいだろう。

手持ち無沙汰なので、特に汚れてもいないがナイフなどを手入れ  
用の布で拭いていく。

なあ、ラグ。俺、この街のレストランとか全く知らないんだが、

何処か良い所知ってるか？

『……私知ってる訳ないでしょう。そもそも、宿屋の食事はどうするんですか？』

忘れてた……どうしようか……キャンセルとかできるのか？

『別にキャンセルしなくとも、宿屋で食事すれば良いじゃないですか』

何か機嫌悪いな……

どうしたんだ？

何で怒ってるんだ？

『別に怒ってはいませんよ。呆れているだけです』

じゃあ、何で呆れてるんだ？

『マスターは女性に甘過ぎます。ロゼさんがそうとは言いませんが、悪意があったり、利用するために近づいてきたのだとしたら、どうするんです？』

誰にでもは、心を許したりはしないさ

『……どうですかね。相手が綺麗な女性なら、すぐに許してしまいうそですけど……』

おまえは、俺を何だと思ってるんだ……

『この世界には善人ばかりではないのですから、本当に気をつけて下さいよ』

俺の世界だってそうだよ

『わかっているなら、構いませんが……』

ラグは心配性だな

『このくらいでちょうど良いのです』

まあ、そうかもしれないな。

ナイフの手入れが済んだので、ついでにラグも鞆から抜いて拭いていく。

『何ですか？ ご機嫌取りですか？』

何で、俺がラグの機嫌を取らないといけないんだ。ついでだよ、ついで

『それなら構いませんが。手入れをされるのは嫌いじゃありませんしね』

何だ。ラグも手入れして欲しかったのか？ それならもっと早く言えば、毎晩手入れしてやったのに

『私は、特に手入れの必要はありませんからね。でも、マスターが良ければして下さい』

良いよ。そんなに手間がかかる訳じゃないしな

日課に『ラグの手入れ』も足しておかないとな。

「お待たせしました、ディーン様」

そんなことをしている内に、ロゼさんがやって来た。

「それほど待っていないので、気にしないで下さい」

俺はラグを鞘に納めつつ、立ち上がった。

ロゼさんはギルドの制服とは違う、パンツルックのスーツのような装いだ。

ロゼさんの雰囲気に合わせて、良く似合っている。

「その服、良く似合ってますね」

「お世辞でも嬉しいです。それで何処に行きますか？」

「俺はこの街のことをまだ良く知らないので、ロゼさんのお勧めの所で良いですよ？」

「私もあまりそういうところに詳しくはないので、ディーン様のお

泊りの宿屋の近くにあるところで良いですよ」

「俺が泊まっているのは『ソルンの導き亭』です。知っていますか？」

「知っていますよ。食事が美味しいことでも有名なので、そこにしましょう」

「わかりました。それじゃあ、行きましようか。あつ、あと『様』は付けなくて良いですよ。何か、恥ずかしいですし」

「わかりました。それでは行きましよう、ディーンさん」

そう言って、俺とロゼさんは『ソルンの導き亭』へと歩いていった。

『ソルンの導き亭』に着くまで、かなりの注目を浴びた。

そのほとんどが、ロゼさんを見る男達からの物だったが、俺と目が合うと皆、目を逸らしていった。

『マスターの顔は中々怖いですからね』

うるさい。気にしてるんだから言つなよ

「やっと帰ってきたね。おや、ロゼちゃんじゃないかい」

中に入ると、おばちゃんが声をかけてきたが

「知り合いなんですか？」

俺はロゼさんとおばちゃんの2人を見ながら尋ねた。

「ああ、この子が冒険者だった頃に良く泊まりに来てたからね。今日はどうしたんだい？」

「あの頃はお世話になりました。ディーンさんと食事に来たのですよ」

ロゼさんは元冒険者だったのか……

「へえ、あんたがこの坊やとねえ」

坊やって……

俺は20歳を超えてるんだが……

「食堂はまだやっていますよね？」

ロゼさんは、おばちゃんに言われたことを特に気にした様子もなく、尋ねている。

「やってるよ。すぐに行くから、先に行って少し待っていておくれ」

そう言って、おばちゃんはカウンターの奥へ入っていった。

「それじゃあ、行きましようか」

「そうですね」

食堂へ行き、しばらく待っているとおばちゃんがやって来た。

「それで、何にするんだい？」

「ディーンさんはお酒は飲めますか？」

「飲めますよ」

ジェラルドさんと飲んだ時にほとんど酔わなかったので、大丈夫だろう。



「それでは、お酒と料理を適当にお願いします」  
「わかったよ。しばらく待ってな」

ロゼさんの注文を聞き、おばちゃんはお奥へと入っていった。  
もう食事をするには少し遅い時間なので、食堂にはそれほど人は居ない。

「ロゼさんは冒険者だったんですね」

「もう10年も前の話ですよ。でも、だからこそディーンさんに興味を持ったのかもしれないね」

10年前!?

ロゼさんは一体いくつなんだ……  
流石に直接訊く訳にはいかない。

『マスター、『エルフ』や『ダークエルフ』は長寿なので、寿命は500年ほどですよ。私が見たところ、ロゼさんは100歳くらいです。まあ、人でいうとマスターと同じくらいです』

そうなのか。俺が知らない事は、まだまだあるな

「失礼かもしれませんが、ロゼさんはどのランクだったんですか？」

「私のランクは『A+(Aプラス)』でした。ディーンさんから見れば、大したことはありませんね」

『A+(Aプラス)』は次のランクがSランクという、かなりの高ランクだ。

しかも、今この世界にSSは俺ダブルエスしかいないので、実質、上から2つ目のランクだ。

「充分高ランクですよ。何故、冒険者を辞めてしまったのですか？」

「自分の力に限界を感じてしまったから、ですね。昔、『炎竜の迷宮』に行った時に痛感しました」

「そうだったんですか……」

何か、悪いことを訊いてしまったな。

「まあ、私のことは良いんです。それより、ディーンさんのことを教えてください」

「と言われても、何を知りたいんです？　ロゼさんには特に隠すこともないので、何でも聞いて下さい」

ロゼさんはもう俺が『来訪者』と知っているので、あっちの世界のこと以外は話しても良いだろう。

「それでは、迷宮での出来事を話していただけませんか？」

「わかりました。じゃあ、まずは『炎竜の迷宮』のことからで」

それから俺は『炎竜の迷宮』、『炎皇狼の迷宮』であったことや『フレイムドラゴン』、『炎皇狼』との戦闘のことを話していった。途中で酒や料理も出てきたので、食事をしながら、時にはロゼさんの質問に答えながら話した。

「これで、迷宮であったことはほとんど話しましたね」

「こうして話を聞くと、ますますディーンさんの凄さがわかりますね……私では『フレイムドラゴン』や『炎皇狼』の相手はとてもじゃないかもしれませんが、できそうにありません」

「そんなこともありませんかよ。流石に俺のように1人では無理かもしれませんが、パーティを組めばいけると思いますよ？」

「とてもそんな風には思えませんよ。Sクラスの方たちでも難しいでしょう」

Sランクか……

どんな人達なんだろうな。

『マスター。野盗たちのことを訊くのを忘れていますよ』

そうだった。

「後、迷宮に行く途中で野盗たちに襲われたんですけど、何か知りませんか？」

「……もしかして、それは『炎皇狼の迷宮』の近くですか？」

確かそうだったはずだ。

「そうです。何か知っていますか？」

「ええ。昨日、その辺りを通りがかった商人たちが知らせてくれたので、冒険者たちを派遣し、捕縛しました。でも、普通は野盗を倒した者はギルドに連行して報奨金を貰うので、倒した野盗がそのまま放置されているのはおかしい　という話になっていたんです」「そんなことになっていたんですか……」

やっぱり面倒臭がらず、連行すれば良かったか……

「でもその野盗を倒したのが、ディーンさんなら納得できます。報奨金は連行を依頼した冒険者たちに渡してしまいましたが、そういうことならディーンさんに渡しましょうか？」

「いえ、構いませんよ。偶々襲われたのを、返り討ちにしただけですし」

それに今日の換金で、しばらく金には困らないしな。

「わかりました。まあそんなことを言えるのも、ディーンさんだけでしょうね」

「ハハハ……」

あまり持ち上げられると、恥ずかしいな。

「ディーンさん、もし宜しければステータスを見せていただけませんか？ もちろん私のも見せます。」

うーん、どうするかな……

ステータスは生命線だしな……

まあ、ロゼさんも見せてくれるらしいし、良いか？

どう思う、ラグ？

『私は反対ですが、判断はマスターにお任せします』

俺は少し考え

「良いですよ」

結局、見せることにした。

食堂にはほとんど人もいないし、ロゼさんなら信用しても良いだろう。

俺はステータスウィンドウを可視状態にして開く。

「ッ！？ 何ですか、このステータスは！！」

「ロ、ロゼさん、静かに！！ 流石に他人に見られるのは、マズイので」

「す、すみません……あまりに凄まじいステータスなので……でも、

これで先程の話も納得できます」

まあ、これくらいのステータスがなければ、一人で『フレイムドラゴン』や『炎皇狼』と闘うのは無理だろう。

「それでは約束ですので、私のステータスもお見せします。ディーさんのを見た後だと、凄く恥ずかしいのですが……笑わないで下さいね？」

「そんなことしませんよ。約束します」

俺がそう言うと、ロゼさんもステータスウィンドウを開いた。

Name: ロゼ  
種族: 妖精族・ダークエルフ(転生0回)  
称号: なし  
Lv: 500 / 500  
HP: 10000 / 20000  
MP: 20000 / 20000  
SP: 7000 / 10000  
STR: 300 / 500  
DEX: 600 / 750  
VIT: 400 / 500  
AGI: 600 / 750  
INT: 1000 / 1000  
WIS: 1000 / 1000  
スキルスロット: 30 / 100

流石にダークエルフなので魔術に関するステータスは高いが、

STRやVITといったステータスは低い。  
しかし、それよりも俺が気になったのは

「……ロゼさん、何故『転生』しないんです？」

『自分の力に限界を感じた』とも言っていたのに、『転生』しない理由は無いはずだが……

「……？ デインさんは『転生』されているので、知っているとは思いますが……『転生』するためには、神々のクエストを受けなければなりません」

「……は？ 神殿に行けば良いのでは？」

『マスター、この世界には神界にしか神殿はありませんよ。今まで、この街で見なかったでしょう？』

そういえば見てないな……これもこの世界との違いか

「シンデンとは何ですか？」

「……いえ、気にしないで下さい。俺の勘違いだったようです」

それでラグ、『転生』のためのクエストは、どうやったら受けられるんだ？

『神に気に入られるしかありませんね』

何だそれは……

完全に神の気まぐれじゃねえか。

『それは……そうかもしれないですね。神々の中には、邪神龍を産み出す原因を作ったこの世界の人間を、あまり信用していない方もいますので』

それじゃあ、この世界には『転生』している奴はいないのか？

『いえ、かつてもいましたし、今もSランクの冒険者の何人かは『転生』しているようです』

『転生』できない訳じゃないんだな？

『はい』

「ロゼさんは『転生』したいですか？」

この世界で、力はあつて困るものではないはずだ。

「……できることならしたいですね。そうすれば私でも、微力ながらデーンさんの力になれるかもしれませんし……」

「何故、俺の力に……？」

俺の話聞いていれば、この旅がどれほど危険なのかわかるはずだが……

「……私は、この世界の命運を『来訪者』の方だけにお任せするのは、どうしても納得できないのです。自分たちの世界のことなのに、貴方だけが命を懸けて闘う、そんなことが許される訳がありません。もし世界が救われても、あなたが死んでしまえば、私はその世界で笑える自信はありません。もう知ってしまったのですから……」

「……もう充分、力になってもらってますよ。この世界に来てから、まだそれほど日は経っていませんが、色々な人達に助けられました。それだけで、俺がこの世界を救うのには十分な理由です」

それに、リシエルたちの遺志でもあるしな。

「……それだけでは、気が済まないのです。私たちも命を懸けてこそ、あなたやかつての『来訪者』の方たちに報いることができるのだと思います。もしかすると、かつての『来訪者』に同行した人達も、このような想いだっただのかもしれないね……」

『……確かに彼らも同じような気持ちでしたね』

リシエルたちの同行者のことか？

「はい。リシエル様たちも、同行を求める人達を最初は断っていました。最後にはその想いの強さに負けていましたね。マスターは違つかもしれませんが、やはり1人でできることには限界があるのです」

俺だつて、同じだよ。できることならパーティを組みたいが……

この旅に失敗は許されない。

できることなら、万全の状態で挑みたいが……

「……本当に危険ですよ？ 充分、わかっているとは思いますが……」

……

「ええ。それはディーンさんの話を聞いていて、痛いほどわかっています。それでも私は行きたいのです」

ロゼさんの気持ちは確かなようだが

「同行して欲しいという気持ちは、俺にもあります。しかし、気を悪くしないで欲しいのですが、今のロゼさんの力では、はつきり言って足手纏いです。せめて、『転生』していれば別でしたが……」

「……そうですね……無理を言つて、すみません……」  
ラグ、おまえの力で何とかならないのか？

『流石に、こればかりはどうにもなりません』

そうか……

その後、多少気ままずくなつたが色々な話をしながら、食事をした。

「ロゼさん、少し飲みすぎですよ……もうその辺にした方が……」

あれからロゼさんは、かなりのハイペースで酒を飲んでいる。



「まだ大丈夫です。今日は飲ませて下さい」

『マスターの所為ですよ』

何で俺の所為なんだよ……

心当たりが無いこともないが……

『同行を断られたのが、ショックだったのでは？』

やっぱりラグもそう思うか……？

『はい』

しかし、今の彼女を連れて行くのはかなり危険だ。  
そんなこと、できる訳がない。

『……マスター、ロゼさんが……』

「あゝ、ロゼさん？」

ラグと話したり、少し考えごとをしている間に、ロゼさんは酔い潰れてしまったようだ。

「ロゼさん、起きて下さい」

軽く肩を叩いてみるが、起きる様子はない。

「仕方ない。おばちゃん、ちょっと来て下さい」

俺ではどうしようもないので、おばちゃんを呼んだ。

「何だい？ そんな大声出して。あらまあ、寝ちまったのかい」

「はい。どうしましょう？ ロゼさんの家は何処ですか？」

「この子は、ギルドの裏手にある職員専用の宿舎に住んでるよ。でも、そんなことを聞いてどうするんだい？」

「いや、起きそうにないので、抱えて連れて行くのかと……」

「……あんだ、自分の顔を鏡で見たことあるのかい？ あんたがこの子を抱えて歩いていたら、あつという間に捕まっちゃうよ」

『プッ』

笑うんじゃねえ

「……じゃあ、どうすれば……そうだ、部屋は空いてないんですか？ 料金は俺が払いますから」

「いや、料金は別にいらさないよ。けど、残念だけど部屋は空いてないよ」

マジでどうするんだよ……

「どうするんです？ ここで寝かせておく訳にもいかないですし……」

「……」  
「あなたの部屋で休ませれば良いじゃないか」

「えっ！？ 流石にそれは……」

ロゼさんが起きた時を想像すると、怖いんだが……

「あんだが何もしなければ、大丈夫さ。それとも何かする気かい？」

おばちゃんがニヤニヤしながら訊いてくる。

「……何もしませんよ」

「なら良いじゃないか。それに、もしかすると何かしても大丈夫かもしれないよ？ なにせ、この子が男と食事するなんて、今まで無かったことだしねえ」

「何もしませんよっ！……」

かなりグラツときたが、そうおばちゃんに反論し、ロゼさんを抱え上げる。

ステータスのおかげもあり、このくらいは軽い。

『所謂、『お姫様抱っこ』ですね』

ラグの笑いを含んだ声が聞こえてくる。

……おまえ、そんな言葉、何処で覚えたんだ……

『リシエル様に教えていただきました』

あいつは、ラグに何を教えてんだ……

そんなことを言いながら、自分の部屋の前まで来た。

「おばちゃん、ドアを開けて下さい」

「わかったよ。それじゃあこの子のこと、宜しく頼むよ」

「わかりました」

そうおばちゃんに応え、部屋に入る。

ドアが閉められたので、取り敢えずロゼさんをベッドに寝かし、布団を掛ける。

「ハア、今日は床で寝るか……」

『一緒にベッドで寝れば良いのでは？』

こいつ、完全にからかつてるな……

「アホか。そんなことできるか」

『こづいうのを、何て言うのですか……ああ、そうだ。』ヘタレ』

ですね』

何か、少し違う気もするが……

「それも教えたのはリシエルか……？」

『はい』

「ハア、もう良い。寝る」

インベントリからシュラフを取り出し、装備を解除して潜り込む。何で宿屋に泊まっているのに、床でシュラフに潜って寝てるんだ

……？

そんなことを思いながら、眠りに就いた……

気がつくと、俺は真っ白な空間に立っていた。

「……何処だ、ここ？」

確か、俺は宿屋で寝ていたはずだ。

「ラグ、ここは何処だ？」

俺はラグに尋ねてみたが、答えは返ってこなかった。背に手をやってみると、ラグが無かった。

「どっなあってんだ……？」

周りを見てもみるが、何処までも続く白い空間が広がっているだけだ。

『お初にお目にかかります、デイン殿』

突然目の前の空間が輝き、1人の女性が現れ、話しかけてきた。

「誰ですか、あなたは？」

敵意は感じないが、一応何があっても良いように身構える。

『私は、輪廻を司る神『リン』と申します。此度はデイン殿にお願いがあつて参りました』

「その前に、ここは何処です？」

『ここはデイン殿の精神世界です。あなたにお会いするため、少しお邪魔させていただきました』

要するに、俺の心の中ってことか……

俺の心の中は、こんなに殺風景なのか……

『心と精神は少し違いますが……誰の精神世界もこのような所ですよ？ それよりも、この広さに驚いています。ここまで広大な精神世界を持つ者は、『神族』にもほとんどいないでしょう』

広いとどうなのかは少し気になったが、今はそのことよりも訊きたいことがある。

「それで、俺に頼みたいこととは何です？」

『それは、確かロゼさんでしたが、彼女を『転生』させるためのクエストを受けて欲しいのです』

「何故、そのことを知っているのです？ 話を聞いていたのですか？」

『はい。今、デイン殿のことを見ている神々は沢山います。それほど期待されているのです』

期待してくれるのは嬉しいが、覗き見されているのは良い気はないな。

……まあ良い、気にしないでおう。

「何故、突然そんなことを？ 彼女はかなり前に、レベル500に達していたはずですが……」

『転生』させるなら、もっと前にもできたはずだ。

『デイン殿の言われることはわかります。ですが、『転生』すればこの世界では、他者よりも圧倒的な力を得ることができません。誰でも『転生』させる訳には、いかなかったのです。『ジアハート』のこともありましたし……』

『ジアハート』だと……

まさかとは思つが……

「……ジアハートとは、3人目の『来訪者』のことですか？」

『ご存知だったのですね。ラグナレクに聞いたのですか？』

「いえ、奴とは色々ありまして……」

ジアハートは『VLO』のトッププレイヤーの1人だったが、同時に最凶最悪のPKでもあった男だ。

俺も何度も闘った。

何であんな奴を呼んだんだ……？

まあ良い、ディオスを問い詰めよう。

「ならば何故、ロゼさんの『転生』を認めたのです？ 確かに彼女なら力を手に入れても、他者に害を及ぼすとは思いませんが」

『昨夜の彼女の話聞いたからです。彼女の想いは本物でした。ですから、神々の間で話し合われ、彼女なら大丈夫だ ということになりました』

「それはわかりました。ですが、何故俺にクエストを受けさせるのです？ ロゼさんが受けなくても大丈夫なのですか？」

『今の彼女の実力では、一人でクエストをクリアすることは難しいでしょう。なので、デイン殿に手伝ってもらいたいのです。彼女の目的もあなたとともに旅をすることですので、ちよつど良いかと思われませぬ。もちろん、デイン殿の邪魔にならぬよう、クエストは『火の精霊王の迷宮』で達成できるものにしましょう。如何ですか？ 受けてもらえないでしょうか？』

別に、俺に断る理由も無いしな。

「わかりました。そのクエストを受けましょう」

『有り難う御座います。詳細はラグナレクに伝えておきます。そろそろ朝なので、お目覚めになった方が良いと思われませぬ。またお会いすることもありますが、その時も宜しくお願い致します。それではこれで、失礼します』

そう言つと、『リーン』は光とともに消え去つた。

「っていつか、もう朝かよ……全然寝た気がしないな……」

俺がそう言つと、意識が浮上するような感覚とともに目が覚めた。

「あれは夢……じゃないよな？」

確かに『リーン』と話した記憶があるが……

『夢ではありませんよ、マスター。リーン様からクエストの詳細を承っております』

「ラグ、その詳細はどんな内容だ？」

『はい。『火の精霊王の迷宮』で『ミラージュエント』を10体、単独撃破することですね』

「うーん、それならロゼさんでも何とかかなるか……」

『ミラージュエント』自体は近づかなければ、それほど脅威ではないだろう。

『マスターが他の魔獣を殲滅してしまえば、大丈夫でしょう。幸い、『ダークエルフ』は魔術の得意な種族ですし』

「そうだな。ところで、ロゼさんはまだ寝ているのか……」

俺はベッドの方を見ながら呟いた。

昨日、大分飲んでいたしな。

彼女が起きるまで、朝稽古でもしてくるか。

俺はラグを掴み、宿屋の外へ出ていった……

そうしてしばらく素振りをしてから宿屋に戻ると

「おはようございます、ディーンさん。昨日はすみませんでした」

ロゼさんが挨拶をし、頭を下げる。

「気にしなくても良いですよ。それよりも体は大丈夫ですか？ 大



分飲んでましたし」

「はい、大丈夫です」

本当に大丈夫なようだな。

「それではロゼさん、少し話があるのですが……朝食を食べたら部屋に行きましょう。仕事の方は大丈夫ですか？」

「今日は休みですので、大丈夫ですよ。それで話というのは……？」  
「ここではちよっと……」

「そうですね。では、朝食を食べてからにしましょう」

そうして俺たちは朝食を取り、部屋に戻ってから『転生』についての話をした。

「ほ、本当に『転生』できるのですか……？」

「ええ、できます。しかし、クエストをクリアすれば、ですが」

「それなら、是非私も『火の精霊王の迷宮』へ連れて行って下さい。お願いします」

「それは構いません。『リン』にも頼まれていますし。しかし、本当に危険ですよ？ 覚悟はできていますか？」

「できています」

「わかりました。一緒に行きましょう」

「ッ！？ ありがとうございます。足手纏いにならないようにしますので、宜しくお願いします」

「それで、ギルドはどうするんです？」

「そうですね。今からギルドマスターのところへ行ってきます」  
「俺も行きましょうか？」

「1人で大丈夫ですよ」

ロゼさんは微笑みながらそう言って、部屋から出ていった。

「本当に大丈夫かな？」

『大丈夫だと思えますよ。ロゼさんはしっかりした人ですし。マスタ―と違って……』

ラグが最後にぼそつと余計なことを付け足しながら、答えを返してきた。

「聞こえてるぞ。……それじゃあ、彼女が戻ってくるまでに、買い物を買わせておくか」

そう言い、装備を整えて宿屋を後にする。

ちなみに昨日のロゼさんの食事の代金も、ついでに払っておいた。そして、食糧を買うために朝市にやって来た。

「相変わらず、色んな食材があるな」

取り敢えずこの前買った物で、美味かった物を中心に買っていく。

ロゼさんは、好き嫌いがあると思うか？

『どうでしょう？ 昨日の様子ではそんな感じはしませんでした。が……野菜や果物を、もう少し買ってあげれば良いのでは？』

確かに女性だし、肉類ばかりでは駄目だろうな。

でもこの世界の野菜や果物は、妙なのが多いんだよね……  
「おっちゃん、この中でお勧めの野菜は？」

取り敢えず、店の人に聞いてみる。

「うちの野菜は、どれでも新鮮で美味しいぞ」

「特に美味しいのは？」

「そうだな、これなんかどうだ？」

おっちゃんはそう言って、人参の様な野菜を指さした。

「それはもう買ってあるよ。他には？」

この野菜、見た目は人参だが味や食感はジャガイモのような野菜だ。

スープに入れると美味しい。

「じゃあ、これはどうだ？」

今度はホウレン草のような野菜を指さした。  
ただし、色が真っ赤だ。

「それはまだ食べたことがないな。どんな料理に使うんですか？」  
「普通に炒め物にしても美味しいぞ。ただし、生では喰うなよ？ 凄まじく苦いぞ」

色からして辛いと思ったが、苦いのか。

「火を通せば、苦くないんですか？」

「少し苦味はあるが、それが美味しい」

ゴーヤみたいなものか？

「わかりました。じゃあ、それを下さい」

「おう、毎度あり」

他にも色んな店を回り、お勧めの物を買っていった。

「これくらいで良いか」

『かなりの量を買いましたしね』

まあ、攻略にどのくらい時間がかかるかわからないし、俺とロゼさんの2人分だしな

金はまだまだあるので、大丈夫だ。

『それではギルドに行きませんか？ そろそろ向こうも、話が終わっている頃でしょう』  
『そうだな』

そうして、ラグと話しながらギルドへと歩いていった。

「ロゼさん、どうでしたか？」

ギルドへ入ると、ちょうどロゼさんが2階から降りてきた。

「デーンさん。ええ、ギルドマスターには認めてもらえました。どうやら以前から、私の考えに気がついていていたみたいです」

流石はギルドマスターといったところか……

「それでは、私は手続きと宿舎に戻って準備をしてきます。デーンさんはどうされますか？」

「ここで待ってますよ。少しギルドマスターと話したいことも、あ

りますから」

「わかりました。それでは行つてきます」

そう言つて、ロゼさんはギルドを出ていった。

俺は職員の人にギルドマスターへの面会を求め、あっさり許可されたので2階へ上がり、ギルドマスターの部屋に入る。

「良う来たな。まあ座りなさい」

「それでは失礼して……」

アドルさんに勧められたソファアに座る。

「ロゼさんのこと、本当に良かったのですか？」

「あやつのは気持ちは、前から気づいておったしの。それにあやつは一度決めたら、梃子でも動かんのじゃ」

意外と頑固なんじゃ　と嘆息するようにアドルさんは言った。

「わかりました。アドルさんが納得されているなら、構いません」

アドルさんが納得しているなら、俺に言うことはない。

「ロゼのこと、宜しく頼む。それと以前言っていた調査のことじゃが、やはりもう少し時間がかかりそうじゃ」

「そうですね……俺の方もまだ『火の精霊王の迷宮』の攻略が残っていますから、ちようど良いですよ」

「そう言ってもらえると、助かるわい」

アドルさんとそんな話をしていると、ノックの音がして

「失礼します。ディーンさんはいますか？」

ロゼさんが入ってきた。

「はい。準備は済みましたが、ロゼさん？」

「済みましたよ。お待たせしてしまいましたか？」

「いや、俺も今まで話をしていましたし」

俺はアドルさんの方を見ながら答えた。

「ちょうど終わったところじゃ。これからすぐ迷宮に行くのか？」

ロゼさんは俺の方を見ている。

俺に答えるということだろう。

「いえ、すぐには行きませんよ。今日中には街を出ますが、少し準備してから行きます」

ロゼさんの装備などを作っておきたいしな。

「そうか。もし必要なら、ギルドの鍛冶場と工房を貸すんじやが、どうする？」

それは有り難い。

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、お借りします」

「場所はロゼが知っておるから、聞くと良い。それでは、2人ともくれぐれも気をつけて行くんじやぞ」

「わかりました。また来ます」

「有り難う御座います。お世話になりました」

ロゼさんはアドルさんに深々とお辞儀をし、俺とともに部屋から出る。

「それじゃあ、工房に案内して下さい」

「わかりました。こちらです」

ロゼさんに案内され、ギルドに併設された工房へと歩いていった

……

「それじゃあ、ロゼさんの装備を確認させてもらえませんか？」

工房に着き、俺はさっそくロゼさんの装備を確認する。

「わかりました」

ロゼさんは持っていたザックからフード付きのローブや魔導杖ロンドンを取り出した。

俺は1つ1つ手に取り、確かめていく。

「うーん、悪い物ではないんですが……」

それなりの素材で作られてはいるが……

「これ、全部作り直しても良いですか？」

この装備では『火の精霊王の迷宮』は厳しいだろう。

「そんなことをしていただけるんですか？ 是非お願いします」

「元々そのつもりでしたから、構いませんよ。後、仲間になったんですから敬語はやめませんか？」

「わかりました。それじゃあ、ディーンさんもやめて下さいね？」

「わかりました。いや、わかった。これで良いか？」

普段、ラグと話している口調に変える。

「ええ」

「それじゃあ、しばらく時間がかかるけど、どうする？」

「作業を見てても、良い？」

「別に見てても面白くはないと思うけど、構わないよ」

俺はそう答え、準備を始める。

ローブは俺の外套と同じ素材で、魔法魔導杖は『陽光樹』を使い、作ることにする。

そうして、俺は作業を始めた……

「よし、終わった」

かかった時間は2時間くらいか？

ローブは、流石に黒はアレなので、スキルを使い青空のような青にした。

魔法魔導杖は『陽光樹』で本体を作り、先端には『精霊結晶』を取り付けてある。

ついでに、『玉兔の魂』を使ったネックレス状のアクセサリも作った。（本来はこつちが目的だったけど……）

『陽光樹』と『精霊結晶』は魔術と相性が良いので、魔術のブースト効果も充分だろう。



「……本当に凄い。ディーンは何でもできるのね……こんな装備、本当に貰っても？」

「良いに決まってる。ロゼのために作ったんだから。装備してもらわないと、意味が無いよ」

ちなみに互いに呼び捨てなのは、敬語を止める時に『さん』付けも止めたのだ。

「わかったわ。有り難く使わせてもらうわね」

「それじゃあ、次は鍛冶場に案内してくれないか？」

「ええ。こつちよ」

そして俺たちは鍛冶場に行き、ロゼ用の『オリハルコン結晶』製のナイフを作り、街を出ることにした。

「それじゃあ、行こうか」

「ええ、行きましょう」

俺たちは街の出口に来ていた。

俺はいつもの装備、ロゼは私物のシャツ、ズボンの上から俺の作ったローブを羽織り、手には魔導杖マウンドを持っている。

そして、腰のベルトには多目的ナイフの鞘を挿している。

このナイフは料理に使ったり、そんなことを許すつもりは毛頭ないが、万が一、魔獣に接近された時に使う物だ。

このナイフはサブウェポン扱いなので、魔導杖マウンドを装備してても使える。

魔導杖マウンドで殴っても良いが、殺傷力に欠けるためだ。

「大丈夫だとは思いますが、気をつけるよ？」

「私も冒険者だったのよ？ わかってるわ」

そんなことを言い合いながら、俺たちは『火の精霊王の迷宮』へ  
向かって歩き出した……

## 第7話 『火の精霊王の迷宮』、そして『転生』

「『ダークニードル』」

ロゼが掲げた魔導杖ワンドから、闇を凝縮したような無数の針が、鳥型の魔獣に向け放たれる。

無数の闇の針に貫かれた魔獣は、呆気なく墜ちていく。

「どう？ 私の魔術は」

魔導杖ワンドのブーストを受けてはいたが、【詠唱破棄】を使ってこの威力なら問題はない。

しかし

「威力は問題ないよ。でも魔術の使い方の問題があるな。何故、闇属性上級魔術の『ダークニードル』を使ったんだ？あの程度の魔獣なら、下級魔術で充分だったはずだ」

「それは……」

「言い訳はしない約束だろ？」

俺は『火の精霊王の迷宮』に着くまでに襲ってきた魔獣で、ロゼの戦闘訓練をすることを提案したのだ。

ロゼも望んだのでいくつか約束をし、訓練をすることになった。

その約束の1つが『言い訳をしないこと』で、先程の戦闘が最初の戦闘だった。

「う……ごめんなさい」

「魔力（MP）は、当然だが限りがある。確かにロゼの魔力量は多いが、迷宮では連戦になることも珍しくはない。温存できるならし

の方が良い。そのためには魔獣の強さを知らなければならぬが、確かロゼは【リーブラの魔眼】を使えただろ？ これからは必ず魔獣の強さを確認して、過剰な威力の魔術を使わないようにな」

「わかったわ」

「もちろん身の危険を感じれば、そんなことは気にしなくて良いからな？」

ロゼは俺の言葉に頷くとナイフを抜き、さっきの魔獣の剥ぎ取りをしに行った。

『マスターにしては厳しい言葉でしたね』

当たり前だろ。ロゼの命が懸かってるんだ。手抜きも遠慮もしないさ

『そうですね』

それにしても、あのナイフは一応、料理に使う為に作ったんだけどな……

『ロゼさんはそんなこと気にしないのでは？ 冒険者歴も長そうですし』

まあ、本人が気にしていないなら、良いか

「終わったわよ。行きましよう」

「ああ、行くところ。魔術を使う時は【詠唱破棄】を使うのを忘れるなよ？」

できれば早めに【詠唱破棄】をマスターして、【無詠唱】を覚えてもらいたい。

「わかってるわよ」

そして、俺たちは迷宮に向かって歩いていった……

「何故、わざわざ森の中で野宿するの？」

「それは後でわかるよ。それより、どっちが料理する？ ロゼは【料理】スキル持ってるよな？」

今は日も暮れ、森の中で野宿の準備中だ。

あれから何度か魔獣に襲われたが、ロゼが危なげなく倒していった。

「失礼ね。持ってるわよ。何なら今日は私が作りましょうか？」

やはり女性だからなのか、料理には自信があるようだ。

「それじゃあ、お願いするよ。俺はその間に薪を拾ってくるから」

そう言っただ俺はインベントリから『調理道具一式』と食材を取り出し、ロゼに渡す。

「わかったわ。気をつけてね。まあディーンには、必要ないかもしれないけど……」

「ハハハ、ありがとう。じゃあ、行ってくる」

ロゼに応え、俺は薪を拾いに行く。

そうしてしばらく薪を拾っていると

『良かったのですか、マスター？』

何がだ、ラグ？

『ロゼさんに料理を任せましたことですよ。彼女は恐らく、剥ぎ取りに使ったナイフで食材を切りますよ?』

ああ、忘れてた……

まあ、大丈夫だろう

自分で作る時は気にするだろうが、それ以外の時は気にしないようにしよう。

そうしている内に、充分な量の薪が集まったので戻ることにする。

「おかえり。料理はもう出来てるわよ」

野宿している場所に戻ると、料理が出来上がっていた。

「おっ、美味そうだな」

出来ていた料理は、定番のシチューのような料理だ。

これを見る限り、ロゼの【料理】の熟練度は俺とほぼ変わらないようだ。

「それじゃあ、食べましょう?」

「ああ、食べよう」

俺は薪を置き、料理を食べることにした。

なるべく食材を切ったナイフのことは考えないようにしつつ、シチューを1口食べる。

「美味い」

「良かった。いっぱい食べてね?」

やはり俺が作る物より、野菜が多く使われているが美味い。  
そうして2人と料理を食べ終わり、一息吐いていた。

「そういえば、森の中で野宿する理由をまだ教えてもらってないわ  
そうだったな。

ついでだし、ラグのことも教えてしまっても良いか？

『構いませんよ』

「わかった。それじゃあ、ラグ、ロゼに挨拶を」

『はじめまして、ロゼさん。私は『ラグナレク』 ラグとお呼び  
下さい』

ラグがロゼにも聞こえるように話す。

「い、今のは何！？ 頭の中に直接、声が聞こえてきたわ！！」

やっぱり驚くよな……

「ロゼ、落ち着け。今のはこいつの声さ」

そう言って俺は、ロゼの前にラグを差し出した。

「……た、確かに、『ラグナレク』とは言っていたけど……」

「ラグは意思を持つ剣なんだ」

『はい。私は意思を持っています。これから、宜しく願います  
「驚いたわ……すると、偶にディーンが黙り込んでいたのは 呼

び方はラグで良いのかしら、ラグと話していたのね？」

「ん？ ああそうだな。ロゼの前でも何度か話していたな」

「……何を話していたかは、聞かないであげるわ」

「ハハ、そうしてもらうと助かるよ……それとラグには、もう一つ機能があるんだ。ラグ、【鋼系形態】」

『了解しました』

ラグが光の粒子になり、手甲に変化する。

「こういう風に、ラグは剣以外の形態にもなることができる」

そう言いながら、俺はロゼに両腕の手甲を見せる。

「……………」

ロゼの目が点になってる。

「ロゼ、ロゼ！ 大丈夫か…？」

「……もう、ディーンのことでは驚かないと決めていたけど、これには驚いたわ……『ラグナレク』に意思があつて、しかもこんな機能があつたなんて……」

「まあ、驚くよな。という訳で、これからはラグのことも宜しく頼むよ」

『宜しく願いますね、ロゼさん』

「こちらこそ宜しくね、ラグ」

挨拶が済んだので、俺は鋼系を展開する。

「何をするの？」

「鋼系で魔獣が近寄らないように、罾を作るのさ。これには木を利用しないといけないから、森の中で野宿するんだよ」

「そうだったの……寝ずの番を立てなくても良いし、これは便利ね」



「だろう?」

そんなことを話しながら寝る準備を始める。

「明日には『火の精霊王の迷宮』に着くか?」

俺はラグに尋ねた。

『はい。今日と同じくらいのペースで行けば、昼頃には着くでしょう』

「そうなの? それじゃあ、明日のために早めに寝ましょう」

そう言っつて、俺たちは自分のシユラフに潜り込んだ。

「おやすみ、ロゼ、ラグ」

「おやすみ、2人とも」

『おやすみなさい、マスター、ロゼさん』

俺たちは挨拶を交わし、眠りに落ちていった……

あ、ラグの手入れを忘れた……

まあ、良いか……

翌日、昨日ラグが言ったように昼過ぎには迷宮の入り口へ辿りついていた。

「ここが『火の精霊王の迷宮』なの?」

「そうだ。ロゼは来たことがないのか?」

俺たちの前には『炎皇狼の迷宮』ほどではないが、広大な森が広がっている。

「ええ、ここに来るのは初めてよ」

「そうなのか。ラグ、こここの構造は森と火山の2つに分かれているのか？」

『はい。その通りです』

やはり『火の精霊王の迷宮』の構造は『迷路型』<sup>メイズ</sup>の森と、『迷宮型』<sup>ダンジ</sup>の火山という2つの構造を持つ、『特殊型』<sup>アンノウン</sup>の一種のようだ。

「どういうことなの？」

「聞いての通り、この迷宮は2つの構造を持っていて、前半は目の前の森、後半は向こうに見える火山を攻略していくことになる」

俺は森の向こう側に見える、噴煙を噴き上げている火山を指差しながら答えた。

「大変そうね……」

「その通りだ。かなりの長丁場になるから、覚悟しておいてくれよ？ それとロゼには、この森の中で『転生』<sup>メイズ</sup>をしてもらってから、そのつもりで」

ロゼが『転生』<sup>メイズ</sup>するために必要なクエストの討伐対象になっている『ミラージュエント』<sup>ダンジ</sup>は、この森に出現する。

「わかったわ」

ロゼは期待からか、緊張からか、魔導杖<sup>ロンド</sup>を握り締めている。

「そんなに緊張しなくても、フォーローはするから」

『そうですね、ロゼさん。マスターが守ってくれますよ』

「わかったわ。ちゃんと守ってね？」

俺とラグの言葉で緊張も解けたのか、笑顔でそう言った。

「任せろ。ただし知っているとは思うが、迷宮の魔獣は外の奴らより遥かに強いから油断はするなよ？」

ロゼが俺の言葉に頷いた。

『それでは、行きましょう』

ラグの言葉で、俺たちは森の入り口へと歩いていった……

『火の精霊王の迷宮』 森林部 第1区画

俺たちは今、森林の中の道を周りを警戒しながら並んで歩いている。

「さて、迷宮に入った訳だが、ここに出る魔獣は上位種ばかりだ。決して油断はしないようにな。それと『ミラージュエント』が出たら、俺が周りにいる奴らの相手をするから、ロゼは『ミラージュエント』の相手をするんだ。あいつは動きは遅いし、魔術は使わないから、近づかず遠距離から魔術を撃ちまくれ」

「わかったわ。任せておいて」

「よし、じゃあ行こう」

そうしてしばらく進むと、前方に『ヘルウルフ』が5匹と『クリムゾンホーク』が1羽、こちらに向かって来るのが見えた。

「ロゼ、魔獣だ。『クリムゾンホーク』が1羽いるから、そいつは任せた」

「了解」

俺はロゼの返事を聞きつつ、群れに向かって駆ける。

「『シャドウブレード』」

ロゼが呪文を詠唱するのが聞こえ、三日月状の黒い刃が5つ、『クリムゾンホーク』に向かっていく。

俺はそれを横目に見ながらラグを抜き、【縮地】で一気に距離を詰める。

距離を詰めた1匹を一刀のもとに斬り伏せ、すぐさま別の奴の元へと跳ぶ。

そうして、次々と『ヘルウルフ』を屠っていく。

最初の1匹を倒してから20秒ほどで『ヘルウルフ』を殲滅した俺は、ロゼが闘っている『クリムゾンホーク』の方へと目を向ける。

「あっちも終わったようだな」

ちょうど『クリムゾンホーク』が黒い刃に切り裂かれ、墜ちながら消えていくところだった。

俺は周りに落ちている『精霊石』を拾い、ロゼの方へ歩いていった。

「やったな、ロゼ」

ロゼも『精霊石』を拾い、こちらに歩いてきていた。

「1羽だけだったから、大したことなかったわ」

「流石は元『A+(Aプラス)』と言ったところか」

「からかわないで。それよりも、ディーンの方が凄かったわよ。『ヘルウルフ』5匹をあんなにあっさり倒してしまうなんて」

「それほどでもないさ。それじゃあ、先に進もう。日が暮れる前にセーフルームを見つけておきたい」

そう言っつて、俺たちは先に進むことにした。

歩きながら、戦闘での基本的な役割分担を決めていく。

「ロゼは『クリムゾンホーク』みたいな、空を飛んでいる魔獣を優先的に攻撃してくれ。俺がその間に敵の注意を引きつつ、地上にいる奴らを片付けるから」

「ええ、わかったわ」

「それじゃあ、基本的にはそういうことで」

そんなことを話しながら進んでいると、また魔獣の群れがいた。

「流石はこの国の最高難易度の迷宮だな。魔獣との遭遇率が半端じゃない」

しかも、『ドウルガ』の上位種『ドウルガン』が混じっている。

こいつは『ドウルガ』と同じく他の魔獣を呼び寄せるので厄介だ。

さらに、ラッキーなのはわからないが、『ミラージュエント』までいる。

「ロゼはさっきと同じように、『クリムゾンホーク』から片付けて

くれ。それが終わったら、『ミラージュエント』だ」

ロゼに指示を飛ばすと同時に群れに向かって駆ける。

「ラグ、【大鎌形態】」  
デスサイス

『了解しました』

右手の剣がデスサイス大鎌に変化するのを、重さで確認しながら左の魔導銃を抜く。

「『ダークニードル・レイン』」

ロゼが闇属性上級範囲魔術『ダークニードル・レイン』を使った。  
『ダークニードル』と同じような闇の針が、上空から魔獣の群れに向かってまさに豪雨の如く降り注ぎ、上空を飛んでいた3羽の『クリムゾンホーク』の内の2羽を貫き、さらに地上にいた魔獣すら貫いていく。

流石に地上にいた奴らには致命傷を与えられなかったようだが、動きが止まる。

「ナイスだ」

俺は動きを止めた『ドウルガン』を魔導銃で撃ち貫き、魔術の範囲外にいた『クリムゾンホーク』も撃ち落とす。

すぐさま魔導銃を戻し、ロゼの方へ行こうとしていた『ヘルウルフ』2匹を大鎌で薙ぎ払う。  
デスサイス

ロゼが『ミラージュエント』に魔術を放つのを確認しながら、飛びかかってきた『メギドリザード』を回し蹴りで粉碎、そのまま回転しつつ魔導銃を抜き、『バウジীগ』に弾丸を撃ち込む。

「これで『ミラージュエント』以外は片付いたな」  
『あちらも、もうすぐ終わるでしょう』

俺は周囲を警戒しながらロゼの闘いぶりを眺める。

当然危なくなれば助けに入るつもりだが、その必要もなさそうだ。  
ロゼの放った5つの黒い刃に、『ミラージュエント』が切り裂かれる。

「終わったな」

『そのようですね』

そう言ってロゼの方へ歩いていく。

「ロゼ、大丈夫か？」

「……ええ、大丈夫よ。少し魔力を使いすぎただけだから……」

ロゼは少し息があがっていた。

『最初の魔術は上級範囲魔術でしたからね。その分、魔力消費が激しかったのでしょ』

「そうだな。だけど、あれは良い判断だった。俺も助かったよ」

「ふふ、どういたしまして」

「ロゼはそのまま休んでいてくれ。『精霊石』は俺が集めてくるよ」  
「そうさせてもらっわ……」

そう言って、ロゼはその場に座った。

俺は周囲の警戒を怠らないようにしながら、散らばっている『精霊石』を集めていく。

ロゼには『玉兔の魂』で作ったアクセサリを装備させているので、魔力もすぐに回復するだろう。

あのアクセサリに付いている【MP自動回復】のスキルは、1秒間にMPを最大値の0.3%回復させるという驚異的なものだ。

「もう、行けるか？」

『精霊石』を拾い終わったので、ロゼに声をかけた。

「大丈夫よ。行きましょう」

『後、9体ですね』

討伐する『ミラージュエント』のことだろう。

「ああ、そうだな。でもロゼの闘いぶりを見る限り、すぐに終わりそうだな」

「そうだと良いわね。私も早く『転生』したいから」

そんなことを話しながら、俺たちは攻略を再開した……

「もうすぐセーフルームに着くはずだ！ 頑張れ！！」

俺はすぐそこまで迫っていた『ヘルウルフ』2匹を纏めて叩き斬りながら叫んだ。

「『ウォーターボール』！！ 流石にこれはちょっとキツイわね……」

ロゼが『クリムゾンホーク』に向かって水球を放つ。

あれから俺たちは、魔獣の群れと何度も遭遇したが難なく倒して



きた。

しかし陽も沈みかけ、そろそろセーフルムを見つけられるだろう　　と思っていたところに『ミラージュエント』2体と『ドウルガン』3体を含む、数十匹の魔獣の群れに引っ掛かってしまった。

『ドウルガン』2匹は俺が即座に始末したが、もう1匹は他の2匹より知能が高いのか、何と『ミラージュエント』の上に乗って隠れていたのだ。

途中までそれに気がつかず、仲間を呼ばれてしまった。

さらに十数匹の魔獣が群れに加わり、流石にこれはマズイ　　と思つてセーフルムに向け撤退中である。

最初に俺がロゼを抱えて群れを飛び越えたので、今は背後から追撃されている訳だが

「チツ！！　このままじゃ埒が明かないな。ロゼ、範囲魔術はまだ使えるか？」

「後3回くらいなら、回復を待たなくても使えるわ」

「なら頼む。ロゼの魔術に合わせ俺が突っ込むから、ロゼは『クリムゾンホーク』と『ミラージュエント』を倒してくれ」  
「わかつたわ」

走りながらそう言葉を交わすと

「準備は良いか？」

「ええ」

「じゃあ、始めてくれ」

俺はそう言うと、靴底で地面を削りながら振り返る。

ロゼもそのまましばらく走り、振り返ると

「『シャドウブレード・ミリアド』」

即座に魔術を放った。

無数の黒い刃が魔獣を切り裂いていく。

「ラグ、【魔法剣】起動。『ゼピュロス』」  
『了解しました』

ラグが応えると同時に、剣が旋風を纏う。

それを確認しつつ、俺は群れへと突っ込んだ。

先頭にいた『ヘルウルフ』を逆袈裟に斬り裂く。

すると旋風が巻き起こり、周りの魔獣を切り裂き、吹き飛ばす。

吹き飛ばされた魔獣を闇の針が貫くのを確認しつつ、『メギドリザード』を縦に分断する。

さらに突風が荒れ狂い、魔獣たちを吹き飛ばしていく。

「流石に『ミラージュエント』は無理か」

体重の軽い魔獣は粗方吹き飛ばしたが、流石にでかいだけあって『ミラージュエント』はこの突風に耐えている。

「本当はロゼに倒させたいが、仕方がないか……」

もう1体の『ミラージュエント』はすでにロゼが倒しているので、こいつは俺が倒すか　とまっていると、ロゼが放った『ダークニードル』が『ミラージュエント』を貫いていった。

「やるなあ。でもこれで、数はまだいるが、残っているのは雑魚ばかりだな」

そう呟くと俺は【魔法剣】を停止、【縮地】でロゼの傍まで跳ん

だ。

「ラグ、【魔導杖形態】だ」

「何をする気なの、デイン？」

ロゼが不思議そうに訊いてくる。

「面倒だから、一気に終わらせる」

そのために【魔法剣】で吹き飛ばし、距離を取ったのだ。

俺は魔導杖ワンドに変化したラグに、【魔力装填】で大量の魔力（MP）を込める。

その量は1万だ。

余剰の魔力が漏れ出し、魔導杖ワンドがぼんやりと蒼く輝く。

「『レゾリユーション』」

俺は魔導杖ワンドを掲げ、魔術を放った。

魔導杖ワンドから魔獣たちへと不可視の波動が迸る。

すると、魔獣たちは先頭にいた奴から次々と塵へと分解されていく。

そして、数秒ほどで残っていた十数体の魔獣は全て塵へと還った

……

「い、今のは何の魔術なの……？」

「無属性最上級殲滅魔術『レゾリユーション』さ」

この魔術は、同じ無属性最上級魔術の『ショックウェイブ』のように魔術を掻き消したり、麻痺を与えるような効果は無いが、複数  
の魔獣を一瞬で消し去ることができる強力な魔術だ。

ただし、成功率はかなり低く消費魔力も5000とかなり多い。  
そこで俺は魔導杖にはアーツスキルが存在しない替わりに、魔力を込めれば魔術の威力や効果が発動する確率が上がる『ブースト能力』があるのを利用し、大量の魔力を魔導杖に込めてこの魔術を放ったという訳だ。

「……そんな魔術も使えたのね……私が仲間になった意味ってあるのかしら……？」

「さっきの戦闘でも、的確なフォローをしてくれたじゃないか。仲間になってくれて、本当に助かってるよ」

「……まあ私が連れて行ってって言ったんだから、良いんだけどね」  
そんなことを話しながら『精霊石』を拾っていく。

ちなみに『レゾリユーション』で魔獣を倒しても、『精霊石』は残る。（迷宮の外で使えば、素材は手に入らないだろうが……）

「かなりの量ね。これだけで、一体いくらになるのかしら……」

流石にギルドで鑑定をしていただけあって、そういうことが気になるようだ。

「そういうことはロゼの方が詳しいだろう？ 大体どのくらいになるんだ？」

「詳しく鑑定してみないとわからないけど、これだけで5万ティルはありそうね」

そんなにあるのか。

セーフルームに着いたら、詳しく鑑定してもらおう。

「それじゃあ拾い終わったし、先に進もう。もう少しでセーフルー

ムのはずだ」

「ええ、行きましょう。はい、これ」

俺はロゼが渡してきた『精霊石』をインベントリに放り込み、先へ進んで行った……

あれから15分ほど進むとセーフルームに着いたので、まずは食事にすることにした。

「今日は俺が作るよ。ロゼはその間、鑑定していてくれ」

俺はそう言い、インベントリから今日入手した『精霊石』を出していく。

「わかったわ」

ロゼは俺が取り出した大小様々な『精霊石』を手に取り、鑑定していく。

「さて、何を作ろうか」

俺はインベントリにある食材を眺めつつ、メニューを考えた。これを使ってみるか。

市場のおっちゃんに勧められた真っ赤なホウレン草みたいなヤツだ。

それと肉を使った炒め物に、スープとパンで良いか。

メニューを決め、手際良く料理を作っていく。

10分ほどして料理が出来上がったので

「食事が出来たぞ。食べよう」

鑑定はまだ終わっていない様子だったが、ロゼを呼んだ。

「わかったわ」

ロゼが手を休め、こちらに来たので夕食を手渡す。  
そうして食事をしていると

「今日のことを考えると、あの時ディーンが大量の『精霊石』を持って来たのも納得できるわ」

「あの時は悪かったな……」

意外と根に持っているのか……？

「仕事だったし、気にしてないわ。それに食事も奢ってもらったよ  
うだしね」

「なら良いが……それに、今日みたいなでかい群れにいつもいつも  
遭遇する訳じゃないぞ？」

『そうですかね？ マスターはかなりの頻度で、大きな群れに遭遇  
していると思いますが』

そうだったか？

考えてみると、そんな感じもする……

「……まあ、経験値や『精霊石』を沢山入手できるから、良いんだ  
よ」

『そつえば、今日だけで5体も『ミラージュエント』を倒しまし  
たね』

「そうね。この調子でいけば、遅くても明後日には『転生』できるかしら?」

今日遭遇した『ミラージュエント』は全てロゼが倒したので、すでに目標の半分だ。

「早ければ明日にはできるかもな。それと【詠唱破棄】の熟練度はどうなっている?」

俺が聞くと、ロゼはステータスウィンドウを開いた。

「そっちも、もう990になってるわ。明日にはマスターできそう」

仲間になってから、魔法を使う際は必ず【詠唱破棄】を使うように言っているので、熟練度も早いペースで上がっている。(まあ、元々900はあった訳だが……)

「それは良かった。【詠唱破棄】と【無詠唱】では、消費魔力も威力も段違いだからな」

【詠唱破棄】はマスターしても、消費魔力は2倍で効果は0.5倍だ。

しかし【無詠唱】は覚えてたでも、消費魔力は1.5倍で効果は0.7倍だ。

そんなことを話しながら食事をする。

今まで1人で食事をしていたが、やっぱり1人より誰かと一緒に食べる方が美味しく感じられるな。

「片付けも俺がするよ。ロゼは鑑定の続きでもしていてくれ」

2人とも食べ終わったので、俺は片付けをすることにした。

「ありがとう。美味しかったわ」

ロゼはそう言うと、鑑定の作業に戻っていった。

そうしてしばらく経ち、俺は片付けが終わったので、ラグの手入れをしながらロゼが鑑定をするのを眺めていた。

「ふう、終わったわ」

「お疲れ様。果物、食べるか？」

俺は剥いておいたバナナ味のリンゴ　　のような果物　　をロゼに手渡す。

「ありがとう」

「それで、いくらになりそうだ？」

「15万テイルほどかしらね。かなりの額だわ」

「結構な額だな。金はあつて困る物でもないし、助かるな」

これからも金は絶対に必要な物だからな。

「そうね。でも、これを鑑定するギルドの職員の事を思うと……」  
「……………」

まあ、仕事だと思って諦めてもらおう。

『それではマスター、ロゼさん、明日も早いのでもう休みませんか』  
『？』

「そうだな」

「そうね」



俺たちはラグの言葉に従って寝ることにする。  
俺はインベントリから2人分のシュラフを取り出し、片方をロゼに渡す。

「あつ。後、私のザックも出して？」

インベントリにはロゼの私物も入っている。

「はい」

ザックを出し、ロゼに手渡す。

ロゼはザックから着替えを取り出ししているようだ。

「『ヒュアリフイケイション浄化』は使わないのか？」

これを使えば、特に着替えなくても良いはずだが……

「使つわよ。気分の問題よ」

女性ならではの　と言ったところか？

「これから着替えるけど、こつち見ないでね？」

俺は素直にロゼに背を向ける。

口調は優しくかったが、目が『見たら殺す』と語っていた：

まあたとえ見たとしても、ロゼのステータスじゃ俺は殺せないがな。

『そういう問題ではないでしょう……』

どうやら俺だけに話しかけているようだ。

冗談だよ。そんなことする訳ないだろ

しかし後ろでゴソゴソと着替えの音がするのは、中々忍耐力を試される。

戦闘の後は性欲が増すっていうのは本当なんだろうか……？

『私が知っている訳ないでしょう。ロゼさんに言い付けますよ？』

俺が悪かったから、それだけは勘弁してくれ

「もう良いわよ。ってどうかしたの、ディーン？」

ロゼの着替えが終わったようだ。

「い、いや、何でもないよ」

そう言って、俺も『ヒュアリフイケーション浄化』を使い、装備を外してシュラフに潜り込む。

「そう？　なら良いけど……」

ロゼもシュラフに潜り込んだ。

『それでは明日も頑張りましょう、マスター、ロゼさん』

「ああ」

「おやすみ、ディーン、ラグ」

そうして、俺たちは眠りに落ちていった……

『火の精霊王の迷宮』 森林部 第2区画

「今日中に第3区画までは行っておきたいな」

俺たちは今日も朝から迷宮の攻略をしている。

「でも、こつも魔獣に襲われ続けたんじゃ厳しいかもね……」

まだ攻略を始めてから2、3時間しか経っていないが、すでに戦闘は10回を超えている。

「そうだよなあ。でも、そればかりはどうしようもないしな……」  
『なるべく魔獣と遭遇しないことを、祈るしかありませんね』

そんなことを話しながら歩いていると

「ん？ あれは『サンデュック』か？」

道端の茂みに『サンデュック』が生えているのを見つけた。

「そうみたいね。採取していきましょう」

「そういえば、『ダークエルフ』は【採取】にボーナスが付くんだっつたよな？」

『エルフ』、『ダークエルフ』は【採取】に熟練度が上がりやすい、良い物を採取しやすい、といったボーナスが付く。

「そうよ。私も【採取】はマスターしてるわ」

それなら、ロゼに採取を頼もう。

「それじゃあ、『サンデュック』の採取を頼むよ」

俺はインベントリから『採取セット』を取り出し、ロゼに渡した。

「わかったわ。任せておいて」

ロゼは『採取セット』を受け取り、茂みへと歩いていった。

俺は周囲を警戒しながら採取の様子を眺める。

特に魔獣の気配も無く、ロゼの採取が終わる。

「終わったわ。『サンデュック』だけじゃなく、『ファーシエ』も取れたわよ」

「おお、流石だな」

『サンデュック』は、HPの最大値を100上げられる『HPエクステンド・ポーション』を作ることができる。

『ファーシエ』も『スタミナポーション』の素材だ。

「よし、じゃあ先に進むか」

薬草をインベントリに放り込み、俺たちは先へと進んでいった。

「ロゼ!!! 上だ!!!」

俺は『キラークラウズ』を3匹纏めて大鎌デスサイスで斬り裂きながら叫んだ。  
ロゼは俺の声で上を見上げつつ、咄嗟に後ろへと跳ぶ。  
次の瞬間、ロゼの頭上の木の枝から『ブラッドバイパー』が牙を剥きだし、ロゼに飛びかかった。

ロゼは左手で逆手にナイフを抜き、『ブラッドバイパー』を斬り裂く。

「近接戦も中々できるな」

俺は『デッドリイマンティス』が振り下ろした巨大な鎌を、大鎌デスサイスの刃の曲線を利用して受け流す。

そしてすぐさま『デッドリイマンティス』の頭部を刈り取る。

「ロゼに【格闘術】の特訓もさせるか……」

先程の動きは良かったが、まだまだ甘い。

そんなことを呟きながら飛んで来たでかいクワガタのような虫型魔獣『スタツグビートル』を斬り裂き、ラグを【二刀形態】に変化させながら『ヘルウルフ』に向かって跳ぶ。

逆手に持った二刀で舞うように『ヘルウルフ』5匹を瞬時に屠り、右手の刀をロゼの方に向かっていた『バウジーガ』に投げた。

刀が『バウジーガ』に刺さると同時に、ロゼの『シャドウブレイド』が『ミラージュエント』を切り裂き、戦闘が終了した。

「大丈夫か？」

戦闘が続いたので、ロゼには少し疲れが見て取れる。

「まだ大丈夫よ。少し疲れたけど……」

俺に比べれば、ロゼはSPも少ないし、VITも低い。  
疲れるのは俺よりも早いはずだ。

「じゃあ、俺は『精霊石』を拾ってくるから、ロゼは休んでいてくれ」

「ありがとう。そうさせてもらっわ」

そうして『精霊石』を拾い終わると、俺たちは攻略を再開した。

『火の精霊王の迷宮』 森林部 第3区画

あの後、第2区画でも何度か戦闘があったが、何とか第3区画まで来ていた。

「……大丈夫か、ロゼ？」

流石に疲労困憊の様子だ。

「大丈夫 と言いたところだけど、正直キツいわ……」

戦闘中も偶に注意が散漫になっていたし、無理はさせられないな。

「今日はこの区画のセーフルームで休む予定だから、もう少し頑張ってくれ」

『もうすぐセーフルームがあるはずです。頑張りましょう、ロゼさん』

この区画もほとんど攻略したので、ラグの言う通り、もうすぐセーフルームのはずだ。

「わかったわ。早く休みたいし、行きましょう」

「ああ」

俺はこれまでよりも、さらに周囲の警戒をしながら先に進んでいった……

それからしばらく進むとセーフルームに着いたので、まだ陽は沈んでいないが今日はここで休むことにする。

「まだ夕食には早いけど、どうする？」

「うーん、もう少ししてからにしない？ ちょっと休みたい……」

そう言つと、ロゼは座り込んでしまった。

「そうだな。それで、【詠唱破棄】はマスターできたか、ロゼ？」

俺も座りながらロゼに尋ねた。

ロゼがウィンドウを開き

「あ、マスターしてるわ。【無詠唱】に変わってる」

「やったな、ロゼ」

「もう一つ、お知らせがありますよ」

「何だ、ラグ？」

「ロゼさんが討伐した『ミラージュエント』が10体を超えました。

『転生』できますよ」

「本当なの、ラグ！？ 嘘じゃないわよね!？」

「そんな嘘、吐きませんよ。本当です」

「よく数えてたな？」

戦闘が激しくなったので、途中から数えてなかったのだ。

『マスターもロゼさんも、数えていないようでしたので』

「それでどうやって『転生』するの！？ 今すぐしましゅうー!!」

「お、落ち着け、ロゼ」

『落ち着いて下さい、ロゼさん』

ロゼは興奮しすぎて、ラグに詰め寄っている。

ラグは今、俺が抱えるように持っているので、そこに詰め寄ると

……

「い、ごめんなさい」

ロゼは自分の体勢に気づいたのか、顔を赤くし、離れる。

「ふう。それでラグ、『転生』はどうやってするんだ？ 俺も知り

たいんだが」

『マスターにも手伝ってもらいますよ？ それに準備には少し時間

がかかりますので、夕食の後にしましょう』

「そういうことなら、さっそく夕食を作りましょう!! さあ、デ

イーン。早く『調理道具一式』と食材を出して。今日は私が作るか

ら

「わ、わかったから、少し落ち着けよ……」

俺はインベントリから『調理道具一式』と食材を取り出し、ロゼに渡す。

「じゃあ、パパッと作っちゃうから、少し待っててね」



そしてロゼは、嬉々として料理を作り始めた。

「疲れはどっかに吹っ飛んだみたいだな……」

『そうみたいですわね……』

俺はその様子を若干呆れつつ眺め

「それで、さっきの俺が手伝うことって何だ？ 『ミラージュエン  
ト』の討伐を手伝っただけじゃなかったのか？」

少なくとも、『リーン』に聞いたのはそれだけだ。

『はい。直接手伝わってもらうのは討伐だけですが、ロゼさんが『転  
生』するためにリーン様を呼び出さなければなりません。そのため  
には、神域を創り上げなければなりません』

神殿に行けばそんなことをしなくても良いんですけどね と付  
け足しながらラグが言った。

「それはわかったが、俺は何をすれば良いんだ？」

『神域を創るために鋼系を利用したいので、その時に手伝ってもら  
いたいのです』

「そういうことか。わかった、手伝うよ」

「出来たわよ。食べましょう」

ラグと話している内に料理が出来たようだ。

「お〜、凄いな」

やはり『転生』できるのが嬉しいのか、料理が豪華だ。

「ちょっと頑張りすぎたかしら……?」

「いや、美味そうだし、構わないよ」

そんなことを話しながら料理を食べていった。

「そ、それじゃあ、さっそく……」

2人とも食べ終わったところで、ロゼが待ち切れないように言った。

本当は一息吐きたかったが、ロゼはソワソワしている。

「ラグ、始めよう。これ以上はロゼが待ち切れないみたいだ……」

『そうですね』

「もうっ、からかわないで!」

『それではマスター、【鋼系形態】に変化します』

「わかった」

ラグが鋼系用の手甲に変化する。

『ロゼさんは部屋の中心に立って下さい』

「わかったわ」

ロゼは部屋の中心に向かって歩いて行く。

ロゼが部屋の中心に立ったので

『それでは始めます。マスターは鋼系を展開して下さい。鋼系の制御は私がします。ロゼさんは動かないで下さいね』

「わかった」

「わかったわ」

俺は鋼糸を展開し、制御はラグに任せる。

ラグの制御する鋼糸が、ロゼを中心とした半径5mほどの半球状の複雑な紋章に編み上がっていく。そうして始めてから5分ほど経ち

『紋章は完成しました。それではマスター、魔力を込めて紋章を起動して下さい』

「わかった。魔力はどのくらい込めれば良いんだ？」

『3万でお願いします』

おい、俺のほぼ全魔力だぞ……

『今日はもう休むだけでしょう？それにロゼさんのためです』

「……わかったよ」

この世界では魔力（MP）は精神力のようなものだ。

一度に大量に消費すると、かなり疲れるのだ。

文句を言っても仕方ないので、【魔力装填】で鋼糸に魔力を込める。

すると紋章が輝き、発動する。

『またお会いしましたね、ディーン殿。そして はじめまして、ロゼさん』

紋章に囲まれている空間に『リーン』が現れた。

「ああ、ロゼを『転生』させてやってくれ。頼んだぞ、リーン」

「宜しく願います、リーン様」

『わかりました。それではロゼさん、あなたの気持ちに偽りも、変

わりもありませんね?』

「はい。ありません」

『それでは輪廻を司りし『リーン』の名において、『転生』を許可します』

リーンがそう言うと、ロゼの足元に紋章が現れる。

そして、その紋章が輝きながら上昇する。

紋章はロゼの頭上まで上昇すると、消えた。

『終了しました。これでロゼさんは『ハイダークエルフ』です』

ロゼの見た目は、ほとんど変化していない。

敢えて言うなら、エルフの特徴の尖った耳が少し長くなっているくらいだ。

「どうだ、ロゼ? 体に変化は感じるか?」

「え、ええ。何かの枷が外れたような感じ……これが『転生』……」

『これでロゼさんは、これまで以上の力を手に入れられるでしょう。しかし、いきなり強くなる訳ではありませんので、お気をつけ下さい。それではディーン殿の魔力も尽きそうですので、この辺りで失礼します。ディーン殿、ラグナレク殿、ロゼさん、また機会があればお会いしましょう』

そう言うと、リーンは光とともに消え去った。

「あいつは、唐突に消えるのが趣味なのか……?」

確かに紋章の効果を持続させるために魔力を込め続けていたので、そろそろ魔力が尽きそうだが……

『ああいう方なので、気にしないで下さい』

最初に会った時もあんな感じだったしな。  
そんなことを話しながら鋼糸を解除する。  
紋章が解けると、ロゼがこちらに歩いてきた。

「そつだ。ロゼ、ステータスを見せてくれ。」

俺は歩いてきたロゼへ声をかけた。

「わかつたわ」

ロゼがステータスウィンドウを開く。

Name: ロゼ

種族: 妖精族・ハイダークエルフ(転生1回)

称号: 森の賢者

Lv: 001 / 500

HP: 15000 / 30000

MP: 25000 / 30000

SP: 9500 / 15000

STR: 400 / 750

DEX: 700 / 1000

VIT: 500 / 750

AGI: 700 / 1000

INT: 1100 / 1500

WIS: 1100 / 1500

スキルスロット: 30 / 100

種族がハイダークエルフになり、そして同種族への『転生』のボーナスとしてステータスも上がっている。

「凄いわね……『転生』しただけで、ステータスが上がる……」  
「だがリーンも言っていたように、急に強くなる訳じゃない。確かにそこら辺の冒険者や魔獣くらいは難なく倒せるが、この迷宮の魔獣はまだキツイ。決して油断はするなよ？」

「わかったわ」  
「それじゃあ、これを装備してくれ」

俺はロゼが転生した後に装備させようとしていた物を、インベントリから取り出しロゼへ渡す。

金属のように硬い樹『結晶樹』に、各種のドラゴンの鱗を打ち付けた軽装鎧だ。

『ダークエルフ』は鎧の類を装備できないが、『ハイダークエルフ』になれば軽装鎧の一部が装備できるようになる。

「ありがとう。大事にするわね」

そう言って、ロゼは鎧を装備ウィンドウから装備する。

「どうだ？ 動き難いとかはないか？」

「ええ、大丈夫よ」

「そうか。じゃあ、次はスキルを確認してくれ。俺の知識じゃ、確か『ハイダークエルフ』は上級精霊魔術と最上級闇属性魔術、それに特殊属性魔術も最上級まで使えたはずだ」

ロゼがスキルを確認していく。

「ええ、使えるようになってるわね。だけど、上級精霊魔術と闇属性や特殊属性の最上級魔術は、魔術書が無いとほとんど使えないわね。上級精霊魔術をいくつかと、最上級魔術が1つ使えるけど……」

ロゼのために、魔術書も用意しないといけないな。

『火の精霊王』に会ったら、色々と魔導具ショップや迷宮に行ってみるか。

「それで、この『森の賢者』っていう称号は何だ？」

「私は知らないわ。だけど、『エルフ』や『ダークエルフ』は森の民と呼ばれているから、それと関係あるんじゃないかしら……」

『それは『ハイエルフ』や、『ハイダークエルフ』に与えられる称号ですね。その効果は、『採取』にさらにボーナスが付きます』

ロゼは知らないようだったが、流石にラグは知っていた。

「へえ〜。それじゃあ、これからは採取はロゼに任せるか」

「ええ、任されたわ」

それからしばらく話し、まだ寝るには少し早いので各々好きなことをしていた。

ロゼは今日入手した、『精霊石』の鑑定をしている。

そして俺は、『錬金』で『サンデュック』と『ファーシエ』をポーションにしていた。

「よし、出来た」

『HPエクステンド・ポーション』を1つと、『スタミナポーション』を4つ作った。

『ファーシエ』は以前入手していた物も使った。

「ロゼ、これを飲んでくれ」

俺はロゼに『HPエクステンド・ポーション』を手渡す。

「わかったわ。……結構美味しいわね」

『HPエクステンド・ポーション』はオレンジジュースのような味だ。

「これでHPの最大値が100増えたはずだ。後、これを渡しておくよ」

俺は『スタミナポーション』を全部、ロゼに渡した。

「それを飲むとSPの回復速度が速くなるから、SPが減った時に飲んでくれ」

「ありがとう。でも、どうやって持っておこうかしら？」

そういえばロゼの荷物も全部、俺のインベントリに入れているんだった。

「ザックを出そうか？」

『それよりも良い方法がありますよ』

「どんな方法なの、ラグ？」

『時空属性下級魔術』クリエイト『創造』で異空間を創り、その中に仕舞っておけば良いのです。そうすれば、荷物にもなりませんしね』

以前に、俺が野宿をしなくても良い方法を訊いた時の魔術だろう。



「それはロゼに使えるのか？」

「ええ、マスターのように巨大な空間を創ろうという訳ではないので、大丈夫ですよ」

「どういうことなの？」

「マスターは野宿が嫌で、クリエイト『創造』で創った異空間で寝泊まりしようとしているですよ」

「……………」

ロゼが呆れたような目で見てくる。

「……………良いだろ、別に。ロゼだって、野宿よりはベッドで眠りたいだろう？」

「……………それはそうだけど……………」

「まあまあ、良いじゃないですか。今のマスターでは、そんなに巨大な空間は創れませんから。それよりも、今はロゼさんのことです。クリエイト『創造』を使って下さい」

「わかったわ。魔力はどのくらい使えば良いの？」

「戦闘に必要なアイテムを仕舞うだけですから、5000ほどで充分ですよ」

「了解。それじゃあ クリエイト『創造』」

ロゼが魔法を使うと空間に裂け目ができ、そこにロゼから魔力が流れていく。

そして10秒ほど経ち

『空間が固定されました。』 『スタミナポジション』を入れてみて下さい

「わかったわ」

ロゼが異空間の中に『スタミナポジション』を入れる。

すると、空間の裂け目が閉じた。

『アイテムを取り出した時は、『<sup>オープン</sup>解錠』と唱えて下さい』  
「『<sup>オープン</sup>解錠』」

ロゼが唱えると、再び裂け目が現れる。

俺とロゼは裂け目から、中の空間を覗き込む。

一辺がおよそ2mほどの立方体の空間になっていて、底の方に『スタミナポーション』が4つあるのが見える。

「どうやって取るんだ、アレ？」

「……さあ？ 少なくとも、私の手はあそこまで届くほど長くはないわ……」

そんなことを話していると

『手を入れて、取りたい物を思い浮かべて下さい』

ロゼが言われたように、裂け目に手を入れる。

そしてロゼが裂け目から手を引き抜くと、そこには『スタミナポーション』が握られていた。

「……これは便利ね」

「そうだな。機能もほとんどインベントリと変わらないな」

『インベントリと違って、時間は流れていますから食材などを入れておくと、普通に傷みますよ？ ちなみに『<sup>オープン</sup>解錠』は魔力を使わないので、安心して下さい』

「そうか、わかった」

ロゼは何が面白いのか、『スタミナポーション』を入れたり出し

たりして遊んでいる。

『そろそろ休みますか？ 夜も更けてきましたし』

『転生』や色々している内に、結構な時間が経ったようだ。

「そうだな。ロゼ、明日も早いし、遊んでないでそろそろ休もう」  
「うっ……わかったわ」

流石に恥ずかしかったのか、耳まで真っ赤だ。

そうして、俺は『浄化』ビュアリフイケーションを使い、ロゼはさらに着替えをしてシュラフに潜り込んだ。

「明日中にこの森を抜ける予定だから、頑張ろう」

「そうね。『転生』もできたし、明日からはもっとディーンディーンの力になってみせるわ」

『くれぐれも無理はしないで下さいね、ロゼさん』

そんなことを話しながら、俺たちは眠りに就いた……

#### 『火の精霊王の迷宮』 森林部 第4区画

『マスター、この区画から『炎狼』が出ますので、お気をつけ下さい』

やはり出るのか……

「ロゼは『炎狼』と闘ったことはあるか？」

「ある訳ないでしょ……」

「だよなあ。『炎狼』とはなるべく俺が闘つようにするが、ロゼも気をつけてくれ」

「わかったわ」

「それじゃあ、行くぞ」

そうしてしばらく進んでいくと

「魔獣だ。『ドウルガン』がいるから、仲間を呼ばれる前に片付けるぞ」

「わかったわ。私は魔術で援護する」

「頼む。じゃあ、行くぞ」

俺はロゼにそう言うと、左の魔導銃を抜きながら駆けた。

『ドウルガン』に魔導銃のアーツスキル『トライデント・シヨット』を放つ。

弾丸が途中で3つに分かれ、青く輝く弾丸の軌跡がまさに三つ又の槍のようだ。

『ドウルガン』は避けきれず、弾丸の1つに貫かれる。

「『ブラストハリケーン』」

ロゼが直線状の風の渦を放ち、『ヘルウルフ』を含む魔獣5体を巻き込んでいく。

俺はそれを横目で見ながら魔導銃を戻し、『縮地』で『ミラージュエント』の元へ跳ぶ。

剣に【纏気術】で気を纏わせ、『ミラージュエント』を横に両断する。

『キラーワスプ』を左の拳で碎き、すぐさま『デッドリイマント

イス』を斬り裂く。

「『ウインドブレード』」

ロゼの放った風の刃が『クリムゾンホーク』を斬り裂き、戦闘が終了する。

「さっきのは風属性上級魔術だな？ 使うのは初めてなのに、使いこなせていたな」

「ええ、『ブラストハリケーン』はまだ扱いやすい魔術だから。デインを巻き込んでしまわないか、心配だったけど、上手くいった良かったわ」

「これからも援護を頼むよ。くれぐれも、俺を巻き込むなよ？」

「わかってるわよ。さっきのは冗談よ」

「そのくらいにして、先に進みませんか？」

ラグの言葉に頷き、俺たちは『精霊石』を拾って先に進んでいった。

「来たぞ。『炎狼』だ。ロゼは離れている！！ ラグ、【刀術形態】だ！！」

「わかったわ！！」

俺はロゼの返事を聞きつつ、【縮地】で『炎狼』の元へ跳ぶ。

『炎狼』は2匹いる。

早めに倒さなければ、ロゼに危険が及ぶ。

ロゼは『ブラストハリケーン』を放ち、他の魔獣たちを吹き飛ばす。

俺は地面を左足で削りつつ、右脚で『炎狼』の1匹を蹴り飛ばす。もう1匹が俺に飛びかかり、右前足を叩きつけてくる。

「破ッ！！」

それを刀で受け、左手で【格闘術】のアーツスキル『寸勁』を叩き込む。

『炎狼』が吹き飛んでいくのを確認しつつ、飛びかかってきた『ヘルウルフ』を斬り裂く。

吹き飛んだ『炎狼』が体勢を立て直す前に『炎狼』の元へと跳び、刀で首を刎ねる。

『マスター！！ もう1匹が！！』

その声で残った『炎狼』を確認すると、ロゼの方へ駆け出そうとしていた。

「チッ！！ ラグ、【馬上槍形態】！！」

ラグが変化するのを確認しつつ、【纏気術】を使い馬上槍ランスに気を纏わせる。

「間に合え！！」

すぐに馬上槍ランスを渾身の力で投げる。

馬上槍は途中にいた魔獣を貫き、さらには空気の壁すら突き破り、音速で『炎狼』へと迫る。

今まさに、ロゼへと襲いかかろうとしていた『炎狼』に突き刺さり、そのままの勢いで『炎狼』ごと吹き飛んでいく。

「ロゼ、大丈夫か!？」  
「ええ、大丈夫よ!！」

見たところ怪我も無いようだ。

「良かった」

俺はラグを投げてしまったので、【闘気術】で全身に気を纏い、残りの魔獣を殲滅していった……

戦闘が終わり、ロゼがラグを拾って俺の方へと歩いてきた。

ラグが重いのか、引き摺っている。

『酷いですよ、マスター。また私を投げるなんて……ロゼさんも地面に擦ってます』

「ごめんなさい。だってラグ、凄く重いだよ」

「許せ、ラグ。あの場合は仕方ないだろう？ ロゼもすまない」

「助けてくれたし、怪我もして無いから気にしないで」

俺はラグを受け取り、ロゼと共に『精霊石』や『精霊結晶』、『炎狼の肉』、『炎狼の毛皮』を拾って攻略を再開した。

#### 『火の精霊王の迷宮』 森林部 第5区画

「ロゼ、『ミラージュエント』は頼んだぞ」

『ミラージュエント』をロゼに任せ、俺は『炎狼』へと斬りかかった。

「わかったわ。 『フレイムランス』」

ロゼが放った炎の槍が『ミラージュエント』に突き刺さり、燃やし尽くす。

俺の攻撃は『炎狼』に躲されるが

「予想済みだ」

俺は『炎狼』の動きを予測し、左の魔導銃を撃ち込む。

弾丸は見事に『炎狼』の眉間を撃ち貫く。

それを見届け、もう1体の『ミラージュエント』へと跳び、幹竹から割りに両断する。

俺を急襲してきた『クリムゾンホーク』を、ロゼの『シャドウブレイド』が切り裂く。

「助かった」

ロゼに礼を言い、飛びかかってきた『バウジーガ』を蹴り上げ、剣で貫く。

そして『バウジーガ』が刺さったままの剣で、右から来た『メギドリザード』を斬り払い、左手に持ったままの魔導銃で『デッドリイマンティス』を撃ち貫く。

そうしている内に、ロゼが『ブラストハリケーン』で残りの魔獣を吹き飛ばして戦闘は終わった。

「お、ラッキー。また『炎狼の肉』を落としてる」

『精霊石』を拾い集めていると、『炎狼の肉』が落ちているのを見つけた。



第4、第5区画を合わせると、これで10個目だ。

『これで、ステータスの強化が大分楽になりますね』  
『どういうこと……?』

「ん？ ロゼは『炎狼の肉』を食べたことないのか？」  
「当然でしょ。見たのも今日が初めてなんだから」

そういえば、そうだったな。

「こいつを料理に使って食べると、AGIが5上がるんだ。しかも、美味しい」

「へえ、それは楽しみだわ」

そんなことを話している内に拾い終わったので、先に進むことにする。

この区画も大分攻略したので、そろそろ森を抜けるはずだ。

「ラグ、この森にはやっぱり『番人』がいるのか？」

俺は歩きながらラグに訊く。

『はい。『ブラッディ・デスベア』とその取り巻きの『クリームゾンベア』がいますよ』

「そうか。わかった」

「聞いたことがない魔獣だけど、どんな奴なの？」

「『ブラッディ・デスベア』は体長5mくらいの赤くてでかい熊だ。そして、『クリームゾンベア』はそれより少し小さい3mほどの赤い熊だ」

『ちなみに『ブラッディ・デスベア』は『炎皇狼』や『フレイムドラゴン』よりは弱いですが、『神獣』です。当然、『炎狼』より強

「いますよ」

ロゼの顔が真っ青になっている。

『炎狼』より強いと聞かされれば、当然か……

「ラグ、脅すようなことを言うんじゃない。心配するな、ロゼ。『ブラッディ・デスベア』の相手は俺がするし、こいつの動きは速くない。ロゼは取り敢えず、『クリムゾンベア』を倒してくれ。こいつも動きは遅いから、遠距離から魔術で攻撃すれば大丈夫だ」

「……わかったわ。やってみる」

「その意気だ。ただし一撃の威力はかなりあるから、決して近づくなよ？」

「気をつけるわ」

「よし、じゃあ行こう。そろそろ『番人』がいるはずだ」

そんな話をしながら俺たちは攻略を進めていった。

「ここだ。ロゼは『スタミナポーション』を飲んでおけよ」

あれから何度か戦闘をした後、俺たちは『番人』の待つ広場へと辿り着いた。

「わかったわ」

ロゼは異空間を開き、ポーションを取り出して飲んでる。その間に俺は広場を覗き

「おっ、いるいる」

血のように紅い『ブラッディ・デスベア』と、赤い『クリムゾンベア』が5匹うつらついている。

『あの数の『クリムゾンベア』なら、ロゼさんでも何とかかなりますね』

「そうだな。ロゼには『クリムゾンベア』を殲滅した後、俺の援護をしてもらおうか」

そんなことをラグと話している内に、ロゼの準備が済んだようだ。

「準備は良いか、ロゼ？」

「ええ」

「ロゼは『クリムゾンベア』を殲滅した後、俺が合図したら『ブラッディ・デスベア』に最大威力で魔術を叩き込んでくれ」

「わかったわ」

「それじゃあ　いくぞ、ロゼ、ラグ！！」

「了解」

『了解しました』

そうして俺たちは広場へと駆け出した。

『GOAAA!!』

俺たちに気づいた『ブラッディ・デスベア』が吼え、その声に反応した『クリムゾンベア』たちが一斉に俺たちの方を向く。

「『ブラストハリケーン』」

ロゼの放った風の渦が俺の横を通り過ぎ、『クリムゾンベア』の

1匹を切り裂きながら吹き飛ばす。

「ラグ、【グレートソード斬馬剣形態】」

俺はラグを変化させながら別の『クリムゾンベア』へと【縮地】で跳び、頭から一刀両断にする。

すぐさま、グレートソード斬馬剣を頭上に掲げ

『ガキイ！！』

『ブラッディ・デスベア』が振り下ろした右手の鋭い爪を受け止め、後ろへと跳ぶ。

刹那、俺のいた空間をもう1本の右腕が切り裂いていく。

「相変わらず、面倒臭い攻撃だな……」

俺は『ブラッディ・デスベア』の攻撃を躲しつつ、呟く。

『ブラッディ・デスベア』は2対4本の腕を持っているので、連続で攻撃して来るのが厄介だ。

動きはそれほど速くないので、躲すこと自体は難しくないのだが

……

俺はそんなことを考えながら『クリムゾンベア』を確認すると残り2体まで減っていた。

あれからさらに、ロゼが1体屠ったようだ。

「俺も負けてられないな」

そう言いつつ、『ブラッディ・デスベア』の左腕の片方を斬り飛ばす。

狂ったように振り回される3本の腕を躲しながら、途中邪魔だっ

た『クリムゾンベア』を気を纏わせた蹴りで砕く。  
それと同時に、ロゼの放った『ダークニードル』が最後の『クリムゾンベア』を貫く。

「ロゼ、魔術の準備をしておいてくれ!!」

俺は『ブラッディ・デスベア』の攻撃を躲しながら、ロゼに魔術の準備を頼む。

「わかったわ!! 5秒ちようだい!!」

ロゼはそう応え、呪文の詠唱に入る。

「……出でよ、全てを貫きし禍々しき漆黒の槍よ……」

俺はロゼの詠唱を聞きながら、『ブラッディ・デスベア』の右腕を1本斬り飛ばす。

「準備できたわ!!」

ロゼの方を見ると、ロゼの左手に漆黒の槍が握られている。

「合図をしたら、放て!!」

「わかったわ!!」

俺は『ブラッディ・デスベア』の攻撃を躲しながら隙を探す。  
今だ!!

俺は『アイギス』に魔力を込め、発生した障壁を『ブラッディ・デスベア』に叩きつける。

盾を使った唯一のアーツスキル『シールド・バッシュ』だ。

この技は攻撃力は皆無だが、敵を数秒間だが気絶状態スタンにできる。  
『ブラッディ・デスベア』が気絶状態スタンになり、動きが止まる。

「ロゼ、今だ!!」

すかさず俺はロゼに合図を出す。

「我が前に立ち塞がりし敵を穿て、『デモンズ・スピア』!!」

ロゼが左手に持った漆黒の槍を投げ放つ。

槍が闇の粒子の尾を引きつつ、凄まじい速度で『ブラッディ・デスベア』に迫る。

俺は巻き込まれないよう、即座に跳び離れる。

刹那、漆黒の槍が『ブラッディ・デスベア』に突き刺さり、凄まじい爆発が起こる。

俺はその衝撃波に耐えつつ、『ブラッディ・デスベア』の方を見る。

「……流石は最上級魔術だな」

『ブラッディ・デスベア』は跡形も無く消し飛んでいた。

俺はロゼの方へと歩きながら声をかけた。

「大丈夫か、ロゼ?」

ロゼは今にも倒れそうなほど疲弊している。

「……流石にもう無理……魔力が尽きたわ……」

上級魔術を連発していたし、最後の魔術は闇属性最上級滅殺魔術

だ。

最初から使える最上級魔術だが、あの威力だ。改めて最上級魔術の凄さが実感できる。

「今日はこの先のセーフルームで休もう。『精霊石』を拾ってくるから、しばらく休んでいてくれ」

俺がそう言うとロゼは声を出すのも怠いのか、頷いてその場に座り込んだ。

その様子を眺めながら『精霊石』を拾い集める。

『クリムゾンベア』は『精霊結晶』と『紅熊の爪』や『紅熊の肉』を落としている。

そして、『ブラッディ・デスベア』は『精霊結晶』と『死紅熊の肉』を落としていた。

「おっ、ついてるな。食材を落としてる」

『紅熊の肉』はV I Tが5、『死紅熊の肉』はS T Rが5、V I Tが10上がる食材だ。

少しクセのある味だが、美味しいのでロゼも気に入ってくれるだろう。

そんなことを考えている内に拾い終わったので、ロゼのところへ戻る。

「もう行けるか？ 何なら背負ってやるぞ？」

「それじゃあ、お願いするわ」

「冗談のつもりだったんだが……」

仕方ない、今更冗談だとも言いづらいしな。

そしてロゼを背負い、俺はセーフルームへと歩いていった……

広場を抜け、少し歩くとセーフルームに着いた。

「今日は俺が食事を作るよ。ロゼはその間、レベルアップしているだろうから、ポイントを振り分けていてくれ」

「わかったわ。どのステータスに振り分ければ良いの？」

「取り敢えずHP、SP、STR、VITを優先してくれ」

「HPとSPはわかるけど、STRやVITは魔術を使う私には、あまり関係がないわよ？」

まあ普通なら、MPやINT、WISに入れるだろうな。

「関係なくはないさ。STRが500を超えれば、金属製の武器を一部だが装備できるようになるし、VITが上がればSPの消費量が減るから、迷宮の攻略が楽になる」

「そうだったの……わかったわ」

確かにMPやINTも必要だが、今のところ装備で補えているので後回しだ。

「それじゃあ料理を作ってるから、どれに入れるか迷ったら訊きに来てくれ」

俺はそう言うのと料理の準備を始めた。

今日は『死紅熊の肉』を使った鍋を作ることにする。

「STRやVITが上がるし、ちょうど良いだろう」



俺は鍋に肉や野菜を切つて放り込み、水と調味料を入れて煮込んでいく。

灰汁を取りながら鍋を見ていると

「見て見て、こんなにレベルが上がってるー!!」

ロゼが嬉しそうに飛び跳ねながら俺の所へやって来て、ステータスウィンドウを見せてくる。

そう言われて見ない訳にもいかず、ウィンドウを見てみると

「お。流石にあれだけ闘えば、かなりレベルが上がったな」

ロゼのレベルは26になっていた。

今日だけで25も上がっている。

『ブラッディ・デスベア』にとどめを刺したのが、大きいようだ。

「でしょう!?!」

「それでロゼ、ポイントの振り分けは終わったのか?」

「あつ……」

まあわかってはいたが、終わっていなかったようだ。

「料理も出来たし、後で一緒にやろう」

俺は苦笑しながらロゼに言った。

「い、いめた」

「気にするな。さあ、食べよう」

ロゼって偶に、リリアと同じくらい歳の見えるよな……

『まあ、それだけ嬉しかったのでしょ?』

そう言っただけ俺たちは鍋を食べ始めたが

「……ねえ、これって何の肉？ 美味しいけど、食べたことがないんだけど……」

「ん？ ああ、『ブラッディ・デスベア』の肉だ。ちょっとクセがあるけど美味しい、STRが5、VITも10上がる」

俺は『死紅熊の肉』を齧りながら答えた。

「……まあ、美味しいし、ステータスも上がるなら……」

ロゼは一瞬何とも言えない顔をしたが、再び食べ始めた。

そうしてしばらくすると2人とも食べ終わったので、ロゼのステータスにポイントを振り分けていく。

今回、ロゼはレベルが25上がったので、使えるポイントは250ポイントだ。

「それで、どうするの？」

「そうだな……じゃあ、HPとSPに50、STRに130、VITに残りの20を振り分けてくれ」

「わかったわ」

ロゼが俺の言った通りにポイントを入れていく。

これでロゼのステータスはHPが20100、SPが13000になり、料理で上がった分も含めるとSTRが502、VITは525となった。

「これで、明日からの攻略がずいぶん楽になるはずだ。今は金属製の武器は用意できないから、『火の精霊王』に会うまで我慢してく

れ」

「わかったわ。でも今の装備でも充分凄いから、新しく作らなくても構わないわよ?」

「まあ、俺も色々考えてるのさ。決まったら、ロゼにも言うよ」

「……? わかったわ」

「それじゃあ、明日からは後半の火山を攻略していくことになる。

それに備えて少し早いけど、今日はもう休もう」

「そうね。そうしましょう」

そうして俺たちは寝る準備をし、シュラフに潜り込んだ。

『マスター、先程の話はロゼさんの武器のことですか?』

ラグが俺だけに話しかけてきた。

ああ、そうだ

俺はロゼが『転生』してから、ロゼの武器をどうするかを考えていた。

ラグも一緒に考えてもらうから、そのつもりでな  
『わかりました』

そんなことを話しながら眠りに落ちていった……

俺たちの前には、火山の奥へと続く洞窟が口を開けていた。

「これが、後半の『迷宮型』<sup>ダンジョン</sup>の火山への入り口だ。」

「ここが……」

『中には、強力な魔獣がうろついています。2人とも、気をつけて下さい』  
「わかったわ」

ロゼがラグの言葉に頷く。

「よし、それじゃあ行く」

そう言って、俺たちは洞窟の奥へと進んでいった……

## 第8話 精霊王の試練

『火の精霊王の迷宮』火山部 地下1階

「う……何、この匂い……」

俺たちは洞窟内にあつた階段を降り、地下1階に来ていた。

「硫黄の匂いだな。この迷宮には、所々高濃度の火山ガスが溜まっている場所があるから、気をつけるんだ」

火山ガスは有毒で、吸い込めばHPダメージを受けてしまう。

「それに火属性の魔術はあまり使わないでくれ。ガスは可燃性だからな」

ガスの溜まっている場所で火属性魔術を使えば、大爆発が起こる。まあそれを利用して敵を吹き飛ばしたりすることはできるが、この迷宮にいる魔獣はほとんどが火属性に耐性を持っているので、大して意味は無い。

「わかったわ。気をつける」

「後、下層に行くほど暑くなるからな」

この迷宮は下層に行けば行くほど、火山の中心部のマグマ溜まりに近づくので下層の方はかなり暑い。

ロゼが俺の言葉に頷いたのを確認し

「よし、それじゃあ行こう」

俺たちは迷宮の攻略を開始した。

『ソファアラさんの依頼を忘れないようにして下さいよ、マスター？』

そういえば、『マンドラゴラ』の採取をしなければいけなかったな。

「すっかり忘れてたよ。でも、『マンドラゴラ』の叫び声はどうする？俺は『アイギス』があるから大丈夫だが、ロゼは即死効果を受けてしまうぞ？」

後で俺一人で取りに来るか　と考えたが

『心配いりませんよ、マスター。『森の賢者』の称号効果で、ロゼさんは『マンドラゴラ』の叫び声の即死効果のような、毒を持つ薬草を採取する際のマイナス効果を無効化できます。それにマスターもロゼさんも【採取】をマスターしていますが、称号効果でロゼさんの方が成功率は高いです』

「そうなの？　それじゃあ『マンドラゴラ』を見つけたら、私が採取するわね」

「任せるよ。俺は失敗した時に備えて魔獣の警戒をしよう」

『その方が良いでしょうね。即死効果は無効化できても、魔獣を呼び寄せる効果はロゼさんでも、どうにもなりませんからね』

「わかった」

「それじゃあ、行きましょう」

そんなことを話しながら歩いていると

「魔獣の群れがいるわ。あれは……『フレイムトーチ』？ 『ギミツクトーチ』の上位種かしら？」

ロゼが魔獣の群れを見つけ、【リーブラの魔眼】で確認したのか俺に訊いてくる。

「ああそうだ。他にも『ヴァンパイアバット』や『ファイアメイジ・ゴブリン』がいるな。『フレイムトーチ』と『ファイアメイジ・ゴブリン』は火属性魔術を使ってくる。さらに『フレイムトーチ』は魔術に耐性があつて、特に火属性はほとんど効かないから気をつけるよ」

俺はロゼに魔獣の特徴を説明し、剣を構える。  
向こうも俺たちに気づいたようだ。

「俺が前で食い止めるから、ロゼは弱点の風属性や闇属性の魔術で援護してくれ」  
「わかつたわ」

俺はロゼの返事を聞きながら群れに向かって駆ける。

「ラグ、【大鎌形態】」

道幅は10mくらいなので、デスサイス大鎌も余裕で振り回せる。

俺は間合いに飛び込んだ『ヴァンパイアバット』3匹をデスサイス大鎌を薙ぎ払い、斬り裂く。

魔術を詠唱していた『ファイアメイジ・ゴブリン』をロゼの放った風の渦が、『ヴァンパイアバット』を数匹巻き込みながら切り裂

いていく。

しかし、魔術の範囲外にいた『フレイムトーチ』や『ファイアメイジ・ゴブリン』が一斉に魔術を放つのを見て

「チツー！」

俺は大鎌デスサイスを柄の真ん中辺りを中心に勢いよく回転させる。

すると回転している大鎌デスサイスの周りに半径5mほどの巨大な障壁が現れ、放たれた炎の槍や火の矢を全て弾く。

【大鎌】の防御系アーツスキル『リペイル・サーキュラー』だ。

俺は放たれた魔術を全て弾いたのを確認し、大鎌デスサイスの回転を止めつつ【縮地】で一気に距離を詰める。

同時にロゼが放った風の刃が残っていた『ヴァンパイアバット』を切り裂く。

「おらああー！！」

俺は体ごと回転させ、『フレイムトーチ』と『ファイアメイジ・ゴブリン』2体を纏めて薙ぎ払う。

そして翼を切り裂かれ地面でもがいていた『ヴァンパイアバット』を踏み潰し、戦闘が終了した。

俺は『精霊石』を拾いながら

「うーん、やっぱりロゼにも魔導盾マジックシールドが必要だな」

と俺は呟いた。

「そうね。さっきも私を庇ってくれたんでしょっ？」

確かにロゼの言う通り、先程の『リペイル・サーキュラー』は口



ゼを守るために使ったのだ。

俺自身を守るだけなら、『アイギス』を展開するだけで充分だ。

「ロゼを守るのは別に良いんだが、いつでも俺が守れるとは限らないしな」

『この迷宮のトレジャーボックスから、入手できるかもしれませんよ？ 手に入れられなかったら、魔導具シヨップで買いましょう』  
「できれば、トレジャーボックスから手に入れたいな」

シヨップで売っている物よりは、トレジャーボックスからの入手品の方が圧倒的に高性能だ。

「そうね。手に入れられると良いわね」

そんなことを話しながら『精霊石』を拾い集め、攻略を再開した。

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下3階

あれからかなりの回数戦闘をしたが、ロゼのレベルが上がったからか、森林部に比べ順調に攻略が進んでいた。

「疲れていないか、ロゼ？」

「ええ。デインの言う通り、SPやVETを上げていて良かった。疲れ方が全然違うわ」

「そうだろう。ん？ あれは『マンドラゴラ』か？」

道端に茂みがあるのを見つけた。

「そうみたいね。採取してくるわ。ディーン、道具を貸してくれる？」

俺はインベントリから『採取セット』を取り出し、ロゼに渡す。

「じゃあ任せた、俺は周囲の警戒をしているから」

「わかったわ。任せておいて」

「ラグ、彼女が『マンドラゴラ』の採取に成功する確率はどれくらいだ？」

俺は周囲を警戒しながらラグに尋ねる。

『道具の性能、称号の効果を合わせても90%ほどでしょう』

流石に100%とはいかないか……

成功させてくれると良いが……

「終わったわよ。成功したわ」

ラグと話している内に採取が終わったようだ。

「早かったな。成果は？」

「『マンドラゴラ』と『ベラドンナ』が採れたわ」

『ベラドンナ』は猛毒を持つ薬草で、毒を無効化できる道具を使わないと沈黙毒を受けてしまう。

しかし、沈黙毒を癒す『キュアサイレンス・ポーション』や『MPエクステンド・ポーション』の材料になる貴重な薬草だ。

「流石だな。貴重な薬草ばかりだ」

「他にも採取できる場所があれば、採取するわね」

「頼むよ。それじゃあ、先に進もう。そろそろセーフルームを見つけない」

もうすぐ陽も沈む。

「そうね」

『そうですね』

ロゼとラグの返事を聞きながら先に進んでいった。

あれから5回ほど戦闘をし、セーフルームを見つけた。

「ふう、何とか陽が沈む前に辿りつけたな」

「じ、ごめんなさい。私の所為で……」

ロゼが謝ってくる。

「気にする必要はないさ。俺がやっけていても、失敗しただろうし」

あれから採取も3回ほどしたのだが、その内の1回はロゼが『マンドラゴラ』の採取を失敗してしまったのだ。

その叫び声で大量の魔獣が呼び寄せられ、その殲滅に時間がかかってしまった。

さっき謝っていたのはそのことだ。

「ありがとう。それじゃあ、夕食の準備をするわね」

今日はロゼが作るようだ。

「それじゃあ『炎狼の肉』と『紅熊こうゆうの肉』、どっちを食べたい？」

どうせなのでステータスが上がる食材を使ってもらおう。

「うーん、じゃあ『炎狼の肉』にしましょう。食べたことがないし」  
「わかった。それじゃあ、これ」

俺は食材と道具をロゼに渡す。

「すぐに作るから、少し待っててね」

そう言ってロゼは料理を始めた。

その間に俺は、『マンドラゴラ』と『ベラドンナ』を使ってポーションを作ることにする。

俺はインベントリから『錬金釜』と素材を取り出す。

『マスター、依頼の分まで使わないで下さいよ？』

「わかってるよ、それくらい」

ラグに言われるまでもなく、ソファアラさんに渡す分はきちんと残している。

俺はラグに応えながら、まずは『ベラドンナ』を釜に放り込む。

しばらく待つと、『キュアサイレンス・ポーション』が2つ出来上がった。

「よし、出来たな。これはロゼに渡しておこう」

魔術を使うロゼには、沈黙毒は致命的なものだ。

『マスターは『アイギス』で無効化できますしね』  
「そうだな。次はこれだ」

今度は『マンドラゴラ』と『ベラドンナ』を釜に入れる。  
次に作るのはMPの最大値を200増やす『MPエクステンド・ポーション』だ。

「食事が出来たわよ。何を錬金しているの？」

料理が出来たので、ロゼが呼びに来たようだ。

「色々と便利なポーションだよ。後でロゼにも渡すよ」

そんなことを話している内に『MPエクステンド・ポーション』が出来上がった。

「よし、出来たな。それじゃあ、食事が冷める前に食べよう」

俺は『錬金釜』を仕舞い、夕食を食べることにする。

出来ていた料理は、俺が作ったのと同じビーフシチューのような料理だ。

「『炎狼の肉』の味はどうだ、ロゼ？」

ロゼは『炎狼の肉』を食べたことがない　　と言っていたので感想を聞いてみた。

「クセも無いし、『死紅熊の肉』より美味しいわ。これなら毎日で

も食べられるかも」

「本当か？ 『炎狼の肉』はまだまだあるから、毎日でも食べられるぞ」

「うっ……やっぱり毎日は無理かも……」

「まあ毎日だと、流石に飽きるしな。でもステータスも上がるし、できるだけ使おうようにしよう」

「美味しいから、食べることに自体に抵抗はないわ」

飽きないように料理のレパートリーを増やそう。

そんなことを話しながら食事をしていった。

そうしてしばらくすると2人とも食事が済んだので、レベルアップの確認も兼ねてステータスを確認してみる。

「まずはロゼからだな。      とその前にこれを飲んでくれ。MPの

最大値が200増える」

「わかったわ」

俺が『MPエクステンド・ポーション』を渡すと、ロゼが飲み干す。

「これも美味しいわね」

『MPエクステンド・ポーション』はアップルティーに似た味だ。

「大抵のポーションは美味しいよ。中には微妙なものもあるけどな。じやあ、ウィンドウを開いてくれ」

ロゼは頷き、ステータスウィンドウを可視状態で開く。

「やっぱり、かなりレベルが上がってるな」

「自分のことだけど、とても信じられないわ……」

ロゼのレベルは46になっていた。  
今日だけで20も上がっている。

「それで今回はどのステータスを上げれば良いの？」

「そうだな……」

STRは取り敢えず、今はいいか。

「じゃあHPに50、SPに40、VITに65、AGIに95を振り分けてくれ」  
「わかったわ」

ロゼがポイントを振り分けていく。

これでロゼのステータスはHPが25100、SPが15000、  
VITが573、AGIが800になった。

「SPは上限値に達したな。俺のSP値とほとんど変わらないよ」  
「そうなの？ それじゃあ、次はディーン番ね」

ロゼはそう言いながら、ウィンドウを閉じる。  
代わりに俺がウィンドウを可視状態で開く。

「……………」

昨日、今日合わせて、たった2しか上がってない……

「す、凄いじゃない。2レベルも上がってるわよ……」

「フオローをしてくれて、ありがとう……良いんだ……『人族』は

レベルが上がり難いし、俺はそれなりの高レベルだから……」

しかし、取得経験値が4倍になっているのに、これだけしか上がっていないとは……

どれだけ上がり難いんだよ……

「仕方ありませんよ。これからも迷宮を攻略していけば、上がりますよ」

「ラグの言う通りよ。気にしないで」

2人に慰められつつ、俺はポイントをHPとMPに10ずつ振り分けた。

これで俺のステータスはHP、MP共に34000となった。

「それじゃあポイントも振り分けたし、寝るか」

「そうね。明日も早いしね」

そう言っただけ俺たちは『浄化』ヒュアリフイケーションを使ったり、着替えたりして寝る準備をしてシユラフに潜り込み眠りに就いた。

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下4階

今日も朝から迷宮を攻略している。

結局、『キュアサイレンス・ポーション』はインベントリに入れている。  
『沈黙状態になれば、』オプン『解錠』も使えませんしね』



「うるさいな。あの時は気がつかなかったんだよ」  
「デインって偶に抜けてるわよね……」

くっ……

ロゼにまで呆れられた……

「……先は長いんだから、急ぐぞ」

そう言っつて、先に進んで行った……

魔獣との戦闘をこなしつつ、攻略をしていると

「お、ラッキー。トレジャーボックスだ」

この迷宮で見つけた、初めてのトレジャーボックスだ。

「何が入っているのかしら？ 楽しみね」

「そうだな。俺が開けるから、ロゼは見張りをしてくれ。魔獣が来たら俺を呼ぶんだぞ？」

「わかったわ」

俺はロゼにそう言っつと、【畏確認】を起動しトレジャーボックスを調べる。

「ん？ 畏があるな。それもかなり厄介そうだ」

『この迷宮は中々の難易度ですからね。価値の高い物が入っているのかもしれないね』

「そうだと良いがな」

俺は【畏解除】を起動しながらラグに伝える。

「これで大した物じゃなかったら、ショックだな」

俺は畏を解除しながら呟いた。

失敗することはないが、中々厄介な畏だ。

「よし、解除できたぞ」

さっそく開けてみる。

「……これは『ブーツ』か？ どう見ても女性用だな」

中に入っていたのは、羽飾りの付いた編み上げのロングブーツだ。デザインからして女性用だろう。

『これは『フェザーブーツ』ですね。中々の逸品ですよ。装備するだけで、AGIが100上がります。防御力も高いので、是非ロゼさんに装備してもらいましょう』

高性能な装備品の中には装備できる性別や種族が限定されている物があるが、これもその1つのようなだ。

「ロゼ！！ こっちにきて、これを装備してみてください」

部屋の入り口で魔獣を警戒していたロゼを呼び、『フェザーブーツ』を装備するように言う。

「わかったわ」

ロゼがこちらに来たので、『フェザーブーツ』を手渡す。

「私には少し大きいみたいだけど……」  
「大丈夫だ。装備してみればわかるよ」

ロゼが装備ウィンドウを開き、『フェザーブーツ』を装備する。

「ッ！？」 驚いたわ……装備した途端、サイズがぴったりになった……」

やっぱりな。

「迷宮で入手できる高性能な装備品は、大抵装備するとサイズが合うようになっているんだ」

原理はわからないが、神龍の力が何かだろう。

「それにAGIが100も上がってる……防御力も高いし。こんな良い物、貰って良いの？」

「当たり前だろう。それに、それは女性専用の装備だ。俺が貰っても、装備できないよ」

「わかったわ。ありがとう」

やはり新しい装備は嬉しいのか、ロゼは笑顔でそう言った。

「仲間に良い装備を用意するのは当然だ。だから気にしないでくれ」

ロゼの新しい装備も手に入ったし、今回のトレジャーボックスは当たり前だったな。

『それじゃあ、先に進みましょう』

「そっだな」

そう言って、若干嬉しそうなロゼと共に攻略を再開した……

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下6階

「ここまででは順調に来たな」

かなり速いペースで攻略が進んでいる。

『やはりロゼさんがレベルアップしていつているのが、大きな要因ですね』

「そうだな。V E I Tは流石に俺より低いけど、S Pはほとんど変わらないからな」

V E I Tが低いのでS Pの減りは早いけど、それは『スタミナポーション』で補える。

「デイーンのアドバイスのおかげよ」

「それもあってもいいけど、やっぱりロゼが頑張っているからだよ」

実際、動きや俺との連携がどんどん洗練されていつている。

『フェザーブーツ』の効果で俺の動きにある程度、ついて来られるようになったのも要因の1つだろう。

「この調子なら、ロゼに近接戦闘の技術を教えても良さそうだな」  
「無理、無理よ。私は『ダークエルフ』なのよ？ 近接戦闘なんて

無理だわ……」

確かに『ダークエルフ』は、近接戦闘に向いている種族ではないが

「何も俺のように闘え、とは言っていないさ。ただ近接戦闘の技術は学んでおいて損はないし、ロゼにはいずれ中距離での戦闘もしてもらおうと思ってる。その時に必要になる技術だ」

「そんなことを考えていたのね　わかったわ。戦闘のことにおいては、ディーンの方が詳しいし」

「まあ詳しいことは、この迷宮の攻略が済んでからだな。取り敢えず今できることはレベルを上げて、AGIを1000にすることだな。そうすれば【加速】を覚えられる」

装備での上昇値を含めると、あと100だ。

このくらいなら充分上げられるだろう。

「わかったわ。頑張ってみる」

「その意気だ。じゃあ、今日は地下10階を目指そう」

『流石にそれは無茶です、マスター』

「それは無理よ、ディーン……」

2人が同時に否定してくる。

「大丈夫だって。俺に任せろ」

そんなことを話しながら俺たちは迷宮を進んでいった。

俺たちは今、コボルトの大群と戦闘をしていた。

「ロゼー！ そっちに1匹行ったぞー！」

俺は『コボルト・ウオーリア』の斧を弾きながらロゼに注意を促した。

「わかったわー！！ 『シャドウブレード』ー！！」

ロゼは囲まれないように動きつつ、魔術を放つ。

ロゼが放った黒い刃が『コボルト・マジシャン』や『コボルト・ナイト』を切り裂くのを見つつ、俺は返す刀で『コボルト・ウオーリア』を切り裂く。

「くそっ！！ このままじゃキリが無いな。」

『コボルト・ナイト』が突き出した槍を刀の峰を滑らせるように受け流しつつ、『コボルト・ファイター』が繰り出した飛び蹴りを右手で掴み、他のコボルトに向かって放り投げる。

『コボルト・ナイト』を鎧ごと縦に分断し、そのままさらに踏み込み『コボルト・ファイター』を逆袈裟に斬り裂く。

「デーン、どうするの！？ いつまでもは魔力が持たないわー！！」

すでに俺とロゼが倒したコボルトは100体を優に超えている。

「大群を統率している『コボルト・ジェネラル』がいるはずだー！！」

他の奴らより一回り大きいから、探してくれ!!」

『コボルト・ウォーリア』を蹴り碎きながら叫んだ。  
見渡す限りコボルトの群れで、俺だけでは探し出せない。

「わかったわ!!」

ロゼも魔導杖ワンドで『コボルト・マジシャン』を殴り飛ばしながら叫ぶ。

俺はコボルトたちを斬り裂き、蹴り飛ばしながら『コボルト・ジェネラル』を探す。

ロゼも魔術を放ってコボルトを貫き、吹き飛ばしながら探している。

「見つけたわ!! ディーンの前方100m!!」

俺はロゼが言った方に目を向ける。

すると、『コボルト・ナイト』より少し派手な鎧を着た『コボルト・ジェネラル』がいた。

「俺が突っ込むから、援護を頼む!!」

「了解!!」

ロゼの返事を聞きながらコボルトの群れの中心に飛び込み、桜色の閃光を纏った刀を一閃する。

すると俺の周囲に無数の剣閃が発生し、コボルトたちを斬り裂く。  
【刀】のアーツスキル『桜花千斬閃』だ。

刹那、風の渦が俺の横を通り過ぎて『コボルト・ジェネラル』までの道が開く。

ロゼが『ブラストハリケーン』を放ったようだ。

すぐさま俺は『コボルト・ジェネラル』に向かって跳び

『#\$&¥&\*+!!』

「何を言ってるか、わからねえよ!!」

『コボルト・ジェネラル』が周りのコボルトに何かを言っていたが、刀を一閃し首を刎ねた。

『&%\$#、&&¥\*\*!!』

周りのコボルトたちは混乱し、何かを叫んでいる。

「『コボルト・ジェネラル』は殺<sup>や</sup>った!! 殲滅するぞ、ロゼ!!」

俺は刀を鞘に納め、双銃を抜く。

「わかったわ!!」

混乱するコボルトたちに、俺は弾丸を、ロゼは魔術を叩き込み、殲滅していった……

「お疲れ。大丈夫か、ロゼ？」

流石に無傷では切り抜けられなかったのか、所々に怪我をしている。

「少し怪我したけど、軽傷よ」

「そう言う訳にはいかないさ。『パーフェクト・シャインヒーリング』」



そう言って、俺はロゼに回復魔術をかける。

「ん……ありがとう。」

ロゼの怪我が即座に癒されていく。

「ロープはその内勝手に直るから」

ロゼのロープにも俺の外套と同じように、『自動修復』の紋章を縫い込んでいる。

「わかったわ。じゃあ、『精霊石』を拾いましょうか？」  
「これを、か……」

俺たちの周りには数え切れないほどの『精霊石』が散らばっている。

「文句を言っても仕方ないでしょう？ それに今日中に、地下10階に行くんじゃないかなかったの？」

「いや、流石にもう無理だろう……」

そんなことを話しながら俺たちは『精霊石』を拾い集め、先へと進んでいった……

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下9階

「結局、地下10階までは行けなかったな……」

俺たちは今、地下9階のセーフルームで夕食の準備をしていた。今日も『マンドラゴラ』と『ベラドンナ』、さらに『ソウルグラス』が手に入った。

なので料理はロゼが作り、俺はこれらの素材を使いポーションを作っている。

この3つの素材を使うと、『MPエクステンド・ハイポーション』を作ることが出来る。

「明日頑張れば良いじゃない。取り敢えず食事が出来たから、食べましょう?」

料理を作り終えたロゼが、呼びに来た。

『ロゼさんの言う通りです。今日の分も、明日頑張れば良いんです。それに地下10階まで行けなかった原因の、あのコボルトたちに引っ掛かったのはマスターですよ?』

「待て!!! あんな1本道でどうしろと」

俺が反論しようとする

「はい、2人ともそこまで!!! 折角作った料理が冷めるわ。早く食べましょう」

「……わかった」

ロゼに止められたので食事にする。

今日は『紅熊の肉』を使った網焼きだ。

「お、美味そうだ」

「ふふ、ありがとう」

そう言っただけ俺たちは料理を食べていった。  
食事をした後には、もう日課になっているロゼのレベルアップの確  
認だ。

「今日もかなり戦闘したから、結構上がってるんじゃないか？」  
「そうだと良いわね」

ロゼがステータスウィンドウを開く。

「あ、14も上がってるわ」

今日もかなり上がってるな。

「あれだけの数のコボルトと闘ったからな。それくらい上がるぞ。  
それじゃあ、ポイントを振り分けよう」

「今回はどうするの？」

使えるポイントは140か……

【加速】を覚えてもらいたいし、100はAGIとして……

「AGIに100と、残りの40はVITだな」

「じゃあ、それで振り分けるわね」

ロゼがポイントを振り分け

「スキルを確認してくれ。AGIが装備を含めて1000にな  
ったから、【加速】を覚えているはずだ」

ロゼがスキルを確認する。

「覚えてるわ」

「スキルスロットにはまだ空きがあったよな？ 【加速】をスロットにセットしてくれ」

「したわよ」

「よし。それじゃあ、なるべくこれからの戦闘では【加速】を使ってくれ。最初は2倍速までしか加速できないが、熟練度が上がればもっと高倍速で加速できるようになるから」

「わかったわ。それにしても、どんどん凄まじいステータスになっていくわね……」

「これからまだまだ強くなるさ。それと、これも飲んでおいてくれ。MPの最大値が400増えるから」

そう言っつて、俺は『MPエクステンド・ハイポーション』をロゼに手渡す。

「ありがとう。飲んでおくわ」

「それじゃあ、今日は休もう。明日からは、さらにペースを上げて行くぞ？」

「ええ。望むところよ」

ロゼはポーションを飲み干し、笑顔でそう言った。

『ロゼさんも、ずいぶん精神的に逞しくなりましたね』

「ああ、そうだな。頼もしい限りだ」

そう言っつて俺たちは眠ることにした。

ちなみに俺も1レベルだけだが上がっていたので、HPとMPに5ポイントずつ振り分けた。

『おやすみなさい、マスター、ロゼさん』

「おやすみ」

「おやすみ、2人とも」

そして俺は眠りに落ちた……

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下33階

あれからさらに2日が過ぎ、今は地下33階に到達していた。

「流石に暑いな……」

「そうね……」

俺もロゼも少しグッタリしている。

俺の外套やロゼのローブには『適温維持』の紋章を縫い込んでいるのに、この暑さだ。

『そろそろ中層ですからね。周りの様子を見てもわかるように、大分マグマ溜まりに近付いています』

ラグが言うように上層とは違い、岩壁の所々からマグマが流れ出ている。

「ねえ、デイン。この暑さ、どうにかできないの？」

「ロゼは【マルチプル・マジック複合魔術】は使えるようになっていたよな？」

「ええ。昨日使えるようになったばかりだけどね」

【マルチプル・マジック複合魔術】は【魔力操作】のE×スキルで、2つ以上の魔術を同時に使うことができるようになるスキルだ。

「じゃあ『ウインドメール』と『ウォーターボール』を使えば、少しは暑さも和らぐと思うぞ?」

「やってみる。【マルチプル・マジック複合魔術】、『ウインドメール』・『ウォーターボール』」

水滴を含んだ風の鎧をロゼが纏う。

「どうだ?」

「結構涼しくなったわ。ディーンも使ってみれば?」

俺もロゼと同じように【マルチプル・マジック複合魔術】を使い、風の鎧を纏う。

「お、これは良いな」

『それでは暑さの問題も解決したことですし、先に進みましょう』

「おまえは良いよな。暑くなくて……」

「本当よね……」

そんなことを話しながら進んでいると

「ロゼ、止まれ」

俺は手を横に伸ばし、ロゼを止めた。

「どうしたの?」

「前を良く見てみる」

「少し景色が歪んでる……?」

「そっだ」

「陽炎の所為じゃないの？」  
「まあ見てろ」

俺は前方に右手を突き出し

「『ファイア・アロー』」

火属性下級魔術を使う。  
火の矢が突き進み

『ドンツ!!』

かなりの規模の爆発が起きた。

「ツ!! 驚いた……」

『あそこには火山ガスが溜まっていたようですな』

「そうだ。良く見ればわかるから、ロゼも気をつけていてくれ」

「わかったわ。それでデイン。あれはどうするの？ どう見ても魔獣の群れなんだけど……」

どうやら先程の爆音で魔獣が寄ってきたようだ。

「すまん……殲滅しよう」

「まあ、良いけどな」

ロゼは右腰に佩いていた鞘から片手直剣を引き抜く。  
俺もロゼに倣い、ラグを抜く。

向かって来る魔獣の群れは、『メギドリザード』の亜種『メギドヒュドラ』に『フレイムトーチ』の最上位種『プラスチック』、幽霊型の魔獣『バウ・ジン』からなっている。

「ロゼは、魔術を使う『ブラストトーチ』と『バウ・ジン』を優先してくれ」

「わかったわ。『ブラストハリケーン』」

ロゼが剣を掲げ、魔術を使う。

放たれた風の渦が『ブラストトーチ』を切り裂く。

それと同時に、俺は【縮地】で『メギドヒュドラ』の元へと跳ぶ。間合いに入った瞬間に剣を薙ぎ、『メギドヒュドラ』を斬り裂く。

ロゼも【加速】を使って高速で『バウ・ジン』に接近し、袈裟切りに剣を振り下ろし斬り裂く。

「『シヨックウェイブ』」

俺は『ブラストトーチ』が放ってきた魔術に向け、衝撃波を放つ。衝撃波は魔術を掻き消しつつ、『ブラストトーチ』を吹き飛ばす。すぐさま後を追うように跳び、吹き飛んだ『ブラストトーチ』と傍にいた『メギドヒュドラ』を纏めて分断する。

その間にロゼが最後の『バウ・ジン』を風の刃で切り裂き、戦闘が終了した。

「ロゼの剣捌きも中々サマになってきたな」

「そう？ デイーンに比べれば、まだまだよ」

「そう簡単に並ばれたら、シヨックだよ」

「必ず追いついてみせるわ」

『ロゼさんなら、できますよ』

「ふふ、ありがとう、ラゲ」

そんなことを話しながら『精霊石』を拾い集め、俺たちはセーフルームを探し始めた。



それからしばらく探すとセーフルームを見つけることができたので、今日は休むことにした。

「今日は『炎狼の肉』を使った料理で良いか？」

『紅熊の肉』は全部使ってしまったので、残っているレア食材は『炎狼の肉』だけだ。

「ええ、良いわよ。『紅熊の肉』より『炎狼の肉』の方が私は好きよ」

「わかった。じゃあすぐ作るから、少し待っていてくれ」

俺はそう言っただけで準備をし、作り始める。

しばらくすると料理ができたので

「出来たぞ。食べよう、ロゼ」

俺は剣の手入れをしていたロゼに声をかけた。

「わかったわ」

ロゼが手入れを止め、こちらにやって来る。

「今日の鬪いを見て改めて思ったが、ロゼも強くなったよな」

俺はシチューを食べながら言った。

「良い装備を手に入れられたしね」

ロゼが使っている片手直剣や右腕にしている腕輪は、迷宮のトレ

ジャーボックスから入手した物だ。

片手直剣は特殊な効果は無いが、魔力と相性の良い『セイクリッドミスリル』製だし、腕輪も魔導杖マントウほどではないが、魔術のブースト効果がある。

「それにレベルも大分上がったしな」

「後で確認しておかないとね」

ロゼのレベルアップの確認とポイントの振り分けは、もはや日課だ。

そんなことを話している内に夕食を食べ終わった。

「じゃあ、いつものポイントの振り分けをするか？」

「ええ。毎日の楽しみだもの」

やはりレベルが上がって、強くなっていくのは楽しいよな。

『マスターは滅多に味わえないですけどね』

「ほっとけ」

「4レベル上がってるけど、どれに入れれば良いの？」

「それじゃあ、HPとMPに10ずつ、VITに20入れてくれ」  
「わかったわ」

ロゼがポイントを振り分けていく。

「それじゃあ、ステータスを見せてくれないか？」

「良いわよ」

今のロゼのステータスはこんな感じだ。

Name:ロゼ  
種族:ハイダークエルフ(転生1回)  
称号:森の賢者

Lv:80/500  
HP:27100/30000  
MP:27600/30000  
SP:15000/15000  
STR:540/750  
DEX:750/1000  
VIT:633/750  
AGI:905/1000+100  
INT:1130/1500  
WIS:1100/1500  
スキルスロット:30/100

「流石にレベルが上がりがづらくなってきたな」

今日も結構戦闘をしたが、4レベルしか上がらなかった。  
ちなみにAGIのところの+100というのは、装備の効果で上昇している値だ。

『ロゼさんのレベルも、もう80ですからね。流石に1日で10レベルとかは上がりませんよ』

「それでも4レベルも上がってるんだから充分よ。それより、久しぶりにディーンのスータスを見せてよ」

「構わないけど前に見た時から、大して変わってないぞ?」

「それでも見たいの」

「わかったよ」

俺はステータスウィンドウを可視状態にして開く。

Name: デイン

種族: 人族(転生2回)

称号: なし

Lv: 243/500

HP: 35000/40000

MP: 35000/40000

SP: 16000/20000

STR: 1515/2000

DEX: 1510/2000

VIT: 1525/2000

AGI: 1535/2000

INT: 1500/2000

WIS: 1500/2000

スキルスロット: 50/100

「相変わらず、凄まじいステータスよね……私も強くなったつもりだけど、これを見ると自信をなくすわ……」

「ロゼは確実に強くなってるよ。それは俺が保証する」

「私も保証しますよ」

「ありがとう、2人とも」

「それじゃあ、もう休むか」

「ええ。明日中に地下40階まで行けると良いわね」

「そうですね」

そう言っただけ俺たちは各々寝る準備をし、眠りに就いた……

『火の精霊王の迷宮』 火山部 地下35階

暑さを和らげるために風の鎧を纏いながら、俺たちは朝から迷宮を攻略している。

そして、小規模ながら厄介な魔獣がいる群れと戦闘になっていた。

「『リムクウル』は俺に任せろ。ロゼは『ホーンドアーケロン』を頼む」

「わかったわ」

『リムクウル』は人形型の魔獣で、見た目は1・5mほどの不気味な木の人形だ。

しかし長い爪を持っていて、その爪で攻撃されるとかなりの確率で麻痺状態になってしまう。

『ホーンドアーケロン』は3mほどの角があるでかい亀のような魔獣だ。

マグマの中に生息していて、今回も岩壁から流れ出たマグマが溜まっていた所から出現した。

麻痺毒を持つ『リムクウル』は俺が相手をし、一撃の威力は高いが動きの遅い『ホーンドアーケロン』の相手はロゼがする。

俺とロゼは同時に剣を抜き

「ラグ、【大鎌形態】」

「『ダークニードル』」

俺はラグを大鎌デスサイスに変化させながら『リムクウル』に向かって【縮

【地】で跳び、ロゼは『ホーンドアーケロン』に向かって無数の闇の針を放つ。

俺は大鎌を右から左に薙ぎ払い、『リムクウル』を2体纏めて斬り裂く。  
デスサイス

闇の針は甲羅に弾かれるものもあるが、いくつかは甲羅を貫通し砕いていく。

すぐに俺は柄を回転させて刃を斬り上げ、別の1体を股間から2つに分断する。

そのまま体を左に回転させ、背後から迫っていた1体の首を刈る。ほぼ同時にロゼが甲羅の砕けた場所から剣を突き刺し

「『フレアボム』」

火属性上級魔術を放ち、『ホーンドアーケロン』を爆散させる。

いかに火属性に耐性があるうと、あれでは一溜まりもないだろう。あっさりと魔獣を殲滅し

「中々えげつない倒し方をするな……」

俺は『精霊石』を拾いながら呟いた。

「何か言った？」

ロゼが剣を向けながら訊いてくる。

「イエ、ナニモ……」

「そう？　なら良いわ」

ロゼは剣を鞘に納め、『精霊石』を拾っていく。

何か段々ロゼが怖くなつていくな……

流石に、今のロゼに全力で魔術を使われたら俺でも危険だ……

『マスターが余計なことをしたり、言ったりしなければ大丈夫ですよ』

ラグとそんなことを話しながら『精霊石』を拾っていった……  
そして、攻略を進めているとトレジャーボックスを発見した。

「久しぶりだな。中層に来てからは、初めてか？」

「そうなるわね。何が入っているのかしら……」

『マジックシールド  
魔導盾だと良いですね』

「そうだな。取り敢えず、ロゼに必要な装備は魔導盾だけだからな」

「そうね。それがあればディーンの負担も減らせるし……」

「じゃあ、開けてみよう」

俺は【畏確認】で畏を確認する。

「お、畏がある。これは中身に期待が持てるな」

大抵の場合、畏があるトレジャーボックスには貴重な物が入っている。

まあ、偶に空っぽの時もあるが……

俺はスキルで畏を解除し

「それじゃあ、開けるぞ」

ロゼがワクワクしているのが、手に取るようにわかる。

そんなことを考えながら開けると

「これは……腕輪なの？」

中には、何かの花の意匠が施された腕輪が入っていた。

「いや、これは ラグ？」

『はい。魔力が感じられます。何かの紋章が刻まれた腕輪の可能性はありますが、恐らくは魔導盾マジックシールドでしょう。装備してみてください』

「だってさ、ロゼ？」

「私？」

「それはそうだろう。この意匠からして、確実に女性限定の装備だ」  
「……わかったわ」

ロゼは少し不安そうに腕輪を手に取り、ウィンドウを開いて左腕に装備する。

「性能はどうだ？ 魔導盾マジックシールドなのか？」

ロゼがウィンドウを可視状態にして見せてくる。

魔導兵装クラス？ 『クイーン・オブ・ザ・ナイト』

障壁タイプ：ナイトシールド

常時…精神異常無効化

魔力障壁展開時…物理ダメージ70%カット、全属性ダメージ8

0%カット

特殊固有スキル…『全能力上昇』

「ラグの言う通り、『ナイトシールドタイプ』の魔導盾マジックシールドだな」



銘は『クイーン・オブ・ザ・ナイト』か。  
たぶん『ナイト』は knight じゃなく、nightht だろうな。  
『クイーン・オブ・ザ・ナイト』は『月下美人』という意味だ。  
ということとは、腕輪の意匠は月下美人の花なのか？  
実際に見たことはないから、本当にそうなのかはわからないが。

「クラス？の魔導兵装なんて、初めて見たわ……凄いい性能……こんな物、Sランクの冒険者でも持っていないわ……」

『魔導盾の中でも、かなり上位の逸品ですね。性能もかなり良いので、是非ロゼさんが使うべきですね』

「そうだな。タイプもナイトシールドだし、使いやすくだろう。それでラグ、固有スキルの『全能力上昇』を説明してくれ」

『まあ、名前そのままの効果ですが、HP、MP、SPは5000上昇、他のステータスは250上昇します』

『アイギス』並みの、凄まじいスキルだな……

「ステータスは上昇しているか、ロゼ？」

「ええ、してるわね」

『その上昇効果は、装備している間だけなので気をつけて下さいね』

「こんな良い物、そうそう外さないわよ。でも売ったら、一体いくらになるのかしら……？」

ウィンドウを閉じながらロゼが恐ろしいことを呟いた。

「おいおい……売らないでくれよ？ これほどの性能を持つものは中々無いぞ？ まあそれはもうロゼの物だから、ロゼの好きにして良いが……」

別に金に困っている訳でもないし。

「ちょっと思っただけよ。私だってこんな良い装備、売らないわよ」

「それなら良いが……」

「ちよつと！！ 信じてないわね？」

「というか、SPが+5000されるといふことは、ロゼのSPの最大値は俺より多いのか……」

女性に体力で負けているのは地味にショックだ……

「……？ どうしたの、ディーン？」

『そつとしておいてあげて下さい、ロゼさん……』

そんなことを話しながら俺たちは攻略を再開した……

『火の精霊王の迷宫』 火山部 地下50階

『クイーン・オブ・ザ・ナイト』を入手してから、1日が経過した。

ロゼの装備もほぼ揃い能力的にも俺と大差は無くなったので、かなりのペースで攻略が進んでいた。

『マスター、ロゼさん、これより下の階には『ファイアドラゴン』がいますので、注意して下さい』

「わかった。ロゼは『ファイアドラゴン』のことを知ってるか？」

以前、『炎竜の迷宮』に行ったことがあると言っていたが」

「いえ、知らないわ。あの時は、そんな下層の方まで行けなかった

から……」

「そうか。『ファイアドラゴン』は名前の通り、かなり強力な火属性魔術を使ってくるドラゴンだ。動きは速くないが、決して近付くなよ？ 尾や翼での一撃もかなり強力だ。ロゼもかなり強くなったが、まともに喰らうと危険だからな」

「わかったわ」

「あと、プレスにも注意してくれ。必ず予備動作があるから、良く見てればわかる」

「プレスにも気をつけるわ」

ロゼに『ファイアドラゴン』のことを説明しながら歩いていると

「さっそくお出ましたな」

少し先の部屋に『ファイアドラゴン』が1体いるのを見つけた。

「幸い他の魔獣はいないようだ。ロゼの『ファイアドラゴン』との初戦闘としては、ちょうど良いだろう」

「わかったわ。行きましよう」

俺たちは剣を鞘から抜きながら部屋に突入した。

「俺が斬り込むから、ロゼは魔術で援護だ！！ ラグ、グレートソード【斬馬剣形態】」

俺はラグを変化させながら駆ける。

俺たちに気づいた『ファイアドラゴン』が吼え、周囲に無数の炎の槍が浮かぶ。

「『ブラストハリケーン』」

ロゼが放った風の渦が炎の槍を幾つか掻き消し、『ファイアドラゴン』に衝突する。

『ファイアドラゴン』はその体が切り裂かれるのも構わず、俺たちに向かって炎の槍を放つ。

俺はそれを躲しつつ接近しながら、ロゼの方へと目を向ける。

ロゼは【加速】を使って炎槍を躲し、直撃しそうなものはマジックシールドで防いでいる。

「心配はなさそうだな」

俺はそう呟きながらグレートソード斬馬剣を振り被り

「ハアツ!!」

渾身の力で振り下ろして、『ファイアドラゴン』の右の前肢を斬り飛ばす。

『GYA OO!!』

怒り狂った『ファイアドラゴン』の尾の一撃を後ろに跳んで躲す。憎々しげに俺を睨みつけた『ファイアドラゴン』の右眼に、ロゼの放った『ダークニードル』が突き刺さる。

再び『ファイアドラゴン』が吼え、さらに狂ったように振り回される尾を躲し

「ロゼ、ブレスが来るぞ!! 気をつける!!」

『ファイアドラゴン』がブレスのモーションに入ったのを見て、

ロゼに注意を促す。

「わかったわ!!」

俺とロゼは狙いを分散させるため、別々の方向へと跳ぶ。

次の瞬間『ファイアドラゴン』が俺の方を向き、炎の奔流のようなプレスを吐き出す。

俺は『アイギス』の障壁を展開させ、【縮地】で『ファイアドラゴン』へと跳ぶ。

炎の中を突き進み、抜けた瞬間に斬馬剣をグレートソード一閃させ、そのまま駆け抜ける。

『ファイアドラゴン』の胴体が斬り裂かれ、同時に頭部に漆黒の槍が突き刺さり、爆散する。

ロゼが『デモンズ・スピア』を放ったようだ。

頭が消し飛んだ『ファイアドラゴン』が光の粒子になり消えていく。

「どうだった？ 『ファイアドラゴン』と闘ってみて」

俺はロゼと自分に、聖属性下級回復魔術『キュアライト』を使いながら聞いた。

「流石に強かったわね。プレスが私の方に来ていたらって思うとゾツとするわ……」

「充分闘えていたよ。とどめを刺したのもロゼだしな」

「そうだけど……あまり闘いたい相手ではないわ」

「残念ながらこの迷宮には、かなりの数の『ファイアドラゴン』がいます。頻繁に闘うことになるかもしれないわ」

「そんなに心配そうな顔をするな。ロゼなら慣れれば1人でも闘えるようになるよ」

「そつだと良いけど……」

そんなことを話しながら『精霊結晶』と『ファイアドラゴンの鱗』を拾い、俺たちは先へと進んでいった。

『火の精霊王の迷宫』 火山部 地下62階

「そつちは大丈夫か、ロゼ!？」

俺は『フレイムランス』を躲しつつ、人形型魔獣『フレイムゴレム』を叩き斬りながら叫んだ。

「ええ、大丈夫よ!！」

ロゼも『メギドヒュドラ』を斬り裂き、『シャドウブレード・ミリアド』を放ちながら叫ぶ。

無数の黒い刃が、魔獣の群れと『ファイアドラゴン』を切り裂く。俺は迫ってきた『リムクウル』の頭を蹴り碎き、『ファイアドラゴン』へと【縮地】で跳ぶ。

炎の槍を障壁で弾き、剣で『ファイアドラゴン』の首を断つ。

さらに『ホーンドアーケロン』の上位種『メガロアーケロン』を甲羅ごと刺し貫きながら

「こつちの『ファイアドラゴン』は殺<sup>や</sup>った!! あとはそつちの1体だけだ!！」

「わかったわ!! こつちの奴は任せて!！」

ロゼは『ガライゴン』の上位種『ガラディウス』を『ダークニードル』で貫き、『バウ・ジン』を逆袈裟に斬り上げる。

『ファイアドラゴン』がブレスを吐くが【加速】で範囲外へと避け

「『デモンズ・スピア』!!」

漆黒の槍が『メガロアーケロン』を貫通し、『ファイアドラゴン』へと迫る。

頭部を狙った槍は躲されるが、右の翼に突き刺さり、右の前肢ごと吹き飛ばす。

すぐさまロゼは距離を詰め、左眼に剣を突き刺し

「『フレアボム』!!」

『ファイアドラゴン』の頭部が爆散する。

俺は『フレイムゴーレム』と『バウ・ジン』を纏めて斬り裂きながら、その様子を眺め

「ロゼ!! 後ろだ!!」

ロゼは咄嗟に横へと跳ぶが

「キヤアッ!!」

ロゼの後ろへと迫っていた『リムクウル』の一撃を受けてしまう。

「ロゼ!! チツ、邪魔だっ!!」

突進してきた『メガロアーケロン』を気を纏わせた右拳で弾き飛

ばし、【縮地】でロゼの元へ跳ぶ。

倒れたロゼに襲いかかるうとしていた『リムクウル』の頭を拳で  
砕き

「ロゼ、大丈夫か!？」

怪我は大したことはなさそうだがロゼは動かない。

「麻痺になっているのか!？」 『パーフェクト・シャインヒーリン  
グ』!！」

これでロゼは大丈夫だろう。

「……ラグ、【魔法剣】起動。『ゼピュロス』」  
『了解しました』

剣が旋風を纏う。

ロゼを傷つけた魔獣と、守れなかった自分にイラつく……  
俺の感情に反応するように、纏った旋風が荒れ狂う。

「滅べ」

俺は横薙ぎに剣を一閃する。

凄まじい突風が魔獣たちを襲い、微塵に斬り裂いていく。

【魔法剣・ゼピュロス】の最上位アーツスキル『アナイアレイシ  
ヨン・ブラスト』だ。

魔獣を全て殲滅したのを確認し

「ロゼ、大丈夫か?」

「……ええ、大丈夫よ。それよりもごめんなさい。心配かけて……」



「いや、俺の方こそすまない。守れなくて……」  
「そんな……私が油断したのが、いけなかったのよ。ディーンが謝る必要なんてないわ」

そう言っつてロゼは微笑んだ。

『そうですよ、マスター。ロゼさんはもうあの頃のように弱くはありません。過剰な守護はロゼさんに失礼ですよ』

「そうよ。ラグの言う通り。私はいつまでも、ディーンに守られるだけじゃないわ」

そうか。

俺は今まで心の何処かでは、ロゼのことを一緒に闘う仲間としてではなく、守らなければならぬ存在だと思っていたのかもな。

「わかった。2人の言うことはもっともだ。しかし、やっぱり俺はロゼが傷つくのは嫌だ。だから俺に可能な範囲で守る。だが、今回のように謝るのはやめるよ。それで良いか？」

「良いわ。だけど守れなかったからって、私の見ていない所で落ち込むのも駄目だからね？ 後、守ると言ってくれたのは嬉しかったわ」

そう言っつて再びロゼは微笑んだ。

今まで見てきた中で一番綺麗な笑顔だ。

『あれ？ マスター、照れてるんですか？』

「うるさい。黙れ、ラグ」

「へえ。ディーン、照れてるの？」

「くっ……」

俺はロゼとラグにからかわれながら『精霊石』等を拾い、攻略を再開した。

『火の精霊王の迷宮』火山部 地下80階

「暑いー!！」

「言つなよ……余計、暑くなる……」

あれから1日が経ち、俺たちはとうとう迷宮の下層に到達していた。

マグマが至る所を流れ、内部の温度はさらに上昇し、もはや暑いというより熱い。

さらには、所々にマグマの川まで流れている始末だ。

「ローブ、脱ぎたい……」

「前にも言ったが、そのローブには『適温維持』の紋章を縫い込んでいる。脱ぐと、もっと暑いぞ?」

「じゃあ、ディーンが脱いでよ……その格好を見ているだけで、暑くなるわ……」

「無茶言つなよ……」

俺に死ねと言つのか……

『2人とも文句を言っても仕方ありませんよ? それより、早く先に進んだ方が良いと思いますが』

ラグがそう言った瞬間、ロゼの目が据わった。

「ディーン、ラグを貸して」

「……何をやる気だ……？」

「そのマグマの川に突っ込んで、私の気持ちを少しでも味合わせ  
てやるわ」

『えー！？』

「……気持ちはわからなくもないが、やめてやれ」

『ちよっ！？ マスターも気持ちはわかるって何ですか！？』

「ハア、もう良いわ。先に進みましょう」

「そうだな」

『2人とも、ちよっと待って下さいよ！？』

俺たちはまだ何かを言っているラグを無視して、攻略を再開した。  
魔獣と闘いつつ、しばらく先に進んでいると

「おっ、採掘ポイントだ」

「え？ 何？」

「採掘ポイントだよ。 と言ってもロゼには見えないか。【採掘】  
のスキルで鉱石を手に入れられる場所のことで、ロゼがスキルを持  
つていれば、あそこの岩壁が光って見えるはずなんだけどな」

「そうなんだ。じゃあ、採掘するの？」

「ああ、すぐ済むから見張りを頼む」

「わかったわ」

俺はインベントリから『採掘セット』のつるはしを取り出し、岩  
壁を削っていく。

そうして5分ほど岩壁を削り

「よし、終わった」

採掘にかかる時間はSTRの値と道具の性能に左右されるが、俺はどちらも高いのですぐに終わる。

「終わったの？」

「ああ、結構採れた」

「何が採れたの？」

俺は採掘した鉱石をロゼに見せる。

『これは……『セイクリッドミスリル』に『アダマントタイト』、それに『フレアエレメント』の原石ですね。後は『ミスリル』などの下位の金属の原石ですね』

「そうみたいね……でも、こんなに沢山……」

ロゼも【鑑定】で確認したようだ。

「まあ、あつて困る物でもないしな」

この迷宮の攻略が終われば、ロゼの武器も作る予定だしな。

「それもそうね。じゃあ、先に行きましょう？」

「そうだな」

鉱石をインベントリに入れ、俺たちは先に進んでいった。

「破ッ」

俺は躍りかかってきた『フレイムゴーレム』に『寸勁』を叩き込み、『プラスチック』を斬り裂く。

「『ウインドスライサー』」

ロゼの放った円状の風の刃が『バウ・ジン』を分断し、さらに『リムクウル』2体を切り裂いていく。

俺は【縮地】で『ファイアドラゴン』の頭上へと跳び、頭部に剣を突き刺す。

「やあー!!」

ロゼが最後に残った『メガロアーケロン』を甲羅ごと叩き斬り、戦闘が終わった。

「ふう、終わったな」

俺は『精霊石』を拾いながら言った。

「動くとさらに暑いわね……汗だくだわ……」

俺もロゼと同じく汗だくだ……

「あゝ、風呂に入りてえ」

こうなると、改めて風呂に入りたくなる。

「フロって何？」

ロゼが知っている訳ないか。

「その内わかるよ」

俺は密かにある計画を立てている。

「……？」

『そろそろ陽が沈みますよ？ セーフルームを探しましょう』

「そっだな」

「そっね。早く着替えたいわ……」

俺たちは『精霊石』を拾い集め、セーフルームへと急いだ。

それから30分ほど迷宮を探索しセーフルームを見つけたので、今日はそこで休むことにした。

「こっ暑いと食欲も湧かないわね……」

ロゼが食事の手を止める。

一応食べやすいように、夕食は『炎狼の肉』を使った冷製パスタだ。

「食べておかないと、体力が持たないぞ？」

「わかったわ」

俺がそう言うと、ロゼが再び食べ始める。

俺も食事を再開し、しばらくすると2人とも食べ終わった。

「明日には最下層に行けるな」

俺は着替えているロゼに背を向けたまま、ラグに尋ねた。  
もちろん、気を紛らわせるためだ。

『そうですね。最下層へ行けば、火の精霊王の試練を受けることになり  
ます』

「精霊王の試練って何するの？」

着替えが終わったロゼが、訊いてきた。

『十中八九、戦闘です』

「またか……戦闘以外の試練はないのか？」

『炎皇狼』も『フレイムドラゴン』も試練は戦闘だった。

『大抵は戦闘ですね。マスターの力を確認するという点においては、  
戦闘をするのが適していますからね』

「その戦闘は私も闘って良いの？」

『駄目ですね。試練を受けられるのは、マスターだけです』

「そう……」

たとえロゼも受けられるとしても、俺は許可するつもりはない。

「そう心配するな。俺なら大丈夫だから」

『精霊王は炎皇狼やフレイムドラゴンとは、比較にならないくらい  
強いです。油断はしないで下さいよ？』

「……わかってるよ」

恐らくロゼがいるからラグは言わなかったが、精霊王との戦闘は  
命を懸けたものとなるだろう。

「それじゃあ、明日に備えて寝るか」

今考えても仕方ないと割り切り、眠ることにする。

「明日も頑張りましょうね」

「ああ、頑張りよう」

『頑張りましょう』

その言葉を交わし、俺たちは眠りに就いた……

『火の精霊王の迷宮』火山部 地下99階

『この扉の奥にある階段を降りれば、最下層です。マスター、扉に炎皇狼とフレイムドラゴンの『証』を填めて下さい』

俺たちの前には、華麗な装飾が施された巨大な扉がある。

「わかった」

俺はインベントリから2つの『証』を取り出し、扉の窪みへ詰め込む。

すると

『ゴゴゴゴゴ……』

扉が横にスライドして下へと続く階段が現れる。



「行こう」

「ええ」

『最下層は1つの部屋しかありません』

「わかった」

そう言っただけで俺たちは階段を降りていった……

『火の精霊王の迷宮』 火山部 最下層

最下層はそのほとんどがマグマで、階段から続く通路の先に半径1kmほどの陸地があるだけだ。

「良く来た、『来訪者』デーンよ」

その陸地の中央に1人の偉丈夫が立っている。

「貴方が『火の精霊王』ですか？」

その偉丈夫は身長は2mほどと大きいが見た目は俺と変わらない。  
い。

唯一違うのは、腰まで届きそうな髪が炎だという点だ。

「そうだ。我が、原初の焰にして火の精霊王『セファイド』だ」

『お久しぶりです、『セファイド』様』

「おお、ラグナレクも久しいな」

火の精霊王の名は『セファイド』と言うらしい。

「それで、どのような試練を？」

「うむ、そのことだがな。お主は『アイギス』を持っていよう？」

「はい、確かに持っています」

俺は左腕をセファイドに見せながら答えた。

「実は『アイギス』は我が管理を任されている魔導兵装で、我が試練を乗り越えた者に与えられるのだが、今回はディオス殿の計らいで既にお主が持つておる」

もしかして、試練はなしとか言うのか？

もしそうなら嬉しいが。

「我はそのことに少々憤りを感じていてな」

おいおい、何か話の雲行きが怪しくなってきたぞ……

「なので、本気で手合わせをしよう。それを今回の試練とする」

「……どうなつてんだ、ラグ？」

『私に言われましても……元々血の気の多い方ではありませんが……』

……

「それで構わぬな、デーンよ？」

「わかりました」

どうせ変えてくれと言っても聞き入れられそうにないし、元々試練が戦闘になるのは予想済みだ。

俺はディオスをぶん殴る理由がまた1つ増えたな　　と思いつつ  
答えた。

「それでは、そちらの娘よ。巻き込まれなくなけば、通路まで下がるが良い」

セファイドがロゼに下がれと命じる。

「ロゼ、言う通りにするんだ」

「……わかったわ。気をつけてね、ティーン」

そう言つとロゼは通路まで下がる。

「ああ」

俺はロゼに応え、陸地の中央まで進む。

「準備は良いか？」

「構わない」

俺は剣を鞘から抜きながら答える。

「では、始める！！」

そう言つた瞬間、セファイドの両手首と両足首に炎が現れる。

「ラグ、【魔法剣】起動。『ゼピュロス』」

剣が旋風を纏う。

「ほう。なら、こちらも。出でよ、万物を焼き尽くす業火の剣。<sup>メーテン</sup>これを人に使うのは初めてだ」

セファイドの右手に炎の剣が握られる。

「それでは、いくぞ」

「来い！！」

セファイドが一気に距離を詰め、剣を薙いでくる。

「くっ、速い」

俺は何とか一歩後ろへ下がって躲し、お返しに剣を振り下ろす。

俺が振り下ろした剣は炎の剣によって受け止められる。

そのまま力を込め押し込もうとすると

『いけません、マスター！！』

ラグがそう言った瞬間、炎の剣が俺の剣を透過して目前に迫る。

「うおっ！！」

俺は咄嗟に後ろへ倒れ込むように躲し、そのまま片手でバク転して距離を取る。

「今のを良く躲したな」

「何だ、今のは……」

確かに直前まで、俺の剣と炎の剣は鏝迫り合いをしていたはずだ。それがいきなり透過してくるとは……

ラグの警告がなければ危なかった。

『あの炎の剣は、持ち主の意思で、物質と非物質の状態を切り替え

られるのです』

ということは、あの剣を受け止めるのは無理ということだ。

「それは反則だろう……」

距離を取りつつ闘うか、躲すしかないか。

そんなことを考えながら【縮地】でセファイドに向かって跳ぶ。

「疾ッ!!」

間合いに捉えた瞬間に逆袈裟に斬り上げるが、躲される。

しかし俺はさらに一步踏み込み、剣を振り下ろす。

「ぬっ!!」

それも躲されたが、髪の一部が宙を舞い火の粉のように消える。

俺はすぐに後ろへ跳び、距離を取る。

「やるな。だが!!」

セファイドがこちらに向けた左手から、直径5cmほどの炎弾が放たれる。

何だ と思いながら躲しつつ距離を詰めようとするが

「ッ!? マスター、全方位に障壁を!!」

警告に従い、『アイギス』に魔力を込め、俺を包み込むように障壁を展開する。

刹那、炎弾が50mほどに膨張して爆裂する。

「なっ！？　ぐわっ！！」

衝撃が『アイギス』を貫通して、俺を襲う。

今のは確か、火属性最上級殲滅魔術『ノヴァ・エクスプロージョン』だ。

しかし、魔術名称の詠唱すらしていなかった。

「まさか、完全に無詠唱で魔術が使えるのか……？」

『その通りです。ただし、火属性のみですが……』

何の慰めにもなっていない。

これで下手に距離を取るのも駄目になった。

あんなものを連発されたら、いくら『アイギス』でも防ぎ切れない。

こうなったら覚悟を決めて、近接戦闘をやるしかない。

そう決心すると俺は【縮地】で距離を詰め、間合いに入った瞬間に【縮地】を停止、【加速】を最大倍速で起動する。

同時に【闘気術】も起動し、全身に気を纏う。

「破ッ！！」

セファイドの足を払うように蹴りを叩き込むが躲され、炎の剣が袈裟切りに振り下ろされる。

それを俺は円を描くように躲し、逆袈裟に剣を斬り上げる。

「ふんっ！！」

セファイドが剣の腹を左の肘で叩くように弾き、そのまま左の拳が俺の胸に当てられる。

俺は悪寒がして咄嗟に後ろへ跳び下がろうとするが

「破ッ!!」

「がっ!?!」

凄まじい衝撃が俺を襲い、吹き飛ばされる。

「ゲホッ……………」

内臓をやられたのか口から血が溢れる。

「デーン!!」

ロゼが俺の名を叫ぶ。

「【格闘術】まで使えるのか……………」

俺は外套の袖で血を拭いながら鎧を見る。

かなりの硬度を持つはずの鎧が見事に陥没している。

やはりさっきの技は『寸勁』だ。

「咄嗟に後ろへ跳び、威力を逸らしたか。やりおるな」

幸い骨は折れていない。

「マルチプル・マジック【複合魔術】、『ウィンドメール』・『ウォーターボール』」

これで打撃や炎を少しは軽減できるはずだ。

無いよりはマシだろう。

俺は再びセファイドの元へと跳ぶ。

俺の【加速】や剣の一振りで衝撃波が生まれ、突風が荒れ狂う。  
セファイドも己の周りに炎の槍を浮かべて次々と撃ち出し、炎の  
剣を薙ぐ。

互いの攻撃を躲し、弾き、掻き消す。

周囲は突風や炎が荒れ狂い、まさに灼熱地獄だ。

「疾ッ!!」

俺の一閃をセファイドが弾き、俺の頭を狙い蹴りを繰り出す。  
俺はそれを掻い潜り、顎を打ち上げるように掌底を繰り出す。

「セイツ!!」

セファイドが頭を振るように掌底を躲しつつ炎の剣を振り下ろす  
のを、俺は腹に蹴りを叩き込み、その反動で跳び退る。

「ク、クハハハハ……!! 強いな。あ奴らが気に入る訳よ」

フレイムドラゴンと炎皇狼のことか……？

多分、そうだろう。

俺は肩で息をしつつ、そう考える。

「だが、そろそろ終わりにしよう。次の一撃耐えられるか？」

「望むところだ」

セファイドの持つ炎の剣がさらに輝きを増し、白熱する。

凄まじい熱量だ。

闘気と2つの魔術、3重に防いでいるにも関わらず、外套やズボ  
ンから薄っすらと煙が上がる。



「これは早めにケリをつけないと、やばいな」  
「それではいくぞ」

セファイドが距離を詰め、白熱した剣を右から袈裟切りに振り下ろす。

俺はそれを躲すが外套の胸元が焼き切れる。

「もらった!!」

俺は剣をセファイドの胸へと突き出すが

「甘い!!」

袈裟切りに振られた剣が、その軌道をなぞるように逆袈裟に斬り上げられる。

俺は剣を止め、咄嗟に左に躲すが、さらに剣が幹竹から割りに振り下ろされる。

「くっ!!」

俺はさらに左に踏み込み、円を描くように躲す。

振り下ろされた剣は、そこからさらに右からの逆袈裟に斬り上げられる。

「何だと!?! これはまさか……」

左から刃が迫ってくるので、これ以上左には躲せない。

俺は体勢が崩れるのを覚悟で、無理矢理右に躲すがこれが予想通りなら……

次は躲せない。

予想通り、斬り上げられた剣が左から袈裟切りに振り下ろされる。俺は咄嗟に左手に剣を持ち替え、右腕に気を凝集する。

俺の高濃度の気を纏う右腕と炎の剣が激突する。

刹那、凄まじい光が発生する。

そして、光が収まり

「これを受けて倒れなかった者は、お主が初めてだ。咄嗟に右腕を犠牲にしたその判断、見事」

「ぐっ……」

「ッ!?」

ロゼが息を呑むのがわかる。

俺の右腕は肘から先が無かった。

しかも切断面は完全に炭化し、今もボロボロと崩れている。

幸い神経が焼き切れたからか痛みは何とか耐えられるが、体の一部を失ったことで額に脂汗が浮かぶ。

俺は片膝を突いてしまう。

「デーン!!! よくも!!!」

そう言うとともに、ロゼが右手に漆黒の槍を生み出しながら走ってくるのが視界の端に入る。

「やめるんだ、ロゼ!!!」

俺の制止を聞かずロゼは

「『デモンズ・スピア』!!!」

漆黒の槍を放つ。

俺は慌ててロゼに駆け寄り

「無茶をするな!!! 『パーフェクト・シャインヒーリング』!!!」

ロゼは荒れ狂う炎で大火傷を負っていた。

俺はロゼの火傷を癒しながら、急いで通路まで片手で抱えていく。

「こんな無茶は二度とするな」

俺はロゼを降ろしながら言った。

「だってディーン、その腕……」

「心配するな。戦闘が終われば治せる。ロゼも知ってるだろう？」

「知ってるけど」

「大丈夫だ。俺は死なない」

まだこんな所で死ぬ訳にはいかない。

そう言つて、俺はセファイドの所へと戻る。

「連れが失礼した」

「何、気にすることはない。あの娘の気概、気に入った」

セファイドは漆黒の槍を握り砕きながら言った。

「どうやら当たる前に掴み取ったようだ。」

「じゃあ、続きだ」

「ほう。まだやるのか？」

「当たり前だ。ラグ、試したいことがあるが良いか？」

『マスターにお任せします』

「わかった」

俺は【魔力装填】で剣に魔力を込める。

剣に纏った旋風が魔力を喰い、さらに荒れ狂う。

だが、まだだ。

俺はさらに【纏気術】で気を纏わせる。

剣に異常があればすぐに止められるようにしつつ観察するが、異常は見られない。

ラグ以外の武器で試した時は素材が何であろうと、この時点で武器は塵になった。

「いけるな」

魔力と気を纏った剣は蒼く光り輝き、魔力と気を喰らった旋風は凄まじいまでに荒れ狂い、外套の裾を激しくはためかせる。

俺は左手の剣を構える。

右腕が無い分バランスが取りづらいが、やるしかないだろう。

「ほう。これは……」

「今度はあんたがこの一撃に耐えてみせる」

そう言っただ俺はセファイドに向かって跳ぶ。

間合いに入った瞬間、剣を右から袈裟切りに振り下ろす。

躲されるが地面を抉るほどの烈風が吹き荒れ、セファイドが体勢を崩す。

俺はそのまま、先程の軌道をなぞるように左から逆袈裟に斬り上げ、さらに幹竹から割りに振り下ろし、右から逆袈裟に斬り上げる。

俺が一閃することに烈風が荒れ狂い、セファイドの体勢が徐々に大きく崩れていく。

「ぬっつ！ー！ー」

「これで決める!!」

俺は渾身の力で左から袈裟切りに振り下ろす。流石と言ったところか、セファイドは炎の剣で受け止めるが、透過させる暇も与えずにそのまま押し込む。

満足な体勢ではなかったセファイドの剣を弾き、右肩から左脇腹まで斬り裂く。

烈風が傷口をさらに引き裂きながら、セファイドを吹き飛ばす。

「ハア……ハア……やったか？」

俺が使った技は、セファイドが俺の右腕を消し飛ばしたのと同じ、【片手剣】の連撃系アーツスキル『ライジング・エッジ』だ。セファイドが吹き飛んでいった方を見てみると

「見事だったぞ、デーン殿」

セファイドが無傷で立っていた。

「な……に……？」

そんな馬鹿な!?

無傷だと!!

確かに手応えはあったし、剣が斬り裂くのも見た。なのに……

「心配するな。お主の一撃、確かに我に届いていたぞ」  
「なら、何故……」

無傷なことの説明がつかない。

「ここは『火』の精霊力が集まる場所。この場所で我が死ぬことはない。それにお主の力は、しかと見せてもらった。試練は合格だ」  
「本当か……？」  
「もちろんだ。それでは『証』を渡そう。その娘もこちらへ来るが良い」

そう言っつてセファイドが腕を一振りすると、荒れ狂っていた炎があっさりと消え去る。

「デインー！！ 良かった……無事で……」

ロゼが走ってきて、俺に飛びついた。  
泣いているようだ……

「すまなかつたな。心配させて」  
「……本当よ……私、貴方が死んだらどうしようかと……」  
「そうか……」

俺は剣を鞘に納め、ロゼの頭を撫でる。  
しばらくそうしている

『マスター、ロゼさん、セファイド様がお待ちですし、もうその辺で……』  
「そうね……」

ロゼがそう言っつて体を離す。

「おっと、そうだ。『パーフェクト・シャインヒーリング』」

俺は自分に回復魔術をかける。  
時間を巻き戻すように、右腕が元通りになるのを確認し

「お待たせしました」

「何、構わんよ。それでは『証』を渡そう。『アイギス』を前に出してくれ」

俺は左手を前に突き出す。

すると、セファイドの胸の 人間なら心臓がある辺りから直径2cmほどの紅い宝玉が出てきて、『アイギス』に埋め込まれる。宝玉を良く見てみると、中で炎のようなものが揺らめいている。

「これが『証』ですか？」

「そうだ。無論、それだけではないがな」

「え？ 熱っ!!」

セファイドがそう言った瞬間俺の足元に紋章が現れ、右腕に一瞬灼熱感が奔る。

袖を捲り右腕を見てみると、炎のような、何かの紋章の一部のような、タトウーみたいな紋様が刻まれていた。

それを確認した瞬間、頭の中に膨大な情報が流れ込んでくる。

「ぐっ……」

思わず頭を抱え、しゃがみ込む。

「デイン！？ 大丈夫？」

こちらもほぼ一瞬で収まった。

「ああ、大丈夫だ」

俺は口ゼに答えながら立ち上がる。

「何があつたの？」

「かなりの量の情報が頭に流れ込んできた。ほとんどが魔術の知識だつたが……」

流れ込んできたのは火属性魔術の知識だ。

その中には俺の知らない最上級魔術の知識もあつた。

「『契約』も終わったようだな。気分はどうだ？」

「自分の中の枷が外れたような感じですよ」

まるで『転生』をした時のような感覚だ。

「うむ。後でスキルを確認すると良い。色々と変わっているはずだ。

それと『アイギス』、そろそろ起きるか」

「もう起きてますよ」。話しかけるタイミングが無かつただけですよ」

「な、何だ！？ 誰の声だ？」

いきなり女の子の声が頭の中に響いた。

『マスター、今のは『アイギス』の声ですよ。アイギス、マスターに挨拶して下さい。後、その喋り方をいい加減にやめて下さい』

『もう、ラグナレクはいつもうるさいなあ。初めまして、かな？

よろしくね、マスター』

「本当にアイギスなのか……？」



俺は左腕の『アイギス』を見ながら、言った。

『そうですね。もうマスターってば私の意識がないのを良いことに、いつも無茶な要求ばかりして』

「おい！！ その言い方だと、俺が何かしたみたいじゃないか!？」

案の定、ロゼが白い目で俺を見てる……

『アイギス！！ いい加減にきなさい!!』

『あははは。冗談だよ、マスター。あとラグナレク、うるさい』

ハア、中々イイ性格をしているようだ……

セファイドも苦笑している。

「すまんの、ディーン殿。どうやら、先々代のマスターに影響を受けたようだ。まあ、悪気はないから許してやってくれ」

先々代って、リシエルかよ……

あいつは本当に何をしてくれてんだ……

「まあ、怒ってる訳じゃないので良いですよ……」

「そうか。まあ、宜しく頼む。それとお主の記憶を少し見させてもらったが、ここまで徒歩で来たようだな？」

「ええ、そうですね」

記憶を見られたことについては、触れないでおこう……

「それでは何かと不便だろう。ここは1つ、饑別をやるう」

「良いのですか？」

「我も久々に本気で闘えて、楽しませてもらったからな。その礼だ。」

受け取ってくれ」

俺は死ぬかと思ったけどな……

「わかりました。有り難くいただきます」

「うむ。出でよ、『スレイプニル』」

セファイドがそう言うのと紋章が出現し、その中から1頭の馬が現れる。

【召喚】の紋章だったようだ。

『お呼びですか、王よ?』

どうやら、『スレイプニル』と呼ばれた馬が話しているようだ。

『あれは……神獣『焰神馬』ですね。確か、セファイド様の愛馬だったはずですが』

「うむ。今からそなたの主は、そこにいるディーン殿だ。彼の力になっ  
てやってくれ」

そう言えば、いつの間にか俺の呼び方が『ディーン殿』になっ  
てるな。

そんなことを考えていると、『スレイプニル』が俺の目の前に歩  
いてきた。

俺の知っている神話のように足が8本あったりはしないが、その  
身体は炎のような緋色で鬣はまさに炎そのものだ。

俺が昔、高弟の人に連れられて見に行った競馬のサラブレッドよ  
り二回りは大きいが、その身体は引き締まっていて、鈍重さは微塵  
も感じない。

『お初にお目にかかります、ディーン殿。これからは宜しくお願い致します。』スレイプニル』とお呼び下さい』

そう言いながらスレイプニルは頭を下げた。

「こちらこそ、宜しく頼む」

俺はスレイプニルの首筋を撫でながら言った。  
スレイプニルは気持ち良さそうに、『ブルル』と啼いた。

「スレイプニルもお主を気に入ったようだな。それと そちらの娘、名は何と言う？」

セファイドがロゼに向かって尋ねた。

「え！？ 私…？」

「この場に女性はロゼしかいないよ」

俺がそう言つと

『マスター、私も女の子ですよ？』

アイギスがそう言つが、おまえは腕輪だろっ……

「そうだ。ロゼ と申すのか。先程の炎渦巻く戦場へ飛び込んだ気概、そしてその魔術、気に入った。是非、これを受け取って欲しい」

セファイドはそう言つと、右手をまるで空気を握り固めるように握り締める。

そして、その掌を開くと直径3cmほどの宝玉があった。

『あれは『マナ結晶』ですね』

「何だ、それは？」

聞いたこともない。

『マナとは精霊の力の源となる、まあ魔力のようなものです。『マナ結晶』はそれが物質化したもので、超高純度の『精霊結晶』です。ちなみに先程、『アイギス』に埋め込まれた宝玉や私の宝玉も、あれより純度は高いですが同じものですよ』

「そうなのか」

「これを使い武器を作ると、かなりの性能を持った物が作れるだろう。ディーン殿に作ってもらおうと良い」

「……………ありがとうございます」

俺がラグと話している間に、ロゼがセファイドから『マナ結晶』を受け取っていた。

「それでは、そろそろ戻ると良い。そなたらが長時間ここにいるのは辛いだろう」

確かに滅茶苦茶暑いしな……

「そうですね。戻ります」

「うむ。アイギスにスレイプニルよ、しかとディーン殿の力となるのだぞ？」

『承知しました、王よ。しばしのお別れを』

『わかってますよ、セファイド様』

「それではディーン殿、この世界のこと、宜しく頼みましたぞ」

「任せて下さい」

俺はセファイドにそう答えると

「それじゃあ、戻るぞ？」

ロゼたちに確認を取る。

「ええ、そうしましょう」

ロゼが答えるのを聞き

「『エスケープ脱出』」

魔術を使い、俺たちは『火の精霊王の迷宮』を後にした。

## 第8話 精霊王の試練（後書き）

お読みいただいて、誠に有り難う御座います。

何とか、更新できました。

お待ちせしてしまつて、申し訳ありません。

これで、第1章は終わりとなります。

次話からは第2章となるのですが、その前に少し改訂したい箇所がありますので、そちらを先にやりたいと思います。

誤字、脱字等ありましたらご報告お願いします。

ご感想、ご批判等もお待ちしております。

それではまた次話で。

## 第9話 新たな力と再会（前書き）

いつもお読みいただいている読者の皆様、どうも有り難う御座います。

この第9話から第2章が始まります。

これからも宜しくお願い致します。

それではつたない文章ではありますが、読者様方の少しでも良い暇つぶしになればと思います。

## 第9話 新たな力と再会

『<sup>エスケープ</sup>脱出』で『火の精霊王の迷宮』を抜け出し、俺たちは森の入り口まで戻ってきていた。

「これからどうするの、ディーン？」

「一旦『桜花』に戻るよ。アドルさんとの約束もあるからな」

もつそろそろ調査も終わっている頃だろう。

『そうですね。そろそろ一月経ちますし』

『でももつ夕方だよ、マスター。今から『桜花』に行くんですか？』

アイギスの言う通り、もう陽が沈む。

「そうだな。少し試したいこともあるし、今日はこの辺りで1泊するか」

試したいこととは、当然『<sup>クリエイト</sup>創造』で寝泊まりできる空間を創ることだ。

『主殿、我はどのようになれば良い？』

スレイプニルが俺に尋ねてきた。

「そうだなあ。普段は自由に行動してくれても構わない。けど今日のところは色々ちやっとおきたいことがあるから、俺たちと一緒にいてくれ」



【調伏<sup>テイミンク</sup>】スキルで契約を結んでおきたいし、騎乗するのに必要な鞍なども作っておきたい。

『承知した』

スレイプニルがそう応えるのを聞き

「それじゃあ、ラグ。俺はもう、『創造<sup>クリエイト</sup>』で空間を創れるようになってるんだよな？」

『ええ、できますよ。まあ異空間自体は、以前から創れましたけどね……』

「うるさい。物を入れるだけの空間はインベントリがある俺には必要なかったし、別にいいんだよ。それで、どのくらい魔力を使えば良いんだ？」

『取り敢えず、全魔力を込めてみては？ 私もどれほどの空間が出来るか、見てみたいですし』

相変わらず他人事だと思って無茶言いやがって。  
まあ良い。

セファイドとの戦闘で消費した魔力も、すでに回復しているしな。

「じゃあ、やるぞ。『創造<sup>クリエイト</sup>』」

俺は全魔力を使い、『創造<sup>クリエイト</sup>』を唱えた。  
空間が裂け、魔力が流れ込む。  
しばらくそのまま時間が経ち

「あゝ、だるい……やっぱり、大量の魔術を一度に消費するのはキツイな……それで空間は出来たか？」

俺は大量の魔力を消費した倦怠感に耐えながら訊いた。

「大丈夫、デーン？」

「出来てるよ、マスター」

「早速、確認してみましよう」

「大丈夫か、主殿？」

ロゼとスレイプニルは心配そうに、ラグとアイギスは気にした様子もなく、言った。

ラグとアイギス  
こいつらは、本当に俺のことをマスターだと思ってんのか？

「……大丈夫だ。それじゃあ、確認してみよう。『オイブン解錠』」

そう俺が唱えると、ロゼが使った時よりも遥かに大きい裂け目が現れた。

そのサイズはスレイプニルを含め、俺たちが難なく通り抜けられるほどだ。

「それじゃあ、入ってみましよう」

「本当に入っても大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、ロゼお姉ちゃん」

「そう。なら、入りましようか」

ロゼお姉ちゃん!?

確かに、声の感じからすればロゼの方が年上っぽいが…

まあ良いか、ロゼも気にしていないみたいだし。

そんなことを思いながら、裂け目を潜る。

「お、広いな」

「なんて広さなの……私が創ったのとは、全然違う……」

『流石ですね、マスター』

『ひろ～い』

『流石、王がお認めになったお方』

俺たちは各々、この空間に対する感想を述べる。

俺が創った空間は一边が2kmほどの立方体の空間だ。

一边の長さはあまりに長いので大体の感覚だが、そのくらいはあるだろう。

「これならホームが造れるな」

「ホーム……？」

ロゼが不思議そうに訊いてくる。

「まあ、家みたいなものだよ。これで野宿しなくて済むな」

『そうですね。まだ時間もありますし、造りますか？』

「そうだな。材料さえ集めてしまえば、ホーム自体はスキルですぐに造れるしな」

俺はラグにそう答えると

「ロゼはどうする？　ここにいるか？」

とロゼに尋ねた。

「嫌よ。ここ、真っ暗じゃない。私も外に出るわ」

確かにここは【暗視】を起動しなければ、お互いの姿を確認できないくらい暗いしな。

まあスレイプニルの鬘が炎のように輝いているから、少しは明るい  
いが……

「わかった。じゃあ、出よう」

俺はロゼとスレイプニルを伴い、外に出る。

俺たちが外に出ると裂け目が閉じた。

「それじゃあ、俺は材料の木を切ってくるよ。ロゼも一緒に行くか  
？」

「……私がエルフだと知って、そんなことを言っているの？」

「……？」

俺はロゼと一緒に来るか　と尋ねたが睨まれた。

訳がわからない……

俺、何か気に触るようなこと言ったか？

『ハア〜。マスター、前にも言ったように『エルフ』や『ダークエ  
ルフ』は森の民と呼ばれているのですよ？　木を切るところを好ん  
で見る訳がありません』

『マスターは何も知らないんだねえ〜』

ラグとアイギスが呆れたように言ってくるが

「……ラグ、そういうことは先に教えておいてくれ。ロゼ、すまな  
かった。じゃあ、木も切らない方がいいか？」

仕方ない、石造りにでもするか。

「必要な木を切るのまでは気にしないわよ。ただ、それを見ていよ

うとは思わないわね」

「そうか、覚えておくよ。じゃあ俺は行ってくるけど、ロゼはここで待っていてくれ。この辺りの魔獣なら大丈夫だとは思うが、気をつけるよ？ スレイプニルもロゼのことを頼む」

「わかったわ」

『承知した』

ロゼとスレイプニルが応えたのを聞き、俺は近くの森に向かって歩き出した。

「この辺りで良いか？」

『はい。ここなら『火の精霊王の迷宮』ではありません』

俺がラグに場所を尋ねたのは、迷宮の木や岩などは神龍の力で保護されていて特別な理由が無い限り、決して切ったりできないからだ。

「それじゃあラグ、グレートアックス【両手斧形態】だ」

『了解しました』

ラグが、三日月型の巨大な刃を持った片刃のグレートアックスの両手斧になる。

「じゃあ、切るか」

俺はラグの変化を確認し、そう言つと木を切り始めた…

「こんなもんか……」

『沢山切ったね。ロゼお姉ちゃんが見てたら倒れちゃうね』

「うるさいぞ、アイギス……ラグ、どうにかしてくれ……」

『アイギスが私の言うことを聞くはずありません。諦めて下さい……』

……

『良くわかってるじゃない、ラ・グ』

「ハア、もう良い……必要な量も集まったし、戻ろう」

俺は切った木をインベントリに入れ、ロゼたちのいる場所へと歩いていった。

「あれ？ ロゼは何処だ……？」

俺が元の場所へと戻ると、ロゼもスレイプニルもいなかった。

『何処に行ったのでしようね？』

「わからん。【気配察知】で探すか……」

ロゼも強くなつたし、スレイプニルも一緒にいるはずなので心配はいらなと思うが……

俺は【気配察知】を最大範囲で起動し、ロゼたちを探す。

「いた。何してんだ、あんな所で？」

ロゼたちの反応は、ここから少し離れた川辺にあった。

『さあ？ 取り敢えず、行ってみましょう』

「そつだな」

『……………』

俺はラグに応え、反応のあった方へ歩いていった。アイギスが黙っていたのが、少し気になったが……

しばらく反応を頼りに森の中を進んでいると

「この辺りか……？」

森を抜け、川辺に出た。

『ツ！？ 主殿！？』

スレイプニルが驚いたような声をあげる。

「え？ 何だ？」

俺は訳がわからず、スレイプニルの方へ目を向けるが

「キ、キャアアアアアアー！！！」

ロゼの絶叫が聞こえてきた。

「な、何だ……？」

ロゼの方へ目を向けようとするど、

『ツ！？ 駄目です、マスター！！』

『いかん、主殿！！！！』

ラグとスレイプニルが制止するが、もう遅い……

川の中には水浴びをしていたのか、全裸のロゼがいた……

「なっ！？ す、すまん、ロゼ！！ 悪気はなかったんだ！！」

ロゼは体を隠すようにしゃがみ込んでいる。

『本当にいゝ？ 少し考えればわかりそうだけども。覗きたかったんじゃないのぉ？』

「黙れ、アイギス！！ 本当に知らなかったんだ！！ 信じてくれ、ロゼ！！」

俺は必死でロゼに言い訳をする。

「い・い・か・ら」

ヤバイ！！

ロゼの右手に『デモンズ・スピア』が握られている！！

「さっさとあっちに行けっ！！ このバカー！！」

ロゼが漆黒の槍を俺に向かって投げる。

「本気で投げやがった！！ アイギス、障壁展開！！」

俺はアイギスにそう言いながら魔力を込めるが、障壁が展開される様子はない。

「おい、アイギス！！ どうなってる！？」

『……………』



アイギスは完全に俺を無視している。  
そんなことをしている内に槍はもつ目の前だ!!

「うおっ!!」

俺は【縮地】で横に跳ぶ。

漆黒の槍は俺の髪を数本引き千切りながら通り過ぎ、背後の森を吹き飛ばす。

「おいおい……まともに喰らってたら危なかったな……ロゼは俺を殺す気か……」

俺は背後の森の様子を見ながら呟いた。

「フッフ……殺す気なんてないわよ？　ただ、ちょーっと痛い目を見てもらっただけよ」  
「ッ!？」

俺が恐る恐る振り返ると、そこにはローブを羽織り、剣を持ったロゼが立っていた……

顔は笑ってるが、目が笑ってない……  
正直、滅茶苦茶怖い……

「ま、待て、ロゼ……少し落ち着こう。というか、森の民じゃなかったのか？　森が吹き飛んでるぞ？　それにローブの前を閉じないと、見えてるんだが……」

俺がそう言った瞬間ロゼのこめかみに血管が浮かび、【闘気術】も使えないのに何かのオーラを纏う。

「…………へえ、言いたいことはそれだけ？」

『マスターはアホですか……………』

『これはもうしょうがないよね』

『……………』

ロゼが右手で剣を振り上げ、他の3人（？）が呆れている。

「わ、わかった。俺が悪かったから……………」

そう言っただけ俺は土下座しようとするが

「もう遅いわよ」

ロゼが左手で持った鞘が高速で横に振り抜かれる。

「ぐはっ！…！」

殺す気はなかったんだな……………

そんなことを思いつつ、横っ面を鞘で強打された俺の意識は途切れた……………

「…………痛っ……………」

俺は目が覚めると、川辺に寝かされていた。

体を起こすと、頭に乘せられていたのが、濡れたタオルが落ちる。

顎が滅茶苦茶痛い……………

『目が覚めたようですね、マスター』

「ラグ、俺はどのくらい気を失っていたんだ？」

すっかり陽が沈んでいる。

『1時間くらいですよ。ロゼさんにお礼を言ってくださいよ？ 気絶したマスターの看病をしてくれたのですから』

気絶“させられた”んだけどな…

「……ロゼは今、何処だ？」

『川の方にいますよ。ロゼさんにちゃんと謝ってくださいよ、マスター』

「わかってるよ」

俺はラグにそう言い、川辺に座っていたロゼの方へ歩いていく。

ロゼはチラッと俺の方を振り返ったが、すぐに川の方へ向き直る。

「何か用……？」

うっ……

まだ、かなり機嫌が悪いようだ……

「さっきは本当にすまなかった。後、看病してくれてありがとう。まだ気が済まなければ、好きなだけ殴ってくれ」

俺は頭を下げながらロゼに言った。

「……ハア、もう良いわよ。私もディーンに言ってなかったし、魔術を撃つたり鞘で殴ったりして少しスッキリしたしね」

「どうぞやら許してくれそうだ。」

『よかったねえ、マスター。許してくれて』

アイギスがそう言ってきたが

「ていうかおまえ、ロゼが水浴びしてるって気づいていたな？ 何で言わなかったんだ？」

『ん。そっちの方が面白そうだったから』

こいつは……

「しかもわざと障壁を展開しなかったな？」

『マスターならあのくらい簡単に躲せたでしょ？』

「デーン、悪いのはあなたなんだから、アイちゃんを責めたら駄目よ？ そんなことをしたら、また私が怒るわよ？」

アイちゃん！？

もしかしなくても、アイギスのことだろうな……

「ロゼ、その『アイちゃん』というのは何だ？」

「え？ アイちゃんがそう呼んで欲しいって」

何だ、それは……

『マスター、それはリシエル様が付けたアイギスの愛称です』

「あ、なるほど」

あいつが付けたなら納得だ。

『そうだよ。マスターもそう呼んで？』  
「……遠慮する」

流石にその呼び方を俺が使うのは、色々ときつい……

「それじゃあディーンも起きたし、食事にする？」

「作るのを任せても良いか？俺はその間に、ホームを造っておきたい」

「いいわよ」

そう言ってくれたので、ロゼに道具と食材を渡し、俺はホームを造ることにする。

「『<sup>オプン</sup>解錠』」

俺は空間への入り口を開く。

【暗視】を起動しつつ中に入り、インベントリから木を取り出そうとするが

「とその前に……」

俺はしておくことを思い出し、土属性魔術を使って床に土を敷き、ホームの建材として使う石材も創り出す。

「こんなもんで良いか」

入り口付近を除く、空間全体に深さ1mほどに土が敷き詰められたのを確認し、改めて木を取り出す。

「よし、じゃあ始めるか」

土がきちんと固められているのを確かめ、【建築】スキルを起動する。

瞬く間に、木や石材が切り分けられ、建物が組み上がっていく。そうしてしばらく待つと、俺が『VLO』で使っていたものよりでかい一軒家が出来た。

「こんなもんか」

外見は純和風と言うほどではないが、少し和風よりの和洋折衷とといった感じだ。

俺は中に入り、出来を確かめていく。

この世界には家に入るときに靴を脱ぐ習慣はなさそうなので、玄関はない。

扉を開けると、リビングが広がっている。

1階にはリビング、キッチン、風呂やトイレなどがあり、2階には寝室用の部屋を取り敢えず5部屋造つてある。

1階、2階の各部屋を確認し、次は離れへと向かった。

離れは3つあり、1つは工房と鍛冶場になっていて、もう1つは道場だ。

そして、最後の1つはスレイプニルのための厩舎になっている。必要ないかもしれないが、一応造っておいた。

「特に問題ないな。道具とかの整理は後でしょう」

俺はそう言つて外に出た。

「ディーン、夕食が出来たわよ」

ちょうど料理も出来たようだ。

「わかった。こっちも作業が終わったから食べよう」

そう言ってロゼとともに料理を食べ始める。

「そういえば、スレイプニルは何も食べないのか？」

俺はスレイプニルの食事が気になり、訊いてみた。

『我は精霊たちと同じようにマナを取り込んでいるので、特に食事は必要ないのだ』

「へえ、そうなのか」

「それは良いわね」

俺とロゼがそう言うと

『普通に食事を摂ることもできるぞ？ 我は食事をするのは結構好きだ』

「何を食べるんだ？」

肉とか言われたら嫌だな。

『野菜だな。そこらの草も食べられるがあまり美味くない。それに肉はあまり好まないな』

良かった。

その辺りは普通の馬だ。

「じゃあ、これ喰うか？」

俺はそう言って、サラダに入っていたオレンジ色のキュウリのよ  
うな野菜をスレイプニルの口元に持っていく。  
スレイプニルはそれを食べ

『うむ、美味しいな。ロゼ殿の料理の腕前はかなりのものだな』

サラダなんて切って盛っただけのような気もするが……

「ありがとう、スレイプニル。……後、デイン？ 何か失礼なこ  
とを考えなかった？」

「そ、そんなことある訳ないだろ？ だから、フォークをこっちに  
向けるのを止めてくれ……」

ロゼの勘が鋭くなってないか……？

「じゃあこれからは、スレイプニルの食事を作るわね？」

「ああ、そうだな。それで良いか、スレイプニル？」

『有り難い。宜しく頼む』

そんなことを話しながら食事をしていった。

『ねえ、ラグ。何で私たちは食事できないの……？』

『私が知っている訳ないでしょう……』

そうして食事が済んだので

「それじゃあロゼ、ホームを造ったから見えてくれ。あ、スレイプニ  
ルも一緒に見てくれよ」



「わかったわ」

『承知した』

「じゃあ、『<sup>オープン</sup>解錠』」

空間の裂け目を開き、俺たちは【暗視】を起動し中へと入る。

「どうだ、ロゼ？ 中々のものだろう？」

「中々なんてものじゃないわよ……あまり見ない感じの家だけど、かなり立派じゃない」

やっぱりこの世界では和風の家は珍しいのか？

結構洋風にしたんだけどな。

「中も見えてくれ。色々造ってあるから。スレイプニルはしばらく待っていてくれ」

「ええ、行きましょう」

『承知した』

そう言っただけで俺とロゼは家の中に入った。

「ここはリビングだ。食事したりする所だな。あっちにキッチンがある」

「広いわね。これならゆつくりと休めるわ」

「まだまだ見せたい場所は沢山あるぞ」

次は風呂場に連れていった。

「ここは何……？ あの四角いのは何なの？」

ロゼが湯船を指差しながら不思議そうに訊いてくる。

「あれは湯船と言って、あそこに湯を溜めて中に入るんだ。まあ、水浴びみたいなものだ」

「えー!? ということは、いつでも水浴びできるの!?!」

「まあ湯さえ溜めれば、いつでも入れるな」

「それは凄く嬉しいわ」

「後で使い方を教えるよ。じゃあ、次だ」

ロゼがキラキラした目で湯船を見ている。

「行くぞ、ロゼ?」

「……ええ、早く見て回りましょう? 早く使ってみたいわ」

ロゼが待ちきれないように言ってくる。

「次は2階だ」

俺たちは階段を上がり、2階へと行く。

「2階には俺たちの私室がある。5部屋あるから、好きな部屋を使ってくれ。部屋はどれも同じ造りだから」

そう言って、俺は階段から一番近い部屋の扉を開ける。

「ここも広いわね。この部屋だけで、前に私が住んでいた部屋と同じくらいあるわ……」

「まだベッドがないから、今日のところはシユラフで我慢してくれ」

ベッド自体はあるが、マットやシーツがない。

「そんなの全然構わないわ。野宿に比べたら100倍はマシよ」  
「八八、街に戻ったら買いに行こう」

やっぱりロゼも野宿は嫌だったんだな。

「工房や鍛冶場はロゼにはあまり関係ないから、次は道場だな」  
「わかったわ」

取り敢えずロゼに工房兼鍛冶場の離れの場所だけ教え、道場に連れていく。

「ここが道場だ。ここで訓練すれば、少しだが熟練度を得られる。明日からは、毎朝ここでロゼの訓練をするからな？」

「魔術も使えるの？」

「流石に最上級魔術を使うと壊れるから外でな。上級までなら大丈夫だ」

「わかったわ」

一通り説明したのでスレイプニルの所へ戻る。

「次はスレイプニルの番だな。一応厩舎を造ってみたが、どうだ？」

俺はロゼとスレイプニルを伴い、厩舎にやって来た。

『これは立派だな。我には勿体ないくらいだ』

『そんなことないさ。気に入ってくれたか？』

『気に入った。有り難う、主殿』

「こんなことくらい、お安い御用さ」

スレイプニルはそう言うと厩舎の中に入り、くつろいでいる。

本当に気に入ってくれたようだ。

「じゃあ、風呂の使い方教えるよ」

「ッ！？」 早く行きましようー！！」

俺はロゼに引き摺られながら、風呂場へと行った……

俺は再び風呂場に行き、ロゼに風呂の使い方を教えていた。

「この湯船に水属性魔術で水を入れて、火属性魔術で温めるだけだ。簡単だろ？」

俺はそう言う実践して見せた。

あっという間に湯船にお湯が満たされる。

「そうね。簡単だわ」

「後は実際の風呂の使い方だが、まずはその桶でお湯を汲んで体を流してくれ。本当は洗うんだが、まだ石鹸が用意できてないから今は我慢してくれ」

「セッケンって何？」

この世界は石鹸も無いのか？

確かに今まで見たことはないが……

「材料が揃えばすぐに作れるから、楽しみにしててくれ」

「わかったわ。楽しみにしておくわね」

「それじゃあ、実際に入ってみると良い。脱衣場の扉には鍵を掛けられるようになってるから、ちゃんと掛けてくれよ？」

あんな惨劇は二度とご免だ。

「わかってるわよ」

「お湯の温度は自分で調節してくれ。じゃあ、ごゆっくり」

ロゼが俺の言葉に頷いたのを見て、俺は脱衣場から出ていった。

「じゃあ、ロゼが風呂に入ってる間に色々とするか……」

『マスター、ロゼさんの武具ですか？』

『覗きに行かないの？』

「その通りだ、ラグ。後はスレイプニルの鞍とかもだな。……アイギスは黙れ」

本当に何でこんな性格なんだ……？

『冗談だよ、マスター』

そんなことを言い合いながら俺は離れへと歩いていった。

「さてとロゼの武器を作る訳だが、どんなのがいいと思う？」

俺はロゼがセファイドから貰った『マナ結晶』を、掌の上で転がしながら言った。

『そうですね……やはり剣の扱いにも慣れてきたようですよ、片手直剣の類が良いのでは？』

『私もそう思う。ロゼお姉ちゃんも、最初の頃より剣を扱い慣れてきたよね』

「ん？ 最初の頃って何でアイギスが知ってるんだ？」

こいつが覚醒したのはついさっきだ。

『意識自体は前から、マスターがラグと契約した時からあったんだよ？ ただ、喋れなかっただけ。だから、マスターたちの事はずつと見てたよ？ たとえるなら、夢で見てたって感じかな』

「そうだったのか。というか、今更だがアイギスも意思を持ってるんだな。まさか、クラス？の魔導兵装は全て意思を持ってるのか？」

アイギスみたいなのがこれ以上増えたら、流石に堪らない。

『いえ、意思を持っているのは私とアイギスだけです。私たち

『ラグナレク』と『アイギス』は対になっている魔導兵装なので「そうか。話が逸れたな、ロゼの武器の話に戻そう。俺はロゼに【ソードウィップ】を使わせようかと、思ってるんだが……どう思う？」

『オリジナルカテゴリーの【ソードウィップ】ですか。良いんじゃないありませんか？ それなら今までの【片手剣】の熟練度も無駄になりませんし』

『そうだね。それに何か、ロゼお姉ちゃんに似合ってる気がする』『アイギス、それはロゼに言うなよ……それでこの『マナ結晶』なんだが、これにはどんな特徴があるんだ？』

俺は『マナ結晶』を親指と人差し指で挟み、眺めながら言った。

『1つは『精霊結晶』よりも遥かに魔術との相性が良いことです。もう1つは私たちに使われている『マナ結晶』ほどではありませんが、精霊王たちの力を得ることで能力が成長します』

『これにはもう、セファイド様の力が込められてるね』

「それは凄いな……」

流石は精霊王が創っただけはある。

「そんなものを渡すなんて、セファイドは本当にロゼを気に入ったんだな」

『あの方自身、勇猛果敢なお方ですからね。ロゼさんのあの時の行動を気に入ったのでしよう』

「ロゼには、二度とあんなことをして欲しくはないがな……」

俺はそんなことを呟きつつ、武器の素材となる金属や道具類を取り出す。

剣身は硬度を重視して『オリハルコン』と『アダマンタイト』の合金で、刃と刃を繋ぐ鋼線は魔力の通りが良い『オリハルコン結晶』と『セイクリッドミスリル』の合金で作ることにする。

これで多少のことでは刃毀れもしないし、ロゼの魔力で操りやすくなるはずだ。

「それじゃあ、作るか」

そう言っただけ俺はロゼの武器を作り始めた……

「よし、出来たぞ」

俺の目の前には一振りの剣があった。

「後は『マナ結晶』を詰め込んで、紋章を刻むだけだな」

俺は作業台の方へと行き、『加工道具一式』と『刻印道具』を取り出して剣を仕上げていく。

そうして10分ほど経つと

「あ、ここにいたのね。お風呂、気持ち良かったわ」

風呂から出てきたロゼがやってきた。

ローブなどの装備は解除し、シャツとズボンといった軽装だ。

「それは良かった」

「ところで、何を作ってるの？」

「前にも言ったが、ロゼの新しい武器を作ってたんだよ。ちょうど完成したところだ」

俺はそう言っただけで出来上がった剣をロゼに見せる。

「片手直剣ね。ラグほどではないけど、少し長いわね？ でも、剣ならもう持ってるわよ？」

ロゼはどうしてわざわざ作ったの？ と言いたげだ。

「ただの剣じゃないのさ。ちょっと持ってみなよ」

そう言っただけで俺はロゼに剣を差し出す。

「わかったわ。……見た目よりかなり軽いわね」

「それはそうさ。『軽量化』の紋章を刻んである。他にも『自動修復』の紋章も刻んであるから、もし刃毀れしても勝手に直る」

「それは凄いわね……」

「後は剣に魔力を込めてみてくれ」

「わかったわ」



そう言ってロゼが魔力を込めると、剣身が20ほどに分かれ、鋼線で繋がった鞭状に変化した。

「ッ！？ 驚いた……これは何？」

流石にロゼは驚いている。

「オリジナルカテゴリーに属する、【ソードウィップ】と言う武器さ。通常状態は【片手剣】に属する、普通の片手直剣だ。当然、【片手剣】のアーツスキルも使うことができる。しかし魔力を込めると、今のような鞭状に変化するんだ。その状態の時はオリジナルカテゴリー【ソードウィップ】として扱われ、専用のアーツスキルしか使えなくなる」

「そんな武器があつたのね……」

「扱いが難しいから、あまり知られていないのかもな」

本当は【ソードウィップ】は『VLO』であるプレイヤーが作り出したもので、この世界には無いだろうが、説明が面倒なのでそう言っておいた。

「これを知ってるということは、ディーンは使えるの？」

「一応な。マスターはしていないが、ロゼに基本を教えることくらいならできる」

昔、【鋼糸】を教えることを条件に教わったが、結局ほとんど使わなかった。

理由は、用途が【鋼糸】と被っているからだ。

「だから、明日から使い方を教えるよ。扱いきれない場合は、また別の武器を考えよう」

「わかったわ。必ず修得してみせるから」

「期待しておくよ。それじゃあ俺は他にも色々作るから、ロゼは先に休んでいてくれ」

「わかったわ。あまり無理しないようにね？」

そう言っつて、ロゼは部屋へと戻っていった……

「じゃあ、俺もさっさと作業を済ませて風呂に入るか」

それから俺はセファイドとの戦闘で壊れた鎧、スレイプニルの鞍や手綱、ロゼの剣の鞘や新しい金属製の軽装鎧、その他細々とした物を作り、風呂に入ることにした。

「やっぱり、俺は日本人なんだなあ。あゝ、気持ち良い」

そんなことを呟きながら風呂に入り、休むことにした。

ちなみに、風呂のお湯は魔術で家の外に撒いた。

「明日は『桜花』に戻らないとな」

『そうですね。いつまでもはゆっくりしていられませんし』

『えゝ、もう少しゆっくりしようよ、マスター』

「まあ、今回ばかりはアイギスの気持ちもわかるが、これからいつでもここに来れるんだ。我慢してくれ」

そんなことを話しながらラグとアイギスの手入れをして、俺は眠りに就いた。

「おはよう、ロゼ」

「おはよう、デイン」

俺たちは挨拶を交わして道場へ向かう。

ちなみに俺とロゼの部屋は、階段を上がってすぐの向かいの2部屋だ。

「おっと、その前に『コレ』を設置しておかないとな」

外に出た俺は、そう言ってインベントリからある物を取り出す。

「それは何？ ずいぶんと大きな『精霊結晶』だけど……」

「これは『イミテーション・サン』という魔導具だ。本当はもっと小さくて、掌に乗るサイズだ。『闇の精霊王の迷宮』とかの真っ暗な迷宮で時間を知るための物なんだ」

「それが何で、こんな巨大なサイズになってるの？」

「こう使うのさ……!」

俺は渾身の力で『イミテーション・サン』を、空間の中心の上空に向かって投げた。

すると『イミテーション・サン』は上空で停止し浮遊したまま、まさに太陽の如く輝く。

「へえ、本当に太陽みたいね。どうやって作るの？」

「作り方自体は簡単だぞ？ 『精霊結晶』に太陽属性の魔術を込めるだけだ」

俺は『フレイムドラゴン』が残した巨大な『精霊結晶』を球体にし、全魔力を使って太陽属性魔術を込めたのだ。

「俺がこの空間にいる間に魔力を勝手に吸収して、外の太陽と同じ

ように昼は明るく夜は暗くなる。これでこの空間でも大体の時間がわかるだろ?」

「それは便利ね」

そんなことを話しながら明るくなった空間を歩き、道場へと向かった。

「それじゃあ、稽古を始めるぞ?」

「ええ、わかったわ」

「じゃあ、まずは【ソードウィップ】の扱いからだ」

俺はそう言っつて鞘に納まった剣をロゼに手渡す。

「ラグ、適当でいいから【ソードウィップ】の形態になっつてくれ」

『適当でよろしいのですか? まだ形態変化の登録はできますよ?』

「どうせ使わないし、適当で構わないよ」

『了解しました』

ラグがそう応えると変化が始まる。

やはり構造が複雑な分、変化に少し時間がかかる。

それでも1秒ほどだが。

「【ソードウィップ】の最大の特徴は、縦横無尽にあらゆる方向から襲いかかる攻撃だ。試してみせるから見ていてくれ」

そう言っつて俺はラグを鞭状に変化させ、昨日作っつておいた的を放り投げる。

そしてラグを何度か高速で振り、的を微塵に斬り裂く。

「ロゼのソードウィップは最大10mの範囲まで攻撃できるし、【

魔力操作】で分かれた剣身を繋いでいる鋼線を操れるように作ってあるから、魔術の得意なロゼには扱いやすいはずだ」

「わかったわ」

「よし、それじゃあ俺に攻撃してみてくれ」

そう言うと俺はラグを【杖術形態】にしつつ、ロゼと5mほどの間隔を空けて向き合う。

「大丈夫なの？」

「いくらなんでも、それは俺を舐め過ぎだ」

「わかったわ。じゃあ、いくわよ？」

「ああ、来い」

ロゼがソードウィップを振り、攻撃してくる。

俺は杖でそれを弾きつつ

「甘すぎるぞ！！ 手加減なんてしなくてもいい！！」

「くっ…」

ロゼは縦に横にと次々と攻撃を繰り返す。

「直線的すぎる。ただ振るんじゃなく、攻撃の途中で魔力を通し軌道を変えるんだ！！」

俺は躲し、弾きながら叫ぶ。

「わかった！！」

ロゼが魔力を通したのか、ソードウィップが空色の輝きを放つ。次第に攻撃の軌道が複雑さを増していく。

足を狙ってきた切っ先が直前で俺の顔に向かい跳ね上がる。

「その調子だ！！ 魔力だけじゃなく、手首の返しても操れ！！」

俺は顔へと跳ね上がった切っ先を頭を振り躲す。

完全には避けきれず、頬が薄く切り裂かれ血が流れる。

ロゼは俺の言った通りに手首の返しも使いソードウィップを操る。魔力に操られ、物理法則を無視した動きで俺を襲う。

「流石だな。これはちよつとキツイ」

少し本気を出すか。

俺はさらに躲すスピードを上げる。

ロゼも操る速度を上げるが、慣れない武器では追いつかない。

そして、俺は操作が甘くなったソードウィップを杖で弾き飛ばし

「そこまで！！」

俺は終わりを告げた。

「……どうだった？」

息を切らせたロゼが訊いてくるので

「初めてにしては上出来だ。この調子で腕を磨けば、この距離なら俺でも躲せなくなるな」

「本当？」

「ああ、本当だ。まだまだ甘いところもあるから、明日からも厳しくいくぞ？」

「ええ、お願い」

「じゃあ5分休憩したら、次は剣の稽古だ」

「え……？もう終わりじゃないの……？」

「当たり前だろ？ まだ1時間もやってないぞ？」

「……わかったわ」

ロゼが休憩している間に、俺は昨日作っておいた模擬刀を取り出す。

俺の分は刀で、ロゼの分は剣だ。

両方とも金属製だが、当然刃は潰してある。

「はい、休憩終わり」

「もう……」

「戦闘訓練においては、優しくはしないぞ？」

『ドSね、ドSだわ』

アイギスが茶々を入れるが、無視だ。

「わかったわ。見てなさい。ポコポコにしてあげるわ……」

「ハハハ、その意気だ。できるものなら、やってみろ」

俺はわざと挑発するように、ニヤリと笑いながら言った。

そうしてロゼに模擬刀を手渡す。

「よし、来い！！」

「やあ！！」

俺が言った瞬間、ロゼが上段から打ち込んでくる。

ロゼの剣を受け流しながら

「踏み込みが甘い。もっと床を踏み抜く勢いで」  
「せいっ!!」

少し速さを増した横薙ぎを一步下がって躲し

「防御も忘れるなよ」  
「くっ!!」

俺は模擬刀を逆袈裟に斬り上げる。

手加減はしているがロゼは受け流せず、体勢が崩れる。

俺は次々と打ち込みながら

「魔術を使っても良いぞ? もちろん上級までだぞ?」

「……完全に舐めてるわね」

ロゼは俺の刀を受けながら後ろへ跳ぶと

「『ファイアランス』」

いきなり上級魔術を放った。

「そのくらいじゃまだまだ」

俺は模擬刀に気を纏わせ、炎槍を打ち砕く。

「な!? 魔術を砕くなんて……」

「1本出したくらいじゃ、俺には届かないぞ?」

「まだまだ!!」

斬りかかってきたロゼをあしらいながら、稽古は進んでいった……



あれから格闘術の稽古もして、今日の稽古が終了した。

「大丈夫か、ロゼ？ これからは、毎日こんな感じだぞ？」

「ハア……ハア……ハア……」

「喋るのも、無理そうだな……」

ロゼは疲労困憊すぎて喋れない。

「取り敢えず風呂場まで連れて行ってやるから、風呂に入っていてくれ。俺はもう少し稽古をしてから、朝食を作るから」

ロゼは風呂に入れることに目を輝かせたが、さらに稽古をすると言った俺に対して、信じられないものを見たような目を向ける。

「まあ昔からやってれば、このくらい何でもないよ」

そう言いながら俺はロゼを抱え上げ、風呂場へと連れていった。

俺は風呂に湯を張り、ロゼに入っているように言って外に出た。

「さて、それじゃあセファイドとの契約で何が変わったのか確認するか」

契約してから色々あったので、まだ確認ができていなかったのだ。

『それではマスター、ウィンドウを開いて下さい』

俺は言われた通りステータスウィンドウを開く。

Name: デイーン

種族: 人族(転生2回)

称号: 認められし者

Lv: 245/500

HP: 35000/40000

MP: 35000/40000

SP: 16000/20000

STR: 1515/2000

DEX: 1510/2000

VIT: 1525/2000

AGI: 1535/2000

INT: 1500/2000

WIS: 1500/2000

スキルスロット: 50/120

「称号が変わってるな」

称号が『認められし者』になっている。

精霊王に認められた者という意味だろう。

『このくらいはまだ序の口だよ、マスター。スキルも確認してみよう。』

俺はアイギスに言われた通りスキルを確認する。

「【加速】が【疾風迅雷】に、【縮地】が【縮地无疆】しゆくちむきやうになっているな……しかも【火の精霊王の加護】というスキルが増えている」

契約時に流れ込んできた知識によると、【疾風迅雷】は以前使った【加速】と【縮地】の同時使用と同じ効果をノーリスクで使えるようだ。

そして、【縮地无疆】は【縮地】の移動距離が最大500mまで拡張されたスキルだ。

「【火の精霊王の加護】とは何だ？」

これだけは知識が無かった。

「それは説明するより、実際に試した方が早いですね。下級で良いので火属性魔法を使って下さい。くれぐれも、ホームの方に撃たないで下さいよ？」

「わかった。」

俺はホームとは逆の方を向き

「『ファイア・アロー』」

初歩の『ファイア・アロー』を放つ。

火の矢が地面に着弾した瞬間

『ドーンッ！！』

まるで『フレイムドラゴン』の炎弾のように火柱が噴き上がる。

【鷹の目】ホークアイで確認すると、着弾地点の土が吹き飛んでいた。

「下級でこの威力か……凄まじいな……」

『はい。なので、くれぐれも外で使う時には気をつけて下さい』

それはそうだな。

こんなもの、そう簡単には使えない。

『マスター、最上級魔術も使えるようになってるよ?』

アイギスが言ってきたので取り敢えず使ってみる。

「『ノヴァ・エクスプロージョン』」

セファイドも使ってきた、火属性最上級殲滅魔術を使う。  
直径5cmほどの炎弾が放たれ、膨張し爆裂する。

「セファイドが使ったのとほぼ変わらない威力だな……これも迷宮  
以外では使えないな……」

この威力だと地形が変わる……

『もう1つだけ、このスキルの効果がありますよ。魔導銃を抜いて  
下さい』

「わかった」

左の魔導銃を抜く。

「抜いたぞ。どうするんだ?」

『それでは『火』をイメージしながら魔力を込めて下さい』

ラグが言ったように、燃え盛る炎をイメージしながら魔力を込める。

魔導銃に詰め込まれた『精霊結晶』がいつもと違い、紅く輝く。

『それでは撃つてみて下さい』

俺は魔導銃を構え、放つ。

すると魔導銃から炎弾が放たれた。

「……………これは何だ？」

『マスターは火の魔力を操れるようになったのですよ。だから、火属性魔術の威力が上がったのです』

「そうだったのか……………まるで火の精霊だな」

『そうだよ？ マスターは、もう人よりも精霊に近い存在だよ？』

「……………」

えゝ、俺はもう人じゃないってことか……………

何となくわかってはいたが、実際に言われると結構へこむな……………

『最終的には、アリュージェ様のお力を受け継がなくてはならないのです。それは人の体のままでは不可能ですからね』

『そうそう。それにもうマスターは不死じゃないけど不老だよ？』

『お姉ちゃんなら、跳んで喜んでるよ？』

「不老って……………もうこれ以上、歳を取らないのか？」

『はい。髪が伸びるなどの代謝はしますが』

『それじゃあ私たちのスキルを確認して、戻ろうよ。そろそろロゼお姉ちゃんがお風呂から出てくるよ？』

「そうだな。」

アイギスの言うことはもっともなので、俺自身の事は気にしない

ことにして、ラグとアイギスのスキルを確認する。

魔導兵装クラス？ 『ラグナレク』

常時：永久不滅、形態変化、質量変化

特殊固有スキル：【覚醒】、【クラウ・ソラス】

魔導兵装クラス？ 『アイギス』

常時：精神異常、猛毒、沈黙毒、麻痺、即死攻撃無効化

魔力障壁展開時：全ダメージ100%カット

特殊固有スキル：【SP減少半減？】、【SP自然回復量UP？】

、【取得経験値倍加？】、【HP自動回復】、【MP自動回復】、

【障壁展開制限解除】

「まあ、アイギスの方のスキルは何となくわかるな。だが、ラグの方の【クラウ・ソラス】って何だ？」

『え、聞いてよ』

「はいはい、後でな。それで、ラグ？」

『【魔法剣】ですよ。セファイド様が使っていた炎の剣を、覚えていますよね？ あの剣です』

「な！？ あんな無茶苦茶な性能の剣が使えるのか？」

『流石に、物質を透過することはできませんよ？ 私が炎を纏うのですから』

「使ってみて良いか？」

『いいですよ』

「それじゃあ、ラグ。【魔法剣】起動、『クラウ・ソラス』」  
『了解しました』

ラグが応えると、剣が業火を纏う。

「……流石に持ち主は熱く感じないな」

セフアイドが使った時は対峙しているだけで服が焦げたのに……

『まあ持ち主を焼き殺したら、洒落になりませんかからね……』

俺はラグの言葉を聞きながら業火を纏った剣で地面を一撫でする。地面があっさりと融解してガラス状に固まる。

「凄まじいな……これも使いどころを間違えないようにしないとな」  
『そうですね』

こんなものを考えなしに振り回したら、間違いなく口ゼまで殺してしまう。

『もう戻ろっよ〜』

アイギスがそう言うので

「そうだな。そろそろ戻らないとヤバいな」

俺はそう言って、アイギスのスキル説明を聞きながら家の方へと歩いていった……

ついでにレベルが10上がっていたので、ポイントを振り分けておいた。

家に戻り、俺たちの朝食（昼食？）とスレイプニル用のサラダを

手早く作ったが、ロゼはまだ風呂から出ていなかった。

流石に心配になり声をかけたが、どうやら風呂の中で酷使した筋肉を揉み解していたようだ。

中々正しい風呂の使い方だ。

スレイプニルに食事を持って行き、しばらく待っているとロゼが出てきた。

「身体中の筋肉が痛いわ……」

「すぐに治るよ。それにしばらく続ければ、筋肉痛にもならなくなる」

「そうよね……ディーンは全然平気そうだものね……」

ロゼが恨みがましそうに言ってくるので

「仕方ないな……『パーフェクト・シャインヒーリング』 どう

だ、少しは楽になったか？」

「まだ少し痛いけど、全然マシになったわ……もっと早く使ってくれても良かったじゃない……」

「そう言うな。その方が自分の未熟さが良くわかるだろ？ それに効くかどうか、わからなかったしな」

「うう、それはそうだけど……」

「まあこれからも、あまりに痛みが酷ければ使うから。それよりも食事を食べて『桜花』へ戻ろう」

「……わかったわ」

そうして俺たちは食事を食べ始めた。

食事を食べ終わり、ロゼたちと異空間の外へと出ていた。



「『イミテーション・サン』はちゃんと機能しているな」

空間の中と外ではほとんど明るさに差は無い。

「そうね。これなら時間がわからなくなったりはしないわね」

「そうだな。それで今から『桜花』に戻る訳だが……スレイプニル、おまえに乗せてもらっても良いか？」

『当然だ、主殿。我はそのためにいるのだから』

「ありがとう。じゃあ、鞍と手綱を付けさせてもらっぞぞ？」

『承知した』

スレイプニルはそう言うと、着けやすいようにしゃがんでくれた。

「すまない。ちなみに鎧も作ってみたんだが、着けて良いか？」

『重ね重ねすまない。我は防御に難がある種族だから助かる』

『焰神馬は魔術で攻撃はできますが、近接戦には弱いですからね』

『うむ、そうなのだ。かと言って、そう簡単には近寄せはしないかな』

「何か自信がありそうね？」

『後でわかるよ、ロゼお姉ちゃん』

そんなことを話しながらスレイプニルに装備させていった。

そして装備をさせ終わり、スレイプニルが立ち上がると

「お〜、これは……」

「流石ね……」

『これは見事ですね……』

『マスタ〜にしては良いセンスね〜』

スレイプニルに着けた鎧は、昔の西洋の軍馬が着けていたような鎧だ。

スレイプニルの炎のような毛色と合わせるように、『オリハルコン結晶』製だ。

防御力も問題ないだろう。

流石に轡くわをはめるのは躊躇われたので、手綱は首筋を守る鎧に接続してある。

『これは良い物のようだ……凄まじく軽く、着けている感じが全くしない』

鎧には『軽量化』の紋章を刻んである。

これでスレイプニルには負担がかからないはずだ。

「それじゃあ、行くか」

「そうね」

『では主殿、ロゼ殿、私の背に乗ってくれ』

俺たちが乗りやすいように再びしゃがんでくれる。

「ありがとう、スレイプニル」

「すまないな」

跳び乗れないことはないが、やっぱりこっちのほうがりやすい。ちなみにロゼが前で、俺が後ろからロゼを抱えるように手綱を握る。

『では、しっかり掴まっけてくれ』

そう言うとスレイプニルの足元に炎が現れ、凄まじい速度で駆け

る。

「うおっ!!」

「きゃ!!」

かなりのGが発生し、後ろに飛ばされそうになる。

「待て待て、スレイプニル!! こんな速度じゃ人を撥ねるぞ!!」

俺は風の音に負けないように大声で叫ぶ。

『心配召されるな、主殿』

『大丈夫ですよ、マスター』

『そうだよ』

何かを知っていそうな3人(?)は、気楽に言ってくる。

「何が大丈夫なんだ!？」

俺がそう怒鳴った瞬間、スレイプニルが空を翔ける。

「な!？」

「キヤアー!!」

「こら、ロゼ!! 暴れるんじゃない!! 落ちないように抱えてるから大丈夫だ!!」

パニックになったロゼが暴れるのを必死で押さえる。しばらくして、スレイプニルが少し速度を落とす。

「ハア、これはどういうことだ……?」

俺はやつと落ち着いたロゼを、改めて抱え直しながら訊く。  
ロゼはまだ少し震えている。

『すまない、主殿。悪乗りしすぎた』

『これは焰神馬の特殊固有スキル【天翔】ですよ』

そのまま、『天』を『翔』けるから【天翔】だろう。

「知っていたなら先に言えよ。ロゼを見てみる、まだ震えてるぞ」

俺は片手で手綱を握りつつ、もう片方の手でロゼの頭を撫でる。

『ごめんね、ロゼお姉ちゃん。高い所、苦手だった？』

「そんなことはないけど……いきなりだったから……ディーンもごめんなさい」

「俺は気にしてないよ。ほら、スレイプニルとラグもちゃんと謝れ」

『すまなかった、ロゼ殿』

『すみませんでした、ロゼさん』

「もう良いわよ。空を翔けるっていうのも、気持ち良いしね」

ロゼはもう慣れたのか、この空の旅を楽しんでいる。

「悪乗りもほどほどにしておけよ？　それで、どのくらいで『桜

花』に着くんのだ？」

『そうですね。この速度で行けば、陽が沈む前には着くでしょう』

「それは凄まじく速いな。徒歩の時は途中で1泊したのに。流石はセファイドが勧めただけのことはあるな」

『速度を上げれば、もっと早く着くぞ？　どうする？』

「それはやめて」

スレイプニルの提案をロゼが即座に却下する。  
スレイプニルはロゼの言葉に何かを感じたのか、少し体を震わせ

『……承知した』

大人しく頷いた。

「じゃあ、ロゼ。到着までしばらくかかるみたいだし、その間にその剣の銘を考えてくれ」

俺は、ロゼが左の腰に佩いている鞘に視線を向けながら言った。

ロゼの剣は、オリジナルカテゴリの武器なので自分で銘が付けられるのだ。

「私が付けても良いの？」

「ああ。俺が付けても構わないが、俺にその類のセンスはないし、ロゼが使う剣だ。自分で付けたいだろう？」

「そうね。考えてみるわ」

そして1時間ほど経った時

「決めたわ。この剣の銘は『ネビュラ』よ」

「星雲か。良いんじゃないか」

ソードウィップ状態を星雲に見立てのだろう。

「名前を付けると、急に愛着が湧くわね」

「ハハ、良いことじゃないか。ロゼの相棒なんだから、大切にしてい

やってくれ」

「そうね。その通りだわ」

そんなことを話しながら俺たちは『桜花』へと進んでいった。

あれから2、3時間ほどスレイプニルの上で過ごし

「お、『桜花』が見えてきたな」

遠目にだが『桜花』の街が見える。

予定より早く、まだ昼過ぎといったところだ。

「デイン、流石にこのまま街に降りたらパニックになるわ」

「それもそうだな。スレイプニル、ある程度近づいたら地上に降りてくれ」

『承知した』

スレイプニルはそう応えて高度を下げていく。

地上に降り、ある程度『桜花』に近づいた所で俺たちはスレイプニルから降りる。

「しばらく時間がかかるが、スレイプニルはどうする？ そこら辺で時間を潰してるか？」

街中にスレイプニルを連れていく訳にもいかないので、俺はどうするかを尋ねた。

すでに【調伏】<sup>テイミンク</sup>で契約は結んでいるので、何処にいても【召喚】で呼び出せる。

『我はホームで休んでいよう。あそこを気に入ったのでな』  
「そうか、わかった。『解錠<sup>オープン</sup>』」

俺が空間の入り口を開くと、スレイプニルは悠々とした足取りで入っていった。

「彼はずいぶんとあそこを気に入ったようね」  
「そうだな。造った甲斐があるよ」

そんな言葉を交わしながら俺たちは『桜花』へと歩いていった……

「おお、久しぶりじゃの、デイン殿。それにロゼも」

「お久しぶりです、アドルさん」

「ご無沙汰してます、アドル様」

俺たちは『桜花』に着くと、すぐにギルドへと赴きギルドマスターと会っていた。

「デイン殿は何やら雰囲気が変わったの？ その様子から察するに、精霊王との契約は上手くいったようじゃの」

「はい。無事、契約をすることができました」

「それは何よりじゃ。ロゼの雰囲気も変わっておるが、どうやら『転生』したようじゃの？」

流石と言ったところか、アドルさんはロゼの『転生』にも気づいたようだ。

「はい。デインのおかげで、『転生』することができました」

「そうか、そうか。それは何よりじゃ」

まるで孫娘の成長を喜ぶお爺ちゃんだ。

実際の年齢はロゼの方が上だと思っが……

「それとロゼよ。お主はもうワシの部下ではないんじゃないから、『様  
なぞ付けなくて良いぞ?』」

「いいえ、それはできません。それでは私は鑑定を手伝ってきます」

そう言つと、ロゼは『失礼します』と部屋から出ていった。

「いいんですか? ロゼはもうギルド職員ではないんじゃない?」

「構わんよ。あやつがああ言つたということは、かなりの量の換金があるんじゃない?」

確かに俺たちはこの部屋に来る前に、要らない『精霊石』や素材などの換金を頼んだ。

そのあまりの量に、職員のお姉さんは少し涙目になっていたが……

「すみません。いつも、いつも」

「何、気にすることはないぞ? こちらとしても、貴重な素材が大  
量に手に入るからの。デイン殿のおかげで、ここ最近の『桜花』  
の市場は賑わつておるよ」

「そう言ってもらえると助かります。それじゃあ、本題に入ります  
よう」

世間話はこのくらいで良いだろう。

「そうじゃの。それで調査の結果じゃが、ある程度の報告は上がっ  
てきておるが、まだ確証が掴めておらんじゃ」



「そうなのですか？ それでは、俺はどうすれば良いんですか？」  
「調査を行なっておる冒険者たちからの報告では、どうやら『アーリグリフ』が最も多く異変が起こっておるようじゃ」

魔族の国『アーリグリフ』か……

『確か、『キングモス』の棲息地も『アーリグリフ』でしたね』  
そういえば、そうだったな

ずいぶん前のことなので、すっかり忘れていた。

「じゃから、Sランクを筆頭にAランク以上の冒険者を『アーリグリフ』に調査に向かわせたが、芳しい結果は上がっておらんようじゃ。どうやら『魔物』が入り込んでいる ということは聞いておるが……」

「『魔物』ですか……それは大丈夫なのですか？ 『魔物』の中にはかなり強力な個体もいますが……」

俺は『魔物』とは『VLO』でしか闘ったことはないが、かなりの強さを持つものもいた。

こちらの世界で言えば、『神獣』クラスだろう。

Sランクの実力がどれほどのものかはわからないが、かなり危険だろう。

「Sランクもおるから、早々危機に陥ることはないと思うが……それでも不安は残る。じゃから、ティーン殿には『アーリグリフ』に赴いて、彼らと協力して可能なら『魔物』を排除してもらいたいんじゃない」

どうする、ラグ？ おまえの意見を聞かせてくれ

『……マスターの中では、もう結論は出ているのでしょう？ 反対

はしませんよ。『アーリグリフ』には『風の精霊王』もいますしね  
そうか

ラグの言う通り、俺の中で結論は出ていた。

「わかりました。俺も『アーリグリフ』には行かなくてはなりません。その依頼、受けましよう。ただしその冒険者たちが足手纏いと判断したら、容赦なく置いて行きます。それでも構いませんか？」  
「お主の判断に任せよう。元より、お主に逆らえる冒険者はおるまいて」

「わかりました。それでは、すぐに『アーリグリフ』に向かいますよう」

「それが、そもいかなくての……ギルド総本部のグランドマスターがお主に会いたがっておるんじゃ。なので、一度『グランドティア』に行ってくれんか？」

「それは別に構いませんが……」

『グランドティア』はこの大陸の中心に位置しているので直接『アーリグリフ』にも行けるが、『魔物』の方もかなり切迫しているようだが…

「『アーリグリフ』のギルドにも、お主のことを伝える時間が必要じゃしの……」

「そうですか……わかりました。それでは『グランドティア』を経由して、『アーリグリフ』へと向かいましょう」

「すまんの。宜しく頼む」

「任せて下さい。それでは失礼します」

「ロゼにも宜しく言っておいてくれんかの」

俺はアドルさんの言葉に頷き、部屋を出た。

そして、ロゼとギルドのお姉さんが鑑定をしている部屋に行く。

「ロゼ、鑑定は終わったか？」

「あ、デイン様。ちょうど今、終わったわよ」

「そうか、お疲れ様。それで、そっちのギルドの職員の方は平気か？」

「あゝ、あまり大丈夫ではないわね。……少し休憩してきなさい。買い取り金額は私が言っておくから」

「……わかりました。ありがとうございます、ロゼさん」

ギルドのお姉さんはそう言つと、少しフラつきながら部屋を出ていった。

「悪いことをしたかな……」

「まあ仕事だと思つて、我慢してもらつしかないわね……」

「ロゼも手伝つたことだしな。それで、いくらになった？」

「あゝ、大体250万ティルね。端数もいくらかあるけど、どうする？」

「さっきの人にでも、ボーナスとして渡しておいてくれ」

「そうね。お金も、もうかなりあるしね」

そんなことを話しながら部屋を出て受付に行き、金を受け取る。端数は、鑑定をしてくれたお姉さんに渡してもらつように頼んだ。すると受付のお姉さんが

「デイン様、ソファラ様の依頼はお済みですか？」

「はい。終わってますよ」

俺はそう言つて、インベントリから『マンドラゴラ』を取り出す。

「ッ!? 流石ですね……ディーン様はソファラ様と既知だと伺っておりますが、『マンドラゴラ』はギルドの方からお渡ししておきましようか? それとも、ディーン様が直接お渡しになりますか?」

うーん、久しぶりにジェラルドさん達にも会いたいし、スレイプニルがいれば移動に時間もかからないだろう。

「俺が直接渡しに行きますよ」

「わかりました。それでは、こちらが報酬となります。お受け取り下さい」

「ありがとうございます」

俺は報酬の1万テイルを受け取り、ギルドを後にした。

「それで、ディーン。次は何処に行くの?」

ギルドを出て、すぐにロゼが尋ねてきた。

「取り敢えず買い物を済ませてから『ウィプル村』に行く。ロゼも聞いていたように、ソファラさんに『マンドラゴラ』を渡さないといけないからな」

「その後は?」

「グランドマスターに会うため、『グランドティア』のギルド総本部へ行く。その後は『アーリグリフ』だな。アドルさんの依頼と『風の精霊王』に会うためだ」

「忙しくなりそうね……」

「ああ、そうだな」

そんなことを話しながら、ロゼのアドバイスを聞きつつ食材を買

い込んでいく。

「ロゼ、この街に家具屋のような店はあるか？」

「あるわよ。それがどうしたの？」

「寝具を買わないといけないだろ？ 他にも色々買っておきたいし」

「そうだったわね。だったら、良いお店があるわ」

「じゃあ、そこに行こう」

「ええ、こつちよ」

ある程度食材を買った後、ロゼに案内されて家具屋へとやってきた。

「こつちよ」

「でかい店だな……」

俺の目の前にはかなりの大きさの店があった。

「扱っている商品が大きい物が多いからね。じゃあ、入りましょう

」？

「そうだな」

そう言っただけで俺たちは店に入っていく。

なあ、ラグ。馬車って家具なのか……？

何故か、かなりの種類の馬車が売られている。

『この世界では長距離の旅をする時は、寝泊まりに馬車を使いますからね。家具のようなものかもしれない』

そうなのか……？

「どうしたの、ディーン？ ポーっとして」

「いや、馬車も売ってるんだなと思ってな」

「私たちには必要ないでしょ？ ああ、そういうこと。ラグに聞いていたのね？」

「まあ、そうなんだが……何でわかったんだ？」

「アイちゃんが教えてくれたのよ」

俺には聞こえないようにアイギスが教えたようだ。

『マスター、ロゼさんとアイギスは良くマスターに聞こえないように話をしていますよ？』

「何だつて？」

『もうっ。バラさないでよ、ラグー！』

「バラされたら困るようなことを話しているのか……？」

「別に、普通におしゃべりしているだけよ？」

「……………」

何を話していたかは聞かない方が良さそうだ……

「……………まあ仲が良いのは、良いことだ」

『そうそう。わかってるじゃない、マスター』

「そういうことよ。私だって、偶には女の子同士で話したいしね」  
「わかったよ。好きにしてくれ……………」

そんなことを話しながら買い物をしていく。

マットは2人とも最高級の物を買った。

シートは手触りがシルクのようなもので、色は俺は白、ロゼは女性らしく淡いピンクだ。

他にもカーテンなど様々な物を買っていく。  
特にロゼは様々な物を買っている。

「このくらいで良いわね」

「どれだけ買うのかと思ったよ……」

「そう？ そんなには買ってないと思うけど」

「そ、そうか……」

会計をすると、店員はホクホク顔だ。

これだけ買えば当然だ。

上等な装備一式くらいの値段になった。

「お買い上げになられた品物は、どちらにお送りすれば宜しいですか？」

店員さんが尋ねてくるが

「ああ、構いませんよ。持って帰ります」

そう言つと俺は買った物に触れ、次々とインベントリに放り込む。

「えー!？」

店員さんが驚き、声を上げる。

「ほ、ほら、時空属性魔術ですよ!!--」

ロゼが焦つたように『解錠』<sup>オプン</sup>と唱え、開いた異空間を見せている。

「そ、そうですよね……驚いた……でもあんな大きなもの……」

「あははは、驚かせてごめんなさい」  
「いつ……」

ロゼが店員さんの言葉を遮るように謝りながら、俺の足を思いっ切り踏んでくる。

「お、驚かせて、すまなかったな……」  
「いえ。こちらこそ、すみませんでした。それではお買い上げ、有り難う御座いました。またお越しく下さい」

そう言う店員さんに見送られながら店を後にする。

「もう、デーン。気をつけてよ？」

「いや、ラグはインベントリを使っても大丈夫だと言っていたぞ？」  
「いくら時空属性魔術だと言いつても、あんな大きな物を入れられるほどの異空間を創れる術者はそうはいません。もう少し考えて下さい」

『マスターは、本当に考えなしたね』  
「くっ……こいつら……」

そんなことを言い合いながら街の外へと歩いていく……  
街の外へ出た俺は空間を開き、スレイプニルを呼ぶ。

「休んでいたところすまないが、また乗せてくれ」

『何、気にすることはないぞ、主殿』

『マスター、『ウィプル村』はここから北西の方角ですね』  
「わかった。じゃあスレイプニル、頼む」

俺たちが騎乗したのを確認したスレイプニルは、『ウィプル村』へと天を翔けていった。



『あ、マスター。【神眼】を使ってみて下さい』

「…………？ わかった」

俺はラグに言われ、【神眼】を起動する。

「うお！？ 何だこれは！？」

【神眼】を起動し右眼を閉じると、俺の体に『火の精霊』が纏わりついていた。

『マスターがセファイド様に認められたので、火の下級精霊が寄つて来ているのですよ。特に害はありませんし、むしろ魔術が強力になります。その威力はホームで使った時の比ではありませんよ？』

「そうなのか。まあ邪魔にもならないから良いけどな。それに、前は見えなかった白と黒の球体も見える」

『それが光と闇の精霊です。白いのが光で、黒いのが闇です』  
「へえ」

光の精霊はそれなりにいるが、闇の精霊はまだ昼間だからか、ほとんどいない。

「デインは精霊が見えるの？」

「ああ、この眼のおかげでな」

俺がそう言うと、ロゼは振り向き俺の顔を見上げる。

「左の瞳が金色になってるわ！？ 何なの、それ…………？」

「ん？ これは元々ディオスの左目なんだ。だから魔力を込めると、瞳が金色になって精霊が見えるようになる」

「ディオスつて『時空神ディオス』様!？」  
「あいつに『様』なんて付けなくて良いぞ？」  
「そういう訳にはいかないわよ……それよりも、ディーンって本当に人間なの？」  
「俺も気にしてるからあまり言わないでくれ……それとも俺が怖くなっただか？」  
「そんなことある訳ないじゃない!！」  
「そうか、良かった」

実は少し心配していたんだがな。

「次、そんなことを言ったら殴るわよ？」  
「ハハ、悪かったよ」  
「本当よ。私がディーンを怖がるはずないじゃない」  
「ありがとう、ロゼ」  
「ふふ、どういたしまして」

そんなことをしている内に『ウィプル村』が見えてきた。

「スレイプニル、またある程度近づいたら地上に降りてくれ」  
『承知した』

そうしてスレイプニルは再びホームへと帰り、俺たちは『ウィプル村』へと歩いていった。

俺たちはソファアラさんの工房へと行き

「こんにちは、ソファアラさん。ディーンです」

俺は扉をノックしながら言った。

「はい。あら、ディーンさん。と、ロゼさん？ 2人ともお久しぶりね」

「お久しぶりです、ソファアラさん」

「ご無沙汰しています、ソファアラ様」

俺たちはそれぞれに挨拶をする。

「それで、今日はどうしたの？」

「はい。ソファアラさんの出していた依頼を受けた」

俺が訪ねた理由を話していると

「ディーンさん!!」

「おっと。久しぶりだな、リリア」

リリアが飛びついてきた。

「本当ですよ。あれから全然来てくれないから……」

リリアが突然言葉を止め、俺の陰に隠れる。

「突然どうしたんだ、リリア？」

「あのお姉さんは誰？」

リリアがロゼを見ながら俺に訊いてくる。

「ああ、彼女はロゼだ。今、俺と一緒に旅をしている」

「そうなの、ロゼさん？」

「あ、はい」

俺の答えにソファアラさんがロゼに質問し、ロゼが肯定する。

「そうなんだ……」

リリアはそう呟き、俺の外套を強く握る。

「リリア……？」

「ふふ、リリアったら……それでディーンさん、ここに来た理由は？」

「そうでしたね。俺がソファアラさんの出していた依頼を受けたので、リリア達に会うついでに品物を持って来たんです」

「私が出した依頼……？」

まさか忘れているのか？

「『マンドラゴラ』の採取ですよ、ソファアラ様」

「ああ！！ あれを受けたの？」

「はい、偶々ソファアラさんの依頼を見つけたものですから。まあ、実際に採取したのはロゼですけどね」

俺はそう言いながら『マンドラゴラ』を取り出し、ソファアラさんに渡す。

「本当に『マンドラゴラ』ね。へえ、これをロゼさんが……」

「そうですよ」

「まあここで立ち話もなんだし、上がって行って？」

「それじゃあ、お邪魔します」

そう言っただけ俺たちは工房へと入る。  
その間、リリアは俺にくっついたままだ。  
そろそろロゼの視線が……

「リリア、そろそろ離してくれないか……？このままじゃ座れないんだが……」

「う〜」

「リリア、ディーンさんが困っているでしょう？」

「はい……」

やっとリリアが離してくれたので、俺たちは椅子に座った。

「まずはお礼を言わなきゃね。ありがとう、ディーンさん、ロゼさん」

「用事だったので、気にしないで下さい。報酬も貰ってますし」

「ディーンの言う通り気にしないで下さい、ソファア様」

「『様』は付けなくて良いわよ、ロゼさん。その様子だと、もうギルド職員じゃないんでしょう？」

「はい。それではソファアさんで」

「それで良いわよ。それじゃあ、色々と聞かせてもらおうかしら」

ソファアさんの目がキラキラしてる……

俺がここに来たばかりの時のようだ……

「え〜、じゃあここを出てからの話からで」

そうして俺と、途中からはロゼもこれまでのことを話し、ソファアさんに質問攻めにされた……

何を訊かれたかは、言いたくない……

「精霊王との契約……そんなことがあったのね……」

「腕は大丈夫なんですか、ディーンさん？」

話し終わると、ソファアラさんは驚いたように眩き、リリアは心配そうに訊いてくる。

「ほら、この通り。心配はいらないさ」

俺はリリアに袖を捲って右腕を見せる。

俺の腕が無傷なのを見るとリリアは安心したように微笑むが

「……その腕の紋様は何ですか、ディーンさん？」

「ん？ ああ、これはさっき言った精霊王との契約の証さ」

「へえ」

「それで、あなたたちはこれからどうするの？」

「ギルドマスターに依頼されたことがあるので、『グランドティア』を経由して『アーリグリフ』に行きます」

「そう……それじゃあ、またしばらく会えなくなるわね」

「ええ。もうちょっとゆっくりしてって下さいよ」

俺がこれからの予定を話すとリリアが不満そうな声を上げる。

「うん、そうしたいのは山々なんだが……」

色々と状況も切迫しているので、あまりゆっくりとはしてられない。

「まあまあ。リリアもこう言ってるし、夕食を食べていかない？  
そのくらいの時間はあるでしょう？」

「まあ、そのくらいなら。ロゼもそれで構わないか？」

「ええ、良いわよ」

「本当！？ やったあー！！」

「ふふ。それじゃありリア、お父さんに早く帰ってくるように言っ  
てきて？」

「わかった」

そう言つとリリアは工房を出ていった。

『マスター、以前はご馳走になりましたし、今回は私たちが食事を  
ご馳走してはどうですか？』

それもそうだな

俺はロゼに視線を向けると、ロゼも頷く。

「もし良ければ、今回は俺たちに食事をご馳走させてくれませんか  
？」

「それは構わないけど……じゃあ、キッチンを貸しましょうか？」

「それは大丈夫ですよ」

「そうなの……？ じゃあ、何処かに食べに行くの？」

「違いますよ。まあ、後のお楽しみということで。それよりも、い  
くつか売って欲しい薬草があるのですが、構いませんか？ 在庫が  
ある物だけで良いですから」

「それは構わないけど……何に使うのかしら？」

「それも、後のお楽しみということだ」

「わかったわ」

俺はソファラさんに案内され、薬草を置いている倉庫にやって来

た。

薬草は乾燥させて保存してあるようだ。

「じゃあ、コレとコレ。後、ソレもお願いします。全部でいくらですか？」

「こんなので良いの？ このくらいなら、ディーンさんは軽く集められるでしょう？」

「まあ、そうなのですが……今夜必要なので、採りに行く暇がなくて」

「そうなの？ ディーンさんにはお世話になってるし、お金は要らないわ」

「そういう訳にはいきませんよ。ちゃんと払います」

「じゃあ、10000ティルね」

ソファラさんはそう言うが、この量なら2000ティルくらいが相場のはずだ。

「それは安すぎます。2000で」

俺はそう言って、ソファラさんに2000ティルを渡す。

「もう。別に1000ティルで構わなかったのに……」

「お金に困っている訳ではありませんからね。このくらいは払いますよ」

「ディーンさんがそれで良いなら、別に構わないけど……」

「良いんですよ。それじゃあ、戻りましょうか。そろそろ、リリアとジェラルドさんが帰ってくる頃でしょう」

「そうね。戻りましょうか」

そう言って、俺とソファラさんは工房へと戻った。



「デーン君、久しぶりだね。元気そうで良かったよ」

俺たちが工房に戻ると、ちょうどリリアとジェラルドさんも帰ってきた。

「お久しぶりです。ジェラルドさんも、お元気そうで何よりです」

「お帰りなさい、あなた。今日はデーンさん達が夕食をご馳走してくれるそうよ？」

「それは楽しみだ。それで何処に食べに行くんだい？」

流石は夫婦と言ったところか、ジェラルドさんはソファアラさんと同じ質問をする。

「何処にも食べに行かないらしいけど、『後のお楽しみ』と言って教えてくれないの」

「へえ。それじゃあ、どうするんだい？」

「デーン、もう言っても良いんじゃない？」

「そうだな」

ロゼの言う通り、あまり勿体をつけても仕方ない。

「それじゃあ、我が家にご招待します。『オブン解錠』」

俺が魔術を使うと空間に裂け目が現れる。

「「「ッ!?!」「」」

ジェラルドさん達は一様に驚いている。

「さあ、どうぞ。この中に俺たちの家があります」  
「大丈夫ですよ、入っても害は有りませんから」

そう言っつて俺とロゼはジェラルドさん達を連れ、裂け目を潜った。そして裂け目を潜り抜けると

『主殿、我は腹が減ったのだが……』

この空間にはマナが無いので、腹を空かせたスレイプニルがそう言いながら近づいてきた。

「すまないな。すぐに準備するから、もう少し待っていてくれ」

「ごめんね、スレイプニル」

『承知した。ところで、彼らは主殿の客人か？』

「そうだ。俺がこちらに来たばかりの時に世話になった人達だ」

「デーン君、彼（？）は一体……？」

「紹介します、こいつは火の精霊王に仕えていた神獣『焰神馬』で、名をスレイプニルと言います。今は俺たちとともに旅をする仲間です」

『我はスレイプニル。宜しく頼む、主殿の恩人たち』

「は、はあ、こちらこそ宜しく？」

流石にジェラルドさんとソファアラさんは面食らっている。

一方、リリアは興味津々な様子でスレイプニルに手を伸ばす。

「わあ。暖かい」

リリアはスレイプニルを撫で、はしゃいでいる。  
スレイプニルも気持ち良さそうにしている。

「それじゃあ、家に行きましょう」

「後でご飯を持って行くわね、スレイプニル」

『宜しく頼む、ロゼ殿』

スレイプニルと別れ、俺たちは家へと向かう。

「これは……凄いやつだね」

「そんなことはありませんよ。ジェラルドさんの家と同じくらいですよ？」

そんなことを話しながら家へと入り、ロゼが夕食を作る。

ソファラさんも手伝うようだ。

俺はその間に工房で、ソファラさんから買った薬草と『桜花』で採取しておいた桜の花弁 当然、宙に舞っていたもの で石鹼を作る。

その様子をついてきたリリアとジェラルドさんが、興味津々な様子で見ている。

「それは何を作ってるんだい？」

「石鹼、というものですよ」

「何に使うの、ディーンさん？」

「後のお楽しみだ」

「それは楽しみにしておきましょう」

そんなことを話している内に出来上がったのでリビングへと戻り、ロゼとソファラさんが腕に寄りを掛けて作った夕食を食べる。

ちなみに、スレイプニルの夕食は山盛りのサラダだ。

夕食後リリアがスレイプニルに乗りたいたったので、スレイプニルに頼み、俺とリリアを乗せ空間の中だけだが、地上を駆けたり、空中を翔けたりして楽しんだ。

その後風呂に入ることを勧め、俺がジェラルドさんに、ロゼがソアラさんとリリアに入り方を説明して風呂に入った。

折角作ったので、石鹸で体や髪を洗うのも試してもらおう。

結果は、途中で泡が目に入ったリリアが泣くというトラブルはあったが、風呂は大変好評だった。

特に女性陣には、石鹸も好評でソアラさんにいくつかあげた。

それから皆でリビングで少し話をして、ジェラルドさん達は帰っていった。

「賑やかだったわね？」

「ああ、こつこつするのも悪くないよな」

俺とロゼは寝る前に、リビングで明日の予定の確認も含めて話をしていた。

「そうね。また時間があれば来ましょう？ リリアちゃんも妹みたいで可愛かったし」

ロゼとリリアは最初はぎこちなかったが、途中からは仲良くなっていた。

「そうだな。スレイプニルがいてくれるおかげで、移動に時間はかからないからな」

「それで、明日は『グラントディア』に行くんでしょう？」

「ああ、予想以上にゆっくりしてしまったからな。流石にもう行かないと」

「わかったわ」

「じゃあ明日に備えて、もう休むか」

「ええ、そうしましょう」

「ちなみに、朝は稽古があるからな？」

「うっ……わかってるわよ」

「なら、良いよ。それじゃあ、おやすみ」

「おやすみ、ディーン。明日こそ、まともに一撃を喰らわせてみせるわ」

「ハハ。まあ頑張れ」

俺はロゼに苦笑しつつ、ロゼは悔しそうに、それぞれの部屋へと入っていった……

第10話 『グランドティア』、そして『アーリグリフ』へ（前書き）

今回の話には残酷だと思われる表現が含まれております。  
苦手な方はご注意ください。

## 第10話 『グランドティア』、そして『アーリグリフ』へ

今日も道場で訓練をしてから疲労困憊のロゼを風呂場へと連れていき、俺は自分の訓練を済ませて、風呂から出てきたロゼと朝食を食べた。

そして準備を済ませ、ロゼと空間の外へと出る。空間の外はソファラさんの工房に繋がっていた。どうやらこの裂け目は入った時と同じ場所に開くようだ。

「それじゃあジェラルドさん達に挨拶をしてから、『グランドティア』に行くか」

「そうね。この時間なら流石に起きてるでしょうから」

ロゼが言うように、今は9時頃だ。流石にリリアも起きているだろう。

ジェラルドさんはすでに仕事に行っているかもしれないが……

「じゃあ、行こう」

「ええ」

そう言っただけで俺たちは工房を出て、屋敷の方へと歩いて行った。

「お世話になりました。ジェラルドさんにも宜しく言っておいて下さい」

「わかったわ。ディーンさんもロゼさんも、気をつけてね？」

「はい。ありがとうございます、ソファラさん」

「また来て下さいね、ディーンさん、ロゼさん」

「ええ、必ず来るわ。リリアちゃんも元気だね」

「そうだ、リリアにこれをやるよ」

そう言って、俺はインベントリからブローチを取り出してリリアに渡す。

「デインさん、これは？」

「それは迷宮で見つけたブローチ型の魔導具でな。少しだけだが、

【錬金】の成功率を上げてくれる」

「そんな物をリリアに……？ 良いの？」

ソファアラさんは少し申し訳なさそうだ。

「ええ、構いませんよ。俺にもロゼにも、必要のない物ですからね。貰って下さい」

「私は【錬金】は使えませんし、デインはもうマスターしていますから」

「ありがとう、デインさん……！」

「立派な薬師くすりしになるんだぞ？」

「はい……！」

「良い返事だ。それじゃあ、俺たちはもう行きます」

「お世話になりました」

「元気でね」

「絶対、また来てね……！」

俺たちはそう言って、村の出口へと向かう。

「おっとそうだ、まだ少し寄る所があった」

「何処に寄るの？」

「この村で鍛冶屋をやっている、クラッドっていうおっさんの所だよ。ラグの鞘や俺の鎧を作る時に、鍛冶場を貸してもらったんだ」

「それなのに、『おっさん』なんだ……」



「良いんだよ。あつちも俺のことを『小僧』って呼ぶしな」

そんなことを話しながらおっさんの鍛冶場へと歩いていった。

「クラッドさん、お久しぶりです」

「お？ こ、小僧！？ いつ、戻ってきたんだ！？」

おっさんはかなり驚いている。

「昨日ですよ」

「いつまでいるんだ？」

「もう出発するところなんです。それでクラッドさんに渡したい物があったんで、ちょっと寄ったんです」

「もう出るのか！？ それで、俺に渡したい物って何だ？」

「これですよ」

俺はインベントリからハンマーを取り出し、おっさんに渡す。

「これは鍛冶に使うハンマーか？」

「ええ。迷宮で手に入れたのであげますよ。俺はもう持ってますからね。そのハンマーを使うと、【鍛冶】の熟練度が上がりやすくなります」

「本当に貰っても良いのか？」

「構いませんよ。後、使わないのでこれもあげますよ」

そう言っただけ俺は使わない金属類を取り出し、おっさんに渡す。

「こんなに貰っても良いのか？」

「良いですよ。使いませんし。それじゃあ急いでるんで、もう行きます」

「お、おう。そうか。またこの村に来た時には、寄っていつてくれよ。」

「はい。それじゃあ、また」

「おう、元気だな。そっちの嬢ちゃんも。」

「嬢ちゃん!？」

「良いから行くぞ、ロゼ」

そう言つて、今度こそ村の出口へと歩いて行つた。  
そして村の外へ出ると

「デーンがおっさんって呼んでた気持ちがあつたわ……」

「そうだろ？　じゃあ、スレイプニルを呼ぶか。『<sup>オプン</sup>解錠』」

俺は空間を開き、スレイプニルを呼ぶ。

「それじゃあ、宜しく頼む」

『承知した』

『マスター、『グランドティア』はここから南下すれば行けるよ』  
「そうか、わかつた」

そう言つと俺たちはスレイプニルに騎乗し、『グランドティア』  
を屈指した。

ロゼたちと話しながらしばらく進んでいると

『主殿、前方を』

「どうした、スレイプニル？　あれは『ヴァルチャー』の群れか？」

まだかなり先だが、前方左方向から鷲型の魔獣『ヴァルチャー』が編隊を組んで飛んでいた。

「スレイプニル、このまま進むと接触しそうか？」

『恐らくは』

『マスター、どうやら『ヴァルチャー』もこちらに気づいたようです』

「チッ！！ 殺るしかないか」

「でも、どうするの？ ここ、空中よ？」

「俺が狙撃で数を減らすから、ロゼは俺が撃ち漏らした奴を魔術で攻撃してくれ」

「わかったわ」

『私も加勢しよう』

「頼む、スレイプニル。ラグ、【狙撃形態】だ」

『了解しました』

ラグが変化したのを確認し、俺は対物狙撃魔導銃を構える。

先頭の奴に狙いをつけ、すかさず放つ。

放たれた貫通弾ピアシングシェルは先頭の奴を貫き、さらに後方にいた3羽も貫く。待ち時間後デレイ、さらに1発を放ち3羽を撃ち貫く。

「残り8羽か……これ以上は無理だな。ロゼ、スレイプニル、後は魔術で殲滅するぞ」

俺はそう言いながら【通常状態】に戻したラグを鞘に納め、右手で魔導銃を抜く。

「わかったわ」

『承知した』

2人はそう応え、ロゼは『ダークニードル』を、スレイプニルは『フレイムランス』を次々と放つ。

俺は2人の魔術を躲して近づいてきた奴に、弾丸を撃ち込む。それから5分ほどして、『ヴァルチャー』の群れの殲滅が終了した。

そして再び『グランドティア』へ向け進んでいると

『それにしても『ヴァルチャー』ですか……』

ラグが何かを危惧するように呟いた。

「どうしたんだ、ラグ？」

『マスターも知っているように、『ヴァルチャー』の主な棲息地も『アーリグリフ』です』

「そうだな。飛んで来た方角も東からだったな」

『以前の『キングモス』も今回の『ヴァルチャー』も、『アーリグリフ』に入り込んだという『魔物』から逃げてきたのかも知れませ  
ん』

「どういうことなの、ラグ？」

『邪神龍の眷属である『魔物』は人や魔獣を関係なく襲う、命有るもの全ての敵です』

『それに、『魔物』は精霊も食べちゃうんだよ？』

「な！？ 本当なのか……？」

『本当だ、主殿。まあ実際は、精霊そのものを喰う訳ではないがな。『魔物』は存在するだけで、大量のmanaを喰らい尽くす。そうなっ  
てしまえば、精霊や我ら『神獣』も生きてはいけない』

「そうだったのか……」

『それに『魔物』の発する瘴気は、人の精神を容易く侵します。そ  
して精神を侵され正気を失った人間は、『魔物』と同じく無差別に  
人を襲うようになります』

「そんな……」

ロゼが恐れるように呟く。

『VLO』でも魔物の瘴気には『錯乱』などの精神異常をもたらしたが、この世界ではさらに厄介なものになっているようだ。

「心配するな、ロゼ。『アイギス』や『クイーン・オブ・ザ・ナイト』には、その類の精神異常を無効化する能力がある。俺たちが瘴気の影響を受けることはないはずだ。　　そうだな、アイギス？」

『うん、マスターの言う通りだよ』

「でも……」

「ロゼの言いたいことはわかってるよ。どれだけの魔物が入り込んでいるかわからないが、このままじゃ『アーリグリフ』はかなり危険だ。とにかく、一刻も早く『アーリグリフ』に向かおう」

「ええ、そうしましょう」

「それじゃあ、スレイプニル。急いでくれ」

『承知した。しっかり掴まっけていてくれ』

スレイプニルはそう言うのとさらに速度を上げ、『グラントディア』へと翔けていった。

「見えてきたな」

俺たちの前方に、分厚い城壁に囲まれた凄まじく巨大な街が見えてきた。

かなりの上空から見ているにも関わらず、城壁の反対側は霞んでいて見えない。

「大きい街だとは知っていたけど、こうして見ると改めて凄まじさがわかるわね……」

『それはそうでしょう。『グランドティア』は神龍『アリユージェ』様が創られた、1つの国であり1つの街ですからね。しかもアリユージェ様の加護を最も受けている場所なので、人も多く集まります』

ラグの言うように、『グランドティア』は1つの街がそのまま国になっている。

神龍の加護云々は知らなかったが……

「ロゼは『グランドティア』に来たことはあるのか？」

「ギルド総本部には何度か行ったことがあるわ。流石に街全体は把握していないけど……」

「それはそうだろうな。じゃあ、ギルド総本部までの案内を頼む」「わかったわ。任せておいて」

あの街で迷ったら、流石に洒落にならない。

「いつか時間のある時に、ゆっくりと観光したいな……」

「そうね。でもあの街を全部見ようとしたら、1ヶ月はかかるわよ……」

「そうだろうな」

そんなことを話しながらスレイプニルに地上に降りてもらい、『グランドティア』へと急いだ……

「流石に人が多いな」

俺たちは街中を、ギルド総本部へ向かい歩いていった。

この大陸の中心地で、冒険者の街と呼ばれるだけはあって多種多様な種族の冒険者たちがいる。

「お昼前だし、仕方ないわよ」

「そうだな。それで、道はこっちで良いのか？」

「ええ」

俺たちは、行き交う人々を躲しながら進んでいく。

そうして1時間ほど歩くと、ギルドの紋章を掲げた巨大な建物が  
見えてきた。

「あれだな」

「ええ、そうよ」

ギルド総本部の外観は『VLO』とそれほど変わらない。  
ただし、建物はかなり大きくなっているが……

「よし、入ろう」

そう言っただけに入ろうとすると

「ロゼさんではありませんか」

冒険者の格好をした、『エルフ』の男性が話しかけてきた。

「知り合いか、ロゼ？」

「ギース……様……彼はSランクの冒険者、ギース……様です……」

小声でそう言って、ロゼは何故か俺の後ろに隠れて外套を掴む。  
明らかに様子がおかしい。

ラグ、おまえでもアイギスでもいいから、ロゼにどうしたのか聞いてくれ

『すでにアイギスが聞いているようです』

何かわかったら、知らせてくれ

『了解しました』

俺がラグと話していると

「キミは誰だね？ 見ない顔だが。何故、ロゼさんと一緒にいるんだい？」

エルフの男が俺に話しかけてきた。

「あんたこそ、誰だ？ 他人に名前を尋ねる時は自分から名乗るものだと、教えてもらわなかったのか？」

相手が明らかに俺を小馬鹿にしたように言ってきたので、俺も挑発するように言っちゃった。

「ハッ。僕を知らないなんて、初心者か。良いだろう。教えてあげるよ。僕はSランク冒険者、名はギースと言う。覚えておきたまえ」「デインだ」

俺は【リーブラの魔眼】を起動しながら名乗った。

「は……？」

「何だね？」

「いや……何でもない」



あまりのステータスのあり得なさに、思わず声が出てしまった。

ラグ、あいつの装備は何か特別なものなのか？

『いえ、良い物ではありませんが、普通の装備品です。あれなら、ロゼさんの装備の方が遥かに上です』

そうだよな……

そんなことを話していると、またギースが話しかけてきた。

「それで、何故ロゼさんとキミが一緒にいるのかを聞かせてもらってないが？」

「一緒に旅をしてるんだよ」

「何だつて！？ それはいけない。そんな初心者と一緒にいたら怪我をしてしまう。旅をするなら僕と一緒にしましょう、ロゼさん」  
さつきから何なんだ、こいつは……？ ロゼに気があるのか……？

『どつやらそのようですね』

ラグがそう言い切る。

どついうことだ？

『こいつは前からことあるごとに、ロゼお姉ちゃんに言い寄ってたんだつて』

アイギスは吐き捨てるようにそう言った。

なるほどな。ロゼは他に何か言っていたか、アイギス？

『何度断つてもしつこく言い寄ってくるから、迷惑してるって。殺やっちゃってよ、マスター』

気持ちは良くわかるが、殺すのはマズいな

俺がラグたちと話している間、ギースはロゼに必死に何かを喚いでいる。

「僕はこう見えても、ソロで『神龍の迷宮』を攻略しているんです。必ず、ロゼさんを守りますよ」

はあ〜？

こいつは何を言ってるんだ……

おまえのレベルはたった493だろう？

しかも『転生』すらしていない。

そんなレベルで『神龍の迷宮』に入れば、5分であの世行きだ。というか、ロゼの方がレベル高いし……

「もう良い、黙れ。俺たちは急いでるんだ。行くぞ、ロゼ」

俺の言葉に頷いたロゼの手を引き、ギルドに入ろうとすると

「待ちたまえ、キミ。僕はまだロゼさんと話があるんだ」

ギースが俺の左肩を掴み、制止してくる。

「ロゼにはあるか？」

「いいえ、無いわ。」

「そういうことだ。後、嘘も程々にしておけよ？ じゃないと、いつか身を滅ぼすぞ？」

擦れ違いざまに、そう忠告してやる。

「な！？ ぼ、僕が嘘をついてるって言うのか！？」

「そうだろ？ おまえのレベルであんな迷宮に行けば、死ぬぞ？」  
「訂正しろ！！ おまえのような初心者に何がわかる！？ さもな  
いと……」

怒りで顔を真っ赤にしたギースが俺から距離を取り、腰に佩いた  
鞘から剣を引き抜く。

その様子を見た通行人たちから悲鳴が上がる。  
冒険者の格好をした者達は、またか といった感じだったが……

「おいおい、こんな所で剣を抜くなよ」

俺はゆったりとした足取りでギースに近づく。

「おい！！ 近づくな！！ 本当に斬るぞ！！」

ギースは喚くが、構えもなっていないし、隙だらけだ。  
剣を扱い慣れてないのが良くわかる。

こいつ、良くあんなレベルになれたな……

493といえば、この世界では結構なレベルだろう。

『本当に、どうやってでしょうね……』

ラグも呆れている。

剣を気にした様子もなく近づく俺に切羽詰まったのか、ギースは  
剣を振り上げ

「うおおおー！！」

袈裟斬りに振り下ろすが

「遅すぎる……」

俺は右手に気を纏い、剣を掴む。

「な!？」

「こんな腕じゃ、剣なんて持たない方が良くぞ?」

そう言っつて俺は剣を握り砕く。

「な………に………?」

ギースは呆気に取られている。

流石に冒険者を含む通行人たちも驚いている。

まあ、『オリハルコン』製の剣だったしな。

「じゃあ行くこうか、ロゼ」

「少しやりすぎじゃない……?」

「怪我もしてないし、あれくらいやっておけば、もう声はかけてこないだろう?」

「ありがとう、ディーン」

「気にするな」

そんなことを話しながらギルドへと入っていった。

流石にギルドの目の前で騒いでいたのでかなり注目された。

「流石にギルドの前はマズかったか……?」

「それだけじゃないと思うけど……」

ロゼがため息を吐きつつ、そう言う。

「どういうことだ？」

「あの剣、『オリハルコン』製だったでしょう？ そんなものを握り砕ける人なんて、そうはいないわ。だから注目されているのよ」

「ああそれで、やりすぎだ　と言ったのか」

「そうよ」

「まあやってしまったことは仕方ない。さっさとグランドマスターに会って、『アーリグリフ』に行けば良いさ」

「そうだけど……」

そんなことを話しながら受付へと行く。

「グランドマスターに面会したいのですが」

俺は受付のお姉さんに、取り次いでくれるよう言った。

「面会のお約束は御有りですか？　あ、ロゼさん？」

俺を訝しげに見ながら言ったお姉さんがロゼに気づいた。

「お久しぶりね。それで、取り次いでもらえるのかしら？」

「はい。ということは、こちらの方は……」

「ええ、ディーンよ。話は聞いていますでしょう？」

「は、はい！！　申し訳ありませんでした、ディーン様！！」

お姉さんの態度が一変した。

やはり、こういうのは恥ずかしい。

「気にしていませんよ」

「そ、それでは一応規則ですので、確認のためカードをお願いします」

「わかりました」

俺はインベントリからギルドカードを取り出し、お姉さんに渡す。

「確認致しました。それでは、ご案内します」

「お願いします。行こう、ロゼ」

「ええ」

お姉さんからカードを受け取り、後をついて行く。

そして階段を上がり、3階のグランドマスターの部屋へと行く。

「グランドマスター、デイン様をお連れしました」

お姉さんがノックをしながら声をかける。

「入りなさい」

中から、ずいぶんと若い声が返ってきた。

「失礼します」

俺たちはそう言い、お姉さんに続いて部屋の中に入った。

部屋の中には若い男と護衛だろう、それなりにランクの高そうな冒険者が2人いた。

あの目……魔族か？

『そのようですね』

グランドマスターと思われる若い男は、外見は少し俺よりも背が低い 170cmくらいだ が、それほどの違いはない。

しかしその目は魔族だけが持つ特徴で、瞳は深紅で瞳孔が縦に裂けている。

そんな外見だが、魔族とは悪魔の一族という意味ではなく、魔術の得意な種族という意味だ。

『VLO』では色々と紛らわしいので、『ソーサラー』と呼ばれていた。

「良く来てくれたね、ディーン君。私はギルドのグランドマスターを任されている、『ゼノン』と言います」

流石はグランドマスターと言うべきか、知的でやり手といった感じだ。

「いえ。こちらこそ挨拶が遅くなってしまい、すみません」

俺はそう言いつつ、【リーブラの魔眼】を起動しステータスを確認める。

流石だな。『転生』していてなお、レベル300か

『この世界ではトップクラスのレベルでしょう』

転生しているのを示すように、種族は『ハイ・ソーサラー』になっていた。

「貴方にはやるべきことがあるのです。そんなこと、気にしていませんよ」

「そう言ってもらえると助かります。それで、俺たちを呼んだ理由は何ですか？」

「アドルさんから、貴方が『アーリグリフ』の調査に向かうと聞き  
ましたので、少しお話をしたくて」

そんな理由で呼んだのか……？

「それだけ、ですか？」

「いえ、違いますよ？」

そう言った瞬間、ゼノンから膨大な魔力が溢れ出す。

「う……」

「キャ……」

「あ……」

ロゼに、ゼノンの護衛をしていた冒険者2人、そして扉のところに控えていた職員のお姉さんが魔力に当てられ短く悲鳴を上げる。  
当然、俺には何の影響も及ぼさない。

試されているんだろうな……

『そつでしようね』

俺はロゼと職員のお姉さんを庇うように移動しつつ、ラグと話した。

「……ディーン……ありがとう……」

まだ少しキツそうだが、俺が魔力を遮って負担が減ったロゼが話しかけてくる。

「大丈夫か？」



「ええ、何とか……」

レベルが上がったのでロゼは平気だが、お姉さんは今にも気絶しそうだ。

「俺を試すのは構いませんが」

俺はさらに一步前へ出る。

「俺の仲間に手を出すなら、容赦はしませんよ？」

俺はゼノンを睨み、爆発的に気を放出する。

当然、後ろの2人に影響がないよう前方に向けてだけだ。

「ぐ……」

放出した気があっさりと魔力を掻き消し、ゼノンの背後にあった窓のガラスを粉碎する。

護衛の2人は一瞬で泡を吹いて気絶したが、流石にゼノンは耐えている。

俺が気を抑えると、ゼノンは机に手を突く。

ロゼは、床に座り込んでしまったお姉さんを介抱しているようだ。俺はその様子を見つつ

「一体、どういふつもりです？」

「先程の御無礼、平にご容赦下さい」

ゼノンは俺に向かって深く頭を下げた。

「頭を上げて下さい。俺を試すのは構いませんが、俺の仲間や女性

を巻き込んだのは気に入りません。2人にはキッチンと謝って下さい。

それで、こんなことをした理由は何です？」

「ロゼさん、アニーさん、本当にすみませんでした」

ゼノンが2人に頭を下げる。

「デイーンが気にしないと云うなら良いわ……」

「ありがとうございます。それではお話しします。ですが、その前に。誰か!？」

ゼノンがそう言うとギルド職員がやってきた。

「こ、これは一体……」

「気絶している2人と、そちらの職員を医務室へ。後、窓ガラスの修理の手配を」

「わ、わかりました。それで、一体何が……?」

「詮索は無用です。早く行きなさい」

「わかりました。失礼します」

やってきた職員の男性は、さらに別の職員の男性を1人呼んできて、2人の冒険者を引き摺っていった。

女性の職員はロゼに礼を言い、自分で歩いていった。

「冒険者の2人は引き摺られていましたが……」

「あのくらいでどうこうなるようなら、冒険者としてはやっていけませんよ」

「それはそうですが……後、窓ガラスは弁償しましょうか?」

「それも構いませんよ。先に仕掛けたのはこちらです。それにデイーン君には、ずいぶんとお世話になっているようですね」

「俺が何かしましたか?」

ギルドのために、特に何かをした記憶はないが。

「アドルさんからも聞いているでしょう？ デイーン君が換金した『精霊石』などの素材は、ギルドが商店などに卸しているのですよ。そのお金でギルドはずいぶん潤いました」

「ああ、そんなことを聞いた気がします」

「それで私があんなことをした理由ですが、私が魔族だということにはお気づきですよね？」

「ええ、気づいてますよ」

「『アーリグリフ』は私の故郷です。ですがアドルさんの報告の通りだと、今『アーリグリフ』には『魔物』が入り込んでいます」

「俺もその可能性は高いと思います」

「はい。私もそう思います。このままだと『アーリグリフ』は、遠からず滅びてしまいます。下位の個体ならまだ何とかできますが、もし上位の個体なら私を含め、この世界の冒険者だけでは倒すことは不可能でしょう」

「確かにそうかもしれませんが」

ゼノンの言うように上位個体なら不可能に近いだろう。

俺ですら、魔物のことを全て把握している訳ではないのだから。

「なので、デイーン君が私以上の力を持っていることを確かめたかったのです」

「そうでしたか」

「勝手だわ。いくらグラントマスターだからといって」

「良いんだ、ロゼ。故郷を想う気持ちは、俺にもわかるから」

「デイーン……」

「デイーン君……そうでしたね、貴方は……」

2人が俺を気遣うように言う。

「それじゃあ、俺たちはもう行きます。一刻も早く、『アーリグリフ』に行かなければ」

「わかりました。時間を取らせてしまってますみませんでした。調査に向かっている冒険者たちは、貴方のことを知っています。なので、協力もスムーズにいくでしょう」

「冒険者たちにも俺のことを話しているのですか？」

あまり知られたくないんだがな……

「心配しなくとも、知っているのはランクA以上の冒険者の中でも信用のおける者たちだけです」

ん？

Aランク以上？

「ついさっきSランクのギースという冒険者に絡まれたのですが、あいつは俺のことを知らないようでしたよ？」

俺が名乗った時も反応はなかったしな。

「ああ、彼ですか……彼には色々ありましてね……あなたのことを話していません。詳しくは、そちらのロゼさんにお聞き下さい」

ゼノンはその言うと、何故かロゼにすまなそうな視線を向ける。

「……？ わかりました。それでは、今度こそ『アーリグリフ』に行きます」

「宜しく願います」

「任せて下さい。それでは失礼します」  
「失礼します」

そう言つて、俺とロゼは部屋から出た。  
俺たちはギルドから出ていきながら

「ロゼ、グランドマスターが言っていたのはどうということだ？」  
「ギースはギルド総本部の重役の子息なのよ。それで父親の財力で  
良い装備を揃えて、あそこまでのレベルを手に入れたのよ」

「何だそれは……」

『まだそんな輩が残っていたのですね。その手の輩は、リシエル様  
が亡くなられた時に一掃されたと思つていましたが……』

『そうだね。リシエル姉さまを殺した奴らは、権力の座から排除さ  
れたのに……』

リシエルを殺した奴らというのは、リシエルを死に追いやった奴  
らのことか……

「そういう奴らは何処にでもいるからな」

「そうね……」

『まあ、もう関わることもないでしょう』

『今度会ったら、殺<sup>や</sup>っちゃえば良いんだよ』

「殺しはしないけど、今度会ったらぶつ飛ばしてやるわ」

「まあ程々にな」

そんなことなどを話しながら『アーリグリフ』へと繋がる門の前  
にやってくる。

グランドマスターが手配したのか、門のところには魔物を警戒す  
る冒険者が何人かいる。

「そのの者、止まれ。今、この門はグランドマスターによって通行が制限されている。よって、通行することはできない」

「俺たちは『桜花』のギルドマスターより調査を依頼された、ディーンと言います」

「ッ!? 貴方が……これは失礼しました。どうぞお通り下さい」

どうやら、この人達は俺のことを聞いているようだ。

「ありがとうございます」

「それではお気をつけて」

俺たちは警備の冒険者たちに礼を言い、門を通り抜ける。

「ロゼ、この先が『アーリグリフ』だ。何が起るかは、全くわからない。油断はするなよ?」

「ええ、わかったわ。早く行って、調査を行っている冒険者たちと合流しましょう」

「ああ、そうだな」

俺は空間を開き、スレイプニルを呼ぶ。

「取り敢えず、首都の『ダルグスト』へ行こう。スレイプニル、頼んだぞ」

『承知した』

『マスター、『ダルグスト』はここから南東の方だよ』

「わかった。行こう、ロゼ」

「ええ、行きましょう」

そう言って、俺たちを乗せたスレイプニルは『ダルグスト』を指し翔けていった。

「やっぱり『風の精霊王』がいるからか、風が強いわね。それに地形も、『桜花』とは全然違う」

スレイプニルに乗り、しばらく進んだ後にロゼがそう言った。

「ロゼは、『アーリグリフ』には来たことないのか？」

「ないわね。私は冒険者の時も、ほとんど『桜花』や故郷の『ティルナノーグ』で活動してたしね」

「そうだったのか。じゃあ、『ティルナノーグ』に行った時には案内を頼むよ」

「任せて。それで、『アーリグリフ』のことを教えてくれない？」

「じゃあ、ラグ、アイギス。俺にも説明してくれ。俺の知らないこともあるかもしれないからな」

念のため俺も聞いておきたい。

「わかりました。まずロゼさんが言ったように、この国は『風の精霊王』がおられるので大抵の場所は常に強風が吹いています」

「それに風属性魔術を使う魔獣も多いよね。地形の大部分は渓谷だよ」

「へえ、そうなんだ」

ロゼは興味深そうに聞いている。

「そこら辺は、俺の知っているのと変わりないな。それじゃあ、砂漠もあるのか？」

「ありますよ。『桜花』に近い北部には砂漠が広がっています。砂

漠には迷宮もあるので、行くことになると思いますが」

「砂漠って話には聞いたことがあるけど、どんな場所なの？」

『砂ばっかりで、滅茶苦茶暑い場所だよ？』

「まあ、あまり行きたい場所ではないな」

「そ、そうなんだ……」

そんなことを話しながらさらにしばらく進んでいると

「ん？ 何だあれは？ 誰かが戦闘しているのか？」

俺は暇だったので【鷹の目<sup>ホークアイ</sup>】を起動して周りの地形を確認していたら、誰かが戦闘しているのを見つけた。

「どうしたの、デイン？ 何か見つけたの？」

俺の咳きが聞こえたのか、アイギスと話していたロゼが尋ねてくる。

「ああ、誰かが戦闘をしているようだ。それも結構な人数だな」

まだ遠くて良く見えないが、規模の大きな戦闘のようだ。

「誰が何と闘っているの？」

「わからない。スレイプニル、急いでくれ」

『承知した』

『マスター、何やら嫌な感じがします。警戒を怠らないで下さい』

『ラグの言う通り、何か気持ち悪い……ロゼお姉ちゃんも気をつけて』

ラグたちの警告に、俺とロゼは頷く。



スレイプニルが速度を上げて戦闘をしている場所に近づくと、徐々に戦闘の様子がわかってくる。

「闘っているのは 冒険者だな。相手は 巨人族か……？ だが、あの様子は……」

冒険者たちが闘っているのは、『魔族』の1種族である『巨人族』の男だ。

だが、巨人族のあの様子は何だ……？

まるで、狂ったように手に持った巨木 棍棒なのだろうか？ を振り回して、冒険者たちを殴り飛ばしている。

それに何か【闘気術】とは違う、禍々しいオーラを纏っている。

『マスター、彼は瘴気に侵されています』

「何だと！？ 俺の力でどうにかできるのか？」

『あそこまで浸食されちゃうと、もう無理だよ……』

「なら……」

『はい……殺すしかありません……』

「ッ！？」

ロゼが息を呑む。

何てことだ……

『主殿、どうする？ もう彼らの近くだぞ？』

「……取り敢えず、あの後方の集団の傍へ降りてくれ」

『承知した』

スレイプニルが、支援をしているのだろう後方の冒険者たちの傍へと降りる。

「な、何だ!？」

近くにいた冒険者たちがスレイプニルを見て慌てる。

「ロゼ!？　ロゼなの!？」

そんな中、1人の女性の冒険者がロゼの名を呼びながら走っていく。

「レイシア!？　何で、貴女がここに？」

「ギルドの依頼で調査に来ていたの。ロゼがいるということは、彼が」

「ええ、彼がデインよ」

「そうなの……初めまして、レイシアと言います」

「デインです。取り敢えず、挨拶は後で。まずは状況を説明して下さい」

こうしている間も、前線の冒険者たちは吹き飛ばされていく。回復魔術である程度は戦線を保っているが、長くはもたない。

「わかりました。私たちが調査をしている時に巨人族が暴れているという情報が入り、何か関係があるかもしれないと私たちが派遣されました。ですが、見てのよう巨人族の様子がおかしく、苦戦しています。何故か巨人族の近くで闘っている者も様子がおかしくなり、私たちが襲ってくるのです」

『マスター、それは瘴気の影響です。巨人族が纏った瘴気に、周りの者達も侵され始めています』

わかった

「状況はわかりました。それは瘴気の影響だと思います。危険なので、今すぐ皆を下がらせて下さい」

ラグ、巨人族以外はまだ何とかなるか？

『今なら、まだ間に合います』

レイシアさんとラグ、【思考分割】を使って2人と同時に会話していく。

「ですが、今の状況で下がらせるのは危険です」

「俺が広範囲支援魔術で全員のHPをある程度ですが回復させ、ステータスを上昇させます。その後俺が巨人族の気を引くので、その際に全員を退避させて下さい」

「そんなことができるのですか!？」

「今は問答している時間がありません。俺を信じて下さい」

「デインなら大丈夫よ。信じて」

「わかりました。お任せします」

ロゼの後押しもあって、信じてくれたようだ。

『急ぎましょう、マスター。もう前線がもちません』

わかった

今ならあの魔術が最大効果を発揮するはずだ。

「いきます!! 『ライジング・サン』!!」

俺は右手を上に掲げ、魔術を詠唱した。

すると、まさにもう1つの太陽のように輝く球体が俺の掌の上に現われて空へと上昇する。

上昇した球体は空に輝く本物の太陽と重なり、さらに輝きを増す。その輝きを浴びた冒険者たちの傷が癒え、彼らに纏わりついていた瘴気が掻き消される。

俺が唱えたのは太陽属性最上級支援魔術『ライジング・サン』だ。この魔術は効果範囲にいる全ての者のHPを最大値の1/4回復させ、さらに一時的に全ステータスを上昇させる。しかも状態異常すら全て回復させる。凄まじい効果を持つ魔術だが、太陽が出ていなければ使えない。

「今です!! 退避させて下さい!!」

俺は叫ぶが、やはり最前線にいた者は逃げ遅れ、吹き飛ばされていく。

俺は咄嗟に回復魔術を使おうとするが

『マスター、もう手遅れです……』

ラグが言うようにもう手遅れだろう……  
吹き飛ばされた冒険者は頭を潰されている……

「クソツ!! 早く下がるんだ!!」

俺は叫び、【縮地无疆】を起動し巨人族に向かい跳ぶ。

俺が蹴った地面が罅割れる。

一瞬で巨人族の元に移動し、今まさに振り下ろされた棍棒を蹴り  
砕く。

「今の内に早く下がるんだ!!」

俺は前線を支え続けたのだろう、重装備の『鬼族』の男に叫ぶ。

「あんたは、一体……?」

「話は後だ!! 今は下がれ!!」

「駄目だ！！ まだ仲間がいる。俺がこいつを引きつけなければ、仲間が死ぬ！！」

「こいつは俺に任せろ！！ あんただって傷だらけだ！！ これ以上はあんたも危ない！！」

俺はそう叫びながら巨人族の胸の高さまで跳び、両方の掌を叩き込む。

【格闘術】のアーツスキル『双掌打・烈破』を喰らい吹っ飛ばす巨人族。

「今だ！！ 下がるんだ！！」

「すまない！！」

巨人族は大したダメージも無く起き上がる。

「ラグ、殺<sup>ち</sup>るしかないのか……？」

「はい」

「そうか……」

覚悟を決めるしかないか……

俺は剣を鞘から抜く。

武器が無くなった巨人族は殺した冒険者の足を持ち、振り回す。

「何てことをしやがる！！」

俺は躲すが血が辺りに飛び散り、俺も血を浴びる。

勢い良く振り回された冒険者の足が引き千切れ、飛んでいく。

「うっ……」

思わず吐きそうになる。

巨人族はさらに別の冒険者の死体を掴み、振り回す。

『マスター、言いづらいですが……これ以上被害が増える前に殺しましょう』

「それしかない……か」

俺は剣を構え、巨人族の首元へと跳び

「すまない……」

巨人族の首を刎ねる。

大量の血が噴き出し、俺に降りかかる。

「うっ！ ……ゲホッ……ゲホッ……」

堪らず俺は吐いてしまった……

辺り一面血だらけで、まさに血の海だ……

首を刎ねた巨人族が倒れ、地響きが起きる。

「……俺は……人を殺したのか……」

魔獣を殺すことには慣れたが、人は……

『マスター……』

『仕方なかったよ、マスター……』

ラグとアイギスが声をかけてくる。

「そうなのか……？ 本当に……何もできなかったのか……？」

俺がそんなことを呟くと

「デイン！ 大丈夫！？」

ロゼがこちらに駆けしてきた。

「ああ、ロゼ……大丈夫だ……」

俺はそう言ったが

「そんなはずないじゃない。顔が真っ青よ？ 本当に大丈夫？」

「やっぱり、あまり大丈夫じゃないな……」

「何処か怪我したの？」

「いや、怪我はしていない……ただ、人を殺したのは……初めて……  
……だったんだ……」

「そうなの……？ でも、あの状況じゃ仕方なかったわ……」

「そうだな……ありがとう、ロゼ」

「デイン……」

俺はそう言って微笑んだつもりだったが、ロゼの表情は曇ったままだった……

「それじゃあ、冒険者たちの所に戻るう。話も聞かないといけなしな」

「そうだけど……無理はしないでね？」

「大丈夫だよ。心配をかけて、すまない」

「本当に無理だけはしないでね。それと、  
『ビュアリフイケーション浄化』を使った方が良  
いわ」

「それもそうだな」

今の俺は、冒険者たちや巨人族の血で全身血塗れだ。

「『ユアリフイケイション  
浄化』」

足元から白い炎が噴き上がり、俺の全身を包む。

そして、炎が消えると体や外套に付いた血は綺麗に消えていた。

「じゃあ、行こう」

俺は口ゼを促し、生き残った冒険者たちのところへと歩いていった。

冒険者たちの所に戻ると、怪我をした冒険者たちを魔術で治療していた。

すると、レイシアさんと最前線にいた『鬼族』の男性がやって来た。

「すまない。おかげで、俺も仲間も死なずに済んだ」

『鬼族』の男性が俺に礼を言った。

「いえ、構いませんよ。それに、助けられなかった人達もいました……」

「そうだな……死者は6人、前線にいた他の奴らも怪我をしていない奴はいない。重傷者もいる。ここにいる回復魔術の使い手でも、治せるかは微妙だ……」

俺なら治すこともできるだろう。

「重傷者の所に連れて行って下さい。俺が治療します」



「回復魔術まで使えるのか!？」

「ええ、お願いします」

「わかった。こっちだ」

俺は『鬼族』の男性に連れられ、近くに停めてあった馬車へと歩いていく。

「そういえば、まだ名前を伺っていませんでしたね」

「そういや、そうだな。俺は『オルグ』、Sランクで一応この調査隊の隊長をやっている」

「隊長でしたか。俺はディーンです」

「おう。ギルドマスターから聞いてるぜ。『来訪者』なんだってな。半信半疑だったが、あの实力を見せられたら納得するしかねえな」

そんなことを話している内に馬車に到着した。

「この中に3人、重傷の奴らがいる。治療してやってくれ」  
「わかりました」

俺がそう言うと、オルグが馬車の後部にある扉を開く。  
馬車の中は血臭で満たされていた。

「彼にこいつらの治療をさせてやってくれ」

「宜しいのですか?」

「ああ、彼がディーンだ。実力はギルドマスターのお墨付きだし、俺もこの目で確認した」

「わかりました」

「それじゃあ、ディーン。頼む」

「はい。任せて下さい」

俺はそう言つて、3人の状態を手早く確認する。  
全員足や腕などを失っている、部位欠損状態だ。

「じゃあ、始めます。 『パーフェクト・シャインヒーリング』」

俺が最も重傷の人に回復魔術を使うとあつという間に傷が塞がり、失っていた右足も再生される。

その様子を確認し、他の2人にも『パーフェクト・シャインヒーリング』をかける。

その2人も全快したのを確認し

「終わりました。これでもう大丈夫でしょう」

俺がそう言つと、オルグを始め、治療をしていた冒険者も治療された3人も呆気にとられている。

「何てこつた……」

「最上級魔術なのか……」

「俺、治つたのか……」

「そ、そうみたいだな……」

「助かつた……？」

俺以外の5人が信じられないように呟く。

「まあ体力は戻っていないので、ゆっくり休んで下さい。じゃあオルグさん、戻りましょう」

「そうだな」

そう言つて俺とオルグさんは、ロゼやレイシアさんが待っている場所へと戻つた。

スレイプニルも一緒にいるようだ。  
取り敢えず、4人で今後のことを話し合う。

「怪我をした冒険者は『ダルグスト』へ送るとして、あの巨人族の死体はどうする？」

オルグさんがそう言うので

ラグ、どうすれば良いんだ？

普通の死体なら、土に埋めたりすれば良いのかもしれないが、あの巨人族の死体は未だに瘴気を纏っている。

『焼いてしまうのが現実ですが、普通の『炎』では駄目です。聖属性魔術の『セイクリッド・ブレイズ』を使うのが良いでしょう』  
そうか、わかった

ラグの意見をオルグさん達に伝える。

「俺は焼いてしまうしかないと思います。どう思いますか？」

「それしかないのか……」

「まだ瘴気を放ってるし、それしかないのかも……」

「仕方ありませんね……」

3人も気乗りはしないようだが同意してくれた。

「彼に家族は……？」

「わからん。少なくとも俺は知らない」

「ギルドカードか遺品をギルドに持って行けば、何かわかるかも……」

……」

「そうですね。『ダルグスト』のギルドなら、何かわかるかもしれません」

「わかりました。俺が探してきます。皆は近づかないで下さい。瘴気に侵されます」

自分の殺した相手を探るのは、気が進まないがな……

「私も行くわ。私なら大丈夫なんでしょう？」

「ロゼ……わかった、行こう」

ロゼが俺を心配してか、一緒についてくる。

吐き気に耐えながら、しばらく探したがギルドカードは無かった。仕方がないので、巨人族が装備していた金属鎧の籠手を持って行くことにした。

巨人族用の金属鎧は、かなり珍しいので個人の特定に使えるだろう。

「金属鎧を装備しているということは、この巨人族はかなり上位の冒険者が戦士だったのだろう……」

俺は籠手を外しながら呟いた。

「どういうことなの？」

「ん？ ああ、ロゼは知らないかもしれないが、巨人族は見ての通りこのでかさだ」

「そうね、5mはあるものね」

「だから普通、防具は何の変哲もない服や、良くて木の鎧だ。だがこの巨人族は、金属鎧を装備している。それも『オリハルコン』製だ。こんな物を用意できるということは、この巨人族はかなりの腕前だ」

5 m 近くの巨体をもつ巨人族は、その装備も巨大だ。そんな巨大な金属鎧を作るには鍛冶師の腕も必要だが、何より膨大な量の材料が必要だ。

それほどの量の『オリハルコン』を集められるということは、この巨人族はかなりの力量だ。

「そうなのね……こんなことにならなければ、力強い仲間になってくれたのかもね……」

「そうかもしれないな……」

俺はそんなことを口ゼと話しながら籠手を外した。

「じゃあ火葬にするから、離れよう……」

「わかったわ……」

俺たちが巨人族から離れると、オルグさんたちもやって来た。

「ギルドカードは無かったの、この籠手を取ってきました」

「そうか。恐らく、それでもいけるだろう。『ダルグスト』に送る冒険者に持たせよう」

俺は籠手をオルグさんに渡す。

「それじゃあ、始めます」

そう言って、俺は巨人族に右手を向ける。

「『セイクリッド・ブレイズ』」

聖属性の唯一の攻撃魔術、最上級滅殺魔術『セイクリッド・ブレイズ』を放つ。

巨人族の遺体が聖なる白い炎に包まれ、燃える。

炎は巨人族が放っていた瘴気をも、燃やしていく。

「せめて、安らかに眠ってくれ……」

俺がそう呟くと左手を誰かに握られる。

「デーン……」

「ロゼ……」

左手を握ったのは、どうやらロゼだったようだ。

『大丈夫ですよ、マスター。瘴気に蝕まれていた彼の魂は、マスターの魔術で浄化されました』

『そうだよ。あの人の魂はリン様力で、いつか新しい生を授かるんだよ、マスター』

「なら彼の生まれ変わりと、いつか出会うこともあるかもな」

「ええ、そうね」

その後亡くなった他の6人の冒険者たちのギルドカードを手分けして探し、同じ様に火葬に付した。

「それで、これからどうします？」

俺は今後のことを話し合うために、オルグさんに訊いた。

「そうだな……その前に、怪我した奴らを『ダルグスト』に送り返す手筈を整えてくる。ちょっと待っていてくれ」

「え？ オルグさんは戻らないんですか？」  
「ああ、これからのことを話すんだろ？ 俺とこのレイシアは残るよ」

俺が確認を取るようにレイシアさんに目を向けると、レイシアさんは頷いた。

「ですが、話なら『ダルグスト』に戻ってからでも……」

「そうだが、あいつらの疲労が激しくてな。早く戻してやりたい。

それには、馬車に乗る人数が少ない方が良いからな」

「わかりました」

「じゃあ、待つてくれ」

オルグさんはそう言つと、冒険者たちの方へ小走りで向かっていった。

「あの人はずいぶんと元気だな……ずっと最前線で闘っていたのに」  
「え？ 知らないんですか？」

レイシアさんが信じられないといった感じで見てくる。

「えくと、何を？」

「ああ、デーンは知らないわよね。彼はね、Sランクの冒険者なのよ」

「それは本人から聞いたよ。この調査隊の隊長なんだろ？」

「はい、そうです。それに一応、私が副隊長をさせてもらっています」  
「え？」

思わず声が出て、マジマジとレイシアさんを見てしまった。

レイシアさんは『妖精族』の『ウンディーネ』で、外見は人族と

ほぼ同じだが種族の特徴として、蒼海のような蒼い瞳と髪をしている。

それに、これはレイシアさんの特徴だろうが、腰まで届く軽く波打つ長髪で、雰囲気はおっとりとした感じだ。

後、何よりも目を引くのはその胸だ……

かなり大きい……

「ディーン、私の友達のどこをジロジロ見てるの？」

ロゼがいつの間にか俺に寄り添うように立っている。

そしてその右手にはナイフが握られ、俺の脇腹に……

「あ、あのロゼさん……？ ナイフが脇腹に刺さりそうなんですが

……」

「貴方の答え次第では、本当に刺さるかもね？」

「い、いや、待ってくれ。俺はただ、彼女が副隊長というのは似合わないな と……」

「本当にそれだけ？ それにしては視線の先が気になったけど……まあ、良いわ。レイシアはこう見えても、Sランクでも上位の冒険者よ。それにオルグ様は、現在の最高位の冒険者よ」

ロゼはそう言うとナイフを引いてくれた。

「そうだったのか。それなら、あの体力もさっきの闘いぶりも納得がいくな」

俺は安堵のため息を吐きながらそう言う。

「まあディーンがSSダブルエスになったから、最高位じゃなくなったけどね」

「俺の場合は特殊だから、いいんだよ」



「何か、ロゼ、変わったわね……」

「え？ そう？」

「そうね。自分では気づかないのかもね？」

そんなことを話しているとオルグさんが戻ってきた。

「ん？ 何を話してんだ？」

オルグさんが、俺たちが何の話していたのか聞いてくる。

「何でもないですよ。ちょっとした世間話です」

「そうか……？ よし、じゃあ今後のことを話すか」

俺がそう答えると、オルグさんは不思議そうにしつつも話を始めようとするが

「ここで、ですか……？」

「戻りながら話しませんか？」

俺は少し呆れ、レイシアさんが提案する。

「デイン、もう陽も沈むし、ホームで話をしない？」

「それもそうだな」

ロゼの提案を俺は受け入れる。

「オルグさん、レイシアさん。俺が話をする場所を提供します」

「話をする場所だと？」

「それは何処ですか？」

「まあ口では説明しづらいので、実際に見せましょう。」

『オーブン  
解錠』

「俺はオルグさん達に提案すると、『解錠』<sup>オープン</sup>を唱え、空間を開く。

「お？」

「これは『創造』<sup>クリエイティブ</sup>で創られた空間……？」

流石は上位のSランク冒険者、2人ともこの魔術を知っているようだ。

「それにしてもでけえな。俺は魔術が使えるからわからんが、こんなでかい空間を創れるのか？」

魔術は自己強化系以外使えない『鬼族』であるオルグさんは、レイシアさんに訊く。

「いえ、こんな巨大な空間が創れるなんて、聞いたこともありません……」

レイシアさんも流石に驚いている。

「まあ取り敢えず、中に入りましょう。先に言っておきますが、中に入っても体に害はありませんから」

「まあ、おまえが俺たちを騙す必要もないしな。わかった、入ろう」「そうですね」

俺がそう言うと2人が頷いたので、彼らを促し中に入る。

「何て広さ……それにあれは 家？」

「そうよ。ディーンが造ったの。私たちの拠点ね。色々な設備があ

るわよ？ 後で案内してあげる」

ロゼとレイシアさんが話しているのを聞きつつ

「スレイプニル、ゆっくりと休んでくれ。後で食事を持って行くから」

『すまないな、主殿。宜しく頼む』

スレイプニルは厩舎へと歩いていく。

「おい……今……あの馬、喋らなかったか……？」

「ああ、あいつは神兽なんです。今は俺たちの仲間ですよ」

「そ、そうか……おまえは色々と規格外だな……」

そんな話を話しながら家へと歩いていく。

そして俺たちは家へと入り、リビングで今後のことを話し合うことにする。

「それで、調査の方はどこまで進んでいるんです？」

俺はオルグさんに尋ねた。

「敬語はやめようぜ？ 歳もそんなに変わらないし、ランクにしてもおまえの方が上だ。そっちな　ロゼだったか　あんたも敬語はやめてくれよ？」

オルグさん　いや、オルグの言う通り、オルグと俺の年齢は然程変わらないだろう。

オルグは27、8といったところか。

「わかった。それで調査の方は？」

「魔物がいる場所はわかっている。それで調査隊全員を率いて討伐に行こうとした時に、あの巨人族の情報が入ってきたんだ。その後は、おまえも知っての通りだ」

「そうだったのね……」

「ええ、そうだったんです。ディーンさんやロゼが来てくれてなかったら、全滅していたわ。本当にありがとう」

「気にしなくて良いよ。アドルさんにも頼まれていたしな。後、レイシアさんも俺に敬語を使わなくても良いですよ？」

「そう？ それじゃあ、そうさせてもらうわね。じゃあ、ディーン君もね？」

「わかった。それで、魔物のいる場所は何処です？」

「ああ、『アロウ山脈』だ」

「『アロウ山脈』か……」

『アロウ山脈』は『桜花』と『アーリグリフ』の境に横たわる山脈だ。

山脈自体が1つの『迷路型』<sup>メイズ</sup>の迷宮となっている。

「ここからそれほど遠くはないな。さっそく明日にでも行くか」

「そうね。これ以上被害が増える前に、魔物を排除しましょう」

俺とロゼがそう言つと

「1つ、頼みがある」

オルグがそう俺に言ってきた。

言いたいことは察することができるが……

「俺も、連れていってくれないか？」

「私も連れていってくれませんか？」

2人がほぼ同時にそう言った。  
やっぱりな……

どうする、ラグ？

「彼らはSランクですから、マスターの助けにはなると思いますよ？」

だが、瘴気はどうする？

「あのオルグって人は大丈夫だと思うよ？ あの巨人族と普通の闘つてたしね。何か精神異常を無効化する物を装備してるんじゃないかな？」

レイシアは？

「近づかなければ大丈夫でしょう。『ウンディーネ』も魔術が得意ですからね」

そうか。なら一緒に来てもらうか。パーティーの最大人数も6人だしな

ラグたちとそう話し合い

「わかった。一緒に行こう」

「本当か？」

「本当に良いの？」

2人が確認をしてくる。

「構わないよ。しばらくの間だが宜しく頼む」

「良いの、デイン？」

「ああ、ラグたちとも話した。問題ないよ」

「そう、わかったわ。それじゃあ、食事にしましょう。スレイプニ

ルもお腹を空かせてるわ」

「そうだな」

「ロゼ、私も手伝うわ」

そう言っただけで俺たちはロゼとレイシアが作った食事を食べ、2人のステータスを確認することにした。

「じゃあ、オルグから確認するか」

「おう、わかった」

オルグがステータスウィンドウを可視状態で開く。

Name : オルグ

種族 : 戦鬼族 (転生1回)

称号 : 鬼族最強の戦士

Lv : 121 / 500

HP : 30000 / 30000

MP : 10000 / 30000

SP : 15000 / 15000

STR : 1050 / 1250

DEX : 1000 / 1250

VIT : 1100 / 1250

AGI : 650 / 750

INT : 400 / 750

WIS : 600 / 1000

スキルスロット : 40 / 100

「流石だな」

オルグは『転生』も済ませているし、レベルも高い。  
それに『鬼族』の特徴として、ステータスのバランスも悪くない。

「おう。これでも、最高位の冒険者とか言われてるからな」

「それも納得のできるステータスだ。それじゃあ、次はレイシアの番だな」

「ええ」

Name:レイシア

種族:ウンディーネ・アクエリアス(転生1回)

称号:水精の祝福を受けし者

Lv:90/500

HP:20000/30000

MP:30000/30000

SP:12000/15000

STR:540/750

DEX:800/1000

VIT:648/750

AGI:1000/1250

INT:1200/1250

WIS:1200/1250

スキルスロット:35/100

「……………」

「ど、どつです? 駄目ですか?」

俺が黙り込んだので、レイシアは心配そうに訊いてくる。

「悪くはないよ。レベルも低くはないし、ステータスも低くはない。そもそも『ウンディーネ』は水中戦で本領を發揮する種族だからな」

俺が言ったように、『ウンディーネ』は全種族の中で唯一、魔術の補助なしで水中で行動ができる種族だ。

水中行動を可能にするスキル 種族固有スキル【人魚化】<sup>マイמיד</sup>の使用時には、まさしく人魚のような見た目になる。

「装備を整えれば充分闘えるさ」

「良かったです……」

「それじゃあ、今度は装備を確認させてくれ」

俺がそう言うと2人は頷いて、装備ウィンドウを開く。

アイギスの想像通り、オルグは精神異常を無効化するアミュレットを装備していた。

それ以外の装備は2人とも中々に良い物だったが、やはり作り直した方が良いだろう。

「装備は新しく作ろう。幸いレイシアもSTRが500を超えているから、金属鎧を装備できるしな」

「良いのか？ そんなことをしてもらって」

「構わないよ。迷宮で死なれても困るしな」

流石に、連れて行って死にました じゃ寝覚めが悪い。

俺にできる範囲でフォローはする。

「そうだな。じゃあ、頼む」

「お願いします」

「わかった。じゃあ、今から作ってくるよ」



俺がそう言っつて、鍛冶場へ行こうとすると

「待っつてくれ。ディーンのスータスも見せてくれないか？ どれほどのものか見てみたい」

「ロゼのも見せて欲しいわ」

2人が俺たちのステータスを確認したい　と言っつてきた。

「ん？ 別に構わないぞ」

「ええ、良いわよ」

そう言っつて、俺たちはステータスウィンドウを開く。

Name: ディーン  
種族: 人族(転生2回)  
称号: 認められし者  
Lv: 253 / 500  
HP: 35000 / 40000  
MP: 35000 / 40000  
SP: 17000 / 20000  
STR: 1535 / 2000  
DEX: 1530 / 2000  
VIT: 1545 / 2000  
AGI: 1545 / 2000  
INT: 1500 / 2000  
WIS: 1500 / 2000  
スキルスロット: 50 / 100

Name:ロゼ

種族:ハイダークエルフ(転生1回)

称号:精霊王の寵愛を受けし者

Lv:120/500

HP:29300/30000+5000

MP:29600/30000+5000

SP:15000/15000+5000

STR:615/750+250

DEX:800/1000+250

VIT:711/750+250

AGI:1000/1000+350

INT:1120/1500+250

WIS:1110/1500+250

スキルスロット:30/100

「は？」

「え？」

俺たちのステータスを見た2人が間の抜けた声を上げる。

そして次の瞬間

「な、何だ、このステータスは!？」

「あり得ないわ!？」

2人が驚きの叫びを上げる。

「やっぱり驚くわよね。ディーンの状態を見れば……」

ロゼが当然よね　　といった感じで言った。

「いや……ロゼのステータスも異常よ……？　ディーン君とそれほど変わらないじゃない……」

「い、異常！？　そこまで言う！？　……私のは装備の上昇効果が凄いだけよ。ディーンは素で、あの数値よ？」

「おい……ロゼ、俺が異常みたいに言うな……」

「充分、異常だぞ？　何だ、この数値は？　それに『転生』2回つて……そんなもの、聞いた事ねえぞ」

「『人族』の特徴だよ。『人族』だけは2回『転生』できるんだ。

まあそこまでレベルを上げるのは、かなり大変だけどな。それじゃあ、俺は鍛冶場に行くぞ？　何かあればロゼに聞いてくれ。ロゼ、2人を風呂に入れてやってくれ」

「わかったわ」

「じゃあ、頼む」

俺はそう言っつて、『フロ？』と首を傾げている2人に苦笑しながらリビングを出て鍛冶場へと向かった。

「さてと、2人の装備を作るか」

そう呟いて、俺は素材を置いている倉庫に行き、装備に使う素材を持ってくる。

「うーん、もうあまり素材が残ってなかったな……」

俺は素材を取り、鍛冶場に帰りながら呟いた。

『そうですね。下位金属や希少金属はまだ沢山ありますが、上位希

少金属、特に『オリハルコン結晶』の残りは少なかったですね』  
「ああ、そうだな。『オリハルコン結晶』は【採掘】では手に入らないからな……」

ラグに言ったように『オリハルコン結晶』だけは『オリハルコン・ゴーレム』を倒さないと入手できない。

「なあ、ラグ。この世界にも『金属の洞窟』はあるのか？」

『……ありますよ……亜人の国『ウエルテス』にあります……』  
「なら、近いうちに行かないとな。そこにも精霊王はいるんだろう？」

『はい。『地の精霊王』がおられますよ』  
「そうか。わかった」

ラグの様子が少し気になったが、俺は2人の装備を作り始める。  
重装備のオルグは金属製の全身鎧アーマーと、両手・片手のどちらでも扱うことのできる数少ない武器【槍斧ハルバート】、さらに金属製のタワーシールドを装備していた。

完全に壁役向きの装備で、本人もそのような闘い方をしていた。

一方のレイシアは金属製の軽装鎧に、【槍】と『ナイトシールドタイプ』の魔導盾マジックシールドを装備していた。

レイシアの装備していた槍は、どちらかと言うと西洋風の槍だ。

「じゃあ、始めるか」

まずはオルグの全身鎧アーマーからだ。

『オリハルコン』と『アダマントタイト』の合金で作り、『軽量化』の紋章を刻む。

次は武器だ。

柄は鎧と同じ合金で作り、斧刃と穂先、石突きイシツキの鋭い先端は『オ

リハルコン結晶』で作る。  
槍斧には『強化』の紋章を刻んだ。  
最後は金属盾だ。

『マスター、オルグさんにも魔導盾マジックシールドを持たせては？』

作り始めようとした時にラグが言ってきた。

「いや、金属盾で良いのさ。金属盾は魔導盾マジックシールドに比べて、物理攻撃の軽減率が高いからな。前線で敵の攻撃を受け止める、オルグのような闘い方をするには向いている。あいつはそのことを良くわかってるよ」

『わかりました。流石はSランクと言ったところですね』

「そうだな」

『私なら物理攻撃も魔術も効かないけどね』

「おまえと比べるなよ……」

そんなことを話した後、金属盾を作り始める。

金属盾は『オリハルコン』と『ダマスカス』の合金で作る。

この合金は魔術を弾く特徴を持つので、魔術攻撃の軽減率を上げてくれるはずだ。

この金属盾にも『強化』と『軽量化』の紋章を刻む。

「これで、オルグの装備は出来たな。次はレイシアのだ」

まずは槍だ。

柄は『オリハルコン結晶』と『セイクリッドミスリル』の合金で作り、穂先は『オリハルコン結晶』製だ。

後で『精霊結晶』を詰め込めるように、穂先に近い柄の部分には穴が開いている。

『強化』の紋章を刻み、『精霊結晶』を詰め込んで槍が完成した。次は鎧だ。

軽装鎧はロゼのものと同じく、胸部を守る部分は金属製で、他の部分は俺の外套と同じラグの鋼糸を織り込んだ布製だ。

金属の部分はお馴染みの『オリハルコン』と『アダマントタイト』の合金だ。

『強化』の紋章を刻み、軽装鎧が完成した。

「よし、終わったな」

その後、レイシアのローブと、オルグは全身鎧アーマーを装備しているから外套やローブを着られないので、金属鎧アーマーに留め具で留められるマントを作った。

2人のローブやマントは、俺の外套やロゼのローブと同じ素材で紋章も縫い込んだ。

そうして出来上がった装備をインベントリに放り込み、リビングへと戻る。

かかった時間は3時間ほどか。

リビングへと戻ると

「あ、戻ってきた」

風呂に入ったのだろう、軽装のロゼが声をかけてきた。

他の2人も風呂に入ったのだろう、ロゼと同様に軽装だ。

レイシアの格好は目に毒だな……

ロゼに刺されないよう、そちらにはあまり目を向けないように

「2人の装備が出来たぞ。不具合があったら直すから、試しに装備してみてください」

俺がそう言つと

「その前にアレは何だよ？ 風呂とか言ったか？ 滅茶苦茶気持ち良かったぜ」

「本当に……毎日入りたいわ」

「それは良かった。まあ迷宮の攻略も1日では終わらないだろうから、また入れるさ。それよりも装備してみてください」

俺はインベントリから2人の装備を取り出した。

オルグの装備は灰色がかった銀色で、マントは白だ。

レイシアの方は軽装鎧の金属部は銀だが、他は青系の色で纏めてある。

2人が装備し終わったので

「どうだ？ 何かあったら言ってくれ。色も変えられるぞ？」

「すげえ……こんなもの貰っても、払える金がないぞ？」

「私も……」

2人が何を勘違いしたのか、そう言ってくる。

「あのなあ。誰がいつ、金を払えなんて言ったんだ？ その装備はやるよ。それで、不具合はないのか？」

俺が呆れたように言つと、ロゼも苦笑しているようだ。

「な！？ タダで良いのか……？ こんな装備、買おうと思ったらいくらするか……」

「あの……本当に良いの……？」

2人がもう一度訊いてくるが

「良いから。早く不具合があるか言え。俺も風呂に入りたいんだよ……」  
「わ、悪い……不具合なんて無いな。今までの装備より、ずっと動きやすい」

「私の方も無いわ……それに、この槍に填まっているのは『精霊石』?」

「いや、『精霊結晶』だ。槍の素材も魔術と相性が良いから、魔術を使うのにも問題はないはずだ」

「そうなの……凄いわね……」

「じゃあ不具合も無いようだし、俺は風呂に入ってくる。明日、迷宮に行く前に一応装備に慣れておこう」

「道場を使うの?」

「ああ、このメンバーの連携も確認しておきたいしな」

「わかったわ」

ロゼは朝の訓練がなくなっただと思っただけなのか、ちょっと嬉しそうだ。

だが、そんなはずがない。

「朝の稽古はあるからな、ロゼ。」

俺の言葉で目に見えるほど落ち込んだロゼを残し、俺は風呂へと歩いていった。

そして俺は風呂に入り、自分の部屋でラグとアイギスの手入れをしながらくつろいでいた。

レイシアはロゼの部屋で一緒に寝るそうだ。

俺とロゼのベッドはかなり大きいので、2人くらいなら余裕で寝



ることができるだろう。

ちなみに、オルグは空いている部屋でシユラフで寝ている。

あれから色々あって考える暇も無かったが、こうしてゆっくりと休んでいると、どうしてもあの時のことが頭をよぎる。

「ふう〜」

思わずため息が漏れる。

『マスター、やはりあの巨人族を殺してしまったことを考えているのですか？』

ラグが尋ねてきたので

「ああ。やっぱりこうしていると考えてしまうな……」

『あまり気にしても仕方ありませんよ？』

「それは、わかっているつもりなんだがな……どうしても、何とかできたんじゃないか　と思ってしまうんだ……」

『マスターにもできないことはあるんだよ？』

「そっだよな……」

いくら俺がこの世界では抜きん出た力を持っているとしても、できないことは確かに存在する。

「全てを救いたいと願うのは、俺の思い上がりなのか……？」

俺がそう呟いた時

『コンコン』

俺の部屋の扉がノックされた。

「誰だ？ こんな時間に……？」

「デイン、まだ起きてる？」

扉をノックしたのはロゼだったようだ。

「ロゼ？ どうしたんだ、こんな時間に？」

「少し話しがしたいの。入っても構わない？」

「ああ、良いぞ。鍵は開いてるから」

俺がそう言うと、ロゼが扉を開けて入ってきた。

「取り敢えず、座れよ。それで話して何だ？」

俺はロゼに椅子を勧めながら言った。

「デイン……貴方、まだ昼間のことに気にしてるんじゃないの……？」

「……………」

昼間のことというのは巨人族のことだろう。

「そんなにわかりやすいのか、俺は……？」

「貴方との付き合いもそれなりに長いしね。このくらいはわかるわ。あの2人は気づいてないみたいだけど……」

「そうか……」

「そんなことより、女性を招いておいて飲み物も出さないの？」

「あのなあ。おまえが勝手に来たんだろ……」

「何か言った？」

「……何でもないよ」

俺はため息を吐きながら、インベントリから以前街で買っていた酒を取り出した。

「これしか無いけど、良いか？」

「ええ、良いわ」

「この前みたいに飲みすぎないでくれよ？」

「わかってるわよ！ それで、貴方は何をそんなに気にしてるの？」

「あ、ああ。本当に殺す以外に方法は無かったのか　とってな

……」

「そう……でも、ディーンにもできないことだってあるわ……」

「ついさつき、ラグとアイギスにも同じことを言われたよ」

「そうなんだ。でも2人の言う通りよ、気にしすぎるのは良くないわ」

『ロゼさんの言う通りですよ、マスター』

『そうだよ。マスター1人で何でもできちゃったら、私たちがいる意味がないよ』

「そうだな……ありがとう、3人とも」

「どういたしまして」

そうして俺とロゼは酒を飲みながら、他愛ない話をした……

『マスター、起きて下さい。マスター!!』

『良いじゃん、ラグ。放っておこうよ。そっちの方が面白いよ』

『そういう訳にはいかないでしょう。起きて下さい、マスター!!』

何か、うるさいな……

「んあ？ もう、朝か……？」

『やっと起きましたか』

『あゝあ、起きちゃった』

「ラグ、アイギス……？ どうした、朝っぱらから……」

『どうした　じゃありませんよ。状況をしっかりと把握して下さい』

状況……？

そういや、昨日はロゼと酒を飲んでいて……

それから

どうなったんだ……？

というか、何で俺は椅子に座って寝てたんだ……？

『ベッドの方を見て下さい、マスター』

ラグの声に従ってベッドの方を見ると……

「ぶっ！？ な、何で……？」

何故かロゼが寝ていた。

しかも、上半身には何も身に着けていない。

『マスターが脱がせたんだよ？ 覚えてないの？』

「は！？ 何だと！？」

お、俺が脱がせただと……

『アイギス……！ 嘘を言わないように……！』

「な、何だ……アイギスの嘘だったのか……良かったあゝ」

『マスター、落ち着いている場合ではないですよ。取り敢えず、ロゼさんを起こしましょう』

「そ、そうだな」

俺はロゼの方を見ないようにシーツを掛け

「ロゼ、起きろ。おい、ロゼ」

俺はロゼを揺すりながら声をかける。

「朝だぞ、ロゼ。起きろ」

「……………うん……………」

「起きてくれ、ロゼ。稽古の時間だぞ」

「う……………ん……………デイン……………何で……………?」

ロゼが目を覚まし、体を起こそうとするが

「待て待て。そのままじゃ」

シーツがずり落ちていくので、止めようとするが

『コンコン』

ノックの音がし

「デイン君、起きてる? ロゼが何処にいるか知らない? 起きたら、いなかったんだけど……………」

そう言いながらレイシアが部屋に入ってくる。

俺がそっちに目をやった隙に、とうとうシーツがずり落ちる。

レイシアの目が一瞬点になるが

「あらあら。お邪魔だったみたいね……」

レイシアはそう言って扉を閉める。

俺は振り向くことなく部屋から出ようとするが

「ちょっと待ちなさい、ディーン。これはどういっことかしら？」

そう言って、ロゼが俺の肩を凄まじい力で掴む。

「い、いや。俺が脱がせた訳じゃないぞ？」

俺はそう言いながらゆっくりと振り向くと、シーツで胸元を隠したロゼが微笑んでいる。

「じゃあ、どういっことなのかしら？」

「ラゲ！！ ロゼに説明してくれ！！」

『ロゼさん、マスターの言っていることは本当ですよ。酔ったロゼさんがマスターのベッドで眠ってしまったのです。そしてマスターが寝てしまった後に、何故かロゼさんは寝ながら服を脱いでしまったのです。なので今回はマスターは無実ですよ？』

『たぶん暑かったんじゃないの？ ロゼお姉ちゃん、結構飲んだたし』

「そ、そうなの？ ご、ごめんなさい、ディーン」

「いや、気にしてないよ。それじゃあ、服を着てくれ。オルグたちと訓練をする予定だしな」

「わかったわ。じゃあ、あっち向いてて」

そうして俺とロゼは準備を整え、部屋を出た。

俺たちがそんなことをしている間にレイシアに起こされていたオ  
ルグと、俺とロゼが何を言っても『いいから、いいから』と聞く耳  
を持たないレイシアを連れて、道場へと歩いていった……

## 第11話 『アロウ山脈』

俺たち4人は『アロウ山脈』に向かう前に、道場で連携の確認をしておくことにした。

「じゃあ、訓練を始めるか」

俺はロゼたち3人に言った。

「それでどうするの？」

「取り敢えず3人で俺にかかって来い」

「いいのか？ 3対1だぞ？」

「構わないぞ。陣形はオルグが前衛で、ロゼが中衛、レイシアは後衛だ」

「わかったわ」

ロゼはあっさりと頷いたが、他の2人は困惑している。

「本当に良いの、ロゼ？」

「ええ。このくらいじゃないと、ディーンには指1本触れられないわ」

「ロゼのお嬢がそう言うんなら、そうなんだろうな」

「……どうでも良いけど、『お嬢』は止めてくれない？」

「まあ良いじゃねえか」

「よし、じゃあ始めるぞ」

俺がそう言うと3人は各々の武器を構える。

「言うておくが、本気で来ないと怪我するぞ？」



俺は【杖術形態】のラグを構え、そう言う。

「ふん、言ってくれるじゃねえか。じゃあ、本気で行くぞ!!」

オルグはそう言うと右手にハルバート槍斧を、左手に金属盾を構えて突っ込んでくる。

俺はオルグが突き出したハルバート槍斧を杖で弾く。

そのまま杖を回転させ、下から跳ね上げるがオルグの金属盾に防がれる。

その瞬間、オルグを迂回するようにロゼのソードウィップが襲いかかってくる。

俺は横に跳びソードウィップの剣先を躲すが、それを読んでいたレイシアが水属性上級魔術『アクアレーザー』を放ってくる。

俺はアイギスに魔力を込め、高圧の水流を防ぐ。

「流石は高ランク冒険者だな。連携も悪くない」

「ずいぶんと余裕じゃねえか!!」

オルグがハルバート槍斧を横薙ぎにしてくるのを杖で防ぐ。

「まだまだこのくらいじゃ、俺には届かないさ!」

俺はそう言ってオルグを押し戻す。

オルグの体勢が崩れたところに、すかさず螺旋の力を込めた杖を突き出す。

所謂『纏糸勁』と言うやつだ。

「ぐわっ!!」

流石にオルグは金属盾で防ぐが、螺旋の力を込められた杖は凄まじい威力を発揮して、オルグを道場の壁まで吹き飛ばす。

「ちょっとやりすぎたか……」

俺がそう呟くと、ロゼはソードウィップで、レイシアは『アクアレーザー』を【魔力操作】で鞭状に操り、左右から俺を挟み込むように攻撃してくる。

オルグが吹き飛ばされたことに気を取られなかったのは、流石だが……

俺は【杖術】の防御系アーツスキル『風車』かまぐるまで両方とも弾く。

「くっ、まだ!!」

ロゼは弾かれたソードウィップの軌道を操り、さらに攻撃をしてくる。

「大分、扱いにも慣れてきたようだな」

そう呟き、【縮地无疆】を起動してロゼの真横へと跳ぶ。

ロゼが咄嗟に【ソードウィップ】の防御系アーツスキル『スパイラル・ソーン』を使い、自分の周囲にソードウィップを螺旋状に展開する。

この技は攻撃を防ぎつつ、近づいてきた敵に攻撃もできる優秀な技だ。

「おっと」

俺が咄嗟に後ろへ跳ぶと、ロゼはすかさずソードウィップを剣に戻して斬りかかってくる。

袈裟切りに振り下ろされた剣を俺が杖で受け流すと、ロゼはそのままの勢いで回転し蹴りを放つ。

【格闘術】の熟練度も順調に上昇しているので、中々鋭い蹴りだ。俺はその蹴りを躲し

「キヤアー!!」

立ち足を杖で掬うように払い、ロゼを投げる。

距離を詰めてきたレイシアが突き出した槍も躲し、ロゼと同じように投げた。

「ここまでだな」

俺が呟くと、床で痛そうにもがいていた3人が呻くように

「こいつはバケモンか……?」

「3人でも無理なの……」

「私たちと同じ『人』だとは、思えないです……」

3人とも何気に酷いことを呟く。

「おいおい、何て言い草だ……一応は手加減したぞ?」

「これで……か?」

「大した怪我もしていないだろうが」

「そうね」

「投げられただけですし」

「俺だけキツくないか?」

「何で男に優しくしなきゃいけないんだ?」

「おい!!」

オルグがまだ何か喚いているが

「初めてにしては連携も上手くいったな。これなら実戦でも通用するだろう。実戦では、レイシアはオルグの回復を優先してくれ。前には出ず、攻撃は魔術のみでしてくれ。ロゼはレイシアの護衛をしつつ、中距離から攻撃してくれ。オルグは前線で魔獣を引き付けるんだ。俺は遊撃で攪乱しつつ、オルグが引き付けた敵を殲滅するから」

俺は連携での詳しい役割を決める。

「おう、任せとけ」

「わかったわ」

「わかりました」

俺は3人が頷いたのを確認して

「じゃあ、これから個人別の訓練だ」

俺がそう言うと

「「「え!?!」」」

3人が不満そうな声を上げるが、俺は無視してオルグの訓練から開始した……

3人の個人別特訓を済ませ、順番に風呂に入ってから朝食を食べた。

個人別特訓はロゼはいつも通りに、オルグは格闘と武器を使った

組み手、レイシアは武器と魔術を使用しての組み手をした。  
そして空間の外に出て

「じゃあ、『アロウ山脈』に出発するか」

「おう、そうだな。だが、あっちの2人は少し辛そうぞぞ?」

今日は迷宮の攻略があるので軽めにしたが、ロゼは少し、レイシアはかなりグツタリしてる。

オルグが元気なのは流石だ。

「2人はスレイプニルに乗ってもらおうとしよう。構わないか、スレイプニル?」

『構わないぞ、主殿。それではロゼ殿、レイシア殿。私の背に』

スレイプニルはそう言って、乗りやすいようにしゃがむ。

「ありがとうございます、スレイプニル」

「ありがとうございます。それでは失礼します」

ロゼは慣れた様子で、レイシアは少しビクビクしながらスレイプニルに騎乗した。

「それじゃあ、行くか。オルグ、少し走るがついて来れるよな?」

「俺はあまりAGIが高くないから、あまり速くは走れんぞ?」

オルグのAGIはこの4人の中で最も低い。

「わかってるよ。小走りくらいだから心配するな」

「わかったよ」

『マスター、『アロウ山脈』はここから北です』

わかった

「じゃあ、行こう」

そう言って、俺たちは『アロウ山脈』へと向けて駆け出した。

途中渓谷を迂回するために少し回り道をしたり、何度か戦闘になったが、特に問題も無く『アロウ山脈』に到着した。

「着いたな。ここだ」

俺たちの前には、険しい山脈へと続く道がある。

『迷路型』の迷宮『アロウ山脈』の『アーリグリフ』側の入り口だ。

この『アロウ山脈』や昨日ラグと話していた『金属の洞窟』はメ  
インクエストとは関係のない迷宮で、『VLO』では『サブダンジ  
ョン』と呼ばれていた。

「嫌な感じがするわね……」

「そうだな……こう、背中がゾワゾワするぜ……」

ロゼとオルグが顔をしかめる。

「恐らくは瘴気の影響だろうな。この先、何が起こるかわからない。  
決して気を抜くなよ？ 特にレイシアは、魔物には絶対に近寄るな  
スレイプニルも気をつけてくれ」

「わかったわ、デーン君」

『承知した、主殿』

咄嗟の時にすぐに離脱できるよう、レイシアはスレイプニルに騎乗したままだ。

「じゃあ、行くぞ」

「おう」

「ええ」

「行きましょう」

俺たちは山脈に続く道を進んでいった……

『アロウ山脈』アーリグリフ側山道 第1区画

「元々殺伐とした迷宮だったが、今はさらに　　と言った感じだな……」

俺が呟いたように、元々『アロウ山脈』は巨大な岩山なので樹木などが無く殺伐としていたが、今は暗雲が垂れ込め、さらに不気味な雰囲気だ。

「そうね……何が出てきてもおかしくはないわ……」

ロゼがそう呟いた瞬間

「ん？　皆、敵だ。　『ヴァルチャー』の群れだな。気をつけろ」

前方からこちらに向かって飛んでくる『ヴァルチャー』の群れを見つけた。

俺は【鷹の目】ホークアイを起動し、群れを確認するが特に変わった様子は見られない。

「瘴気に侵された奴はいない。殲滅するぞ」

俺はそう言っただけで右手で剣を、左手で魔導銃を引き抜きながら駆ける。

「おう」

「わかったわ」

「支援は任せて」

3人ともそう応え、オルグは俺と並走するように駆け、ロゼはレイシアを守るように剣をソードウィップ状態にする。

レイシアは槍を構え魔術の準備をし、スレイプニルも周囲に炎槍を浮かべる。

「グルウアアア！！」

オルグが『鬼族』の種族固有スキル【狂化】を発動し、特殊アーツスキル『戦咆哮』ウォー・ロアーを使い、吼える。

このスキルは敵を畏縮させ、さらに注意を引き付ける効果がある。俺は畏縮した『ヴァルチャー』2羽へ弾丸を撃ち込み、魔導銃を納めながら畏縮しなかった奴へと跳ぶ。

オルグは突っ込んできた2羽を纏めて金属盾で受け止め、ハルバート槍斧で薙ぎ払う。

俺はその様子を横目で見つつ、剣を逆袈裟に斬り上げ『ヴァルチャー』を斬り裂く。

オルグの上を飛び越えた3羽は、1羽をロゼのソードウィップが斬り裂き、レイシアの『アクアレーザー』がもう1羽を、残りの1



羽をスレイプニルの炎槍が貫き、殲滅が終了した。

「この程度の魔獣なら何の問題も無いな」

俺が『精霊石』を拾いながらそう呟くと

「おう、そうだな。5分もかからなかったしな」

オルグも『精霊石』を拾いながらそう言った。

「この調子だと、魔物を見つけるのにそんなに時間はかからないわね」

「そのようですね」

ロゼたちもやって来て、『精霊石』も拾い終わったので

「よし、先を急ぐぞ。こここの魔獣程度なら俺たちの相手ではないが、くれぐれも気は抜くなよ」

他の3人が頷いたのを確認し、先へと進んでいった。

『アロウ山脈』アーリグリフ側山道 第2区画

あれから何度か魔獣と戦闘になったが、特に問題も無く、俺たちは攻略を進めていた。

「それにしても、普通の魔獣ばかりだったな……もっと魔物や瘴気

に侵された魔獣がいると思ったが……なあオルグ、本当にここに魔物がいるのか？」

「調査の結果じゃ、ここにいる可能性が一番高えな」

「まさか、もう別の場所に移動したとか……？」

ロゼが、あまり当たって欲しくない予想を口にした。

どうなんだ、ラグ？

『魔物は確かにここにいますよ。山頂付近に強い瘴気の反応があります』

『かなりの大物みたいだね。少なくとも中位、もしかすると上位の個体かも……』

『ええ、その可能性が高いですね。他の場所にも瘴気の反応があるので、気をつけて下さい』

わかった

ラグたちがそう言うなら、間違いなくいるのだろう。

「ここに魔物がいるのは間違いないみたいだな」

「何でわかるんだ？」

「勘だ」

「そんなものなのですか……？」

「デイーンの勘は良く当たるのよ」

オルグとレイシアにはラグたちの事を話していないので、俺の勘ということにしておいた。

ロゼもフォローをしてくれた。

「……まあおまえがそう言うなら、間違いないんだろう？」

「ああ、確実にここにいる」

「わかった。じゃあ、さっさと行って片付けようぜ」

そう言っただけでオルグが歩きだしたので、俺たちもオルグに続き山道を登っていった。

そしてしばらく歩くと

「嫌あ……」

「気持ち悪……」

レイシアが悲鳴を上げ、ロゼが吐き捨てるように言った。

俺たちの前方に『キングモス』の幼虫である、巨大な毛虫がいたからだ。

ロゼとレイシアが顔をしかめる。

「数も多くないし、成虫の『キングモス』が現れる前に殺<sup>や</sup>るぞ」

大抵、幼虫と成虫はセットでいるので早めに処理したい。

俺は両手で魔導銃を抜く。

俺だってこいつらは気持ち悪いので、近づきたくない。

「任せた」

オルグがそう言いながら俺の肩を叩く。

「おい……おまえもやれよ」

「俺、こういう奴ら苦手なんだよ……」

「……………ハア、わかったよ。ロゼ、レイシア、魔術で援護を頼む」

「わかったわ」

「了解しました」

ロゼたちの返事を聞き、俺は魔導銃に『火の魔力』を込めながら駆ける。

毛虫たちは俺を目掛けて、一斉に糸を吐く。横っ跳びにそれを躲し、俺は魔導銃を連射する。続けざまに放たれた炎弾が毛虫たちに命中し、あるものは燃え上がり、また別の毛虫は爆散する。

ロゼとスレイプニルが放った炎槍が3匹を纏めて焼き尽くす。レイシアの『アクアレーザー』が最後の1匹を貫くが

「おい！！ 何かが飛んでくるぞ！！」

オルグが空を指差しながら叫んだので、俺は【鷹の目】<sup>ホークアイ</sup>を起動、オルグが指差す方向を確認する。

飛んで来たのは成虫の『キングモス』4匹に、下位の魔物『ワイバーン』だ。

しかも『キングモス』はすでに瘴気に侵されている。

「魔物だ！！ それに瘴気に侵された『キングモス』もいる！！」  
「何だと！？」

「どうするの、デーン！？」  
「俺がスレイプニルに騎乗して先行する！！ レイシアは降りてくれ！！」

「わかりました！！」

レイシアが降りると、スレイプニルが俺の元へと駆けってくる。

俺はスレイプニルに騎乗しながら

「ロゼは魔術で俺の援護、オルグはレイシアの護衛だ！！ 絶対に魔物を近寄らせるな！！」

「わかったわ！！」

「おう、任せとけ!!!」

「レイシアも、可能なら遠距離から魔術で援護してくれ!!!」

「任せて下さい!!!」

「『キングモス』の撒き散らす鱗粉には毒があるし、『ワイバーン』は魔術を使うから気をつける!!! じゃあスレイプニル、頼む」

『承知した』

俺は最後に注意を促し、スレイプニルが宙を翔ける。

俺は左の魔導銃を抜き、『ワイバーン』に狙いをつけ炎弾を放つが

「チツ!!! まだ、遠いか」

『ワイバーン』には躲される。

『ワイバーン』が放った毒霧 邪属性魔術『ヴェノメスフォグ』をスレイプニルが躲し、火属性上級魔術『フレア・トルネード』を放つ。

炎の竜巻が『キングモス』1匹を呑み込み、焼き尽くす。

近くにいた1匹も乱れた気流に巻き込まれ、ふらつく。

すかさず、そいつに『炸裂弾』バーストシェルを撃ち込んで爆散させる。

俺は魔導銃を戻し

「ラグ、『グレートソード斬馬剣形態』!!! スレイプニル!!!」

『わかりました』

『承知!!!』

ラグがグレートソード斬馬剣に変化、スレイプニルが俺の意思を汲み『ワイバーン』へと駆ける。

俺は斬馬剣を構え

「スレイプニル、そのまま駆け抜ける!!」

スレイプニルがさらにスピードを上げ、俺は『ワイバーン』を擦れ違いざまに斬り裂く。

「後2匹!!」

スレイプニルが旋回し『キングモス』を追おうとすると、ロゼの放った『ダークニードル』が残りの2匹の内1匹を貫く。

それと同時に、レイシアが光属性上級魔術『フォトン・レイ』で放った光線がもう1匹の『キングモス』の羽を貫く。

羽を貫かれた『キングモス』が墜ちていき、オルグがそいつを槍ハルで叩き斬る。

「終わったか……被害は無いか!？」

ロゼたちの元へと駆けながら声をかける。

「無いわ。こっちは全員大丈夫よ」

俺がスレイプニルから降りると、ロゼが無事を伝えてきた。

「そうか、良かった。それにしても、やはり魔物がいたな……」

「ええ、そうね。いきなりだったから驚いたわ」

「あいつらみたいに飛んで来られたら、厄介だぜ」

「そうですね……これからは、より気をつけないといけませんね」

「そうだな。じゃあ『精霊石』を拾って、先に進もう」

そんなことを話した後、俺たちは『精霊石』を拾い、攻略を再開した。

「これ以上攻略するのはキツいか……」

もう辺りは暗くなって、俺たちは【暗視】を起動し攻略をしていた。

「そうだな……これ以上は不意討ちを喰らうかもしれないからね」  
「オルグの言う通りだな。今日はもう休むか。 あいつらを殲滅してからな」

「『ストームバット』ね」

ロゼが言う通り、1mほどの蝙蝠型魔獣『ストームバット』の群れがこちらに向かって来ていた。

「大した相手ではないですね」

「まあそうだが。油断はするなよ、レイシア」  
「わかってますよ」

見た限り、瘴気に侵されている奴もいない。

「じゃあ、やるぞ」

「おう」

俺は剣を抜き、【縮地无疆】で地面を砕きながら跳ぶ。瞬時に距離を詰め、地面を削りながら1匹を斬り裂く。

オルグが金属盾で『シールド・バツシュ』を使い、『ストームバツト』5匹を弾き飛ばす。

ロゼがソードウィップを操り、2匹纏めて刺し貫く。レイシアもスレイプニルに騎乗したまま、槍で1匹を切り裂く。

俺はオルグが弾き飛ばした1匹へと跳び、気を纏った右脚で踏み砕きつつ、再び【縮地无疆】で跳ぶ。

その間にオルグが1匹を貫くが、別の1匹がオルグに向かって『ブラストハリケーン』を放つ。

風の渦がオルグに迫るが

「ぬうん!!!」

オルグは気を纏った金属盾を掲げ、難なく防ぐ。

俺はそいつを斬り裂きながら

「大丈夫か、オルグ!？」

「おう!!! このくらい何でもないぜ」

俺たちがそんなことを言っている間に、ロゼとレイシアの魔術が残った奴らを殲滅していた。

「オルグ、今のは【纏気術】か？」

俺は、先程オルグが盾に気を纏わせていたので訊いてみた。

「何だ、そりゃ？」

「は？ さつき、盾に気を纏わせてただろ？」

「ああ、あれか。【纏気術】って言うのか？」

「知らなかったのか？」



まあ【纏気術】というのは『VLO』での呼び方だが……

「おう。いつの間にかできるようになってな」

「武器にも同じことはできるか？」

「そついや、やったことがねえな」

「ちよつとやってみてくれ」

「良いぜ。できねえ……」

「同じようにやればできるはずなんだがな。まあ今度、教えるよ」  
「頼むわ」

どうやら無意識で使っていたようだ。

俺とオルグがそんなことを話していると

「……話してないで、あんた達も『精霊石』を拾いなさい」

ロゼの恐ろしげな声が聞こえてきたので

「「はい。すみませんでした」」

俺たちは素直に謝り、『精霊石』を拾い始めた……

そうして『精霊石』を拾い集めた後、俺はその場で空間を開き、今日は休むことにした。

「デイン、空間を開いた場所がセーフルームじゃなかったけど、良かったの？」

レイシア、ロゼとともに食事の準備をしている時にロゼが尋ねて

きた。

ちなみにオルグは【料理】を持ってなかったので、風呂に入っている。

「まあ、あれからセーフルームを探すのも面倒だったしな……出る時に気をつければ、大丈夫だろう」

「それもそうね」

「でも本当に便利ですね、この空間は」

「レイシア、また微妙に敬語に戻ってるんだが？」

「うーん、気をつけてはいるんだけど……」

「無理して敬語をやめる必要はないのよ？」

「ロゼの言う通りだ。話しやすい方で良いぞ」

「わかったわ。そうする」

そんなことを話している内に料理が出来上がった。

ちょうどオルグも風呂から出てきたので、夕食にすることにす。

「じゃあ、俺はスレイプニルに食事を持って行ってくるから、先に食べていてくれ」

「わかったわ」

そうやって俺はスレイプニルの食事である、山盛りサラダを持って行く。

「スレイプニル、食事だぞ」

『おお、美味そうだ。さっそくいただくでしょう』

そうしてスレイプニルに食事を持って行き、リビングに戻ると

「お、戻ってきたな。おまえに訊きたいことがあったんだ」

オルグがそう尋ねてきた。

「何だ？ 訊きたいことって。大抵のことはロゼに訊けば、答えてくれると思うが……」

「いや、俺もそう思ってロゼのお嬢に訊いたんだけど、おまえに訊け　としか言ってくれなくてな」

俺はロゼにそうなのか　と視線で確認すると、ロゼは頷いて

「私が答えて良いかどうか、わからなかったから……」

「そうか。それで何が訊きたいんだ？」

「今日の『ワイバーン』との戦闘の時、おまえの剣が大剣に変化しなかったか？」

ああ、ラグを【グレートソード斬馬剣形態】にした時のことから……結構距離があったから、バレていないと思ったんだがな……

おまえたちのことを言ってしまうても良いか？

『まあ、仕方ありませんね』

『バラしても、困ることは多分ないでしょ』  
わかった

ラグたちの確認を取り

「本当に、あの状況で良く見てたな……」

「まあな」

「ハア、教えるよ……俺が持っている剣が、『ラグナレク』だということは知っているな？」

「ああ、歴代の『来訪者』も持っていたんだろ？」

「その通りだ。この剣には色々と特殊な機能があつてな。この【形態変化】も、その1つだ」

俺はそう言つて、ラグを【杖術形態】に変化させる。

「その杖、訓練で使っていたヤツか……？ それも『ラグナレク』だつたんだな……」

「驚いた……」

朝の訓練の時は事前に变化させておいたからな。

「この杖やあの時の斬馬剣グレートソードの他にも、色々な形態に変化できる。ちなみに、この魔導盾マジックシールドも『ラグナレク』と同じ、クラス？の魔導兵装で『アイギス』と言つ」

俺は左手をオルグとレイシアに見せながら言った。

「そうなのか……」

「もう1つ、驚く機能があつてな。2人とも挨拶をしろ」

「誰に言つてんだ……？」

オルグがそう言つた瞬間

『初めまして、オルグさん、レイシアさん。私は『ラグナレク』、ラグとお呼び下さい』

『私は『アイギス』だよ。アイって呼んでね』

「おお！？ 何だ、今のは！？」

「頭の中に直接声が！？」

ラグとアイギスが挨拶すると、2人が面白いように驚く。

「やっぱり驚くわよね……」

「何回見ても、この光景は面白いな……」

「デイン、私の時もそんなことを思ってたんだ」

俺の眩きが聞こえたのか、ロゼが俺を軽く睨む。

「そんなことはないぞ……？」

「声が裏返ってるわよ。もう良いから、2人に説明してあげなさいよ」

「そ、そうだな。2人とも落ち着け。今は『ラグナレク』と

『アイギス』の声だ。こいつらは意思を持っている武具なんだよ」

「何だと!？」

「そんなこと、聞いたことがありません……」

2人が目を丸くしている。

「どうやら、その辺りのことは伝わっていないようだな。アドルさんやグランドマスターも知らない様子だったよ」

「そうなのか……」

「これからはこいつらのことも宜しく頼むよ」

『マスター共々、宜しく頼みますね』

『よろしくね〜』

「こちらこそ、宜しく頼みます」

「おう。宜しく頼む」

そうしてラグたちの挨拶を済ませた俺たちは、食事や風呂を済ませ、明日に備えて各々の部屋で眠りに就いた……

今日も全員で軽く訓練を済ませた後、朝食を食べ、攻略を再開することにした。

「今日中に魔物を排除しておきたいから、山頂まで突き進むぞ」

「わかったわ」

「おう、任せとけ」

「頑張ります」

俺がそう言うと、3人とも頼りになる返事を返してきた。

「じゃあ俺が先に出て周囲を確認するから、皆はその後に出てきてくれ」

3人が頷いたのを見て、俺は右手に剣を持ち、空間の外へと出る。周囲を確認するが、魔獣や魔物の気配は無い。

「敵の気配は無い。出てきても良いぞ」

俺が声をかけると、3人も外へと出てきた。

「それじゃあ、行くか。山頂は第5区画だから、それほど時間はかからないはずだ」

「そうね。第3区画もほとんど攻略し終わってるものね」

そうして俺たちは山頂へと急いだ。

『アロウ山脈』アールグリフ側山道 第5区画

「急に雰囲気が変わったな……」

あれから俺たちは魔物とも何度か戦闘になったが、順調に第5区画へと来ていた。

だが第5区画に入った途端、周囲の雰囲気がガラリと変わった。

「ええ……禍々しい気配がするわ……これは……瘴気？」

ロゼの言う通り、この区画全体に薄っすらと瘴気が充満している。

「うっ……気分が……」

レイシアが口元を押さる。

「大丈夫か、レイシア？」

「あまり、大丈夫ではないです……」

レイシアは状態異常や精神異常の耐性に関わりのあるWISの値は高いが、この瘴気の中ではキツいだろう。

「『メンタルガード』　これで少しは楽になるはずだ」

俺は精神異常の耐性を上げる、月属性魔術『メンタルガード』をレイシアに使った。

これで瘴気の影響も受けづらくなるはずだ。

「あ、楽になりました」

「瘴気を完全に防げる訳じゃないから、気をつけてくれ。また気分が悪くなったら言ってくれよ?」

「わかりました。ありがとうございます」

「じゃあ、行きましよう。あまり、長居したくはない場所だわ……」

「ロゼのお嬢の言う通りだ。さっさと行こう」

「そうだな」

そうして俺たちは先へと進んでいった……

「『ワイバーン』が1匹そっちに行つたぞ!! 気をつける!!」

俺は大蛇型の魔獣『ポイズナス・スネーク』を斬り裂きながら叫んだ。

咄嗟に左手の魔導銃を『ワイバーン』に向け連射するが、片方の翼を撃ち抜くだけに終わる。

「俺に任せとけ!!」

オルグがそう言つて、<sup>ハルバート</sup>槍斧の斧の部分で『ワイバーン』を引つ掛け、引き摺り落とす。

そして教えたばかりの【纏気術】を使い、<sup>ハルバート</sup>気を纏わせた槍斧で切り裂いた。

それを視界の端で確認し

『ゲキヨ、ゲゲ……!!』

「キモいんだよ!!」



気持ちの悪い鳴き声を上げながら飛びかかってきた、巨大な一つ目を持つ大蜥蜴のような下位の魔物『イビル・アイ』を幹竹から割りに両断する。

ロゼのソードウィップが別の『イビル・アイ』に巻き付き、次の瞬間には『イビル・アイ』を微塵に斬り裂いていく。

レイシアの投げた光り輝く槍　光属性上級魔術『セイクリッドランス』が瘴気に侵された『ヴァルチャー』を貫き、同時に浄化する。

その後5分ほど戦闘が続き、魔物の群れは全滅した。

「ふう、終わったな」

「おう。それにしても、かなり魔物が多かったな」

オルグが言うように、俺たちが殲滅した群れにはかなりの数の魔物が含まれていた。

一緒に現れた魔獣も例外なく、瘴気に侵されていた。

「山頂が近いからかも知れませんか」

「そうね。この区画もほとんど攻略したし、後は山頂だけね」

『精霊石』を拾いながら、俺とレイシアが全員に回復魔術を使う。

「『アーリグリフ』に最初に入り込んだ魔物は、恐らく山頂にいたろう。中位の個体か、最悪の場合は上位の個体とやり合うことになる。だがこいつを排除できれば、被害はこれ以上広がらないはずだ」

『マスターの言う通り、中位の中でも強力な個体や上位の個体は、自らの瘴気から『ワイバーン』や先程の『イビル・アイ』のような下位の魔物を産み出します。なので排除してしまえば、これ以上の被害は防ぐことができるでしょう』

「それなら、尚更さつさと倒さないとな」  
「そうですね」

オルグたちはこれまでの魔物との戦闘で自信がついたのかそう言うが、俺には1つだけ危惧していることがあった。

「皆、聞いてくれ。俺の記憶じゃ、この山頂には『エンペラー・ヴァルチャー』がいたはずだ。もしかすれば、瘴気に侵されている可能性がある」

俺の『VLO』での記憶では『アロウ山脈』山頂には、ボスの『エンペラー・ヴァルチャー』がいたはずだ。

下手をすれば、こいつと魔物を同時に相手しなければならぬ。

「『エンペラー・ヴァルチャー』ってどんな魔獣なの？」

『滅茶苦茶でつかい』『ヴァルチャー』だよ。それに『エンペラー・ヴァルチャー』は、魔獣じゃなくて神獣だよ』

「アイギスの言う通り、『エンペラー・ヴァルチャー』は神獣だ。だが上位の神獣ではないから、それほど手強くはないはずだ」

『エンペラー・ヴァルチャー』は、『ファイアドラゴン』や『炎狼』よりは下位の神獣だ。

「だから、もし魔物と『エンペラー・ヴァルチャー』の両方がいた場合には、俺が魔物の相手をするから、3人は『エンペラー・ヴァルチャー』の相手をしてくれ」

「神獣なんて俺たち3人だけで大丈夫なのか？ というか、おまえだけで魔物の相手をするのか……？」

「デインの力は知ってるけど、本当に大丈夫なの……？」

「ロゼの言う通りです。1人でなんて無茶ですよ……」

3人が俺の心配をするが

「俺は大丈夫だから心配するな」

「デインがそう言うのなら、大丈夫なんでしょうけど……」

「まあこいつがそう言うんなら、大丈夫なんだろうさ」

「そうですね。むしろ私たちの方が心配ですよ……」

「3人の実力なら、『エンペラー・ヴァルチャー』は充分に倒せるよ。それじゃあ、行こう」

そんなことを話し合って、俺たちは山頂を目指し歩いていった。

『アロウ山脈』 山頂

「この上が山頂だ」

俺たちは山頂のすぐ下まで来ていた。

「流石に瘴気が濃いな……」

「そうね……レイシア、大丈夫……？」

「だ……大丈夫……です……」

レイシアはそう答えるが、全然大丈夫そうではない。

『メンタルガード』を使ってはいるが、この瘴気の濃さでは流石に効果が無いようだ。

「レイシア、無理をするな。」

『ソウル・プロテクション』

俺はレイシアに『メンタルガード』の上位魔術 月属性上級魔術『ソウル・プロテクション』を使う。

「この魔術は……？」

「『ソウル・プロテクション』と言って、精神異常を完全に防いでくれる魔術だ。ただしこの魔術は効果を維持するために、対象者の魔力を大量に消費する。魔術を使用しながらだと、それほど長時間はもたないから気をつけるよ？」

「わかりました。気をつけます」

「それじゃあ、行くぞ。くれぐれも油断はするなよ」

3人が頷いたので、頂上へと突入した。

「キモ……」

「あれが魔物か……？」

「気持ち悪いわね……」

「アレと闘うのは、嫌です……」

俺たちの目の前には体長10mほどの巨大な蠍がいた。それだけなら何でもないが、その蠍の体表には目玉がビッシリと付いていた。

「おい……あいつ、『ヴァルチャー』を喰ってるぜ……」

その蠍はマナを喰うためか、『ヴァルチャー』を齧っていた。そして次の瞬間

『……』

蠍が不協和音のような叫びを上げ、全身の目玉が一斉にこちらを

向く。

「ひっ！！」

レイシアが短く悲鳴を上げる。

気持ちは良くわかる。

想像を絶する気持ち悪さだ。

「来るぞ！！ あいつは俺が相手をする！！ 『エンペラー・ヴァルチャー』は任せたぞ！！」

蠍の叫びに引き寄せられたのか、『エンペラー・ヴァルチャー』が飛来した。

俺は剣を抜きながら蠍へと駆け

「瘴気には気をつけるよ！！」

「わかったわ！！ ディーンも気をつけて！！」

やはり、『エンペラー・ヴァルチャー』は瘴気に侵されていた。

「神獣を侵すほどの瘴気か……ラグ、あいつは上位の個体なのか？」  
『そのようですね。かなり手強そうです』

俺はラグの答えを聞き、【リーブラの魔眼】を起動して蠍を確認する。

この蠍型の魔物は『ヴィシヤスシャウラ』という名称だ。

「くっ！！」

俺は『ヴィシヤスシャウラ』が放った尾の針を剣で受け流す

が受け流したにも関わらず、手が痺れるほどの衝撃だ。

「ラグ、【クラウド・ソラス】起動!!」

『了解しました』

ラグがそう言った瞬間、剣が業火を纏う。業火は瘴気すら焼き尽くし、燃え上がる。

「ロゼたちとも離れているし、大丈夫だろう」

下手をすればロゼたちごと焼き尽くしてしまいかねないが、これだけ離れていれば大丈夫だろう。

『ヴィシヤスシャウラ』が振り下ろした剣を業火の剣で受け流す。

『!?!』

『ヴィシヤスシャウラ』は業火に身を焼かれ、悲鳴のような叫びを上げる。

「でりゃっ!!」

俺は剣を斬り上げ、剣を斬り飛ばす。

剣の軌道に沿って炎が奔り、斬り飛ばした剣を焼き尽くす。

すかさず、俺は『ヴィシヤスシャウラ』に剣を突き刺そうとする  
が

『ガキイツ!!』

振り回された尾の一撃を剣で受け止める。

その威力で、俺は地面を削りながら横へと押される。

『ジユツ!!』

『!?!』

剣と触れていた『ヴィシャスシャウラ』の尾の一部が一瞬で炭化する。

「触れることすら許さないか……尋常じゃない威力だな」

俺は、【クラウ・ソラス】の凄まじさを改めて認識した。

『ヴィシャスシャウラ』は炎の剣を畏れるように俺から飛び退くが

「『ノヴァ・エクスプロージョン』」

そんなことを許すはずもなく、俺は魔術を放つ。

『ヴィシャスシャウラ』は残った左の鋏で炎弾を受け止めるが、呆気なく鋏が爆散する。

「ロゼたちの方も気になるし、終わらせよう」

そう言っつて、俺は剣に気と魔力を込める。

気と魔力を喰らった炎が白熱化し、さらに物質化する。今や炎の剣は、大剣と呼んでも差し支えないサイズだ。

その灼熱した熱気を浴び、『ヴィシャスシャウラ』の体表の眼球が音を立って破裂していく。

俺は獄炎の大剣を肩に担ぐように構え

「おおおお!!」

【縮地无疆】で『ヴィシヤスシャウラ』へと跳び、渾身の力で振り下ろす。  
その瞬間、大剣がさらに伸長して『ヴィシヤスシャウラ』を両断する。

刹那、両断された『ヴィシヤスシャウラ』が爆散し、飛び散った破片すら燃え尽きる。

【クラウ・ソラス】の固有アーツスキル 『緋焰爆碎』だ。

「殺ったな……」

俺は剣で周囲を薙いで瘴気を焼き尽くした後、【クラウ・ソラス】を解除する。

「あつちはどうなった……?」

俺は、ロゼたちと『エンペラー・ヴァルチャー』が戦闘を行っている方へと目を向ける。

ちょうどその時、オルグの【ハルバート槍斧】のアーツスキル『バスターズウィング』で振り下ろされたハルバート槍斧が『エンペラー・ヴァルチャー』を縦に分断した。

2つに切り裂かれた『エンペラー・ヴァルチャー』が消えていく

……

「どうやら向こうも終わったようだな」

俺は剣を鞘に納めながらロゼたちの方へと歩いていった。

「皆、無事か?」



俺は3人の無事を確かめる。

「オルグが少し怪我をしたけど、私たちはほぼ無傷よ」

「そのようだな……だが一応、『キュアライト』」

「ん、ありがとう」

軽傷のようだが、俺はロゼに回復魔法を使っておいた。

「オルグの方は……レイシアが診ているようだな」

俺はオルグにも回復魔法をかけようとしたが、すでにレイシアが治療しているようだった。

「重傷じゃないが、大分怪我をしているな……そんなに手強かったか？」

「いえ、私たちだけでも充分闘えたわ。でも一度だけ、『エンペラー・ヴァルチャー』がレイシアに突撃してきたのをオルグが庇ったのよ。あの傷はその時のものよ」

「それか。レイシアがあんなに必死になっているのは……」

レイシア自身も無傷ではないし、オルグにとってはあれくらいの傷は怪我にも入らないだろう。

「どうやら治療が済んだようだな」

「そうみたいね」

俺とロゼは、オルグたちの方へと歩いていく。

「聞いたぞ、オルグ。ずいぶんと活躍したようじゃないか？」

俺はレイシアに『キュアライト』をかけながら、からかうように言った。

「はい。隊長には危ないところを助けてもらいました」

「良いって。仲間を守るのは当たり前だ。それに、怪我也治してもらったしな」

「何だあ、ずいぶんと慌ててるじゃないか？　もしかして照れてるのか？」

「うるせえー!!」

オルグが普段は見られないくらいに慌てている。

「もう。やめなさいよ、ディーン。ハア……こういう所は本当に子供ね……」

「あははは……」

ロゼとレイシアは、呆れた様子で俺たちを眺めていた。

「つと、まあお遊びはこの辺にしてそろそろ戻るか」

「おい!!」

「ロゼたちはこの後どうするの？」

「迷宮に行くつもりだとは思うけど……どうするの、ディーン？」

「そのつもりだったけど、一度アドルさんやグランドマスターに報告しに戻った方が良いな。幸い、ここを下りると『桜花』にも近いしな」

オルグがまだ何か言っているが、無視して話を進めた。

「そうですね……私たちはどうします、隊長？」

「つたく、ディーンの野郎。　ん？　そうだな、俺たちも『ダル

グスト』のギルドに戻らねえとな。報告もあるし、隊員たちの様子も気になる」

「そうですね」

オルグたちも『ダルグスト』に戻るようだ。

「そうか。じゃあ、ここでお別れだな。また何処かで会えたら良いな」

「そうなるわね。短い間だったけど一緒に闘えて良かったわ、レイシア」

「……………」

「……………ちょっと待ってくれ……………」

俺とロゼはそう言って山頂から『桜花』へと続く道を下りようとしたが、レイシアは黙り込み、オルグが俺たちを引き止めた。

「どうしたんだ、オルグ？ まだ何かあるのか？」

「……………俺たちも同行させてくれないか？」

「お願いします」

「同行か……………当然、『桜花』やグラントマスターの所について訳じゃないんだよな……………」

「ああ、おまえたちの旅に同行させて欲しい」

「足手纏いにはなりませんから……………」

「デイン……………」

ロゼが請うような目で見ってくる。

ハア、どうしたもんかな……………」

『良いんじゃないありませんか、マスター？ お2人の実力は今回のこととでわかっているでしょう？』

『それに旅は大人数の方が楽しいよ』

ラグの言っていることはもっともだし、アイギスの言いたいこともわかる。

「わかったよ。一緒に行こう」

「本当か!？」

「良いんですか!？」

「ああ。ただし、本当に危険な旅だぞ？ 今回のようなことが、日常茶飯事になる可能性だってある。とてもじゃないが、命の保証はできない。それでも構わないのか？」

「ああ。命の危険なんて、冒険者をやってるなら当然のことだ」

「私も構いません」

2人の覚悟は本物のようだ。

「そこまでの覚悟があるのなら良いよ。でも、調査隊の方はどうするんだ？」

「俺たちが任されたのは、『アーリグリフ』の調査と魔物の討伐だ。他の国は別の調査隊が調べてるし、今回のことを報告すれば俺たちの任務は終了だ。調査隊も解散するだろう。だから大丈夫だ」

「わかった。なら、俺とロゼは報告をするために『桜花』と『グラウンドティア』に行ってくる。その間にオルグたちは、『ダルグスト』で報告を済ませて待っていてくれ。俺たちも、後で合流するから」

「おう、わかった。だが良いのか？ 俺たちがそっちに向かった方が、早く合流できると思うが……?」

「私たちにはスレイプニルがいるから大丈夫よ」

「そうでしたね」

「そういうことだ。合流地点は『ダルグスト』のギルドにしよう。そうだな……余裕を持って4日後に『ダルグスト』のギルドだ」

それだけあれば、何か予定外のことがあっても大丈夫だろう。

「おう」

「じゃあ、行こう。まだ下位の魔物がいるかもしれないから、充分気をつけるよ？」

「わかりました」

「それじゃあ、4日後に『ダルグスト』でね」  
「待ってるぜ」

そう言っつて、俺たちは別々の道から山頂を後にした。

俺とロゼは『精霊石』を拾うのもそこそこに、もの凄いスピードで山道を駆け降り、その日の内に『アロウ山脈』から抜け出した。

そして、スレイプニルに騎乗し『桜花』へと急ぐ。

「そういえば、何で『脱出』<sup>エスケープ</sup>を使わなかったの？」

『桜花』に向かう途中でロゼが訊いてきた。

「ああ。『脱出』<sup>エスケープ</sup>は、ああいった入り口が2つ以上ある迷宮だと入った方に出るんだ。『アーリグリフ』側に出るから『グランドテイア』に向かっても良かったが、遠回りになるしな」  
「……………それもそうね」

頭の中で地図を思い浮かべていたのか、少し間が空いた後ロゼはそう答えた。

『良かったですね、マスター？ 忘れていただけ ということに  
気づかれなくて』

うるさい。ロゼには言うなよ。アイギスも

『どうしよっかなあ〜』  
頼むから、黙っていてくれ……

『アロウ山脈』を下りた後、オルグたちを『脱出』<sup>エスケープ</sup>で送ってやれば良かったな　　思ったがもう遅かった。

それに俺の言ったことに嘘は無い。

こちらの方が近道なのは間違っていないからな。

「何か隠してない……?」

「そ、そんなことある訳ないだろ」

「そう?」

そんなことを話しながら『桜花』へと進んでいった……

俺たちは『桜花』に到着すると、すぐにギルドへ向かい、アドルさんと面会した。

「『アーリグリフ』の魔物は排除しました。これで、あの国でこれ以上魔物の被害が増えることはないと思います」

「おお、そうか。それは、良かったわい。流石　　と言ったところじゃの」

「褒めても、何も出ませんよ。それではこれからグランドマスターにも報告に行きますので、これで失礼します」

「相変わらず、忙しそうじゃの。そうじゃ、報酬を渡さねばの」  
「ありがとうございます」

アドルさんはそう言って、部屋の奥へと入っていった。

「取り敢えずは報酬の10万テイルじゃ。それと、これは儂が現役

の頃使っておった物での。良かったら、貰ってくれんか？」

アドルさんは10万ティルが入っているだろう革袋と、銀色に輝くガントレットを渡してくる。

「ずいぶんと良い物のようですが、構わないのですか？」

「何、構わんよ。儂が持っておっても意味は無い。それならば、誰かに使ってもらった方が良いでしょう」

「わかりました。ありがとうございます」

「うむ。それでは急いでおるのじゃろ？ もう行きなさい。これからも活躍を期待しとるぞ？ ロゼもな？」

「はい。それでは、失礼します」

「失礼します、アドル様」

そう言っただけで俺たちは部屋から出て、ギルドを後にしようとしたが

「デイン様、お待ち下さい」

受付の横を通りがかった時に、受付のお姉さんに呼び止められた。

「どうしたんですか？」

「ソファアラ様から、時間のある時に『ウィプル村』に立ち寄って欲しい」と伝言を預かっております」

「何かあったんですか？」

「さあ？ 私は聞いておりません。それほど急いでおられる様子ではありませんでした」

お姉さんがその時のことを思い出しているのか、首を傾げながらそう言った。

「わかりました。行ってみます」  
「宜しく願います」

ソファアラさんの伝言を受け取り、俺たちはギルドを後にした。  
そして、スレイプニルで『ウイプル村』へと向かう途中

「ソファアラさん、どうかしたのかしら……?」  
「うん、わからないな……。 magari リアが何かしたのか?」  
「そんな感じではなかったけど……」  
「まあ行ってみれば、わかるさ」  
「そうね」

途中で1泊し、俺たちは『ウイプル村』のソファアラさんの工房へとやって来た。

「ソファアラさん、ディーンです。ギルドで伝言を聞いたので来ました」

俺はノックをしながら、扉越しにソファアラさんへと声をかけた。

「はーい。ごめんなさいね、ディーンさん。わざわざ来てもらってソファアラさんが扉を開けて出てきた。」

「いえ、構いませんよ。ちょうどこちらに来ていましたから。それで、どうしたんですか?」

「この前貰った石鹸ってまだある?」

「は? 石鹸ですか……。まだありますけど……」

「良かったあー。申し訳ないんだけど、いくつか貰えないかしら?」



ソフィアさんは両手を胸の前で合わせて、本当に安堵したようにそう言った。

「はあ、構いませんけど……もしかして、俺を呼んだ理由ってそれですか……?」

「そうなのよ。本当にごめんなさいね。近所の奥様たちが、どうしても欲しいって……」

「そ、そうですか……」

呼び出された理由は、石鹸だったのか……

「プツ……」

「笑うなよ、ロゼ……」

「まあ良いじゃない。悪いことが起こった訳じゃなくて」

「そうだな。じゃあ取ってきますから、少し待っていて下さい」

俺はそう言って空間を開き、風呂場に置いてあった予備の石鹸を取りに行く。

「はい、どつぞ」

俺はソフィアさんに石鹸をいくつか手渡す。

「ありがとう。助かるわあ」

「後、これもどつぞ」

俺はそう言って、ソフィアさんに紙のスクロールを渡す。

「これは?」

「石鹸のレシピです。必要な薬草などが書いてあります。難易度は高くないし、必要な薬草も比較的入手しやすいので、リアにでも作らせてあげて下さい。リアの【錬金】の熟練度を上げるには、ちよつど良いでしょう」

「本当に助かるわ。ありがとう」

「いえ、全然構いませんよ」

ぶつちゃけ、石鹸で何度も呼び出されては堪らない。

「それじゃあ、俺たちはもう行きますね」

そう言つて踵を返そうとすると

「あ、ちよつとだけ待つてて」

ソファラさんはそう言つと、屋敷の方へと走っていく。そしてしばらく待っていると

「はい、これ。石鹸のお礼よ。お昼にでも食べてね」

ソファラさんが手作りのサンドイッチをくれた。

「ありがとうございます」

「良いのよ、これくらい。それじゃあ2人とも、くれぐれも体には気をつけてね？」

「はい、わかりました」

「リアちゃんにも、宜しく言つておいて下さい」

そう言つて、俺たちは『ウィプル村』を後にした。

スレイプニルに騎乗し、改めて『グラントディア』へと向かつて

いると

「それにしても、あんな理由で呼び出されるとはな……」

思わず咳きが漏れてしまった。

「そうね。呼び出された理由が、石鹸つてわかった時のディーン顔は面白かったわ」

「それはもう言わないでくれ……だがソファアラさんには、これからも色々な理由で呼び出されそうな気がする……」

「嫌なら、断れば良いじゃない？」

「あの人には恩もあるし、それに何か逆らえないんだよな……」

「それは、わかる気がするわ……」

そんなことを話していると、『グラントディア』に到着した。

俺たちはすぐにギルド総本部へと赴き、ゼノンに魔物を無事討伐したことを報告した。

ちなみに、俺が粉碎した窓ガラスは綺麗に修復されていた。

流石はギルド総本部。

「そうですか。それは本当に良かった。ギルドと『アーリグリフ』の民を代表して、お礼を言わせて下さい。ディーン君、ロゼさん、本当にありがとうございます」

ゼノンはソファァーから立ち上がり、深々と頭を下げた。

「頭を上げて下さい。俺たちだけじゃなく、オルグたちの調査隊も頑張ってくれましたよ」

「わかりました。彼らにも改めてお礼をしましょう。それでは報酬をお渡ししましょう」

「いやいや、構いませんよ。報酬はすでにアドルさんから受け取っていますから」

「それでは私からの個人的なお礼ということ、受け取って貰えませんか？」

「……わかりました」

「それでは少々お待ち下さい」

ゼノンはその言って、部屋に置かれている机の引き出しから1冊の魔導書を持ってくる。

「これは我が家に代々伝わる魔導書です。闇属性魔術なので、そちらのロゼさんならば使いこなせるでしょう」

「そんな貴重な物、貰えませんか……」

「良いですよ。私はもう習得していますし、あなた方には力が必要でしょうか？ 是非、お持ち下さい」

「……わかりました。この旅が終わったら、必ず返しに来ます」

「別に返さなくても構いませんが、売ったりはしないで下さいね？」

「しませんよ！！」

「冗談なのだろうが、思わず言い返してしまった。」

「デイン。レイシアたちのこと、言っておいた方が良くないんじゃないかしら……？」

「それもそうだな。」

「どういうことですか？」

「オルグとレイシアが、俺たちの旅に同行することになりました」

「そうなのですか？」

「はい。構いませんか？」

「私が許可をすることではないですよ。当人たちがそれで良いのなら、構いません」

「すみません。ギルドでも、上位の冒険者を引き抜く形になってしまつて」

2人ともSランクの冒険者だ。  
彼らにしかこなせない依頼もあるだろう。

「それでこの世界が救われる可能性が少しでも上がるなら、ギルドとしても嬉しい限りです」

「そう言ってもらえると助かります。それとこんなことになってから言つのは心苦しいですが、『アロウ山脈』に入り込んでいた上位の魔物は排除しましたが、下位の魔物がまだ残っている可能性があります。ほとんどは俺たちが殲滅しましたが、一応上位の冒険者で調査をしておいて下さい」

「わかりました。こちらで手配しておきましょう。ご心配には及びません。何も、上位の冒険者はオルグさん達だけではありませんよ？」

「それではお任せします。じゃあ、そろそろ俺たちは行きます」

「より一層のご活躍を期待してますよ、デイン君、ロゼさん。オルグさん達にも宜しくお伝え下さい」

「わかりました。それでは、これで失礼します」

俺たちはゼノンに一礼し、部屋を出た。

「ロゼ、家具屋に寄って行かないか？」

「何か買うの？」

「ああ、馬車を買おうと思つてな」

人数も増えたので、スレイプニルには全員は騎乗できない。

俺とオルグが走っても良いが、いつまでもそれではな……

「それもそうね」

「家具屋の場所を俺は知らないから、案内を頼む。場所を知ってるか？」

「知ってるわよ。確かギルドが出資している所があったはずだから、そこにしましょう」

「じゃあ、頼む」

そんなことを話しながらギルドを後にして、ギルドの近くにあった家具屋へ行き馬車を買った。

俺が買った馬車は、6人乗りの最高級のもので内装も過剰にならないくらいで豪華だ。

俺は馬車を買った後、インベントリに入れたのだが、驚かれはしたが特に騒ぎにはならなかった。

「じゃあ買い物も済んだし、『ダルグスト』に向かおう」

「ええ、レイシアたちも待ってるしね」

そう言って俺たちは『アーリグリフ』側の門から、『グラントテ  
イア』を後にした。

## 第12話 『ダルグスト』から『嵐竜の迷宮』へ

俺とロゼは『グランドティア』を出発し、『アーリグリフ』の首都『ダルグスト』を目指していた。

そして途中で1泊することになり

「そういえば、アドル様とグランドマスターに貰ったガントレットと魔導書ってどんな物なの？」

食事を済ませ、一息吐いていた時にロゼが尋ねてきた。

「そっぴゃ確認してなかったな」

俺はそう言って、インベントリからガントレットと魔導書を取り出した。

そして、ガントレットから調べる。

「このガントレットの銘は『ティターンズ・ガントレッツ』か。装備するとSTRとVITが200上昇するし、防御力もかなり高い。中々の逸品だな」

「凄いわね……流石はアドル様が使っていた装備ね。」

巨人の名を冠すのに相応しい性能だ。

「これはオルグに装備させるか……あいつにちょうど良い装備だ。次はゼノンに貰った魔導書だな」

ガントレットはオルグに装備させることにし、俺は魔導書のウィンドウを開く。

「これは……？ 『ルシファーズ・インフェルノ』？」

こんな魔術、聞いたことがない。

『VLO』では発見されていなかった魔術なのか……？

『その魔術は、閻属性最上級魔術も中でも最上位の1つですね。こんな魔術の魔導書を持っているとは、流石はグランドマスターと言ったところですね』

「そんなに強力な魔術なのか……」

「そんな魔術、私に使えるのかしら……」

『大丈夫だと思いますよ。ロゼさんの閻属性魔術の熟練度は、かなりのものになっていますし』

「じゃあ、試してみるか？」

『もう外も暗いし、やめた方が良いと思うよ？』

『アイギスの言う通り、やめておいた方が良いでしょう。危ないですしね』

「わかったわ。じゃあ、明日にでも試してみましよう」

「そうだな」

そうして確認を終えた俺たちは各々の部屋へと戻り、眠りに就いた。

翌朝、いつものように訓練を済ませた後『ルシファーズ・インフェルノ』を試すことにした。

「じゃあロゼ、『ルシファーズ・インフェルノ』を使ってみてくれ」  
「わかったわ」



ロゼが家とは反対の方を向き、右手を突き出す。

「我に仇為す者を滅せよ、『ルシファーズ・インフェルノ』」

ロゼが魔術を詠唱すると、その右手から暗黒の炎が放たれる。

放たれた暗黒の炎は俺の用意した的に当たると、それを瞬く間に焼き尽くす。

瞬時に的を焼き尽くした炎は、まだ地面の上で燃え盛っている。

「……おいおい、凄まじい威力だな。一瞬で焼き尽くしたぞ……」

「ええ、これは人には使えないわね……」

『あの的ではわかりませんでした、あの炎は敵を焼き尽くすまで消えません。あの炎に触れた者は、必ず焼き尽くされる運命です』

「最高位の魔術というのも納得だな……」

「味方を巻き込まないか心配だわ……」

『それは大丈夫だよ、ロゼお姉ちゃん。『消えろ』って念じてみて？』

「わかったわ」

ロゼはそう言って炎の方を見る。

すると、あれほど燃え盛っていた暗黒の炎が呆気なく消え去る。

「ッ！？ 炎が消えたわ……」

「ロゼの意思に従ったのか……？」

『その通りです。あの炎は使用者の意思に従い、使用者が消すまで決して消えることはありません』

『これなら味方を巻き込むこともないでしょ？』

「ええ、そうね」

「万が一、味方を巻き込んでしまっても、すぐに消せば大事には至らないだろう。」

「じゃあ魔術の確認も終わったし、朝食を食べて『ダルグスト』に行こう。」

「わかったわ。」

そして俺たちは順番に風呂に入った後朝食を食べ、『ダルグスト』へと出発した。

「ここが『ダルグスト』だ。」

俺たちは途中でさらに1泊し、予定より1日早く『ダルグスト』に到着していた。

「へえ〜。何だか、変わった街ね。」

ロゼが周りを見渡しながらそう言った。

「この街には主に魔族、鬼族、巨人族が住んでいるからな。魔族がいるから魔導具が発達しているし、巨人族の住居はやはり巨大だ。」  
「そうみたいね。色んな大きさの建物があるわ。それに、あれは風車……？」

ロゼが指差す方を見ると、羽根車が風を受けてゆっくりと回転している大きな風車があった。

「そうだ。ここも風が強いからな。その風を利用してあるんだろう。」

「やっぱり、国ごとに特徴があるわね」

「そうだな。じゃあ取り敢えず、ギルドに行ってみるか」

「そうね。約束の日はまだだから、レイシアたちはいないかもしれないけどね」

「その時はギルドで何処にいるか訊いたり、街を探してみるさ」

そんなことを話しながら、俺たちはギルドに向かって歩いていった。

「総本部ほどではないけど、大きいわね……」

「まあ、このギルドには巨人族の冒険者もいるだろうしな」

俺たちの目の前には『ダルグスト』のギルドがあった。

ギルドの建物は総本部に匹敵するほどの大きさだ。

何より目を引くのは、巨人族用なのだろう巨大な扉だ。

「それじゃあ、中に入るか。オルグたちがいると良いんだが……」

そう言いながら俺たちがギルドの中に入ると

「おゝ、デーンじゃねえか!! ずいぶん早かったな!!」

オルグが俺を見つけ、大声でそう言う。

レイシアも一緒にいるようだ。

俺たちはそちらへと歩いていき

「おまえは声がでかいんだよ、オルグ。レイシア、元気だったか？」

「久しぶりね、レイシア。元気にしてた？」

「2人とも、まだ3日しか経ってないのよ？」

「こいつといると苦労しそうだしな」

俺はオルグを見ながら言った。

「おい!!」

「デインの言う通りね。それよりも何処かに場所を移さない？  
誰かさんの所為で、注目されてるし……」

ロゼも、オルグを冷ややかな目で見ながらそう言った。  
確かにオルグが大声で俺たちを呼んだ所為で、多くの冒険者たち  
がこちらを見ている。

「うっ……」

「あはは……そうですね。場所を移しましょうか」

ロゼの視線にオルグが怯むが、レイシアがフォローをするように  
そう言うので

「そうだな。ついでだし、買い物に行くか。食材も買いたいし、2  
人の寝具なども買わないといけないしな」

「取り敢えずギルドから出られるなら、何処でも良いわ」

「それじゃあ、案内しますね」

「何か、すまん……俺の所為で……」

「本当よ」

「まあまあ。その辺にしておいてやれよ、ロゼ」

俺たちはそんなことを話しながらギルドを後にし、レイシアの案  
内で買い物済ませた。

「じゃあ、迷宮に行くぞ」

「次はどの迷宮に行くの？」

「『ゲイルドラゴン』のいる『嵐竜の迷宮』だ。オルグたちは行ったことがあるか？」

「昔に一度だけ行ったな。地下40階までは何とか行けたが、そこから先はドラゴンがウヨウヨしてたんで慌てて逃げ帰った」

「そこまで行けたなら大したものだ」

「私は行ったことありません……その迷宮は砂漠の真ん中にありますから……」

「え！？ 砂漠って前に言ってた……？」

「そうだ。レイシアは行ったことがなくて、当たり前だな」

『ウンディーネ』は砂漠や火山のような気温の高い場所だと、ステータスにマイナス補正を受けるからな。

「まあ馬車があるからレイシアも大丈夫だろう。迷宮に入ってしまったえば、外の気温も関係ないしな」

「馬車を持つてるのか？」

「ああ、ここに来る前に買って来た。スレイプニルには4人も乗れないし、俺はいつまでも迷宮に行くたびに走るの嫌だからな」

「俺だつて嫌だぜ。ただでさえ、俺は足が遅えからな……」

「じゃあ、行きましようか」

「そうですね」

そして、俺たちは『ダルグスト』を後にした。

『ダルグスト』の外で俺は空間を開き、馬車をスレイプニルに繋ぎ外へと出た。

「どうだ、スレイプニル？ 不具合は無いか？」

馬車には『強化』、『軽量化』、『適温維持』の紋章を刻んである。

『うむ。不具合は無いぞ、主殿。』

「それは良かった。『軽量化』も刻んであるから、スレイプニルだけでも充分牽けるだろう」

『そのようだな。まあそんなもの無くとも、我ならこんな馬車くらい牽けるがな』

「それはわかってるが、負担は少ない方が良いだろ？」

『うむ。主殿の言う通りだな』

俺とスレイプニルがそんなことを話していると

「ねえディーン、何でこの馬車浮いてるの……？」

ロゼが不思議そうに訊いてきた。

「ああ、そのことか。この馬車には『浮遊』の紋章も刻んであるんだよ。これならスレイプニルが空を翔けると、同じように馬車も空を飛ぶことができる」

「でもそれじゃあ、目立ってしまうんじゃないですか？」

「その点も抜かりはないさ」

そう言っ て俺は馬車を手で触れ、魔力を操作した。

すると、地面から10cmほど浮かんでいた車輪が地面と触れる。

「こういう風に魔力を操作すると、普通の馬車のようになる。普段はこうしておけば、目立たないだろう？」

「おお、それは凄えな」

「だろ？ それじゃあ、行くか。取り敢えず俺は御者台に乗るが、もう1人乗れるぞ？ 誰か乗るか？」

「あ、私、乗りたい」

「じゃあ、ロゼが乗るか。オルグとレイシアは後ろに乗ってくれ。武器とかは壁に掛けれるようになってるから」

「おう、わかった」

「わかりました」

そう言って、オルグたちが馬車の後ろにある扉から中に入っていく。

「じゃあ、ロゼは御者台に乗ってくれ」

「わかったわ」

俺とロゼは御者台へと乗り

『マスター、『嵐竜の迷宮』はここから北です』

「わかった。じゃあスレイプニル、頼む。最初は速度を出しすぎるなよ？」

『承知した』

そうしてスレイプニルは、いつもよりはゆっくりと駆け出した。しばらくして街から充分離れたと判断した俺は、魔力を操作し馬車を浮かせる。

「スレイプニル、もう【天翔】を使っても良いぞ」

『承知した。では、いくぞ』

スレイプニルはそう応えたと天を翔ける。

「紋章はちゃんと効果を發揮しているようだな」

「ええ、そのようね」

「おお、馬車が空を飛んでるじゃねえか!!」

オルグが御者台に繋がる窓から顔を出し、声を上げる。

「……うるさいよ。耳元で叫ぶな」

「でも、オルグがそう言った気持ちもわかりますよ……本当に空を飛んでる……」

いつの間にか、レイシアのオルグの呼び方が『隊長』から『オルグ』に変わっている。

調査隊が解散したからか……？

「もうすぐ砂漠だ。馬車には『適温維持』の紋章も刻んであるから、中にいればレイシアも大丈夫だと思う」

「わかりました。ありがとうございます」

そうして俺たちは順調に砂漠へと進んでいった。

「アイちゃんが言ってた通り、暑いわね……」

「そうだな……中に入ってるか、ロゼ？」

俺たちは今、砂漠の上空を飛んでいた。

「私が入るには、一度下に降りなきゃいけないでしょう？ それも手間だし、このままで良いわ」

「そうか。もうすぐ『嵐竜の迷宮』に着くはずだ。もうちょっとだけ我慢してくれ」

「わかったわ」

それから10分ほど砂漠の上空を飛んでいると、『嵐竜の迷宮』



の入り口が見えてきた。

「あそこだ。スレイプニル、近くに降りてくれ」

『承知した』

スレイプニルが朽ちた遺跡のような場所へと降りる。

その遺跡は砂漠の中にポツンとあり、地下へと続く階段が見えて  
いる。

「着いたのか？」

オルグが馬車の扉を開きながらそう言った。

「ああ、着いたぞ。降りてくれ」

「おう、わかった」

「あ、暑い……」

オルグとレイシアが各々武具を持って降りてくる。

レイシアは早くも暑さにやられている。

「レイシアもキツそうだし、さっさと迷宮に入るか」

「そうね」

「じゃあ、スレイプニルはホームで待機していてくれ」

『承知した。ここでは、我はあまり力になれないから……』

「気にするな。また別の迷宮ではおまえの力を貸してもらおうよ」

そう言っつて俺は馬車をインベントリに入れ、空間を開く。

『武運を祈っているぞ、主殿』

「ああ、任せておけ」

スレイプニルはそう言って空間へと入っていった。

「じゃあ、行くぞ」

「ええ」

「おう」

「早く入りたいです……」

そして、俺たちは『嵐竜の迷宮』へと続く階段を下りていった……

『嵐竜の迷宮』地下1階

「中は涼しいんですね……」

迷宮の中へ入ると、レイシアがそう言った。

『嵐竜の迷宮』は『炎竜の迷宮』と同じ、石造りの一般的な迷宮だ。

「そうだな。まあ、地下は気温が変化し難いって言うしな」

大抵の『迷宮型』<sup>ラビリンス</sup>の迷宮の気温は、不快に感じないくらいに保たれている。

もちろん例外は存在するが……

『それもあるかも知れませんが、アリュウゼ様のお力ですよ』

「やっぱりそうなのか？」

『はい』

「アリュージェ様はやっぱり、凄えんだな……」

そんなことを話しながら進んでいると

「さっそくお出ました」

そう言いながら俺は剣を鞘から抜いた。

俺たちの方に『ザグファング』の群れが向かって来ていた。

「皆、殺るぞ！！ 陣形はいつも通りだ。ロゼ、レイシア、道幅はそれなりには広いが、魔術を使う時は俺たちを巻き込まないでくれよっ。」

「そんなことしないわよ！！」

「しませんよ！！」

「冗談だよ。いくぞ、オルグ！！」

「おう！！」

そう言っつて、俺とオルグは『ザグファング』の群れへと駆けた。

AGIの高い俺の方が先行し、先頭の『ザグファング』を逆袈裟に斬り上げる。

そのままさらに剣を振り下ろし、別の1匹を両断する。

そうするとオルグも追いついてきて、槍斧ハルバートを薙いで2匹纏めて切り裂く。

俺は飛びかかってきた『ザグファング』を肘で弾き飛ばし、剣で突き刺す。

その時、俺の目の前をロゼが放ったのだらう、黒い刃が切り裂いていく。

「おい、かなり際どかったぞ……」

そんなことを呟きながら右から突っ込んできた奴を蹴り上げ、頭を掴んでそのまま石畳へと叩きつける。

その衝撃に耐えられなかったのか、そいつの頭が粉碎される。

レイシアが放った『アクアレーザー』が3匹を貫いていき、オルグが気を纏った左脚で最後の1匹を蹴り砕く。

「おい、ロゼ。さっきの魔術、かなり危なかったぞ……………」

「ごめんね。でも、当たらなかったでしょう?」

「まあそうだが……………」

このままだと闘い難いな……………」

「よし、オルグとロゼの位置を変えよう。ロゼが前衛で、オルグが俺とロゼが討ち漏らした奴らを相手しながら、レイシアの護衛だ。

良いか?」

「おう、良いぜ」

「良いけど、何で?」

「この道幅では2人同時に魔術を使うのは難しいだろう? さっきも、俺に当たりそうだったしな……………」

「そうね。私も、ディーンやオルグを巻き込みたくないしね」

「じゃあ、そういうことで」

そして、俺たちは『精霊石』を拾って攻略を進めていった。

## 『嵐竜の迷宮』地下5階

「なあ、ラグ。やけに魔獣との遭遇率が高くないか…………?」

この階に来るまでに、すでに20回以上は戦闘をしている。

「それに魔獣が手強くなっている気がするわ……」

ロゼの言うように、俺も魔獣の強さにも疑問を持っていた。

『そのことを話していませんでしたね。この迷宮もそうですが、主要な迷宮の魔獣はマスターの強さに応じて強くなっていきます。当然、遭遇率も高くなります』

「は？ 何でそんなことになってんだ？」

『そうしないと、マスターの試練にならないでしょう？』

「ということは、今の状況はデーソンの所為ってことよね……」

「そうなりますね……」

ロゼとレイシアが責めるような目で俺を見る。

「おい、おまえら！！ 喋ってねえで手伝えよ！！」

オルグが、尾に風を纏う孔雀『ウィンドテイル』に『ザグファング』の攻撃を纏めて金属盾で受け止めながら叫ぶ。

俺たちは今、30匹ほどの魔獣の群れを相手に闘っていた。

「わかったよ！！ ラグ、【大鎌形態】だ」

俺は剣を大鎌デスサイスに変化させながら、オルグの頭上の天井に向かって跳ぶ。

すぐさま天井を蹴り、群れのと真ん中に着地する。

「はあああ！！」

着地と同時に大鎌を薙ぎ、周囲の魔獣を纏めて斬り裂く。  
ロゼのソードウィップが縦横無尽に舞い、『ザグフアング』を数匹纏めて微塵に斬り裂いていく。

レイシアの放った『コンプレッション・ウォーターボール』の圧縮された水球が、容易く魔獣を貫通していく。

「おらああ!!」

オルグが【ハルバート槍斧】のアーツスキル、『ドレイディッド・ラディアス』の強力な薙ぎ払いで魔獣が切り裂かれ、砕けていく。

「このまま残りの奴らも殲滅するぞ!!」

俺は全員に檄を飛ばしながら、魔獣を殲滅していった……  
そして、それから10分ほど戦闘し魔獣を殲滅し終わった。

「疲れたぜ……」

「そうだな。レイシア、無事か？」

「少し疲れましたが、大丈夫ですよ」

「私には聞いてくれない訳……?」

「このくらいで疲れるような鍛え方は、俺がしてないはずだが……  
? もし疲れたのなら、明日から特訓のメニューを増やそうか?」

「確かにそれほど疲れてはいないけど……私だって……」

「ん? 最後の方が良く聞き取れなかったか?」

「何でもないわよ」

「おまえらが疲れてないのは、途中で休んでいたからだろうか……」  
「アレくらいで音を上げるなんて、最高位の冒険者の名が泣くぞ?」  
「ぐう……」

そんなことを話しながら『精霊石』を拾い、攻略を再開した。

『嵐竜の迷宮』地下11階

「ふう、大分進んだな。やはり高レベル冒険者が揃うと、攻略も捗るな」

今日1日で攻略もずいぶん進んでいた。

「そうね。レイシア、疲れていない？」

「大丈夫よ。ディーン君の言う通り、SPとVITを上げておいて良かったわ」

「それでどうするんだ？ そろそろ日が暮れるが、まだ進むのか？」

「微妙なところだな……」

オルグが言うようにもう陽が沈もうとしているが、まだ攻略はできるだろう。

「まだ攻略できるんじゃない？」

「そうですね。幸いセーフルームじゃなくても、ディーン君のホームでいつでも休めますしね」

「そうだな、じゃあ進もう。オルグもそれで良いか？」

「俺は全然構わないぜ」

「それじゃあ、行くか」

そう言って、俺たちは攻略を続けることにした。

『嵐竜の迷宮』地下13階

「またこいつか!！」

俺は『ドウルガ』を蹴り碎きながら叫んだ。

「本当に、こいつは何処にでもいるな……」

俺は剣で『ザグファング』を斬り裂き、足に噛み付こうとしていた『ガライゴン』を踏み砕く。

すでに『ドウルガ』が魔獣を呼び寄せ、15匹ほどの群れになっている。

「うおりあ!！」

「セイツ!！」

「やあ!！」

オルグがレイシアに近づこうとした『ウインドテイル』と『ザグファング』数匹を纏めて薙ぎ払い、ロゼが気を纏った蹴りで『ドウルガ』の頭を蹴り砕く。

レイシアも槍を巧みに操り、『ウインドテイル』を刺し貫く。

「ラグ、【二刀形態】だ」

『了解しました』

剣を二刀に変えて逆手に持ち、でかい二足歩行の梟『トレーネオウル』が振り下ろした右腕を左の刀で斬り飛ばし、右の刀で首を刎



ねる。

即座に【二刀流】のアーツスキル『流舞滅双刃』を発動、周囲の魔獣を微塵に斬り裂く。

ロゼたちも自分の周囲の魔獣を殲滅し、戦闘が終了した。

「こいつは、何で鼻なのに腕があるんだろうな…?」

俺は消えていく『トレーネオウル』を見ながら呟いた。

『さあ？ 魔獣の生態は、未だ良くわかっていませんからね』

『魔獣は元はただの動物だったけど、マナを取り込んで独自の進化をした奴がほとんどだしね』

俺はそんなことをラグたちと話しながら『精霊石』を拾っていく。

「終わったわね、ディーン」

ロゼが『精霊石』を拾いながら話しかけてきた。

オルグやレイシアも同じように『精霊石』を拾っている。

「そうだな。だが、ラグ。この階にはまだいないはずの魔獣がいたが、それも俺の所為か……?」

『ええ、そうですね』

「そうか……」

何か罪悪感を感じるな……

「そんなに気にしなくても良いんじゃない？ 私はもう気にしない

ことにしたわ……」

「それもそうだな」

「おい、こっちは『精霊石』を拾い終わったぞ」

俺とロゼがそんなことを話していると、オルグがそうやってきた。

「ああ、こっちも終わったぞ」

「今日はこれ以上進むのは厳しいわね」

「そうですね。私も少し疲れました……」

「今日はここまでにするか」

ちょうど俺たちが今いるのは、ある程度の大きさの部屋だ。

ここなら空間から出る時も特に問題はないだろう。

俺は『解錠<sup>オープン</sup>』を使い、空間を開く。

「じゃあ、今日はもう休むか」

「そうね」

「わかりました」

「おう」

そう言って、俺たちは空間の裂け目を潜った。

そして夕食を食べ、順番に風呂へと入る。

最後に風呂に入った俺が、水を飲みながらリビングへと戻っているところ

「……どうしたんだ、ロゼは？」

リビングへと戻っていた俺の視界に、様子のおかしいロゼが入ってきた。

『どうしたんでしょうね？ 何かソワソワしているようですが？』

『ソワソワっていうよりモジモジ？』

「そんな感じだな」

そんなことを話しながらリビングに歩いていく。  
そして

「どうしたんだ、ロゼ？」

俺は、リビングに置いてあるソファアの端っこに座っていたロゼに声をかけた。

「……………」

だが、ロゼは何も答えない。

「おい、ロゼ……………」

『マスター、ロゼお姉ちゃんの様子がおかしい原因はアレだと思うよ』

『そのようですね。マスター、右の方を見て下さい』  
「ん？」

俺はラグに言われたように右を向く。  
すると

「何だ、ありゃ……………」

俺は目が点になり、開いた口が塞がらなかつた……………  
そこには、イチャつくオルグとレイシアがいた……………

「何であんなことになってんだ……………」

訳がわからない……

「……ああ、デーン。お風呂から出てきたんだ……」

どうやら、今まで俺がいることに気がつかなかったようだ。

「それより何なんだ、あれは……？」

「どうも『アロウ山脈』から帰った後から付き合ってるらしいわ、あの2人……」

「何だと……また何であの2人が……」

「『エンペラー・ヴァルチャー』との戦闘のことは話したでしょう？ それでレイシアが惚れちゃったみたいね……」

「ああ、あのオルグがレイシアを庇った時か……」

「ええ。でも、こつも目の前でイチャつかれるとね……」

「ああ、そうだな……」

確かに仲が良いのは良いことだが、目の前でやられると少しイラつくな……

「おい、2人とも」

俺は2人に声をかけるが、完全に2人だけの世界に入っているオルグとレイシアには聞こえていない。

「おい……」

「な、何だ？ どうしたんだ、デーン？ そんな大声を出して……」

「イチャつくのは良いが、自分の部屋でやれ」

「え、どうしてですか？」

「良いから……！ イチャつくなら、あなたの部屋かオルグの部屋で……」

やりなさい!!」

「う……わかったわ……」

「おう……」

ロゼの鋭い眼光で睨まれた2人は素直に部屋へと歩いていく。

「ハア……」

「落ち着いたか、ロゼ？」

「ええ」

「それにしても、あの2人があんな関係だったとはな……」

「まあでも、中々お似合いなんじゃないかしら、あの2人」

「そうかもな」

『マスター、そういえばアドルさんのガントレットを、オルグさんにまだ渡していませんよ?』

「そういえばそうだったな……まあ明日で良いか……」

今あいつの所に行っても、レイシアとイチヤついてるだろうしな

……

「じゃあ、俺たちも寝るか……」

「明日も攻略があるしね……」

何かドツと疲れた……

さっさと寝よう……

俺たちは今日も軽く訓練を済まし、迷宮の攻略を開始した。

「そうだ、オルグ。このガントレットをやるよ。『桜花』のギ

ルドマスター、アドルさんが昔使っていた物で、この前の魔物討伐の報酬として貰った物だ」

「そんな物、俺が貰っても良いのか？」

「ああ、おまえにピッタリの装備だしな。色も、おまえの鎧の色に合わせてあるから」

「じゃあ、遠慮なく使わせてもらうぜ」

そうして、俺たちは迷宮を進んでいった。

### 『嵐竜の迷宮』地下20階

「相変わらず、魔獣との遭遇率が高いな」

「まあ、それだけレベルが早く上がって良いわよ」

そんなことをロゼと話していると

「来たぜ、魔獣だ！！」

オルグが槍斧ハルバートを構えながら叫んだ。

前方を確認すると、『ザグフアング』、『ウィンドテイル』、幽霊型の魔獣『ザグ・ジン』に、『ゴブリン・マジシャン』の群れが迫っていた。

「殲滅するぞ、皆。行くぞ、ロゼ」

「ええ」

俺は【縮地無疆】で、ロゼは【縮地】で群れへと跳ぶ。

間合いに入った瞬間に、俺は【思考分割】で待機状態にしておいた【闘気術】で全身に気を纏う。

近くの『ザグフアング』を剣で斬り裂き、気を纏った右脚の回し蹴りで『ウインドテイル』の首を押し折る。

ロゼも【闘気術】を使い、左の裏拳で『ゴブリン・マジシャン』の頭を粉碎する。

さらに剣で『ザグ・ジン』を刺し貫き、そのまま鞭状に変化させて『ザグ・ジン』を引き裂きながら『ザグフアング』2匹を斬り裂く。

俺たち2人の脇を抜けていった『ザグフアング』をオルグが槍斧ハルバートで薙ぎ払い、レイシアの放った圧縮された水弾が『ウインドテイル』の胴体を抉る。

俺は『ザグフアング』を2匹纏めて袈裟切りに斬り裂き、返す刃で『ザグ・ジン』を斬る。

ロゼが【ソードウィップ】のアーツスキル『エンブレスウェイブ』で、残った魔獣全てを貫く。

そうして、戦闘は終了した。

「流石にこのメンツだと、戦闘に時間がかからないな」

「ええ、流石だわ」

「ロゼもずいぶん強くなったよ。【ソードウィップ】や【闘気術】も使いこなせてるしな」

ロゼはこの短期間で【格闘術】をマスターしただけではなく、【闘気術】も使いこなせている。

「デーンとの特訓のおかげよ。それにこれまでにかなりの回数、戦闘をこなしてきたしね」

「そうだな。この調子だと、今日中に地下30階まで行けるな」

「おう、そうだな。まだ昼過ぎだしな」

「ええ、頑張りましょう」

『精霊石』を拾いながらそんな話をし、俺たちは地下30階を目指し進んでいった。

### 『嵐竜の迷宮』地下25階

「『ウインドドラゴン』だ!! 気をつける!!」

地下25階を攻略していると、突然『ウインドドラゴン』と遭遇した。

「くそ!! まだ出て来ないと思って、油断した!! 皆、気を付ける!!」

まさか、こいつまで出現する階が変わっているとは……

「オルグはレイシアを守りつつ雑魚の相手を頼むぞ!! レイシアは魔術で雑魚の殲滅を、ロゼは俺と『ウインドドラゴン』を殺るぞ!!」

「任せろ!!」

「了解です!!」

「行きましよう!!」

そう言つと俺は『ウインドドラゴン』へと駆け、途中で【疾風迅雷】を起動する。

他の3人とは離れているので、発生する衝撃波には巻き込まない



はずだ。

ロゼも【加速】を起動し、俺とは反対の方向から挟み込むように『ウインドドラゴン』へと駆ける。

『GYA OOO!』

『ウインドドラゴン』が吼え、『ブラストハリケーン』を5つ同時に放つ。

俺とロゼは躲し、レイシアへと向かっていた風の渦はオルグが気を纏わせた金属盾で防いでいた。

「ラグ、【刀術形態】」

俺は剣を刀へと変化させ、『ウインドドラゴン』の左の翼を付け根から斬り飛ばす。

同時にロゼがソードウィップを『ウインドドラゴン』の首に巻き付け、斬り裂くが切断するまでには至らない。

レイシアの放った水属性最上級魔術『スプラッシュ・ストリーム』の集束された強烈な水流が、『ウインドメイジ・ゴブリン』4体を壁際まで押し流し水圧で押し潰す。

オルグも飛びかかってきた『ザグジーガ』を薙ぎ払う。

それを視界の端で捉えつつ、俺は背後から襲いかかってきた『ザグジーガ』を振り向かずに貫き、【刀】のアーツスキル『絶破弧月閃』で『ウインドドラゴン』の右後ろ足を斬り飛ばす。

それと同時に、ロゼが【片手剣】のアーツスキル『トライクルセイド』の三連撃で『ウインドドラゴン』の右の翼と右前足を斬り飛ばし、胴体を斬り裂く。

「疾ッ!」

俺は『ウインドドラゴン』の首元に跳び、その首を叩き斬る。

「後は雑魚だけだ!! 殲滅するぞ!!」

『ウインドドラゴン』を倒した俺たちは、残った魔獣たちを殲滅していった……

「まさか、この階から『ウインドドラゴン』が出て来るとはな……皆、無事か?」

「私は大丈夫よ」

「俺も平気だぜ」

「私もオルグが守ってくれましたから」

全員特に怪我もなく、無事なようだ。

「それにしても驚いたぜ……いきなり『ウインドドラゴン』と出くわすとはな」

「そうですね……でも、ディーン君もロゼもあっさりと倒してましたね」

「前に行った迷宮で、『ファイアドラゴン』と闘ったこともあるしね」

「この先も『ウインドドラゴン』に気をつけて進もう」

「ええ、わかったわ」

俺たちは『精霊石』と『精霊結晶』、『ウインドドラゴンの角』を拾い、先に進んでいった……

「はあああ……！」

俺は斬馬剣<sup>グレートソード</sup>を渾身の力で振り下ろし、「ザグジーガ」と「ウインドドラゴン」の胴体を叩き斬る。

流石に「ウインドドラゴン」は両断はできなかったが、ロゼの「デモンズ・スピア」が頭を吹き飛ばす。

ロゼが漆黒の槍を投げた隙について襲いかかった「ザグジーガ」を、俺は【縮地無疆】で跳んだままの勢いで飛び蹴りを喰らわせて蹴り砕く。

「ありがとう、デイン」

「気にするな。まだ魔獣は残ってるから、油断するなよ」

俺はそう言って、もう1体の「ウインドドラゴン」に向かって跳ぶ。

レイシアが「コンプレッション・ウォーターボール」を放ち、「ゴ布林・マジシャン」の上位種「ゴ布林・ネメシス」と「ウインドドラゴン」の翼を撃ち貫く。

オルグもレイシアを守りつつ、「ガラディウス」を刺し貫く。

俺は「ウインドドラゴン」の尾の一撃を躲し、その首元へと【斬馬剣<sup>イストソード</sup>】の「アーツスキル」「ハイウンドラプター」を叩き込む。

紅い閃光を纏った刃が、途中で飛びかかってきた「ザグジーガ」を両断しながら上段から叩き込まれ、その首を刎ねる。

首を刎ね飛ばされた「ウインドドラゴン」が消えて去るのを見ながら、俺は右手で魔導銃を抜き「ザグ・ジン」を撃ち貫く。

ロゼがソードウィップで「ゴ布林・ネメシス」と「ウインドメイジ・ゴ布林」を斬り裂き、レイシアとオルグがそれぞれ槍と槍<sup>ハルバト</sup>で「ザグジーガ」を貫き、魔獣は全滅した。

「よし、終わったな」

「そうね。『ウインドドラゴン』が2体いたけど、何とかなったわね」

「そうですね。でも……」

「このままだと、レイシアの防御に不安があるな」

「おう、今のところ俺が守ってやれてるが……」

レイシアの魔導盾マジックシールドは良い物だが、流石に高難易度の迷宮を探索するには少々頼りない性能だ。

「ロゼの『クイーン・オブ・ザ・ナイト』ほどでなくても良いが、もう少し性能の良い物が欲しいところだな」

「迷宮で入手できれば良いけど、今のところトレジャーボックスには大した物は入ってなかったわね」

「そうだな。多少の『ティル』に、悪い物ではなかったがいくつかの装備品だったからな」

「まあこれから先の階や、別の迷宮で見つかれば良いさ。それまではオルグが守ってやれ。負傷してもレイシアが治してくれるさ」

「はい。任せて下さい」

そんなことを話しながら素材を拾い、先へと進んでいった……

そしてその日は地下33階まで進み、休むことにした。

### 『嵐竜の迷宮』地下37階

「今日中に最下層に行けるか……?」

『うん、どうでしょうね。無理をすれば、行けないこともないとは思いますが……』

『あまりお勧めはできないかなあ』

俺たちは今日も朝から攻略を進めている。

そして、俺はラグたちと今後の予定を話していた。

「そうか。じゃあ、もう1泊してから最下層に行くか？」

『その方が良いでしょう』

「わかった」

そう今後の予定を決め、ロゼたちと共に迷宮を進んでいった。

### 『嵐竜の迷宮』地下40階

「ロゼ、そっちの『ドウルガン』は任せたぞ!!」

俺は『トレーネオウル』の亜種、『ソーサラーオウル』を大鎌デスサイスで薙ぎ払いながら叫んだ。

「わかった、任せて!!」

ロゼも、『トレーネオウル』の上位種『ハーミットオウル』と『ゴブリン・ガード』をソードウィップで斬り裂きながら応える。

5匹いる『ドウルガン』の内1匹を俺が左の魔導銃で撃ち抜き、さらにロゼが『ダークニードル』で1匹を貫くと

「範囲魔術を使います！！ 2人とも下がって！！」

レイシアが声をかけてきたので、俺とロゼは即座に後ろへと跳ぶ。その瞬間

「『メイルシュトROOM』！！」

レイシアが水属性最上級殲滅魔術『メイルシュトROOM』を放ち、激流の渦が魔獣の群れを襲う。

魔獣たちはその激しい水流に耐え切れず、次々と砕けていく。残っていた3匹の『ドウルガン』も纏めて殲滅されていた。

「残りは少しだ！！ 皆、殺るぞ！！」

レイシアの魔術に巻き込まれなかった魔獣や、耐え切った『ウインドドラゴン』がまだ残っている。

「……了解！！」

俺は大鎌デスサイスを構えながら『ウインドドラゴン』へと跳ぶ。

途中にいた『ザグジーガ』はロゼのソードウィップが斬り裂いていく。

オルグが、『ウインドテイル』の上位種『ストームテイル』ハルを槍バートで切り裂く。

レイシアは高圧の水流を放ち、『ゴブリン・ネメシス』と『ザグジーガ』デスサイスを貫く。

俺は大鎌を薙ぎ、『ウインドドラゴン』の左前足を斬り飛ばす。それと同時に、ソードウィップを剣に戻したロゼが【縮地】で『ウインドドラゴン』の首元に跳び、気を纏った剣で首を刎ねる。

「ふう、やはり『ドウルガン』がいると面倒くさいな……」

なるべく早めに倒したが、5匹もいたので魔獣を呼ばれてしまった。

「『ウインドドラゴン』を呼ばれなかったのは、助かったわね」

「ホントだぜ……」

「まあ、最初から1体いましたけどね」

「それは仕方ないさ」

そんなことを話しながら素材を拾い、最下層を目指し進んでいった。

#### 『嵐竜の迷宮』地下48階

「何とか最下層の手前までは来れたな」

俺たちはその日の攻略を地下48階で打ち切り、ホームで休むことにした。

今は食事や風呂も済ませ、リビングで明日のことについて全員で話し合っていた。

「おまえらと一緒にじゃなかったら、とてもじゃないがこんな所までは来れなかったぜ」

「そうですね……ドラゴンなんて、今まで見たこともありませんでしたし……」

「あなた達だって、さっきは普通に闘ってたじゃない」

「そうだな。2人のレベルも大分上がったしな」

「あんだけ闘えば、そりゃレベルも上がるぜ」

「本当ですよ……」

「まあ、強くなるのは良いことだろ？　そういえばラグ、『ゲイルドラゴン』とは俺1人で闘うのか？」

『精霊王の試練』では俺1人だったが……

『どつでしようね……恐らくはマスター1人で闘うことになると思いますが、ロゼさん達にも何かしらの試練があると思われませう』

『そうだねえ。特にロゼお姉ちゃんには、絶対に何かあると思うよっ』

「え？　何で私……？」

『ロゼさんはセファイド様に気に入られてしまいましたしね。他の精霊王の方々からも、何かしらの試練を受けるでしょう』

「私にもディーンみたいに試練を受けろって言うの……？　絶対に死ぬわよ……」

ロゼの顔が青ざめる。

『いえ、マスターのように1人で精霊王と闘うような試練ではないと思いますよ。大方、マスターを除く皆さんでの戦闘になるでしょう』

「それなら、ロゼたちでも何とかなるな」

「そう？」

「ああ。俺を抜いても前衛、中衛、後衛と揃ってるし、レイシアは回復魔術も使える。大抵の相手なら大丈夫だろう」

「そういうことなら、明日は俺たちも気合を入れねえとな」

「はい、頑張りましょう」

「じゃあ、戦闘になった時には頼むぞ」



明日のことも決まったので、休むことにする。

「それじゃあ、明日はいよいよ最下層だ。それに備えてもう休もう」  
「ええ、わかったわ」

俺たちは各々の部屋へと戻り　オルグとレイシアは最近同じ部屋で寝ているが　明日に備え、早めに寝ることにした……

### 『嵐竜の迷宮』地下50階

「この奥に『ゲイルドラゴン』がいるはずだ」

俺たちの目の前には、『炎竜の迷宮』にあつたような装飾がされた巨大な扉がある。

「『ゲイルドラゴン』とは俺だけが闘うはずだが、ロゼたちも気を抜かないでくれよ？」

「わかつてるわ」

「おう、任せとけ」

「行きましよう」

ロゼたちが応えるのを聞き、俺は扉を開いた……

『来ましたね、『来訪者』よ』

部屋の中央には翡翠色の鱗を持つ巨大なドラゴンがいた。

間違いなくあれが『ゲイルドラゴン』だろう。

『フレイドドラゴン』に比べると少し小さいが、その代わりに翼はかなり大きい。

まさか空とか飛ばないよな……

「貴方が『ゲイルドラゴン』ですか？」

『そうです。私が嵐竜の王』『ゲイルドラゴン』です』

『フレイドドラゴン』よりも若く感じるが知的な男性の声だ。

「それでは試練についてお尋ねしたいのですが、闘うのは俺だけですか？」

『いえ、そちらの方々と一緒に構いませんよ。特にそちらの『ダークエルフ』のお嬢さんは、『アルファード』様より力を試すよう仰せつかっていますので』

アルファードって誰だ？

おおよその予想はできるが……

『マスター、アルファード様は『風の精霊王』のですよ』

「やはりそうか……ロゼも、つくづく厄介な奴らに気に入られたものだな」

「まあ、光栄なことではあるんでしょうけどね……」

ロゼは複雑な心境を表すように、何とも言えない顔をしている。

『それでは、試練を開始しても宜しいですか？』

「わかりました。皆、準備は良いか？」

「ええ」

「おう」

「構いません」

俺の言葉で3人が各々武器を構える。  
俺も鞘から剣を抜きながら

「いつでもどつぞ」

『それでは』

『ゲイルドラゴン』はそう言つと

『GYA O O O O!』

『ゲイルドラゴン』が吼えると周囲に【召喚】の紋章が3つ現れ、  
その全てから『ウインドドラゴン』が出現した。

「な!?! 【召喚】が使えるのか!?!」

『フレイムドラゴン』もスキルを使っていたが、まさか【召喚】  
を使つてくるとは……

『これで数も同じです。では、いきますよ!?!』  
「来るぞ!?! 気をつける!?!」

俺は注意を呼びかけながら、『ゲイルドラゴン』へと【縮地无疆】  
で石畳を砕きながら跳ぶ。

「『ルシファーズ・インフェルノ』!?!」

ロゼが『ウインドドラゴン』の1体に向け、暗黒の炎を放つ。  
暗黒の炎はそいつに纏わりつき、その身を焼き尽くしていく。

『GYA OO……』

『ウインドドラゴン』を瞬く間に焼き尽くした炎をロゼが消し去る。

『なるほど……それほどの魔術を扱えるとは、流石はセファイド様が気に入るだけありますね』

『ゲイルドラゴン』が俺の一撃を飛び上がって躲しながら呟く。

「くそ!! やっぱり飛ぶのかよ!!」

『ゲイルドラゴン』はその巨大な翼で羽ばたき、滞空する。

恐らくは風属性魔術も使用しているのだろう、凄まじい風が巻き起こる。

「グルウオオアア!!」

オルグが【狂化】のE×スキル【完全狂化】を使い、吼える。

【完全狂化】でステータスを強化したオルグが、ハルバート槍斧を構え『ウインドドラゴン』へと突進する。

レイシアも【加速】を起動し、オルグの後を追うように駆ける。

「ラグ、【魔法剣】起動。『シルヴァンス』」

『了解しました』

すると、剣身がダイヤの様な輝きを放つ物質でコーティングされる。

『シルヴァンス』は地属性の魔法剣なので、こいつらには効果的

なはずだ。

「ゴオアア！！！」

オルグが吼えながら槍斧ハルバートを薙ぎ払い、『ウインドドラゴン』の左後ろ足を叩き斬る。

レイシアが『アクアレーザー』を鞭状に操り、『ウインドドラゴン』の首に巻き付け動きを止める。

そこに、ロゼが投げた漆黒の槍が頭部に突き刺さり爆散させる。

俺はその様子を視界に納めつつ、『ゲイルドラゴン』に向かって跳ぼつとするが

「マズッ！！！」

俺は跳ぶ方向を変更、ロゼたちの方へと跳ぶ。  
そして

「全員、俺の後ろへ！！ アイギス、頼む！！」  
『了解！！』

魔力を込めるまでもなく、アイギスが俺の意思を汲み魔力を吸収する。

全員が俺の後ろへと来た瞬間、巨大な障壁が展開される。

刹那

『GOAAAAA！！』

『ゲイルドラゴン』が【思考分割】を使って魔術とブレスを、残った『ウインドドラゴン』が魔術を放つ。

『プラスチックハリケーン』を巨大化したような『ゲイルドラゴン』

のプレスに、放たれた風の渦や風の刃が障壁に衝突する。

「くううう!!」

俺は吹き飛ばされそうな衝撃に耐え、その場で踏ん張る。

俺が飛ばされれば、障壁が解除される。

そうすれば、この攻撃を3人は耐え切れない。

永遠とも思える一瞬が終わり、攻撃の衝撃が弱まっていく。

「全員無事か!？」

俺は障壁を展開したまま叫ぶ。

「無事よ!! デイーンは!？」

「俺も無事だ!! 残った『ウインドドラゴン』は任せるぞ!!」

俺はそう叫んで障壁を解除し、『ゲイルドラゴン』へと駆ける。

相手は空に浮かんでいるので、このままでは俺の攻撃は届かない。

俺は無属性魔術で階段状に力場を発生させ、それを足場に駆け上がる。

【思考分割】で待機状態にしておいた【疾風迅雷】を起動、衝撃波を発生させながら一気に距離を詰める。

「はああ!!」

俺は足場を蹴り、『ゲイルドラゴン』へと跳び、翼を狙い剣を一閃する。

その一撃は躲されるがさらに空中に足場を設置、それを蹴って俺は再び跳ぶ。

俺はまさに疾風迅雷となり、縦横無尽に跳び回って『ゲイルドラ

ゴン』を斬り裂いていく。

その嵐のような連撃の中の一撃が、遂に翼を斬り裂く。

『GYA OO!?!』

バランスを崩した『ゲイルドラゴン』が墜落していく。

俺は足場が碎けるほどの勢いで地面へと跳び、まるで落雷のようにその後を追う。

流石と言ったところか、『ゲイルドラゴン』は墜落中にも関わらず、俺に向かって嵐を凝縮したような風弾状のブレスをいくつも放つ。

「ぐっ!!」

いくつかは躲したが、1発被弾してしまう。

『ゲイルドラゴン』は体勢の崩れた俺に向かって、すかさず尾の一撃を放つ。

「ガハッ!!」

ガードはしたが、凄まじい勢いで壁へと吹き飛ばされる。

「くっ、まだまだ!!」

俺は体を捻り足から壁に着地し、即座に『ゲイルドラゴン』へと跳ぶ。

空気の壁すら引き千切り、剣で石畳を削りながら『ゲイルドラゴン』に迫る。

「おらぁぁ!!」

俺はブーツで石畳を削りつつブレーキをかけ、そのまま石畳を斬り裂きながら剣を逆袈裟に斬り上げる。

すると剣の軌道をなぞるように、ダイヤのような物質で造られた無数の三角錐の杭が『ゲイルドラゴン』へと襲いかかる。

無数の杭が『ゲイルドラゴン』の翼、胴体、そして首を貫いていく。

【魔法剣・シルヴァンス】のアーツスキル『ジオ・ドライブ』だ。

「ハア、ハア……これでどうだ……」

『ウインドドラゴン』がいないということは、すでにロゼたちが倒したのだろう。

『ゲイルドラゴン』は無数の杭に貫かれ、石畳に倒れ伏している。

『お見事です……』『証』をお渡ししましょう。そちらの皆さんも流石でしたよ……』

『ゲイルドラゴン』はそう言うと、緑の光の粒子となり消えていく。

後には巨大な『精霊結晶』と『証』の翡翠の様な宝玉、そして『角』が残されていた。

「大丈夫、デーン？」

ロゼが声をかけてくる。

「ああ、大したことはないさ」

風弾が当たった肩が裂けているが、傷はそれほど深くはない。



「オルグたちは無事か？」

「ええ、オルグもレイシアも軽傷よ。今、レイシアが治療してるわ」

「ロゼは？」

「私も翼の一撃を喰らっちゃったけど、軽傷よ」

「じゃあ 『キュアライト』」

俺は、自分とロゼに回復魔術を使う。

「ありがと。じゃあ、『証』と素材を拾って戻りましょう」

「そうだな。オルグたちの治療も済んだようだし」

「キツイ闘いだっただぜ……」

「ブレスを吐かれた時は死ぬかと思いました……実際、デイーン君  
が守ってくれなきゃそうなっただかも……」

「これからこんな闘いばかりだぞ？」

「じゃあ、もつと強くならないと……」

「はい。次は足手纏いにはなりません……」

「今回もそんなことはなかったわよ？」

「ロゼの言う通りだ。だがそれほどやる気があるなら、明日から訓  
練のメニューを増やすか……」

「……えっ!?!?」「」

俺たちはそんなことを話しながら、『証』などを拾い、『<sup>エスケープ</sup>脱出』で  
『嵐竜の迷宮』を後にした……

### 第13話 『風皇狼の迷宮』

「さてと、次は『風皇狼の迷宮』だな」

俺たちは『嵐竜の迷宮』から抜け出し、入り口の遺跡に戻ってきた。

「そうすると、次は『メオジラ渓谷』ということか……」  
「知っているのか、オルグ？」

オルグが言った『メオジラ渓谷』というのは、『風皇狼の迷宮』がある場所だ。

「ああ。『ダルグスト』の近くにあるし、何より毎年、新米冒険者の被害が絶えねえからな……」

「一応、警告はされているのですが、比較的街に近い迷宮ということで不用意に潜る人が多いですからね……」

「そうか……確かにあの迷宮は、新米冒険者が攻略できる迷宮じゃないからな」

「ギルドの方で何か対策はしていないの？」

元ギルド職員のロゼは、『ダルグスト』のギルドの対応に少し憤っているようだ。

「確か聞いた話だと、今年から入り口に冒険者を派遣して、高ランク冒険者以外の立ち入りを制限しているらしいぞ」

「少し対応が遅い気もするけど、それならこれ以上の被害は増えないわね」

「じゃあ、そろそろ『風皇狼の迷宮』に行くか。レイシアも、あま

りここに長居するのはキツイだろ？」

「そうですね……暑い場所は嫌いです……」

レイシアもそう言うのでさっそくスレイプニルを呼び、馬車を繋いで乗り込む。

来た時と同じく俺とロゼが御者台で、オルグとレイシアは馬車の中だ。

「それじゃあ、一度『ダルグスト』に戻ってから『風皇狼の迷宮』に行くぞ。スレイプニル、頼む」

「わかったわ」

『承知した』

そう言っつて、俺たちは『ダルグスト』に向けて進んでいった。

「素材の換金をお願いします」

俺たちは『ダルグスト』に戻り、換金のためにギルドへと来ていた。

「わかりました。それではこちらの部屋へお願いします」

「はい」

俺とロゼはギルド職員のお姉さんの後続き、換金のための部屋へと入っていく。

ちなみに、オルグとレイシアは依頼を見ている。

「こちらの台の上に換金する素材を出して下さい」

「わかりました」

俺はインベントリから『精霊石』などの素材を出していく。  
換金する素材は『精霊石』と使わない素材だ。

「これで全部です。鑑定をお願いします」

「え、これを全部ですか……？」

ギルド職員のお姉さんは涙目だ……

「はい……すみません、こんなに大量に……」

「いえ……仕事ですから……それでは少し時間がかかりますので、  
部屋の外でお待ち下さい」

「わかりました」

そう言っただけで俺たちは部屋を出る。

お姉さんも部屋を出て、応援を呼びに行ったようだ。

「ここでは流石に手伝えないわね」

「そうだな。まあ応援を呼びに行ったようだし、大丈夫だろう」

そんなことを話しながら、オルグたちがいる依頼が貼り出されているボードの前に歩いていく。

「オルグ、何か良い依頼はあったか？」

「特にねえな……」

「迷宮の攻略のついでに達成できそうなのは無いですね」

「そうか」

オルグとレイシアがそう言ったが、一応俺も依頼をざっと見ていく。

おつ、『アロウ山脈』の調査の依頼が出ている。

ゼノンが手配した依頼のようだ。

依頼のランクもSとなっている。

そんなことを確認しながら一通り見るが、オルグたちが言ったようにめぼしい依頼は無かった。

「換金が終わるまでまだ時間があるな……」

「ええ。あれだけあればね……」

「じゃあ、それまでどうするんだ？」

「そうだな……オルグたちは買い物して来てくれるか？ 『風皇狼の迷宮』の攻略が済んだ後は、直接『風の精霊王の迷宮』に行く予定だし」

「わかりました。デイン君たちはどうするんです？」

「俺はギルドにいるよ。いつ鑑定が終わるか、わからないしな。口ゼモオルグたちと一緒に買い物に行くか？」

「……私はデインと一緒にギルドにいるわ」

「そうか。それじゃあレイシア、これを渡しておくよ」

そう言っただけで俺はインベントリから皮袋に入れた『ティル』を取り出し、レイシアに渡す。

「買った食材はどうするんです？ インベントリに入れておかなければ、傷むんじゃない……」

「そんなにすぐに傷む訳じゃないし、帰ってきてから入れれば良いさ。それとなるべく沢山買ってきてくれ。何、持ち切れなければオルグにでも持たせれば良い」

「おい……俺でも限界はあるぞ……」

「どんなに荷物が多くても、持つのは男の役目と決まってるんだよ。文句言つな」

「あはは……じゃあ、行ってきますね」

「ええ、気をつけてね」

そしてオルグたちはギルドを出ていく。

「なあ、ロゼ。何で一緒に行かなかったんだ？ まあ、何となく理由はわかるが……」

「あの2人が所構わず、イチヤつくからに決まってるでしょ……」  
「やっぱりな……」

あの2人はさつきもボードの前で微妙にイチヤついていたしな……それからしばらく、ロゼやラグたちと他愛もない話をしていると

「デイン様、鑑定の結果が出ましたので先程の部屋までお越し下さい」

職員の人に呼ばれたのでさつきの部屋に行く。

「お待たせしました。こちらが鑑定結果になります。宜しいですか？」

お姉さんが鑑定額の書かれた紙を渡してきた。  
鑑定額は10万テイルと端数がいくらかある。  
まあ妥当な金額だろう。

俺の素性を知っているギルドが、俺を騙すはずはないが……

「はい、構いません」

「それではこちらをどうぞ。またお願い致します」  
「わかりました」

俺は革袋を受け取り、ロゼとともに部屋を出ていく。  
部屋を出ると、ちょうどオルグたちも戻ってきたところのようだ。  
オルグは両手に大量の食材入った袋を抱え、両腕にも食材を入れた布袋を提げている。

「じゃあ、『風皇狼の迷宮』に出発するか」

そう言ってギルドを後にしようとする

「デーン様、グランドマスターより伝言を預かっております」

ゼノンからの伝言……？

また何か起こったのか？

「伝言とは何ですか？」

「はい。3ヶ月以内で構わないのでギルド総本部に立ち寄って欲しい  
とのことですよ」

「3ヶ月……？ 緊急の用件ではなさそうだな……わかりました。

伝言は受け取りました とグランドマスターにお伝え下さい」

「承知しました」

そうして今度こそギルドを後にする。

「立ち寄って欲しいって、何かあったのかしらね……？」

「3ヶ月以内っていうのも何なんだろうな……オルグ、何か知らないか？」

「あ、取り敢えず俺が思いつくのは、3ヶ月後に『グランドティア』で闘技大会があるってことくらいだな……」

「そつえば、そんなのもあったな」

『VLO』にもあったイベントだ。

「でも、それは俺には関係ないんじゃないか？」

「そうですね。ディーン君が会場すれば、優勝は確実ですしね」

「グランドマスターがそんなことをディーンに頼むはずはないわね」

「そうだな……それよりディーン、そろそろこれをインベントリに入れてくれよ！」

「わかった、わかった」

俺はそう言うと、オルグが持っていた食材をインベントリに入れていく。

「ふう、肩が凝ったぜ……」

「嘔吐け。おまえがあれくらいでどうこうなるはずがないだろ」

「それでディーン、伝言の方はどうするの？」

「まあまだ時間もあるし、風の精霊王との契約が終わってからでも間に合うだろう」

「それもそうね」

そんなことを話しながら『ダルグスト』を後にし、街の外で空間を開く。

そしてスレイプニルを呼び、『メオジラ溪谷』に向かうことにする。

「ラグ、『メオジラ溪谷』はここから西で良いのか？」

『はい、それで合っています。少し北寄りですけどね』

「じゃあスレイプニル、頼んだぞ。それほど遠くはないから、【天翔】は使わなくて良いからな？」

『了解した、主殿。それでは、行くぞ』



スレイプニルはそう言うと、馬車を牽きつつ『メオジラ溪谷』に向け駆けていった。

『風皇狼の迷宮』がある『メオジラ溪谷』の入り口に到着すると、2人の冒険者がいるのが見えた。

オルグの言っていた、監視をしている冒険者たちだろう。

「その馬車、止まれ。この迷宮に入るには、ギルドカードの提示が義務付けられている」

「すまないが、ギルドカードを提示してくれ」

入り口前にいた2人の冒険者がそう言うてくる。

「うーん、どうするかな……」

この人達は俺のことを知っているのか……？

もし知らないようなら、あまりギルドカードを見せたくなはない。

そんなことを考えていると

「どうしたんだ、デーン？ 着いたのか？」

オルグが御者台に繋がる窓から顔を出し、そう言うてきた。  
すると

「オ、オルグ様……どうして、ここに……？」

流石は最高位の冒険者。

知名度は半端じゃない。

「どうしてって、迷宮の攻略をする以外に何をしに来るんだ？」

「そ、そうですね。それでこちらの方達は……？」

「俺の仲間だ。ちなみにその男は俺たちのリーダーで、俺より遙かに強いぞ？」

「な!？」

「そ、それは失礼しました!! どうぞ、お通り下さい」

「それでは……」

俺は冒険者たちに一礼して馬車を進め渓谷へと入っていくが、後ろの方で『あいつは何者だ?』とか言っているのが聞こえる。

「おい、オルグ。最後の一言は余計だろ」

「仕方ねえだろ。あいつらはおまえの事を知らねえんだから。おまえもそれがわかってたから、中々カードを見せなかつたんだろ？」

「まあ、その通りだが……」

「だったら、良いじゃねえか」

「珍しく、オルグの方が正しいわね」

「おい!! 珍しくって何だよ!!」

俺たちはそう言いながら渓谷を進み、『風皇狼の迷宮』の入り口へとやって来た。

オルグたちが馬車から降りたのを確認し、俺は馬車をインベントリに入れる。

「ここではスレイプニルにも手伝ってもらっからな」

『承知した。任せてくれ』

ここは道幅もかなりあるので、スレイプニルも充分に闘える。

「それじゃあ、レイシアはスレイプニルに騎乗してくれ」

「わかりました。お願いしますね、スレイプニル」

『うむ、任せておけ』

「じゃあ、行くぞ。ここも『嵐竜の迷宮』と同じように、魔獣との遭遇率が高くなってるだろうから油断はするなよ?」

俺の言葉に全員が返事をしたのを確認し、俺たちは『風皇狼の迷宮』へと足を踏み入れた……

### 『風皇狼の迷宮』第1区画

『風皇狼の迷宮』はグランドキャニオンのような大峡谷で、『迷路型』の迷宮だ。

確か『VLO』の設定ではその昔、『テイルナノーグ』から流れてきていた大河の浸食によってできたらしい。

ほとんどは岩場だが、多少の草木も生えている。

「やっぱり、ここも風が強いな」

「そうね。『嵐竜の迷宮』は無風だったのに……」

ロゼが手で髪を押さえながら言った。

まあ、『嵐竜の迷宮』は地下だったしな。

「そうですね……ここまで風が強いと髪が……」

レイシアも手で押さえられているが凄いいことになっている。

「2人とも髪を束ねたらどうだ? そのままじゃ戦闘にも支障が出るだろ?」

2人とも髪が長いので、戦闘の邪魔になりそうだ。

「そうね……」

「そうですね……」

ロゼとレイシアはそれぞれ紐を取り出し、髪を束ねていく。

ロゼは手早く髪をポニーテール風に一纏めにするが、レイシアは手古摺っている。

「レイシア、貸して。やってあげるから」

「お願いね」

そう言っただけでロゼはレイシアから紐を受け取り、手早くレイシアの髪を三つ編みにしていく。

「はい、できたわよ」

「ありがとう、ロゼ」

2人が髪を束ね終わった。

「「おお」」

俺とオルグが感嘆の声を上げる。

「似合ってるぞ、2人とも」

「おう、デインの言う通りだ」

「そ、そうかしら……」

「ふふ、ありがとう。2人とも」

そんなことを話しながら進んでいると

『主殿、敵が来たようだ』

スレイプニルがそう警告してきた。

前方を確認すると2mほどの巨大な女王蜂『クイーンビー』に率いられた、50cmほどの蜂『ナイトビー』の大群がこちらに飛んで来ていた。

『ナイトビー』は毒は持っていないが、鋭い針と鋭利な鎌で攻撃してくる。

『クイーンビー』は針に猛毒を持っているが、動きは速くない。

「『ナイトビー』の大群だ!! 100匹近くいるぞ、気をつける  
!」

陣形はオルグを前衛に、ロゼを中衛に戻している。

「『ノヴァ・エクスプロージョン』」

俺は少しでも数を減らすために『ノヴァ・エクスプロージョン』を使う。

炎弾が放たれ、群れの中心で炸裂する。

群れの半数ほどを巻き込んだが、その中で焼き尽くせたのは20匹ほどだ。

「チッ!! やっぱり、火属性はほとんど効かないな……」

『ナイトビー』や『クイーンビー』は風属性の魔獣なので、火属性は効き難い。

「オルグ、突っ込むぞ!! ラグ、  
【大鎌形態<sup>デスサイス</sup>】だ」

「おう、いくぜー!!」

俺は大鎌を、デスサイスオルグは槍斧をハルバート構え、群れへと駆ける。

「『アクアレーザー』」

「『ホーン・グレイブ』」

レイシアが高圧の水流で薙ぎ払い、ロゼが土属性上級魔術『ホーン・グレイブ』を使い、地面から無数の角のような石槍を発生させて『ナイトビー』を貫いていく。

「はああー!!」

「おらああー!!」

俺は大鎌を薙ぎ払い、デスサイス『ナイトビー』を5匹纏めて斬り裂く。  
オルグも俺と同じようにハルバート槍斧で薙ぎ払っている。

当たるを幸いに、俺は大鎌を振り回して次々と斬り裂いていく。  
針を突き刺してきた奴を右の上段回し蹴りで蹴り碎き、そのままの勢いで回転し周囲の奴らをデスサイス大鎌で斬り払う。

すぐさま斬り上げ近づいてきた1匹を両断し、背後から襲いかかってきた奴は鋭く尖っている石突きで貫く。

「くっ!!」

俺は『クイーンビー』が突き刺してきたでかい針を右の裏拳で打ち払う。

その針は猛毒があるのを示すように怪しい光を放っていた。

「こいつの相手は俺がする!! 他の奴らは任せたぞ!!」

俺はそう叫ぶと3人の返事を聞く暇もなく、『クイーンビー』が振り下ろした鎌を大鎌デスサイスで受け流す。

背後からきた『ナイトビー』を振り向かずに後ろ蹴りで砕く。

「うぜえ!!」

『ナイトビー』が邪魔で『クイーンビー』に集中できない。3人も凄まじいスピードで殲滅しているが、数が多過ぎる。

『ガシッ!!』

俺は『クイーンビー』が再び突き刺してきた針を掴み

「破ッ!!」

右足で蹴り上げ、毒針を押し折る。

即座に左から渾身の力で大鎌デスサイスを薙ぎ払い、『クイーンビー』を斜めに分断する。

ついでに途中にいた『ナイトビー』も斬り裂く。女王を殺された『ナイトビー』が怒り狂う。

俺はそいつらを打ち砕き、蹴り砕き、薙ぎ払いながら殲滅していく。

口ゼたちも各々残った奴らを殲滅しているようだ。

それから15分ほど闘い、戦闘が終了した……

「いきなり大群だったな……」

「そうね……この先も、この調子なのかしら……?」

「まあそうだろうな……」

そんなことを話ながら手分けして『精霊石』を拾い、俺たちは先

へと進んでいった。

『風皇狼の迷宮』第2区画

『ギョエエエー！！』

俺たちは順調に迷宮を攻略していき、第2区画を攻略していた時に突然甲高い叫び声が聞こえてきた。

「『スクリーマー』だ！！ こいつは魔獣を呼び寄せるから、さっさと始末するぞー！！」

『スクリーマー』は2mほどの鴉鳥のような魔獣で、『ドウルガ』などと同じようにその鳴き声で魔獣を呼び寄せるのだ。

もうすでに魔獣を呼ばれてしまったが、これ以上は勘弁だ。

『スクリーマー』がいる群れには他にも、鋏のような尾を持つ蠍型の魔獣『デスシーカー』や『キラークワズ』などの群れだ。

俺は剣を抜きながら駆け、左の魔導銃を抜き『スクリーマー』に向け連射する。

「くそ！！ チョコマカとー！！」

放たれた弾丸は『キラークワズ』を何匹か撃ち貫くが、『スクリーマー』には躲される。

こいつは空は飛べないが、矢鱈と逃げ足が速い。

「ディーン、新しい群れが来たわよ！？」



ロゼがそう叫んだので確認すると、『スクリーマー』が呼んだ奴らだろう、『ヴァルチャー』の上位種『バロン・ヴァルチャー』が10羽ほど飛んで来ていた。

「わかった！！　ロゼたちは『バロン・ヴァルチャー』の方を頼む！！」

「わかったわ！！」  
「おう、任せとけ！！」

ロゼたちが応えるのを聞き、俺は【縮地无疆】で『スクリーマー』の元へと跳ぶ。

間合いに入るとすぐに剣を一閃するが、『スクリーマー』は凄まじい速さで逃げる。

「あー！！　イライラする！！」

俺は苛立ちに任せて、襲いかかってきた『キラークワープ』を気を纏った右拳で打ち貫く。

「これでも喰らいやがれ！！　『フレアメイン・トルネード』！！」

俺はオルグたちを巻き込まないのを確認して、火属性最上級殲滅魔術『フレアメイン・トルネード』を使う。

この魔術は『フレア・トルネード』の上位魔術で、『フレアボム』と『フレア・トルネード』を併せたような魔術だ。

炎の竜巻が『スクリーマー』や『キラークワープ』を呑み込む。炎が『キラークワープ』を焼き尽くし、さらに竜巻に含まれている炎の機雷に触れた魔獣が爆散していく。

『スクリーマー』は焼き尽くせなかったが、足が焦げて走るスピ

ードが明らかに遅くなった。

「疾ッ!!」

俺はすぐさま『スクリーマー』との距離を詰め剣を一闪、その細長い首を刎ねる。

『スクリーマー』はそのまましばらく走り、地面に倒れ消え去った。

「これで厄介な奴は殺ったな……」

俺は『デスシーカー』が放った尾の一撃を剣で受け止めながら呟く。

「『スクリーマー』は始末した!! このまま残りも殺るぞ!!」

俺は『デスシーカー』の尾を斬り飛ばし、そのまま地面に縫い付けるように貫きながら叫んだ。

「わかりました!!」

レイシアがスレイプニルに騎乗して空を翔け、圧縮された水弾で『バロン・ヴァルチャー』を撃ち落としながら応える。

ロゼの『ダークニードル』がさらに2羽を貫き、オルグの槍斧ハルバートが最後の1羽を叩き切る。

「ふう〜、終わったわね……」

ロゼが疲れたように呟いた……

「そうですね……こつも大群ばかり相手していると、流石に疲れま  
すね……」

レイシアも『精霊石』を拾いながらそう呟く。

「そうだな。大群はこれで 10 度目か？」

「おう、そんなもんだな。流石の俺も疲れたぜ」

「できれば、第3区画までは行っておきたかったが……」

俺は、今日はもう休むか と考えながら『精霊石』を拾い集め  
ていると

「おつ、あれは『サウザンドデイズ・グロウン』か。 おゝい、  
ロゼ。採取を頼む」

『精霊石』を拾っていると、茂みにいくつかの薬草が生えている  
のを見つけた。

『サウザンドデイズ・グロウン』は『SPエクステンド・ポーシ  
ヨン』などの素材だ。

「わかったわ。しばらく待っててね」

ロゼはそう言っただけで空間を開き、俺が以前渡した『採取セット』を  
取り出して茂みの方へと歩いていく。

ロゼが採取をしている間に、俺たち3人は『精霊石』を拾い集め  
る。

そして俺は、ロゼたちから受け取った『精霊石』や薬草をインベ  
ントリに放り込み

「まだ陽が沈むまで時間はあるが、疲れているようなら今日はここ

「までにするか？」

俺はロゼたちにそう訊いた。

この先も戦闘はますます激しさを増すはずなので、無理は禁物だ。

「うーん、もう少し進みましょう？　ディーンも、第3区画までは行っておきたいんでしょう？」

「まあそうだが……オルグたちはどうだ？」

「俺はまだ大丈夫だぜ？」

「私も、もう少しなら大丈夫です」

「そうか、わかった。だが、無理だけはするなよ？」

俺は3人が頷いたのを確認し、攻略を再開した。

### 『風皇狼の迷宮』第3区画

「破ッ！！」

俺は襲いかかってきた1.5mほどの『グラトン・ジャッカル』を蹴り飛ばし

「ロゼ！！　大丈夫か！？」

『風狼』と闘っているロゼに声をかける。

「くっ。　こっちは大丈夫よ、ディーン！！」

【闘気術】と【纏気術】を使って、全身に気を纏ったロゼが『風狼』の一撃を受け止めながら叫ぶ。

まだ第3区画にも関わらず、とうとう『風狼』まで出現し始めた。

「オルグ、雑魚は任せたぞ！！ レイシアはロゼの援護を！！」

「おう！！」

「わかりました！！ 『アクアレーザー』！！」

俺は2人が応えるのも聞かず、『風狼』へと駆ける。

レイシアが空から高圧の水流を放つが、『風狼』は後ろに跳んで躲す。

俺は『風狼』の着地地点に向け、【縮地无疆】で跳ぶ。

「ドンピシャツ！！」

俺が跳んだ場所にちょうど来た『風狼』を、思いつ切り真上に蹴り上げる。

「ロゼ！！」

「『デモンズ・スピア』！！」

俺が叫ぶと、ロゼは即座に空中の『風狼』へと漆黒の槍を放つ。

漆黒の槍が突き刺さり、『風狼』が爆散する。

その様子を確認しつつ、背後から飛びかかってきた『グラトン・ジャツカル』を振り向きざまに斬り裂き、左から来た奴を気を纏わせた左の裏拳で打ち砕く。

レイシアがスレイプニルとともに、魔獣の攻撃の届かない高空から爆撃の如く魔術を放ち、魔獣を殲滅していく。

オルグも槍斧ハルバートで『デスシーカー』と『グラトン・ジャツカル』を4匹纏めて薙ぎ払う。

そして、俺たちは魔獣を殲滅していった……

その後俺たちは協力して『精霊石』や『風狼の肉』を拾い、今日の攻略はここまでにしてホームで休むことにした。

「ロゼ、レイシア、今日はこの『風狼の肉』を使って料理してくれ」

俺はインベントリから『風狼の肉』を取り出しながら、そう言った。

ロゼとレイシアはここ最近ずっと料理を担当している。

「これも食べるとステータスが上がるの？」

「ああ、AGIが10も上がる」

「えっ！？ そうなんですか？」

「レイシアたちは知らないかもしれないが、食材の中には食べるとステータスが上がる物があるんだ」

「へえ、そんなものもあるんですね」

「上昇するAGIは『炎狼の肉』より多いのね……何でなの？」

「いや、俺も良くは知らないが、多分、風属性魔術には速度を上昇させる物も多いから、その辺りのことが関係してるんじゃないか？ どうなんだ、ラグ？」

ラグなら知っているかもしれないと思って、訊いてみる。

「私も知りませんよ。まあ理由が何であろうと、上昇することには変わりはありません。それで良いのではないですか？」

「ラグの言う通りだな。それじゃあロゼ、レイシア、頼むぞ」

「わかったわ」

「任せて下さい。美味しい料理を作りますから、待っていて下さいね」  
「楽しみにしてるよ」

俺はそう言っただけで『風狼の肉』を手渡し、リビングに戻る。  
料理が出来るまですることもないし、ステータスの確認でもして  
おくか……

Name: デイーン  
種族: 人族(転生2回)  
称号: 認められし者  
Lv: 260 / 500  
HP: 35000 / 40000  
MP: 35000 / 40000  
SP: 20000 / 20000  
STR: 1535 / 2000  
DEX: 1530 / 2000  
VIT: 1545 / 2000  
AGI: 1545 / 2000  
INT: 1500 / 2000  
WIS: 1500 / 2000  
スキルスロット: 50 / 100

「おつ、レベルが上がってるな。ポイントを割り振っておくか」

まあ、1レベルしか上がってないがな……  
ポイントは、STRとDEXに5ずつ振り分ける。  
これでSTRは1540に、DEXは1535になった。  
この後料理を食べれば、AGIも1555になるはずだ。

「相変わらず、中々レベルが上がらないな……」

俺がそんなことを呟いていると

「料理が出来たわよ」

ロゼが料理を運んで来た。

出来上がったのは『風狼の肉』を使った鍋料理だ。

「おっ、これは美味そうだぜ」

料理の匂いに誘われたのか、オルグも風呂から出てきたようだ。

「じゃあ、食べましょう」

レイシアはそう言いながら椅子に座る。

料理を運び終えたロゼも席に着き

「……いただきます」「……」

そう言っつて、俺たちは料理を食べ始めた……

俺たちは今日の戦闘の反省点、明日の予定や他愛もない話をしながら食事を終えた。

「久しぶりに、全員のステータスを確認させてくれないか？」

最近は何にアドバイスをするくらいで、3人のステータスは見ていなかった。

「良いわよ」



「おう、わかったぜ」  
「良いですよ」

そう言つて3人はステータスウィンドウを開く。  
俺はロゼから順番に確認していった。

Name:ロゼ

種族:ハイダークエルフ(転生1回)

称号:精霊王の寵愛を受けし者

Lv:135/500

HP:30000/30000+5000

MP:30000/30000+5000

SP:15000/15000+5000

STR:645/750+250

DEX:800/1000+250

VIT:750/750+250

AGI:1000/1000+350

INT:1150/1500+250

WIS:1140/1500+250

スキルスロット:30/100

Name:オルグ

種族:戦鬼族(転生1回)

称号:鬼族最強の戦士

Lv:136/500

HP:30000/30000+3000

MP:10000/30000

SP:15000/15000+3000

STR : 1050 / 1250 + 200  
DEX : 1000 / 1250  
VIT : 1100 / 1250 + 200  
AGI : 664 / 750  
INT : 510 / 750  
WIS : 601 / 1000  
スキルスロット : 40 / 100

Name : レイシア

種族 : ウンディーネ・アクエリアス (転生1回)

称号 : 水精の祝福を受けし者

Lv : 110 / 500  
HP : 20000 / 30000  
MP : 30000 / 30000  
SP : 15000 / 15000  
STR : 540 / 750  
DEX : 800 / 1000  
VIT : 693 / 750  
AGI : 1010 / 1250  
INT : 1250 / 1250  
WIS : 1250 / 1250  
スキルスロット : 35 / 100

「3人ともずいぶんレベルが上がったな。これは頼りになる」

ロゼは装備の上昇分も含めて万能型、オルグは完全な前衛型、レイシアは魔術主体の後衛型のステータスになっている。

それも『VLO』のプレイヤーと比べても、何ら遜色のないステ

「タスだ。」

「この世界なら敵う者のいない、圧倒的なステータスだろう。」

「まああれだけ闘えばレベルも上がるぜ」

「そうね。これでもうディーンの手纏いにはならないわ」

「でもそんな私たち3人が束になっても、全く敵わないディーン君  
つて……」

「おいおい…人を化け物みたいに言うな。それにそろそろ俺1人で  
は、3人同時に相手するのはキツくなってきたよ」

「実際の朝の訓練の時、本気を出さなければ3人の攻撃を躲しきれない  
場合が増えてきている。」

「そうなのか？」

「ああ。そろそろ訓練の方法を変えないといけないかも……」

「どんな風に？」

「それはまた考えておくよ」

「じゃあ明日の攻略もありますし、休みましょうか？」

「そうだな」

「俺たちはレイシアの提案に頷き、各々の部屋へと戻って早めに眠  
りに就いた……」

『風皇狼の迷宮』第5区画

「やっと半分か……」

俺たちは今日も朝から攻略を進めて、昼過ぎには何とか第5区画まで来れた。

今は昼食も兼ねて、一休みしているところだ。

「ここに来るまでも大分戦闘したしね」

「ああ。それに『風狼』が3匹同時に現れた時は、流石にもうダメかと思っただぜ……」

「そうですね……デイン君が1匹を速攻で倒してくれなかったら、危なかったかも知れません……」

「確かに厄介なことにはなったかもしれないが、皆も充分『風狼』と闘えてたじゃないか」

オルグが言うようにここに来るまでに何度か『風狼』とも戦闘になったが、その内の一度は3匹同時だったのだ。

俺がその内の1匹の首を即座に刎ねたので実質2匹だった訳だが、その片方を俺が、残りの1匹をオルグとロゼが始末したのだ。

ちなみにレイシアは、全員のフォローと雑魚の相手をしていた。

「まあこの先も、『風狼』が複数出てくる可能性は充分あるから頼むぞ」

「わかったわ」

ロゼがそう応え、他の2人も頷く。

「じゃあ昼飯も食べ終わっただし、攻略を再開するか」

俺がそう言うのに合わせて全員が立ち上がり、先へと進んでいった。

「グルウオオ!!」

全身に気を纏い【完全狂化】状態のオルグが、3mほどの熊型魔獣『シルバー・ムーンベア』の上下の顎に手を掛け、引き裂いていく。

その姿はまさに鬼そのものだ。

「あいつは何で素手でやり合ってた……」

俺は【刀術形態】に変化させたラグで、『シルバー・ムーンベア』を幹竹割りに両断しながら呟いた。

「さあ何でしょうね？　今のオルグさんが苦戦する相手にも思えません」

『油断してて、武器を飛ばされちゃったんじゃないの？』

「流石にそれはないと思うが……まあ後で問い詰めるか」

もしそうなら訓練を倍にしてやる　と思いつながら飛びかかってきた『グラトン・ジャツカル』を逆袈裟に斬り上げ、返す刃で急襲してきた『バロン・ヴァルチャー』を斬り裂く。

即座に左の魔導銃を抜き、『キングモス』に『炸裂弾』バーストシェルを撃ち込む。

ロゼとレイシアが魔術を放ち、『キングモス』の幼虫を殲滅していく。

俺はその様子を視界の端で確認しつつ、さらに『グラトン・ジャツカル』をもう1匹斬り裂く。

そしてオルグの方を確認してみると、今度はちゃんと槍斧ハルバートで『シルバー・ムーンベア』を両断していた。

左右から同時に飛びかかってきた『グラトン・ジャツカル』を、左手の魔導銃の刃と右手の刀でそれぞれ斬り裂く。

周りを確認すると、魔獣の群れは全滅していた。

「どうやらこの2匹が最後だったようだ。」

俺は刀と魔導銃を納め、『精霊石』を拾いながら

「オルグ、さっきは何で素手で闘ってたんだ？」

先程の戦闘のことをオルグに訊いた。

「あゝ、あれはな……」

オルグは中々理由を喋らず、明らかに動揺している。

「『シルバー・ムーンベア』<sup>ハルバート</sup>に槍斧を弾き飛ばされたのよ。大方、油断でもしてたんでしょ。」

その時の様子を見ていたのだろう、ロゼがあっさりと暴露した。

「それは本当か、オルグ？」

「うっ！！ ほ、本当だ……だが、聞いてく」

「はい、ストップ。言い訳はするな。あの程度の相手、今のおまえなら何でもないだろう？ 実際、素手で引き裂いてたしな。それともレイシアかロゼを守って、そうだったのか？」

俺が確認するようにロゼとレイシアに視線を送ると

「私は少し離れたところで闘ってたわね」

「私もスレイプニルに乗って、空の上でした……」

ロゼはあっさりと、レイシアは少しすまなそうに否定した。

「これで、おまえが油断していただけ　ということになるな」  
「ぐっ……」

「反論もないようだし、明日からの訓練は覚悟しておけよ?」

俺が気を強めに放ちながらそう言つと

「お、おう」

オルグは少し後退りながら頷いた。

「じゃあまずは　残りの『精霊石』を全部拾ってこい」

「えっ!?!　明日からじゃねえのかよ!?!」

「何か言つたか?」

俺が睨みながらそう言つと

「うっ　わかったよ!!　行きやあ良いだろ!!」

「なら、さっさと行ってこい。魔獣は俺が警戒しといてやるから」

オルグがまだ何かをブツブツと呟きながら『精霊石』を拾い集めるのを、俺は魔獣を警戒しつつ眺める。

「ロゼたちは今の内に休んでいてくれ」

「わかったわ」

「少し可哀相な気もしますが……」

「良いんだよ。自業自得だ」

その後オルグは5分ほどで『精霊石』を拾い終わり、俺たちは攻略を再開した。

結局その日は第6区画の途中まで進み、休むことになった。

当然オルグには、その間に起こった全ての戦闘で『精霊石』を拾い集めさせた……

『風皇狼の迷宮』第8区画

「あれはサボテン……?」

俺たちは今日も朝から迷宮の攻略を進め、第8区画までやって来ていた。

そして、ロゼが道端に生えていたサボテンを興味深そうに見ている。

「ロゼはサボテンを見たことないのか?」

「当たり前でしょ。昔、図鑑で見たことがあるだけよ」

そう言いながら、ロゼは恐る恐るサボテンを触っている。

「棘があるから気をつけるよ?」

「俺も初めて見たぜ……」

「私も……」

オルグとレイシアも、それぞれ興味津津な様子でサボテンを触っている。

「ん? オルグは『嵐竜の迷宮』に行く途中の砂漠で見たことがあるだろ?」



確かあの砂漠にも、サボテンが生えているところがあったはずだ。

「そうなのか？ でもあんな砂漠で探してる暇なんてねえよ」

「それもそうだな。3人とも、もう満足しただろ？ そろそろ先に進むぞ」

「わかったわ」

ロゼがそう言ってこちらに歩いてくる。

その瞬間、ロゼの背後に生えていたサボテンが動き出す。

「ロゼ！！」

俺は【縮地无疆】でロゼの元へ跳び、そのままロゼを片手で抱えてその場を離れる。

「キャッ！？」

ロゼが短く悲鳴を上げる。

「『フェイク・カクタス』だ！！ 他にもいるぞ、気をつける！！」

この魔獣はサボテンに擬態している『フェイク・カクタス』という魔獣だ。

「おう！！」

「わかりました！！」

オルグたちが俺の言葉で武器を構える。

俺はロゼをその場に降ろし

「いけるな、ロゼ？」

「ええ。さつきはありがとう、ディーン」

ロゼが頷いたのを確認し、最初にロゼを襲った奴へと跳ぶ。

そして、そいつを幹竹割りに両断する。

その瞬間、周りにあつたほとんどのサボテンが一斉に動き出す。

「こいつらは棘を飛ばしてくるから気をつける！！ 麻痺毒も持つてるぞ！！」

俺は『フェイク・カクタス』が飛ばしてきた無数の棘を剣で弾きながら叫ぶ。

ロゼ、レイシア、そしてスレイプニルは棘を躲しつつ魔術を放ち、オルグは金属盾で弾きながら距離を詰めて槍斧ハルバートで『フェイク・カクタス』を薙ぎ払う。

俺は魔導銃に火の魔力を込め、炎弾を放つ。

放たれた炎弾は飛んできた棘を焼き尽くしながら『フェイク・カクタス』に命中し、焼き尽くす。

それを横目に見つつ剣を逆袈裟に斬り上げ、最後の『フェイク・カクタス』を斜めに両断する。

「こんな魔獣もいるのね……」

ロゼが剣を鞘に納めながら呟く。

「本当にビックリしました……」

「もしかして、さつき俺が触ってたのも魔獣じゃねえだろうな……」

「さあ、どうだろうな？ もしかしたら……」

俺はニヤリと笑いながら言った。

「げっ……」

「じゃあオルグ、『精霊石』を拾うのは任せたわね？」

ロゼがオルグの肩を叩きながらそう言った。

「うっ、そうだった……」

オルグはもう諦めているのか、文句を言うこともなく『精霊石』を拾い集めていく。

そして、しばらくするとオルグが拾い終わったので

「お疲れさん。じゃあ、先に進むか」

「わかりました。行きましょう」

そう言って、俺たちは攻略を再開した。

その日は第9区画に入ったところで攻略を切り上げ、休むことにした……

### 『風皇狼の迷宮』 第10区画

「そろそろ最奥だな」

俺たちは迷宮の攻略を進め、とうとう最奥まで来ていた。

「そうね……この奥に『風皇狼』がいるのかしら？」

『はい、その通りです』

「『風皇狼』も魔術を使うのか？」

『使うよ。それに当然だけど、風と火属性は効かないからね』

「まあ、そうですね……」

「ここでも全員で闘うことになるのか？」

『恐らくはそうなるでしょう』

「じゃあ、気合いを入れていかねえとな」

「ああ、頼むぞ。それじゃあ、行こう」

俺たちは迷宮の最奥である、絶壁に囲まれた空間に足を踏み入れる。

その空間はかなり広く、そして

『ようやく来ましたね、『来訪者』殿。そして、同行者の皆さん』

空間の中心には、『炎皇狼』と同じくらいの大きさの、透き通る翡翠色をした巨狼がいた。

さらにその巨狼は鎧のように全身に風を纏っている。

「貴方が『風皇狼』で宜しいですか？」

『ええ。私が風狼の長、『風皇狼』ですよ』

『ゲイルドラゴン』と同じく、知的な男性のような声だ。

風属性は皆こんな感じなのか？

「それで、試練は俺たち全員で闘っても良いのですか？」

『構いませんよ。ただし『ゲイルドラゴン』と同様に、私も仲間を呼ばせていただきますが』

「わかりました。皆、そういうことだ。準備しろ。ラグ、【刀術形態】だ」

『了解しました』

俺たちが各々武器を構えた瞬間

『ウオオオオオン……』

仲間を呼ぶためだろう、『風皇狼』が遠吠えする。  
すると

『グルルルウウ……』

紋章が現れ、『風狼』が唸りながら4匹出現する。

「この前より多いじゃねえか!!」

オルグが言うように『ゲイルドラゴン』が呼んだ『ウインドドラゴン』は3体だったが、今回は4匹だ。

「文句を言っても始まらない。皆、来るぞ!!　オルグたちは協力して、『風狼』を1匹ずつ始末するんだ!!」  
『では、いきますよ』

『風皇狼』がそう言った瞬間、俺は【縮地无疆】で『風皇狼』の元へと跳ぶ。

俺は加速した視界の中で、『風皇狼』が全身に纏った風が勢いを強め、四肢に力を込められるのを確認する。

こいつの相手はロゼたちにはまだキツイ。  
俺が闘わなければ。

間合いに入った瞬間、『風皇狼』が仲間たちの方へ跳ぶのを防ぐように刀を一閃させる。

『ガキイイ!!』

「なっ!?!」

こいつは躲しもせず、俺が一閃させた刀をその鋭い牙の生えた口で受け止めやがった。

しかも

『ビシッ!!バシッ!!』

「くっ!!」

俺は即座に『風皇狼』の顎を蹴り、その口から刀を引き抜きつつ跳び退る。

俺の外套は至る所が裂け、血が滲んでいる。

『風皇狼』が纏っているのはただの風ではなく、鎌鼬のような真空波だ。

「くそっ!! これじゃあ、近接戦闘はキツイな……」

『ですが『風皇狼』のあの速度では、放出系の攻撃を当てるのは無理ですよ?』

『そうだよ。いくらマスターでもキツイよ?』

「だな……仕方がない、『ストーンスキン』」

俺が土属性下級魔術『ストーンスキン』を使うと、俺の全身の皮膚が薄い石のような物で覆われる。

「これで少しはマシになるだろう。ラグ、【通常形態】だ。それと【魔法剣】起動、『シルヴァンス』」

俺はそう言いながら【疾風迅雷】を起動し、雷速で駆ける。ラグが剣に変化し、『シルヴァンス』が発動する。

「はあああ!!」

俺が放った逆袈裟の一撃と、『風皇狼』の振り下ろした爪が激突する。

その瞬間、神龍の力で守られているはずの石畳が罅割れ、周囲に凄まじい衝撃波が発生する。

真空波が纏った石の皮膚を削っていくが、何とかもっているようだ。

即座に『風皇狼』の頭に向け蹴りを放つ。が『風皇狼』は瞬間移動のような速度で跳び退り、俺の蹴りを躲す。

「遅いですね。それでは、私には届きませんか?」

『風皇狼』の言う通り、『炎皇狼』より遙かに速い。

「まだまだ!!」

俺はさらに【闘気術】を起動、全身に気を纏いながら駆ける。

「邪魔だ!!」

横から飛びかかってきた『風狼』を回し蹴りで地面に叩きつける。すかさず剣で突き刺しとどめを刺し、『アイギス』に魔力を込める。

『ギヤリイイ!!』

『風皇狼』の爪を展開した障壁で受け止め、足を薙ぐように剣を一閃させる。

その一撃を跳び退り躲した『風皇狼』を追うように、【疾風迅雷】を待機状態に戻して【縮地無疆】で跳ぶ。

俺は剣を逆手に持ち替え

「でやああ!!」

石畳に縫い付けるように突き刺すが、またもや躲される。だが、これで良い。

剣が石畳に突き刺さった瞬間、俺を中心とした半径15mほどの円の円周上に5mほどの三角錐状の透明な杭が噴出する。

【魔法剣・シルヴァンス】のアーツスキル『グラント・ライジング』だ。

本来なら敵の足元から噴出させるのだが、今回は『風皇狼』の動きを制限するために俺たちを囲むリング状に噴出させた。

「これで好きに動き回れないだろう?」

『なるほど、考えましたね』

「ラグ、【刀術形態】だ」

『こちらも本気でいかせてもらいます』

俺は刀を構え、再び【疾風迅雷】を起動し駆ける。

『ガアアツ!!』

『風皇狼』は吼えた途端、リング内に凄まじい竜巻が荒れ狂う。風属性上級魔術『タービュランス』だ。

「アイギス、障壁展開!!」



俺はアイギスに障壁の展開を任せ、竜巻を突っ切る。

発生した衝撃波で竜巻は相殺されるが、竜巻を抜けた瞬間『ブラストハリケーン』が目前に迫る。

「チイツー!!」

それをまだ展開されていた障壁で弾くと、『風皇狼』の右の爪が迫りくる。

「疾ッ!!」

刀を逆袈裟に斬り上げてそれを防ぎ、返す刀で首を狙う。

『風皇狼』の体毛が散るが、浅い。

横へ跳んで俺の一撃を躲した『風皇狼』を追い、俺も跳ぶ。

放たれた風の刃が頬を浅く斬り裂いていくのも気にせず、刀を袈裟斬りに振り下ろす。

その一撃は胴を斬り裂くが、致命傷には遠い。

「【二刀形態】!!」

『了解!!』

ラグが俺の言葉に応え、瞬時に二刀へと変化する。

逆手に持った二刀に気を纏わせ、左で爪を受け止め、右の刀でその前足を斬り飛ばす　が、刹那の差で躲され、半ばまでを斬り裂くに止まる。

「その足じゃ、もう素早くは動けないだろう?」

『そうですね……次で終わりにしましょう』

「そうだな」

口ゼたちの方も、残す『風狼』は1匹となっていた。

俺は左脚を後ろに引き、倒れそうなほどの前傾姿勢になる。

『風皇狼』も四肢を撓<sup>たわ</sup>め、力を溜める。

「いくぞ」

『ええ』

刹那、俺と『風皇狼』の姿が掻き消える。

加速した世界の中、俺は『風皇狼』の振り下ろした右前足を二刀で挟み込むように斬り飛ばす。

即座に俺は『風皇狼』の真上に跳び、振り向きながら順手に持ち替えた二刀を斬り払うように一閃。

二刀から刃状の衝撃波が放たれ、『風皇狼』の胴を背後から横一文字に両断した。

この技は【二刀流】のアーツスキル『絶咬双刃牙』だ。

「ぐっ……」

俺は右脇腹を押え、石畳に片膝を突く。

外套と鎧が斬り裂かれ、血が噴き出す。

『風皇狼』が右前足と同時に繰り出した、左の爪で斬り裂かれたのだ。

恐らく内臓にまで届いているだろう。

「『パーフェクト・シャインヒーリング』」

俺は息も絶え絶えに回復魔法を使う。

激痛で意識が飛びそうだが、回復魔法のおかげで急速に傷が塞がり、痛みも引いていく。

『見事な剣技でしたよ……』

『風皇狼』の方を見ると、『風皇狼』は上半身だけになり倒れ伏していた。

両断された下半身はすでに光の粒子になり、消えていくところだった。

「紙一重だったさ……」

実際ほんの少しでも遅れていたら、両断されたのは俺の方だったはずだ。

『証』はお渡しします。また、お会いしましょう……』

その言葉を最後に、『風皇狼』は光の粒子となり天に昇っていった。

それと同時に、耐久限界になった『ストーンスキン』が塵になり消滅する。

俺は『グランド・ライジング』で造り上げたリングを解除し、先に戦闘の終わっていたロゼたちの方へと歩いていく。

「大丈夫なの、デインン!？」

最後の攻防を見ていたのだろう、ロゼか心配そうに駆け寄ってくる。

「大丈夫だ。鎧は駄目になってしまったけどな……」

「そんなもん、また作れば良いじゃねえか。おまえの腹から血が噴き出した時は、やられちまったかと思っただぜ……」

「そうですね……あまり、無茶はしないで下さいね？」  
「レイシアたちも結構無茶したんじゃないか？ 皆、ボロボロだぞ？」

ロゼたちのローブなども所々裂けている。

『我らの方も中々強敵だったからな。多少の負傷は仕方あるまい。すでにレイシア殿に治療をしてもらっているから、心配はいらんぞ』  
「それにディーンが1匹倒してくれたから、ずいぶん楽になったわ。ありがとう」

「ああ、そんなこともあったな。あの時は夢中だったから、特に気にしてなかったよ。それじゃあ、素材と『証』を取って帰るか」

「そうですね。戻りましょうか」

「ええ。疲れたから、今日はゆっくりと休みたいわ……」

「じゃあオルグ、頼んだぞ？」

俺は最後の言葉をオルグの肩を叩きながら言った。

「何！？ 俺だって疲れてんだぞ！？」

「ははは、冗談だよ。じゃあ、手分けして拾うか」

「そうね。流石に今回は、オルグだけにやらせるのは可哀相ね」

そんなことを話しながら俺たちは『精霊結晶』や『風狼の肉』、『風狼の毛皮』、『風皇狼の肉』、そして翡翠のような宝玉の『証』を拾い集め、『脱出<sup>エスケープ</sup>』で迷宮を後にした。

## 第14話 『天空島』

『風皇狼の迷宮』を後にした俺たちは、入り口にいた2人の冒険者たちから見えない所で空間を開き、休むことにした。

「ふう〜、何とか『風皇狼』の『証』を手に入れることができたな……」

俺はロゼとレイシアが作った『風皇狼の肉』を使った食事を食べ終え、そう呟いた。

ちなみに『風皇狼の肉』はINTが5、AGIが20も上昇する食材だ。

「そうね。今回も、厳しい闘いだっただわね……」

「ああ。俺たちもレベルが上がったが、まだまだだと思いき知らされたぜ」

「そうですね……」

ロゼたちも、それぞれに今回の闘いのことを思い返しているようだ。

「だが、次は風の精霊王に会いに行くことになる。闘いはさらに激しさを増すだろうな……」

「そういえばディーン、『風の精霊王の迷宮』って何処にあるの？」

「ロゼは知ってるはずないか……オルグたちも知らないのか？」

「知らねえな」

「自信満々に言っちなよ……ラグ、『風の精霊王の迷宮』は『天空島』で良いのか？」

「ええ、間違いありません」

「『天空島』？ 何なの、それは？ 何処かにある島？」

「まあ、島って言ってるんだから、そうなんじゃねえか？」

「でも天空って……空に島があるんですか？」

3人とも訳がわからないという顔をしている。

「レイシアの言う通りだ。『風の精霊王の迷宮』は、空に浮かぶ群島にある」

「空にある島……？ そんな所までどうやって行くの？」

「ここから南にちよつとした遺跡があるんだ。その遺跡は『<sup>ゲート</sup>転送門』になっていて、『天空島』まで転送されるようになってる」

「『<sup>ゲート</sup>転送門』……？ うーん、話を聞いただけじゃ良くわかんねえな……」

「そうだろうな。まあ実際に見てみれば、わかるさ」

百聞は一見に如かず　とも言うしな。

「そうね。明日はその遺跡に行くんでしょ？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、その時まで楽しみにしておきます」

「あまり面白い物ではないぞ？」

そんなことを話した後、俺たちは寝るまで各々自由に過ごすことになり、俺は『風皇狼』との闘いで破損した鎧を修復するために工房へと来ていた。

「これは作り直した方が早いか……？」

俺は鎧を眺めながら呟いた。

『風皇狼』の爪によって斬り裂かれた右脇腹の部分はズタズタに

なっていて、修復するよりも新しく作った方が良さそうだ。

幸い、鎧の素材はまだ残っているしな。

俺は鎧を作り直すことに決め、倉庫に行つて素材を取ってくる。

「この鎧も勿体ないし、再利用するか」

破損した鎧は、素材の節約のために溶かして再利用する。

俺は鎧と素材を炉に放り込んで溶けるのを待ち、出来上がった合金を金床の上に取り出してハンマーで叩いていく。

工房に金属を叩く音が響く。

そうしてしばらくすると、鎧が完成した。

完成した鎧を着け、不具合が無いか確かめる。

「大丈夫そうだな」

特に不具合も無かったので、鎧を外しインベントリに入れる

が、俺はオルグたちが仲間になってから自分の役割を鑑みて、もっと動き易い鎧にするべきか　と思っていた。

今のパーティーでの俺の役割は、基本スピードで相手を攪乱し、ラグナレクの圧倒的な攻撃力で魔獣を殲滅していくことだ。

オルグのように前線で敵を受け止める壁役ならまだしも、俺の役割には防御力はそれほど重要ではない。

かといって、防御力を疎かにするのも論外だ。

精霊王との戦闘は確実に俺1人で闘うことになるだろうし、セフアイドとの戦闘を考えると風の精霊王との戦闘も激戦になるはずだ。ある程度の防御力をもった鎧でないと、一撃で死ぬ可能性だってある。

動きやすさと防御力を兼ね備えた、そんな都合の良い鎧を『VLO』で得た知識の中から探す。

『VLO』に無数に存在した様々な種類の鎧の中から、条件に当

てはまるものを喰りながら思い出していると

『マスター、鎖帷子はどうでしょう？』  
チェインメール

俺の様子を見かねたのか、ラグがそう提案してきた。

「鎖帷子か……確かに良いかもしれないな」  
チェインメール

鎖帷子とは普通鎧の下に着込み、防御力を底上げする装備だ。

それなりの規模の武器屋に行けば、大抵の所で売っている。

話は変わるが、『VLO』の武器には鍛造と鍛造の2種類が存在した。

それはこの世界でも同じのようで、すでに確認済みだ。

どちらも一長一短があり、鍛造は最初に型を作ってしまったら、後は簡単に増産できる。

故に鍛造品は安価で売られていて、それほど金を持っていない初心者でも装備を揃えることができる。

しかも製作者のスキルの熟練度に左右されず、必ず一定の品質の物ができる。

しかしその品質は総じて低いため耐久値が減りやすく、すぐに耐久限界に達してしまう。

逆に鍛造は1つ1つハンマーで叩いて作らなければならないが、高品質の武器を作ることができる。

しかしその手間故に鍛造品に比べると高額で、さらに品質も製作者のスキル熟練度次第で、例え同じ金属、同じ道具を使っても熟練度の低い者と高い者では、出来上がる物の性能には天と地ほどの差が存在する。

そして話を鎖帷子に戻すが、『VLO』では店売りの物はもちろん、生産系プレイヤーの作るプレイヤーメイドの物も全て鍛造品だった。



しかしある時、1人の酔狂な生産系プレイヤーチェインメールが鎖帷子チェインメールを鍛造で作ろうとしたのだ。

だが、それは容易なことではなく、鎖帷子チェインメールに必要な鎖を1つ1つ作らなければならなかった。

しかし彼はその苦行をやり遂げ、作った鎖は1万個以上にも及んだらしい。

俺も人伝に話を聞いたただけなので詳しくは知らないが、何故そんなことを試みたのかは未だに謎だ。

だがそれらの鎖を使って作られた鎖帷子チェインメールは、並みの軽装鎧を軽く超える防御力を有していたらしい。

当然、その噂を聞き付けた他のプレイヤー達がこぞってその鎖帷子チェインメールを求めたが、『VLO』で初めて鍛造の鎖帷子チェインメールを作った彼は二度とそれを作ることはなかったそうだ。

もちろん他の生産系プレイヤーも作るうとしたが、皆途中で諦めたと聞いている。

だが鎖帷子チェインメールは服のようになっていて、鎧よりも遥かに動きやすいはずだ。

俺の求めている条件は十分に満たしている。

「作ってみるか。鎖帷子チェインメールを」

俺は今までに作ったことはないが、作れないということはないだろう。

そう思い、作り始めようとする

『今日はもう遅いので、やめておいた方が良くと思いますよ』

「そうだな。時間もかなりかかりそうだし、毎日少しずつ作っていくことにしよう」

俺はそう言うとう道具を片付け、自分の部屋に戻ることにした。

途中リビングを覗いたが3人はおらず、すでに各々の部屋で休んでいるようだ。

俺も部屋に戻り、眠りに就いた。

次の日、俺たちは軽く訓練を済ませた後朝食を食べ、『天空島』への『転送門』がある遺跡へと向けて馬車で出発することにした。

『マスター、遺跡はここからほぼ真南にあります』

「わかった。それじゃあスレイプニル、頼むぞ」

『承知した、主殿』

そうして、御者台に俺とロゼ、馬車にオルグとレイシアを乗せて『転送門』の遺跡へと進んでいった。

特に魔獣に襲われることもなく、俺たちは空の旅を楽しんだ。

それから2、3時間経つと、前方の荒野にポツンと遺跡が建っているのが見えてきた。

「あれが『転送門』の遺跡なの？」

ロゼが遺跡を見ながら訊いてくる。

「ああ、そうだ。　　と言っても、『転送門』があるだけの小さな遺跡だな」

その遺跡は西洋の神殿のような建物で、大きさは普通の一軒家くらいだ。

大理石に似た石で造られているが、所々風化して崩れてしまっている。

「スレイプニル、遺跡の近くに降りてくれ」

俺がそう頼むと、スレイプニルは徐々に高度を下げていく。馬車を遺跡のすぐ傍に停めると、俺はオルグたちに到着したことを告げて御者台から降りる。

俺に倣いロゼが御者台から降りると、オルグたちも馬車から出てきた。

「それじゃあ、行くか」

俺は馬車をスレイプニルから外してインベントリに入れると、ロゼたちにその声をかけた。

皆が頷いたのを確認し、神殿の中心に向かって歩いていく。ちよつとした階段を上ると『転送門』があった。

他には何も無い。

神殿そのものは少し風化が進んでいたが、『転送門』自体には風化した様子は見られない。

「これが『転送門』か……？」

オルグが珍しげに『転送門』を眺めながら呟いた。

「そつだ」

俺たちの前には、縦3m、横2mほどの良くわからない物質でできた長方形の枠があり、その内部の空間は水面のように揺らいでいる。

「これを通り抜けると『天空島』に行くことができる」

「へえ、それは便利ですね」  
「そうだな」

『VLO』では、各国の首都にはそれぞれの国の首都を結ぶ『転送門』が設置されていてもっと便利だったが、この世界では設置されていない。

俺はそんなことを思いながらレイシアに答える。

「じゃあ、行きましようか」

「ああ。魔獣もかなり手強くなっているはずだ。全員気を抜くなよ」

俺はロゼの言葉に頷き、皆に注意を促す。

皆が頷いたのを確認し、俺は『転送門』を潜った。

### 『天空島』 第1群島 第1区画

『転送門』を潜り抜けると、俺は森の中にいた。

「ここが『天空島』……?」

俺に続いて『転送門』を潜ってきたロゼが、周りを見渡ししながら  
呟く。

ロゼに続き、オルグとレイシアも『転送門』から現れる。

「そうだ。 と言っても、ここじゃあ実感が湧かないよな」

俺もロゼと同じように周りを見渡す。

『VLO』の時は特に何も思わなかったが、改めて考えると不思議な場所だ。

この島が浮かんでいる高度は森林限界を遥かに超えているはずだが、周りには針葉樹で造られた『迷路型』の迷宮が存在している。

「ええ、そうね。でも空に雲が無いから、かなりの高さにいるんだろうなってことはわかるわ」

ロゼが言うように今日はあまり天気が悪くなくて、空はそれなりに雲に覆われていた。

それが『転送門』を潜るとこれだけ晴れているのだから、ロゼのように考えるのは当然だろう。

「ここはどんな迷宮なんだ、デーモン？」

俺たちと同じように周りを眺めていたオルグが訊いてきた。

「『天空島』は『特殊型』に分類される迷宮で、複数のタイプの迷宮が合わさっている。今いるのは『迷路型』の島だな。『天空島』の島々は『転送門』で繋がっていて、最終的には中央に存在する巨大な島を目指すんだが、ここからじゃ見えないな」

「わかりました。攻略には時間がかかりそうですね」

「そうね。できるだけ早めに攻略したいところだけど、注意して進みましょう」

「じゃあ、攻略を開始しよう」

俺がそう言うと、全員が力強く頷いた。

「破ッ!!!」

俺が気を纏わせた掌底を叩き込んだ『シルバー・ムーンベア』が吹き飛んでいく。が、吹き飛ばされた『シルバー・ムーンベア』はよろめきながらも立ち上がる。

「チツ」

俺は思わず舌打ちをしてしまう。

少し前から、気を纏わせていても素手での攻撃では中型の魔獣すら一撃では仕留め切れなくなってきた。

俺は『シルバー・ムーンベア』が完全に体勢を立て直す前に、【縮地无疆】で距離を詰めて剣でその首を刎ねる。

背後から飛びかかってきた『ザグジーガ』を気を纏わせた後ろ蹴りで砕く。

「このくらいの魔獣なら一撃で大丈夫か……」

俺は素早く周りを確認すると、ロゼが『バロン・ヴァルチャー』2羽と、レイシアがスレイプニルに騎乗し『ナイトビー』十数匹と、そしてオルグがもう1匹の『シルバー・ムーンベア』と闘っている。ロゼは何とかなっているが、他の2人は少々苦戦気味だ。俺はオルグの方に駆けながら叫ぶ。

「オルグ、そいつの相手は俺がやる！！ おまえはレイシアのフォロワーに行つてやれ！！」

「悪い！！」

オルグはそう応えると、左手の金属盾を思い切り『シルバー・ムーンベア』に叩きつける。

『シールド・バツシュ』で吹き飛ばされた『シルバー・ムーンベ

ア』が、数瞬硬直する。

その隙に俺が肉薄して大上段から剣を振り下ろすが、それよりも一瞬早く硬直から回復した『シルバー・ムーンベア』が右腕を掲げ、そのでかい爪で剣を逸らされた俺の一撃は右腕を斬り飛ばすだけに終わる。

「クソツ。今までなら爪ごと両断できていたのに」

薙ぎ払われた左腕を躲しながら、俺は吐き捨てる。

確実に魔獣が強くなっている。

片腕が無くなってバランスが取れないのか、左腕を薙いだ反動で身体が泳いでいる『シルバー・ムーンベア』に、俺は【纏気術】で気を纏わせた剣を逆袈裟に叩き込む。

斜めに両断された『シルバー・ムーンベア』が消えていくのを横目に見つつ、ロゼたちの方を確認するとあちらもちょうど終わったところのようだ。

「皆、怪我は無いか？」

俺は先程の『シルバー・ムーンベア』が落とした『精霊石』を拾いながら、皆の無事を確認する。

「掠り傷程度だから大丈夫よ」

「こつちも大した怪我はしてないぜ」

ロゼたちも各々『精霊石』を拾いながら応える。

「それにしても、ずいぶん魔獣が強力になっていましたね……」

レイシアが疲れた様子で呟いた。

「そうだな。正直、ここまで強くなっているとは思わなかったよ」

さつき闘った群れはそれほど規模の大きな群れではなかったからまだ何とかなったが、大規模の群れに遭遇してしまうとかなり厳しいものがある。

「小型の魔獣ならまだ良いけど、さつきの『シルバー・ムーンベア』みたいな魔獣は、私たちがすぐに倒すって訳にはいかないわね」  
「俺もさつき闘ったが、こっちの攻撃が効いてんのかどうかわからなかったからな……ディーンが替わってくれなかったら、苦戦してたかもしれねえな」

「オルグたちでも倒せないことはないと思うが、ロゼの言うように時間がかかるだろうな。この先は大物はなるべく俺が相手をするが、オルグたちも油断はしないでくれ。後、常に【纏気術】を使用して闘うことにしよう。これで攻撃力は大分底上げできるはずだ」

「私はまだ【纏気術】を使えないんですけど……」

ロゼとオルグは頷いたが、レイシアは不安そうに訊いてくる。

「レイシアはなるべく小型の魔獣を狙ってくれ。特に空を飛んでる奴を優先で」

「わかりました。それと気のせいかもしれないけど、何か疲れるのが早くありませんか？」

「そう言われてみれば、そうだな……」

俺はそう言いつつステータスウィンドウを開いて見てみると、確かにSPの減りがいつもより早い。

何故だ？



『マスター、それはここの空気が薄いからですよ』

不思議に思っていると、ラグが俺の疑問に答えてくれた。

「空気が薄い……確かにこの高度なら、空気は相当薄いだろうが……」

『VLO』ではそんな設定はなかった。

SPが減りやすいなんてこともなかったはずだ。

これもこの世界と『VLO』の相違点か。

『マスターの習得している風属性魔術の中に、『オキシ・サプライ』があるでしょう？ それを使えばかなりマシになるはずですよ』

ああ、あの存在する意味が謎だった魔術か。

『VLO』では意味の無い、使えない魔術と言われていたが、まさかここで役に立つとは思いもしなかった。

「デイン、何なのその魔術は？」

ロゼが訊いてくるが、酸素濃度だ何だと詳しく説明しても、理解してくれるとは思えない。

「まあ詳しい説明は省くが、この魔術を使えばSPの減少速度を通常と同じくらいにできるってことさ。ただし魔術の効果は一定時間で切れるから、その都度かけ直さなければならぬけどな」

そう言っただけ俺は全員に『オキシ・サプライ』をかけていく。

「あ、何だか呼吸が楽になりました」

「また息苦しくなったら俺に言ってくれ。かけ直すから」  
「わかったわ」

そうして俺たちは『精霊石』を拾い、攻略を再開した。

あれから何度か戦闘にもなったが、何とか全員大した怪我も無く切り抜けられていた。

そして、俺たちの目の前には神殿にあった物よりは一回り小さい『<sup>ゲート</sup>転送門』がある。

「これを潜れば、他の島に行けるはずだったわよね？」

俺が最初にした話を覚えていたのだろう、ロゼが訊いてくる。

「間違っではないが、この『<sup>ゲート</sup>転送門』で行けるのは第1群島の別の区画だろうな。『<sup>ゲート</sup>転送門』が少し小さいだろう？ 別の群島に繋がっている物は、ここに来る時に通つたのと同じくらいの大ささだ」  
「そうなんだ」

「じゃあ、どうするんですか？」

「そうだな……大抵の区画には『<sup>ゲート</sup>転送門』が2、3個はあるから、探せば別の群島に繋がっているのもあるかもしれないが……」

別の区画に行ったからといって、他の群島に繋がる『<sup>ゲート</sup>転送門』があるかどうかはわからないし、最悪行き止まりになっているのがこの迷宮の厄介なところだ。

しかも入るたびに『<sup>ゲート</sup>転送門』の繋がり方が変わるので、俺の『VLO』の知識も役に立たない。

「最終的に着く所は決まってるんだから、片っ端から入ってみようぜ」

オルグが何とも大雑把な意見を言う。

「大雑把だが、確かに一理ある意見だ。取り敢えず入ってみよう。もし行き止まりなら、別の『転送門』を探せば良いさ」

俺がそう言うつと

「わかったわ」

「わかりました」

2人が頷いたので、俺を先頭に『転送門』を潜っていった。

### 『天空島』 第1群島 第3区画

『転送門』を潜ると、やはりそこは別の群島ではなく別の区画だった。

俺に続きロゼたちもやって来たので攻略を開始する。

そして、しばらく進むと道が途切れていた。

しかし、迷宮はその先も続いている。

「ねえ、ディーン……まさかとは思っけど、ここを跳び越えるなんて言わないわよね……?」

ロゼが否定して欲しそうに訊いてくる。

「その“まさか”だよ。『天空島』にはこんな所は山ほどあるぞ?」

幸い向こうまでの距離は3mほどなので、跳べない距離ではない。

「ちなみに落ちたらどうなるんだ……？」

オルグが淵に立ち、恐る恐る下を覗き込みながら訊いてくる。

「当たり前だが死ぬな。だが幸運なことに、俺たちにはスレイプニルがいるからな。落ちる心配はしなくても良いだろう」

俺は、レイシアを乗せているスレイプニルの首を撫でてやりながら言った。

『任せてくれ、主殿。我にとってはこのくらい何でもない』

「ということだ。じゃあ、まずはロゼとレイシアが向こう側に渡ってくれ。向こうに着いた後は、魔獣を警戒していてくれ」

「わかったわ」

「わかりました」

俺がそう言うと2人が頷き、ロゼがレイシアの後ろに騎乗する。

「じゃあ、頼むぞ」

『承知した』

スレイプニルはそう言うとう宙を翔け、ゆっくりと向こう側へと渡る。

そして2人を降ろし、再びこちらに戻ってくると今度はオルグを乗せて向こう側へ行く。

俺はそれを見届けると

「よっ」と

軽く助走して跳び越える。

「3人も慣れてきたら、跳び越えてくれよ?」

俺はそう言っただ道の先へと歩き出すが

「いやいや、流石に無理だろ……」

「そんなことはないさ。3人の身体能力で充分跳び越えられる距離だ」

俺は前を向いたままオルグに答える。

「デーンがそう言うならやってみるわ」

「私はずっとこの子に乗ってるから、大丈夫です」

ロゼが前向きにそう言い、レイシアはスレイプニルを撫でながら言った。

スレイプニルは、『この子』はやめてくれ　と言いたげな目でレイシアを見る。

「じゃあ俺も乗せてくれよ、レイシア」

オルグがレイシアに頼むが

「私に言われても……スレイプニルに頼んでみたら?」

レイシアにそう言われ、オルグはスレイプニルの方を見るが、スレイプニルはあっさりと首を横に振る。

「何でだ!？」

「ハハハ、あっさり断られたな。それじゃあ、お遊びはここまでだ。気を引き締めて行くぞ」

「ええ」

「はい」

ロゼとレイシアは頷いたが

「何か納得いかねえぜ……」

オルグはまだブツブツと文句を言っている。

「文句を言っていないで、行くぞ」

「わかったよ!」

そんなことを話しながら、俺たちは先へと進んでいった。

その後何度か戦闘を行い、何ヶ所か道が途切れている所を跳び越えたりもしたが、攻略は順調に進んでいた。

そして、またもや俺たちの前には『転送門<sup>ゲート</sup>』があった。今度は別の群島へと繋がっている物だ。

「これが別の群島に繋がる『転送門<sup>ゲート</sup>』ですか？」

そう言いながらレイシアが門の枠に触れる。

「そうだ。でも行き止まりの可能性もあるから、必ずしも先に進めるとは限らないけどな。じゃあ俺が最初に潜るから、皆も続いてく

れ

俺はそう言つと『ゲート転送門』を潜つた……

『天空島』第3群島 第1区画

『ゲート転送門』を潜り抜けた俺の視界に飛び込んできたものは凄まじい数の魔獣の群れだった!!  
俺に気づいた魔獣たちが一斉にこちらを向く。

「クソツ!! 魔獣モンスターズの巣か!!」

「な、何これ!?!」

「うおっ、何だこれは!?!」

「ツ!?!」

俺の後から『ゲート転送門』を潜り抜けてきたロゼたちが叫び、レイシアに至つては絶句している。

「喋つてる暇はない!! 全員武器を構えろ、来るぞ!!」

俺がそう叫びながら剣を抜くと、ロゼたちも各々武器を構える。

「おい、デーン!! 一旦退いた方が良くないんじゃねえか!?!」

オルグがこちらに向かって来る魔獣の群れを見据えながらそう叫ぶ。

「もう遅い。『<sup>ゲート</sup>転送門』を見てみる」

俺の言葉に従ってオルグが門の方を見る。

「なんてこった……門が閉じてやがる……」

オルグが言うように、俺たち全員がこちら側に来た瞬間に枠の内側の揺らぎが消え、空間の繋がりが断たれていた。

「覚悟を決める。皆、いくぞー!!」

俺はそう言うのと剣を構え、百匹以上の魔獣の群れに向かって駆けていった。

「はあああ!!」

先頭を走ってきた『ザグジーガ』を掬いあげるように逆袈裟に斬り裂く。

すぐさま剣を振り下ろし、『ザグジーガ』の後ろから飛び出してきた『ナイトビー』を両断。

上空から『バロン・ヴァルチャー』が迫ってきたので、近くにあった岩を蹴り、三角跳びの要領で跳び上がってその細長い首を刎ねる。

「ラグ、<sup>デスサイズ</sup>【大鎌形態】だ!!」

俺の着地点にいた『シルバー・ムーンベア』に宙で前転をし、勢いをつけた踵を頭に叩き込む。

流石に耐え切れなかった『シルバー・ムーンベア』の頭が爆散する。



着地した瞬間、変化が終わったので即座に周囲を薙ぎ払う。

薙ぎ払われた大鎌デスサイスによって、俺の周囲の魔獣が10匹ほど斬り裂かれていく。

体の回転を止めつつ左の魔導銃を抜き放ち、『クイーンビー』に向けて三連射する。

放たれた弾丸が両の翅を撃ち貫くが、『クイーンビー』は構わず巨大な針をこちらに向け突っ込んでくる。

俺は躲してから斬り裂こうとしたが、右脚に『ザグジーガ』が噛みついてきて邪魔される。

「チツ!!」

俺は舌打ちをしながら上半身をスウエーさせ何とか躲すが、針が頬を掠めて切り裂かれる。

即座に『アイギス』でバックラーサイズの障壁を展開し、『シルバー・ムーンベア』が振り下ろした右腕の爪を弾く。

右脚を鋭く振り、噛みついてきた『ザグジーガ』を振り払うと『シルバー・ムーンベア』を両断し、さらに『クイーンビー』との距離を詰めて斬り裂く。

俺は周囲の状況を確認するため、素早く周りを見渡すと

「マジか……」

こちらに向かつて『エンペラー・ヴァルチャー』が2羽、ロゼたちの方にも1羽飛んで来ていた。

「やるしかないか」

俺は改めて大鎌デスサイスを構え、【闘気術】で全身にも気を纏う。

そして、渾身の力で大鎌デスサイスを逆袈裟に振り抜く。

俺に襲いかかるうとしていた『ザグジーガ』と『ナイトビー』数匹を斬り裂き、さらに黄色い閃光を纏った刃状の衝撃波が放たれる。【大鎌】<sup>デスサイス</sup>のアーツスキル『ブレイクサイス』で放たれた衝撃波が、こちらに向かっていた『エンペラー・ヴァルチャー』の1羽を両断する。

それを見届けると、俺はもう1羽の『エンペラー・ヴァルチャー』に向け駆ける。

立ちふさがり襲いかかってくる魔獣は、<sup>デスサイス</sup> 巡回させた大鎌で次々と斬り裂き、【縮地无疆】で地面を踏み砕きながら一気に『エンペラー・ヴァルチャー』へと跳ぶ。

『エンペラー・ヴァルチャー』よりさらに上空へ跳んだ俺は渾身の蹴りを放つ。

俺の蹴りをまともに喰らった『エンペラー・ヴァルチャー』が凄まじい速度で地面へと墜ちていく。

墜落した『エンペラー・ヴァルチャー』に、下にいた魔獣が数匹押し潰される。

俺は無属性魔術で中空に力場を設置してそれを蹴り、『エンペラー・ヴァルチャー』を踏み潰すように着地、すぐさま大鎌<sup>デスサイス</sup>で引つ掛けるようにその首を刎ねる。

魔術を放とうとしていた『ソーサラーオウル』の顔面に左の魔導銃の弾丸をぶち込み、右から飛びかかってきた『グラトン・ジャツカル』を3匹纏めて薙ぎ払う。

その勢いのまま、背後から迫っていた『ハーミットオウル』の足を払う。

両足を刈られ地面に倒れ込んだ『ハーミットオウル』の頭を踏み砕くと、俺の周囲にいた魔獣は全滅していた。

すぐに口ゼたちの方に目をやると、気を纏った『ネビュラ』が『エンペラー・ヴァルチャー』に巻き付き微塵に斬り裂いた。

同時にオルグの槍斧<sup>ハルバート</sup>が『シルバー・ムーンベア』の首を刎ね、もう1匹の『シルバー・ムーンベア』の胸にレイシアの槍が突き刺さ

る。

「どうやら、ロゼたちの方の戦闘も終了したようだ。

「ふう〜、流石に疲れたな……」

俺は座り込みながら呟いた。

ついでに『キュアライト』をかけ、頬の傷を癒す。

「そっちは大丈夫か!？」

俺は、同じように座り込んで休んでいたロゼたちに確認する。

「大丈夫よ! 軽傷だし、もうレイシアが治してくれたわ!」

特に怪我人は出ていないようだ。

大分息も整ってきたので、立ち上がりロゼたちの方へ歩いていく。流石にスレイプニルも疲れたのか、脚を折り畳み、伏していた。

「ある程度休憩したら『精霊石』を拾おう。その後はもう日も暮れるし、今日はここで休む。それで良いか?」

俺がそう提案すると3人とも頷いた。

「そういえば、『オキシ・サプライ』の効果が切れてるな」

俺はそう言っていると全員に魔術をかけ直す。

これでSPの回復速度も少しは速くなるはずだ。

「そっぴゃ、ここは何だったんだ?」

オルグが俺の方を向き、訊いてきた。

「私もそれを知りたいわね。見たところ、この群島にはこの区画しかないみたいだし……」

ロゼが周りを見渡しながらそう言った。

ロゼの言う通り、俺たちがいるこの島はそれなりにでかい島だが、見える範囲には俺たちが潜ってきた『転送門』<sup>ゲート</sup>の他に門は見当たらない。

でもここにはかなりの大きさの岩が多数あるので、その陰にあるかも知れないが。

「この場所に限ったことではないが、迷宮には稀に大量の魔獣がいる場所があるんだ。それでここみたいなフィールドタイプの場所だと『魔獣の巣』<sup>モンスターズネスト</sup>、『迷宮型』<sup>ダンジョン</sup>にあると『魔獣の溜まり場』<sup>モンスターズブルーム</sup>なんて呼ばれたりするな」

これらの呼称は『VLO』で使われていたものだが、特に問題はないだろう。

「オルグたちは冒険者としてかなりの数の迷宮に潜ってるはずだが、今までに見たことはないのか？」

「あゝ、言われてみれば普通より魔獣が多くいた部屋とかはあった気がするが、ここまで大規模なのは見たことねえな」

まあ滅多にあるものでもないし、そんなものかもな。じゃあ

休憩はここまですして、手分けして『精霊石』を拾ってしまおう。

後、『魔獣の巣』<sup>モンスターズネスト</sup>にはトレジャーボックスも沢山あるはずだから探してみてください」

「おっ、それは楽しみだ」

オルグが俄然やる気になった様子で立ち上がるが

「くれぐれも勝手に開けるなよ？ 致命的な罠がある可能性もあるからな」

わかっているとは思うが、一応釘を刺しておく。

「わかってるって」

そう言っただけでオルグは『精霊石』を拾いながら歩いていく。

「本当にわかっているのか……じゃあ、ロゼたちも頼む。トレジャーボックスを見つけたら、俺を呼んでくれ」

「わかったわ」

「わかりました」

ロゼとレイシアもそう言っただけで立ち上がり、各々『精霊石』を拾いながら散らばっていく。

「スレイプニルは、もうしばらく休んでいて良いぞ」

『すまん、主殿』

スレイプニルの答えを聞き、俺も『精霊石』集めを開始する。

そうしてしばらくトレジャーボックスや『転送門』<sup>ゲート</sup>を探しつつ、

『精霊石』を拾い集めていると

「デイン、トレジャーボックスを見つけたわ！ ちょっと来て！」

ロゼに呼ばれたので、声のした方へと歩いていく。

すると、ロゼの足元にトレジャーボックスが1つあった。

「早速見つけたな。それじゃあ、開けてみるか」

そう言っただけ俺は罨を確認するために、トレジャーボックスの前に  
屈み込んでスキルを発動させる。

「どう?」

「罨があるな。ちょっと待ってる よし、解除できた」  
「開けてみましょう?」

ロゼが待ち切れないといった感じで言うので

「発見者の特権だ。ロゼが開けて良いぞ」

「え? 良いの?」

ロゼがそう訊いてきたので頷く。

「わかったわ」

俺が立ち上がり横に避けると、代わりにロゼがトレジャーボックスの  
前に屈み、その蓋を開ける。

中には一足のロングブーツが入っていた。

「ブーツのようだな。 金属で補強されているから、どちらか  
と言えば『グリーブ』か?」

入っていたロングブーツは膝下くらいまでの長さで、足の甲の部  
分や踝から上の部分には白銀の金属で補強がされている。

踝の所には、両側に風切り羽の羽飾りがついている。

「女性用かしら？」

「多分そうだろうな。まあ詳しいことは後で調べよう」  
「そうね」

そう言っただけで俺は『グリーブ』をインベントリに入れ、再び『精霊石』を拾い集めていった。

その後30分ほどで『精霊石』を集め終わり、トレジャーボックスや『転送門』の探索も終わった。

結局他の門は見つからなかったので、その場で俺が空間を開き今日の攻略を終えた。

激しい戦闘もあったのでまずは順番に風呂に入り、それから食事にすることにした。

食事の準備もある女性陣が先に入り、今はオルグが入っている。

湯の処理をしなければならぬ俺は、いつも一番最後だ……

女性陣は楽しそうに料理を作っているし、オルグはまだ出てくる心配はない。

暇なので、俺はトレジャーボックスに入っていた物を詳しく調べてみることにした。

あの場所では、結局12個のトレジャーボックスを見つけることができた。

その内5つはかなりの額の『テイル』が入っていたが、残りの7つは装備品やポーションが入っていた。

まずはポーションからだ。

と言っただけで、これらはインベントリに入れた瞬間に名前がわかるので特に鑑定は必要ない。

ポーション類は『キュアポーション』が2つと、HPを回復する『ヒーリングポーション』が5つ、MPを回復する『マジックポーション』が3つ、これらがトレジャーボックス3つに入っていた。

ポーションは一気にHP、MPを回復するのではなく、一定時間をかけてジワジワと回復するアイテムだ。

緊急時に即回復という訳にはいかないが、使いどころを間違えなければ便利な物だ。

ポーションと違い一定値を一気に回復する『紋章符』というアイテムも存在するが、スキルでは作ることができず、店売りもされていない。

唯一、迷宮のトレジャーボックスから稀に入手できるだけだ。

残りの4つに入っていたのはアクセサリ、ロングソード、金属盾、それにロゼが見つけた『グリーブ』だ。

俺はアクセサリ 名称は『ムーンライト・ネックレス』 をインベントリから取り出す。

そして【鑑定】を起動、ネックレスの性能を確かめる。

名称に『月』が入っている大抵の装備品は精神異常に耐性があるのだが、これもその例に洩れず精神異常の完全耐性が付加されているようだ。

これはレイシアに持たせよう そう思いネックレスをテーブルの上に置く。

次にロングソード 名称は『ウィンドゲイザー』 を取り出し、性能を調べていく。

この剣は『セイクリッドミスリル』製で、刃渡りは90cmほどの風属性を付加されている剣のようだ。

性能は決して悪くはないが、俺たちには必要ないな。

そう思い、俺はロングソードをインベントリに戻すと替わりに金属盾を取り出す。

この金属盾には固有名称はなく、その時点で大した性能ではないということがわかる。

材質は『オリハルコン』なので、溶かして再利用させてもらうことにしよう。

金属盾をインベントリに入れ、最後に『グリーブ』 名称は『ヴァルキリーグリーブ』 を取り出そうとすると



「ご飯が出来たわよ、ディーン。って何してるの？」

出来上がった夕食を持って、ロゼが声をかけてきた。

「ん？ 暇だったし、さつき手に入れた装備品の性能を確認してたんだ」

「そうなんですか。でも食事も出来たし、食べましょう」

レイシアが料理の乗った皿を手にもって言った。

オルグがまだ風呂から出てきてないが良いのか　　と思ったが料理が出揃うとちょうどオルグが風呂から出てきた。

相変わらず、タイミングだけは良い奴だ。

全員が揃ったので夕食を食べ、その後ロゼたちが後片付けをしている間に、俺は先程の鑑定の続きをすることにした。

オルグは個人的に特訓をする　　と言って道場へ行ってしまった。後で相手をしてやるか　　そんなことを思いつつ、俺は『ヴァルキリーグリーブ』をインベントリから取り出して性能を確認する。

『これはかなりの性能を持った装備品ですね。流石は『戦乙女』の名を冠しているだけあります』

ラグが言うように、装備するとAGIが+200、STRとVITが+100とかかなりの性能を誇っている。

できれば俺が装備したいほどの性能だが、見つけた時にもロゼに言ったように、見た目も名称も明らかに女性用の装備なので諦めるしかないだろう。

「ロゼとレイシアのどちらに装備させるかが問題だな。まあどちらに装備させても、戦力を強化してくれることには違いないが……」

すると後片付けが終わったロゼとレイシアがやって来て、俺の対面にあるソファーに腰掛けた。

「それは私が見つけた『グリーブ』よね？ 鑑定していたの？」

「ああ、かなりの性能だ。それで、2人のどちらかに装備してもらおうか考えていたんだ」

「ロゼが見つけたんだから、ロゼが装備すれば良いんじゃないかしら？」

レイシアは、何でそんなことで悩んでるの　　と言いたげな感じだ。

「私は『火の精霊王の迷宮』でコレを手に入れているから、それはレイシアが装備した方が良いと思うわ」

足を組んだロゼが、今まさに『フェザーブーツ』を履いている足を軽く振りながら言った。

「ロゼ、行儀が悪いわよ。でもそんなに性能の良い装備なら、私より前線でいることが多いロゼが装備した方が良いと思うわ」

レイシアが軽くロゼを窘めながらそう言った。

「俺も2人と同じようなことで悩んでいたんだよ。戦闘での役割を考えるとロゼに装備してもらった方が良いが、レイシアのブーツは特殊な性能がある物じゃないみたいだし……ラグとアイギスはどう思う？」

『レイシアさんが、ロゼさんの装備していた『フェザーブーツ』を使うことに抵抗がないのでしたら、『ヴァルキリーグリーブ』をロゼさんが、『フェザーブーツ』をレイシアさんが装備するのが一番

良いかと思いますが」

『私もラグの意見に賛成かなあ。最終的なステータスを考えても、それが一番良いと思うよ』

アイギスの言う通り、STRとVITの上限値は『ハイダークエルフ』も『ウンディーネ・アクエリアス』も同じく750だが、AGIの上限値は『ハイダークエルフ』が1000、『ウンディーネ・アクエリアス』は1250と違っている。

この先ずつと同じ装備を使うかどうかはわからないが、現時点ではラグたちの意見が正しいだろう。

「俺も2人の意見に賛成だ。レイシア、言い方は悪いが、ロゼのお古でも構わないか？」

「私は全然気にしませんよ？むしろそんなに性能の良い物が貰えるのなら、こちらからお願いたいくらいです」

レイシアは笑顔で了承してくれた。

「ロゼもそれで構わないか？」

「私はさらに性能の良い装備になるんだから、駄目な訳ないじゃない」

「わかった。じゃあ、後は2人で装備を交換しておいてくれ。俺は風呂に入ってくるよ」

俺はそう言うとロゼに『ヴァルキリーグリーブ』を手渡し、風呂に入るために立ち上がった。

そして風呂場の方へと歩いていくが、途中でオルグの相手をしようと考えていたのを思い出し、道場の方へと進路を変える。

道場に着くと、オルグがまだ訓練をしていたので軽く30分ほど組み手をする。

組み手を終わると、オルグが汗をかいたからもう一度風呂に入りたいと言いだしたので、恐らく冷めているであろう湯を温め直すため、面倒だが俺も風呂場へと行く。

一瞬、熱湯にしてやるるか　という考えが頭を過ったが俺も後で入るので、普通に温めるだけにした。

そして風呂から出たら工房に呼びに来るように言っただけで、俺は待っている間に『鎖帷子<sup>チェインメイル</sup>』の鎖を作るために工房へと向かった。

俺はさっそく鎖の材料を倉庫に取りに行くが、鎖帷子<sup>チェインメイル</sup>の材質をどの金属にするか、全く決めていないことに気づく。

取り敢えず、倉庫に置いてある金属類を物色しながら考える。

鎖を全て同じ金属で作っても良いが、どうせかなりの数の鎖を作らなければならぬのなら、色んな金属を使ってみるのも面白そうだ。

今日だけで全ての鎖を作るのは到底不可能なので、まずは防御力を高めるのに必須な『オリハルコン』と『アダマンタイト』の合金で鎖を作ることにして、その2つの金属の塊を持って工房に戻る。

工房に戻った俺は、金属塊を炉に入れて溶かし、合金を作る。

結構な量の合金が出来たが、鎖1つ1つに必要な金属は大した量ではないので余るかもしれない。

そんなことを思いながら出来上がった合金を少量金床の上に取り出し、『鍛冶』のスキルウィンドウを開いて『鎖』を選択した後ハンマーで叩いていく。

20回ほど叩くと、直径1cmくらいの円形の鎖が1個出来上がった。

「鎖1個作るのに、20回も叩かないといけないのか……」

仮に鎖を1万個作るとしても、20万回も叩くのか……

ほとんどの生産系プレイヤーが挫折した理由が良くわかった。

これはキツイ　が、文句を言っても仕方ないので黙々と鎖を作

っていく。

それから30分ほど、工房にはハンマーの音だけが響いていた。

「デーン、風呂が空いたぞ」

風呂から出てきたオルグが、約束通り呼びに来たようだ。

「わかった」

俺はオルグに返事をしてハンマーを置いた。

「何作ってんだ？」

オルグが小さく山積みになっている鎖を見ながら、不思議そうに訊いてきた。

一心不乱に作っていたから気がつかなかったが、どうやら鎖は5百個ほどはありそうだ。

「新しい防具を作ってたんだよ。　まだ完成にはほど遠いがな」

「まあ夜も遅いし、程々にしとけよ？」

「ああ。俺も風呂に入ったら寝るよ」

俺の返事を聞くと、オルグは工房を出ていく。

俺はやはり余った合金をインゴットにする。

インゴットを倉庫に片付け、俺は工房を出て風呂に入った後眠りに就いた。

あれから3日経過し、俺たちはあちこちの群島を行ったり来たりしながら、やっとの思いで『風の精霊王』がいる天空島で最大の島『ストリーム・ゼロ』の手前の島までやって来ていた。

最も大変だったのが砂漠の島で、レイシアが暑さでダウンしてしまい、実質3人での戦闘が連続した時はかなりキツかった。

次に大変だったのが、直径10mほどの無数の浮島で形作られた島だ。

そこはそれらの浮島を跳び移りながら進んでいったのだが、それだけならば特に難しくはない。

しかし、魔獣がひっきりなしに襲いかかってくるから、面倒臭いなんてものじゃなかった。

しかも魔獣に気を取られたオルグが浮島から転落しそうになってスレイプニルに助けられたりと、様々なことがあったが何とか全員無事にここまで来ることができた。

「ラグ、やはりここにも番人がいるのか？」

「はい、います。ここにいるのは、『ライトニング・フェニックス』と『サンダーバード』ですね」

ラグがあまり聞きたくはなかった魔獣の名前を言った。

「どんな魔獣なの？」

「『ライトニング・フェニックス』は神獣で、『サンダーバード』は魔獣だ。どちらも『雷属性魔術』を操る厄介な奴らだ」

「雷属性？ 聞いたこともねえが、そんな属性があるのか？」

「ああ。恐らく魔獣専用の属性だろう。特徴は全ての魔術に麻痺が付加されていて、さらに速度がかなり速い。魔術の発生を見てからでは、躲すのは難しいだろう」

「そんなのとどうやって闘うんですか？」

「なるべく相手の行動を先読みして、躲しながら闘うしかないだろうな」

『マスターが言うように闘うしかないでしょうね。マスターとロゼさんは、マジックシールド魔導盾で防ぐことができますとは思いますが。後、雷属性は魔獣専用の属性ではありませんよ』

ラグがさらっと聞き捨てならないことを言った。

「何！？　と言うことは、俺たちも雷属性を使うことができるのか？」

『使えるのはマスターだけです。ですが、今はそのことは置いておきましょう』

『VLO』ではそんなことは聞いたこともなかったので気にはなるが、今は目の前のことに集中しよう。

「それじゃあ、皆行くぞ」

俺の言葉に全員が頷き、俺たちは『ライティング・フェニックス』のいる場所へと踏み込んだ。

そこには雷光を纏う20mほどの巨大な鳳凰『ライティング・フェニックス』が1羽と、大きさはその半分ほどだがこちらも雷光を纏う巨鳥『サンダーバード』が10羽、悠々と空を舞っていた。

俺たちが踏み込むと、『サンダーバード』の1羽が俺たちに気づき鳴く。

すると他の奴らもこちらを向き、一斉に凄まじい鳴き声をあげる。纏った雷光が一層輝きを増し

「来るぞ！！　散開しろ！！」

俺たちが散開した瞬間、直前まで俺がいた場所に雷鳴とともに雷が落ちる。

「『ライトニング・フェニックス』は俺が殺<sup>や</sup>る！！　ロゼたちは『サンダーバード』を頼むぞ！！」

「わかったわ！！」

ロゼの返事を聞き、俺は『ライトニング・フェニックス』へと駆けける。

俺の後を追うように背後に次々と雷が落ちる。

狙いを定めさせないようジグザグに走りながら距離を詰め、ある程度まで近づくと【縮地無疆】で一気に跳ぶ。

宙にいる『ライトニング・フェニックス』に向け剣を一閃するが、当たる直前で剣が不自然に逸れる。

『ライトニング・フェニックス』が纏う高圧の電撃で弾かれたのだ。

「チツ！！」

俺は舌打ちし、『アイギス』に魔力を込める。

次の瞬間雷光が閃き、展開した障壁に雷が直撃する。

凄まじい閃光と爆音が発生するが、雷は全て障壁によって弾かれていた。

地面に着地した俺はすぐさま跳ぼすと膝を曲げたが、『ライトニング・フェニックス』がその巨大な翼を激しくはためかせたのを見て、咄嗟に後ろに跳ぶ。

その瞬間烈風が巻き起こり、さらに無数の雷球が俺に迫る。

直撃しそうな雷球は障壁で弾き、躲しながら再び『ライトニング・フェニックス』との距離を詰める。



地を蹴り、『ライトニング・フェニックス』へと跳び、空中に力場を設置してそれを蹴り、跳躍の軌道を変える。

寸前まで俺のいた場所を雷が貫いていく。

そのまま力場を設置しつつ一気に、『ライトニング・フェニックス』の上空まで駆け上がり渾身の力で剣を叩き込もうとするが、急降下して来た『サンダーバード』に阻まれる。

俺は落下しながら左の魔導銃を抜き、『サンダーバード』に向けて弾丸を放つが翼を撃ち貫くだけに終わる。が、体勢を崩したところをスレイプニルに騎乗したレイシアの槍が貫く。

それを見届けると再び力場を設置、それを蹴って上昇し、『ライトニング・フェニックス』の翼を斬り裂く。

その瞬間、『ライトニング・フェニックス』が纏う雷光が一際輝きを増し、周囲に凄まじい電撃が放たれる。

「ぐわっ!!」

まともに電撃を浴びた俺は吹き飛ばされるが、何とか空中で体勢を立て直し両足で地面に着地する。

コートが薄っすらと煙を上げ、体が少し痺れているが戦闘に支障はないだろう。

横目でロゼたちの方を確認すると、残る『サンダーバード』は半数にまで減っている。

あちらは後少しで終わりそうだ。

そう思い、『ライトニング・フェニックス』を見ると、明らかに先程までより滞空している高度が下がっている。

俺が斬り裂いた翼は深手ではないが、確実にダメージは与えていたようだ。

「こちらも終わらせるぞ」

俺はそう呟き剣を握り直すと、【縮地无疆】で一気に距離を詰め、地面を踏み碎きながら『ライトニング・フェニックス』へと跳ぶ。放たれた雷球は剣で斬り裂き、障壁で弾く。

そして、渾身の力を込めて剣を振り下ろす。

再び電撃で剣が弾かれそうになるが、さらに力を込め一気に左の翼を斬り飛ばす。

片翼を失った『ライトニング・フェニックス』がバランスを失い、錐揉み状態で墜落していく。

俺もその後を追い、『ライトニング・フェニックス』が地面に激突した瞬間、その胴体の上に着地しつつ剣を突き刺した。

完全に息の根を止めたことを確認すると、『ライトニング・フェニックス』が『精霊結晶』と尾羽を残し、光の粒子になり消え去った。

ロゼたちの方を確認すると、あちらも最後の『サンダーバード』を倒し終わったところのようだ。

俺は電撃で負った軽度の火傷を魔術で癒し、ロゼたちの方へと歩いていく。

「そっちは無事か？」

俺は肩で息をしているロゼたちに声をかけた。

「え、ええ。何とかね……」

「雷属性か……確かに厄介だったぜ。まだ痺れてやがる……」

「大丈夫、オルグ？ 『キュア・ウォーター』」

レイシアが水属性回復魔術『キュア・ウォーター』をオルグにかける。

この魔術はHPを回復するだけでなく、状態異常も回復することができる。

「すまねえ、レイシア。もう大丈夫だ」

「それじゃあ、『精霊石』を拾ったら先に進もう。この奥に『ストリーム・ゼロ』に繋がる『転送門』があるはずだ」

「わかったわ」

そうして俺たちは『精霊石』などを拾った後、奥にあった門を潜り、精霊王のいる『ストリーム・ゼロ』へと向かった。

## 第15話 『ストリーム・ゼロ』

『転送門』<sup>ゲート</sup>を潜り抜け、『ストリーム・ゼロ』へと辿り着いた俺たちは、早速攻略しよう！ とはならず、『ライトニング・フェニックス』との闘いで疲れ果てたのでその場で空間を開き、今日は休む事となった。

ロゼとレイシアお手製の夕食を食べた後、順番に風呂に入った。

ロゼたちは風呂に入った後、リビングで暫く話をする事にした様だが、俺は鎖帷子製作の続きをする為に工房へと行き、今日も5百個程の鎖を作ると寝る事にした。

これで出来上がった鎖は2千個と少しになったが、まだまだ先は長い。

部屋に帰る途中にリビングを覗いたが、彼女たちはもう眠った様だ。

ここ最近、眠るのは俺が一番最後の様だ。

迷宮の攻略もあるので、体調には気をつけておかないとな。

そんな事を考えながら、俺は眠りに就いた。

『ストリーム・ゼロ』第1階層

俺たちはいつもと同じ様に訓練と朝食を済ませた後、『ストリーム・ゼロ』の攻略を開始する事になった。

「かなり風が強いな……」

『ここは、風が生まれる地、ですからね』

「そうだったな」

ラグが言うには、この『ストリーム・ゼロ』はヴェルガディア大陸に吹く風の発生地らしい。

流石は『風の精霊王』がいる場所だ。

「それでデイン、ここはどんな迷宮なんだ？」

オルグが『ストリーム・ゼロ』にそびえ立つ、巨大な岩山を見上げながら訊いて来た。

「そういえば、昨日はその話はしなかったわね」

ロゼがレイシアの髪を三つ編みに結いながら、そう言った。

風が強いので、2人は『風皇狼の迷宮』の時の様に髪を束ねている。

「そうだったな。この迷宮は『塔型』<sup>タワー</sup>で、全50階層だ。岩山中に登るんじゃなく、外側を登っていく。注意点はこれまでと同じく、落下に気をつけてくれ」

ここは岩山の外壁を、蔦などを使って登っていくタイプの迷宮だ。ただし強風が吹き荒れているし魔獣が襲い掛かって来るので、常に転落の危険は付き纏う。

「ここもかなり大変そうですね……」

「そんなに急ぐ事は無いさ。この攻略には大体1週間位を考えているから、焦らずゆっくりと行こう」

「わかったわ。それじゃあ、行きましようか」

「ああ」

俺たちはロゼの言葉に頷き、『ストリーム・ゼロ』の攻略を開始した。

俺たちは岩山の道を登っていく。

道幅は5m程と狭くは無いが、片側は崖になっていて、転落すれば待っているのは『死』だけだろう。

「来たぜ！！ 魔獣だ！！」

魔獣を見つけたのか、オルグがそう叫ぶ。

俺は前方を確認すると『グラトン・ジャツカル』や『シルバー・ムーンベア』を含む20匹程の群れが、山の反対側の空からは『バロン・ヴァルチャー』や『キングモス』の上位種『グレート・キングモス』などが10匹程迫っていた。

「これはまた大群ね……」

「でも、もう慣れました」

そう言って、ロゼは鞘から剣を引き抜き、レイシアはスレイプリルの上で槍を構える。

「くれぐれも油断はするなよ？ いくぞ！！」

俺は2人に注意を促すと、剣を抜きながら群れへと駆けた。

「ロゼとレイシアは空から来る奴等を頼む！！ オルグは俺と一緒に前から来る奴等を殺るぞ！！」

俺は駆けながら3人に指示を飛ばす。

「『ノヴァ・エクスプロージョン』」

俺は魔獣の群れに向けて魔術を放つ。

若干山側に近い所に着弾した炎弾が炸裂し、魔獣が何匹か崖を転げ落ちていく。

「よし、狙い通り。ラグ、【グレートソード斬馬剣形態】」  
『了解しました』

変化が終わった大剣を両手で握り、渾身の力で薙ぎ払う。

右から薙ぎ払われた大剣に、『グラトン・ジャツカル』と『ザグジーガ』が数匹纏めて斬り裂かれる。

その後ろから飛び掛かって来た『ポイズナス・スネーク』を蹴り飛ばし、『ハーミットオウル』にぶつける。

その衝撃で怯んだ『ハーミットオウル』を左から逆袈裟に両断、そのまま振り下ろし『シルバー・ムーンベア』も幹から竹割りに両断する。

すると、俺の左側をオルグが【ハルバート槍斧】のアーツスキル『ソニック・チャージ』の衝撃波を纏った突進で、魔獣を砕きながら突き進んでいく。

最後に構えた槍斧を『ハルバートシルバー・ムーンベア』の腹に叩き込んで、オルグの突進が止まった。

「オルグ!! 出過ぎだ、下がれ!!」

あの位置では咄嗟にフオーロし辛いし、空から来ている魔獣とこちらの魔獣に囲まれる。

「おう!!」

オルグは更に『ドライディッド・ラディウス』で周囲の魔獣を薙ぎ払い、俺の隣まで下がって来た。

「あまり無茶はするなよ？」

俺はオルグにそう注意し、正面から襲い掛かって来た『シルバー・ムーンベア』に大剣を右袈裟切りに叩き込む。

少し抵抗を感じたが構わずに大剣を振り抜き、斜めに斬り裂く。

これで陸側の魔獣は残り少しだ。

俺はロゼたちが対応している、空側の魔獣を確認する。

ロゼは魔術や『ネビュラ』で、レイシアも魔術やスレイプニルに騎乗し槍で切り裂くなどと迎撃をしているが、あまり捗ってはいない様子だ。

「オルグ、残りは頼むぞ！！ 俺はあちらの加勢に行く！！」

「任せとけ！！」

オルグが『グラトン・ジャツカル』を薙ぎ払いながら応えるのを聞き、俺は【疾風迅雷】を起動し、更に空中に力場を設置しながら空を駆ける。

そのまま『グレート・キングモス』に肉薄し、気づかれる前に駆け抜けながら両断する。

その様子を見た女性陣2人が、ギョツとした顔をしている。

それを少し可笑しく思いながら【疾風迅雷】を停止、【縮地无疆】で力場を砕きながら山側へと跳ぶ。

靴底で地面を削りながらロゼの傍に着地すると

「ディーン、何て無茶をするの！？」



『バロン・ヴァルチャー』を、気を纏った『ネビュラ』で斬り裂いたロゼに怒られた。

「すまん、すまん。ほら、まだ魔獣は残っているぞ？ 文句なら後で聞くから」

俺はそう言いながら、右の魔導銃を抜き『ストームバット』を撃ち貫いた。

「後で覚悟しておきなさいよ」

ロゼは低い声でそう言うと、最後に残っていた『グレート・キングモス』に『デモンズ・スピア』を放つ。

放たれた漆黒の槍は狙い変わらず『グレート・キングモス』に突き刺さり、爆散させた。

空の魔獣は殲滅したので、オルグが相手をしている方を確認すると、あちらも終わった様だ。

「デーン、さっきのはどういう事かしら……？」

後ろから恐ろしいまでに低くなったロゼの声が聞こえて来る。

「何の事でしょうか、ロゼさん……？」

俺は恐る恐る振り向きながらそう言うと、鬼気を纏ったロゼが立っていた。

「何の事じゃ無いわよ！？ 何であんな危険な事をしたのよ！？ 落ちてたら、あなたでも怪我じゃ済まなかったわよ！？」

ロゼが両手で俺のコートの首元を掴み、揺さぶりながら叫ぶ。

「お、落ち着け、ロゼ……俺もか、考え無しに、あんな事をし、した訳じゃない……ち、ちゃんと落ちないよ、様に考えてたから……」

かなりの勢いで揺さぶられているので、まともに話せない。というか、首が絞まって……

「ロゼ、そのくらいにしておいたら？ デイーンがグッタリして来てるわよ？」

「え！？ わぁ、ごめんー！」

ロゼがやっとな手を離してくれた。

「ゲホツ……死ぬかと思った……」

「ロゼを許してあげてね、デイーン。ロゼはあなたが心配だったのよ。」

俺が咳き込んでいると、レイシアがそんな事を言ってきた。

「な！？ 何言ってるのよ、レイシア！？ 私はただ、いつも私たちに無茶するなって言ってる、デイーンが一番無茶してるから……」

ロゼが慌てた様子でそう言うが

「だから、心配だったんでしょっ？」

とレイシアがロゼの言葉に割り込む。

「~~~~ツ!!」

ロゼは肩を怒らせて向こうへ歩いて行って仕舞った。  
心なしか、顔が赤かった気がするが……

「おい、おまえ等も『精霊石』を拾うのを手伝えよ!」

一人で『精霊石』を拾っていたオルグが、声を掛けて来る。

「じゃあ、私はオルグを手伝って来るわね? 後はあなたに任せ  
るわ」

そう言いながらレイシアは意味深な笑みを浮かべると、オルグの  
方へ歩いていった。

ロゼはイライラした様子で、道の端っこに立っている。

『マスター、ロゼさんの気持ちに気づいていない訳では無いので  
しよう?』

ラグが俺だけに話しかけて来た。

まあ……な

ロゼがただ俺を心配しただけじゃないというのは、俺も薄々気づ  
いていた。

俺はそこまで鈍感じゃない。

『マスターは罪作りよねえ』

アイギスが茶化す様に言って来る。

茶化すな。ロゼの気持ちは素直に嬉しいが、俺はこの世界の人間じゃないんだぞ？ それにいずれ元の世界に戻るんだ。応えられない訳、無いじゃないか……

だから、気づいてないフリをしてロゼと、主に自分を誤魔化しているのに……

『一応言っておきますが、この世界に残るといふ選択肢もあるのですよ……？』

わかっているよ、そのくらい。だが、それは向こうの世界の人達を捨てるって事だぞ……

今は俺の事は忘れているかもしれないが、向こうにも俺が大切に思う人達はある。

『でも、向こうに還るにしてもこっちの世界の人達を捨てるって事だよ？』

わかっている、わかっているよ……

『今、考えても結論は出ないでしょう。それに、これはマスターが答えを出さなければいけない問題です。私たちがこれ以上、口出ししてはいけません』

『わかったわよ、ラグ』

『取り敢えず、ロゼさんに話しかけてみてはどうですか、マスター？』

わかった

俺はラグの言葉に頷き、ロゼの方へと歩いていき

「ロゼ、さつきはすまなかつた。心配をかけたな」

ロゼの背に声を掛けた。

「本当よ。私がどんなに心配したか、わかってる？」

ロゼは振り向かないまま、そう言った。

「ああ、わかってるよ。これからは気をつける」  
「なら良いわ」

ロゼがこちらに振り向きながら、そう言った。

「じゃあ、オルグたちに合流するか」

俺はそう言って、彼等の方へ歩き出す。

「……後、レイシアが言ったのは……」  
「ん？ 何か言ったか？」

歩き出した俺の背に向かってロゼが小さく声を掛けるが、聞き取れなかったフリをして訊き返すと

「何でも無いわ！」

そう言ってロゼは俺を追い抜いて、先に進んでいって仕舞った。もの凄い罪悪感を感じるが、今はこの気持ちは置いておこう……その後、『精霊石』を拾い終わっていたオルグたちと合流し攻略を再開した。

『ストリーム・ゼロ』第6階層

あれからも幾度となく魔獣に襲われ、多少の怪我を負いながらも何とか切り抜けられていた。

現在、第6階層を攻略中で今はロゼが道端の茂みから、薬草を採取している。

ロゼには悪いが、俺たちは周囲を警戒しつつ休憩中だ。

岩山の壁に寄り掛かりながら魔獣を警戒する為に周囲を見渡していると、少し前方の木に白い鳥が数羽止まっているのが見えた。

「なあ、ラグ。アレって『シルフィード』か？」

『そうみたいです。』

「幻影じゃ無いよな？」

『幻影では無い様ですね。あの鳥は自由に迷宮を出入りできますから、外から来たのでしょうか。それがどうかしましたか？』

「いや……」

『シルフィード』とは鳩より少し大きい白い鳥の魔獣で、尾羽が長いのが特徴だ。

気性は大人しいので、『VLO』では【テイミング調伏】で『アガシオン召喚獣』にして、連絡手段として良く用いられていた。

何故なら街中やフィールドではプレイヤー同士はショートメールで連絡を取り合う事ができたが、迷宮の中ではその手段は使えず、殆んどプレイヤーは『シルフィード』を伝書鳩の様にして連絡を取り合っていた。

そんな事を思い出し、何羽か捕まえてゼノンやジェラルドさんに渡しておくか、と考え、早速実行に移す事にする。

『シルフィード』はかなりの飛翔速度なので、飛ばれてしまうと捕まえるのは困難だ。

【縮地無疆】で一気に距離を詰めて捕まえようと構えると

『マスター、何をする気ですか？』

と、ラグが訊いて来た。

「『シルフィード』を捕まえる」

『何でまたそんな事を……？』

「まあ良いから、見てろって」

俺はそう言うのと地面を蹴り、『シルフィード』の元へと跳び、気づかれる前に両手で抱える様に3羽を捕まえる。

俺の腕から抜け出そうと暴れる『シルフィード』を抱え直し、【テイミンク調伏】を起動しながら皆の所へと戻る。

このまま2分も抱えていれば、『アガシオン召喚獣』になる筈だ。

「何してんだ、おまえ……？」

オルグが変な奴を見る様な目で、俺を見ながら訊いて来る。採取を済ませたロゼやレイシアも、同じ様な目をしている。

「『シルフィード』を捕まえてたんだよ。中々可愛いだろ？」

俺は『契約』が終わり、大人しくなった『シルフィード』を見せた。

「確かに可愛いわね。でも、捕まえてどうするの？」

ロゼがそう訊きながら、俺の腕の中の『シルフィード』を撫でる。

「こいつ等は連絡手段として使えるから、ゼノンやジェラルドさんに渡しておこうかと思ってな」

「そうだったんですか。色んな魔獣がいるんですね……」

レイシアは納得がいったという風に、頷いている。

「そら、暫くは自由にしてな。それで何が採れたんだ、ロゼ？」

俺は『シルフィード』を放してやりながら、ロゼに訊いた。

『シルフィード』たちは空に舞い上がっていく。

既に『契約』は結ばれているので、何処にいても【召喚】で呼び出せる。

「『スカイ・ミント』って薬草ね。どんな薬草か知ってる？」

ロゼが『スカイ・ミント』を見せながら、訊いて来た。

「また珍しいのが採れたな。これは『AGIエクステンド・ポーション』の原料になる薬草だな。料理に使っても、AGIが上がるんだぞ？」

『AGIエクステンド・ポーション』は飲むと、AGIが20も上昇するアイテムだ。

しかも『スカイ・ミント』は名前の通りミントの様な爽やかな味で、料理に使ってもAGIが10も上昇する希少な薬草だ。

「それはすげえな……」



「早速、今晚の料理に使ってみたいわ」

レイシアが目を輝かせて、『スカイ・ミント』を見る。

「ポーションにもしたいから、全部は使わないでくれよ？ じゃあ、先に進もう。まだ陽が沈むまでは暫く時間があるから、もう1階層くらいは登っておきたい」

「わかったわ。行きましょう」

ロゼが手渡して来た『スカイ・ミント』をインベントリに入れ、俺たちは傍にあった蔦を登り、第7階層へと進んでいった。

結局その日は、第7階層を粗方攻略すると休む事となった……

## 『ストリーム・ゼロ』第18階層

今日も朝から迷宮の攻略をし、第18階層まで辿り着いていた。上の階層に登る程、風は強くなり、今や台風並みの突風が吹き荒れている。

なので風に飛ばされない様に全員、少し前傾姿勢で進んでいる。

「皆、飛ばされるなよ！」

俺は風の音に負けない様に、大声で叫ぶ。

「これはキツイぜ！ こんな状態で魔獣に襲われたら、最悪だな

……！！！」

「嫌な事、言わないでよ！」

まあ魔獣に襲われない、何て事は絶対に無いからいずれ襲われるがな……

そんな事を思っていると

「案の定、来たな……」

前方から『風狼』2匹を含む群れと、空からは『ウインドドラゴン』1匹がやって来た。

「武器を構えろ、魔獣だ!!」 『風狼』と『ウインドドラゴン』もいるから、気をつける!!」

俺は叫びながら、剣を抜く。

「オルグがあんな事言うから!!」

「俺の所為かよ!!」

「2人とも、そこまで!! 来ますよ!!」

レイシアが槍を構えながら、言い合いをしていた2人を注意する。

「ラグ、【鋼糸形態】」

『了解しました』

手甲への変化が終わると、すぐさま鋼糸を『ウインドドラゴン』に放つ。

放たれた鋼糸は『ウインドドラゴン』に巻き付き

「おらあああ!!」

俺は渾身の力で鋼糸を引っ張り、『ウインドドラゴン』を前方の群れへと叩き付ける。

流石に『風狼』には躲されたが、数匹の魔獣を巻き込みながら『ウインドドラゴン』が地面に激突する。

「『シャドウブレード・ミリアド』!!」

『ウインドドラゴン』が地面に激突した瞬間、ロゼが魔術を放ち無数の闇の刃が魔獣を斬り裂いていく。

「ラグ、『<sup>グレートソード</sup>斬馬剣形態』だ」

俺は『ウインドドラゴン』に巻き付けていた鋼糸を解き、すぐさま手甲を大剣に変化させる。

変化が終わった大剣が気を纏い、紅い閃光を放つ。

俺がその大剣を薙ぐと、三日月型の無数の剣閃が放たれる。

数少ない【<sup>グレートソード</sup>斬馬剣】の遠距離アーツスキル、『スラッシュ・ハリケーン』だ。

放たれた紅い剣閃が『シルバー・ムーンベア』や地面に伏していた『ウインドドラゴン』などを両断、更に『風狼』の左前足を斬り飛ばしながら奔る。

「遠距離でこれ以上削るのは無理か……仕方無い。3人とも、いくぞ!!」

できれば遠距離からの攻撃で倒して仕舞いたかったが、流石に無理か。

俺は3人に声を掛け、大剣を構えながら群れに向かって駆ける。

最初に飛び掛かって来た『グラトン・ジャツカル』を逆袈裟に斬り上げ、そのまま『デスシーカー』に振り下ろし叩き斬る。

そのまま魔獣たちの間を駆け抜け、未だ無傷の『風狼』と対峙する。

振り下ろされた右前足を大剣で防ぎ、腹に向け蹴りを放つ。

『風狼』は【縮地】で後ろへと跳んで蹴りを躲すが、俺も【縮地无疆】で後を追う。

俺より数瞬早く着地し、鋭い牙が生えた巨大な口を開けて噛み付いて来た『風狼』を大剣で受け止める。

『風狼』は大剣に噛み付き俺の動きを止め、前足の爪で斬り裂こうとして来るが、俺はそれより一瞬早く右拳を『風狼』の腹に押し当て、【格闘術】のアーツスキル『浸透勁』を放つ。

その瞬間、『風狼』の口から血が溢れ出す。

このアーツスキルは防具などを貫き、体内に衝撃を徹す技だ。

絶命した『風狼』が崩れ落ち、光の粒子になり消える。

『風狼』の吐き出した血液も同じ様に粒子になり消えていくのを確認しながら、ロゼたちの方を見るとあちらも残すは雑魚ばかりだ。もう暫くすれば、終わるだろう。

俺も参加してさっさと終わらせるか、と思つてそちらに駆け出そうとする。

「ッ!？」

悪寒を感じ、咄嗟に振り向いた。

「何だ、あいつは……」

俺が振り向いた先にいたのは、3対6本の腕を持つ黄金に輝く巨大な熊だった。

俺が今までに見た事が無い魔獣だ。

咄嗟に【リーブラの魔眼】を起動し、魔獣のステータスを確認する。

「『ゴールデン・フルムーンベア』……?」

確認したステータスには『ゴールデン・フルムーンベア』とあった。

『マズイですよ、マスター!! あれは『風狼』や『ウインドドラゴン』よりも上位の神獣です!!』

「何だと!？」

『ゴールデン・フルムーンベア』は既にこちらに向かって走り出している。

俺はチラリとロゼたちの方を確認するが、まだ魔獣の殲滅をしている。

援護は期待できないか……

俺は覚悟を決め、大剣を構え『ゴールデン・フルムーンベア』へと駆け出す。

俺は巨大熊の手前で跳び、体重を乗せ大剣を振り下ろす。

大剣を防ぐ為か、巨大熊は右腕の1本を掲げる。

俺は構わず腕ごと両断しようとするが

「チッ!！」

大剣は腕を半ばまで斬り裂くだけに止まる。

竜種の鱗程では無いが、硬い。

残る5本の腕で俺を捕まえようとして来る巨大熊の腕を蹴り、俺は後方へと跳び退る。

「毛皮に覆われてるだけなのに、何て硬さだ……」

俺はそう眩きつつ宙で1回転して、着地する。

『ゴールデン・フルムーンベア』は俺が斬り裂いた腕を舌で舐めている。

すると傷口が泡立ち、あっという間に傷が塞がって仕舞った。

「しかも、再生能力持ちかよ……」

かなり厄介だ。

生半可な攻撃では、また再生されて仕舞う。

「ラグ、【通常形態】だ。それと【魔法剣】起動、『クラウド・ソラス』」

『了解しました』

大剣が片手剣へと変化し、業火を纏う。

更に気を纏わせて威力を高め、俺は【疾風迅雷】を起動し駆ける。間合いに入った瞬間、逆袈裟に斬り上げ、右腕の1本を斬り飛ばす。

すかさず身を屈め薙ぎ払われた腕を躲し、右斜め前に跳ぶ。

俺のいた場所に腕が振り下ろされ、地面が抉れる。

更に薙ぎ払われる腕を少し頭を下げたが、髪が数本宙を舞う。

残る2本の腕が俺を捕まえようと両側から迫るのを上に跳んで躲し、剣を振り下ろす。

頭を狙ったが2本の腕に阻まれ、その腕を斬り飛ばすだけに終わる。

気を纏わせた蹴りで頭を砕こうとするが、それも腕で防がれ、俺はその反動で大きく跳び退った。

俺が斬り飛ばした腕の切り口は完全に炭化し、再生する様子は見られない。

「残る腕も半分だ。一気にケリをつけてやる」  
『ええ、終わらせましよう』

更に魔力も纏わせる。

白熱化した炎を纏う剣を構え、俺は【縮地无疆】を起動、『ゴールデン・フルムーンベア』の頭上まで跳躍し、渾身の力で剣を振り下ろす。

巨大熊も残る3本の腕でガードをするが、その腕ごと斬り裂いていく。

両断された瞬間、燃え上がり、『ゴールデン・フルムーンベア』は灰になった。

灰が風に流されていくと、そこには『精霊結晶』と『金熊の毛皮』が残っていた。

「ふう。まさか、俺が知らない魔獣が出て来るとはな……」

俺も『VLO』にいた全てのモンスターを知っている訳では無いが、この『ストリーム・ゼロ』にこんなヤツはいなかった筈だ。

「ディーン、大丈夫!？」

魔獣の殲滅を終えたロゼたちが、こちらに駆け寄って来た。

「そつちも終わったみたいだな」

「こつちに残ってたのは、雑魚ばかりだったからな。それよりさっきの魔獣は何だったんだ?」

「『ゴールデン・フルムーンベア』と言う神獣らしい。俺も見たのは、さっきが初めてだ」

「ディーンが知らない神獣ですか……『風狼』や『ウインドドラゴン』に加えて、そんなのも出るなんて……」

「ラグが言うには『風狼』とかよりも上位の神獣らしい。実際、かなり強かった」

俺がそう言うと、3人の顔が引き曇る。

「なるべく俺が相手をする様にはするが、皆も注意だけはしておいてくれ」

「わかったわ」

そして、俺たちは『ゴールデン・フルムーンベア』の攻撃パターンや特徴などを話しながら『精霊石』を拾い集め、先へと進んでいった……

『ストリーム・ゼロ』第25階層

攻略開始から3日目

「来い、スレイプニル!!」

俺が『ハーミットオウル』を斬り捨てながらそう叫ぶと、レイシアが跳び降り、スレイプニルがこちらに駆けて来る。

俺が跳び乗ると俺の考えがわかっているのか、スレイプニルは空中からブレスや魔術を放っている『ウインドドラゴン』に向けて翔ける。

「ラグ、【馬上槍形態】!!!」



刀が馬上槍<sup>ランス</sup>に変化し、俺はそれを右手で握り更に脇に抱える様にして構える。

俺が【馬上槍<sup>ランス</sup>】のアーツスキル『ソニック・チャージ』を起動すると、俺だけで無く、スレイプニルまでスキルの閃光を纏う。

「このまま突っ込めー！」

『承知』

俺たちは更に速度を上げ、衝撃波を発しながら『ウインドドラゴン』に突撃する。

『ウインドドラゴン』も魔術やプレスで迎撃して来るが、それは全て衝撃波によって逸らさる。

とうとう『ウインドドラゴン』と接触、俺たちはその腹を突き破り、背中側へと抜ける。

腹に大穴が空いた『ウインドドラゴン』が、墜落ながら消えていく。

これでこの群れの殲滅も終了した。

スレイプニルがゆっくりと皆の所へ戻っていく。

「漸く半分か……」

スレイプニルから降りながらそう呟く。

「ええ。でも、攻略のペースは結構速い方じゃない？」

ロゼが『精霊石』を拾いながら、そう話し掛けて来た。

「そうだな。元々1週間くらいを予定してたし、ペースは速いな」

俺も『精霊石』を拾いながら、そう返す。

「じゃあ、何を気にしてるの？」

「ああ。まだ半分の25階層なのに、『コレ』だから……」

俺は周囲を見渡しながらそう言った。

俺たちの周囲には魔獣や神獣が倒れ伏し、光の粒子になり消えていつている。

だがその割合は、明らかに魔獣より『風狼』や『ウィンドドラゴン』などの神獣の方が多い。

「そうね……かなり、神獣の出現率が上がって来てるわね……」

「レベルが速く上がるから悪い事ばかりでは無いが、一層気を引き締めていかないとね」

そう言って俺たちは素材などを拾い、攻略を再開した。

そして、暫く進んでいると岩壁がキラキラと光っているのを見つけた。

『採掘ポイント』だ。

「『採掘ポイント』がある。採掘して来るから、少し待っていてくれ」

俺はそう言い、インベントリから『採掘セット』を取り出しながら岩壁に近付いていく。

「わかったぜ。周囲の警戒は任せてくれ」

「頼む」

俺はオルグにそう応え、つるはしを振り上げる。  
それから暫く壁を削り、採掘が終わった。  
特に魔獣の襲撃も無く、ロゼたちは十分に休憩できた様だ。

「何が採れたんですか？」

俺が採れた鉱石を集めていると、レイシアがそう訊いて来た。

「ん？ 中々良い物が採れたぞ」

俺は採れた鉱石を見せる。

「これは『オリハルコン』、そっちは『アダマンタイト』ね……」

ロゼもやって来て、鉱石を眺めている。

「これは何の鉱石だ……？」

オルグが、足元にあつた鉱石を持ち上げて訊いて来た。

「ああ。それはまだ見た事が無かったか……それは『サンシャイン・アダマンタイト』だ」

「どんな性質の金属なんだ？ 『アダマンタイト』の上位金属って事はわかるが……」

「それで合ってるぞ。性質も『アダマンタイト』と似ていて、『オリハルコン』と混ぜて合金にすると『魔術遮断』を付加できる」

「へえ、それは便利そうね。」

「ああ。それじゃあ鉱石も集め終わったし、先に進もう」

俺は鉱石をインベントリに放り込み、皆を促した。

そして3人が頷いたのを確認し、攻略を再開した。  
その日は第27階層まで進んだ後、攻略を切り上げて休む事とな  
った……

『ストリーム・ゼロ』第36階層

「明後日には、頂上に辿り着けそうね」

今日の攻略を済ませ、皆で夕食を食べた後一息吐いていた。

「そうだな。この調子でいけば、そうなるだろう」

俺は食後のお茶を飲みながら、ロゼの言葉に応える。  
ちなみにこのお茶、薬草を煎じた物で結構苦い。

「アルファード様との闘いには、俺たちも参加するのか？」

オルグも苦そうにお茶を啜っている。

それよりも俺が気になったのは

「『アルファード様』って……おまえ、熱でもあるのか？」

「ねえよ！！ 何でそうなるんだ!？」

「アハハ……『来訪者』のデイーンが不思議に思うのも仕方がある  
りませんね。この世界では、精霊王様は神様よりも敬われているん  
ですよ?」

「神龍様は別だけだね。実質、今この世界を守護しているのは、  
神龍様と精霊王様たちだし……」

レイシアがそう説明し、ロゼが更に付け加えた。

「へえ、そんな事になってるのか……」

神殿が無い事とも関係してるのかも知れないな。

というか、あいつ（ディオス）はあいつなりに色々結構頑張ってるのに、敬われていないのか……  
少し哀れに思っていると

『ディオス様もそれなりには敬われていますよ？ まあ、アリユ  
ーゼ様や精霊王様たち程ではありませんが……』

ラグがフォロー（？）する様に言った。

「そうなのか？」

確かにロゼもあいつ（ディオス）の名前を知ってたし、『様』つて付けてたな。

「ディーンは精霊王様たちの事はあまり知らなかったのに、ディオス様の事は知ってるみたいだな？」

オルグが不思議そうに訊いて来る。

「ああ。俺をこの世界に連れて来たのは、あいつだしな。あまり覚えてないが、その時に一度会ってる」

「それだけじゃないでしょう？ ディーンの左目はディオス様の目なの」

「え!？」

「マジか!？」

俺の言葉にか、ロゼの言葉にかはわからないが、2人がかなり驚く。

「ん？ どつちに驚いたんだ？」

「どつちもだ!！」

「ディーンはディオス様に会った事があるんですか？」

「ああ、らしいな」

「それでディオス様の目って何なんだ？」

「口で説明するよりは、見たてもらった方が早いな」

俺はそう言っつて、右目を閉じて左目に魔力を込める。

視界がモノトーンに切り替わる。

「うおっ!？」

「瞳が金色に変わった!？」

2人が変化に驚いているが、俺には他に気になる事があつた。

「ラグ、ここには精霊はいないのか？」

周りを見渡すが精霊は見当たらない。

『この空間にはマナがありませんからね。精霊はいません』

確か、精霊はマナを糧に存在しているんだつたな。

ここにマナが無いのなら、精霊がないのは納得できる。

「まさかとは思うが、ディーンは精霊が見えるのか……?」

「ああ。この状態なら見える。」

そう言いながら、俺は魔力を込めるのを止める。

「やっぱり驚くわよね」

「ええ……本当に驚きました……」

「まあ、俺の事はどうでも良い。話を元に戻そう」

「もう色々あり過ぎて、何の話をしてたか忘れちゃったよ……」

「おいおい、おまえが言い出したんだろ？ アルファードとの闘いの事だよ」

「そうだったわね。セファイド様の試練の時には私は参加できなかったから、今回もデインだけじゃない？」

「ロゼは途中で割り込んで来たがな……」

あの時は本当に肝が冷えた。

「その事は忘れて！！ それでどうなの、ラゲ？」

『おそらくですが、『風皇狼』や『ゲイルドラゴン』の時の様に、皆さんにも何かの試練を課される可能性が高いですね』

「戦闘になるんですか……？」

『そうなるでしょう』

「わかった。それじゃあ明日も攻略があるし、風呂に入って休もう」

俺がそう言うところ人が頷き、ロゼが風呂に入る為にリビングを出ていく。

順番が来るまで俺は工房に籠って鎖を作った後、風呂に入り眠りに就いた……

『ストリーム・ゼロ』第45階層

攻略5日目

かなり攻略も進み、山頂もあと少しだ。

風はあれからそれ程強くはなっていないが、寒さはかなりのものだ。

なので、全員俺が作った防寒具を着込み、更に火属性魔術『ヒート・コーティング』を使っているが、陽が沈みかけているのもあって肌を刺す様な寒さだ。

「寒っ！！ 無茶苦茶寒い！！」

我慢ができなくなったのか、オルグが文句を言い出した。

「言うなよ、オルグ……」

俺たちは腕で風を防ぎ、魔獣を警戒しながら進んでいた。

「喋ってないと凍えちまうよ！！」

そんなくだらない事を言い合いながら歩いていると

「魔獣よ！！ 2人ともくだらない事言っていないで、いくわよ！！」

魔獣の群れを見つけた口ゼに怒られた。



「よっしゃー!! これで体が温まる!!」  
「ちよつと待て、おい!!」

オルグは嬉々として魔獣の群れに突っ込んでいき、俺の言葉など聞いちゃいない。

オルグもかなりレベルが上がって、神獣でも易々と遅れは取らないだろうが……

大丈夫なんだろうな、あいつは……

「寒過ぎて、頭がおかしくなってるのか……? 確かに戦闘すれば、温まるが……」

俺はそう呟きながら剣を抜き、『ゴールデン・フルムーンベア』へと向け駆ける。

ロゼたちは、既に魔獣や神獣と戦闘を開始している。

「ラグ、【刀術形態】」

刀への変化が終わると、俺は氣と魔力を纏わせる。

白銀に輝く刀を構え、薙ぎ払われた腕を掻い潜りながら巨大熊の懐へと跳び込む。

逆袈裟に振り上げた刀が、巨大熊の腕を2本斬り飛ばす。

更に返す刀で、腰の辺りで上下に両断する。

2つに分かれた『ゴールデン・フルムーンベア』が消え去るのを横目で見つつ

「【狙撃形態】、ピラッキングシヘル『貫通弾』を装填してくれ」  
『了解しました。2秒お待ち下さい』

刀が光の粒子になり、狙撃対物魔導銃への変化が始まる。

俺は全身に気を纏い、右から飛び掛かって来た『グラトン・ジャツカル』に右の裏拳を叩き込み、左から襲い掛かって来た『ハーミツトオウル』に横蹴りを叩き込んで碎く。

そうすると変化が終わったので、すぐさま構え口ゼに向かってブレスを吐こうとしていた『ウインドドラゴン』に狙いを定め、『貫<sup>ピア</sup>通弾<sup>シンクシエル</sup>』を放つ。

「【鋼系形態】」

狙撃結果の確認もそこそこに、ラグを更に変化させる。

前方へと駆けながら右の鋼系をもう1匹の『ウインドドラゴン』に、左の鋼系を『風狼』に巻き付け、一気に引き絞る。

『貫通弾<sup>ピアシンクシエル</sup>』に頭を撃ち貫かれた『ウインドドラゴン』が墜落していき、バラバラに斬り裂かれた2匹の破片が散らばるのを確認しながら、『ゴールデン・フルムーンベア』に気を纏わせた飛び蹴りを叩き込む。

勢いをつけた飛び蹴りは3本の腕に防がれるが、その腕は押し折れ、巨大熊の体勢が崩れる。

既に鋼系を収納していた手甲に気を纏わせ、すぐさま巨大熊の胸に右の貫き手を叩き込む。

貫き手は『ゴールデン・フルムーンベア』の心臓を貫き、背中へと抜ける。

俺は腕を引き抜き、手甲を二刀に変え、残った魔獣を殲滅していった……

それから30分程経ち

「こいつで最後だ!!」

右の刀で『デスシーカー』の尾を斬り飛ばし、左の刀で胴体を刺し貫く。

地面に縫い付けられた『デスシーカー』が消え去り、魔獣は全滅した。

「よし、終わったな」

俺は二刀を払い、両腰の鞘に納める。

『結構、時間がかかって仕舞いましたね』

「まあ、神獣もかなりいたから仕方無いだろっ」

群れと遭遇した時にはもう陽は沈みかけていたが、今は暗くなり始めている。

『半数以上が神獣でしたからね……』

「オルグたちもかなり疲弊している様だな。素材を拾ったら、今日はもう休むか」

寒さが厳しいのに加え、魔獣との戦闘も連続しているので無理も無い。

『その方が良いでしょうね』

ラグの言葉を聞きながら、『精霊石』などの素材を拾っていく。この頃は神獣の出現率が高いので、かなり多くの素材が集まっている。

ロゼたちも疲れた様子ではあるが、各々素材を拾い集めている。それから暫く、寒さに耐えながら無言で拾い、休む事となった。そして、順番に風呂に入り温まった後、食事を食べながら明日の

予定を話し合う。

「さて、明日には頂上に着く訳だが、皆疲れは無いか？」

精霊王の試練は激戦が予想されるので、体調は万全にしておきたい。

「うん、疲れてはいるけど……」

「まあ、やるしかねえだろ？」

「そうですね」

3人とも疲れてはいる様だが、気力は充分の様だ。

「皆が疲れているのなら、1日休息を入れてからにしようかとも思ったんだが……どうする？」

一応予定では1週間を考えていたので、後1日余裕がある。

特に急いでいる訳では無いので、1日くらい休息日を入れても問題は無い。

「それなら1日休もうぜ。何かあるかわからねえし、体調は万全にしておきてえからな」

「そうか、わかった。2人もそれで良いか？」

「構わないわよ」

「はい、構いません」

明日は1日、休息日とする事に決まった。

その後、今日の戦闘の事や他愛も無い話をしながら夕食を食べ、各々自由に過ごす事にした。

俺は最近の日課になっている鎖帷子の製作をする為、工房へと向

かった。

今までに作った鎖は5千個程だが、鎖帷子チェインメイルにするには全然足りていない。

『明日、休息日にして良かったかもしれないね』

「どうしてだ？」

『1日中工房に籠れば、マスターならかなりの数の鎖を作れるでしょう？　もしかすれば、鎖帷子チェインメイルも完成するかもしれないよ？』

「おいおい……何時間、作り続けるんだよ……」

確かにアルファードに会うまでには作っておきたいと思っていたが、まだ半分も出来ていないのだ。

明日丸1日費やしても、出来るかどうか微妙なところだろう。

『マスターなら、そのくらいできるよ』

「いや、やろうと思えばできるだろうが、それじゃあ休息日にした意味が無いだろ……」

ラグたちとそんな事を言い合いながら、取り敢えず準備をしている。

『オリハルコン』と『アダマンダイト』の合金のインゴットを炉に入れ、溶かしていく。

その間にハンマーと金床を用意。

溶けた合金を金床に乗せ、ハンマーで叩き鎖にしていく。

そうしていつもより遅い時間まで黙々と鎖を作り、千個程作り上げた後、結構汗かいたのもう一度風呂に入り、眠りに就いた。

次の日は話し合った様に休息日とし、少し長めに朝の訓練をした後朝食を食べ、各自好きな様に過ごす事となった。

ロゼとレイシアは前々から気になっていたらしく、攻略時に着ているローブなどを洗濯するそうだ。

勿論、この世界に洗濯機のように便利な道具は無いので手洗いだ、レイシアによれば水属性魔術を利用すれば、かなり楽になるらしい。俺のコートやオルグのマントも、ついでに洗うからと言われて持っていた。いかれた。

更にシャツや下着まで持っていこうとしたので断固拒否したが、武器を手にした2人に詰め寄られ、結局強奪されて仕舞った……オルグも同じ様な目にあつたらしく、かなりへこんでいた……。気を取り直して、俺は工房に行って昨夜の続きをする事にした。休憩も無しにかなりの時間鍛冶に没頭し、腹が減つたので昼食を食べる為にリビングへと歩いてみると

「おい、あれ……火事になつたりしないよな……」

ロゼとレイシアが俺のコートとオルグのマントを火であぶつていた……

多分乾かす為なんだろうが、燃やさないで欲しいものだ……

「アレ、絶対自分たちのを乾かす前に、俺たちので実験してるよな……」

『まあ、見なかつた事にしましょう……』

精神衛生の為に何も見なかつた事にして、リビングへと向かった。俺は軽く食事を食べた後、鍛冶の続きをした。そして夕方になり

「夕食が出来たわよ」

「わざわざ悪い」

丁度切りも良いので、夕食を食べる為にロゼと一緒に工房を出る。

「1日中やってたの？」

「途中、休憩を挿んだりはしたけどな」

「それで鎖帷子チェインメイルは出来たの？」

「まだ2/3くらいだな」

作った鎖は1万個を超えたが（途中で数えるのを止めたので、実際は何個あるのかわからない）、実際に鎖帷子チェインメイルを編んでみるとまだまだ足りなかった。

6t01という編み方で編んでみたんだが、途中で必要な鎖の数が少ない4t01の方にしておけば良かったと後悔した。

鎖には繋ぎ目が無いが、【細工】スキルを使えば問題無く繋げる事ができた。

一々切り目を入れなくて済み、助かった。

本当にスキルは便利だ。

「それじゃあ、明日の闘いには間に合わないわね」

「仕方無いさ。まあ鎧でも充分だしな」

そんな話を話しながらリビングへと歩いていく。  
リビングに着くと、既にオルグとレイシアが座っていて、テーブルの上には女性陣が腕に縊りを掛けた料理が並んでいる。

「あ、デーンも来たわね。それじゃあ、食べましょう」

「悪い。待たせたな」

俺とロゼが席に着くと、夕食を食べ始めた。

「それで全員、良く休めたか？」

俺は『金熊の肉』を使ったステーキを食べながら、3人に尋ねた。

「ええ。気になっていた洗濯も済ませたし、私はゆっくり休めたわ」

「私も洗濯ができてスッキリしました」

ロゼとレイシアはスッキリとした表情だ。

「俺も良く休めたぜ。これで明日はバッチリだ」

「それは良かった」

その後、他愛無い話をしながら夕食を食べ、一息吐いていると

「そうだ、洗濯物を返しておくわね」

ロゼがそう言って、俺たちの服を持って来た。

「せめて、下着は部屋に置いておいてくれよ……」

オルグがそう言って、レイシアからきちんと畳まれた服を受け取った。

俺もロゼから受け取るが、オルグと同じ気持ちだった……

オルグは服を持って自分の部屋へと帰っていくが、マントの端がちよっと焦げているのは黙っておこう……

俺も後で確認しておかなければ。

そんな事があった後順番に風呂に入り、明日に備え早めに寝る事にした。

「ここまで来ておいて、こんな事を言うのも何だが、確実に攻略する順番を間違えてるよな……」



俺はベッドに寝転んだまま、そう言った。

『まあ、そうですね』

最初は何処からでもあまり関係無いが、セファイドと契約した後は属性の優劣を考えて、普通は水の精霊王の所に行くだろう。

「今更か……ここまで来たんだ。やるしか無いな」

『今からでも、戻ろうと思えば戻れますよ？』

「流石にここまで来て戻るの、面倒臭いだろ……」

またここまで登って来るのは、流石に面倒臭過ぎる。

『これからは良く考えて、行動して下さい』

『そうだよ』

「うるさいよ」

おまえ等も別に止めなかっただろう。

『死なないで下さいね？』

「縁起でも無い事、言うな！ こんなところで死ぬるか！」

クソッ、からかってやがるな。

「もう寝る。明日は頼むぞ」

『お任せ下さい』

『おやすみ、マスター』

そして、俺は眠りに落ちていった……

『ストリーム・ゼロ』第49階層

『この先がアルファード様の待つ、頂上の50階層になります』

俺たちがいる道の両端には、華麗な装飾が施された竜と狼の石像がある。

おそらく、『風皇狼』と『ゲイルドラゴン』がモデルだろう。

「じゃあ、行こうぜ」

オルグがそう言って、進もうとするが

「待て、オルグ」

俺はオルグの肩を掴み、止める。

「何だよ、ディーン？」

「まあ、見てろ」

俺は足元の小石を拾い、石像の間に投げる。

すると、バシッ！　と音を立てて小石が弾け飛んだ。

石像の間の空間に、紋章が浮かび上がっている。

「なっ！？」

「封印がされてるんだよ。あのまま行ったら、死んでたぞ？」

俺はインベントリから2つの『証』を取り出しながら、石像へと

近付く。

そして窪みになっている石像の目の部分に、翡翠色の『証』を埋め込んでいく。

両方の石像に填めた後、確認の為もう一度小石を投げてみる。今度は、小石はそのまま地面に落ちる。

「それじゃあ、行こう」

そう言って、俺たちは頂上へ続く道を歩いていった。

『ストリーム・ゼロ』第50階層 山頂

『ストリーム・ゼロ』の山頂部は、かなり広い開けた空間になっていた。

「お待ちしていましたよ、デイン殿」

その中心に立っていた、女性と見紛うばかりの美丈夫が声を掛けて来た。

「貴方が『風の精霊王』アルファードですか？」

「そうです」

アルファードは頷き、俺の言葉を肯定する。

『お久しぶりです、アルファード様』

「久しぶりですね、ラグナレク。それに、アイギスも」

『お久しぶりです』

ラグたちとアルファードが挨拶を交わす。

「それで試練の事なのですが、どのような試練なのですか？」

「そうですね……私はあまり得意では無いのですが、戦闘にしましよう。『あの馬鹿』があまりにも貴方の事を褒めるものですから、興味が湧いて仕舞いました」

「え」と……『あの馬鹿』とは誰の事ですか？」

「セファイドですよ。あの馬鹿は貴方と契約した日から、毎日毎日」

「わ、わかりましたから、もうその辺で……」

アルファードは笑顔のままだが、こめかみに血管が浮かんでいる。

「コホン、私とした事が……失礼しました」

「いえ、気にしてませんから。それで、仲間たちはどうすれば良いのでしょうか？」

「彼らの力も知りたいので、貴方とは別に私の用意した相手と闘ってもらおう事にしましょう」

事前に予想していた様に、ロゼたちにも試練がある様だ。

「わかりました。皆も、それで構わないな？」

俺が振り返ってそう尋ねると、3人とも頷いた。

「それでは始めましょうか」

アルファードが指をパチンと鳴らす。

すると、空中に紋章が描かれ、そこから何かが出て来る。

「おいおい……マジかよ……」

紋章から出て来たモノを見て、オルグがそう呟く。

「ラグ、あれは『ゲイルドラゴン』と『風皇狼』じゃないのか？」

『いえ、あれは』

「違いますよ。確かに『ゲイルドラゴン』と『風皇狼』の姿をしています。アレは私が作り上げた『影』です」

俺の声が聞こえていたのか、アルファードがラグの言葉を遮って答えた。

確かに、実物程はプレッシャーを感じないが……

「その力は実物の9割程ですが、油断していると死にますよ？」

ロゼたちの顔が一樣に引き攣っている。

こいつ、実は性格悪いだろ……

「それではディーン殿以外の皆さんは、あちらの方へお願いします」

アルファードがそう言うと、『影』の2匹が離れる様に移動していく。

「皆、油断するなよ」

「ディーンこそ」

俺たちはそう言葉を交わし、それぞれの方向へと歩いていく。

「では、結界を張らせていただきます」

アルファードが腕を振り上げると、この空間を二分する様に風の壁が現れる。

その瞬間、『ゲイルドラゴン』と『風皇狼』の『影』が吼え、オルグの『戦咆哮』<sup>ウォー・ロアー</sup>が響く。

あちらは戦闘を開始した様だ。

「こちらも始めましょうか」

「わかりました」

俺は前もって【刀術形態】にしていた刀を鞘から引き抜き、アルファードが右腕を振るとその手に剣が握られていた。

その剣はロゼの剣よりも更に細い、片手直剣に類する細剣の様だ。<sup>レイピア</sup>風の精霊王が持つに相応しく、その細剣は風を纏っている。

おそらくはセファイドの剣と同じ様に、特殊な効果を持っている筈だ。

『その通りです。あの『フォルセティ』は、剣の軌道に沿って真空波を飛ばします。気をつけて下さい』

「わかった」

俺はそうラグに応えながら、刀に気と魔力を纏わせる。

「では、いきますよー!!」

「来い!!」

アルファードは細剣<sup>レイピア</sup>をフェンシングの様に構え、跳び込みながら突きを放って来る。

速い!!

咄嗟に刀で軌道を逸らすが、纏った風に左の頬が切り裂かれ、血が舞う。

袈裟切りに刀を振り下ろすが、アルファードはひらりと躲して、お返しとばかりに連突きを放つ。

1 撃目を刀で払い、2 撃目は体捌きで躲す。

3 撃目は肩を斬り裂くが無視し、4 撃目は顔を傾け躲すが、首が少し風に切り裂かれる。

怪我を負いながらも距離を詰めた俺は、下から抉り込む様に突きを放つ。

しかしアルファードには後ろに跳んで躲され、その長いエメラルドグリーンの髪が数本宙に舞うだけだ。

その結果を残念に思う間も無く、桜色の閃光を放つ刀を振り下ろす。

【刀】の遠距離アーツスキル『衝破刃』の剣閃が、アルファードの腕を浅く斬り裂きながら奔っていく。

「中々やりますね」

「貴方こそ、戦闘は不得意とか言っていませんでしたか？」

頬と首の傷は『アイギス』の【HP自動回復】で、既に塞がっている。

「そうでしたか？」

まあ信じてはいなかったが、本当にイイ性格してるよ……

俺は【縮地无疆】で距離を詰め、胴を薙ぐ。

アルファードがその一撃を細剣で受け止め、火花が散る。

「いきなりとは、酷いですね」

「良く言いますね」

俺がそう言った瞬間、左の掌底を放って来る。

右の裏拳でそれを払うと、細剣<sup>レイピア</sup>が垂直に切り上げられる。

咄嗟に後ろへと跳んで躲すが、細剣<sup>レイピア</sup>の切っ先が鎧の表面を撫でていき火花が飛ぶ。

後ろへ跳んだ勢いを溜めに変え、すぐさま前方に跳び、刀を振り下ろす。

その一撃は躲されるが、即座に斬り上げた刀がアルファードが羽織っているローブごと脇腹を斬り裂く。

アルファードが舌打ちし、5連突きを放つ。

【細剣<sup>レイピア</sup>】のアーツスキル『サザンクロス』だ。

細剣<sup>レイピア</sup>が5つに分裂したかの様に、一瞬で頭、腹、両肩、胸の5箇所を突いて来る。

躲せないと判断した俺は、気を纏わせた両腕で頭、腹、胸をガードしつつ後ろへ跳ぶ。

「ぐっ……」

両腕と両肩から血が噴き出す。

「逃がしませんよ」

距離を取ろうとした俺に向かってアルファードが腕を振り上げると、巨大な竜巻が発生する。

風属性最上級殲滅魔術『カラミティ・トルネード』だ。

「アイギス、障壁展開！！」

俺は障壁を展開し、迫り来る竜巻に突っ込む。

巻き上げられた飛礫が、音を立てて障壁に激突する。



烈風に足を取られそうになりながら、竜巻を抜けると待っていたのは

「予想通りです」

【細剣<sup>レイピア</sup>】のアーツスキル『ライトニング・ペネトレーター』で、右手で細剣<sup>レイピア</sup>を突き出し、閃光を纏いながら突進して来るアルファードだった。

「くっ！！」

障壁に激突した細剣<sup>レイピア</sup>は貫通こそしなかったが、その勢いで俺は大きく吹き飛ばされる。

「チッ」

俺は宙で体勢を立て直し地面を削りながら着地、前を見るとアルファードが追撃をする様に再び『ライトニング・ペネトレーター』で突進して来ている。

すぐさま俺も【疾風迅雷】を起動し、前方に跳ぶ。

刀を持つ右腕を引き絞る様に構え、片手突きを放つ。

細剣<sup>レイピア</sup>と刀が火花を散らしながら擦れ違う。

その接触により軌道が逸れた細剣<sup>レイピア</sup>と刀が、互いの首を浅く斬り裂きながら抜ける。

俺たちもそのまま擦れ違い、すぐさま反転。

即座に刀を袈裟切りに振り下ろすが、アルファードが同じ様に振り下ろした細剣<sup>レイピア</sup>と激突、鏝迫り合いになる。

俺は左拳をアルファードの腹に押し当て『浸透勁』を放つ。

同じ様に俺の腹に押し当てられたアルファードの左拳から衝撃波が放たれる。

「ガハッ!!」

「ゴフッ!!」

俺とアルファードの口から血が溢れ出す。

俺たちは同時に跳び退り

「そろそろ終わりにしましょうか」

「そうだな」

俺はコートの袖で口元の血を拭う。

アルファードが細剣レイピアを構え、俺も右腕を引き絞る様に構える。

俺は【縮地无疆】で跳び、アルファードも凄まじいスピードで跳び込んで来る。

アルファードが放った『サザンクロス』を俺は

「なっ!?!」

細剣レイピアを左手に貫通させて受け止める。

そのまま鐔を握り締め、刀を持ったままの右手をアルファードの腹に当て

「ッノヴァ・エクスプロージョン」

俺たちの間で火球が爆裂する。

「ガハッ!!」

【魔力操作】で操作された爆風をまともに喰らったアルファードが吹き飛んでいく。

俺が鐔を握り締めていた『フォルセティ』は、俺の左手を貫通したまま残されている。

即座に吹き飛んでいったアルファードの元へと跳び、刀を首筋に押し当てる。

「参りました……」

アルファードはローブが至る所が焦げ、裂けている。その下の鎧も罅割れ、眉目秀麗な顔にも酷い火傷を負っている。だが、その火傷もみるみる癒されていく。

「まさか、あの様な方法で防ぐとは……」

俺は刀を鞘に納め、左手に刺さったままの細剣を<sup>レイピア</sup>引き抜き投げ返す。

そして『パーフェクト・シャインヒーリング』をかけ、傷を癒す。

「試練は合格ですか？」

「ええ、文句無しの合格です。セファイドがあれだけ褒めていたのも、納得ですよ。……丁度あちらも終わった様ですね」

ロゼたちが闘っている方を見ると、ロゼが放った『ルシファーズ・インフェルノ』が『ゲイルドラゴン』の『影』を焼き尽くした。

「そうみたいですな」

オルグは金属盾が碎け散り、鎧も至る所が罅割れている。

ロゼとレイシアもローブの至る所が裂け、血が滲んでいた。

スレイプニルもかなり息が荒く、全身から湯気が立ち上っている。負傷はしている様だが、皆無事そうで一安心だ。

今はレイシアが皆に回復魔術をかけて回っている。

「それでは『証』を渡しましょう」

アルファードが腕を振ると風の結界が消え去り、傷の手当てが終わったロゼたちもこちらに歩いて来る。

「大丈夫か？」

「ええ、何とかね……装備はボロボロになっちゃったけど……」

ボロボロになったローブを見下ろしながら、そう言った。

「装備なんて幾らでも作れるさ。ロゼたちが無事なら、それで良い」

俺がそう言うと

「それではデイン殿、こちらへ」

俺はアルファードの方へと歩み寄り、左手を前に突き出す。

すると、アルファードの心臓の辺りから翡翠色の宝玉が現れ、『アイギス』に埋め込まれる。

『証』の宝玉の中には風が渦巻いていた。

「痛ッ」

更に俺の足元に紋章が現れ、右腕に鋭い痛みが奔る。

袖を捲って右腕を見てみると、セファイドに与えられた紅い紋様と絡み合う様に翡翠色の紋様が刻まれていた。

セファイドの時と同じなら、この後は確か

「ぐ……」

案の定、大量の魔術やスキルの知識が流れ込んで来た。前回程では無いが頭痛がし、俺は軽く頭を押さえる。

「これで契約は成りました。それでは、次はそちらのダークエルフのお嬢さん、こちらに来て下さい」

「わかりました」

「確かロゼさんでしたね？ あの馬鹿から、あなたにも力を与えてやって欲しいと言われています。見たところ、素質も充分にある様です」

「はい、ありがとうございます」

「では、あなたの剣を貸してもらえますか？」

ロゼが剣を鞘から抜き、アルファードに手渡す。

アルファードは剣にはめ込まれているマナ結晶に手をかざし、魔力を放出する。

「これで更に性能が上がった筈です。ついでに新しいスキルも追加しておきましたので、後で確認しておいて下さいね」

そう言って、アルファードは剣をロゼに返す。

「ありがとうございます、アルファード様」

ロゼが返って来た剣を鞘に納め、こちらに戻って来る。

「これで一通りの事は終わりましたが、私からも餞別を渡しておきますよ」

「それは嬉しいのですが、良いのですか？」

「ええ、構いません。それにあの馬鹿が、ディーン殿に饞別を送って喜ばれた、と毎日うるさかったですし」

セファイドとアルファードは仲が悪いのか？

『そんな事は無いと思いますが……余程、迷惑だったのでしょうか』

そんなところだろうな。

「それで饞別とは何を？」

「ふむ、そうですね……」

アルファードは顎に手をやり、考え込む。

その視線は、何と無くスレイプニルに向いている様な気がする。

「やはり彼女にしましょうか。来なさい、『シームルグ』」

アルファードが指を鳴らすと、【召喚】の紋章が空中に現れ、そこから空色の巨大な鳳凰が出現した。

その大きさは『ライトニング・フェニックス』よりも、更に二回りは大きい。

「あれは神獣か……？」

オルグが畏怖する様に呟く。

『あれは『慧神鳥』、鳥たちの女王と言われている神獣です』

ラグが俺たちに説明してくれた。

『私わたくしに何か御用かしら、アルファード様？』

「ええ。貴女にはこれから、あちらのディーン殿の力になってもらいたいのですが、宜しいですか？」

『シームルグ』の声は女王の名に違わない、高い知性を感じさせる美声だ。

『あの方たちの力になれば宜しいのかしら？』

「そうです。お願いできませんか？」

『シームルグ』が俺たちの方を見る。

まるで、心の中まで見透かされるかの様な視線だ。

『それは構いませんわ。他ならぬ、アルファード様の頼みですもの。ですが、私わたくしの背に貴方以外の殿方を乗せるのは、ご遠慮したいですわ』

「嬉しい事を言ってくれますね……それでは、あちらのお嬢さん方なら構わないでしょう？」

『……ええ、それなら構いませんわ』

『シームルグ』が口ゼとレイシアを見ながら、そう言った。

「それではお願いしますね」

『お任せ下さい』

『シームルグ』が羽ばたき、こちらに飛んで来る。

『お初にお目にかかります、ディーン様。それにお仲間の皆さん、どうぞ宜しくお願い致します。私わたくしの事は『シームルグ』とお呼び下

さい』

シームルグはそう言うと、優雅に頭を下げる。

「ああ、宜しく頼む。知っているとは思いが、俺がデーインだ」

「私はロゼよ。宜しくね、シームルグ」

「私はレイシアです。宜しくお願いします」

「オルグだ。宜しく頼むぜ」

俺たちはそれぞれに自己紹介をしていく。

『久しいな、シームルグ殿。どうやら、我が王が迷惑をかけた様だな。王に代わり謝罪しよう』

『本当にセファイド様は困った方ですわ……貴方から、良く言い聞かせておいて下さいませ』

スレイプニルとシームルグも挨拶を交わす。

「それでシームルグ、ロゼとレイシアのどちらと『契約』するんだ？」

勿論、『アガシオン召喚獣』としての契約の事だ。

『わたくし私はどちらでも構いませんわよ？』

「だそうだが、どうする？」

俺はロゼとレイシアの方に振り返りながら、訊いた。  
すると、レイシアが凄腕の勢いで首を横に振っていた……

「どうしたんだ、レイシア……？ そんなに嫌なのか……？」



「い、いえ。嫌ではありませんが、私にはこの子がいますから……」

余程スレイプニルの事を気に入っているのか、シームルグに乗るのが嫌なのかはわからないが、レイシアはスレイプニルに縋りついている。

「……という事はロゼか」  
「構わないけど、私は【調伏<sup>テイミング</sup>】なんて使えないわよ？」  
『問題ありませんわ』

シームルグがそう言って、ロゼに頭を近付ける。

『私<sup>わたし</sup>の頭に手を乗せて下さいな』  
「わかったわ」

ロゼが恐る恐る手を乗せる。  
すると、閃光が走り

『これで契約は完了しましたわ』  
『どういう事だ、ラグ？』

『高位の神獣は自ら主を選べますから、その能力を使ったのでしょ』  
『よう』

「そんなのもあるのか……」  
「どうやら、終わった様ですね。もうすぐ陽も沈みます。あなた方には、こここの寒さは厳しいでしょう？ そろそろ下山するのをお勧めしますよ」

少し離れた所で俺たちの様子を見ていたアルファードが、そう提案して来た。

アルファードは何処から取り出したのか、椅子に座りティーセットで優雅にお茶を飲んでいる。  
いつの間に出したんだ……

「そうですね。そろそろ戻る事にします」

「わかりました。この世界の事、宜しく願います」

「任せて下さい」

「皆さんもまたお会いしましょう。シームルグもお元気で」

『アルファード様も』

挨拶を交わした俺たちは、『<sup>エスケープ</sup>脱出』で『天空島』を後にした。

## 第15話 『ストリーム・ゼロ』（後書き）

お読みいただいて、誠に有り難う御座います。

これからも皆様のご期待に添えるよう、精進していききたいと思えますので宜しくお願い致します。

そして、今話で2章が終了しました。

次話からは第3章が始まります。

迷宮の攻略は一旦お休みになります。（迷宮にはちゃんと潜ります）

誤字、脱字等ありましたらご報告お願いします。

ご感想、ご批判もお待ちしております。

それでは、また次話で。

## 第16話 異変の兆候（前書き）

いつもお読みいただいている読者の皆様、どうも有り難う御座います。

今話から第3章が始まります。

それではつたない文章ではありますが、読者様方の少しでも良い暇つぶしになればと思います。

## 第16話 異変の兆候

『脱出』<sup>エスケープ</sup>で『天空島』の入り口の『転送門』<sup>ゲート</sup>まで戻った俺たちは、門を潜り、神殿まで戻ってきていた。

「これからどうするの、ディーン？」

「すぐに次の迷宮に行くのか？」

ロゼとオルグがそう訊いてきた。

「いや、一旦『グランドティア』に行こう。ゼノンの話も気になるし、別の国に行くにしてもあそこの方が都合が良い」

この『アーリグリフ』から水の精霊王の迷宮がある『ティルナノーグ』は、地続きなので徒歩で行くことはできるが、土の精霊王のいる『ウエルテス』に行くには『グランドティア』を通った方が早い。

どちらの国に行くにしても『グランドティア』からは行くことができるので、ついでにゼノンの話を聞いておきたい。

「そういえば、寄って欲しいとの伝言がありましたね」

皆、色々あったので忘れていたのだろう。

「そういうことだ。取り敢えず、今日はもう休もう」

「そうね。もうクタクタだわ……」

神殿を出た所でホームへ帰り、休むことになった。

風呂に入った後、食事を食べ終え

「そうだ。全員、武器と防具を預けてくれ」

リビングから出ようとしていた3人に声をかけた。

「何かするのか?」

オルグが不思議そうに訊いてくる。

「おまえが一番関係あるだろ……今回の戦闘で大分傷んでいるみたいだから、メンテをするんだよ」

オルグの金属盾のように、必要なら作り直さなければならない。

「そうね。ローブとかは勝手に直るけど、他のは結構傷んでるわね……」

「一度徹底的に手入れしないと、壊れる可能性もあるからな」

「わかりました」

3人はそれぞれの武器や鎧を置いていく。

「明日までには直しておくから」

「無理はしないでよ?」

「わかってるよ」

そう口ゼに答え、俺は3人の武具をインベントリに入れ、工房へと歩いていった。

工房に着くと、まずは武器から確認をしていく。

3人の武器は傷んではいるが、砥ぐだけで何とかかなりそうだ。

取り敢えず、武器は作業台の上に並べておく。

次にオルグの全身鎧アーマーを取り出し、確認する。  
作り直すほどではないが、至る所が罅割れているので修理しなければならぬ。

ロゼとレイシアの軽装鎧は、胸部の金属パーツは作り直した。  
後、オルグの金属盾もだ。

俺は作業する順番を考えながら、インベントリから『精霊石』を  
幾つか取り出す。

そして作業台に備え付けてある魔導具に、取り出した『精霊石』  
を放り込む。

レバーを引くと砥石が回り出した。

これは回転砥石の魔導具で、燃料は『精霊石』だ。  
まずはオルグの槍ハルバートからだ。

斧の部分を砥石に当て、ゆっくりと滑らせていく。

火花が飛び、刃の輝きが戻ってくる。

同じように槍の部分、レイシアの槍、ロゼの剣を砥ぎ終える。  
改めてロゼの剣を見てみると、『マナ結晶』がぼんやりと紅と翡  
翠の交互に輝いている。

「そういえば、アルファードが何か言ってたな……」

スキルを追加したとか、何とか……

『ええ。スキルを追加した、と言っていましたね』

確かめてみるか。

俺は【リーブラの魔眼】を起動し、剣のステータスを確認する。

「何か、【シェイプシフト】ってスキルが追加されてるんだが…  
…どんなスキルなんだ？」

見たことのないスキルだ。

『私の【形態変化】と、ほぼ同じような効果を持つスキルです。ただし、こちらは形態を無数には登録できません。事前に決められた数の形態に変化できるだけですな』

「そんなスキルもあるのか……」

確認してみると登録可能な形態は3つとなっていた。今使っているのに加え、後1つは登録できる状態だ。後でロゼに教えておかないとな。

俺は3人の武器をインベントリに入れ、鎧の修理に取りかかる。全身鎧は罅割れた部分は取り外し、新しく作る。(もちろん、再利用はする)

女性陣の軽装鎧のパーツも新しく作り直す。それから1時間ほど作業に没頭し、修理が完了した。どの鎧も新品同然の輝きを放っている。

「これで武具の耐久値も、最大値近くまで回復したたる……」

俺はそう呟き、修復と刻印が終わった武具をインベントリに入れる。

後は、完全に砕け散ったオルグの金属盾だ。

どうせなら、もつと性能を良くするか。

ちよつと、良い金属も手に入れたことだしな。

俺はインベントリから『サンシャイン・アダマンダイト』を取り出し、倉庫から最後の『オリハルコン結晶』の金属塊を持ってくる。その両方を炉に放り込み、合金にする。

以前にオルグに言ったように、『サンシャイン・アダマンダイト』は『オリハルコン』との合金にすると『魔術遮断』の特性を付加できるが、『オリハルコン結晶』との合金はさらに上位の『魔術反射』



の特性を付加できる。

しかも強度も『オリハルコン結晶』との合金の方が上なので、盾にはもってこいだらう。

しかし味方の魔術も反射するので、扱いは難しいが……

そこは慣れてもらうしかない。

そんなことを考えている内に溶けたので、金床の上に取り出し、ハンマーで叩き金属盾にしていく。

60回程叩いたところで、盾が完成した。

『強化』と『軽量化』の紋章を刻み、インベントリに入れる。

「ふう。ようやく終わったな」

かかった時間は、およそ2時間くらいか……

俺が寝るために工房を出ようとすると

『マスター、何か忘れていませんか？』

ラグが声をかけてきた。

「何だ、忘れてることって……そうか、おまえも手入れして欲しいのか？」

『いえ、違います。確かにして欲しいですが……』

「じゃあ、何だ？」

『以前、マスターには言いましたよね？ 各精霊王様は、それぞれクラス？の魔導兵装を管理されているのです。ここまで言えば、わかりますよね？』

確かに、そんな話を聞いたが……

あつ

「アルファードから魔導兵装を貰ってないぞ!」

『ようやく気がつきましたか……』

「どうするんだ!? ……今からでも行ってくるか……?」

俺一人で可能な限り急げば、3日くらいで行けるか……?

俺は急いで工房を出ようとするが

『落ち着いて下さい。魔導兵装なら、ちゃんと貰っています』

「何!? 何処にあるんだ!」

『インベントリを良く見て下さい』

俺はインベントリを開き、確かめていく。

すると、確かに見覚えのないアイテムがあった。

何故かメツセイジカードが付いている。

これはアイテムをプレゼントする際に、一言添えられるアイテムだ。

カードを開いてみると

『焦りましたか?』

「あの野郎!」

絶対に俺をおちよくってる!!

『すみません。マスターが気づくまで、しばらく黙っているように言われましたので……』

「ハア、子供かよ……」

『いたずら好きな方ですので……大目に見てあげて下さい……』

俺は溜め息を吐き、改めて魔導兵装を取り出す。  
ステータスを確認かめてみると

魔導兵装クラス『ヘルメスグリーブ』

常時：AGI+500

特殊固有スキル：【天駆】、【縮地・廻天】

『ラグナレク』や『アイギス』に比べると、少し性能は劣るかもしれないが、充分すぎるほど強力な装備だ。

俺が新たに得た知識によると、【天駆】はその名の通り、空を駆けることを可能にするスキルで、スレイプニルの【天翔】と同じ効果だ。

【縮地・廻天】は直線的な移動しかできなかった【縮地】が、曲線的な移動もできるようになったものだ。

『装備してみてください』

そうラグに言われたので、今履いているブーツを脱ごうとすると

『そのままで大丈夫ですよ』

「脱がなくて良いのか？」

『はい』

取り敢えずラグを信じて、そのまま装備してみる。

すると、光の粒子が俺の両足に集まり、グリーブが形成されていく。

光の乱舞が終わり、改めて確認すると、白銀に輝く流麗なフォルムのグリーブが装備されていた。

元々履いていたブーツはそのままに、足の甲と爪先、踵の部分が金属で補強される。

脛と脛脛もズボンの上から白銀の金属パーツで覆われ、黒革のベルトで留められていた。

ブーツの各部分を補強するパーツと脛を覆うパーツは、踝のところで繋がっている。

「スキルを確認したいが……」

『明日にした方が良いでしょうね』

俺は『ヘルメスグリーブ』の装備を解除し、工房を出た。

そして、リビングで話をしていた3人に装備を返してしばらく談笑した後、各々の部屋に戻って眠りに就いた……

「よかったわね、晴れて」

今日は父さんの仕事が休みなので、久しぶりに遊園地に連れていってもらえる。

「明、今日はいっぱい遊ぼうな？」

「うん!!」

「あなた、余所見をしないで」

僕の方を少し振り返りながらそう言った父さんに、母さんが注意する。

「わかってるって」  
「もう……」

父さんは笑いながら、ハンドルを握り直す。  
母さんも笑っている。

この2人は、本当に仲が良い。  
父さんと母さんが笑っていると、嬉しくなる。

今日は晴れているので、車の中はポカポカと暖かい……  
遊園地まではまだかかりそうなので、ウトウトしていると

「危ない!!」

「あなた!!」

もの凄い音とともに、体が揺さぶられた。

「なに……?」

目を擦りながら、前を見ると

「良かった……明は無事だったのね……」

真つ赤なナニカを流し、僕の頬を撫でる母さんの姿が

「うわああああ!!」

何だったんだ……、今は……

あれは父さんと母さん……?

俺は乱れた息を整えながら考える。

『ソウダ。貴様八忘レテイタカモシレンガナ……』  
「誰だ!？」

聞き慣れない声が聞こえ、咄嗟に周りを見渡す。  
周囲は暗く、黒い霧が立ち込めている。

「何処だ……ここは……?」

確実に、ホームの俺の部屋ではない。

『ココ八貴様ノ精神世界ダ』

「おまえは誰だ!？ 姿を見せろ!？」

『目ノ前ニイルデハナイカ』

目の前を良く見ると、霧の中に2つの紅い眼が不気味に光っていた。

「なっ!？」

『ヨウヤク気ツイタカ』

「おまえは誰だ?」

『クツクツクツ……コレハオモシロイ。貴様八、己ガ滅ボスベキ  
相手モ知ラナイノカ?』

「何だと!？」

咄嗟に剣を抜こうとするが

『無駄ダ。ココニ八貴様シカイナイ』

俺は魔術を放とうとしたが、魔力が集まらない。

無駄だと悟った俺は

「一体、何をしに来た……？」

『ソウ構エルナ。貴様ト少シ話ガシタイト思ッテナ』

「おまえと話すことなんて、何も無い！！」

『ソウ言ウナ。貴様ハ、本当ニコノ世界ノ人間ヲ救イタイト思ッ  
テイルノカ？』

「思っている！！」

『本当ニカ？』

「くだい！！」

『貴様ノ両親ヲ殺シタノモ、人間ダトイウノニカ？』

「……… どういう事だ？」

『貴様ノ両親ハ、無謀ナ人間ニヨツテ殺サレタノダ』

じーさんにはただ事故で死んだとしか聞かされていないが、先程の夢を思い返してみると、無謀な運転の車に激突されたということだろうか？

俺は覚えていなかったが、恐らくそういうことだろう。

「たとえそうだとしても、この世界の人達には関係がないだろう」

『ドウカナ？ コノ世界ノ人間共モ、貴様ノ世界ト大シテ変ワリ  
ハナイゾ？』

「そんなことはない。確かにそんな人間もいるが、俺の世界に比べればこの世界はずっと平和だ。おまえさえ、いなければな」

『クツクツクツ………言ッテケレル。ダガ、ソノ平和モ我ガイナク  
ナレバ、ドウナルカナ？』

「どういう意味だ？」

『貴様モ聞イテイルノダロウ？ 我ガ邪神龍ニ墮チタ理由ヲ』

「ああ。だが、それが何の関係がある？」

『今ハ我ガイルカラ、人間共ハ團結シテイルダケダロウ？ 我ガ  
イナクナレバ、人間共ハ再ビ争イ始メルゾ？』

「そんなことにはならない!!」

『何故我が今モナオ、カヲ持チ続ケテイルト思ウ? ソレハ我がカノ源ガ、人間共ノ絶望ト恐怖ダカラダ。今デサエ、コノ世界ニハコレホドノ恐怖ト絶望ガ溢レテイル。我ガイナクナレバドウナルカナド、火ヲ見ルヨリ明ラカダ』

「それはおまえが魔物を生み出し、人々に恐怖を与えているからだろうが!!」

『ナラバ、コレヲ見ルガイイ』

ティアマトがそう言った瞬間、頭の中に映像が流れ込んできた。

「こ、これは!?!」

それは、奴隷のような扱いをされている人々だった……

『コレハ今現在、起コツテイルコトダ。コンナモノハ、冰山ノ一角ニスギンゾ? コレヲ見テモナオ、貴様ハ人間共ヲ守ルト言ウノカ?』

「……おまえが俺を騙している可能性もある」

『ナラバ、ギルドマスターニデモ確カメテミルガイイ。我が言ツテイルコトガ、真実カドウカワカルハズダ』

「それは」

「マスター!!」

さらに詰め寄ろうとした時、ラグの声が聞こえてきた。

『モウ気ツイカレタカ。思念体ダカラト、長居シスギタナ……』  
「消え去りなさい!!」

ラグがそう言い放った瞬間、まばゆい閃光が空間を満たし、靄を



払っていく。

『マア、イイ……種ハ』

靄が晴れると同時に紅い眼も消え去り、周囲は以前見たことのある真っ白な空間へと変わった。

「マスター、ご無事ですか？」

俺の目の前に3人の人物が降り立つ。

1人は白と青を基調としたローブを身に纏う、長い銀髪の少年。

もう1人は、フリルとレースがふんだんに使われた丈の短いドレスを着た、軽くウェーブした銀髪を2つに結んだ少女。

最後の1人は、リーンだ。

俺に声をかけてきたのは、少年なのだが

「おまえ、まさかラグか……？」

「はい、そうです」

声を聞いた時にわかってはいたが、俄かには信じられない。

「てことは、そっちはアイギスなのか？」

俺は、ラグと瓜二つの顔をした少女に尋ねた。

「そうだよ。な〜に、マスター。まさか、私に見惚れちゃったの〜？」

声も確かにアイギスだ。

「一体、どうなってんだ……？」

さつきから訳のわからないことばかりで、混乱しそうだ……

「それよりも、体に何か異常はありませんか？」

「いや……特に無いな」

「それは良かったです、デイン殿」

リーンが胸を撫で下ろしている。

「それで、一体何がどうなってんだ？」

「それは、私の方から説明しましょう」

そう言つて、リーンが説明を始める。

リーンの説明を要約すると、こんな感じだ。

少し前に邪神龍を封印している結果が何者かに一時的に破られ、神族総出で原因を探っていた時にラグから俺の様子がおかしいとリーンに知らせが届き、リーンの力を借りて俺の精神世界に干渉したらしい。

「俺の様子がおかしかったって、どうおかしかったんだ？」

「マスターにはわからないと思いますが、もう昼前ですよ？ 最初は寝過しただけかとも思いましたが、私たちやロゼさんたちがいくら起こしても、まったく起きなかったのです」

そんなに時間が経っていたのか……

「それで、アレは何だったんだ？ 思念体とか言っていたが……」

「その通りです。あれは邪神龍の思念体で、結界が破られた時に抜け出てきたのでしょう」

「結界は今どうなっているんだ？」

リーンたちがそれほど慌ててはいないので、深刻な状況ではないようだが……

「今は修復されています。さらにアリューゼ様の結界に加え、精霊王様たちの結界がこの大陸を覆っています。これ以上の侵入はないでしょう」

「そうか」

俺はリーンの言葉に頷きながら、考える。

「結界が破られたのは、どちら側からだ？」

「内側 邪神龍の側からです」

「ということは、破った何者かはこの大陸にいる可能性が高いのか……」

「はい。本来は、そのことを警告するために貴方に会いに来たのです」

「わかった。充分、気をつけよう」

神龍の結界を破ったとしたら、そいつは尋常ではない力を持っているはずだ。

「それではマスター、そろそろ目覚めて下さい。ロゼさんたちも心配しています」

「そうだな」

「それでは、私もこれで。くれぐれもお気をつけ下さい、デイン殿」

そう言うとリーンが消え、ラグたちも消える。

すると、意識が浮上する感覚がして

「デーン！ 無事だったのね！」

目を開けると、ロゼが声をかけてきた。

「ああ、心配をかけたようだな」

レイシアやオルグも、俺を心配して声をかけてくるが

「取り敢えず、何か食いたい……」

昨日の夜以来、何も食べてないのだ。

流石に腹が減った……

「そうね。じゃあ、何か作るわね」

ロゼが少し笑いながらそう言って、部屋を出ていく。

「俺たちも昼飯を食うか。デーンも起きたことだしな」

「そうですね。もうお昼ですし」

オルグたちも部屋を出ていき、俺も着替えて、リビングへと下りる。

そして、ロゼとレイシアが作った昼食を食べた後、3人に事情を説明した。

3人はかなり驚き、信じられない様子だったが、最後まで説明する頃には何とか納得してくれたようだ。

本当は今日中には『グランドティア』に向けて出発するつもりだったが、明日に延期することになった。

俺は大丈夫だと言ったが、ロゼが俺の体調を心配したからだ。時間も余ったので、ステータスとスキルの確認をしておくことにした。

『それではマスター、ステータスウィンドウを確認して下さい』  
「その前にちょっと訊きたいんだが、ラグたちのあの姿は何だったんだ？」

精神世界ではラグたちは、人の姿になっていた。

『あれは私たちの思念体ですよ。精神世界ではあの姿になるので』

『おもしろいでしょ』  
「へえ〜」

少し間だけだったが、人の姿のラグたちと会話するのは新鮮だった。

そんなことを思いながら、ステータスウィンドウを開く

Name: デイーン  
種族: デミ・エレメンタル半精霊  
称号: 認められし者  
Lv: 282 / 500  
HP: 45000 / 50000  
MP: 45000 / 50000  
SP: 22500 / 25000  
STR: 1825 / 2500  
DEX: 1800 / 2500  
VIT: 1835 / 2500

AGI : 1835 / 2500 + 500  
INT : 1800 / 2500  
WIS : 1800 / 2500  
スキルスロット : 60 /

種族が半<sup>デミ・エレメンタル</sup>精霊に変わり、全ステータスの最大値が上昇し、現在値まで上昇している。

さらにスキルスロットの上限値が無くなっていた。

「とうとう種族まで人間じゃなくなつたな……」

まあ、今更だが……

『まあまあ、次はスキルを確認しましょう』

ラグに言われたようにスキルを確認すると、<sup>ユナイト・マジック</sup>【融合魔術】が増えている。  
これは2属性の魔力を融合させて、新しい属性を生み出す魔術だ。  
以前ラグが言っていた雷属性は、この融合魔術の属性の1つだ。

「早速、試してみるか」

俺は外へと出て、<sup>ユナイト・マジック</sup>【融合魔術】を試してみることにした。

「それで、どうやれば<sup>ユナイト・マジック</sup>【融合魔術】を使えるんだ？」

『では、まずは簡単な方法から試してみましょう』

そうして、ラグによる魔術講座が始まった。

ラグが言うには雷属性は、火と風を融合させた属性らしい。

なのでまずはラグに言われたように、右手に炎、左手に風の魔力を込める。

そして胸の前で両手をゆっくりと近づけていくと、その間を結ぶように放電が起こり、ソフトボール大の雷球ができあがった。

「お、できた」

『雷属性下級魔術『プラズマボール』です。それでは、的に向かって投げて下さい』

雷球を金属製の的に向かって投げる。

的に当たった雷球が、閃光を放ちながら放電する。

思わず手で光を遮っていた俺は、改めて的を確認する。

「これで下級か……凄まじい威力だな……」

的の一部が融解し、未だに帯電しているのかバチバチと音を立てていた。

『融合魔術は下級でも、通常属性の上級並みの威力がありますからね』

「だが発動にこんなに時間がかかるんじゃ、実戦には使えないぞ」

さっきの『プラズマボール』を発動するのに、20秒ほどかかった。それに、両手がふさがるのもイタイ。

『慣れれば速くなりますし、片手でも発動できるようになりますよ』

「特訓あるのみ、ということか……」

何時間か練習し、ようやく片手で発動できるようになった。

だが、まだまだ発動までに時間がかかる。

その後、【縮地・廻天】も使ってみたが、こちらもクセがあり、なかなか使いづらい。

そんなことをしつつ、ラグやアイギスの新たなスキルも確認し、夕方になったので家に戻った。

ちょうど夕食が出来たところだったので、皆と一緒に夕食を食べた後、寝るまで風呂に入ったり、話をしたりと各々自由に過ごした。俺は完成が近づいてきた鎖帷子チェインメイルを仕上げるべく、鍛冶に勤しんだ。そして眠くなったので、自分の部屋に戻り、眠りに就いた。

「俺の所為で出発が遅れてしまったが、『グランドティア』に行こう」

朝の訓練を済ませて朝食を食べた後、俺たちは『グランドティア』に向かうために馬車の準備をしていた。

「ディーンディーンの所為じゃないんだから、気にしないで」

ロゼがそう言いながら、もはや定位置になっている御者台に座る。

「そうだぜ。気にすんな」

「そうですよ」

オルグとレイシアも、馬車へと乗り込みながらそう言ってくれた。

「わかった。皆、ありがとう。それじゃあスレイプニル、出発だ」  
『承知した、主殿』



馬車をひくスレイプニルがゆっくりと走りだした。  
徐々に速度を上げ、ある程度勢いがついたところで空を翔ける。  
メジオラ溪谷を眼下に見ながら、快適な空の旅を楽しむ。

「こうしていると、ずいぶん遠くまで来たんだなあって思っわ…  
…」

ロゼが風になびく髪を押さえながら、呟いた。

「そうだな……」

あんな夢(?)を見せられた所為か、ひどくノスタルジックな気  
持ちになった。

「ロゼは故郷には帰らないのか？」

ダークエルフなら恐らく、『ティルナノーグ』が故郷のはずだ。

「ん？ まあ、いつでも帰れるしね。それにいずれ、『ティルナ  
ノーグ』にも行くんでしょう？」

やはりロゼの故郷は、あの国であっていたようだ。

それに、いつでも帰れるか……

俺もこんな状況になるまでは特に何も思ってなかったが、やっぱり  
あの家が懐かしいな……

「ッ！？ ごめんなさい。私、そんなつもりじゃ……」

俺の表情から何か感じたのか、ロゼが謝る。

「いや、気にするな。少し、故郷が懐かしかっただけだ」

「ディーンの故郷って、どんな所なの？」

「……………」

どう答えれば良いのか……

『シアルの実に似た食べ物主食の国ですよ』

ラグが代わりに答えてくれた。

「へえ、そうなんだ。でも、あれが主食なの？」

「『シアルの実』って何だ？」

俺とロゼが同時に質問した。

『以前言っていた、『米』に似た食べ物ですよ』

「あ。そういえば、そんな話をしたな」

『そして、ロゼさん。別にマスターたちは、それだけを食べている訳ではありません』

「それもそうよね」

ラグは律義に、俺たち2人の質問に答えてくれた。

思い出したら、急に和食を食べたくなってきた。

「次は『ティルナノグ』に行くか……」

俺がボソッと呟くと

『別に止めはしませんが、もっと良く考えて下さい』

「わかったよ」

そんなことを話している内に、『グランドティア』の城壁が見えてきた。

「スレイプニル、適当な所で降ろしてくれ」

俺がそう言うと、スレイプニルは頷くように首を振り、徐々に高度を下げ始めた。

オルグたちに、もうすぐ到着することを伝える。

オルグたちが準備を終える頃に、スレイプニルが『グランドティア』近くの人目に付かなさそうな森の傍に馬車を降ろす。

「お疲れ、しばらく休んでいてくれ」

そう言うと俺は馬車を外し、空間を開く。

『承知した。何かあれば、呼んでくれ』

そう言いつて、スレイプニルは裂け目に入っていった。

オルグたちが降りたのを確認し、馬車をインベントリに入れると、俺たちは『グランドティア』へと歩き出した。

「こんにちは、ディーン様。それにオルグ様たちも、お久しぶりです」

『グランドティア』に到着した俺たちは、まっすぐギルド総本部へと向かった。

「グランドマスターに会いたいのですが」

受付のお姉さんに出迎えられた俺たちは、カードを提示した後用件を告げた。

「話は承っています。どうぞ、お通り下さい」

「ありがとうございます」

お姉さんに礼を言って、階段を上る。

「別に、3人もついて来なくても良かったんだぞ？」

「まあ、良いじゃねえか。俺たちも、その話に興味あるんだよ」

最初は俺1人で行こうとしたが、結局4人全員で行くことになった。

まあ1人で来いとは言われていないので、大丈夫だろう。

受付のお姉さんにも、何も言われなかったし。

そうこうしている内にグランドマスターの執務室に着いたので、ノックをする。

どうぞ、と返事があったので

「失礼します」

そう言いながら、部屋に入る。

3人も俺に続き入ってくる。

「お久しぶりですね、デイン君。それに皆さんも」

ゼノンが立ち上がりながら、そう言った。

「それで話というのは？」

「まあまあ。取り敢えず、座って下さい。皆さんもどうぞ」

ゼノンがソファアを勧めてきたので、全員座る。

コの字型に置かれたソファアに俺とロゼ、オルグとレイシアのペアが対面するよう座り、ゼノンがその間のソファアに座る。

「で？」

全員が座り終えたので、促すが

「相変わらず、せっかちですね。お茶でも飲みながら話しましよ  
う」

そう言っつて、部屋に待機していた職員の女性にお茶を頼むゼノン。  
何か変だ……

「何かあつたんですか？」

お茶が運ばれてきたので、飲みながらそう言った。

3人も変だと思っているのか、お茶には手をつけていない。

まあ、たとえ毒が入っていても、俺には効かないしな。

「え、何て言っつて良いか……少し困つたことになってしまいま  
して……」

「はつきり、言っつて下さい」

いい加減イライラしてきたので、語気を強める。

「わかりました……ディーン君は、年1回開かれる『武闘大会』

はご存知ですか？」

「もちろん、知っていますが……それがどうしたんです？」

『武闘大会』は『VLO』でも年1回、この『グランドティア』で開かれていたイベントだ。

「その大会に出場して欲しいのです」

「は？ 俺がですか？」

「そうです」

それこそ、困ったことになりそうだが……

「良いのか、グランドマスター？ こいつが出場しちまえば、確実に優勝するぞ？」

オルグが無茶苦茶なことを言っている。

確かに、この世界の冒険者に負ける気はしないが。

「それが、そう思っていない人もいます……」

「誰だ、その馬鹿は？」

オルグ、馬鹿は言い過ぎだろう……

「デイン君、ギースを覚えていますか？」

ギース……？

どっかで聞いたことあるような……

『以前、ここでマスターに絡んできた冒険者ですね』

ああ、あの馬鹿か。

「覚えていますよ。それが何か関係が？」

「はい。ロゼさんから聞いているとは思いますが、彼の父親はこのギルドの重役なんです」

「らしいですね」

「しかも、今大会を取り仕切っている1人でもあります」

「そうなんですか」

なかなか話が見えない。

「どうやら彼は、父親に貴方を出場させるように頼んだようです。理由は大方、試合で貴方を倒してロゼさんの気を引きたいのでしょう」

恥をかかされた恨みもあるかもしれませんが　とゼノンは付け加えた。

「……………」

呆れて言葉も出ない。

「あいつはどんだけ馬鹿なんだよ……………」

「知ってるのか、オルグ？」

「まあ一応、同じSランクだしな……………」

「私も噂くらいは聞いたことがあります」

レイシアはそう言ってロゼを見るが、ロゼは呆れたように笑っている。

「別に出場するのは構いませんが、本当に良いんですか？」

「構いません。もう私が何を言っても、無駄でしょうしね。もちろん優勝すれば、賞金と賞品はお渡しします」

いや、別にそれはどうでも良いんだが……

『くれると言っているのです。有り難く、貰っておきましょう。』  
それも、そうだな

ラグとそんなことを話していると

「じゃあ、Sランク昇格はどうするんだ？」

何だ、それは？

『VLO』では、『武闘大会』にそんなのはなかったはずだ。

「Sランク昇格ってどういうことだ？」

「ああ、ディーンは知らないかもね。この『武闘大会』は、Sランクの昇格試験も兼ねてるのよ」

元ギルド職員だけあって詳しいのか、ロゼが教えてくれた。

「へえ、そうなのか」

「子どもでも知ってる常識だけだね」

どうやら、子どもでも知っているらしい……

少しへこんでいると

「ま、まあ、ディーンが知らなくても仕方ありませんよ。そんなに落ち込まないで下さい」



「フォローありがとう、レイシア。それほど落ち込んでないから大丈夫だ。それで、Sランク昇格試験のことをもう少し詳しく教えてくれ。何で俺が出るとマズいんだ？」

「それは、この大会の上位5名がSランクに昇格できるからだよ」「もちろん、たとえ5位以内の冒険者でもSランクに相応しくないと判断されれば、なれませんがね」

オルグが答え、ゼノンが補足した。

「俺が出れば、その枠が1つ埋まる可能性があるって訳か」

「可能性じゃなく、確実にそうなるだろ。それに、途中でおまえに当たった有力候補が負けるのも問題だ」

「やけに突っかかってくるな、オルグ？ 何かあるのか？」

「ぐっ……」

「私たち 現Sランク冒険者も、試験の対象なんですよ……」

言葉に詰まったオルグに代わり、レイシアが俺の問いに答えた。

「ということとは、今大会でオルグたちが5位以内に入らなければ、Sランクを剥奪されるってことか」

「そういうことよ。いくらオルグでも、貴方と1対1で闘って勝てるとは思ってないでしょう」

それならオルグが突っかかってくるのも、納得できるな。

「その点は心配いりません。ディーン君と対戦した人は、勝敗に関係なく 恐らく十中八九負けるでしょうが 試合内容で選考することにしましょう。もちろん、ディーン君は上位5名からは外します。なので今年は実質上位6名、及びディーン君と善戦した冒険者が選考対象ですね」

ゼノンが、オルグの不安を拭うようにそう言った。

「それならいいぜ。俺も、呆気なく負けるつもりはねえしな」

「後、できればディーン君にはラグナレクは使わないで欲しいのですが……」

「まあ、その方が良いでしょうね。クラス？の魔導兵装の性能は、強力すぎますから」

俺は左腕の『アイギス』を見ながらそう言った。

その後、さらに詳しく大会のことを話し合い、その途中で何故かロゼも出場することになってしまった。

まあ本人も乗り気なので、別に構わないか……

そして一通りのことは話し合ったので、そろそろ帰ることになった。

ロゼたちが部屋から出ようとするが

「少しグランドマスターと2人で話したいから、先に行つてくれ」

俺はそう言つて、部屋に残る。

「……？ わかつたわ。それじゃあ買い取りの受け取りは、私たちがしておくから」

「悪い、頼む」

ロゼたちは事前に頼んでおいた買い取りの受け取りをするために、部屋を出ていった。

「それで、お話とは何でしょうか？」

「その前に、人払いをお願いしますか？」

俺がそう言うと、ゼノンが部屋にいた職員のお姉さんに目配せをする。

するとお姉さんは頷き、部屋を出ていった。

「これで宜しいですか？」

「ええ。それでは、本題に入りましょう。今この世界に、奴隷となっている人々はいますか？」

俺は邪神龍に見せられた映像の真偽を確かめるために、わざわざ1人で残ったのだ。

「ッ!? 確かにそういう噂はあります……実際ここ近年、年に数人行方がわからなく人がいるのは確かです」

「それは冒険者ですか？」

冒険者なら迷宮で死亡したなどの理由で、行方不明になることはあるだろう。

「冒険者も多いですが、普通の人達 特に子どもが行方不明になることも多いのです……」

「営利目的 誘拐などではないのですか？」

「行方不明になった子どもはその殆んどが、どちらかといえば貧困層の子どもたちでした」

「……………」

営利目的の誘拐でもなく、1人ではそれほど遠くまでは行けない子どもが行方不明になったとなれば、残された可能性は多くはない。

「デーン君の言ったように、奴隷にする目的で攫われた可能性は非常に高いです……」

「……ギルドで捜査はしているのですか？」

「それはもちろん！　今も各国で捜査は続いています。ですが、手掛かりを掴みその場に踏み込んでも、いつも犯人たちはいなくなっているのです……過去には何人かの子どもたちを、保護できたことはありましたが……」

邪神龍の見せた映像は真実だったということだ……

「その捜査、俺にも参加させてくれませんか？」

「それは構いませんが……貴方はこの話を一体何処で　いえ、何も訊かないでおきましょう。デーン君なら、何があっても驚きません」

「すみません。それでは俺も失礼します。お時間を取らせてしまつて、すみませんでした」

「私の所には、今この国に犯人たちが潜伏している可能性が高いとの情報が入ってきています。冒険者を派遣し調べてはいますが、今のところそれ以上の情報は入ってきていません……」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言つて俺は席を立つ。

「くれぐれも無茶はしないで下さいね」

そんな言葉を背に受けながら、俺は部屋を出た。

その後、買い取りの終わっていたロゼたちと合流し、話し合いの時にゼノンから『是非、泊まって下さい』と紹介されていた高級宿<sup>ホテル</sup>へと向かった。

途中、余程ひどい顔をしていたのか、3人から心配されたが適当

に誤魔化した。

そしてかなり大きな石造りの3階建てで豪華な装飾が施された高級<sup>デル</sup>宿、『セントラル・ティア』に着いた。

「何度来ても、ここはすげえな」

オルグが高級<sup>ホテル</sup>宿を見上げながら、感嘆する。

「来たことがあるのか、オルグ？」

正直、オルグには目の前のセンスの良さそうな高級<sup>ホテル</sup>宿は似合わない。

「『武闘大会』開催中は、Sランク冒険者はタダでここに泊まれるんだよ。じゃなきゃこんなクソ高え所、泊まれるかよ」

「おまえ……それがあから、あんなに突っかかってきたんじゃないだろうな？」

「そんな訳あるか!!」

「恥ずかしいから、こんな所で騒がないでよ。早く入るわよ」

ロゼの言葉に従い、中に入る。

「いらっしやいませ。御予約はお有りですか？」

事前にゼノンに聞いていたように、ここは完全予約制のようだ。

「グランドマスターから言われて来ました。ディーンと言います」

「ギルドカードを確認させていただいても宜しいですか？」

俺はカードを取り出し、受付嬢に手渡す。

「確認致しました。ディーン様ですね？ グランドマスター、ゼノン様より『武闘大会』までのご予約と料金をいただいております」  
無理に『武闘大会』に出場させた、迷惑料ということらしい。

「こちらがお部屋の鍵となります。皆さまは長期のご滞在となりますので、迷宮の攻略など長期の外出の際には私どもに一声おかけ下さい」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言って、俺は4つの鍵を受け取る。

ゼノンはわざわざ、1人1部屋の予約を取ってくれたようだ。

料金は大丈夫なのか……？

かなり高そうだが……

しかも、一番良い部屋のように……

俺は3人にそれぞれ鍵を手渡しながら、そんなことを考えた。

俺たちの部屋は最上階の3階なので、昇降機を使う。

これはまさにエレベーターで、どのような仕組みかはわからないが、『精霊石』の魔力で動いているらしい……

3階へと着いた俺たちは、隣同士の各々の部屋に入っていく。

最上階は全部で8部屋しかないので、1部屋1部屋がかなり広い。俺は取り敢えず外套などの装備を外し、ソファで一息吐いているとノックの音が響き

「開いてるぞ」

俺がドアに向かってそう声をかけると、オルグが入ってきた。

「おう、ディーン。ちょっと出かけようぜ」

入ってきたオルグは、開口一番にそう言った。

「何だ、いきなり。それに、出かけるって何処にだよ？」

「良いから、良いから。おっと、そいつ等は置いていけよ？ おまえならそんなもんなくても、大丈夫だろ」

「だから、何処に行くんだよ？」

そう言うが、オルグは無視して俺を引き摺っていく。

『マスター、どうせならロゼさんたちの所に置いていって下さい』

ラグがそう言うので、途中ロゼの部屋に寄り、ラグとアイギスを預ける。

「何処行くの？」

「俺も知りたい。オルグに訊いてくれ……」

「あまり、遅くならないようにして下さいね」

ロゼの部屋にいたレイシアにそう言われながら部屋を出て、鍵をフロントに預け、外に出る。

「いい加減、何処に行くか教えろよ」

「しばらく歩けば、わかる」

そこはかかない不安を感じながら、オルグについていった……

<sup>ホテル</sup>高級宿を出たのは夕暮れ時だったが、今は陽も沈み、夜空には星が瞬き始めていた。

街灯型の魔導具が灯りを放ち、大通りを行き交う人々を照らしている。

細い路地には設置されていないが、これほどの数の魔導具が普通に使われている辺りは、流石は『グランドティア』といったところだ。

これほどの光景は、この国以外では魔導技術が発達している、『ダルグスト』くらいでしか見られないだろう。

夕食時で賑わう人々を避けながらオルグの後をついていくと、周りの様子が変わり、通りの両側には酒場が目立つようになってきた。

「酒を飲みに来たのか？ だったら、<sup>ホテル</sup>高級宿にもあっただろ」

<sup>ホテル</sup>高級宿の1階には、高そうな洒落たレストランとバーがあったはずだ。

「あんなとこじゃ落ち着かねえよ」

「それはそうかもしれないが、そろそろ腹が減ってきたんだが…」

…  
「もうちょい歩けば、着くって」

それからさらに歩くと、周囲の様子がまた変わってきた。

周りを歩く人々は、男の割合が明らかに増えている。

しかも、通りに並んでいる店は妖しい雰囲気醸し出している。

「おい、オルグ……酒を飲みに来たんじゃないのか……？」

周囲の店は所謂、娼館というやつだろう。

幾つかの店の前には客の呼び込みをしているのか、肌も露わな服を着た女性が立っている。



「そんなこと、一言も言っただら？ おまえ、グランドマスターと話をしてから、何か元気がなかったからな」

「いや、その気持ちは嬉しいが、それとこれとがどんな関係があるんだ？」

「やっぱ元気がない男を連れてくるとしたら、ここだよ」

「どんな理屈だ！！」

「何でそんなに嫌がるんだ……？ ……まさか、おまえ……」

そう言っただけで、ちょっと可哀想な奴を見るような目で俺を見てくる。

大体何が言いたいかわかった。

「アホか。俺だって経験くらいあるわ。……じゃなくて、おまえこんな所に来たのがバレたら、レイシアに殺されるぞ？」

「バレなきゃ良いんだろ？」

「……………」

アホすぎて言葉が出て来ない……  
というか、俺もバレたら命がない気がする。

「よし。俺は帰る。おまえの気持ちだけ、受け取っておくよ」

俺はそう言っただけで、踵を返そうとする

「そこのお兄さんたち、ちょっと寄ってかない？」

背後から声をかけられた。

艶っぽい声だが、何処かで聞いた気が……

前方のオルグは硬直している。

俺は恐る恐る振り返る。

「や、やあ、ロゼさん……こんな所で何を……?」

振り返った先にいたのは、やはりロゼだった。  
レイシアもいる。

『マスター……』

『最っ低』

ロゼに背負われたラグと、レイシアが手に持っているアイギスが  
そう言う。

「貴方達こそ、こんな所で何をしているのかしら?」

ロゼは絶対零度の気配を纏って、レイシアも笑顔だがこめかみに  
は血管が浮かんでいる。

「ち、ちが……俺は知らなかったんだ！ オルグに無理矢理連れ  
てこられただけだ!」

「汚ねえぞ、デーン!」

「何も間違っただろ!」

俺たちが言い争っていると

「黙りなさい、2人とも。話は帰ってから、ゆっくりと聞いて  
あげる」

ロゼが凍てつきそうな声で、そう言う。

その声で動きを止めた俺たちを女性2人が引き摺り、高級宿へと  
帰っていった……

「イテテテ……」

ベッドに腰掛けた俺は、赤い手形がくつきりをついた頬をさする。あの後、ロゼたちによって高級宿<sup>ホテル</sup>に連行された俺たちは、俺は口ゼに、オルグはレイシアにそれぞれ説教された。

俺の方は2時間ほど説教された後、平手打ちを1発されて解放されたが、オルグの方は未だに悲鳴が聞こえてくるので、まだ続いているようだ。

『今回はマスターが悪いですよ』

「いや、俺も被害者だろ……ていうか、何でロゼたちがあんな所にいたんだ……」

部屋に寄った時には確か、下のレストランで食事すると言っていたのに。

『私が、後をつけようって言ったんだよ。なぐんか怪しかった

し』  
「……………」

女(?)の勘、恐るべし。

もう良いや、忘れよう。

そんなことを考えながら、装備を整える。

『マスター、やはり1人で行くのですか?』

「ああ。このことには、あの3人を巻き込みたくない」

俺は、今から奴隷の件を調べに行くつもりだ。

『そうですね。ならば、これ以上は何も言いません』

俺は部屋の鍵をかけ、窓から夜の街へと飛びだした。

## 第17話 発芽（前書き）

今話には残酷だと思われる箇所があります。  
苦手な方はご注意ください。

## 第17話 発芽

「後2ヶ月、何をするんだ？」

あれから2日が経った。

俺たちは買い物をしたり、ちょっとした依頼を受けたりと比較的ダラダラと過ごした。

その理由はレイシアの激しい折檻で、オルグが寝込んでしまったからだ……

今は普通にイチヤイチヤしているので、許してはもらえたのだから。

俺はこの2日間も、夜に高級宿ホテルからこっそり脱け出して調査をしたが、大した進展はなかった。

なにせ、この『グランドティア』は市街部だけでもかなり広い。  
【気配察知】を範囲最大にして街中を調べたが、それでもまだ半分ほどだ。

外周部も含めれば、全てを調べるにはまだ数日はかかる。

早く見つけ出したいが、あまり連日脱け出すとロゼ辺りに気づかれそうなので、しばらくはやめておいた方が良さそうだろ。(すでに少し怪しまれている)

そんな訳で『武闘大会』まではまだ2ヶ月近くあるので、これからどうするかを俺の部屋で話し合っているのである。

「残りの精霊王様に、会いに行くんですか？」

オルグとイチヤつきながら、レイシアが訊いてくる。

この2人、あれからさらに人目を気にしなくなっている。  
仲が良いことで、何よりだ……

「いや、それも考えたが、先に行っておきたい迷宮がある」

邪神龍も気になるが、結界はまだ大丈夫らしいので特に急ぐこともない。

「その迷宮って何処なの？」

「言っただけだったが、実は上位金属素材が無くなってきている。特に『オリハルコン結晶』はもう無い」

「え？ そうなんですか？」

「ああ。この前、オルグの金属盾に使ったので最後だ。だから、この機会に十分な量を手に入れておきたい」

『オリハルコン結晶』はこれからも必ず必要になる金属だ。

「『オリハルコン結晶』は採掘ではなく、『オリハルコン・ゴーレム』という魔獣を倒すことでしか入手できない。それでさっきの話に戻るんだが、その魔獣は『金属の洞窟』<sup>メタル・ケイブ</sup>に出現する」

「ということは、さっき言っていた迷宮は、その『金属の洞窟』<sup>メタル・ケイブ</sup>なのね？」

俺はロゼの言葉に頷く。

その後、迷宮の特徴やいつ出発するかなどを話し合った。

取り敢えず、出発は明日にし、ロゼたちは食糧などを買いに市場へ行き、俺はギルドへと向かった。

受付のお姉さんに許可を貰い、ゼノンに会いに行く。

「おや、デーン君。今日はどうしたんですか？」

ゼノンは執務の手を休め、そう言った。

「しばらく留守にするので、それを伝えに」

「そうですか。何処かの迷宮に行くのですか？」

「はい。それで、その間に捜査に進展があったら、知らせて欲しいのです」

「それは構いませんが、連絡手段がありませんよ？」

「大丈夫です」

俺は【召喚】を起動、『シルフィード』を1羽召喚する。

紋章から現れた『シルフィード』が、俺の肩に止まる。

「これは……？」

「俺の『アガシオン召喚獣』の『シルフィード』です。こいつは迷宮に自由に出入りできるので、連絡手段にはもってこいです」

「え〜と、貴方の『アガシオン召喚獣』ということは、私には従わないのでは……？」

「それも大丈夫です。こいつはかなり知能も高いので、指定した人間にはちゃんと従います。こいつにはすでに、グランドマスターに従うように指定してありますので」

「わ、わかりました。それで餌とかは？」

「必要ありませんよ」

ラグに訊いたところ、『シルフィード』は空気中のマナを取り込んで生活しているらしい。

『VLO』ではプレイヤーのMPだったが……

「それは良かったです」

「取り敢えず、止まり木さえあれば良いので」

用意をお願いします と言おうとしたら、『シルフィード』が肩から飛び立ち、ゼノンの外套などを掛けている木製のポールハン



ガーに止まった。

「……アレが気に入ったようです。構いませんか？」

「ええ、構いませんよ」

ゼノンが苦笑しながら答える。

「それでディーン君の方は、何か進展はありましたか？」

「いえ……あれから調査はしていますが、特に何も……」

悔しさを耐えるため、拳を握り締める。

「仕方がありませんよ……ディーン君が戻ってくるまでには、何とか進展させるよう頑張ってみます」

「すみません……」

「貴方が謝ることじゃありませんよ。私たちも、この犯人たちは許せませんしね」

ゼノンの紅い瞳が、怒りに反応するようにキラリと輝く。

「ありがとうございます。それでは、俺はこれで失礼します」

「わかりました。何かあれば、この子で連絡します」

俺はゼノンの言葉に頷き、部屋を出た。

こんな人達がいる限り、俺はこの世界を守ろう。

改めて、そう思えた気がした……

俺たちはホームで朝の訓練をした後、風呂に入り、ホテル高級宿のレス

トランで朝食を食べた。

レストランの食事は、その値段に釣り合う美味さだった。フロントの受付嬢に長期外出することを告げ、鍵を預け、外に出た。

「じゃあ、昨日言ったように『メタル・ケイブ金属の洞窟』に行くぞ」

3人が頷いたので、『ウエルテス』への門に繋がる通りを歩いていく。

『ウエルテス』は『獣人族』などの亜人族の国だ。

「確か、あの国には土の精霊王様がいるのよね？」

「ああ。だが、今回は行かないけどな」

「ついでに行けば、良いんじゃないかねの？」

「駄目だ。どれくらい時間がかかるか、わからないからな。武闘大会に間に合わなかったら、どうする？」

「それもそうですね」

これは建前で、本音は奴隷の事件が気になるからだ。

アレが解決するまでは、あまり長期間の攻略は避けたい。

それに集中できる気がしない。

市街部を抜けると、歩くのもダルくなってきたのでスレイプニルを呼び、馬車で進む。

門を警備する冒険者たちには俺のことは伝わっているらしいので、スレイプニルを見てもそれほど驚かないだろう。

そんなことを考えながら進んでいると、門が見えてきた。

流石に少しは驚かれたが、カードを見せると納得した様子だった。冒険者たちに礼を言い、馬車で門を抜ける。

「ラグ、『メタル・ケイブ金属の洞窟』はここから東で良いのか？」

『……………』

何かを考えているのか、ラグから返事が返ってこない。

「ラグ！」

『はい、すみません！ 何ですか、マスター？』

俺の話は、全然耳に入ってなかったらしい。

「だから、『メタル・ケイブ金属の洞窟』はここから東で良いのか？」

『はい、そうです』

「どうしたんだ？ 何か考えてたのか？」

『いえ、何でもありませんよ……………』

明らかに、何かを隠してるな……………

まあ、良い。

言いたくなければ、言うだろう。

「と、そうだ。ちょっと止まってくれ、スレイプニル」

『どうかしたのか、主殿？』

そう言って、スレイプニルは歩みを止める。

「どづしたの、ディーン？」

ロゼが訝しげにしている。

「ロゼ、シームルグを呼んでくれ」

「……………？ いいわよ。 シームルグ！！」

召喚の紋章が空中に描かれ、シームルグが現れる。

『御機嫌よう、皆さん。何か御用かしら？』

シームルグが馬車の傍に降り立つ。

「これを着けても良いか？」

俺はインベントリから昨日作っておいた、シームルグ用の鞍を取り出す。

『良いですわよ』

許可が出たので、鞍を着ける。

鞍は翼の付け根の間に置くようにし、革のベルトを両側から2本ずつ、付け根を挟むように回し、胸の前で留める。

これで翼の動きは妨げないはずだ。

「どうだ？ 動き難くないか？」

『大丈夫ですわ。それに軽いですわね』

「『軽量化』の紋章を刻んでるからな。じゃあロゼ、乗ってみてくれ」

「わかったわ。良い、シームルグ？」

『構いませんわよ。今は貴女が、私のマスターわたくしですもの』

シームルグが乗りやすいように身を低くし、ロゼがその背に乗る。

「どうだ？」

「大丈夫よ」

「それじゃあ、行くか」

俺がそう言うと、スレイプニルが歩き出し、シームルグが空へと舞い上がる。

しばらく進むとスレイプニルも空を翔け、シームルグと並ぶ。

「どうだ、ロゼ？ シームルグの乗り心地は？」

「すごいわ！ スレイプニルとはまた違った気持ち良さよ！」

ロゼが鞍に付いている取っ手を握り締め、叫ぶ。

シームルグの動きを妨げるので、手綱は付けていない。

『当たり前ですわ。わたくし私は空の王ですよ』

シームルグがさらに力強く羽ばたき、空高く舞い上がる。

「キヤアアアア……………」

ロゼの悲鳴も長く尾を引き、空へと昇っていく。

ま、まあ、シームルグもあまり無茶なことはいらないだろう。

そんなことをしている内に、『メタル・ケイブ金属の洞窟』に到着した。

「大丈夫か、ロゼ……………」

洞窟の近くに馬車を止め、御者台から降りた俺は、同じように洞窟の傍に舞い降りたシームルグの背でグッタリとなっているロゼに声をかけた。

「だ、大丈夫よ……………」

ロゼが、少しフラつきながら降りてくる。

『私わたくしとしたことが、少しやりすぎてしまいましたわ』

あの後もシームルグは、時折アクロバティックな飛行をしていた。そのたびにロゼの悲鳴が響いていたのは、言うまでもない……

「まあ、これからは普通に飛んでやってくれ。じゃあ、行くぞ」

この迷宮は道幅が狭いのでスレイプニルはホームで留守番、シームルグも攻略が終わるまで適当に過ごすらしい。

そして、俺たちは洞窟の入り口へと歩いていった。

『メタル・ケイブ金属の洞窟』地下1階

この『メタル・ケイブ金属の洞窟』はウエルテスと桜花の間に存在する『オルウエム山脈』にある『ダンジョン迷宮型』の迷宮なのだ

「ラグ、サブダンジョンの魔獣は強くなってないんだよね？」  
『……………』

ラグはまた何かを考えているのか、返事がない。

「どうしたんだ、ラグ？ 何かあるんなら、聞くぞ？」  
『そうですね……マスターには、話しておいた方が良いでしょうね』  
「わかった。その前に訊いておきたいんだが、ここの魔獣の強さはどうなってるんだ？」

『サブダンジョンの魔獣の強さは変化しませんから、マスターの知っている強さとさほど変わりませんよ』

「そうか。 オルグ！ ラグとちよつと話があるから俺はしばらくここに残るが、どうする？」

俺は少し先を進んでいたオルグたちに声をかけた。

「こここの魔獣は、俺たちだけでも大丈夫なのか？」

「上層だけなら大丈夫だろう」

「そうなのか……どうする、2人とも？」

1人で決めかねたのか、オルグはロゼとレイシアに意見を求めた。

「時間がかかるの？」

「そんなにはかからないと思うが……どうなんだ、ラグ？」

『すぐに済むと思いますよ』

「それなら、私たちだけで先に進んでみませんか？ 何か事情がありそうですし」

「そうね。そうしましょうか」

「らしいぜ、デイン？」

意見が纏まったようだ。

「すまない、皆。すぐに追いつくから」

俺がそう言うと、3人は洞窟の奥へと歩いていく。

「それで話って何だ？」

『実はこの迷宮は、リシエル様が亡くなった場所なのです……』  
「な、何だと!？」

ラグには悪いが、とてもじゃないが信じられない。

「あいつの実力なら、こんな迷宮なんでもないだろう……？」

確かにこの迷宮の難易度は低くはないが、俺の記憶じゃリシエルのレベルは上限に達していたはずだ。

『以前にも言ったように、彼女が亡くなったのは欲に目が眩んだ人間たちの所為なのです』

「ああ、そうだったな……」

『その人間たちは彼女にこの迷宮で、貴重な金属を採掘してくるよう頼んだのです。大方、金が目的だったのでしょう』

それはありそうなことだ。

なにせ、この洞窟は希少金属が豊富に採れる。

「だが、そのくらいなら」

『ええ、それだけなら彼女が亡くなることはなかったでしょう。ですが、その時にはかなりの人数の冒険者が同行していたのです』

「何故、そんなことになったんだ？」

あいつも、大人数での攻略のデメリットは知っていたはずだ。

人数が多くなれば確かに攻略は楽にはなるが、一旦パニックになれば、それを收拾するのは非常に困難だ。

『彼女に依頼した人間　かつてのグランドマスターですが　が　そう手配したのです。なるべく多くの金属を持ち帰りたかったので　しょう』

「あいつは反対しなかったのか？」

あいつならインベントリがあるので、1人でも大量の金属を持ち



帰れるはずだ。

『もちろん、しましたよ……自分1人でも十分な量を持ち帰れるからと。ですが、信用されていなかったのでしょうね……そのまま持ち逃げされるのではないかと。結局、強硬な態度に押し切られてしまいました……』

「そうか……」

『その結果はマスターの想像通りです……魔獣に襲われ、パニックになった冒険者たちを守るためにリシエル様は』

「もう良い……」

それ以上は聞きたくはないし、言わせたくもない。

「すまなかつたな……辛いことを思い出させて……」

『いえ、彼女が亡くなったのは私の所為でもあるのです。あの時、私をもっと強く反対していれば』

『それは私も同じだよ……だから、もうやめよ？ リシエル姉さまだって、こんなの望んでないよ……』

「そうだな。アイギスの言う通りだ。俺たちが自分のことで落ち込むなんて、あいつなら望まないだろう」

リシエルが笑顔で頷いたような気がした。

『そうですね』

『姉さまは楽しいのが、好きだったからね』

「よし。じゃあ、3人の後を追おう」

そして俺は3人に追いつくため、洞窟の奥へと進んでいった。

『メタル・ケイブ金属の洞窟』地下18階

意外と先に進んでいた口ゼたちと合流した後、改めて全員で迷宮を攻略していった。

そろそろ上層部も終わりに近づいているので、魔獣もそれなりに強力になってきている。

「破ッ」

『ミスリルゴーレム』の拳を躲し、雷を纏わせた左の突きを叩き込む。

「バチッ！」　という音とともに、『ミスリルゴーレム』が崩れ落ちる。

「ラグの言った通り、雷属性が良く効くな」

ラグが言うには雷属性には、水属性と金属の魔獣に効果が高いらしい。

右から飛びかかってきた金属を纏う狼、『メタルウルフ』を剣で逆袈裟に両断、糸の代わりに金属弾を吐き出す『メタリック・スパイダー』が放った金属弾を叩き落とし、一足で距離を詰め頭を刺し貫く。

背後から襲いかかってきた『アダマンダイト・パペット』に口ゼの新たな武器　魔導弓『イチイバル』の風の矢が突き刺さり、吹き飛ばしていく。

俺は最後に残った金でできた獅子、『ゴールデン・レグルス』を叩き斬り、一息吐いた後、剣を鞘に納めた。

「魔導弓の扱いも、慣れたものだな」

俺は魔導弓を片手直剣『フラムヴェルジュ』に変化させ、鞘に納めたロゼに声をかけた。

「元々弓は使ってたしね」

魔術を主体に闘うプレイヤーはMPが切れた時のために、遠距離武器も鍛えてることは多い。

ロゼも以前弓を使っていたので、【シェイプシフト】に登録できる形態を『魔導弓』にしたのだ。

魔導弓は普通の弓と違い、魔力で形成された矢を射るので、矢を携帯する必要はない。

その代わり矢を射るたびにMPを消費するが、ロゼの『イチイバル』は周囲のmanaを吸収して矢にするのでMPは消費しないらしい。ちなみに名前の由来は、ダークエルフに伝わる伝承に登場する弓だそうだ。

そんなことを話しつつ剥ぎ取りをしていく。

そう この迷宮に出現する魔獣は幻影ではなく、実体を持っているのだ。

なので『精霊石』は手に入らないが、剥ぎ取りをすれば魔獣の身体を構成している金属を入手できる。

「段々と希少金属の魔獣が増えてきたな」

俺は『メタルウルフ』が纏っていた『ダマスカス』を剥がす。

この『メタルウルフ』は個体によって纏っている金属が違い、希少な金属を纏っているほど強力な個体だ。

この特徴は『メタリック・スパイダー』も似ていて、こちらは吐き出す金属が希少なほど強力な個体となる。

「そうね。この調子だと、大量の希少金属が集まりそうね」

ロゼも『アダマンダイト・パペット』を構成していた『アダマンダイト』を拾っている。

「まあ、本当に欲しいのは『オリハルコン結晶』だけだけだな」

「余ったら、買い取ってもらえば良いじゃない」

「それもそうだな」

いらなくなれば、クラッドのおっさんにでもやるか。

その時のおっさんの顔を考えると笑えてくる。

文句を言いつつも喜んでくれるだろう。

そんなことを考えながら剥ぎ取りをし終わると、攻略を再開した。結局その日は地下20階まで攻略した後、ホームに戻り休むこととなった。

「夕食が出来たわよ、ディーン」

夕食が出来上がるまで、工房で鍛冶をしていた俺をロゼが呼びに来た。

「わかった。今、行くよ」

俺はハンマーを片付けながら、ロゼに応える。

「あつ、チェインメール鎖帷子が出来たのね」

ロゼが作業台に置いていたチェインメール鎖帷子に触れながら、そう言った。

「ようやくな……」

チエインメイル  
鎖帷子は、今さっき出来上がったばかりで鈍い銀色に輝いている。  
結局、全ての鎖を『オリハルコン』と『アダマンダイト』の合金  
で作った。

作った鎖は数えてはいないが、2万を下回ることはないだろう……  
これまでの過酷だった日々を思い返ししながら、ロゼと一緒にリビ  
ングへと歩いていった。

そして夕食を食べ、しばらく談笑した後風呂に入り、眠りに就い  
た。

『<sup>メタル・ケイブ</sup>金属の洞窟』最下層 地下50階

あれから地下39階でさらに1泊した俺たちは、ようやく最下層  
まで辿り着いていた。

ここには目的としていた『オリハルコン・ゴーレム』が出現する。  
だが、まずは目の前の奴らからだ。

「皆、魔獣だ」

先頭を進んでいた俺の声に反応した3人が、各々の武器を構える。  
それと同時に、俺の気配に気づいたのか『メタル・キャタピラー』  
が壁を齧るのをやめ、一斉にこちらを向く。

この魔獣は壁を齧って、採掘ポイントを消失させる鬱陶しいヤツ  
だ。

「うぐっ、やっぱ俺はこの系統のヤツは駄目だ……」

芋虫系が苦手なオルグが怯む。

『メタル・キャタピラー』は芋虫とダンゴムシを足して2で割ったような見た目で、金属の殻を纏っている。

「文句を言っな。3人はミスリル系の奴らを頼む」

俺はそう言っと、オリハルコン合金系の殻を持つ奴らへと駆ける。その内の1匹が殻を棘状に変化させ、丸まって転がってくる。

『ルナライトミスリル』との合金なのだろう。

「ラグ、【グレートソード斬馬剣形態】」

棘よりも長大な大剣に変化させ、疾走の勢いまま転がってきた『メタル・キャタピラー』を刺し貫く。

殻を易々と貫いた大剣が反対側から飛び出す。

俺はそのまま大剣を振り、刺さっていた『メタル・キャタピラー』を壁に叩きつける。

そいつはその衝撃で両断されるが、新たに1匹が転がってくる。

『アダマンダイト』との合金の殻を持ったそいつに、俺は右手に雷球を発生させ投げつける。

感電し勢いの弱まったそいつに、とどめとばかりに雷を纏わせた右拳を叩き込む。

殻を突き破った右拳がその体内で雷を解放、存分に荒れ狂う。

感電死し崩れ落ちたそいつから右拳を引き抜き、『オリハルコン』の殻を持つ『メタル・キャタピラー』が吐き出した鋼糸を大剣で斬り裂く。

【縮地・廻天】を起動し、背後に回り込み大剣で叩き斬る。まるで水銀のような体液が飛び散り

「終わったな……」

俺は3人の様子を確認して呟いた。

ロゼが火炎を纏った『フラムヴェルジュ』で、『セイクリッドミスリル』の殻を持った最後の1匹を斬り裂いた。

この剣は以前は炎など纏っていなかったが、アルファードが力を込めて以来こうなった。

元々セファイド様が込めていた力が解放されたのでしよう　とラグは言っていたが。

「じゃあ、剥ぎ取りをするか」

俺がそう声をかけると

「お、俺もか……?」

「当たり前だろ……」

そうして『メタル・キャタピラー』の殻を剥がしたり、解体して体内の鋼系を取り出したりしていった。

オルグは嫌がったが、もちろん無理矢理やらせた。

そして一通り剥ぎ取りが終わったので、俺たちは先に進んでいった。

「いたぞ、『オリハルコン・ゴーレム』だ」

洞窟の最奥の広間で、とうとう『オリハルコン・ゴーレム』を見つけた。

『オリハルコン・ゴーレム』はおよそ5mほどの巨体で、全身が『オリハルコン』で構成されている。

その核である『オリハルコン結晶』が、俺たちの目的だ。

「事前に言ったように、魔術も物理攻撃も効きづらいからな？」  
「ええ、わかってるわ」

他の2人も頷いたのを確認し、広間へと踏み込む。

10体いる『オリハルコン・ゴーレム』が俺たちに気づき、地響きを伴いながら迫ってくる。

俺はその内の1体へと駆けながら、剣を大剣へと変化させる。

俺を踏み潰すかのように踏み出された巨大な足を躲し、大剣に雷を纏わせる。

【天駆】の効果で宙を蹴り、三角跳びの要領で胸元まで跳ぶと大剣を袈裟斬りに振り下ろす。

大剣はゴーレムの腕に阻まれるが、纏った雷がその腕を木端微塵に砕く。

その衝撃で体勢の崩れたところに俺はさらに宙を蹴り、距離を詰めるとその首を刎ねた。

砕け千切れたように飛んでいく頭部を砕きながら、別の1体が殴りかかってくる。

「アイギス」

『りよ〜かい』

展開された障壁でその拳を受け止め、吹き飛ばされないよう空中で踏ん張る。

今までは空中で攻撃を受ければ、たとえ防ぐことはできても吹き飛ばされていた。

やはり、【天駆】はかなり便利だ。

即座に障壁を消し、その腕を肩から斬り飛ばす。

電撃のショックで硬直したそいつを、大剣で頭から幹竹割りに斬



り裂いていく。

流石にかなりの抵抗を感じるが、構わず股間まで振り抜く。

真つ二つになった『オリハルコン・ゴーレム』がバラバラに砕け散る。

ロゼたちの方を確認すると、彼女たちは3人で協力して『オリハルコン・ゴーレム』を倒している。

ロゼとレイシアが遠距離攻撃で気を引き、オルグが足をハルバート槍斧で斬り飛ばして、攻撃が届くようにしてから3人でボコボコにしている。実に正しい闘い方だ。

1人で倒してしまえる俺の方が異常なのだ。

あちらは大丈夫そうだが、俺はそう考え、全身に風の魔力を纏う。新たに習得したスキル、【まそうがい魔装鎧】だ。

このスキルは【闘気術】と同じような効果だが、『気』ではなく『魔力』を纏う。

風の魔力を纏った俺は普段の数倍の速さで、『オリハルコン・ゴーレム』へと駆ける。

【疾風迅雷】ほどではないが、かなりの速さだ。

その反面、【魔装鎧】で纏っている魔力の属性以外の魔術を使えなくなるというデメリットもある。

ある程度距離を詰めたところで宙を駆け、放たれた右の突きを躲す。

【魔装鎧】を使ったことで纏っていた雷が消えた大剣を振り切られた腕に叩き込むが、流石に斬り裂けなかった。

「チッ」

俺は大剣に気を纏わせて首を狙って薙ぎ払うが、右腕に防がれる。すかさず右脚に気を纏わせ、横蹴りを『オリハルコン・ゴーレム』の顔面に叩き込む。

まるでドリルのように渦巻いた風が、削り砕いていく。

首から上が無くなった『オリハルコン・ゴーレム』が前のめりに倒れていく。

俺は一旦地上に降り、残りの数を確認する。

「残り3体か……」

そう呟くと、こちらに迫ってきた1体へと駆けていった……

それから1時間ほど闘い、『オリハルコン・ゴーレム』を殲滅した。

「よし、終わったようだな」

俺は剣を払い、背の鞘に納めた。

結局『オリハルコン・ゴーレム』は、俺が6体、ロゼたちが4体屠った。

「それじゃあ、剥ぎ取りをしましょうか」

ロゼが同じように剣を鞘に納めながら、声をかけてきた。

「そうだな。『オリハルコン結晶』の核は、心臓の辺りにあるから  
抉り出してくれ」

「わかりました」

「この外殻はどうすんだ？」

オルグが『オリハルコン・ゴーレム』を構成していた金属を持ち上げて訊いてきた。

「ついでに持って帰ろう。置いて帰るのも、勿体ないしな」

そうして4人で協力して、素材を集めていった。  
核<sup>コア</sup>を抉り出すのは、主に俺の役割だった。

身体が『オリハルコン』でできているだけあって、普通の剣やナイフだと抉り出すのが困難なので、ラグを使って抉り出したからだ。ラグはかなり文句を言っていたが、そこは我慢してもらった。

広間には数多くの採掘ポイントがあったので、ついでに採掘もしていった。

その後、『<sup>エスケープ</sup>脱出』で洞窟を後にした。

外に出るとすでに陽も沈んで暗くなっていたので、今日はここで休もうとすると

「ん？ あれは『シルフィード』か？」

俺を目掛けて、1羽の白い鳥が飛んで来ていた。

十中八九、俺の召喚獣<sup>アガシオン</sup>の『シルフィード』だろう。

俺が上げた手に止まった『シルフィード』の足には、手紙が結び付けられていた。

恐らくはゼノンからの知らせだろうと思い、読んでみる。

「ッ！？ 悪いが俺は先に戻る！！ 皆はゆっくり帰ってきてくれ！！」

俺はそう言うと、3人の返事も聞かず走り出す。

「ちよつとデイン！？」

「訳は後で話す！！」

来い、スレイプニル！！ 後は任せるぞ

！！！！

『承知した、主殿』

俺は3人の移動手段として、【召喚】でスレイプニルを呼び出す。馬車はないが、何とかなるだろう。

ロゼがまだ何かを叫んでいるが、俺はさらに速度を上げ、宙を駆けける。

ゼノンからの手紙には

『犯人たちの居場所の見当がつかしました』

と書かれていた。

「居場所がわかったって、本当ですか!？」

俺はグラウンドマスターの執務室の扉を蹴破るような勢いで開く。

「デ、ディーン君!？ 驚かさないで下さい……ずいぶん早いんですね」

「すみません。居ても立つても居られなかったものですから……」

俺はあの後、【疾風迅雷】すら使ってここまで帰ってきたのだ。た。

「それで居場所の件は？」

「ええ、やはりこの『グラウンドティア』にいました。場所は『サーフェリオ』側の外周部です。今は選りすぐった冒険者たちを向かわせて、監視をしています」

「踏み込まないのですか？」

「どうやら冒険者くずれの賊を護衛として雇っているようで、下手をすれば攫われた人々を人質に取られる可能性もあります。なので

安易には……」

「そうですね……」

「ですが、ディーン君ならこの状況も打破できるでしょう？」

実際に現場を見てみなければ、何とも言えないが……

「わかりました。何とかしてみます」

「お願いします。派遣した冒険者たちは皆、貴方のことを知っていますので」

俺はゼノンに頷き、部屋を出る。

そしてギルドを出た俺は、夜も更け人通りが少なくなった通りを西に向かつて駆ける。

市街部を抜け外周部に出たところで【気配察知】を最大範囲で起動、辺りを探る。

アイコンが多数集まっているのを見つけ、【暗視】を起動しつつそちらに向かつて走っていく。

すると、ポツンと小屋が建っているのが見え、それより大分手前の茂みに隠れるように10人ほどの冒険者がいた。

俺は走るのをやめ、歩いて彼らに近づいていく。

「そこで止まれ、何者だ？」

地面からいきなり出てきた『ノーム』の冒険者が、俺の首元に剣を当てる。

妖精族『ノーム』の種族固有スキル、【土中移動】で潜んでいたのだろう。

「ディーンです」

俺はインベントリからカードを取り出し、見せる。

「アンタが……それは悪かった」

そう言うと、彼は剣を俺の首から外した。

「それで状況はどうです？」

恐らくリーダーらしい、その『ノーム』の男性に訊いた。

「中には結構な数の人間がいるようだ。小屋に入りきれぬ数じゃないから、地下室でもあるのだろう」

アイコンを確認すると、確かにそのようだ。

「それに見張りがいますね。入り口の前に1人と、それに見回りをしているのが1人」 周囲

「その通りだ。1人なら気づかれずに、俺が何とかできるが……」

【土中移動】は攻撃を加えるには一度地上に出なければならぬが、【気配隠蔽<sup>ハイディング</sup>】にかなりのボーナスが付くので、気づかれずに近づくのは容易だろう。

「もう1人は俺がやりましょう。見回りしている方をお願いできますか？」

「できるのか……？」 いや、アンタがそう言っんならできるんだろう。任せよう」

入り口も前にいる奴は壁にもたれかかっているので、背後は取れない。

彼が疑うのも当然だろう。

「ありがとうございます。俺はそのまま小屋に踏み込みますので、皆さんは逃げられないように周囲を固めてくれませんか？」

「……わかった。俺たちじゃ足手纏いになりかねんしな」「すみません」

攫われた人達を全員無事に救い出すには、俺1人の方がやりやすい。

「その代わり、必ず全員無事に救い出せ」

俺がその言葉に頷くと彼は地面に潜った。

俺も準備をする。

スローイングダガーを引き抜き、待っていると ドサツと微かな音が聞こえた。

恐らく、『ノーム』の彼が見張りを倒した音だろう。

もう1人の方も音に気づいたのか、そちらに歩き出そうとするが

「フツ」

短い呼吸とともにダガーを投げる。

放たれたダガーが男の足元に刺さると、その動きが止まる。

【投剣】、【暗視】、【気配察知】、【気配遮断】<sup>ハイディング</sup>の複合ハイカテゴリー【暗殺】のアーツスキル『影縫い』だ。

声すら出せなくなったその男との距離を素早く詰め、延髄に手加減した手刀を叩き込む。

呆気なく気絶した男を、冒険者たちの方へ引き摺っていく。

『ノーム』の冒険者も同じように、見張りを引き摺ってくる。

「それじゃあ、俺は行きます」

「ああ、気をつける」

男を預け、【ハイディング気配隠蔽】を起動しつつ小屋へと近付く。

中の気配を探るが、誰もいないようだ。

ゆっくり扉を開け、目視で確認するがやはり誰もいない。

余程、あの賊を信用しているのか？

いや、油断せずに行こう。

俺は小屋の中に入り、地下への入り口を探す。

すると、端の方の地面に両開きの鉄扉があった。

開いてみると、そこには地下への階段があった。

階段を下りていくと、魔術で造られたのか、かなりしつかりとした作りの通路が続いている。

一本道の通路を進んでいくと、また扉がある。

扉越しに中の様子を確認すると、かなり大人数の人の気配がする。

何があっても良いように覚悟を決め、扉を開く。

そして、俺の視界に飛び込んできたのは

ボロボロの、服とも言えないような布切れを身に纏い、首から値札のような数字が書かれた板を下げた子ども達。

広間の奥でまるで試し切りをするように剣で腕を斬られる男や、槍で貫かれる女。

広間の中央の舞台で犯されてる少女。

そして、それらの様子を嘲笑しながら見ている、仕立ての良い服を着た人々……

「な、何だ……これは……」



これが、本当に人間のすることか……？  
これが、本当に俺が守ろうとした人間なのか……？  
こんな奴らのために、俺は今まで命を懸けて闘ってきたのか……？  
あまりの怒りで視界が真紅に染まる。

（こんな畜生にも劣る奴らは人間じゃねえ。殺しちまえば良いんだよ）

不意に、脳裏に言葉が閃いた。

「貴様は誰だ！？ どうやって入ってきた!？」

「そつだ……こんな屑共、人間じゃない……」

「何だと、貴様!！」

豚が何かを喚いている。

「うるさい」

手刀を横に薙ぐ。

どす黒い気を纏った手刀があっさりと豚の首を刎ねる。

何が起こったのか理解できないのか、キョトンした表情を張りつけたままの首が飛んでいき、胴体から血が噴き出す。

「イヤアアアア……!！」

頭から血を浴びた豚が悲鳴をあげ、それを聞いた他の豚共が騒ぎ出す。

逃げ出そうとするが、そんなことは許さない。

広間にある2つの出入り口に向け、魔導銃を放つ。

放たれた弾丸が扉の上の壁に当たり、崩れた土砂で扉が埋まる。これで残った出入り口は、俺の背後にあるものだけだ。

俺は最初に悲鳴をあげた豚の醜悪な顔面に拳を叩き込み、爆砕させる。

さらに中央の舞台へと跳び、少女を犯していた豚の首を手刀で刎ねる。

剣や槍を持った豚が走ってきたので剣を抜こうとするが、柄を握った瞬間、衝撃とともに弾かれる。

弾かれた右手を見てみると、薄く煙が上がり焼け爛れていた。

「……………？ まあ良い。素手で充分だ」

『』

何か聞こえた気がするが、今はどうでも良い。

振り下ろされた剣を左手で掴み押し折り、突き出された槍も右手で柄を掴んで押し折ると、それぞれ持ち主へと返してやる。

喉に剣が、胸に槍が突き刺さった豚共が崩れ落ちる。

「逃がすかよ」

外に出ようと扉に殺到していた奴らの頭に、1発ずつ弾丸を叩き込む。

再び扉の前に跳ぶと、残りの豚共の足に弾丸を撃ち込んだ。

豚共の鳴き声が広間に響く。

「貴様らは簡単には殺さない」

「き、貴様、こんなことをしてタダで済むと思うなよ！！ わ、私を誰だと思って」

「黙れ」

おっと、ついイラついて殺してしまった。

これじゃ駄目だ。

こいつらには、もっと自分のしたことを後悔してから死んでもらわないと。

そうだな……

まずは両手両足の指をゆっくりと1本ずつ切り落とすか。

それから回復魔法をかけてから、もう1回最初からだ。

それでいこう。

自然と笑みが浮かんでしまう。

俺が近づいていくと、豚共が一樣に怯えている。

今更、遅い。

まずはこいつからだ。

先頭にいた豚の右手の指を切り落とそうとすると

「そこまでにしとけ、デーモン……」

背後の扉から入ってきた誰かに腕を掴まれる。

「邪魔だ」

俺は背後の気配に後ろ蹴りを叩き込む。

「グハッ!」

誰かが吹き飛んでいく気配がし、壁にぶち当たる音が響く。

「オルグ!？」

聞いたことのあるような女性の声が、これもまた聞いたことがある名前を叫ぶ。

どうしても良いか……

そう思い、作業の続きを始めようとすると

「デーン!!」

また別の女性の声が聞こえるとともに、脇腹に衝撃が走り骨の碎ける音がする。

「ガハッ!!」

不意打ちに加え、あまりの威力で壁まで吹き飛ばされる。壁に激突した俺に、さらにその誰かが追撃を加えてくる。

咄嗟に躲そうとしたが脇腹の痛みで動きが一瞬止まり、誰かの拳が頬にめり込む。

「ロ……ゼ……」

その言葉を最後に、俺の意識は途絶えた……

「うつ……ここは……?」

周りを見渡すと、真っ白い空間が広がっている。

「気がつきましたか、マスター?」

俺の目の前には人の姿のラグとアイギス、そしてリーンがいた。

「ああ……ここは俺の精神世界か……?」

「そうです。……マスター、御自分が何をしたか覚えていますか？」  
「覚えてるよ……」

俺は嬉々として人を殺しまくりに、最後は仲間にもまで攻撃をしてしまった……

唯一救いなのは、攫われた人達を殺そうとはしなかったことだけだ。

それもロゼが俺を止めてくれなければ、どうなっていたかわからないが……

「オルグたち、それに攫われていた人達は無事なのか……？」

「無事です。オルグさんは重傷でしたが、レイシアさんが魔術で治癒しました。ロゼさんも無事です。攫われていた人達はギルドで保護されたようなので、ゼノンさんに訊いてみると良いでしょう」

「ロゼも無事？ 俺はロゼにも攻撃したのか？」

俺が覚えている限りでは、そんなことはなかったが……

「マスターにはわからなかったかもしれませんが、あの時のマスターは凄まじい邪気を放っていました。腕を掴んだオルグさんや、攻撃を加えたロゼさんも無事では済みません。ですが、今は2人もレイシアさんの魔術で完治しています」

レベルが上がっていたのも、無事だった要因の1つでしょう。そうラグは付け加えた。

「そういえば、ラグを掴もうとした時も弾かれたな……それで、一体俺に何が起こったんだ……？」

それに、あの『声』は一体何だったんだ？

「貴方はあの時、堕ちかけていたのです」

「堕ちかけた……？ 俺は邪神龍や魔物と同じ存在になってしまったのか……？」

「いえ、今はまだ大丈夫です」

「そうか。それは良かった」

「そうとも言えません」

「何故だ、リーン？」

「今回のことで、貴方を殺すべきという意見が神族の中で出始めました……」

「なっ！？」

「もちろん、そう言っているのは一部の神族だけです。アリユージェ様やディオス様、それに上位神族の方々は反対されています」

「それに、セファイド様やアルファード様も反対してくれてるよ」

ラグとアイギスはそう言うが……

「それほどまでに、今回貴方が放った邪気は凄まじかったです。

その波動は神界にまで届きました。もし貴方がこのまま堕ちてしまえば、邪神龍に匹敵する脅威となります。今でさえ貴方と互角に闘えるのは、精霊王様たちやディオス様たち 上位神だけでしょう」

「何が原因だったんだ……？」

確かに殺してやりたいという気持ちはあったが、あそこまでのつもりはなかった。

「恐らくは、邪神龍の思念体が何かをしたのでしょう。たとえば、貴方の怒りや憎しみに反応するような何かを残したとか……」

「そういえば、消え去る時に『種』がどうか……」

「恐らく、それでしよう。芽吹く前なら取り除くこともできたので

すが、今は貴方の魂と完全に融合してしまっています……取り除くのはもう不可能です……あの時、私がもっとしっかり調べていれば……申し訳ありません」

「いや、リーンの所為じゃない。俺も気づいてなかったしな……それで、俺はこれからどうすれば良い？」

「わかりません……これはもう、貴方にしかどうすることもできないのです。私が言えるのは、憎しみの感情は抱かないで下さい。そういった負の感情が、引き金になっています」

「取り敢えずは、闇の精霊王様になるべく早く会いましょう。彼女なら、何かわかるはずですよ」

「そうなのか？」

「恐らく　としか言えませんが」

「わかった」

今はラグの言葉を信じるしかない。

そう決心した時

「それで、ですね……あんなことを言った後で厚かましいのは重々承知していますが、ここには先程の話以外にも、貴方にお話　いえ、お願いがあつて来たのです……」

リーンが、心底申し訳なさそうな声でそう言った。

「ん？　何だ？」

「貴方に『リヴァイアサン』を倒して欲しい　とのことですよ……」

俺を殺すと言った口でその願いか、本当に厚かましいな……

まあ、リーンが言っている訳でもないだろう。

彼女に非はない。

それよりも

「『リヴァイアサン』って何だ？ 魔獣か？」

倒せと言っているのです。そうだとは思いますが、下手をすれば神獣の可能性もある。

「『リヴァイアサン』は海竜と呼ばれる、『幻獣』です」

また聞いたことのない単語が出てきた。

「『幻獣』って何だ？ 神獣とは違うのか？」

「ほとんど同じモノですよ。ただし神獣と違い、幻獣はどの精霊王様の眷属ではありません」

「そうなのか。それで、また何で倒さなければならぬんだ？」

「どうもこの間の結界が破られた際に、瘴気に侵されてしまったようです。それで現在、『有翼族』が住む島を襲おうとしているようです」

「何だと!？」

『有翼族』が住む島というのも初耳だが、今はどうでも良い。

「有翼族たちも接近に気づいて迎撃はしているようですが、相手は『海の主』とまで言われた幻獣、上手くはいっていないようです。本格的に島が襲われるまでは、まだ数日の猶予はありますが……」  
「わかった。そのクエスト、受けよう」

知ってしまった以上、見殺しにもできない。

「ありがとうございます！ それで、報酬の方はどうされますか？  
なるべく希望を叶えるように」と言われております」



ずいぶん太っ腹だな……  
それだけ強敵ということか？

「……じゃあ、スキルが欲しい。たとえば、異空間の所有権を一時的に他人に移せるようなスキルはあるか？」

俺1人で行動する際に、ホームをロゼたちにも使えるようにするためだ。

「少し待って下さい。大丈夫だそうです。ただし、所有権を移している間は貴方は使用できなくなりますが、それでも宜しいですか？」

「ええ、構いません」  
「それでは」

そう言ってリーンが俺の額に手を当てると、その手が輝き

「終わりました。後で確認しておいて下さい」

「わかった」  
「それでは私はこれで。リヴァイアサン討伐の件、宜しくお願い致します」

リーンは俺に一礼して消え去った。

「それではマスターも起きて下さい。皆さん、心配していますよ？」  
「その前に少し話し合っておきたいんだが、さっきの話を聞く限り、リヴァイアサンとの戦闘は海の上ということになるのか？」

海竜と言っていたのだ、恐らくそうだろう。

「その通りです。それがどうか　ああ、マスターはロゼさん達を連れていくか、迷ってるのですね？」

「それであんな報酬にしたんだ？」

「そうだ。おまえたちはどう思う？」

「正直、マスター1人の方が良いでしょう。リヴァイアサンの強さは海の中でなら、精霊王様にも匹敵します」

「それほどなのか!？」

「ええ。しかも今は瘴気に侵されていますから、その力は未知数です」

「そうか……やはり、3人とは別行動の方が良いな」

「ロゼお姉ちゃんが怒るよ」

「今回のことでも、かなり怒っているようですしね」

「うっ……そこは何とか納得してもらうしかないな……」

それなりの覚悟をしておかないとな……

「起きたら、ちゃんと皆さんに謝って下さいよ？」

「わかってるよ」

「殴られるくらいは覚悟しておいた方が良いでしょう」

そう言うと2人も消え去った。

俺の意識も覚醒していく……

目を開けると、そこは高級宿の俺の部屋だった。  
部屋にはロゼたちが、3人とも揃っていた。

「すまなかった、皆」

俺は身体を起こし開口一番、そう言った。

「それよりも、体は大丈夫ですか？ 治療はしましたけど、肋骨が折れてましたよ？」

ロゼの蹴りで、だろう。

チェインメイル鎖帷子や気を いや、邪気を纏っていたのに大した威力だ。

「大丈夫だ。ありがとう、レイシア。オルグ、ロゼもすまなかった。怪我は大丈夫か？」

「ああ、俺は大丈夫だ。鎧は碎けちまったけどな。また作ってくれるんだろ？」

オルグが笑いながらそう言う。

「ああ、詫びも兼ねてさらに良い物を作ってやる」

「なら、良い」

「それで、貴方は何であんなことをしたの？」

全てを聞くまで許さない　　ロゼの目はそう語っていた。

「ああ、全部話すよ。約束だしな」

そして俺は、精神世界で邪神龍に出遭ったことから話していった

……

「　　という訳だ」

「墮ちかけたって……大丈夫なの、ディーン？」

「確かにあん時のおまえは普通じゃなかったな……」

「ええ。どす黒いオーラを纏ってましたし、瞳も真紅でした……それに、私たちのこともわかっていないようでしたし……」

やはり、色々と普通じゃなかったらしい。

「今は大丈夫らしい」

『マスターが怒りや憎しみの感情に呑み込まれなければ、大丈夫です』

「それで本当に大丈夫なの……？」

「闇の精霊王なら、どうにかできるかもしれないが……」

「じゃあ、今すぐ会いに行きましょう」

『それは無理です、ロゼさん。元々上位属性の精霊王様には、基本属性の4人の精霊王様と契約しなければ会うことはできません』

「そんな……」

「心配するな、ロゼ。そう簡単には呑まれないようにするさ。それよりも、3人は俺とこのまま旅を続けて良いのか？ 次に暴走すれば、どうなるかわからないぞ？」

この3人を手にかけるくらいなら、1人の方が良い。

「アホか、良いに決まってる。もしそうだったら、また止めてやるよ」

「そうです」

「今回だって私が止めたのよ？」

「だが」

「くだいぞ。俺たちが良いって言ってんだ。おまえは素直に頷いてりゃ良いんだよ」

女性陣もオルグの言葉に頷いている。

「すまない、皆。ありがとう」

俺が少し感動していると

『マスター、何か忘れてませんか？』

そうだった……

「それと、もう1つ話があるんだが……しばらく別行動をしないか？」

「ハア？ おまえ、俺の話聞いてたか？」

「何言ってるの、デイン？」

やっぱりこうなるよな……

「実は……リンからリヴァイアサンの討伐を依頼されてな。俺1人で行ってこようと思う」

「リヴァイアサンってあの海竜『リヴァイアサン』！？」

「知ってるのか、ロゼ？」

「子どもでも知ってるわよ！！ 伝説になるような魔獣じゃない！？」

おいおい、そんなに凄いのか……

「何であんなヤツを討伐するんだ？ 確かりヴァイアサンは、滅多に人は襲わねえはずだろ？」

「そうですね。伝説でも、警告を無視してテリトリーに入り込んだ者を襲う と言われていますし」

「どうやら瘴気に侵されたらしい。さっき話した、結界が破られた時にだそうだ」

「尚更、貴方1人だと危険じゃない。私たちも行くわ」

「相手は海の上だぞ？ どうやって闘う気だ？」

「シームルグがいるわ」

「駄目だ。危険すぎる」

「それは貴方だって」

「はいはい、2人とも落ち着きなさい。お互いが心配なのはわかるけど、もう少し冷静にね」

言い争いになりそうだったところを、レイシアが止めてくれた。

「とにかく、俺1人で行く。これはラグたちとも話し合って決めたことだ」

『ちよつとマスター、私を巻き込まないでよ』

『私は良いのですが、アイギス……』

「ッー!!」

ロゼは俺を一睨みして、部屋を出て行ってしまった。

「……もう少し落ち着いてから、もう1回話し合いなさい」

レイシアはため息混じりにそう言うと、部屋を出ていった。

「おまえも大変だな……」

オルグも俺の肩を叩き、部屋を出ていった。

これからどうするか……

『ゼノンさんのところに行ってはどうですか？ あの後のことも気になるでしょうっ。』

「そうだな。俺も頭を冷やさなきゃな」

壁に立てかけられていたラグを背負い、ギルドへと行くことにした。

「すみませんでした」

ギルドへと行き、ゼノンの執務室へと通された俺はまず謝った。

「デイン君が謝る必要はありませんよ。確かにやりすぎたかもしれませんが、私があの場においても同じことをしたかもしれません」  
「いえ、それでも殺すのはやりすぎでした。本当にすみませんでした」

俺は再度頭を下げた。

「攫われた人達も無事　とは言えませんが、命は救えたのです。それで良しとしましょう」

「ギルドで保護されたと聞きましたが、彼らはどんな状態なのですか？」

「ほとんどの人は無事なのですが、中には精神を病んでしまった人もいます……身体の傷は魔術で癒せても、心の傷は……」  
「そうですか……」

彼らの中には子ども達もいた。

もし、俺が作りだしてしまったあの惨劇が原因なら……

「デイン君、大丈夫です。貴方が原因ではありません。むしろ、貴方は彼らを救ったのですよ？」

「ですが……」

「彼らの扱いは、それほど酷かったのです……心を閉ざしてしまうほどに……決して貴方が原因ではありません」  
「わかりました……」

今はゼノンの優しさに甘えておこう……

「犯人たちはどうなりましたか？　ほとんどは、俺が殺してしまっただと思いますが……」

「まだ残党が残っているようですね。その辺りは今、取り調べをしています。必ず全員1人残らず、捕まえますよ。こんなことが、二度と起こらないように」

「お願いします」

「なに、それほど時間はかからないでしょう。貴方のことを言えば、皆ペラペラ喋りますしね」

「何ですか、それは？」

「喋らないなら、あの男を連れてくるぞ？　これで喋らなかつた奴はいないそうです。余程、貴方が恐ろしかったのでしょうね」  
「ハハハ……」

もう好きにしてくれ。

「後、実は1つ困ったことがあります……」

「何ですか？」

「少し待っていて下さい」

そう言うと、ゼノンは執務室を出ていく。

5分ほど待っていると

「お待たせしました」



ゼノンには10歳くらいの子どもを2人、連れて帰ってきた。

「その子たちは？」

「助け出された子ども達の中の2人なのですが……」

俺は良くその2人を見てみた。

髪や体は洗ったのか、拭いたのかある程度は綺麗になっている。

服もあのボロキレではなく、サイズは少し合っていないが普通の服を着ている。

2人とも色白で、整った顔をしている。

男の子と女の子か？

双子なのか瓜二つだ。

片方 男の子の方は金髪で、女の子の方は銀髪だ。

そして2人とも瞳が紅い……

「その子たち、もしかして『吸血鬼』ですか？」

チラッと、鋭く尖った犬歯が見えた。

「その通りです……周りには魔族だと言って誤魔化していますが、バレルのも時間の問題です」

何が問題なんだ？

『この世界では、『吸血鬼』<sup>ヴァンパイア</sup>は魔物として認識されているのです。バレれば、まず間違いなく殺されるでしょう。保護しているゼノンさんの方が、周りから見れば異常なのです』

な、何だと！？

確かに、魔物の中には『ヴァンパイア・ロード』といったヤツも

いたが……

「何で『吸血鬼』<sup>ヴァンパイア</sup>が……？」

「わかりません。あいつらに『サーフェリオ』に行く実力があるとは思えませんし、ここ数年あの国への通行許可は出していません。」

「この子たちが、こちらに迷い込んだのかもしれません」

「もしかして、俺に預かって欲しいと……？」

「お願いできませんか？」

無茶言うな！！

子育てなんかしたことないぞ！！

そう言うのは簡単だったが……

「わかりました……何とかしてみます」

見上げてくるこの子たちの目を見てしまうと、断れなかった。

「本当ですか！？ ありがとうございます！！ こちらでも出来る限り支援はしますので」

2人も話していた内容がわかるのか、おずおずと俺の外套を握り締める。

俺はため息を吐きながら2人の頭を撫でる。

「この借りはいつか必ず返します」

「高くつきますよ？」

俺はそう言ってギルドを出て、<sup>ホテル</sup>高級宿へと帰った。

途中、かなりジロジロ見られたが、幸い捕まることはなかった……

『どうするんですか、マスター？ 子どもなんて預かって……』

昇降機に乗っている時に、ラグが訊いてきた。

「ホント、どうするかな……」

2人はここに来るまで、ずっと俺の外套を握り締めたままだ。

一切疲れた様子を見せないのは、流石『ヴァンパイア吸血鬼』か……

もう陽も沈んでいるので、ステータスにプラス補正がかかってるのか？

『ロゼお姉ちゃん達の反応が楽しみだね』

頭が痛くなってきた……

リヴァイアサンの話もしなければいけないのに……

そんなことを考えている内に、3階に着いたので降りる。

取り敢えず、3人に子どものことから話そう。

3人を俺の部屋に呼ぶ。

「 という訳で、この子たちを預かることになった……」

「 いやいや、預かるって……」

「 誰が世話をするのよ」

「 可愛い子たちね」

レイシアが2人を撫でまわす。

オルグとロゼが呆気にとられている。

「 レイシア、さっきも言ったように2人は『ヴァンパイア吸血鬼』だぞ？」

「 子どもには変わりありませんよ。 ちょっと臭いますね……」

「 イーン、お風呂に入れてあげましょう」

確かに、まだ汚れは残っているだろう。

俺は空間を開き、全員でホームへと入っていく。

そしてロゼとレイシアが2人を風呂に入れる。

しばらくオルグと話していると、4人が出てきた。

子ども達　ヘリオスとヘカテーはレイシアに磨かれたのか、すっかり綺麗になっている。

「どうだ、気持ち良かったか？」

俺は男の子　ヘリオスを撫でながら訊いた。

「うん」

ヘリオスはコクリと頷き、また俺のシャツの裾を握る。すっかり懐かれてしまった。

「やっぱりこの子たちは血を飲むの？」

ロゼが女の子　ヘカテーの長い髪を拭きながら訊いてくる。

「どうなんだ、ラグ？」

『確かに血も飲みますが、普通の食事でも食べられますよ』

「食べられない物はないのか？」

ニンニクとか。

『特になかったはずですよ』

「そうか」

「ママ……」

ママ!?

ロゼが髪を拭いていたヘカターが衝撃の言葉を口にした。  
一体、誰に向かって言ったんだ?

ロゼとレイシアの目が点になってる。

「じゃなかった……ロゼ……さん……お腹すいた……」

「私だったの!? ……わかったわ。何か作ってあげる」

ロゼは手早くタオルでヘカターの髪を包むと、キッチンへと歩いていった。

頭にタオルを巻いたヘカターがトコトコと歩いてきて俺の隣へリオスとは反対側に座り、こちら俺の裾を握る。

「ヘカター、せめてお姉さんかお姉ちゃんと呼んでやってくれ……」

ヘカターが頷く。

「聞こえてるわよ、ディーン」

「それにしても、懐かれてるわね」

レイシアが羨ましそうに言う。

「何でだろうな……」

「そうしていると、本当に親子みたいだぜ?」

「うるさい」

俺がオルグに言い返すと

「パパ……?」

ヘリオスが見上げてくる。  
その目を見ると違うとも言えず、頭を撫でてやる。  
すると、2人が抱き付いてきた。

『マスターは相変わらず、子どもに甘いですね』  
「ほっとけ」

そんなことをしている内に料理が出来たので、皆で食べる。  
取り敢えず、ロゼは無難に肉と野菜の炒め物を作ったようだ。  
2人とも凄い勢いで食べていく。  
そして食べ終わり、腹が膨れると眠くなったのか、コックリコックリと舟を漕いでいる。

俺たちは視線で誰の部屋に寝かせるか決める。  
もちろん一番分が悪い、俺の部屋になった。  
俺がヘリオスを、ロゼがヘカテホテルを抱えて高級宿の部屋へと帰る。  
そして俺のベッドに2人を寝かせ、オルグとレイシアはそれぞれの部屋に戻っていった。  
残ったロゼはというと

「さっきはごめんなさい」  
「リヴァイアサンのことか？」  
「ええ」

ロゼがベッドに腰掛け、ヘカテの頬を撫でる。

「いや、俺も悪かったよ。心配してくれていたのに」

俺もロゼの隣に腰掛ける。

「でも、1人で行くんでしょ？」  
「ああ。それだけは譲れない」

俺がそう言うと、ロゼはため息を吐き

「わかったわよ」

「すまない」

「本当にそう思ってる？」

ロゼがそう言って、俺の顔を覗き込む。

「思ってるよ」

「なら、良いわ。それで、この子たちどうするの？」

「どうするか……」

「育てるとか言わないわよね？」

2人の寝顔を見ていると、それも良いかと思えてしまう。

「一番良いのは、親が見つかることなんだが……」

「それは難しいと思うわよ？」

「だよな……」

2人は『ヴァンパイア吸血鬼』なのだ。

親の情報が入ってくることはないだろう。  
可能性としては、俺たちで探すくらいか。

「いずれ『サーフェリオ』にも行くから、探そうと思えば探せるが……」

「可能性は低いし、それまではどうするのよ？ それに、見つからなかったら？」

「俺たちで育てるか？」

「ッ!? 何、バカなこと言ってるのよ」

「どうしたんだ? 顔が赤いぞ? 俺たち4人でってことだぞ?」

「バカッ!」

「イタッ! 2人が起きたらどうするんだよ……」

「知らないわよ」

流石にからかいすぎたか。

「じゃあ、私も部屋に戻るわ」

「ああ」

俺がそう言ってもロゼは動かない。

「どうしたんだ? あっ……」

「どうしよう……」

へカテーがしっかりとロゼのシャツの裾を握っている。

「抜けないのか？」

「抜けないわね……」

「じゃあ、脱ぐか？」

「殴るわよ？」

「待て待て! 俺がシャツを貸すから脱いで着替えれば良いだろ？」

俺はあっち向いてるから」

「うーん、それも何だかへカテーが可哀相だし……良いわ。私も今日はここで寝る」

「……俺は何処で寝るんだよ？」

「床 と言いたいところだけど、このベッドは大きいから充分寝られるでしょう? 当然、変なことしたら殺すわよ?」



「しないよ……」

流石にこんな子どもがいるところで、そんな気は起きない。そして俺とロゼはヘリオスとヘカテーを挟んで、同じベッドで寝ることになったのだが

「デーン、無理してない？」

「何がだ？」

ロゼが横になったまま話しかけてきた。意外と顔が近いからちよつと照れるな。

「ほら、この子たちを助けた地下でのこと……」

「ああ」

ロゼは、俺がまた人を殺したことで悩んでいるんじゃないかと思つた訳か。

「どうしてだろうな……今回はそれほど気にしていない。それどころか、あんな奴ら死んで当然と思つている部分もある」

確かにゼノンに言つたようにやりすぎだとは思っているが、罪悪感さほど感じていない。

「これも邪神龍の影響かな……」

「そんなことないわ。あんな奴ら、確かに死んで当然よ」

「だが、あんな奴らでも人間だ……俺が守ろうとしている……な」  
「嫌いになつた、この世界が？」

「そんなことはないさ。この世界にも良い人達はたくさんいる。守りたいと思える人も」

俺はヘリオスの頬を撫でる。  
くすぐったそうな、気持ち良さそうな顔をしている。

「この子たちや俺が出会った人達、それにロゼたちのためなら命を懸けて闘える」

見知らぬ誰かのためには無理だが、大切な人達のためなら

「ッ」

「でも、私は貴方には死んで欲しくない。危険な目にも遭って欲しくない。貴方が死ぬなら私も死ぬわ」

いきなり重ねられた唇を離しながら、彼女はそう言った。

「ロゼ……」

「わかってる……いずれ貴方は自分の世界に還るということも、そのために私を傷つけないようにしてくれていたことも……」

「気づいてたのか……」

「私もそこまで鈍くないし、レイシアやアイギスが教えてくれたもの」

「アイギス……」

『だって……』

「彼女は悪くないわ。私が頼んだの」

「そこまでわかっていて、何故？」

「もう自分の気持ちを抑えられなかったの……私も諦めようとした……住んでいる世界が違うんだって。でも、貴方はいつも私たちのために無茶ばかり。これは私なりのケジメ。貴方の隣に立って闘えるようになるって誓い。だから、気にしなッ」

今度は俺の方から重ねた。

「俺だってロゼ、君が好きだ。だけど、今はこの世界に残るとは言えない。けど、必ず答えは出す。それまで待っていてくれないか？」

我ながら自分勝手な言い草だ。

「でも、その前に邪神龍を倒さないかね」

「ああ、そうだな」

そして最後にもう一度だけ唇を重ね、俺たちは眠りに就いた……

## 第18話 海竜『リヴァイアサン』

「イタツ……何だ……？」

眠っていた俺は、腕に走った針で刺されるような痛みで目を覚ました。

一体何だ？　　と思い右腕を見てみると

「うおっ」

ヘリオスが俺の腕を抱え込むように抱き、噛み付いていた。まさか、血を吸ってるんじゃないよな……？

そう思って耳を澄ませてみると、チュウチュウ　　と何かを吸っているような音がする……

「本当に吸ってるよ……」

ヘリオスが俺の腕に突き立てている牙のところから、血が一筋細く流れている。

「ラグ、起きてるか？」

俺は、ベッドの傍に立てかけているラグに声をかけた。

『起きてますよ。何ですか？』

「コレ、良いのか……？」

満足そうに飲んでいるので、問題はないと思うが……  
というか、ヘリオスは寝惚けてるのか？

目が覚めている感じではない。

『まあ、特に問題はないでしょう。ですが、マスターの血液には高濃度のマナが含まれているので、それがどう影響するかはわかりませんが』

俺は血液も普通じゃないのか……  
確かにもう俺の種族は、半精霊デミ・エレメンタルだしな……  
軽くへこむ。

「それは大丈夫なのか？ 何か悪影響が出たりは？」

『心配ありませんよ。むしろ、ステータスが上昇するかもしれないですね』

だったら、飲ませてもいい……のか？

あまり大量に飲まれるのは困るが、このくらいなら良いだろう。

ヘリオスにしてみれば、甘えているだけかもしれないな。

何か献血しているみたいだ　そう思いながら、しばらくボーっ  
としていると

「う、うん……何してるの、ディーン……？」

目を覚ました口ゼが訊いてきた。

「起きたのか。ヘリオスに血を吸われている」

「ッ！！　大丈夫なの、それ……？」

それまで寝惚け眼だった口ゼが、目を見開き訊いてきた。

「大丈夫らしいぞ？」

「いや、貴方は？」

「そんなに大量に飲まれている訳じゃないからな。大丈夫だ」

「なら、良いけど……」

「ロゼは大丈夫か？　へカターが吸ってるかもよ？」

少し意地悪く言うと、焦ったようにロゼが袖を捲って腕を見る。  
そして安心したように息を吐く。

「血を吸われるのは、嫌か？」

「まあこの子たちになら良いけど、知らない内に吸われるのはちょっと……」

「それもそうだな」

2人には一応言い聞かせておくか。

そんなことを話している内に、子ども達も目を覚ました。

「良く眠れたか、2人とも？」

ヘリオスは俺の腕から牙を抜きながら、へカターはまだ眠そうに目を擦りながら頷いた。

「……」  
「ごめんなさい……」

ヘリオスが傷跡を見ながら呟いた。

「気にしなくて良いぞ？」

ヘリオスはまだすまなそうにしているが、頭を撫でてやるとくすぐったそうに笑う。

「それじゃあ、起きましようか。そろそろレイシアたちも起きてくるでしょう」

「そうだな」

俺とレイシアは、それぞれヘリオスとヘカテーの手を引いて1階に下りると、顔を洗い、ロゼは朝食の準備を始めた。

俺は子ども達とリビングのソファに座り、出来上がるのを待つ。やはり吸血鬼ヴァンパイアなので朝は弱いのか、2人ともまだかなり眠たそうだ。

まあ、子どもだからかもしれないが……

そんなことを考えていると、オルグとレイシアも下りてきた。

レイシアはロゼを手伝うためにキッチンへ行き、オルグは俺の向かいのソファに座る。

「……それで結局1人で行くのか？」

オルグが大きな欠伸をしながら訊いてくる。

「ああ……悪い」

「良いつて。おまえがあそこまで言うんだ。本当に危険なんだろう？」

「今回は場所が悪すぎるからな」

「俺たちも、まだまだ強くならねえと駄目だつてことだな。そうだな……おまえが依頼をこなしてる間に、俺たちも何処かで鍛えるか……武闘大会もあるしな」

オルグが顎に手をやり、考え込む。

「それは構わんが、こいつらがいるのを忘れるなよ？」

「まあ、何とかなるだろ」

本当に大丈夫か？

まあ迷惑をかけているという気持ちがあるので、あまり強くは言えないが……

「パパ……どこかに行っちゃうの……？」

俺たちの話を聞いていたのか、ヘリオスが不安そうに訊いてきた。ヘカテーも俺の腕を掴み、不安そうに見上げてくる。

ちなみになれからヘリオスとヘカテーは、俺のことを『パパ』と呼んでいる……

別に構わないが、複雑な気分だ。

「ちょっと出かけるだけだ。心配しなくてもすぐに帰ってくるよ」

俺は2人を抱き寄せる。

この2人は、置いていかれることを極度に嫌がる。

やはりまだ色々と不安なのだろう。

そんなことを考えていると

「結構サマになってるな　パパ」

オルグが茶化してくる。

「殴るぞ」

そんなことをしている内に朝食が出来たので、皆で食べる。

食べ終わった後朝の訓練をしたのだが、やはり2人がついて来たがったので、今日は3対1の集団戦はやめて1対1の戦闘訓練だけにした。

残りの2人が子ども達を守っていたのだが、戦闘に興味を持った



ヘリオスにオルグが面白がって模擬刀を持たせてレイシアに殴られていた。

ヘカテーも目をキラキラさせて、俺たちの闘いを見ていた。

あんなことがあったが、トラウマにはなっていないようで少し安心した。

その後、俺は工房で子ども達のローブなどの服を作った。

ヴァンパイア吸血鬼だとバレると色々と面倒なので、2人のローブには『認識

障害』の紋章を縫い込んでおいた。

これは【ハイディング気配隠蔽】と同じ効果があるので、【リーブラの魔眼】を使われても大丈夫だろう。

色はどうするかと2人に尋ねたら、2人とも俺と同じ黒が良いと答えた。

流石にそれはどうかと思った　ロゼにも反対された　ので、ヘリオスのはダークグレー、ヘカテーのは若草色にしておいた。

他にもシャツやズボン、スカートなどもいくつか作った。

これで足りなければ、店で買うことにしよう。

そして約束していたオルグの全身鎧アーマーを作った。

関節部分などに鎖帷子チェインメイルを用いたので、以前の物より動きやすくなっているはずだ。

そうこうしている内に昼になったので、そろそろ出発することにしました。

「じゃあ、行ってくる。　良い子にしてるよ?」

ホテル高級宿の前まで見送りに来ていたロゼたちにそう言い、ロゼのローブを握っている子ども達の頭を撫でる。

「気をつけてね。無茶はしないでよ……?」

「わかってるよ」

ロゼの言葉に頷き、俺はウエルテスへ向けて歩き出した。

俺に向かつて一生懸命手を振っている子ども達の姿に、自然と笑みが浮かぶ。

なるべく早く帰ってこよう　そう思いながら歩いていった……

「リヴァイアサンが向かっている島は、ウエルテスの沖で良いんだよな？」

ウエルテスへの門を抜けた俺は、ラグに尋ねた。

『ええ。ですが、島に近づかれる前に倒してしまいたいですね』

「それはそうだな」

俺も海上での戦闘は初めてなので、正直どうなるかわからない。

『VLO』では海岸までは行けたが、海に出られるなんてことは聞いたこともなかった。

『取り敢えず急ぎましょう』

確かに時間は多い方が良い。

俺はラグの言葉に頷き、先へと急ぐ。

この『ウエルテス』は国土の大部分が山脈になっているので、【天駆】を使い空中を駆ける。

山脈には標高の高い山もあるので、高空を進んでいく。

下から見つかることもないので、ちょうど良い。

「そういえば、1人旅も久しぶりだな……」

やはり仲間たちがいないのは、少し寂しいな……

『私たちがいるでしょ〜』

『そうですよ』

ラグとアイギスが抗議してきた。

「そうだったな。しばらくは3人だけだ、宜しく頼むぞ?」

俺はそう言うと先を急ぐため、さらに速度を上げた。　　が出發したのが遅かったので、海岸までの道のりを半分ほど進んだところで休むこととなった。

ホームの使用権はすでに、リンから貰ったスキル　【テンポラリー・トランスファー】でロゼに移っているので俺は野宿だ。

以前ほどは野宿に抵抗が無くなっている。

俺もこの世界に馴染んできたということか……  
そんなことを考えつつ、料理を作る。

料理の道具もホームに置いたままなので、俺が使っているのは出發時に店で買った物だ。

適当に作った夕食を食べ、さつさと寝ることにした。

ここは山間部にある平原なので、罨が張れない。

仕方なく、【気配察知】を起動しておく。

「明日には海まで出るぞ」

『ええ』

『頑張ろうね〜』

頑張るのは俺だけだな　　そんなことを思いながらシユラフに

潜り込み、眠りに就いた……

朝早くから海を目指して走り、何とか昼前に海岸まで来れた。

途中この国の首都である『ダグリス』が眼下に見えたが、立ち寄ることもなくここまで来た。

俺は崖の上に降り、目の前に広がる海を眺める。

風が俺の知っているのと同じ潮の香りを運んでくる。

海も、リヴァイアサンが近づいているなど感じさせないくらい穏やかに凪いでいる。

「リヴァイアサンはどっちから来てるんだ？」

『ここからなら西の方からですね』

門を出てからほぼ直線に進んできたので、ここはこの大陸の北西部だ。

ここから西側から来るということは

「邪神龍の封印されている島がある方か……」

『そうだね……』

それを今考えても仕方ない。

「じゃあ、行くか」

そう言って西へと駆け出した。

遠くに薄っすらと島の影が見える。

有翼族が住む島だろうか　そんなことを考えながら走る。

1時間ほど走ると、あらかじめ起動しておいた【気配察知】の探知範囲ギリギリのところアイコンが浮かぶ。

浮かんだアイコンの色は赤だ。

まず間違いなく、リヴァイアサンだろう。

周囲には他のアイコンは無い。  
俺はアイコンが示す方へと全力で駆ける。

「な、何だ……あのでかさは……」

俺の視線の先には蛇に似た巨大な何かが、その長い体をくねらせて泳いでいる。

その大部分は水面の下だが、少なくとも1kmはありそうだ……瘴気に侵されているのを示すように、ソイツが通った後の海はどす黒く濁っている。

気づいていないのか、取るに足らないと無視しているのか、俺には全く反応しない。

『アレが海竜『リヴァイアサン』です。覚悟は良いですか、マスター？』

「ああ、やってやるよ。アレに怯んでるようじゃ、邪神龍を倒すなんて夢のまた夢だ」

ロゼとも約束したしな。

『頼もしい限りだね』

そんなアイギスの声を聞きながら剣を抜き、左手にも魔導銃を握る。

まずはこちらに注意を引き付ける。そう考えて俺は魔導銃に雷の魔力を込め、狙いをつけて引き金を引き絞る。

銃口の先に重なった5つの魔導紋章が現れ、まるでレーザーのような雷光が放たれる。

「チッ。やっぱりコレを使うのはまだ無理か……」

未だ帯電している魔導銃に詰め込んである『精霊結晶』が、魔力の負荷に耐えきれず罅割れている。

まだ雷属性魔術の熟練度が低く、上手く魔力の量を調節できないのだ。

俺は魔導銃を戻し、リヴァイアサンの方を確認する。

雷光が直撃した あれだけでかければ外すはずもないが リヴァイアサンが俺を敵と認識したのか、首をもたげてこちらを睨むように見ている。

頭には2本の角があり、その顔はやはり蛇というより竜に似ている。

凄まじい咆哮をあげたりヴァイアサンがこちらに迫る。

「ラグ、グレートアックス【両手斧形態】」

あの巨体だ、生半可な攻撃じゃダメージは与えられないだろう。

変化が終わると同時に、海竜が水弾を連続で吐き出す。

グレートアックス両手斧を構え、水弾を右に左にと躲しながら距離を詰めていく。

ある程度近づいたところで【縮地无疆】を起動、残りの距離を一気に詰める。

間近で見ると、その巨大さに圧倒される。

思わず畏怖の念を抱きそうになるが、それを抑え込み、肩に担ぐように構えたグレートアックス両手斧をその太い胴体に叩き込む。

刃が深海を思わせるような蒼い鱗を砕き、その下の肉を切り裂く。眼下の海に異変を感じて咄嗟に左へと跳ぶと、数瞬前まで俺がいた空間を巨大な水柱が貫いていく。

そのままバックステップである程度の距離を取る。

「あれがラグの言っていた、リヴァイアサンの『特殊能力』か……」  
「はい。リヴァイアサンはその名の通り、海水を操りますので気を

つけて下さい』

海竜の名は伊達じゃないってことか。  
前兆があるので躲すのはそれほど難しくはないが

「再生能力まで持つてるのか……」

リヴァイアサンの傷口が泡立ち、ゆっくりとではあるが塞がって  
いつている。

しかも胴体が太すぎて、俺が切り裂いた部分など全体からすれば  
掠り傷程度だ。

これは長くなりそうだ そんなことを考えていると、突然右脚  
に蛸のような軟体生物の足が絡みついた。

俺は短く呻き、下を確認するとその足は海から伸びてきている。

しかもリヴァイアサンが水弾を放とうとしている。

切っている余裕はないと判断した俺は、【縮地无疆】を起動して  
全力で左に跳ぶ。

かなりの抵抗を感じたが、それを無視して水弾を躲すことに全神  
経を集中させる。

全ての水弾を躲した俺は、未だ絡みついたままのソレを右手で掴  
み

「おらああああー!!」

渾身の力で引っ張る。

海面を破り飛び出してきたのは、3mはある巨大な烏賊

『三

二・クラーケン』だ。

釣り上げられたように宙を舞うそいつをグレートアックス両手斧で両断する。

2つになった巨大烏賊が音を立てて海に落ちる。

あんな魔獣は初めて見た。

それに

「あれで『ミニ』ってことは、さらにでかいのがいるのか……」

確実にいるだろうな……

他にも海に住む魔獣はいるだろう。

リヴァイアサンと闘いながら相手をするのは正直キツいが、今更文句を言っても仕方ない。

改めて覚悟を決め、リヴァイアサンへと駆ける。

正面の海面からカジキマグロとトビウオと合わせたような魚が凄まじい勢いで次々と飛び出し、そのまま胸ビレを広げて滑空してくる。

俺の首を刈ろうとする、その刃のような胸ビレを走りながら斧を縦に構え切り裂く。

流石に切れ味はこちらが上だ。

そのまま砲弾のように飛び出してくる巨大魚 『フライング・フィッシュ』を切り裂きながら駆け、海面が変化したので斜め前に跳躍、俺を貫こうとしていた氷柱（アイスピラー）のような水の槍を躲す。

さらに放たれた水弾を障壁で弾き、その水飛沫を抜けると

「うおっ！！」

鋭い牙の並ぶ巨大な口が迫っていた！！

咄嗟に気を纏い、左手で上顎を、右足で下顎を押さえる。

中途半端な体勢の所為で勢いを受け止めきれず、俺を呑み込もうとするナニカと一緒に海に落ちていく。

このままではマズイ、海中では圧倒的に不利になる。

抜け出したいが、右手だけでは満足に（グレートアックス）両手斧を振るえない。

「ラグ、【クラウ・ソラス】！！！」



業火を纏った剣をそいつの口に突き刺し、体内から焼き尽くす。  
俺は再び【天駆】で宙を踏み、鯨ほどもある巨大なシャチ  
「  
タイラント・オルカ」が燃えながら落ちていくのを確認、すぐさま  
リヴァイアサンへと駆ける。

俺の後を追うように次々と水柱が噴き上がるが、【疾風迅雷】を  
起動して雷速で駆ける俺には追いつけない。

距離を詰めた俺は海竜の手前で上空へと跳躍、さらに宙を蹴って  
雷の如く急降下する。

そして、気と魔力を纏わせ白熱化した業火の剣で海竜の眉間を狙  
って突きを放つ　　が突如現れた分厚い水の壁に阻まれる。

「ぐわっ!!」

剣と水の壁が触れた瞬間凄まじい爆発　　水蒸気爆発が起き、吹  
き飛ばされる。

高温の蒸気にさらされ火傷を負うが、アイギスの【HP自動回復  
?】の効果で急速に癒えていく。

「イケると思っただが、これじゃあこっちの被害の方がでかいな……」

同じく高温の水蒸気を浴びたはずのリヴァイアサンは、全くの無  
傷だ。

水属性っぱいなので火属性で攻めようと思っただが、やめておこう。

そんなことを考えつつリヴァイアサンが薙いだ巨大な尾を、【天  
駆】の効果で切って落下しながら躲す。

そして【クラウ・ソラス】を停止、左手で雷球を放つ。

雷球が直撃した海竜は苦しむ様子は見せるが、ダメージを受けて  
いるのかはさっぱりわからない。

「ホントに倒せるのか、コレ……」

そう呟き、剣を斬馬剣へと変化させて雷の魔力を込める。

幸い俺を完全に敵と認識しているのか、他の場所に行こうとする様子はない。

迫ってきた水弾を【縮地・廻天】で回避しながらリヴァイアサンの背後へと一瞬で移動、両手で握った大剣をその背に突き立て、全力で雷の魔力を流し込む。

リヴァイアサンが激しく暴れて俺を振り落とそうとするが、大剣に掴まり何とか耐える。

このままイケるか　そう思った瞬間、リヴァイアサンが海に潜ろうとしているのを感じた。

咄嗟に大剣を引き抜き、距離を取る。

案の定リヴァイアサンは海に潜り、さらに海中から次々と水弾を放ってくる。

発射地点がわからないため、もの凄く躲しづらいそれらを何とか躲し

「『ノヴァ・エクスプロージョン』」

海に火球を叩き込む。

周りを気にする必要がないので、手加減はなしだ。

初めて使った全力の『ノヴァ・エクスプロージョン』が炸裂、あり得ないほどの爆発が起き、凄まじい水柱が噴き上がる。

飛び散る水飛沫には爆発に巻き込まれた魔獣の破片も混じっているが、リヴァイアサンと思われるものはない。

何処から来ても良いように油断なく構えていると、前方の海面に影が揺らめき、リヴァイアサンの尾が飛沫を上げて飛び出してくる。迫りくる尾に雷を纏った大剣を叩き付け両断しようとするが、勢いに負け、半ばまで斬り裂いたところで弾き飛ばされる。

舌打ちしつつ体勢を立て直すと、すでに海面に頭を出していたリヴァイアサンがブレスを放つ。

放たれた水流のようなブレスをアイギスで防ぎながら距離を詰め、その頭目掛けて大剣を薙ぐ。

リヴァイアサンはすぐさま水面へと頭を沈めるが、薙いだ大剣が角の先端を斬り飛ばす。

「チツ。こいつ……」

海中にいる内は手が出せない。

出てきたところに攻撃を叩き込めるよう、俺は大剣を構えた……

「これはいよいよ、千日手っばくなってきたな……」

俺は減っていたSPを回復するため、『スタミナポーション』を飲み干す。

あれから2日が経った。

もちろん一日中ずっと戦闘状態だ。

俺がある程度攻撃を加えると、リヴァイアサンは海に潜って再生してしまふ。

俺も攻撃を躲しきれず喰らってしまうこともあるが、こちらもスキルで回復する。

途中他の魔獣が襲ってきたり、戦闘音を聞きつけた有翼族たちがやって来て回復魔術や補助魔術をかけてくれたりしたが、基本的にはその繰り返しだった。

リヴァイアサンは周りの魔獣を喰って体力を回復しているようだ。

『確かにこのままでは埒が明きませんね』

今までは消費を抑えるためにアーツスキルの使用は控えてきたが、多少のリスクを覚悟して短期間で決めるべきか……

そんなことを考えていると、海に潜っていたリヴァイアサンが海面を尾で激しく叩く。

すると海面が大きく盛り上がり、20mに達する津波が発生する。俺は上空へと駆け上がって迫りくる津波を回避するが、その波の中から鋭い角を4本持つ鯨 『テトラホーン』が飛び出してくる。大剣を横に構え、擦れ違いざまにその腹を斬り裂いていく。

『テトラホーン』が内臓をぶち撒けながら波に吞まれ流されていく。

即座に【縮地无疆】でリヴァイアサンの元へと跳び、俺が右から逆袈裟に紅い閃光を放つ大剣を薙ぐと、その剣筋をなぞるように巨大な剣閃が放たれる。

アーツスキル『ワイド・スラッシュ』で放たれた、紅く輝く衝撃波が吐き出された水弾を両断しながらリヴァイアサンの頭に迫る。

すぐさま追撃をかけるために衝撃波を追うように跳ぶと、両断された水弾が俺の左右を通り過ぎていく。

海竜がその身体を倒すように躲すが、剣閃が胴を半ばまで斬り裂き、大量の血が噴き出す。

リヴァイアサンはそのまま海に潜って回復しようとする。

これまでは俺も回復するためにここで追うのをやめていたが

「させるか!!」

ここで決める そう思い、海に潜りつつあるリヴァイアサンの胴に大剣を深々と突き立て、雷の魔力を全力で込める。

リヴァイアサンは海に潜り俺を振り落とすつもりなのか、雷にのたうちながらも凄まじい勢いで潜っていく。

海面に叩きつけられた衝撃で弾き飛ばされそうになるが、大剣の

柄を必死に握り締め雷の魔力を込め続ける。

海竜は海中でも激しく暴れ回る。

早く、早く……

いつまでも息が続かない……

そんな焦燥感を感じながらも魔力を込め続ける。

するといい加減鬱陶しくなったのか、俺を噛み砕くために海竜の巨大な顎あごが迫る。

これ待っていた！！

大剣を引き抜き、迫りくる顎あごに集中する。

少しでもタイミングを外せば終わりだ。

周囲の海水ごと噛み砕くような勢いで、上下から鋭く巨大な牙が迫る。

俺は湧きあがる恐怖心を抑え込み、全身に気を纏い自らその口内に飛び込み即座に大剣を頭上に掲げる。

リヴァイアサンが口を閉じる勢いで、大剣は上顎に深く突き刺さっていく。

凄まじい圧力が両手にかかるがそれに耐え、雷の魔力を最大出力で込める。

脳に近い場所では流石に苦しいのか海竜が暴れ狂い、その頭が海面を突き破って跳ね上がる。

「ぶはっ！！ 助かった！！」

海上に出た隙に息を大きく吸い込む。

その瞬間ブレスか水弾で俺を押し流そうというのか、リヴァイアサンの喉の奥から水が押し寄せてくる。

その水流をアイギスで防ぐが、圧倒的な勢いに押されて大剣が抜けてしまう。

外まで押し流された俺は宙を蹴り、ブレスの範囲から抜けつつリヴァイアサンの頭上に跳ぶ。

リヴァイアサンは気づいたようだが、未だ雷撃のショックが残っているのか反応が遅い。

俺はその眉間に全体重と全力を込めた大剣を突き立てる。

鱗を貫き、肉を斬り裂く大剣。

リヴァイアサンが凄まじい咆哮をあげる。

俺は突き立てたままの大剣の柄を握り、傷口をさらに広げるように切り裂いていく。

激痛に耐えかねたように激しく苦しみもぐりヴァイアサン。

俺はその衝撃に耐えながらさらに傷口を切り裂いていくが、その所為で抜けやすくなっていたのか、大剣がズルリと抜けて宙に投げだされる。

体勢を立て直しながら

「『セイクリッド・ブレイズ』！！」

骨すら覗いている傷口に、残存魔力を全て注ぎ込んだ魔術を叩き込む。

聖なる炎が体内を焼き尽くしていき、リヴァイアサンが長く尾を引く咆哮をあげて海に倒れていく。

その時、海竜が纏っていた瘴気が何の前触れもなく霧散した。

「……………何が起こった……………？」

『セイクリッド・ブレイズ』が瘴気を焼いたのかとも思ったが、どうも違うようだ。

魔力の大量消費であがった息を整えながら考えていると

『礼を言つぞ。人とも精霊とも異なる者よ』

今にも消えそうだが、深く重みを感じさせる声が響く。

「まさか正気に戻ったのか……？」

声の主はリヴァイアサン以外に考えられない。

『そなたのおかげだ』

海竜はすでに瀕死で、何とか海面に浮かんでいるだけだ。  
俺は咄嗟に回復魔法を使おうとするが

『よい、もう無駄だ。魔物としてではなく、幻獣として最後を迎えられただけで満足だ』

リヴァイアサンの言う通りなのだろう、傷が再生する様子はない。

「何故、瘡気に？」

もう長くはないだろうが、これだけは訊いておきたかった。

『わからぬ。我が記憶しているのは、我が領域に侵入した何者かに警告をしたところまでだ』

「その何者かというのは？」

『すまぬ、それもわからぬ。ただ、そなたと良く似た気配を放つて  
いや、違うな……あやつの気配は禍々しく、憎しみに満ちてい  
た』

「魔物……だったのですか？」

『どうだろうな……人の気配も感じた気もするが……』

思わず息を呑む。

リヴァイアサンの話が本当だとすると、この海竜を魔物へと“墮

とした”のはその人と魔物の気配を持つ者ということだ。  
神龍の結界が破られたのと何か関係があるのか？  
そんなことを考えていると

『どつやらここまでのようだ……』

先程よりも、さらに終わりを感じさせる声だ……

「……………」

『そなたが気に病むことではない……これも我が選んだ運命だ……  
最後に1つ、頼みがある……』

「頼みというのは？」

『私の肉体は塵にして、この母なる海に還してくれ』

「わかりました。貴方の望み通りに」

『すまぬな、心優しき者よ……』

その言葉を最後にリヴァイアサンの声は途絶えた……

その後リヴァイアサンの望み通り、魔術でその巨体を塵にする。  
塵が海流に流されいくのを眺める。

『戻りましょう、マスター……』

「そうだな……」

そうやって俺は『グランドティア』に向け歩き出したが、この2  
日間何も食ってなかったので流石に限界だ。

早く仲間たちの所へ帰りたいたいと思うが、少し何処かで休みたい。

『それならば『ルカナス』で休んでいきますか？』

『ルカナス』とは有翼族の住む島のことだ。



「そうするか」

そうやって俺は『ルカナス』へと歩いていった……

『ルカナス』には海岸は無く、周囲は切り立った崖になっていて舟が着けるような場所は見当たらない。

見えていないところにはあるかもしれないが、物資などの運搬はどうしているのだろうか。

空を飛べる有翼族には無くても大丈夫なのかもしれないが、そんなことを考えながら島の中心部にある村へと入っていく。

「あ、貴方はリヴァイアサンと闘っていた!!」

村の出入り口付近にいた青年が、俺を見て驚いている。

その青年の背には有翼族であることを示すように、自らの身長ほどもある大きな翼が生えている。

「あの……リヴァイアサンはどうなりましたか……?」

「何とか倒しました」

「あの伝説の幻獣を倒したのですか!？」

「あの時は助かりました。それにすみませんでした」

俺は青年の言葉に頷き、魔術をかけてくれたことに対する礼と、その時にかなり強い口調で退避を促してしまったことを謝った。

「待っていて下さい! 今、長を呼んで来ます!」

そうやって青年は村の奥に走って行ってしまった。

その後有翼族の長に長々と礼を言われ、宴が催された。  
宴はかなり盛り上がったが、俺は疲れていたので途中で抜けさせてもらって、長の家で眠りに就いた。

翌朝、長に礼を言って『グランドティア』に戻ることにした。  
途中広場を通ると、かなりの数の酔いつぶれた有翼族たちが死んだように眠っていた。

「皆、貴方に感謝していましたよ」

最初に出会った青年　　長の息子らしい　　がそう言う。

「もうこの村を捨てるしかない　　そう思っていましたからね」  
「そうだったのか」

そんなことを話しながら村の出入り口に歩いていく。

「是非、またいらして下さい。村の皆で歓迎しますよ」  
「ああ、また来るよ」

その言葉を交わし、俺は仲間たちの待つ『グランドティア』に帰るために歩き出した。

「お帰りなさいませ、ディーン様」

夕暮れ前に高級宿<sup>ホテル</sup>へと戻ってきた俺を、受付嬢が出迎えてくれた。

「オルグたちはいるか？」

「いえ、今はおられません」

「そうか。ありがとう」

オルグたちは迷宮にでも出かけているのか、いないようだ。

俺は鍵を受け取り、3階の部屋に戻る。

流石は最高級の宿だけはあって、俺がいない間も掃除はキチンとされている。

そんなことを考えながらソファーに座り、一息吐く。

皆もないし、これからどうするか……

取り敢えず腹も減ったし、飯を食ってくるか。

そう思い、1階のレストランに行こうとすると

「ディーン、戻ったの!？」

扉を凄いい勢いで開けながらロゼが入ってくる。

「ロゼか……驚かすなよ」

「それでどうだったの?」

ロゼが問い詰めるように訊いてくる。

俺がそれに答えようとすると

「パパー!」

ヘリオスとヘカテーが抱き付いてくる。

「ディーン、帰ってたんだな」

「無事のようです何よりです」

オルグとレイシアも部屋に入ってきた。

「お互い積もる話もあるし、ホームで飯を食うか」

俺がそう言うと、ロゼが頷き空間を開く。

そして俺は2人を両手に抱えたままホームへと歩いていく。

その後、女性陣が作った夕食を食べながらお互いの話をしていく。俺はリヴァイアサンとの戦闘のことを、ある程度端折って話した。まあ正直に全部話すと、何を言われるかわからないしな……

話を聞く限り、オルグたちは積極的に迷宮の攻略をしていたようだ。

事前に渡していた、オルグたちだけでも攻略できそうな迷宮を書いたメモが、役に立ったようで何よりだ。

「まだ大会までは一月くらいあるな。オルグたちはどうするんだ？」

「まだ迷宮に潜るのか？」

「ああ。そうしようと思ってる」

オルグの言葉にロゼとレイシアも頷いている。

「じゃあ、俺も行こうか？」

特にすることもないので、そう提案するが

「私たちだけで行ってくるわ。貴方がいると、どうしても頼ってしまっから」

そうロゼに断られた。

「そうか。なら、ホームの使用権はこのままロゼに渡しておくよ」

「うん……やっぱり返すわ。これも持つてると楽しちゃうから」

「だな。つくづく反則的な性能だと思いきらされたぜ……」

「いつでもどこでも安全に休めますからね」

「そこまで言うなら強制はしないが、大丈夫なのか？」

インベントリを持たないオルグたちでは、攻略に必要な道具などを  
持つていくだけでかなり大変だと思うが……

「俺たち冒険者は、元々そうやって迷宮の攻略をしてきたんだぜ？  
心配するな」

「わかった。だが、決して無理はするなよ？」

俺の言葉に3人が頷く。

その後順番に風呂に入り、高級宿の各々の部屋ホテルに戻って寝ることにした。

ヘリオスとヘカテーは俺と一緒に寝ると言っただけで聞かなかった  
ので、2人も俺のベッドで眠っている。

俺はベッドに寝転びながら、先程のオルグの言葉を思い返して  
いた。

俺の力は、オルグたちのように命を懸けて手に入れたものじゃない。  
い。

ゲームで遊びながら手に入れたものだ。

未だに『VLO』のことを3人に伝えられないのは、確かに混乱  
させないためというのもあるが、実際は本当のことを知られるのが  
怖いからだ。

ロゼたちが幻滅して、俺から離れていってしまうのが嫌だからだ。

「つくづくどうしようもないな、俺は……」

そう呟くと俺の意識は眠りに落ちていった……

「これから何するかな……」

リヴァイアサンとの戦闘で、所々鎖が弾け飛んだ鎖帷子チェインメイルを修理し終わった俺はそう呟いた。

オルグたちは朝食を食べると、迷宮の攻略へと出掛けていった。武闘大会の1週間前には戻るそうだ。

さっそくやることのなくなった俺は、途方に暮れる。

何か依頼でも探しにギルドにでも行くか。

そんなことを考えていると

「パパ、僕たちも闘ってみたい……」

ヘリオスがそう言い、ヘカテーもコクコクと頷いている。

「そんなこと言ってもな……」

そんなことがバレたら、俺がロゼやレイシアに怒られる。

「良いんじゃないですか、マスター。迷宮などの危険な場所に行かなければ、大丈夫でしょう」

「この子たちは吸血鬼ヴァンパイアだしね。基本的に能力は高いよ？ それに戦闘技術は学ばせておいて損は無いよ」

確かに吸血鬼ヴァンパイアは弱点が多い反面、スペックは高い種族だが……  
そう思い、2人のステータスを確認する。

「ん？ このレベルにしてはステータスが少し高いな……」

2人はともにレベルは75だが、それにしてもステータスの値が高い。

『2人ともマスターの血を飲んでますからね。その所為でしょう』

ああそういえば、そんなことを言っていたな。

これなら装備をキチンと揃えれば、『桜花』のフィールドくらいなら大丈夫か？

「ちゃんと言うことを聞けるか、2人とも？」

ヘリオスとヘカターが元気良く返事をする。

「わかった、連れて行ってやるよ。その代わりに、ロゼたちのは内緒だぞ？」

「うん！」

それから2人の武具を作った。

ヴァンパイア

吸血鬼は光や聖属性、ミスリル系の金属製の武具は装備できない。

さらにまだSTRの値が低く、金属製の防具が装備できない。

まずは武器から作っていく。

2人とも特に熟練度の高いカテゴリは無かったので、『オリハルコン』と『アダマンダイト』の合金で細身の片手剣を作る。

防具は2人のローブはラグの鋼糸を織り込んだものなので、戦闘時に魔術をかければ十分な防御力を得られるだろう。

装備を作り終えた後は、どうせなら出掛けるのは2人のステータスにプラス補正がかかる夜にすることにし、それまで道場で2人に闘い方を教えることにした。

2人とも中々筋が良く、教えたことを順調に飲み込んでいった。

思わず褒めていると、アイギスに『親バカ』と茶化されたが……  
そして夜になり

「『ストリーム・メール』      じゃあ、実際に魔獣と闘ってみるか  
？」

ホテル高級宿を抜けだした俺たちは、『桜花』の草原に来ていた。

この魔獣はレベルも低いので、2人でも充分闘えるだろう。

それに月（？）も明るく輝いているので、【暗視】も必要ない。

俺が2人に防御力と素早さを上昇させる、風属性上級魔術『スト  
リーム・メール』をかけると2人の身体を旋風が包む。

「うん」

ヘカテーが自分の身体を包む風を、不思議そうにしながら答える。

「最初に言ったように、『邪属性魔術』は使うなよ？」

2人が俺の言葉に頷く。

ヴァンパイア吸血鬼は邪属性魔術すら扱える種族だ。

誰かが見ているとは思わないが、使わない方が良い。

しばらく歩くと、『レッドウルフ』が2匹いるのを見つけた。

「ちょうど良いのがいたな」

俺は右の魔導銃を抜き、その内の1匹を撃ち貫く。

「それじゃあ、実戦だ」

俺がそう言うと2人が腰の鞘から剣を引き抜き、赤い狼に向かっ



て駆けていく。

俺は危なくなれば、いつでも助けられるようにしておく。

ヘリオスがまず斬りかかり、その胴を浅く斬り裂く。

ヘカテーは、狼がヘリオスに気を取られている間に後ろに回り込んでいる。

狼の爪をヘリオスが危なげなく躲す。

「プラス補正や魔術の効果があるとしても、中々やるな」

後ろに回り込んだヘカテーが、爪を振るって隙ができた狼に剣を深々と突き刺す。

噴き出した血がヘカテーの顔を斑に赤く染める。

口元まで垂れてきた狼の血をヘカテーが舐め取る。

その紅い瞳が血に興奮するように妖しく輝く。

「2人とも、初めてにしては良くやったぞ」

2人が俺に走り寄ってくる。

先程の妖しい雰囲気はもう消えている。

俺はヘカテーの顔をタオルで拭いてやり、2人の頭を撫でる。

2人とも褒められて嬉しそうだ。

「じゃあ、もう少し狩るか」

そう言って別の魔獣を探し始めたが

ラグ、今のは大丈夫なのか？

「ヴァンパイア元々吸血鬼は血に興奮しやすいので大丈夫だと思いますよ」

「心配しすぎだよ、マスター」

なら良いが……

俺の考えすぎか？

ラグは心配いらな  
いと言っていたが、これからも注意しておこう。そんなことを考えながら、その後3匹の魔獣を狩ってから高級宿<sup>ホテル</sup>に帰り、2人を風呂に入れた後で眠りに就いた。

それから1週間に1回2人を桜花の草原に連れて行って魔獣と戦闘をしたり、ギルドで簡単な依頼を受けて、それを3人でこなしたりしながら過ごした。

相変わらず大量の血を見ると2人は軽い興奮状態になるが、特に問題は見られなかった。

念のためにと2人に買った、精神異常の1つである『<sup>バーサク</sup>狂乱』を防ぐネックスが効果があつたのかどうかはわからない。

そんなことをしている内にあつという間に一月が経ち、出掛ける前に言っていたようにオルグたちが大会1週間前に帰ってきた。

帰ってきた途端俺は空間を開かされ、ロゼとレイシアが風呂場に駆け込んでいった。

そんなに入りたかつたのだろうか？

「それで迷宮の攻略はどうだった？」

俺は調理道具などが入った袋を床に置き、ソファでくつろいでいたオルグに訊いた。

「色んなところに行つたぜ？ おまえから貰つたメモに書いてあつた所は、ほとんど行つたんじゃないか？」

「あの数を全部行つたのか？」

俺の渡したメモには、結構な数の迷宮を書いておいたんだが……

「ロゼがかなり積極的でな。まあそのおかげで俺たちもレベルが上がったし、スキルも習得できたから良いけどな」

迷宮には、最奥にいるボスを倒すとスキルを習得できる所もある。

「そんなに攻略したのなら、かなりの量の『精霊石』が手に入ったんじゃないか？」

「アホか。そんなに大量にどうやって持って帰るんだよ？ 途中で換金もしたが、持ち切れない分は迷宮に置いてきたに決まってるだろ」

「それもそうだな……」

つい自分を基準に考えてしまうな。

「そういえば、持ち帰らなかつた『精霊石』はどうなるんだ？」

俺は少し不思議に思い、訊いてみた。

「俺は知らねえな」

『マナに還るだけですよ』

ラグが答えてくれた。

「へえ」

そんなことを話しているとロゼたちが風呂から出てきた。

その後2人も疲れているようなので、今日は高級宿の<sup>ホテル</sup>レストランで夕食を食べた。

そして残りの1週間は道場で訓練をしたり、全員の武具の手入れをしたり、ロゼに頼まれたスローイングダガーを作ったりして過ごした。

大会3日前には出場の申し込みに行った。

オルグたち Sランク冒険者は予選は免除され、本戦も3回戦からだ。

もちろんロゼや、ランクを隠している俺は予選からだ。

「大会中はライバルだな」

ゼノンに依頼され出場することになったが、出る以上は優勝したい。

俺は結構負けず嫌いなんだ。

「ええ、絶対に勝ってみせるわ」

ロゼが闘志を燃やしている。

「俺もそう簡単に負けるつもりはないぜ」

「皆、頑張りましょう」

そうして、『武闘大会』が始まった……

## 第19話 『武闘大会』 予選

『さあー、いよいよ始まりました！！ 年に一度の武闘の祭典、  
武闘大会』！！ 今年も数多の冒険者たちが 』

俺たちは今、武闘大会に出るために『グラントティア』の中央部  
にある闘技場へとやって来ていた。

現在は開会式の最中で、先程から舞台の中央で元気に喋っている  
のは、大会進行役と審判を兼任しているらしい魔族のお姉さんだ。

その声は風属性魔術で拡大され、闘技場全体に響いている。

闘技場には多くの人が詰めかけていて、お姉さんの言葉に大きな  
歓声があがっている。

ここに来るまでの街中も、通りには多くの露店が並び、擦れ違っ  
ても苦勞するほど人で溢れていた。

「まるで祭りだな……」

「まあ年1回の娯楽だしね」

今、俺の隣にはロゼと子ども達しかいない。

オルグたちは各ギルドマスターや他のSランク冒険者たちと同じ  
く、観客席の上段にあるVIP専用の観覧席にいる。

俺やロゼもゼノンに誘われたが、丁重に断った。

Sランク冒険者がいるということは、あのバカもいるということ  
だ。

また絡まれても鬱陶しいしな。

「冒険者たちは必死みたいだけどな」

俺は3日前の受付の時に見た冒険者たちを思い出しながら言った。

「それはそうよ。たとえSランクになれなくても、この大会で活躍すれば一躍有名になれるからね」

観客席でロゼとそんなことを話していると

「それでは皆様はすでにご存知だとは思いますが、今一度この大会のルールをご説明しましょう。まず」

進行役のお姉さん　フェミナがそう言って説明をし始めた。  
フェミナが説明した大会ルールを要約するところということだ。

この大会での戦闘中はどんな攻撃を受けてもHPは1/2以下にはならないが、その瞬間に気絶する。

勝敗は場外負け、ギブアップ、そして気絶　この3つで決まる。

そして続いて禁止事項の説明が始まる。

主な禁止事項は

試合中のアイテムの使用は禁止。

不正を防ぐため、試合前の出場者同士の過剰な接触は禁止。

これらの禁止行為が認められた場合は、冒険者資格の剥奪などかなり厳しい罰が与えられるようだ。

それ以外の不正行為が認められた場合も同様だ。

そして

「この大会ではあらゆる武器や魔術、そしてスキルの使用が許可されています。ですが、ご安心下さい」

そう言ってフェミナが右手を掲げ、観客席に向かって『ファイア・アロー』を放つ。

放たれた火の矢が観客席に迫り、観客の一部から悲鳴があがる。しかし観客席の直前で障壁に阻まれ、小規模ながら爆発が起こる。

『大変失礼致しました。ですが、このように観客の皆様は神龍様のお力で守られております。どうぞ、安心して試合をご観覧下さい』

そう言って、フェミナは観客に向かって頭を下げた。

毎年の恒例なのか、先程のパフォーマンスで悲鳴を上げた観客特に男性が周りの観客から笑われている。

『それではグランドマスター、ゼノン様から開会の言葉をいただきたいと思います』

その言葉とともに舞台に繋がる3ヶ所の橋の1つからゼノンが歩いてくる。

何故橋が架かっているのかというと、舞台の周囲には幅5m、深さ10mほどの水を張った堀があるからだ。

試合中は、その堀に落ちると場外負けとなる。

『出場者の皆さんは、日頃の鍛錬の成果をこの場で思う存分発揮して下さい。そして観客の皆様は、その鍛え上げられた技を、研鑽された魔術をお楽しみ下さい』

ゼノンは舞台の中央まで来ると、コホンと小さく咳払いをした後そう言った。

その声もフェミナと同じく魔術で拡大されている。

『それではグラウンドマスターの名において、ここに『武闘大会』の開幕を宣言します！！』

一際大きな歓声があがり、闘技場の上空にまるで花火のような閃光がいくつも輝き、爆音が鳴り響く。

これも魔術なのだそうだ。

先程の声を拡大する魔術やこのような魔術は、戦闘用のものと区別するために『汎用魔術』と呼ばれているらしい。

『 それでは、『予選1回戦』第1試合に出場される皆様は控え室の方にお集まり下さい』

ゼノンと入れ替わりに舞台の中央に立ったフェミナがそう言った。この大会には冒険者たちや腕に覚えがある人達が多く参加しているので、ふるいに掛けるために予選が2回ある。

予選1回戦は10人前後でのバトル・ロイヤルだ。

最後に残った1人だけが次の予選2回戦に進むことができる。

この予選1回戦だけでも1日10試合で8日間、計80試合もある。

「じゃあどうする、ディーン？ 試合を見ていく？」

俺の試合は明日の第17、ロゼは4日後の第36試合だ。

取り敢えず、今日は何もすることがない。

「ヘリオスたちも退屈してるみたいだし、今日は帰るか」

子ども達には開会式は退屈だったようだ。

「そうね。帰りましょうか」



そう言っつて、俺たちはそれぞれ子ども達の手を引きながら闘技場を出る。

オルグたちは試合を見ていなければならぬし、レイシアは治療<sup>ト</sup>術師としての役割もある。

試合中は神龍の力で守られているため、部位欠損にはならないが、骨折などの怪我はするからだ。

取り敢えず高級宿<sup>ホテル</sup>に戻ろうと、人混みを進んでいると

「デインさん！！」

前方からリリアが手を振りながら走ってきた。

「リリア！？ 何でこんな所に？」

まさか一人で来たとか言うんじゃないよな……

「武闘大会を見に来たんですよ。 もちろん両親も一緒です」

リリアが、俺の考えていたことがわかったようにそう言っつ。

「それで、ソファラさんやジェラルドさんは？」

俺がそう言っつと

「リリア、迷子になっつても知らないわよ？」

リリアの後ろからやっつて来たソファラさんが、リリアの頭を軽く叩く。

その隣にはジェラルドさんもいる。

「ごめんなさい……ディーンさんが見えたから、つい……」

「久しぶりだね、ディーン君。ロゼさんも」

「お久しぶりです。リリアに聞きましたが、ここには大会を見に来たんですか？」

「まあ数少ない娯楽だからね。ちなみに、クラッドさんも来ているよ？」

やはりこの世界には娯楽は少ないのか。

このお祭り騒ぎにも納得だ。

「クラッドさんも来てるんですか？ 今は何処に？」

周りを見ても、それらしい人影は無い。

まあ『ドワーフ』は小さいので、見えないだけかもしれないが……

921

「依頼主に会いに行ってるよ。元々私たちがここに来たのも、クラッドさんのために依頼主が用意した馬車に便乗しただけだしね」

「依頼主？ クラッドさんが何か依頼を受けたんですか？」

「この大会の出場者に、武具の製作を依頼されたようですね。あの人も最近は、鍛冶師としてかなり有名になりましたからね」

おっさんもかなり努力しているのだろう。

「そうだったんですか。ところでジェラルドさん、村長の仕事は良いんですか？」

開会式で聞いた限り、この大会の日程は1ヶ月くらいあるんだが

……

「まあそこは上手くやってるよ」

そう言ってジェラルドさんはニヤリと笑った。

「そんなことよりこれを見て下さい、ディーンさん」

父親の言葉を遮り、リリアがたすき掛けにしていたバッグからカードを取り出して見せてくる。

そのカードは、『錬金ギルド』のカードだった。

「この子、正式に『薬師』として認められたのよ」

「えへへ〜」

ソファアラさんがそう言っていると、リリアが照れたように笑う。

「やったじゃないか、リリア」

「歴代最年少の薬師だそうだよ。流石は私の娘だ」

ジェラルドさんがそう自慢する。

「あなたは別に何もしてないでしょ。ところで、ずっと気になってたんだけど、その子たちは迷子か何か？」

そう言ってソファアラさんは、外套に隠れるように俺の腰にしがみついているヘリオスに視線を向ける。

ヘリオスは、リリアが現れてからずっとこの状態だ。

「いえ、迷子じゃありません。この子たちは、俺が一時的に預かっている子たちです」

俺がそう言つと、ソファアさんが何かを言いかけるが

「お母さん、そろそろ試合が始まるよ?」

リリアがソファアさんの上着の袖を軽く引つ張る。

「そうね。　ディーンさん、宿は何処にとっているの?」

「『セントラル・ティア』です」

「そう。なら、今晚少し話せないかしら?」

「わかりました。それなら、俺がソファアさん達の泊まっている宿に行きましようか?」

「私がそちらに行くわ。1階の広間で待っていてくれないかしら?」

1階の広間というのは、エントランスホールのことか?

「わかりました」

「それじゃあ、またその時にね」

そう言つとジェラルドさん達は闘技場の方に歩いていった。

リリアに手を振り返しながら

「話つて何かしら?」

「多分、こいつらのことだろうな」

「そうよね……」

ロゼがヘカテーの頭を撫でる。

「取り敢えずは高級宿ホテルに戻ろう」

そう言つて俺とロゼは2人の手を引いて、人混みの中を高級宿ホテルに

向かって歩き出した。

その後、昼食を食べたり子ども達と遊んだりしている内に夕方になり、オルグたちが帰ってきた。

「早かったな。もう少しかかるかと思ってたが」

「ああ、今日の試合はどれも順調に進んだからな」

「大した怪我人も出なくて良かったです」

レイシアが胸を撫で下ろす。

「ご飯が出来たわよ。食べましょう?」

今日は一人で夕食を作っていたロゼが、料理が乗った皿を手に持ちリビングへとやって来る。

「ごめんね。一人で作らせて」

「構わないわよ。レイシア、疲れてるでしょ?」

「ありがとう」

そして、今日の試合の話オルグたちから聞きながら夕食を食べた。

夕食後、子ども達を風呂に入れ

「じゃあ、俺はソファラさんと話があるから行ってくるよ」

ヘリオスとヘカテーをロゼたちに任せ、俺はエントランスホールへと向かった。

そこに置かれていたソファアに腰掛けてしばらく待っていると、入り口からソファラさんが入ってくるのが見えた。

「ソファアラさん！」

俺が声をかけると、俺に気づいたソファアラさんがこちらに歩いてくる。

「ごめんね。待ったかしら？」

「それほど待ってませんよ。それで話というのは？」

ソファアラさんが俺の向かいのソファアールへと座る。

「貴方ならわかってると思うけど、あの子たちのことよ」

「やっぱりそうか……」

「一時的に預かってるって言ってたけど、どういふことなの？」

「それは」

俺は2人を預かることになった経緯を簡単に説明した。

「そう……そんなことが……」

ソファアラさんは流石にショックを受けているようだ。

「すみません。不快な話をしてしまって」

「それは構わないわよ。それで、貴方はこれからのことをどう考えてるの？」

「それは……」

「貴方は元の世界に還るんでしょう？ それはもう諦めたの？」

「そんなことはッ！」

「なら尚更、あの子たちは早めに孤児院に預けた方が良くわ。確か、

この街には『ギルド連盟』が出資している孤児院があつたはずよ？」

『ギルド連盟』とは冒険者ギルドや錬金ギルド、鍛冶ギルドなど様々なギルドが集まつた組織のことだ。

ほぼ全てのギルドは『ギルド連盟』に入っていて、『グランドテイア』のギルド総本部はギルド連盟の総本部でもある。

もちろんそのトップはグランドマスターである、ゼノンだ。

あの事件で助け出された他の子ども達の中で、身元がわからなかった子ども達はその孤児院に預けられていると、ゼノンから聞いている。

「それはグランドマスターから聞いています。ですが、あの2人は……」

俺は2人の種族のことを言ってしまうって良いのか、迷う。

「ソファアラさん、俺がこれから言うことは秘密にしておいてくれますか？」

「……ええ、わかつたわ。今日聞いた話は私の胸に秘めておきます」  
「ありがとうございます。あの2人は吸血鬼ヴァンパイアなんです」

周囲の人には聞こえないよう、小声でそう言った。

「ッ！　そうだったの……」

「はい、なので孤児院には預けられません。ソファアラさんも、吸血ヴァンパイア鬼イブのことは知っているのでしょぅ？」

「一般的には魔物だと言われてるわね。とてもそうは見えなかつたけど……」

「それは誤解なんです。確かに魔物の中には似たモノもいますが、不死族ヴァンパイアの吸血鬼は魔物ではありません」

「……貴方が言うなら、そうなんでしょうね」  
「グランドマスターを始めとした何人かの人達はわかってくれています、他の大多数の人達は誤解したままです。この状況では流石に……」  
「そうね。だったら、2人の親を探してみたら？　吸血鬼ヴァンパイアは、常闇の国『サーフェリオ』から来ると言われてるけど？」  
「その通りです。俺もあの国には行くので、その時に2人の親を探すつもりですが……」

ロゼには見つかる可能性は低いと言われたが、俺は諦めてはいない。

「でも、すぐにはないでしょう？」

「少なくとも、この大会が終わるまでは……」

「それに親が見つからなかったら？　貴方が育てるの？」

「……」

「いずれにせよ、貴方が元の世界に還るつもりがあるのなら、あの子たちは誰か他の人に預けるべきよ。これは同じ年頃の子どもを持つ母親として言わせてもらうけど、貴方はあの子たちの人生に責任が持てる？」

「それは……」

「貴方のやっていることが悪いこととは言わないわ。身寄りのない子どもを引き取るというのは立派なことよ？　でも子どもを育てるというのは、そういうことなの。途中で放り出すことは許されないわ」

「はい……それはその通りだと思います……」

2人のことを思っただけで行動したつもりだったが、甘い考えをしていたと思い知らされた。



「偉そうなことを言って、ごめんなさいね。でも、これだけは譲れなかったの」

「いえ、色々と考えさせられました」

「子どもを育てるのはそのくらい大変なのよ？ あの子たちともう一度良く話し合って、これからのことを決めなさい。何なら私が引き取っても良いわ」

「良いんですか？ 2人は吸血鬼ヴァンパイアですよ？」

「貴方が言ったんでしょう、魔物とは違うって。だったら、あの子たちはただの可愛い子どもよ。種族なんて関係ないわ」

ソファアラさんはそう言い切った。

「わかりました。もしかすれば、お願いするかもしれません」

「貴方はもつと周りの人を頼りなさい。何もかもを、貴方1人で抱え込まなくても良いのよ？ グランドマスターだって何だって、使えるものは何でも使いなさい。貴方にはその権利があります。貴方はこの世界を救おうとしているのだから」

「色んな人にそう言われます……」

「だったら、いつでも私たちを頼りなさい。わかったわね？」

俺はソファアラさんの言葉に頷く。

俺は良く覚えていないが、母親とはこんな感じなのだろうか。

つくづくこの人には逆らえないと思ってしまう。

「じゃあ、私はこれで帰るわね。ちゃんとあの子たちと話し合いなさいよ？」

「あ、送っていきますよ。もう夜も遅いですし」

大会開催中は人が多く集まるので、喧嘩などの面倒事も多くなるらしい。

依頼された冒険者たちが見回りをしているとオルグが言っていたが、ソファアラさん1人では帰らせられない。

「そう？　じゃあ、お願いするわね」

「はい、行きましょう」

そうして俺は、ソファアラさんを泊まっている宿まで送っていった。その道すがら、迷宮にいる時には子ども達をどうするのかなどを色々訊かれ、俺がそれに答えると『甘い』と怒られた。

最後まで説教されながら宿まで送り、俺は高級宿ホテルに帰った。

「どうだった？」

部屋に帰るとロゼが待っていた。

「ヘリオスとヘカテーは？」

「もう寝てるわ。今はレイシアたちが見てる」

「そうか。ソファアラさんの話はやっぱり2人のことだったよ」

『やはりそうでしたか』

ラグたちも部屋に置いていったので、俺とソファアラさんの話は聞いていない。

「どんなことを話したの？」

「色々話したが……詳しいことは明日話すよ。ヘリオスたちとも話し合いたいからな」

明日は俺の試合もあるしな。

「……わかったわ。じゃあ、私も戻るわね」

「ああ、おやすみ」  
「おやすみなさい」

そう言うのとロゼは部屋から出ていった。  
俺も外套などを脱いでベッドに潜り込む。

『色々と言われたようですね』

「やっぱりわかるか？」

『そのくらい私たちにもわかるよ。ロゼお姉ちゃんもわかってると思うよ〜』

「そうか……」

また心配をかけてしまったかな　そんなことを思いながら眠りに就いた。

出場者たちが武器を手入れする音や、金属鎧が擦れる音などが控え室に響いている。

控え室には俺を含め9人の出場者がいて、お互いに視線で牽制し合っている。

様々な種族がいるが、人族　厳密には違うが　は俺1人だ。

やはりこの世界でも人族がこういう場にいるのは珍しいのか、周囲の出場者が場違いなものを見るような目で俺を見ている。

少々鬱陶しいが、試合開始までもう少しなので我慢するか　そう思っていると、控え室の扉が開けられた。

「それでは第17試合に出場する皆様、私について来て下さい」

扉を開けて現れた、大会を運営しているギルド職員の男性の後に

続いて通路を歩いていく。

「この先を進むと舞台へと出ます。それでは皆様、ご健闘を」

職員に促され、跳ね橋を渡り舞台へとあがる。

俺たち出場者が全員舞台へあがると、跳ね橋がつり上げられる。

『さあ、第17試合の出場者が舞台へと出揃いました。出場者の皆様は準備をお願いします』

フェミナがそう言うと、出場者たちが舞台上の思い思いの場所へと散らばっていき、各々の武器を構える。

俺も舞台の端へと歩いていく。

『それでは第17試合　　始め！！』

フェミナの試合開始の言葉とともに乱戦が始まる。

「まずはテメエからだ！！」

舞台の中央付近にいた巨人族の男が、右手に持った剣を振り上げながら俺に向かって走ってくる。

袈裟斬りに振り下ろされた巨大な鉄製の剣を、左前に踏み出しながら掻い潜るように躲す。

その背後へと回り込んだ俺は振り向きつつ、押し出すような蹴りを放つ。

自らの勢いに加え、俺の蹴りに押された巨人族の男がそのまま場外の堀へと落下する。

巨人族が堀に張られた水に落下する音が響き、舞台の上まで飛沫が飛んでくる。

『おーっと！ 人族のディーン選手が巨人族のロドルバン選手を場外に蹴り落としたー！ これは驚きですー！！』

フェミナもギルド職員なら、俺のことは聞いているはずだが……まあ盛り上げるためにやってるんだろが、勘弁して欲しい。そう思いながら、その場でしゃがむ。

その頭上を薙ぎ払われた両手斧グレートアックスが通り過ぎる。俺はしゃがんだまま体を回転させ、背後から両手斧グレートアックスを薙ぎ払ったきた奴の足を払う。

両足を払われたソイツ 獅子族の若者が見事なまでに、綺麗に転倒する。

「おりゃー！！」

すかさずその両足を掴み、ジャイアントスウィングの要領で場外に放り投げる。

獅子族の若者が悲鳴をあげながら壁に激突、巨人族と同じ運命を辿る。

充分手加減したので大怪我はしていないだろう。

睨み合っていた残り4人が、揃って俺の方を見る。

その後、4人は互いに視線を交わすと全員が俺に襲いかかってくる。

俺は刀を抜き、妖精族の『サラマンダー』の男性が突き出した槍を受け流し、返す刀で胴を払う。

一撃でHPが半分を切ったのか、刀が奇妙な手応えを伝えてくる。気絶したのか、その場で崩れ落ちるサラマンダーを避けながら飛び出してきた、亜人族の『豹族』の女性が逆手に握った短剣ナイフで俺の首を狙ってくる。

その短剣ナイフを刀で防ぎ、左の拳を腹部に叩き込む。

苦しそつによるめく豹族の女性の首元を刀の峰で打つ。

「こちらも気絶したので、エルフの男性が放った『ウインドブレード』を躲しながら鬼人族の男に向かって跳ぶ。

一足で間合いを詰め、刀を逆袈裟に一閃。

すぐさま魔術を詠唱していたエルフの男性へと跳び

「ま、参りました……」

その言葉を聞き、俺は首に触れる寸前で止めていた刀を鞘に納める。

それとほぼ同時に、鬼人族の男が崩れ落ちる音が聞こえる。

『き、決まったあー！！ 第17試合の勝者は、デーン選手です

！！！』

その瞬間、静まり返っていた闘技場に凄まじい歓声が響く。

3ヶ所の跳ね橋が下ろされ、それぞれからギルド職員の人達が入ってくる。

そして気絶したり、堀に落下した出場者たちを運んでいく。

俺も歓声を聞きながら橋を渡り、舞台を後にする。

そして職員から次の予選のことを教えられた後、ロゼたちが待つ観客席に戻った。

「凄かったです、デーンさん！」

ロゼたちと一緒に観戦していたリアが、開口一番そう言う。

「実際に見ると凄まじいものだね……」

ジェラルドさんもそう言うてくる。

「ハハ……」

俺は曖昧な笑みを浮かべる。

あれでも、できる限り手加減したんだけどな……

「凄かったよ、パパ」

ヘリオスがそう言ってしがみついてくる。

ロゼと手を繋いでいるヘカテーも何度も頷いている。

「ありがとう、2人とも」

俺は2人の頭を撫でる。

「ディーン、コレを返しておくわね」

ロゼがそう言って、ナイフの形状になっているラグとアイギスを手渡してくる。

『ヘルメスグリーブ』はインベントリに入れてあるが、この2つはロゼに預けていたのだ。

最初はインベントリに入れようとしたが、ラグとアイギスが猛反対してきたのでこうなった。

「ありがとう、ロゼ」

俺はナイフ状のラグは鞘を腰のベルトに引っ掛け、アイギスは左腕に装備する。

「ディーンさん達はこれからどうするの？ まだ試合を見ていくの

「？」

ソファラさんがそう訊いてくる。

今日はまだ2試合残っているが……

「そうですね……今日は帰ります。試合で疲れましたし」

「……あまり疲れてるようには見えないけど。それじゃあ、また明日ね」

「はい、また明日」

ジェラルドさん達はまだ試合を見ていくようだ。

俺たちは3人に挨拶し、高級宿<sup>ホテル</sup>に帰ることにする。

すでに次の試合が始まっているが、先程の試合の所為か、チラチラと俺を見てくる人達がいる。

「参ったな……」

武闘大会に出ると決めた時に、目立つのは仕方ないと諦めたが……

「あんなに派手な試合をするからよ」

ロゼが呆れたように言う。

「あれでもかなり手加減したんだが……」

「まあそうなんでしょうね。スキルを全く使ってなかったし」

ロゼの言うように、俺はこの大会では全スキルを使用しないと決めている。

「もっと制限するしかないか……」



「何を考えてるの？」  
「まあ色々」と

そんなことを話しながら高級宿<sup>ホテル</sup>へと戻った。  
そしてオルグたちが帰ってきた後、夕食を食べ

「皆、少し話がある」

俺は食後のお茶を飲みながら一息吐いていた皆に声をかけた。

「どうしたんだ、改まって？」

「この2人のことをキチンと決めておきたい」

俺は隣に座るヘリオスを見ながら、そう言った。

ヘカターは不安なのか、隣のロゼのシャツの端を握っている。

「どういうことですか？ まさか、2人を何処かに預けるんですか？」

「そうなる可能性も0じゃない。 が、俺は2人の意思を最大限  
優先してやりたいと思ってる」

「……何でまた、いきなりそんなことを言い出したんだ？」

オルグが腕を組みながら訊いてくる。

「実は昨日」

俺は昨日ソファラさんと話したことを話していった。

「……確かに私たちは、誰も子育てなんてしたことありません  
しね……」

「そうね。それに、迷宮にこの子たちを連れていく訳にはいかない

わ。サブダンジョンならまだしも、精霊王様たちの迷宮なんて、私  
たちでも自分を守るので精一杯だし……」

女性2人が沈痛な表情でそう言う。

「だが、この2人は吸血鬼ヴァンパイアだぞ？ 何処にでも預けられる訳じゃね  
えだろ」

「一応、ソファラさんが預かってくれるとは言ってくれてるが……  
それにも不安がない訳じゃないしな」

あの人は大丈夫だと思うが、あの村の人全員を信用することは  
流石にできない。

ヘリオスとヘカテーは、完全に自分たちが誰かに預けられると思  
っているのか、顔を蒼白にして俺やロゼにしがみついている。

「心配するな、2人も。おまえたちの意思を無視してまで、誰か  
に預けるつもりはないから」

「そうよ。心配しないで」

俺とロゼはそう言って、2人に微笑む。

安心したのか、2人も少し微笑む。

「それでヘリオスとヘカテーに訊きたいんだが、ここに連れてこら  
れた時のことを話してくれるか？ でも、無理には話さなくて良い  
からな？」

以前同じことを訊いた時には、2人とも酷く取り乱した。

「う、うん。大丈夫……」

「私も大丈夫だよ……」

2人はそう言うと、ポツリポツリと奴隷商人に捕まるまでの話をしてくれた。

2人の話を纏めると、2人が住んでいた吸血鬼ヴァンパイアたちの集落が奇妙な怪物に襲われ、大人たちはその怪物と闘い、子ども達は逃がされたが、途中で別の奴に襲われてヘリオスとヘカターは気絶してしまい、気づいたら捕まっていたそうだ。

「その奇妙な怪物ってのは何だ？」

「多分、魔物のことだろ」

『VLO』では、『サーフェリオ』にはフィールドにも魔物がいた。

『マスターの予想は当たってるでしょう。今やあの国は魔物が跋扈する場所です』

「そんなに酷いの？」

『ここ最近は特に酷いよ。西の方は瘴気すら漂ってるから……』  
「そこまで酷いのか……」

『サーフェリオ』の状況は『VLO』の比ではないようだ。

「両親のことは何かわからないの？」

レイシアが優しくそう言うが、2人は首を横に振る。

「そう……」

「奴隷商人どもは、どうやってそんなところに行ったんだ？」

この世界では、『サーフェリオ』への通行はグランドマスターの

許可が必要な上に、高位の冒険者でも滅多には許可が下りないらしい。

「それも気にはなるが、今は置いておこう」

その辺りの調査は、ゼノンに任せておけば大丈夫だろう。

「俺はこの大会が終わったなら、『サーフェリオ』に行こうと思ってる」

「……それはこの子たちの両親を探すため？」

「確かにそれもある。今の話を聞く限り、可能性は低いかもしれないが……」

「だったら、何でだ？」

「他の吸血鬼ヴァンパイアを見つけれれば、この子たちを預かってくれるかもしれない」

それなら、2人が迫害される可能性はまずないだろう。

同じ預けるなら、こちらの方が安心はできる。

「それはわかるけど、迷宮の攻略はどうするの？ そんなに簡単に見つかるとは思わないけど……」

「あの国のことは、ほとんどわかってねえから……」

2人は搜索にかかる時間を気にしているようだ。

「ラグ、封印の方はどうなってる？」

『今は完全に修復され、さらに精霊王様たちの力で強化されています』

『この子たちの両親を探す余裕くらいはあるよ』

「だそうだ。確かに精霊王たちとの契約も急ぎたいが、今はこ

「こちらを優先したい」

『来訪者』としての役割からすれば、間違っているのだろうか……

「聞いたように、『サーフェリオ』は魔物が跋扈する危険な場所だ。俺1人では2人を守りながら搜索をするのは厳しい」

2人をホームに残して搜索するという方法はあるが、ラグが言うにはあの空間は俺が死んだ瞬間に消滅するらしい。

「万が一を考えると、そんな危険は冒せない。」

「だから、俺に協力してくれないか？」

オルグたちが俺に協力してくれているのも、俺がこの世界を救おうとしているからだ。

今回のことは、それには何の関係もないことだ。

「勝手なことを言っているのはわかってる。それでも頼む」

俺は頭を下げる。

「……………貴方は本当に何もわかってないわね」

「私たちがだって、この子たちのことを大事に思ってるのよ？」

「だが、本当に危険な場所だぞ？」

『VLO』の時ですら『神龍の迷宮』を除けば、『サーフェリオ』は最も難易度が高かった国だ。

この世界では、さらに危険な場所となっているだろう。

「あのなあ……………そんなこと、仲間になった時にわかってるって言

「ただろ」

「でも今回は、この世界を救うこととは何の関係もないんだぞ？」

「この2人を救うのも、この世界を救うのも大差ないでしょ」

ロゼの言葉にレイシアも頷く。

「それは いや、そうだな。ありがとう、3人とも」

「礼なんていらねえよ。元々おまえが『サーフェリオ』に行くと言った時から、ついて行くつもりだったからな」

「そうですよ。私たちは仲間なんですよ？」

「わかった。皆、宜しく頼む」

3人がその言葉に頷く。

「ヘリオス、ヘカテー、そういうことになったが構わないか？」

俺はそう言うが、2人は何も答えない。

「おまえたちが俺たちについて来たいと言うのなら、それも良いとは思う。でも、多分『サーフェリオ』での旅でわかるとは思うが、本当に俺たちの旅は危険なんだ。難しいことを言っているかもしれないが、もう一度良く考えてみてくれないか？」

俺が2人と目を合わせながらそう言うと、2人は俺の言葉の意味を考えていたのか、しばらく黙り込んだ後頷いた。

10歳くらいの子どもに決めさせるようなことではないと思うが、俺は2人に良く考えて決めて欲しいと思っている。

もしも2人が俺たちについて来たいと言った時は、最大限その願いを叶えるつもりだ。

「何か聞きたいことがあれば、いつでも訊いて良いからね」

ロゼがそう言いながらヘカターの頭を撫でる。

「うん。わかった」

ヘカターがそう言って頷き、ヘリオスも頷く。

「じゃあ、風呂に入るか」

色々話している間に、大分時間が経っていた。

子ども達はもう寝た方が良い時間だ。

「そうね」

そう言って、ロゼとレイシアが子ども達を風呂に連れていった。

俺とオルグは風呂が空くまでの時間を、大会の話などをして過ぎた。

そしてオルグ、俺の順番で風呂に入り、寝ることになった。

子ども達は2人ともロゼの所で寝ている。

俺も寝ようと装備などを外そうとすると

『マスター、リン様が会いたいそうです』

「会いたいです……何かあったのか？」

『そうではないようです。何か渡したいものがあるそうです』

「ということは、神域を展開しないといけないのか？」

渡したいものがあるってことは、精神世界で会っても意味がないだろう。

『そうですね』  
「わかった」

俺はラグを持って家の外へと出る。

その後鋼糸を展開して、神域の紋章を形成する。

今回は俺を包み込むような半球形だ。

そして魔力を込めると、神域が創りだされた。

「こんばんわ、デーン殿。あれからお体に変わりはありませんか？」

光とともにリーンが現れ、声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だ。それで、俺に渡したいものって何だ？」

「コレです」

リーンがそう言って両手を胸の前に持ってくると、仄かに蒼い光を放つ球体が現れる。

「何だ、ソレは？」

「リヴァイアサンの魂です」

「何だってそんなものを……」

「私が輪廻を司っているのはご存知ですよね？ 死した彼の魂に新たな生を与えようとしたのですが、拒否されてしまったのです」

そんなこともあるのか……？

俺には良くわからないが。

「それがどういふ風になると、俺に渡すという話になるんだ？」

「それが彼の望みだからです。どうやら彼は貴方が『来訪者』だと



知らなかったようですね。まあそれも当然のことですが  
「何で知らなかったんだ？」

確かにリヴァイアサンは、俺のことを一度も『来訪者』とは呼ば  
なかつたが。

『リヴァイアサンを始めとする幻獣たちは、世界の命運を流れに任  
せると言つて、自らがこの世界に関わるのをやめた存在なのです』  
『神龍様の頼みすら拒否したくらいだからね』  
「そうだったのか」

なんて言うか、凄惨奴らだな……  
まあ、何かしらの理由はあるんだろうが。

「それでリヴァイアサンの願いつて何だ？」  
「貴方の力になりたいようです。救われたから　と言つていまし  
たよ」

俺はあいつを殺すことしかできなかつたのに……

「それでどうなさいますか？ 私としては、彼の願いを叶えてあげ  
て欲しいのですが……」

「……わかつた。リヴァイアサンに力を貸してもらおう」

これも誰かを頼るってことなのか？

「それでは、どちらかの魔導銃を出して下さい」

俺は左の魔導銃をインベントリから出す。

するとリヴァイアサンの魂である蒼い球体が、魔導銃の『精霊結

晶』と重なり合って融合していく。

それが終わると魔導銃の銃身が青みがかった白銀になり、『精霊結晶』が蒼海のような蒼い宝玉へと変わっていた。

「これで、その魔導銃にはリヴァイアサンの魂が宿りました。その性能はクラス？の魔導兵装にも匹敵するでしょう。必ず貴方の力になつてくれるはずです」

「そうか。それは助かる」

これなら雷の魔力を込めても大丈夫だろう。

これから宜しく頼む　リヴァイアサンに語りかけるようにそう思うと、それに反応するかのように宝玉が蒼く輝く。

「まるであいつの意思が宿ってるみたいだな」

「ええ、彼の意思も確かに宿っていますよ。後、これもお渡ししておきます」

そう言つとリーンがサツと右手を横に振る。

すると巨大な蒼い鱗が数枚と同じく蒼い何かの革が出現する。

「これは？」

「リヴァイアサンの鱗と竜革です。アリュージェ様が彼の灰から再生されました」

「良いのか？　リヴァイアサンの願いに反するような気がするが…」

あいつは、灰は海に流してくれと言っていたが。

「彼の願いでもありません。貴方の力になりたい　ということですよ」

「じゃあ、有り難く貰っておくよ」

俺はそれらをインベントリに入れる。

「  
それでは、私はこれで失礼しますね」  
「ちよつと待ってくれ」

俺は帰ろうとしたリーンを呼び止め、ヴァンパイア吸血鬼が迫害されているのをどうにかできないかと伝えた。

「ヴァンパイアそういえば、吸血鬼の双子の面倒をみているのではしたね」

「  
やっぱり知ってたのか。それで、どうにかできるのか？」

「  
……難しいと思います」

「  
神龍の力でもか？」

「  
神龍様はまた眠りに就いてしまわれましたし、人々の認識は簡単には変わりませんから……」

「  
……そうか……」

神なら何とかできるかと思っただが……

「  
私どもの方でも、色々と働きかけはしてみましよう。ですが、あまり期待はしないで下さい」

「  
すまない。助かる」

「  
それでは失礼しますね」

そう言って、リーンは光に包まれ消えた。

「  
俺たちも戻るか」

『  
そうですね。もう真夜中ですし』

そう言っつて俺も自室へ戻り、眠りに就いた……

翌日、ロゼと子ども達を連れてジェラルドさん達と試合を観戦した。

リリアとヘリオスたちは年齢も近い所為か、段々と仲良くなっていくようだ。

リリアが2人のことを、ヴァンパイア吸血鬼と気づいているのかはわからないが……

そして昼になり試合も休憩時間になったので、皆で何処かで昼食を食べようかと話しているところ

「久しぶりじゃの、デイン殿」

通路を歩いてきたアドルさんが声をかけてきた。

「お久しぶりです、アドルさん。　　というか、一人でこんな所にいて良いんですか？」

アドルさんは護衛を1人も連れていない。

「そこまで衰えとらんわ。こんな所で立ち話もなんじゃ、食事でも食べながら話さんか？」

「そうですね」

周囲も騒ぎ始めているし、流石にギルドマスターといつまでもこんな所で話すのはマズいだろう。

「じゃあ、私たちは邪魔をすると悪いから……」

ソファアラさんがそう言っつて、何処かに行こうとすると

「遠慮することはないじゃろ？ ソファアラ殿も一緒にどうぞじゃ？  
もちろん家族の方もな」

「宜しいのですか？」

「何、構わんよ。聞かれて困るような話をする訳ではないしの」

そしてアドルさんに案内されて、闘技場の一室へと通される。

全員が席に着くと、ギルド職員の人達が昼食を持ってきてくれた。

「それで話とは何ですか？」

俺は食事を食べながら尋ねた。

「特に何かがある訳ではないんじやが、お主は目立ちたくないと言っ  
ておつたらう？ こんな大会に出ても良かったんかの？」

「……まあ、グランドマスターに頼まれましたし。『来訪者』とし  
てではなく、冒険者として目立つくらいなら まあ構いません」  
「すまんの……迷惑をかけてしもつて……」

アドルさんも、俺が出場することになった経緯を知っているよう  
だ。

「まあ仕方ありませんよ。こうなったら、俺も楽しみます」

「まあ程々にの……ゼノン殿が頭を抱えておつたぞ？」

間違いなく予選のことだろう。

「あゝ……かなり手加減はしたんですが……」

「お主の力量を考えると、あの結果も仕方ないの。それにあの組には、それほど高位の者もおらんかったようじゃし」

やはりもう少し何か、力を制限するものを用意した方が良いのか？  
そんなことを考えていると

「話は変わるが、その子たちがお主が預かっている子たちかの？」

アドルさんがヘリオスとヘカテーを見ながらそう言った。

2人はその視線に気づかず、食事を美味しそうに食べている。

「そうです。ですが」

「僕も吸血鬼ヴァンパイアのことは知っておるから、大丈夫じゃよ。これでも若い頃は色々旅をしたからの」

アドルさんも、吸血鬼ヴァンパイアが魔物とは違うということを知っているよ  
うだ。

「ゼノン殿はお主に預けたが、やはり何かと負担なのではないか？」

アドルさんがそう言うと、ソファアラさんも俺の方を見てくる。

俺は昨日、ロゼたちと話し合ったことやリーンと話したことを話  
していった。

リーンとの会話はロゼたちも知らないのです、少し驚いている。

「ふむ。確かにリーン様が言われたように、人の意識を変えるのは簡単ではないの。だが、僕ら人の問題じゃ。ギルドでも何かできないか、話し合ってみるとしよう」

「良かった。ちゃんと考えてくれたのね、ディーンさん」

「あれだけ言われましたからね」

「すまんね、ディーン君。妻がでしゃばったことをしてしまっ  
て」「いえ、そんなことはありませんよ」

その後他愛もない話をしながら昼食を食べ、アドルさんと別れた。  
そしてまた皆で午後の試合を観戦した後、それぞれの宿へと戻っ  
た。

「ディーン、何作ってるの？」

オルグたちが帰ってきた後夕食を食べ、俺たちはホームでくつろ  
いでいた。

俺は工房であるものを作っていた。

「『デビルズ・ブレスレット』っていうアクセサリだよ」

「何、その不吉な名前……」

「まあそうだな。これは装備者の能力を制限する代わりに、入手で  
きる経験値や熟練度が増えるアクセサリなんだ」

「何でそんな物を　ああ、昼間の話の所為ね」

「まあそうだ」

「でもそれで負けたら、かなり恥ずかしいわよ？」

まあ俺のことを知っている人は、え？　　って思うよな。

「まあ別に優勝するのが目的じゃないし、これを着けてもそう簡単  
には負けないさ」

「ふん……」

ロゼが少しカチンときたような顔をしている。

「別に、ロゼに勝てるとは言っていないぞ？」

「どうだか……ねえ、ついでにスローイングダガーを作ってくれない？」

「ロゼが使うのか？」

「ええ」

「構わないが、使えたのか？」

今までロゼが使っているところは見たことないが……

「まあ、それは良いじゃない」

「じゃあ、希望の形や重さとかを書いてくれ」

そう言つて、俺は作業台に置いてあつた紙とペンを渡す。

この世界のペンは全て羽根ペンで、使われている羽が貴重なものほどその価値も高くなる。

一度シームルグの羽でペンを作つて売ったら儲かるかなと思つたが、怒られそうなのでやめた。

「はい、書けたわよ」

そんなことを思い出していたら、ロゼが書き終わったようだ。

「意外と絵が上手いな……」

紙には、ロゼの希望するナイフの形状や長さなどが書かれていた。例の如く書かれている数字や記号は訳がわからないが、何故か意味だけはわかる。

「じゃあ、これで作っておくよ」



「お願いね」

そう言うとロゼは出ていった。  
俺はロゼのスローイングダガーを作った後、休むことにした。

『さあ、第36試合の出場者が出揃いました。出場者の皆様は準備をお願いします』

いよいよ、ロゼが出場する試合が始まる。

この組はロゼを含め10人の出場者がいるが、ロゼより強そうな者はいないようだ。

まあ当たり前か……

そんなことを考えていると

『それでは第36試合　　始め!!!』

試合が始まった。

開始直後にロゼが鞘から剣を引き抜き、すぐさま『ネビュラ』へと変えて周りにいた3人を薙ぎ払った。

その攻撃をまともに喰らった3人はあっけなく気絶する。

「おいおい、やりすぎじゃ……」

『マスターがそれを言いますか……』

ロゼが鞭のように『ネビュラ』で舞台を打つ。  
残りの6人の顔が一気に引き曇る。

「ロゼさん、強いんですね……」

リリアが驚いたように言う。

「まあ、デーン君と旅をしているくらいだからね」

そんなことを話している内に、ロゼがさらに2人の出場者を場外に叩き落としている。

ロゼが誰かを場外に叩き落とすたびに、観客から大きな歓声がある。

ヘリオスたちも、ロゼの闘いを目を輝かせながら観ている。

「これはロゼさんの圧勝ね」

ソファアラさんがそう言うと同時に、ロゼが最後の1人を場外へと蹴り落とした。

『第36試合の勝者はロゼ選手です！！ 思わず解説を忘れるほど、圧倒的な試合でした！！』

確かに試合中、フェミナは全く喋っていなかった。

ロゼが跳ね橋を渡り、舞台を後にする。

その間もずっと拍手が鳴り響いていた。

俺たちもロゼを迎えるために通路へと行く。

「圧勝だったな、ロゼ」

通路を歩いてきたロゼに声をかける。

ヘリオスとヘカテーがロゼに抱きつき、凄い、凄い とはしゃいでいる。

「こんなところで負けてられないからね」

2人を撫でながら、ロゼがそう言う。

「取り敢えず、場所を移しましょうか」

ソファラさんが周囲を気にするように言った。

あの試合の所為でロゼがかなり注目されている。

女性だからなのか、その注目度は俺の比ではない。

「そうですね」

そう言うって、俺たちは闘技場を後にした。

その後は特に観る試合もなかったので、ジェラルドさん達をホムに誘って子ども達と遊んだり、オルグたちが帰ってきてから皆で夕食を食べたりした。

久しぶりにスレイプニルに乗ってリリアがはしゃいだり、ソファラさんがお風呂に何回も入ったりとそれぞれに楽しんだ。

「明日からがいよいよ本番だな」

あれから10日が経ち、俺とロゼは予選と本戦も2回戦まで勝ち進んだ。

この時点で、予選から参加している出場者は5人にまで絞られている。

およそ800人の中から残った5人だ。

俺やロゼも含んではいるが、残りの3人もその力量はかなりのものだろう。

明日からの本戦3回戦はこの5人にSランクの5人を含めた計10人でのトーナメント戦だ。

「ああ、おまえらが相手でも手加減はしねえからな」  
「望むところです」

これまではロゼとも闘うことはなかったが、この先は仲間たちとも闘うこともあるだろう。

「必ず優勝するわ」

「それじゃあ明日の試合に備えて、もう寝るか」

明日、俺とレイシアは試合があるしな。

「そうね。じゃあ、おやすみ」

そう言って、ロゼが子ども達の手を引いて部屋へと戻っていく。オルグたちもそれぞれ言葉を交わして、高級宿ホテルの自分の部屋に帰っていく。

全員が部屋を出た後、俺もベッドに潜り込み眠りに就いた……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8611u/>

---

竜殺しの英雄

2011年10月29日01時10分発行